

幽々の空、灰暮れに

ルイベ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

百年前。

霧の島・トラモント出身のコーリスは騎士を目指しリュミエールへと旅立った。

AIで作った主人公イメージ画像です。あくまでイメージなので閲覧にはご注意ください！

※一部のフェイトストーリーのネタバレを含みます。また、原作前からのスタートになりますので独自設定・オリジナルキャラクターが多数存在します。

目次

序章 トラモントの立志

1.	幼憧	1
2.	空を跨ぐ	11
3.	リュミエール聖王国、来日	19
4.	紫苑の夢	27
5.	熱狂火達磨シャウト	37
6.	宿り霧	46
7.	特別なんて	56
8.	騒なる旅路、静なる帰路：①	67
8.	騒なる旅路、静なる帰路：②	79
9.	狂宴	91
10.	霞のように朧気で、暖かく	104
11.	炎のように苛烈で、真つ直ぐに	119
12.	Competitive spirit	131
13.	”Rejoicing or ”Despair”	141
1章 リュミエールの路次		
14.	Dahlia's emotions	156
15.	気合如雨露	166
16.	ペーパー騎士	176
17.	分岐点	185
18.	軌道修正	196
19.	座	206
20.	波のように快闊で、繽紛たる	219

2 1. 廃人形とクリアハイド

2 2. 備々の歎き：①

2 2. 備々の歎き：②

2章 極光が潰えた日

2 3. Re：覇空戦争

2 4. だにく

2 5. Last stand

2 6. 魂の咆哮

2 7. 全てはここから

3章 邂逅のファータ・グランデ

2 7. ゴーイだぞい！

2 8. 一人去るとき

2 9. 友情努力勝利ビーム!!!

3 0. ガロンゾの調べ

3 1. 0

3 2. レイの示唆

3 3. 霧と光

3 4. Band Va

3 5. バイバイ、リュミエール

4章 犬神宮の冥福

3 6. ようこそ犬神宮へ

3 7. 何かがおかしい家

3 8. 死臭香る森

3 9. 即日リベンジ

4 0. ×ジユラ

233

245

255

268

285

300

315

337

357

370

387

402

414

428

441

455

468

479

491

508

523

537

4 1. 着々と | 549

4 2. 灰の楔、或いは扉：① | 562

4 2. 灰の楔、或いは扉：② | 582

4 3. 春風駘蕩終わりを告げる | 601

4 4. 愛されて生まれ、愛して死ぬ | 613

5章 祈望の騎空団

4 5. The beginning of the journey

ey | 632

4 6. ポート・ブリーズにて、歓喜 | 644

4 7. はじめてのこせんじょう | 655

4 8. ヘカテー死す | 669

4 9. グレイスタッフ・ランドスケープ | 686

5 0. カワイイあの子は遺跡（ハコ）の中に | 701

5 1. トラブルメイカー | 719

5 2. 才の品格 | 731

5 3. 副次的脳破壊 | 744

5 4. この世界で、広く矮小な空 | 761

6章 守護と破壊のモノマキア

5 5. αμυρτελικ? π?ληη (防衛街) | 774

5 6. γυμν?σλιορ (ギムナシオン) | 785

5 7. εξαπ?τησηη (欺瞞) | 797

5 8. λ?θo⊠ (過ち) | 810

5 9. Κηδεμορλικ?⊠ (守護神) | 823

6 0. どうして? | 840

6 1. 道化の守護者 | 854

6 2.	開祖も人の子	869
6 3.	エニユオの薄暮	884
6 4.	コーリスの黎明	905
6 5.	犠牲に祈りを、貴女に報いを	932
6 6.	砕けた心に貴方は	951
	キャラクター紹介：①	973
	キャラクター紹介：②	983
間章	そらごとアンドロメダ	
EX 1.	災禍の後	999
EX 2.	アテナの一步	1015
EX 3.	付喪犬神	1036
7 章	七曜のアウライ・グランデ	
6 7.	紫天の槍	1055
6 8.	調停の閃撃	1073
6 9.	オラつきゾーイと七曜集結	1092
7 0.	百年奴隷契約	1111
7 1.	緑の騎士 エヘカトル	1126

序章 トラモントの立志

1. 幼憧

数多の島々が浮いているこの世界。この世界には空の民と呼ばれる4種の種族が共存している。

全てにおいて不条理が無いヒューマン。

聴覚が優れ、獣のように素早く活きるエルーン。

手先に優れ、人一倍力を保有しているドラフ。

非力ながらも、恐ろしき潜在能力を秘めているハーヴェイン。

この四種の間に変な関係は無く、互いに長所を活かしながら暮らしていた。

この物語は、トラモントという小島で暮らしていたエルーンの長い長い生の旅路である。

草木が覆い茂る大自然、目に余るほどの緑。木々はゆらゆらと踊り、小鳥達は声を揃えて囀り飛ぶ。

：なんて事は無く、そこに居るのはひたすら汗を振り撒きながら自分の背丈程の木剣を振るう少年。

身体から滲む汗により密着した服が彼の少しばかり膨らんだ筋肉を目立たせている。そしてエルーンの特徴的な獣の耳と灰白色の髪。

見た目だけで言えば、運動している姿より座って本を読んでいる姿の方が似合うと言えよう。

「ふっ…てやあー！」

幼さがまだ残る声を張り上げながら、斬り上げの動作から横一閃：そして突き。

この動作をひたすら繰り返していたため、穏やかに木の上に居座っていた鳥達は飛び去り、声の大きさのせいでまともな小動物は寄ってこない。

そもそも、彼は森の中で何をしているかというところ：鍛錬である。それも一時間や二時間では終わらない5時間にも及ぶ長時間の物である。手の皮は木刀の握り過ぎで血が滲み、肩や足など筋肉痛どころの話では無い。

何故11歳の彼がそこまで血の滲むような努力をするのかというと、誰にでもある夢の実現の為である。

時は遡って五年前。

彼はただ街を歩いていただけだった。別に何かをしていた訳でもなく、ただの気分転換の散歩だったのかも知れない。だが、周りはそうでは無かった。

ある魔物が住み着き、街の一部を荒らし回ったのだ。

その魔物は人間の3倍はある大きさで、四足歩行の猛獣。とても力では勝てる見込みは無かった。

街の農作物は蹂躪され尽くし、その爪と顎で石すらも砕く破壊力。人間なら豆腐を箸のように碎かれるだろう。

住人は他の島に救助を求めた。しかし、ちっぽけな島にわざわざ構う大国なんて物は無い。

もう諦めて島からの脱出を計画していたのだが、一つだけ救助を受け入れてくれた国があり、その国に従属する騎士たちが現れた。

それからはもう圧巻の一言。

数十人の騎士達は魔法を駆使して相手の動きを封じ込め、相手の急所を確実に叩いていった。

魔物は彼らに手傷を追わせることなく倒れた。

少年はその強さに憧れを抱いた。

恐ろしき化物を寄せ付けぬ勇猛さに。

人々は当然お礼に貨幣や食物を献上しようとしたのだが、彼らの代表者らしき者は断ってこう言った。

『我らの正義に従って動いたのみ。我らは褒美の為に戦うのではなく、人と世の為に走るのです』

そういつて速やかに自分達の国に帰っていった。

少年はその心の強さに憧れた。

少年はこの事柄を受け、彼らのように心身共に強くなり、世の為に働こうと幼い心で決心した。

以上の事柄が彼を愚直なまでに鍛えさせる理由である。

心身共に強くなる為に身体を壊しそうになっているのは愚かと言えるかもしれないが。

この一つの出来事で、盲信的に彼らの騎士道を求め、人生の道を定めようとする時点で、彼もまだ子供の精神という事だろう。

疲労も回復しないまま、思考も働かずに剣を振る。

段々と速度が落ちていき、足腰も震えているほどにままならない彼に忍び寄る影が一つ。

「ここにいたのか。コーリス」

「…ん？ああ。いたのか」

少年の名前を呼んだのは青く少し癖つ毛の髪を持ち、白い服、首に懐中時計の様な見た目のネックレスをしているエルーンの少女だ。この少年、コーリスは声をかけられて三秒後によく気付いた。恐らく集中より疲労が勝り、耳に言葉が届いても、働かない思考が受け入れるのを拒否したのだろう。なんとも子供にしては人間味の無い話だ。

「もう剣を振るのは止めておいたほうがいいぞ。誰から見ても分かる程に目が虚ろだ。ふふっ、まるで幽霊だな」

少女は呆れの感情も含めながらくすりと微笑む。それもその筈、コーリスはこの鍛錬を二年間毎日欠かさないで行っているのだ。毎日こんな姿の幼馴染を見たら誰だって呆れるだろう。

一方コーリスは少女の冗談をまともに返せる程の元気は無いのに加え、持ち前の堅物気質故か上手く返せる自信もない。

「さすがに五時間は疲れる。悪いけど買物の手伝いは出来ない」

「…別に買物の荷物持ちを要求しに来たんじゃない。疲れて倒れられても困るから様子を見に來ただけだ」

「節度は守る……多分」

「守れる確率3%と言ったところかな？お前の馬鹿さ加減は私が一番知っている。皆と遊んだりはしないのか？」

会話からも分かる事だが、彼女はコーリスの幼馴染である。物心ついたときから側に居るので、家が近いとかその辺の理由だろうとコーリスは思っている。

彼女が買い物に行く時は彼女の妹に荷物持ちとして良く使われている。それこそ人助けだと、コーリスはいつも満足げに微笑んでいるのだが、周りからしたら女性に連れ回されて喜んでいる男にしか見えない。

そんな彼女はコーリスの頑固さを知っているので、やんわりと棘を刺すのだが、彼はそれを気にも暮れずに剣を振るので、段々と言葉が辛辣になっていった。

それでもコーリスは自分の鍛錬が認められ始めると勘違いしている。鈍いとかではなく、単純に人の真意を読み取れない性格なのだ。

そんな事より鍛錬だ
閑話休題。

「笑止」

「しよ、しよっ？」

とても11歳の吐くセリフではない。というか普通の生活で笑止なんて使わない。

彼女の言った通りお互いに11歳の身で、村の友達がいけない訳でもないのに、彼は真つ直ぐ家に帰ってはすぐ森へ籠もる。

同級生の中には偶然彼の鍛錬姿を見た者もあり、つい『変態だ…』と呟いてしまい、シメられた事もある。このような事例がある為、今の彼に近付くのは禁忌とされている。

話題を戻そう。彼女は身体が弱い妹の世話をしなければならぬので、町の人間との交流は薄く、遊びに現を抜かす暇は無い。年齢に

そぐわず大人びている。

さすがに笑止とは言わないが。

「なんだ…？そのえつと、しょうしとは？」

「前に読んだ冒険小説に出てくる騎士のセリフ。騎士を目指すなら佇まいもそうしなきゃいけないからな」

「……」

彼も年頃の男子なのだ。

直感的にかっこいいと感じた物を日常生活で使いたがる。全空で不治の病とされる厨^{若気の至り}二病に片足を突っ込んでしまった。

後に、彼は自分で発言を後悔して腹いせに家のドアを破壊する程に悶絶するのだが、それはまた今度。

「もう…島を出るからな。皆と過ごしたい気持ちも無くは無い」

そう、コーリスは自分達を救った騎士達の住む島に行き、騎士を直接目指そうとしているのだ。

戦士を育成する士官学校へ通い、自らが憧れる騎士団への所属を目指している。

無論、島の移動は子供に簡単に出来る物ではないが、空を移動する騎空艇を操縦する操舵士がいれば問題の無い事である。

そして幸運にもこの島には良い腕の操舵士がいる為、移動手段に困る事は無い。

「そうか…あと三ヶ月か…」

「だからこそ、士官学校への準備をしなければいけない。期間が迫っているからこそ、皆と遊ぶ暇なんて無いんだ」

「…フィラにも会ってくれないか？」

「フィラの具合が問題無いならな」

フィラ。彼女の妹であり、コーリスにとっても妹のような存在である。彼女とは違い、感性豊かで、毎日を楽しく生きていそうで、いつも微笑ましく見守られている存在。

ただ、体が弱く、毎日寝込んでる事は無けれど運動が出来る訳ではない。

コーリスは島の端に捨てられた捨て子だった為、別の人間の家に住んでおり、一人暮らしでは無いが、それなりに自立した生活が出来る。それを知った少女はどうしても用がある時、コーリスに妹の面倒を見てくれと頼んだのが始まりだった。

年下の面倒なんて見た事無いコーリスは突然の願いに戸惑い、緊張しながらフィラに会ったのだが、その不満はすぐに解消された。

フィラは驚く程に陽気で、人懐っこく、疎外的な雰囲気醸し出すコーリスにもコミュニケーションを怠らなかつた。コーリスもそれに安心したのか、良く舌が回るようになった。

話す内容は、将来の夢は何だとか、どの島に行ってみたいかだとか、姉は外ではどんなふうに振る舞っているのかなど、他愛無い普通の話だ。だが、それだけでも外へ満足に出れないフィラには十分に楽しめる内容であり、彼の希望満ちる夢は彼女にとって冒険譚のような聞き心地だったのだ。

と、そんな過去を語った事で分かったと思うが、フィラは社交的、それに対し姉は閉鎖的。なのにフィラは家から出る事が叶わず、姉は外で関係を広める事が叶わない。お互いの境遇が噛み合っていないのだ。彼女達の両親も普通の暮らしをさせてやりたいと思ってるが、病がそれを許すことは無い。

なんとも皮肉な運命だ。

(……)いつらが普通に友達と遊んでいる姿を想像できないな。フィラの病気を治してやりたいが……)

少なくとも自分に治癒魔法など使えない。

いや、少し前に村に来た医療師でさえ、この病気を治す事は叶わな

かった。

コーリスは、このやり場のない悔しさに身を固めながら、フィラの元へ向かうのだった。

――

少し大きめの屋敷。

その屋敷の一部屋がフィラの寝ている部屋だ。

コーリスはゆっくりとドアを開け、フィラが寝ているかを確認する。

「…起きてるか」

「あ…コーリスさん！」

ベットに腰掛けながら本を読んでいた少女は、コーリスの姿を見た途端本を閉じ、飼い主を見つけた子犬の如くすぐに駆け寄る。

7

「具合はどうだ？ 苦しいようであれば飲み物を持ってくるぞ？」

「ううん！ 大丈夫。手足が少し怠いだけで、具合は悪くないよ！ それで…今日はどうしたの？」

具合は悪くないと言いながらも顔色は常人よりも白く、手足がぎこちないと言うだけでも辛い状態なのに元気に振る舞う健気さにコーリスは少し悲しくなった。

だが、フィラの明るさに少し顔が綻んだ事も事実だ。

それがとても哀しく、この静かな一室がもつと静かになった気がした。

自分が来た事を喜んでくれる少女に、自分がそろそろ姿を消す事を知らせなければならぬのは残酷な話だが、何れ話さなければならぬ事だと決意する。

「もう後三ヶ月で島を出る。フィラとも別れる事になるから…その挨拶だな」

「……そっか」

「そうだ」

明るい雰囲気から一変、場が冷え切ってしまった。それを感じ取ったフィラは焦って話題を作る。

「えと、あ！何だっけ？その、これから行く島…リスクローウだっけ？」
「リュミエール、だ。俺はそこまで変食家では無い」

「あれ？でもこの前お姉ちゃんがコーリスさんが蜂の巣を食べてたっ
て言っ「止めろ」………うん」

これはコーリスが蜂の巣が食べれると言うことを知っていただけで、知らない人間が恐れているだけである。

フィラの姉は虫が大嫌いな為、蜂の巣など絶叫物なのだが、偶然、コーリスが回収した虫が一切入っていない巣にコーリス自身が噛み付いているシーンを見てしまい、誤解が生まれてしまった。

コーリスは変食家であり、腹が空けば虫さえ食っても美味しく感じる変態であると。

無論でまかせであり、コーリスは悪くないのだが、悲しいかな噂は広まってしまった。

「お前の姉が話す事は信憑性が高いが、虫に関しては何がなんでも自分の先入観に囚われてしまう。だから安心しろ、蜂の巣は食える」

「う、うん」

「あと、何だか思い詰めてる顔してるぞ。蜂の巣でも食うか？」

「いや、今はいいかな…。えっと、前にお医者さんに言われた事があって…まだお母さん達にも話してないんだけど……」

「言ってみろ。出来るだけ秘密は守る」

「あのね…島を出て、大きな島で治療を受けないか？って言われて…」

「…」

理には適った話ではある。

この島、トラモントは他の島に比べ小さく、国というより村が似合う島だ。

それならば、医療技術が十分に備わった都会の大きな島で治療を受けた方が良いと言うものだ。

医者は何一つ間違っていない。
だが、

「まさか一人じゃないよな？」

フィラは年端もいかぬ子供。コーリスですら15にもなっていないのに、フィラ一人で島の移動など危険すぎる。

ましてや、病が完治する確証も無い。

誰かが付いていくのならば問題無いだろうが、フィラの様子を見ると、一緒に行く人間は決まっていられないらしい。

一人では行かせられない。

「一人で都会の島なんて大変だろう。付き添いは居ないのか？」

「お医者さんが付き添いを手配してくれるから、大丈夫だよ」

「そうか。じゃ、もつと会えなくなるかもな…」

「大丈夫だよ！私、病気なんかには負けられないから！まだ外の景色なんて知らないけど、病気が治ったら、色んな島に行って、たくさん思い出を作って…それで島に帰ったら、お姉ちゃんに自慢するんだ!! 外の世界はトラモントよりもずっと違って、違う楽しさがあったって。コーリスさんがリュミエルに行くんなら、私はその反対の島を巡るんだ！色んな島の思い出を交換し合おうよ！それから…」

「分かった分かった…湿っぽい話をした俺が悪かったな。」

フィラはずっとしたい事を我慢してきた為、これから目指す輝かしい理想の人生を夢見る。

しかし、それは決して叶わない夢では無く、フィラの元気があれば、その夢もすぐに実現出来るとコーリスは思えた。

「なら、約束だな。俺が先に島を出るから、思い出をたくさん拾って来てやる。それまで退屈せずに楽しみに待ってる。ただ、お前が元気になったら、次はお前が俺に沢山の思い出を語るんだ。楽しそうだろうか？」

コーリスはこの言葉を語ったら少し恥ずかしくなった。

何を偉そうにこんな子供みたいな事を喋っているんだと。ただ励ましの言葉だけで良かったろうに、と。

ただ、こんな言葉でも、フィラという少女は

「ツ……うん!!」

と、嬉しそうに頷いてくれるのだった。

2. 空を跨ぐ

「そろそろ行きます」

騎空艇が駐屯する乗り場では、人だかりが少なからず出来ていた。今日はコーリスが島を出る日。

フィラと約束をしてから、驚く程に三ヶ月が早く過ぎたように感じた。

そんな彼を送るのは、捨てられていた赤子の彼を拾った高齢の夫婦。

コーリスが島を出たいと思っっているのを見抜き、相応の金額まで渡してくれたので、コーリスは感謝が尽きない。士官学校への連絡も済ませたという点では、相当彼を甘やかしていると言えよう。

「今までお世話になりました。コーレ伯母さん、レルフ叔父さん」

「ははーそんなに畏まらんでもいい。いつも通りが一番過ごしやすいじゃろ？」

そう快活に笑うレルフは、捨てられたコーリスを発見した張本人。老いを感じさせぬ力強い振る舞いは周りにも活気を与え、強い存在感を示す。

それに反しコーレは静かな雰囲気を保ち、穏やかで人に安らぎを与える。

レルフは義理の息子の旅立ちを笑顔で送り、コーレは溢れ出る涙を布で拭き取り、無事を祈る旨を伝える。

この夫婦の他にも島の人間が大勢集まり、コーリスを送り出そうと様々な言葉をかける。

風邪を引くな、無駄遣いはするな、独身にはなるな、友達作れ、蜂の巣食うな、耳掃除を忘れるな、など、心配に近いものが様々だ。

こうして見ると、自分は意外に皆に好かれているのだろうか？という浮いた考えがコーリスによぎる。

実際、コーリスは街でも色々な人物との関わりを持ち、また、人の助けになろうとする彼の態度は密かに村の人々の好感度を上げていた。

そんなコーリス達まで駆け寄る影が一つ。

コーリスの幼馴染である。

「ん？どうした。ここまで降りてくるなんて珍しい」

「う、まあ…別れの挨拶くらいはするべきだと思つてな…少しな…」

彼女の家は村から離れた山にあり、その場所もまた人々の疎外感を感じるには充分だった。

村の人々もあまり見ない顔付きに驚き、それと同時に交友関係を持つていたコーリスを意外に思った。

「なら恥ずかしがらなくても良いだろう。いつも通り堂々としろ、○○」

名前を呼ばれた彼女は一瞬たじろぎながらも前を向き、コーリスに言葉を伝える。

「あ、えーと…む、向こうでも、元気にな」

「口下手か」

コーリスは殴られた。

「まったく酷い話です。知人の見送りを打撃で済ます奴がこの世界にいるでしょうか？いえ居ませんよね」

「お前は少し黙つとけ」

飛空艇。

それは空を飛ぶ移動手段であり、この世界に生まれたからには絶対に『乗ってみたい！』と思わせる乗り物である。

まして男にとっては最高の憧れ浪漫である為、コーリスはとても浮かれていた。

たとえ殴られて騎空艇に搭乗してしまったとしても。

彼女が怒りに身を任せ、この騎士目指しの愚物を殴った理由は、単純に『お前に言われたくねーよカス！』というような感情が湧いたからである。

この男、自覚してないがとんでもない言動をしている。

勉強に悩み、コーリスに相談をした者は『ああ、単純に覚え方が下手なだけだろう。未だに身につけていないのか?』と、鬼畜極まりない暴言を吐く。

なお、本人にとっては『ああ、自分に合った勉強方法が見つけれないのか?それならしようがないな!まだ身につけてなくても、余裕で間に合うよ!』と言っているつもりである。

挙げ句の果てには、騎空士に憧れた小さな子供に対して、『高所が苦手なお前には向いていないな。そんなんじやとても無理な夢だ』と、外道ここに極まれりと言った言葉を吐き捨てる。思わず泣いてしまふ哀れな子供。

この時ばかりは村中の同年代にビンタされた。

これも本人には『いい夢だね!でも、高い所が苦手なのを直さなくちや大変だよ?これから苦手意識を消していくのを頑張ろう!』という吐いた言葉そっちのけの脳内変換が行われており、同年代から肅清を受けてた時は、『これがいじめか?』という被害妄想まで生まれていた。

はつきり言つてこれじゃただの屑である。

コーリスが村の人々から嫌われなかったのは、村の人々がコーリスをネタ扱いできる程に悟りを開いていたのと、コーリスの毎日に及ぶ献身的な行動が村の為になっていたからであろう。

どっちみち口下手に変わりは無いのだが。

「…あなたは暴力肯定派ですか?へー」

「お前拗ねると本当面倒くさいな…度量ハーヴィンか?」

「そこまで言わなくても…ハーヴィン族に失礼です」

「自覚あんだつたら直せ」

コーリスが現在話している人間は騎空艇の操舵士。名をサレア。茶髪で眉目秀麗な彼女には、一時期ファンが増えたとか。

トラモントにいる僅かな操縦士で、その操縦の実力は他の空域の者と比べても上位に位置するらしい。

若年、そして女性ながらもその操縦能力は天候に関係なく目的地まで難なく到着させる精密さ。まさしく天才と言うべきものだろう。

まあ、その毒舌と荒々しき男のような口調のおかげで婚期を逃し……そうになつてただだから問題は無い。

少なくとも逃しそうになつてからイライラして辛辣な言葉を子供に投げかける訳ではないだろう……多分。

だが、お互い遠慮の無い言葉を投げかける性格からか気が合い、年の差は11もあるが、今ではすっかり仲良しである。

「サレアさんはリュミエールに行った事がありますよね。どんな感じの島なんですか？」

「ああ、運び手という職業柄かあんまり中には入れないからな。詳しくは分からないが、まあ……活気溢れる島だったな。経済は回つてるし、皆笑顔つて感じの島だ。犯罪者の数も他の島に比べて少ないらしい。騎士団で有名な国のフェードラツへにも行ったが、あそこは国として機能してるが堅苦しい雰囲気があつたな。勿論元気で煩い奴もいたが」

「色々珍しい国つて事ですね」

「そういうことだ。リュミエール聖騎士団も活動が案外自由で、弱い奴でも受け入れるらしい。前に不器用なハーヴィンでも入れたつて話だ。来る者は拒まず、辞める者も拒まずつて体制と聞く」

「そんな国でも一応士官学校は存在するから良く分からないですよね。実際リュミエール聖騎士団の強さはかなり有名ですし」

「指導者が優秀なんだろう。力が無く、取り柄さえ無い奴に対しても適材適所を見つける程にな。まあ、一番影響を与えているのはこの体制を長年続かせている歴代の国王達だな」

コーリス達の住むトラモント、リュミエール聖騎士団本拠地のリュミエール聖国、国を守護する騎士団で全空に名を轟かせるフェードラツへ。

これらの島は全てファータ・グランデ空域という一つの地域として纏められており、広大な海に身を浸すアウギステ列島や、翠緑の森を持つルーマシー群島、艇整備職人の島であるガロンゾ島を始め、豊かな土地で溢れているのがこの空域の特徴である。

数々の島を渡った操縦士がその中でも特に活気に溢れていると言ったのがリユミエール聖国だ。

空域で語るならば、ファータ・グランデと魔物を凶暴化させる乱気流、通称瘴流域を挟んで隣接するナル・グランデ空域が挙げられるが、ナル・グランデは数多くの国が覇権を争う戦乱の空域であり、とても平和な空域とは言えない。

さらに遠方にはファータ・グランデやナル・グランデを超える規模の空域、アウライ・グランデ大空域があるが、多くの瘴流域を挟む上に堅固な情報網で仕切られているため、詳細を知るものは少ない。

幾つかの空域の中で、比較的平和なファータ・グランデに生まれるのは、誰だって幸福に思うだろう。

だが、ファータ・グランデにも問題は少なからず存在する。

まず、この世界には『空の民』と『星の民』という種族が存在していた。

空の民とは、言わずもがな現在全空域に存在する四種族、つまりヒューマン、エルーン、ドラフ、ハーヴィンの事である。

そして星の民とは、遙か昔：それこそ数千年前にも遡る時代に突如姿を表した侵略者である。現地民にとって謎でしか無い莫大な技術力を持って土地を蹂躪し、全空最悪の戦乱である『霸空戦争』を引き起こした圧制者達。

戦争を引き起こした後、自分達の兵器を遺して消えるように姿を隠した謎の種族である。

星の民の使っていた兵器の名は『星晶獣』。

名称に獣と入っている通り自我を持ち、この世界の創造主である神にも等しい力を持っているとされている。

星晶獣は各自何らかを司る能力を持っており、その全てが戦いに関わる物だった。だが、星の民が撤収した事で戦っていた星晶獣は放置、残った星晶獣は主を失い、結果空の民の地に残されてしまった。

それを見た空の民は星晶獣が蔓延る事を危惧し、数多くの島と契約を結ばせる事でその力を使った発展の仕方を見つけ、もしくは守り神のような存在にした。

ここまでは良いのだが、ファータ・グランデ空域には星晶獣と契約した島が多すぎるのだ。

もし、何らかの影響で眠れる星晶獣が暴走し、それに刺激され他の星晶獣が暴れ出してしまったら……きつと第二の覇空戦争が始まってしまうだろう。

そんな自体にならないよう、各島も立ち回っている。

水を司る島なら水質汚染に気を向ける、大地を司る島なら森林破壊などを控えるなど、様々な対策を欠かさない。

なお、トラモントは星晶獣と契約していない島であり、歴史書にもそのように記述されている。

「星晶獣…事務的に会う事になりそうです…」

「会う時はその島の一大事って事だ。滅多に無いから安心しろ。暴走した星晶獣なんて私でも聞いた事が無い」

実際、暴走を危惧されていると言っても実例がここ数十年まったくない。

周辺の魔物が暴れるケースは少なくないが、星晶獣が人目に触れる瞬間などは無い。いや、あつてはならない。

「もし、会う事があるなら命に関わる瞬間だ。今からでも気を引き締めろ。私も操舵士という身分、命を背負う事も自分の命を掛ける事もある。だが、お前は人を守る騎士。私以上に命を張る人生になるだろう」

「……分かっています」

「秘密にしておけると言われたが流石に言っておく、お前が騎士になりたいと発言した時、コーレさんは肯定するのを渋ったそうだ。あのレルフさんでさえ苦痛に満ちた表情をする程なんだ。お前が島を出た後、きつと泣いただろうな。いいか？お前は後ろめたさを覚えてはいけないんだ。夜通しする程悩んだ末の厚意で送ってもらったお前が後悔するな。それこそ本当の屑野郎になってしまう。いや、ただのポンコツか？」

「…」

厳格な口調から悪口になり掛けているが、これも自分への気遣いだ

とコーリスは受け取った。

「説教みたいで個人的に好きじゃ無いが、お前はもう割り切るべきだ。夢だけで行動をした結果墮落なんてのは見るに耐えない。お前は後悔することなく前に進もうとしろ。それが夢の実現だ。無償で得が出来ると思うなよ」

厳しい口調だが、コーリスはそれが心地良いと感じていた。無論Mでは無い。

明らかになった伯母達の思いと、サレアのアドバイスを隠れた優しさに胸が暖かくなったからだ。

思わずコーリスは頭を下げた。操縦しているサレアが見える訳も無いのにな。

「ありがとうございます。サレアさんの言葉、胸に刻んでおきます。あと…」

「ん？なんだ」

「やっぱり優しい人ですね。貴女は」

「チツ…言つとけ」

サレア一瞬忌々しいと言いたそうな顔でコーリスを睨んだが、コーリスには温厚な笑みが浮かんでいるだけ。

「ここで終われば良いのだが…」

「お礼に今度…いえ、もうちよつと先に成りそうな話になるんですが…」

「あ？」

それで終わらさないのがコーリス。

「11歳にして『口下手クソ外道野郎』というあだ名をつけられたのは伊達では無い。

つまり…」

「優しそうな男性を紹介しますね」

「しね」

地雷を一踏み、いや百踏み、千踏み。

温かい空気は、着々と、それでいて確実に殺意の奔流と化した。

「な!?!操縦の片手間で銃を構えないで下さい!死人が出ます!!」

「今なら死んでも下に捨てりやバレねえなあ!!」

「自分が悪かったです!!!でも、せめて好みだけでも!サレアさんの役に立ちたいんです!」

「ツ!……バニツシユピアース!!!」

「ちよ、まってk」

3. リュミエール聖王国、来日

「付いたぞクソ野郎。ここがリュミエール聖王国だ。荷降ろしの用意をしろ」

「はい」

「寮登録までは付き添ってやる。また妙な事をほざいたら風穴が空くと思えよ?」

「はい。御忠告感謝致します」

昨日の出来事のせいかコーリスに元気が無い。

流石に学んだのか、受け答えも下手な事は言わずに感謝の言葉のみを選んでいる。

コーリスは学ぶ男だ。しかし悲しきかなその場で対応する事は出来てもこれからの人生に活かすことは出来ないだろう…:そうできやもう口下手・天然など治っている。

少し大きめの皮袋に包んだ荷物を背負い、サレアの案内の元、コーリスは一言も発さずに、足を動かす以外の身体の機能を停止させ、トラウマを思い出した子供のようによく続いている。

一方サレアは不機嫌そのもの。コーリスの方を見る度不満と憤怒、憎しみの混じった舌打ちを無意識に打ち付けていく。

それを見たコーリスは『ああ…:そりや結婚出来ないな…:』と相変わらずの思考を無感情の顔面で広げていたのだが、何を感じ取ったのかサレアは腰に掛けてある愛銃の引き金に触れたのだ。

それからコーリスは何も考えなくなった。

何も考えられなくなった。

自立起動していた思考は錆果て、空の風に当たり冷えて止まっていた汗腺からは激流の如き汗が流れ、感情を表していた瞳は深淵の闇を顕現させていた。

少し経った後、コーリスは自分の人生の追想を強いられていた。

物心つく前から年中霧が立ち込めるトラモントに捨てられ、拾われ、コーレ伯母さん達に育てられた。

エルーンの自分にも優しくしてくれたヒューマン達。

森で遭遇した青色の髪を持つエルーンの少女。山の上に家があり、下の森で迷ってしまったらしいから頑張って家に返したのを覚えている。彼女の両親には凄くお礼の言葉を送られた。

(魔物に襲われる村。霧でよく見えない視界の中サレアさんが操縦した騎空艇に乗って駆け付けてきたリユミエール聖騎士団の人々。俺に夢をくれた人達。)

夢を追い鍛錬を続け、家で疲れて寝ていた俺を労ってくれたレルフ叔父さん。よく迷惑かけたな…。

10になった頃、友人と小さい子供を泣かし、村中の奴らからビンタを食らう。痛かった。

他の奴らは『子の心の方が痛かろう…』と言っていた。何歳だよ。

あいつの妹、フィラに愚痴を零したら苦笑いされた。

蜂の巣から溢れる蜂蜜を啜った。勿論虫抜きはしてあるが、それでもあいつには無理だったらしい。一晩で俺が変態になった。いつかめる。

フィラと約束をした。二人だけの秘密。

トラモントを去った。寂しくて泣きそうだ。

サレアさんに怒られた。死ぬ)

「——ッ!?!」

「付いたぞ。ここがリユミエール聖王国士官学校第一寮だ。早く証明書を出せ」

「…はい」

コーリスの飛びかけていた意識を銃で叩く事でサレアは戻した。流石に撃つことはしなかったようだ。

彼は再びビクビクと怯えながら寮の扉を叩く。

中は木造りのテーブルや椅子が設置されており、受付机の前には休憩のスペースが広がっている。

何故か受付にいる人間以外に人気が無い。

「すみません、寮の申請に来たものです。これが証明書ですが…」

受付席に座っている外見中老の女性に士官学校との契約で得た証明書を見せ、話し掛ける。

女性は何やら驚いた様子で紙を見る。

「ん？おぉ！騎士志望かい!?若いのに頑張るねえ…。んん？トラモント…霧の小島から来たっていうのかい!!あの霧を掻い潜ってよくここまで来たね！ああ、人気が全く無いだろう？それはね、他の島から来て態々騎士になるつてのが珍しいからだよ。大体の人間は自由奔放な騎空士を目指すからねえ。最近は本国でも聖騎士志望が減ってるんだから有難いもんだよ…。あ、私はグルシって名前さね！皆からは愛情込めて『おばちゃん』って呼ばれてるよ。あんたも是非呼びな！今じゃこんな寂しい寮になっちまったが、決してボロくは無いよ！全く最近の若者はヘタレでねえ…戦うのが怖いつて喚きながら家に引きこもってる奴らばかりさ…加えて勉強も疎か…あんたみたいのは大歓迎さ！あ、後もう一人騎士志望がいたよ。あの子も遠い国から来てたねえ…ま、仲良くしてやってくれ。あとそれからそれから……………」

乾いた外見から恐ろしいマシンガントーク。話題を提示するまでも無く舌は高速回転している。

コーリスはおろか、サレアまで冷や汗をかいている。

(このおばちゃん、強い……！)

などとかくだらない思考を広げている間にも、トークは終わらない。

「でね！騎士を目指す人間は皆フェードラツへに行っちまうんだよ！何故かうちの国は緩いと思われててさあ、あっちに人員を吸われちまうんさ。個人的には国を守るあっちと空域を守ってるこっちじゃ別物だと思うんだけどねえ…。まったく、商売上がったんだよ！ん？横のアンタは？保護者かい？」

「ああ…一応身分は証明するべきか。私は騎空艇操縦士のサレアだ。こいつを送る為に来たんだ」

「んん…サレア…!?!」

「私の事を知ってるのか？」

「そりゃあもう知ってるなんてもんなんじゃないよ！操縦士のサレアって言ったら超一流の操縦士で豪雨乱風雷鳴などお茶の子さいさいの天才で有名じゃないか!!いやーうちに来るなんて嬉しいこつた

ね！どうだい？食事でも。騎士はフェードラツへに吸われてるが飯の旨さだけは負けないつもりだよ！何だったらここを食堂に改装しても良いかなんてねっ！はははは!!」

「あー、ちゃんと住もうとしてくれる人間がいるから辞めとけ。取り敢えず飯は大丈夫だ。こいつを送り届けたら目的達成だからな」

「そうかい…。まあ未来の騎士様一人確定って事で喜んでおくとするよ」

「そうしとけ。私以上の大物になるかもしれないぞ?」

「まあた楽しみな事を言うねえ」

本人そつちのけで繰り広げられる未来への期待。

実はこの二人知り合いかと思わせるような軽い会話。とても初見の若者と年配の雰囲気では無い。

おばちゃんは何百年前からこういう性格と相場が決まっているが、若者は珍しい。

基本、敬語を使ったりする物だが…。

だが、コーリスは少し納得していた。

サレア以外の操縦士も見た事がある故の結論だ。

操縦士とはワイルド血気盛んな生物なのだ。飽くなき探究心と死をも恐れぬ芯の太い心は自然とその人格を型どっていく。女性とて例外では無い。

…子供に銃を向けるのはどうかと思うが。

舌を回転させながらも事務仕事をきっちり終えたおばちゃんは部屋の番号が記された鍵を渡してくる。

「A—02」と書かれた鍵だ。

「この寮二人しかいません?」

Aとはアルファベットの最初に位置する物。恐らく幾つかの区域で分けられており、次に続くBが存在するのだろう。

そして02とは、区域に存在する部屋の番号だろう。

…両方とも最初に位置する番号ということ。

「…そうさ。騎士を目指す者はいれど本国の人間ばかり。さつきも

散々言ったけどあんたみたいのは本当に珍しいんだ。恐らく、あんたともう一人で終わりだろうね。昔は沢山五月蠅い奴らがいてねえ：私が30くらいの時は部屋が常に満杯さ」

そう語る彼女は先程の和気藹々とした語り口からは一転し、哀愁漂う、そして何かを懐かしむようだった。

単純に騎士業が過疎化した悲しみもあるだろうが、それだけでは無い気がする。そう思ったコーリスは敢えて聞く事をしなかった。

人が自分から言おうとしない限り、人の深層に踏み込むべきでは無いという考えを持っているからだ。彼の数少ない自論だろう。

騎士とは守る事。

守るという事は戦う事。殺めるも殺められるも同率に受け止めなければならぬ。死にゆく者も少なくは無いだろう。

「辛気臭い空気になって悪いね。部屋でも確認しに行つててくれよ」

言われた通り鍵を持ってAと地面に記されている通路を進む。サレアさんとは外でまた会う予定だ。

何でもリユミエールはあまり訪れないらしく、少しでも見て回っておきたいのと、操縦士としての依頼探しも兼ねてある。

「ここだな」

最初の方に位置する部屋なのでエントランスから近い場所に部屋があつた。

ドアに書かれている文字を確認した後、鍵穴に鍵を差し込み、音を立てないようゆっくりとドアを開ける。

中は思ったよりも綺麗だった。

木目が目立つ地面は靴が引つ掛かる事も無いし、作業用の机まで用意されてあつた。

更にフカフカそうなベッド。コーリスは大満足であつた。

用意されてあつた椅子に真顔で居座るハーヴィンさえ居なければ。

「待っていたぞ」

「…用務員の方ですか？」

反射的にそう聞いてしまった。

自分の部屋になる予定の場所に入れるのは掃除を行う用務員でしかあり得ないと思ったからだ。

「違うな」

癖毛の黒髪に混ざったメッシュの様に入った直線型の赤髪を揺らしながら、その小人は表情を変えずに否定する。

その返答を聞きながらこの人物の分析を進める。

エルーンから見て明らかに未発達に見える短い手足、体型に反し大人びて見える顔付き。間違いない、四種族では小柄な種族のハーヴィンだ。

「俺はお前を確かめに来た」

「はあ…」

「俺と同じ志こころざしを持つに相応しいかをな」

「……と、言う事は」

「そう。俺がもう一人の志望者だ」

先に申し込みに来ていたもう一人の志望者はハーヴィンの少年だった。

コーリスは少なからずの衝撃を受ける。

まず、ハーヴィンは色々な商業に流通している。

そして、数多くの様々な役職に務める。よろず屋、画家、質屋、服屋など、職業のフットワークは四種族の中で一番軽いと言えるだろう。

だが、ハーヴィンは傭兵などは一切行わない。

それは何故か？

単純に、力が足りないのだ。

無論、個人個人の努力で済ませられる程ならばとうの昔に解決している問題だろう。

だが、ハーヴィンはその体躯の影響で他の種族より力が劣る。言っ
てしまえば子供の力で大人の力に勝てる訳が無いのだ。

拳で闘おうとすれば、余裕で掴まれ軽く投げられる。

重い刃物を持つとうとすればその重さに振り回され、標的を斬る力さえ出ない。

そもそも戦闘に向いていない種族なのだ。

武力に抵抗出来ない身体を良い事に犯罪に巻き込まれる事も少ない。

普段から軽視される事もある。

成熟した大人が子供扱いされ、馬鹿にされた事もある。

戦闘に関して、全てが不条理な種族。

それが自分と同じ騎士を目指し、尚かつ自分と同じ目標を持つに相応しいか見に来たど？

余程の強者か、はたまた単純に余裕を見せに来ている勝ちたがりか。

「相応しい？お前がどんな人間が知らないが、騎士とは国を守り、人を守り、世界を守る存在だ。相応しい相応しく無いでお前に合わせている暇も無いし必要も感じられない。志とは人が平等に抱ける物、実現するように努力こそすれ、夢を持つ事に許可なんて必要無い。大体人の部屋に居座るな。驚くだろ」

「フツ…その心味、良い」

「……ますます訳が分からなくなる」

「どうやら本気で騎士を目指すらしいな。ならば言っておこう…俺の名はスルト・ヴァーグナー。リュミエール聖騎士団団長に成り、ハーヴィンの汚名を返上する。均衡を保つ者だ」

——何だこいつ。

コーリスの頭はこの思考で満たされた。

考えても見て欲しい。寮の鍵を渡され初めて部屋に入ったら変な小人が居て、志を共にするに相応しいか確認しに来たと喚きながらドヤ顔で自己紹介。

誰だって混乱する。

だが、スルトと名乗った小人はコーリスの様子に触れる事なく、用が済んだとばかりに部屋を出ようとする。

「ではな。士官学校ではお互いに睨みを聞かせる好敵手となるだろう。まあ、お前が強いのならばの話だが」

最後にこちらを横目で見ながらそう言っただアを開けるスルト。最後までその気取った態度が崩れる事は無かった。

「ぎゃん！」

短い足が窪みに引掛かり転ぶまでは。

そして、もう一つの疑問が彼の頭を過った。

(——あいつ…どうやってこの部屋に入った?)

「…てことがありまして」

「災難…? いや、友達が出来た事を喜ぶべきか?」

「災難…いや、災厄ですね」

転んだ変人^{スルト}を助けて見送った後、コーリスはサレアとリュミエールの観光をしていた。

夕焼けに染まった空の下では沢山の商店がアピールをしている。

中でもコーリスが見ていたのは高額で売られているエリクシール。

エリクシールとは、傷を負った人間が飲めば即座に回復し、疲れ果てた人間が飲めば活力が漲るといふ魔法の治療薬。

だが、その効果を作る為にそれ相応の労力が費やされている為、かなり高額。

ちなみに効果が薄くなったものの生産コストが大幅に繰り下げられたエリクシールハーフなる物も存在する。

(あれを持っていけばフィラの病気も治ったか?)

その考えが頭を過った瞬間、あり得ないと断ち切った。

そもそもエリクシールに病気は治せない。その前提を失ってた自分に失笑する。

4. 紫苑の夢

——なあ、コーリス。

柔らかい森に包まれながら、横に耳を傾ける。

——人とどうやって関わり合えば良いんだ？

次に目を向ければ涙が。

膝を抱えて、涙目で心情を訴えてくる少女。

朧気な意識を抱え込みながらその質問の返答を考える。

だが、問に答えるまでもなく耳にはもう一つの声が流れてきた。

——…話せばいいと思う。

聞こえて来たのは涙に対する一切の同情も含まない返答。それが、自分自身の声だと気付くのに時間はかからなかった。

だが、自分の目には声も手も足も存在しない。

ただ二人の動向を横で見つめているだけ。

(懐かしいな…)

そう、これは過去の自分。

過去の自分を景色として見つめている奇天烈な現象——これを夢と判断した。

違和感のある空気に包まれているのに、その場では疑問に思えないという矛盾。異常空間に溶け込む精神。

人にとって今も、そしてこれからも未開の地。

それが夢である。

(こんな声だったか)

数年前の自分を見つめ直して思うのは声の変化。

一年前程の景色。横で泣いている○○○には目もくれず、今の状況を理解する。

彼女の横にいる自分の高い声に不甲斐なさを感じ、思わず苦笑を顔に浮かべてながら声を聞く。

——私はどうすればいいのかな？フィラは病気で家を出れず、母さんはフィラの看病につきつきり。父さんは種族柄かヒューマンに関

わろうとしない。私はこうやって森でぼやっとしてるだけ。人の役にも立てず、妹の話し相手にもなつてやれないし、作つてやる事もできない。なあ、お前は どうして自然に過ごせるんだ。

——自然？

——ああ。お前はエルーンの捨て子なんだろう？拾われても一人の環境の筈だ。それなのに人が寄ってくる。お前が人を突き放したような発言をしても周りが笑顔で寄り添ってくれる。私は余計な事を何も言わないのに誰も話してくれない。目すら合わない。

——ああ、そんなことか。

余りに軽率な返答に頭を抱える。

少なくとも悩みに悩んで涙まで流している少女に対する対応では無い。余りにぶつきらぼうすぎる。

それも過去の自分だと言うのだから、俄然見るに耐えない。今すぐ過去に戻つて殴りたいくらいだ。

——：そうだな。お前にはどうでも良いし簡単な事だったな。頭も良いし、身体も動かせて、友達もたくさんいて、フィラの話し相手になれる。確にお前は何でも出来るからな……。これなら、こんな陰湿な姉より妹が外にいる方が良い……。いつそ私が病気にかかれば良かったツ：!!

痺れを切らし、言葉に比例して涙の量が増えていく。

地に滴る水滴は誰の元にも届く事はなく、現実に溶かされていくだけ。

悩み、というのは妹に対して何も出来ない自分の無能さに打ちひしがれている、と言ったところか。

——なら、どうして話し掛けない？交友が広がればフィラにも楽しい空間が出来るかもしれないのに。

——怖いんだ……。他種族として離されていくのが！仮に私が友達をフィラに紹介したとして、父さんがそれを良しとしないかもしれない！『エルーンの風習』が何だと故郷の決まりごとを並べて仲違いを

させようとするかもしれない。家族の縁が切れて、またあの子に辛い思いをさせるのが堪らなく怖いんだよ……。

——へたれめ。

——ツ!!!

『…馬鹿が』

コーリスは過去の風景を覚えている為、彼女を怒らせ胸元を掴まれた記憶がある。

そして、へたれという言葉を堺にこれから殴られると言う事も知っている。確かに自分が悪いが、自分が殴られる風景を見るのは微妙な気分だ。

いつそ笑い飛ばせれば楽だ。しかし当時は考えなかつた彼女の心情が知りたいたい。

——自分の風景に現を抜かす暇はない。

じつと、この景色を見つめてみようか。

激情のままコーリスの胸ぐらを掴んだ少女は叫ぶ。

——お前には出来るのか!? 私に出来ない事を卒なくこなしたお前が!! ならばやってくれよ! ああそうさ、相談というのが間違いだつた! お前を頼れば出来ると思つていた私が馬鹿だつたんだ!

——……お前じゃないと意味が無いだろう。

——違う!! お前と話すフィラの表情はいつにも増して楽しそうだつた! 私と話している時よりも目が輝いていた! 最初からお前を頼るのでは無く、頼めば良かった!! 周りの人間もお前を頼りに日々を過ごす事もあつた。なら、私達も助けてくれよ!! 正義の騎士なんだろう!?

とめどない悲しみと怒り。

もはや自分の無力さを受け入れてしまっている。諦めの心は相手への渴望と変貌して叩き付ける。

ただ普通に生きているだけでも、彼女にとっては一番羨ましい物だつた。

——なぜ黙る!!

吐き出した思いに答えないコーリスへの怒りか、それとも無意識に同情を欲しているのか。

年相応の感情の爆発を見せた彼女は、まるで無い物ねだりをして誰かに縋る子供だった。

普通の人間なら、ここで彼女の言葉を受け止めて慰めたり、協力したり、または彼女の望み通り行動するといった方法を取るだろう。

しかしそこはコーリス。

自分の思った事を素直に吐き出し、他人の言い分は認めるが言いなりにはならない頑固者である。

地雷を超え、逆鱗に触れる。

——こんな姉で、ファイラが可愛そうと思っただけだ。

思えば、この発言は意地っ張りの延長だったかもしれない。

!!!

声にならない叫びを携えて男を殴る。

涙と感情で混ざりあった顔を隠す事も、目の前にいる男に涙が溢れる事も気にせず、嗚咽のまま殴る。

だが、男は自分に対し失望のような感情を含んだ目を向けてくる。痛みなど感じていないように。

……それが、堪らなく悔しかった。

数分経って彼女は冷静さを取り戻した。

が、大人びた精神がそれを許さなかった。

親友を感情のままに殴りつけたのが良くなかったようだ。どんなに無情な言葉を突き付けられたとしても、人としての罪悪感が込み上げてくる。憤怒に包まれていた顔は病人のように青白く染まり、力強く握られていた拳は開き、カタカタと指を痙攣させている。

無論、いくら力強く殴ったと言っても成熟していない少女の腕力。痛みは感じれど傷として顔に残る訳が無い。

コーリスは経験としてそれを理解している。殴られている男が途

中にそう思っていたかは本人にも分からないが。

——あ、その…私はそ、そんなつもりじゃ

………。

——は、はは…馬鹿だな…私は。相談を持ちかけに森へ連れては勝手に怒って人を殴る。唯一の交友関係も自分で断ち切ってしまった。

——なあ。

——いや、いいよ。コーリスは頭が良いからな。こういう時に掛ける言葉もすぐ思い浮かぶんだろう？でも、私にはその言葉に対する返答が思いつかないよ…。

無言で見つめる男を見てさらに萎縮したのか、言葉もおぼつかない。

もう何もかもが嫌になったのか、男の言葉も断ち切って自分という存在を嫌悪する。

——こんな馬鹿な女に付き合わされて疲れただろう？今まで済まなかった。もう無茶を言わないよ。

——そうか。なら言わせてもらう。

——？

——第一俺を人間じゃないみたいに言うな。慰めの言葉を直ぐに言える程器用じゃないし、何でもこなせる超人なんかじゃない。まず器用なら言葉で子供を泣かせたりしない。

——それでも、私よりよっぽど立派な人間さ。妹にさえ億劫な私より…。

——…何を言っても無駄か。

口下手な彼が必死に絞り出した言葉でさえ彼女の後悔を忘れさせるには程遠い。

ならば、最後に本心だけは言う。

——言っておく。誰だって怖いのは普通だ。俺だって一人じゃ他の島の人に声すらかけられない。だが、人を頼りにする事すら怖がつて

いるなら、人間何が出来るんだ？

返事をする事なくおぼつかない足元で家に帰ろうとする○○○。

その言葉は結局彼女に届いたのか。

それは今になっても分からない。

だが、何故こんな夢を見たのかは予想がつく。

それは、普段凜としていた彼女が見せた数少ない弱みが印象深かったと言う事。

そして、これが彼女との初めての喧嘩だったということ。

何か特別な物があるわけでも無い、単なる下らない言い合い。それが思い出として残っているという事なのだろうか。

聞こえたのは目覚まし時計の音だった。

朝でも遠慮なくジリリリ!!と鳴る時計は、俺がトラモントから持ち込んだ私物だ。現在午前5時。

「……」

…夢でも見たのか。起きた時の妙な目の冴え方と、服に染み込んだほんの少しの汗がそれを連想させる。

夢の内容を覚えている人もいるだろうが、自分は別。

嫌な夢、怖い夢、楽しい夢、奇妙な夢など、様々あると聞すが、どれも内容を覚えていない。

朧気に残っているのは、故郷を思わせる緑と、懐かしい思い出を匂わせる雫だった。

トラモントを想ったのは、一週間前にサレアさんが帰省した時だろうか。

「……………」

重力に引つ張られるように身体を伸ばす。

望んだ行動かは分からないが、勝手に体が動いてしまう。

半分だけ開いた眼で洗面所に向かう。

目に写ったのは耳を垂れさせた半目半口で寝癖を付けたみつともない男だった。

髪型だけでも人前に出せるようにしたいので、顔と髪を水で洗う。髪についた水滴をタオルで拭きながら、窓から外を見渡す。そこから見える中庭はとても綺麗だった。

半袖の私服に着替え、部屋を出てエントランスに向かう。

そこには当然グルシことおばちゃんがいた。

「相変わらず早いねえ…」

「やる事は朝にやっておきたい性分です」

「ま、それが良いけどね。あんまり切羽詰めんじやないよ？」

眠そうに欠伸をしながら注意をされる。

この寮に入って10日は経った為、早朝に顔を出す事を驚かれなくなったが、毎日同じ時間に起きている内に感心されるようになった。

この生活様式はトラモントでも変わらなかったのだが。

朝に起きて即鍛錬。

そんなにも珍しい事なのか。

グルシさん曰くこの年の若者は朝に弱く、やるべき事を後回しにする為昼にやり、最悪夜に回して寝不足になる事がしばしばらしい。

自分は寧ろ夜に弱く、決まって10時には倒れるように眠ってしまったのだ。だから静かな朝に一人で黙々と鍛錬が出来るのは気分が良い。

：隣部屋のあいつは真逆だ。

夜は煩いほど声を張り上げて話し掛けてくるのに朝は音量最大が目覚まし時計でも起きない。文字通り叩き起こさないと意味を成さないのだ。

ここ数日間で毎日グルシさんからマスターキーを貰って起こしに行っている。旗迷惑な物だ。

「涼し〜」

中庭に出たら思わず言葉に出てしまう程の涼しさ。

丁度良い朝の風が吹き抜け、気持ちよく顔を叩いてくれる。朝早く起きる利点はこの快適さにあると感じる。

風の余韻に浸る訳にもいかず、鍛錬の準備を進める。

まずは身体解し。予め柔軟をやっておく事で体温の上昇と固まった関節を解す。

次に走り込み。

広く、そして円状になっている中庭は外周に適していて走りやすく、体力の向上に良く繋がっている気がする。

二十周程走ったら息を整え、軽く布で汗を拭き取りながら木器に立てられている木剣を手取る。

この場所は昔から士官学校の生徒達の鍛錬の場になっていたらしく、色々な種類の武器を模した木造りの塊が置いてある。

自分が握った木剣は背丈の半分以上の大きさを持つ物。

トラモントで使っていた、要らない木の塊を削って無理矢理剣の形に仕立てていた物に比べ、作ろうとして作られた剣はとても形が整っている。

荒れた部分も無く、つるりとした側面が良く目立つ。

重さも申し分無く、本物の剣には劣るだろうが両手で持たなければならぬ程には重い。

両手で構えた剣を中段に保ちながら、剣を横風振るう。振るうだけで自分の筋肉が隆起し、足が剣の重さに持つていかれるのを実感する。

それを堪えながら斜めに剣を振り下ろし、脇を締めて突く。

合間合間に足を入れ替えながら剣を振るう事で、如何に効率よく力を節約しながら振るえるかを追求できる。人間とは体格がそもそも違うものなので、自分の体に合った型を見つけてるのが得策と言えよう。

「——ッ!!」

最後に振り下ろした剣を手首を回す事で構え直し、下から直線上に振り上げる。上から下に落とすのは誰でも可能な動きであるが、下から上へ物を上げるのは通常よりも腕力を使う。

これらの動きを繰り返すだけで、次第に自分の向き不向きを知る事が出来ると実感する。

取り敢えず、生活に支障が出ない限界まで剣を振り続けた。

――――――――――

朝の鍛錬が終わり、濁流の如く流れた汗を綺麗に浴槽で身体を洗い流し、エントランスのテーブル席に座る。

少しすると、グルシさんがやって来た。

「おつかれさん！いやー、凄い気迫だったよ。若者であれが出来るんだねえ…」

「集中していると、自分が変わる気がします。その物事以外どうでも良いと思えるくらいに」

「極限まで集中してるって訳だね。で、何時ものを頼むよ」

そう言って苦笑を浮かべながらマスターキーを渡してくる。理由はもう分かっている。

スルト
馬鹿を起こしに行くのだ。

先程述べた通り、スルトの朝の弱さは異常であり、近所迷惑になる程の音量を目覚まし時計に設定しても一向に起きてこない。

肘を腹に全力で叩き込む事でようやく目が覚めるレベルだ。

そんな相手の部屋に向かっている途中で大音量の目覚まし時計の音が聞こえる。

起きないだろうが。全く無駄な足掻きである。

マスターキーを一号室の扉に差し込み、ドアを開ける。
スヤスヤと安らかに眠っているハーヴェインと脈動する目覚まし時計。

この対比が非常に不快である。

ベッドの目の前に移動し、スルトの額を軽く叩く。

が、反応が無い。

「起きろ!!」

怒っているわけじゃないが、できる限り大きな声で挑戦してみるも反応無し。

生きているのかと疑問に思えて来た。

前に肘で叩き起こした時は少し堪えた様子だったが、10秒程で何時もの騎士風の佇まいに戻った。

かなり身体は頑丈と言えるだろう。

何度も同じ手を使って耐性を付けられても困るので、少しやり方を工夫してみる。

その方法とは…

「起きろチビ、ザコ、マヌケそんなんで騎士になれると思ってるのか？」

「んだともう一辺言ってみろ三下ゴラアアアアアアアア!!!」

効果あり。口調すら変えさせる精神攻撃だ。

奴にとって、【チビ、ザコ、マヌケ】は禁止用語らしい。無論本音では無く起こす為の口撃に過ぎないが、理性を失わせるには充分だった。

——まあ、たった三人しかいないけど賑やかで楽しいぞ。そっちはどうだ?○○○。

5. 熱狂火達磨シャウト

「少々取り乱したが問題無い。煩わしい夢を見ただけだ」^{わずら}

「ならその胡乱な目を整えろ。お前の事だから二度寝しそうだ」

起きて早々望まない暴言を吐きあったが、相手は正気を取り戻したようだ。口調が理知的に戻っている。

そして二度寝しそうと言ったが、こいつに限っては昨日四度寝を決め込んだ。

恐ろしい事件だった。起こしても気絶するように閉じる瞼は、きつと肌を切り裂いても開かないだろう。

そう思わせるくらい凄絶な物だった。

いい加減にしろと怒り狂い、何度その小さい体軀を蹴り飛ばそうとしたか……。しかし奴は素早く、以上に身軽だ。騎士団長を目指すと豪語するだけあって鍛えている。終いには身体に宿る火の魔法を使つて拳の勢いを付け、反撃してくる始末。

しかも奴は魔力が異常に多いのか、拳の威力がおかしい。庭で喧嘩したときは10メートルほど上空に飛ばされたものだ。

自分も魔法は使えるが、得意なのは防御と弱体系。火や水などの攻撃魔法は少ししか使えない。

自分の魔法もおかしいとよく言われるが、ゴリ押し系のスルトよりマシだと思う。

話が逸れたが、今日は大事な日だ。

喧嘩などしている暇は無い。

「全く…今日は入学の日だ。大抵大事な日というものは寝坊常習犯でも起きるものだが…?」

「——毎日と違わぬ振る舞いを。これが騎士の享受だ」

「……じゃあ毎日早起きしてそれを毎日の振る舞いとしてみれば良いのでは?」

「自分の道はッ!…曲げられない」

「いや本当に曲げて」

またこれだ。

事あるごとに言い訳の嵐。馬鹿がなまじ強い力を持つと危険というが、こいつはただ面倒臭いだけだ。

思えば初めて会ったときもそうだった。

鍵が掛かっていたのでどうやって先に入っていたかを本人に聞いたら…

『中庭から窓に入らせて貰った。火の噴出は実に便利だ』

と、不法侵入を反省する素振りも見せなかった。

不法侵入するわ地面の凹みで転ぶわキレて椅子燃やすわで問題児。

グルシさんは楽しそうに眺めているが、追い出しても良いんじゃないかと思う。自分だったら壺にぶち込んで3日間放置する。

それ程までに奴の蛮行は留まる事を知らない。

「着替えろ。朝食の準備が出来たら呼ぶ。くれぐれも寝るなよ」

「分かっている」

「寝るなよ」

「分かっている!!!」

二度目の注意をして部屋から出ようとした時にはもう火のパチパチとした音が鳴っていた。

そんな事を気にせず部屋を後にする。ああ見えて人に火を直接当てては来ないから安全だ。

早速エントランスの横にある食堂へ移動し、グルシさんが用意しているであろう朝食を運びに行く。

グルシさんの料理はなんと言うか…母の味？故郷の味？と言えば良いのか…。

凄く美味しい。無論高級料理店のように着飾った味付けでは無く、栄養や食べやすさを追求している真心の籠もった料理。コーレ叔母さんの味を思い出す。

今日の料理は何だろうか？

良い匂いが立ち込める食堂へと足を踏み込んだ。

「起きたかい？」

「ええ。もう少しで来ると思います」

「ならばよし。起きたばかりだから少量でも問題なさそうだね」

ハーヴェインは小人だ。その理に従うならば当然胃も小さく、常人の三分の一程の食事で十分なエネルギーを得られる。逆に言えば余り物を食べられないので、食べる事が好きなハーヴェインがいるのならば哀れな話だ。

スルトは味わって物を食べるが、大食いでは無い為か安定して食事を取っているように思える。

外食でもお子様ランチを頼まざるをえないのは本人にも不本意らしいが。

両者とも好き嫌いは無く、基本何でも消化できる。

サバイバル訓練なら余裕で3ヶ月生き残れる自信がある。

何故かって？

トラモントで引かれる程危険物摂取したからだよ。

笑い茸、毒キノコ、毒草。

味さえ良ければ満足感で苦しみをカバーできる精神論が意外にも功を成し、毒見最強の称号を得ることが出来た。

ただファイラに引かれると本当に心が傷むので辞めようかなと思っ
ている。

そんな事より飯だアアア!!
閑話休題

奴がもの食わぬ顔で来たときには既に料理が出来ていた。食事の時は随分と大人しいので、騎士の振る舞いに煩いようにマナーにも気を付けているらしい。

個人的には子供みたいと馬鹿にされたいように意地になってるハーヴェインにしか見えないのだが…本人に言ったら殺されそうなので伏せておく。

たった三人の食事はまるで家族のような温かみと、少しの寂寥感が

あった。曰く、大量の長机が満席になる程に人が溢れていた時代より静かでこれもまた良い物らしいのだが、他人にとっては廃れていく文化に過ぎないだろう。

今や聖騎士団の栄光など人寄せの材料にならない。

フアータ・グランデでは戦の時代はもう過ぎ去って、戦う事より環境と歴史を大事にする事が最優先なのだ。忌むべき戦乱の災禍を後世へ語り継ぐ。その義務感により歴史を学ぶ人間が最近多いのだとか。

だが、忌むべき記録、それも星の民によって引き起こされた回避しようも無い横暴。星の民を未だに憎む者も歴史を忘れようと躍起になっている者も当然存在する。

愛国心故か戦争を経験していない人間も星の民を盲目的に恨む程の影響がある。

全く：：こう言っちゃなんだが民度がそこまで良くないな。

何せ霧で子を捨てている自分の姿が他人から見えないという理由でトラumontまで捨てに来る親がいるのだから。

まったく：：度し難い。

最近増えている事件を載せている新聞に目を通しながら心の中でそう呟いた。

『中々に決まってるじゃないか！最近のは格好良いんだねえ…』

グルシさんが言った送りの挨拶はそれだった。

朝食を取り終わった現在、俺とスルトは数日前に士官学校から正式に送られてきた制服を着て外を歩いていた。

白のシャツとネクタイ、そして上に着る碧色のブレザー。グルシさん曰く昔は赤色のブレザーだったらしい。充分かっこいいと思うが

…。

「赤の方が良かったな…」

スルトは赤の方が良いらしい。

どうせ火属性使いにとっては色が被った方が格好いいとも思っているんだろう。いや実際そうかもしれないが。

確かに青色の鎧を着る騎士が火を使ったら違和感が凄い。そう思えば色は大事かもしれない。

…自分は微妙な色になりそうだな。

「仕方が無いだろう。【赤】は今の時代良く無いイメージを持っているらしいからな。災禍、火事、そして何より問題なのが血だ」

「そんなに厳しく止めている物なのか？イメージというのは」

「少なくともリユミエール聖騎士団はそうしてる。何より【碧】は青と白の明るいイメージを合わせた物だ。清純さと正義の光を合わせている…これ以上にならない色だろう」

まあ、憶測でしかないが。

正義という概念を大事にしている騎士団にとってはイメージを固める事は大事だ。

規律が守られている事も表さなければならぬ。

「ところで」

「…？なんだ」

「エルーンって露出狂？」

「俺がエルーンと知って言っているのなら蹴り飛ばすぞ火だるまが」

上等…粉微塵にしてくれる。

「いや実際あの背中や脇が男女共によく目に止まるというか…毒というか…」

「目の前に何も曝け出していないエルーンがいるが…?」

「いやお前は変わり者だし…」

「鏡」

「未来の騎士団長しか映らん」

「今すぐフェードラツへに行くか商人として生きろ。お前と騎士を目指したくない」

「そこまで言わなくても…。で、結局何であの様な服が多いんだ?」

確かにエルーンは脇や背中を強調する服をよく着ている。自分はヒューマンと同じ長袖服だが。

…そう言えばアイツも背中やわ、脇…太腿をよく強調していたな…。破廉恥な!

今意識してみると恥ずかしい…確かに毒だ。

「おそらくは文化的な物だろう」

「文化?」

「そうだ。エルーンは常人よりも聴力が強く、身体は軽く疾い。獣の様な身体的特徴が目立つ種族がエルーンだ」

「ふむ」

「そして森に居所を作ったり弓で狩りをするなど、原始的な風習もある。機械的な文化を好まず自然的な文化に生きるのはエルーンくらいだな。それで、動きやすさと獣の本能のような物が混ざった結果があの服ではないのか?」

「なるほど…しかし感謝するぞコーリス」

「んん?」

「謎と緊張が解けた。今なら死角から攻撃されても完封出来る程の落ち着きだ」

「…良くわからん例えだ。ま、緊張を解した後には門を開けられるのは良い事なのかもしれない」

目の前に聳え立つ建物。

それは間違いなくリユミエール聖士官学校。中央には腕を競い合う為の決闘場が配置されており、それを取り囲む校舎の風格は凄まじい物だった。

きっと、厳格な校長による有り難い言葉が飛んでくることであろう。

一言一句心に刻まなければ…

と、思っていたのだが。

「え〜にしーろーはーと…全員いますねー。はい皆さんの指導を努めますリエスですー。ま、適当に学んでってください」

軽い。

士官学校よ？お勉強の為の学校じゃない。戦いの技術を学ぶ学校。あと校長なんて居なかった。

数人の指導者が各分野に分けて指導するシステム。

今思えば確かに必要ないな。

校長がいてもやる事は『がんばってますね〜』の一言と共に訓練を除きに来るぐらいだろう。

数は28人。周りには屈強なドラフが多く、存在感が強すぎる。1歳で中年のヒューマンぐらいの筋肉あるぞあれ…と思わせて美少年のドラフもいる。この格差社会。ドラフで産まれたら幸せな人生を拝めるのだろうか。

後、集合場所の教室に入った時、こちらを見てほぼ全員が驚愕の感情を向けていた。

無論、スルトの事なのだが。気怠けな教師ですらほんの少しの時間

目を見開いていたぐらいだ。馬鹿にする視線はなく、奇抜な物を見る目だけがこの場にはある。

真顔などところを見ると、本人は気にしていないらしい。

「…ツツツツ!!」

訂正。

めつちや気にしてた。顔が赤いし涙目…手も震えている。

宛ら慣れない衣装を着て恥ずかしがる小学生だ。

この時点で数人の女子のハートをキャッチしてしまったハーヴィン。そりや美顔で小さくて涙目で震えている姿を見たら可愛いと思うだろう。

変な目立ち方をしたせいで屈辱的な気分を味わったスルト。

露出狂呼ばわりをした罰と知れ。

無様なりスルト。燃えるような恥辱を味わい給え。

こればかりは実際種族間の問題だからどうしようもないと言うのに、それを認めようもしない。

ドラフを見ろ。ゴリツゴリの筋肉を自慢げに曝け出しているでは無いか。

まず、ハーヴィンを卑下するという輩はいるが、それ以上にハーヴィンの商業力を認めている人間が多いのだ。いくら小軀だの非力だの馬鹿にされようが知ったことでは無いのだが…さっきのスルトの発言で気が変わった。

自然に生きる種族のエルーンが露出狂…?

もしこれからその先入観が広まっていったら…否、もう既にそう思われているとしたら。

屈辱的以前に種族として変態のレッテルを貼られてしまう。

思うとスルトが哀れに思えてきた。

(俺もこれから奴の気持ちを考えてみるか…)

少しだけ見る目を変えてみようかと思案していた矢先

「このエルーンだって露出狂だぞ!!」

6. 宿り霧

「まず、皆さんは魔力と言うものをどのように見えていますか。人に宿る便利な力か。戦う為に使う力か。ただの個性的な特徴か。ま、結局間違いも無く正解ありません。魔力というのは存在が解明されていない物質でしてね…使い方も様々です。日常で使ったり戦闘で使ったり武器に纏わせたりとね。なんなら剣や斧、鞭でさえも魔力で象れば作ることも出来るでしょう」

「ですが、何故傭兵や騎士達は剣を使うのか？正誤関係なく言ってみてください」

入学してすぐ次の日の今、士官学校としての授業…いや、講習と言ったほうが正しいか。ともかく、戦の心構えから学ぶ必要があるという事で、魔力と武器の使い方について学んでいる所だ。

教師は前日の気怠けりエスさん。

あと数カ月したら鉄製の武器を持たせてくれるらしい。無論、最初から武器を持って訓練なんて脳筋な指導は無い。そんな事はスパルタにしか通用しない。

そして、物心つく前から身につけている魔力。

スルトは炎。その力を行使するのに何のリスクも必要無く、歩く事と変わらない感触。それで物は燃えてしまう。無論人も都合良く例外になる訳がなく、炎の影響を受ける。

何にでも干渉する力、そのような便利な物を何故全力で活かさないのか？

と言うものを聞かれている。

補足として説明すると、人に器用不器用があるように、魔力にも才能がある。

魔力の量が一般人少ない者や、魔法の行使が覚束ない者。また、魔法属性が異質な者。

な…

「はっ」

「コーリスさん」

「才能に左右される面が多く、剣や銃を主戦法とし、魔力は武器に纏わせ威力を増長させる形にした方が効率が良いからです」

「…なる程。模範的で理想的な解答です」

自分の答えは間違っではないらしい。

(露出狂のレットルを挽回出来そうだな…)

何においてもスルトより最適解を繰り出す事で優位に立ち、有能と思わせる事で印象を180度変える…!

今日の俺のIQは200と思え…!!!

「ですが」

あ、違うパターンですね。

悲しいなあ…。

そしてスルト、笑ったな? 潰す。

「それだけで理由付けするには少ないですね。単純な事です。現代において戦う職業を選択する人間は少ない。尚かつ魔力が少なく、相당한努力をしてまで傭兵などになる人間は余りいないでしょう。才能というのは人の未来を決定付ける。希望を見失わず夢を追い続けることは難しい事です」

良く考えれば分かることだった…反省点だ。

…しかし。

この教師、最初は気怠げな見た目相応に余り喋らないタイプかと思っただが、淡々と言葉を述べるだけで正しい事しか喋っていない。

指導者としては当たり前なのかもしれないが、頭にスツと入り込める。このような授業はモチベーションが上がる。そう、周りも。

だが、皆思っていた事は同じなのか挙手する人間が少なくなっていた。

「はいー!」

「スルトさん」

ただ一人は、^{解答}違う考えを持っているらしい。自分にもう心当たりは無く、奴の解答を待つしかない。

ハーヴィンとして注目された存在は独立した答えによってさらに格好の的となる。

三種族の視線が矢となって小さな肉体に突き刺さるが、スルトは動じなかった。

それだけ、確実にいて自信があるのだろう。

(気になる)

奴は馬鹿だ。

それは周知の事実。だが、馬鹿は時にその場の最適解を導き出す。深読みしすぎて近くの物が見えないと逆で、馬鹿には近くの物しか見えないのだ。

きつと、俺達の思考を超えた答えを導き出してくれる筈だ。

信頼の裏返しというやつだ。

さあ、言ってみろ。

「魔力に耐えきれないからです。俺みたいな天才型では特に!!」

きつとそれは、間違いでは無いのだろう。

奇怪な目を向けたクラスメイトへの意趣返しだったのかも知れない。

だが、

そもそも魔力が全ての世界ではないだろう。あくまでも便利な力と言うだけだ。結局鍛え抜かれた力と技術だろうに。

魔法使いでもやりたいのか？お前は。

キラキラした目で天才アピールするな。

「…まあ、剣も腕も炎の影響は受けますね。出力を間違えれば何もかも灰と化すでしょう。ですが、やはり技術で補える。武器を使う理由は、肉体による直接攻撃が一番効率が良いということですよ」

結局、努力が物を言うということだ。

そして…

先生は何故スルトの属性を知っている？

入学して訓練もまともに受けていない俺達の属性を知る術は無い。

何もかも気になって仕方が無い。

「――先生は何故馬鹿の魔力を知っているのですか？」

「馬鹿は辞めなさいコーリス君。スルト君の事ですか…」

「何気に馬鹿で俺に絞られるの酷くないですか!？」

「あ、すいません…。で、何故知っているのかでしたね」

「はい」

「なに、このような職業に就いたら人の魔力の訓練に立ち会う事が多いですからね。人の魔力の種類も感じられる訳ですよ。特別何かが優れているわけでもなく、誰でも時間を掛ければこの感覚は習得できます。例えばそのシリクさんは風。ドレイルさんは土、ですかね」

例として先生は近くの席の人の魔力を言い当てた。

本人達は「合ってる…」と、反応を示したため間違いは無いだろう。

この技術があつたからこそ、魔物との戦いで命を落とす者が少ないのだろう。属性による対策が幾らでも練れる。

思案に浸っていると、先生がこちらを見据えて口を開く。

「…ただ。君だけです」

「…?」

「君だけですコーリスさん。君の魔力だけは霧もやがかかっているかのようには解らない」

「そう、ですか…」

そうか。

やはり俺は解異質らない、か。

例え話だが、周囲が見えない程の暗闇に覆われている森に入って、

普通の人間は正しい方向に足を進められるだろうか？

答えは——否。

ひたすらに真っ直ぐな道を進むなら子供でも可能だが、如何せん森は真っ直ぐな道が存在するほど整ってはいない。加えて風向きなども変わり、土地勘と言うものは欠片も無意味な物となるのだ。

では、具体的な話に入ろう。

もし、幼児が霧立ち込める森に迷い込んだらどうなってしまうのか？

勿論、帰れなくなるだろう。

偶然歩いていたら家に着いていたという幸運話はあるが、自分から動いて望む到着地点にたどり着く事は不可能に近い。

大人の搜索を待ちながら泣き喚くのが関の山。

だが、霧立ち込める小島に偶然捨てられていた子供。

名をコーリス、と名付けられた。

その者だけは何かが違った。

「今日は霧が濃いな…」

霧の島、今日のトラモントは少し危険だ。

余りにも濃い霧によって遮られる視界。迷った魔物が町に入ってくる可能性も否めない。

眼鏡をかけ、頼りな下げな雰囲気を出しながらも優しそうな男は村外れの森から聞こえた子供の泣き声を頼りに歩く。

事の発端は霧だ。

突然濃い霧が湧き出したので、娘達を森へ行かせないよう家に入れた矢先、自分は人間の泣き声を聞いた。

エルーンの優れた聴力は例え深い森の中にある音すらも見逃さない。

村から外れた山の方に家を建てているので、森の環境にも慣れてい
る。

——大丈夫、何の問題も無い。

自分は耳が良い。森の地形は理解している。もしもの為に斧と弓
も携帯している。死ぬことは無い。

そう自分に言い聞かせながら男は歩く。

もうかなり深い場所まで来た。

子供の泣き声も目の前に等しい。

自分の耳に従い、数歩歩いた結果鳴き声までたどり着いた。

そして、目の前に居たのは傷一つない幼児。

獣のように生えている耳からしてエルーンなのだが、この村には他
の島から来た自分達以外にエルーンは存在しないと、

と、なる。

——捨て子、か。

事情を察するのに時間は不要だった。

簡単な話だ。大きな街に捨てれば直ぐに保護され、親元を特定され
るか預けられるか。

だが、トラモントは霧が立ち込めている為、捨てている姿を見られ
ずに済む。加えてこの3歳程の幼児は精神が未発達な為に親の顔を
忘れるかもしれない。

酷い話だと思うが、筋は通る。

そこまで我が子が疎ましかったのか、邪魔だったのかは本人にしか
分からない事だ。

男は戦士でも英雄でもないが、無垢な命を侮辱する行為には怒りを
覚えた。

「ひっ……ぐ……す」

その熱は子供の嗚咽で冷まされた。

先ずは保護が優先。

「どうしたんだ？こんな所に一人で……」

「母さんとはぐれちゃって……手までつないでたのに……！」

——可哀想に。

人が来たからか少し落ち着いたように見える幼子は、捨てられた事に気付く筈も無い。ただ逸れたと思ひ込むのみだ。

「じゃあ、お父さんは？」

「きようはおしごと…。木を売りにいったの」

「そうか…。取り敢えず、ここは危ないから安全な屋敷に行こうか！」
母の独断かはどうでも良い。この危険な状況から脱する事を優先した結果——ミスに気付いた。

ここに来るまでは幼子の声を頼りにした。だが帰りはどうだ？手がかりが全くない。

来るまでの道に印を付けておくべきだったのかも知れない。冷静さを失いすぎた。

「…ねえ、おじさん大丈夫？」

突然の質問。

子供の不安を煽らないためにも平然を装おうとするが、冷や汗は止まらない。

「大丈夫、大丈夫。直ぐに温かい場所に連れて行ってあげるからね」

「ねえ？」

「なんだい？」

「おじさんの家の形はどんな形？」

問題ない。

これは精神の安寧を保つ質問。答えてあげるだけで安心するならば幾らでも応えてあげよう。

「そうだね…少し大きめで、尖ってて、ぽつんと建っている家かな」

「ひとりぼっち…」

「そう。独りぼっちや」

子供は少し考える素振りをして目を閉じる。

疲れて寝てしまったのか。

なら、気持ちの良い目覚めにして上げなければならぬ。

霧で途切れた視界を記憶でカバーし、魔物の匂いを感じたら即座に身を隠す。

そう思い来た道を引き返す。

眠っているだろう幼子を背負いながら朧気な記憶を蒸し返す。

「…?」

何故だ。先程通った道を思い出せない。

それこそ、頭の中が霧がかつたかのよう。

忘れたなどという下らない理由では無く、森に入ってから道のりの記憶が綺麗に消え失せている。

無論、今やるべきことは分かっている。

だが、違和感を覚えるほどに記憶が――

「ねえ」

こちらの焦りを諸共せず、悠然とした態度で急に問いかける。起きていたのか。

「どうしたんだい? お腹が空いたのか?」

「ちがう」

「おじさんの背中じゃ眠りづらいと思うけど辛抱だよ。絶対に家に届けるからね」

脳機能を全回転させ、風向きや足元などで帰り道を探る。

歩くなら正しく。間違つたなら滑らかに。

幼子を不安にさせないよう歩き方に気を付ける。本当はこんな気遣いが出来るほど余裕のある状況では無いのだが、子供を泣かせ、魔物と呼ぶよりはマシだと考える。

「ねえ――あっちだよ」

「――は?」

「おじさんの家、尖っておおきい。ひとりぼっちにぼつんとたつてるんでしょ? あっちに坂があるから…」

混乱していた。

だがこの幼子は至って真面目に、そして冷静にこの場の状況を支配したのだ。

「そこは水に濡れてすべりそうだよ。きをつけてね」

「そこに木があるからえだに刺さらないようにしてね」

「あのお犬さんものはぐれちやつたみたい：おびえてる」

「もうちよつと右に行つて：この坂の上にあるお家でしょ？」

「うん：：こも右」

信じられない物を感じた。

視界が白に巻かれる中、見えない筈なのにこの幼児は口を開けば周りの環境の形を理解している。

地面の草木が雨により濡れていたら滑らないようにと注意。

大木が倒れているならば、枝に刺さらないようにと注意。

正しい方角の指定。

見ず知らずの今日知り合ったばかりの人間の家の場所を特定。

この子に第六感が働いていると言われても頷いてしまふ程の察知能力。

従えば、自分の家の下の坂まで着いたではないか。

一昔前、一目を見ただけでその場の景色を脳内に記録し、様々な角度での視覚を脳内で再現できる天才がいた。その天才はその類まれなる記憶力と変換力により、一度見た場所で迷う事は無かつたようだ。

だが、この幼子は違う。

見てすらもないのだ。度々目を瞑つて景色を特定する事がある為、何らかの術があるのだろうか、そんな物を子供が使いこなしているのは疑い深い。

魔力か？ 空気か？ 匂いか？ 風向きか？

視覚に頼らず場所を知る方法はいくつかあるが、どれも根強い経験が必要な訳で、今日初めてこの島に来た幼子を取る行動ではない。

では：何をした？

思考を鈍らせないように平然を保つ。

今は魔物が襲って来ないよう警戒をする事と分かっている筈なのに、霧がかつた記憶と不理解が思考の余裕を無に返す。
今分かることは唯一^{ただひとつ}。

この子が——異質だつて事だ。

7. 特別ななんて

——ねえ…あの子。ええ。あの銀髪の子。捨て子らしくてね。村長に拾われてこの村で育ってるんだけど…。

——笑顔を見せるようになったのよ!!最初は感情も何も抜け落ちたような顔をしていたのだけれど杞憂だったわ!村のみんなとも仲良くしてるし!

——ああ、ごめんなさい…つい興奮してしまつて。何でも最近じゃ騎士に憧れて身体を鍛えているらしいの。立派よねえ。年寄りの手伝いも毎日やってるわ。私の子供の世話までしてくれるし…

——でも、なんでかしらね。

——霧が出ると決まつてあの子は…

——どこか、おかしい方向を見ているの。

【とある主婦による情報】

何も無かつた。

特別な物は何も無かつた。親に与えられていた筈の日常は霞隠れに透過し、今は『コーリス』と記憶に遺された名を名乗っている。

父は木材などを売り、母は家事に勤しむ。

何の変哲のない只の家庭。それが滞りなく毎日を過ごさせているのなら、それは幸せと言うのだろう。

だが、母は俺を捨てた。

何故かは未だに分からない。そもそも両親との生活すら朧気だ。

捨てられた日で憶えているのは、父は木を売りに出かけていたのと、気が付いたら母とはぐれ、霧が見えていた事。

濃い霧だったと思う。

そんなことより母とはぐれた事が問題だったのだろう。

大声は上げなかったが、つい泣いてしまった。3歳の頃の話なのでから許してほしい。

「どうしたんだ？こんな所に一人で…」

聞こえてきた声は野太かった。

エルーン特有の長い耳、斧を手に持った頼りなさげな男性だった。

○○○の父さんだから少し髪が青かったな。

救世主のようだった。母を見つけてくれと懇願した。

彼は霧で周りが見えない中、自分を不安にさせまいと母を見つけたと優しい虚偽を述べた。

今思うと、彼は既に俺が捨て子だと気付いていたのだろう。

彼は俺を家で保護すると言ったので、好奇心と不安からかどんな家か聞いた。

尖り、大きく、孤立するように建っている。

その情報を教えてもらった後に、彼が俺を背負い向かったのは家とは真逆の崖。

——そっちは危ない。こっちが坂なのに…

当時の俺はこう思っていた。

この状況下でこの思考は気狂いか思い込みか疑われる所だが、事実、俺は初めて来た土地の地形を完全に理解していた。

その感覚は他人には持ち得ないだろう事を知ったのは五年ほど後の事だった。

何故？分かるものか。

人が熱を感じるように。

人が眩しさを感じるように。

人が痛みを感じると同様に、俺は霧を感じる事が出来ただけだ。

人が何処にいるのか分かる。

何処にどんな形の自然物があるのかが、目で見るより鮮明に感じる。

生物の呼吸が分かる。

だから、助けてくれた彼の焦りにも勘付いていた。

不可解、そして異質。

それは当時問わず俺を表すに適した言葉だと自解する。

生まれた時から持ち得た第六感^{バグ}。

人の視界が閉ざされる灰の世界が、自分には何もかも目の前に収められる魔法の世界に思えて仕方が無かったのだ。

視界は閉ざされても。

鼻が機能しなくなっても。

霧があれば全てが分かるのだ。無論、霧が出ている範囲であればだが。

トラモントは霧の島。毎日過ごす中で、一個人の挙動が鮮明に流れ込んでくる事は珍しくない。

だが、視界は閉じれば暗く、鼻はつまめば意味がない。

それらの感覚に従い、霧の感知を塞ぐ事も可能なのだ。

と、思っていた時期はあったり。

我ながら間抜けな物だ。

触覚を閉じる方法が何処にある？

霧を消して意味を無くすか？根本的な解決になっていない。

彼が家に着いた時には、彼の家族が俺の保護をしてくれた。温かい食事を用意してくれたし、彼が身体を洗ってくれた。

その時に知り合ったのが〇〇〇とフィラ。と言っても会話なんて交わさなかった。

でも、母の姿は見つからなかった。

そのことに気付いたのは後日。疲労により気にする間もなく寝ていた為、朝になってようやく思い出したのだ。

そして、俺は森の下へ連れられヒューマンが住む小村に預けられた。

「君が……わざ……村に降り……ると……の子は!？」

「捨……す村長。申し訳ありませんが彼の生き方…私…にはい
かない。エ……ンで…が…」

「…よい。ワシらは種族で…するような愚か者で…い。与え…れ
るのは両親…生活だが、責…を…って預かろう」

「感謝します」

「ところで…あの霧の中で良くも生きて帰れたな。鼻が利くという問
題ではあるまい？」

「いえ、その点も含めて話があります」

唐突に送り出された村に混乱していた為か、その時の会話を思い出
す事は出来ない。

途中からの会話は聞こえていた。自分を受け入れる事に好意的な
村長と、申し訳なさそうにしている○○○の父。

そして、その両者の間に下らない言葉を。

「ねえ、母さんはどこ？」

その時の両者の顔は苦にして無情。

片や気まずそうに下を向き、片や同情の視線と一人への怒り。

子供であった俺は、母を保護したという言葉を純粹に信じ続けてい
た。

「何故…下らぬ言い訳など使った!!その場で事実を語らなくても良
い、だが夢物語など語るのは愚の骨頂と知っているだろうに!!」

「…申し訳ありません」

それはどちらへの謝罪だったのかは本人にしか分からない。恐ら
くは両者か。

「もういいーワシから説明しておく」

「…本当に済まない。君には申し訳無い事をした」

これは俺に謝罪していると分かった。

それからはもう……

忘れたかった。

「今から言う事は君に辛い話になるだろう。だが、言わねば君のこれからの疑問に背を向ける事になるだろうし、君が生き難くなるのも必然だ」

「…どういうこと？」

「む…つまりだな」

村長は厳格な老人だ。

故に使う言葉を理解するのは子供には難しい。

「――君は捨てられた」

「…え？」

残酷な言葉。

これを言うのにどれだけの勇気が必要か計り知れない。この言葉により俺は壊され、救われた。

「すてるって、ゴミのことでしょ？ いららないから」

「ああ、そうさ。ゴミは不要物だから捨てる」

「じ、じゃあ僕はいらないからすてられたの？」

「悪いが、それは君の母にしか分からない事だ」

捨てる。

その後味の悪い言葉により、涙すら出ず。

湧くのは空虚感のみ。

「どうして嘘をつくの？ あのおじさんはたすけたって…」

「君が傷付くのを避けた為だよ」

普通なら、『嘘つき』や『意地悪』と罵りたくなる気分だが、不思議と心の穴にすんなりと言葉が入った。受け入れられた訳ではないが。きつと、あの時だ。

母の手から自分の手が抜けた時、母らしき形が村の方へ駆け抜けていったのを感じていたから。

思いもしなかっただけで、知っていたのだ。

母が俺を捨て、一刻も早く島から抜け出そうとした事など。

「…泣いても構わないが？」

「泣くのは喜ぶ時だけだって、母さんが」

「大人びているな。その年で辛いだろうに」

「エルーンは常にりんとしてた方がカッコイイって、父さんが」

「…何故だ」

「……？」

「何故自分の境遇を気にしない？自分がこれからどうなるか不安じゃないのか？」

「うん。だって今、受け入れた解つたんだもん」

「そうだ。」

母が俺を捨てたのは要らなかつたから。

父が仕事をしているのは生活の為だから。

おじさんが俺を助けてくれたのも善意があつたから。

おじいさんが僕を見てくれるのも同情と責任があるから。

結局、流されるしかないんだ。

今まで幸福の嵐に飲まれていたのが、普通の嵐に変わっただけ。

「…強がるな。そんな顔は子供には似合わん」

「でも」

「でも、ではない。子供というのはだな…感情の赴くままに泣いたり起こつたりして、反省を覚え、常日頃学び、成長していくものだ。それが人間という生き方だ。ヒューマンもドラフもハーヴェインも。そしてエルーンもだ」

「おじいちゃんの言ってる事、よく分からない…」

「そういう風に困っておれば良いのだ。何でも受け入れるなんて生き方は人の形ではない」

「…！」

目の前が輝く。

昔の俺は言葉を理解せずとも、自らの存在を容認されている事に気付いたのだ。

ごみとして捨てられた俺に。

霧がかった存在の自分に。

この老人は生きる目的を与えてくれた。

「そう言えば…お前の名前を聞いていなかったな」

「コーリス」

「ふむ。名字はあるか？」

「必要なの？」

「ふむう…。強いて言えば必要ないが、お前自身の存在を認知するのに効果的だろう。自己の確立は大事だ」

「…でも僕の家にはないよ」

「なら僕の名字を授けようか？」

「え」

「ふ、不満か!？」

「それって？養子になるって事でしょ？いいの？」

「構わんよ、僕には息子がいない。老後の寂しさにはちと辛くてな。なに、心配するな。暮らしに支障は無い」

「ありがとう…」

「構わんと言っているだろう。さて、僕の名字だが…」

その名字は彼が生涯胸に抱える誇りであり、彼を証明する独立^{アイデンティティ}性。

「オーロリアという。端的に言えば…極光か」

「コーリス・オーロリア…!!」

「どうだ？」

「かつこいい!!」

「そうかそうか名字の感動より語呂を喜ぶのか…。意外に面白い性格してるなあコーリスよ」

時として一瞬の会話だったが、子供である彼を変えるのには十分過ぎる時間だ。

もし、彼があと三年も生きていたら戻すことは不可能だったかもしれない。

彼が人生に光を見出すきっかけになったのは、一人のエルーンと、一人のヒューマンの献身あつての事だったのだ。

「コーリスです」

「入ってください。さて、貴方を呼んだ理由について説明しましょうかね」

——君だけは霧が掛かったかのように分からない。

あの発言の後に追求は無かった。

だが、注目を浴びたという点では大きな影響はあつた。

訝しげな視線では無く、何か逸脱した物を見る目。

逸脱と言つても語弊があるかもしれない。実際にコーリスの魔法を目にしたわけでも無いので、先生の発言から違和感を覚えての注視だろう。

少なくとも、嫌悪感は見受けられなかった。それは安心に値する。

「まあ氣を楽にして下さい。私個人としての興味です。単純に貴方がどんな力を持つのか知りたいだけです」

確かに生徒がどんな力を持つのかは知っておく必要があるだろう。単に珍しい魔力、魔力量が桁違いな者。危険性が高いものなど見極めなければならぬ。

そういった中で、見極められない力があるのは危険と言える。

「あ、言った通り興味本位六割ですので悪しからず。何も異常だからといって手放したりしませんよ」

「了解です。ですが、俺の力は出すより説明した方が効率的なんです」

「ほう…何故？」

「人間に効果的でない範囲で使えば問題ないのですが、この力は生物に対し極めて有効なんです」

「では、詳細を聞きましょうか」

顎に指を置き、観察するようにこちらを見る。
少し忌避感を覚えながらも、偽りのない言葉で述べようと思う。

「まず、俺の魔力は霧です」

「霧、ですか」

「はい。このように身体から霧を放出出来ます。原理は火や水と同じく魔力によるものでしょう」

そう言つて手から薄い霧を出してみる。

霧が先生に触れないように辺りに充満すると、何時ものように鮮明に浮かび上がる物がある。

周りに置いてある器具から地面の埃までもが一つ一つ解る。

ただ、余りの情報量にまだ慣れていないため、目を瞑り視界をシャツトアウト。

どうもこの感覚は頭に直接来るため、精神的疲労または頭痛が起きる可能性がある。

ただ、目を開けている時より周りが鮮明に視えるので、プラマイゼロと言つても良いだろう。

だが、視覚と霧の同時感覚に慣れなければならない日も来るかもしれない。

その時はどうするか。

否、どうにか出来るように鍛えなければならない。

ひたすらこの力を行使することが修行となるのか。それはこの学校で鍛えられて初めて分かる事だ。

「そしてこの霧の中に1ミリでも踏み入ると、俺は対象を知覚します。肉眼で見るよりも、耳で音を聞くよりも、触るよりも。どんな五感よりも鮮明に感知する事が出来ます」

「続けて下さい」

「この霧には現在四段階のレベルがあります。これが一段階。薄い霧ですが感知するにはこのレベルで効力が上限まで達しています」

「便利です…次」

ペンを走らせ問いかける。

メモとして形に残すことにしたらしい。珍しい魔力の情報は後世に残す事が最善と考えたのだろうか。

「第二段階はこれより濃くなる霧です。この段階では人に影響を及ぼすようになりません」

「害か？良い効力か？」

「害の方です。この霧に触れるとまあ、何とこのうのでしょうか？ぼうつとすると…」

「ああ、呆然自失の状態になると？」

「そうです。苦しむとか特に無く、只もやつとするらしいです。自分に影響はありません…」

第二段階。

これはトラumontで偶然発覚した力。魔力を皆で出し合ってた時年上の子供に影響を与えてしまったようで、意識が軽く空に行ってた子が火を出しすぎて軽い火事になった。

霧と言えばコーリスと、認知されていた頃なのでめちやくちや怒られた。

「そして、三段階目は記憶に靄を掛ける。霧に入ってから記憶を軽く飛ばします。記憶喪失にはなりません」

「…ちよつと怖いですね。四つ目…」

これらは霧だけの影響。

霧を解けば何も問題は無い。

でも駄目だ。四つ目は。
それだけは駄目。未知なんだ。
使えない訳じゃない。使ったら死ぬわけでもない。
使っていい保証がないんだ。
これを人に向けたら。

母さんが。
皆が。

俺を――

でも、使ってしまった



彼を墮落させてはいけない。

8. 騒なる旅路、静なる帰路：①

——コーリス？ああ、良い奴だと思うよ。あそこまで真面目な奴はそうそう見ないかな。でも少し辛辣というか…言葉を選んで欲しいと思う場面もあるな。

——いやなに、別にそれで喧嘩が起こるわけでも無いんだが…寧ろそれがあいつの特徴なのかな。あと、スルトと仲がいい。

——スルトはどうかって？アイツはただの馬鹿だ。ただ凄く強いのがムカツクとこだな。ま、アイツも良いやつではあるよ。コーリスと一緒にだとコントも見られて面白い。

——…コーリスとスルト、どっちが強いかだって？随分難しい事聞くんだな。

——俺が思うに、スルトの方が強い。

——俺だって士官学校在学生だしな、戦闘の分析ぐらい出来る。それでもやっとな最近分かったことがあるんだ。

——コーリスがスルトと模擬戦をやる時。戦いづらそうにしていろのを俺達はずっとスルトの戦い方のせいだと思ってたんだ。もう皆と過ごして1年は経つからな。コーリスの霧の力もスルトの炎の強さも知ってる。その上スルトは素早いわ小さいわで攻撃が当てづらい。霧だって炎で撒けるからな。

——でも、それだけじゃない。コーリスが戦いづらそうにしてるのは…
は…

——魔力を調節してるみたいだったよ。手加減してる訳でも無さ

そうだった。違う事を念頭に置きながら戦ってるみたいでさ。

——まあ、さっきのは憶測だからコーリスに聞かないと分からないと思うよ。

【某士官学校の生徒より】

「——三步交わして二者択一。東か西か、せんらいいつけつ 先来一決後悔なかれ」

「と、ポエムをいきなり吐くお前だが。詩人に目覚めたか？」

「父さん 義父が良く言ってたんだ」

道を歩く二人組。

成長期故に色々伸びたコーリスと、成長期だが1cmハーヴィン的には伸びた方しか伸びなかったスルト。

寮へ帰宅する姿は珍しくない。というか毎日見られているぐらいに自然に溶け込んだ物になっている。

それもその筈、彼等がリュミエールに来て約一年が経ったからだ。彼等が一年間学んだ事は決して軽い物では無かった。

戦術の有効さを知り。

武器の重みを知り。

魔術の深みを知り。

学の清らかさを知った。

そんな彼等だが、現環境は夏の休日。

と、言っても士官学校だ。

一般で言われる、夏休み等とは違う。せいぜい一週間の休みが限度なのだ。

その間に騎士候補生達は全力で休む。ただ、外部の島から来たコーリスとスルトは里帰りの時期であり、三日ほど故郷で過ごすチャンス

となった。

今は昼食帰りの二人。

何でも最近屋台で話題を集めているラーメン。

その流行りに彼らも乗ってみたただけだ。加えて騎士として鍛えられる日々にはラーメンのような物を食べ過ぎると栄養的にま
ずい。

無論、食事制限のような物は設けていない士官学校だが、騎士を本
気で目指す彼等はストイックだ。プライドも合わさって妥協を許さ
ない。

だから、妥協を許される休日の初日に二人で食べに行ったという訳
だ。

コーリスは味噌ラーメンを頼み、スルトは小サイズの塩ラーメンを
頼んでいた。

夏にラーメンというのも可笑しな話かもしれないが、鍛錬を続けて
いたある一人の生徒がこう言った。

『夏にラーメン食って汗流しまくれば代謝良くなって身体機能上がる
んじゃない?』

コーリスでもスルトでも無い、一年経った今なら友達と言える間柄
のクラスメイトがそう言った時。

皆の目が変わった。無論、身体機能が上がるなど身も蓋も無い話だ
が、修行の苦しみに明け暮れ、強さに飢えていた者共は簡単に信じた。
彼等は12歳だ。欲には従う。心では違うと目を反らし続けてい
たが、依存性があると噂されていた程のラーメンを食べたくて仕方が
なかった。

回りくどい言い方をしたが、要するにラーメンを後腐れなく食べる
理由が欲しかったただけだ。

そして、リュミエール士官学校にラーメンというプチブームが舞い
降りた。

屋台の店長曰く、『暑い時にラーメンを食う物好きは居るが、学生。
それもまたクラス単位で来るのは流石に遺憾である』らしい。

そして先程から言われている鍛錬。

それが何処まで厳しいと言うとそうでも無い。
教師は合理的な指導をする。

経験の深さから魔術の属性のアドバイスを的確にこなし、武器の熟練度を見抜き至らぬ点を指摘。単純な肉体能力の低さは個人への筋トレメニューで解決。

頭腦的な面を教える場合は基本過去の戦争や偉人達の戦いの記録から引つ張り出す。

スムーズな教育は生徒達に意欲を与え、極め付きにそれぞれが扱う武器の私物化を許可した。

刃物などを与える行為なので、如何に生徒への信用が高いかが伺える。

意欲を道具でブーストされた彼等は OVER DRIVE 興奮状態になり、狂うように鍛えた。

結果、リユミエールの生徒は脳筋になった。
身も、心も。

丸々とした姿のハーヴィンであるスルトの軽やかな肉体にすら鍛え上げられた筋肉が隆々と浮かび上がる程だ。コーリスもドラフ程では無いが非常に細マツチヨ。

脂肪などかなぐり捨てた姿になってしまった。

これはリユミエールに来る前から鍛えていた名残であるが。

言っておくと、コーリスのクラスは皆こんな感じだ。

一人に付き一般的な犯罪者を完封できる程の実力は備えている。

コーリスのクラスだけが特別かは分からない。

この士官学校は先輩や後輩などとの交流は無い。他のクラスの事情を知る機会が全く無いからだ。

「で、ポエムの意味は?」

「俺にも良くわからん」

「ああ?じゃあ何故口ずさむんだ?痛いぞ」

「うるさい、大体のニュアンスは理解している。只意味を聞く以前に当時の俺は幼児だった。対して意味も分からず意味を聞く前に亡く

なってしまったよ」

「…そうか。じゃあお前が思っている意味を教えてください」

「恐らくは…『人は個人個人色々な道を進むが、どれも選択肢は一つだけだから、どれを選ぼうとも後悔はするな』、という意味だと思う」

「なんだ、思ったより道徳的だな。まあカッコいいから使うか」

「いやお前が使うのかよ」

「強者オーラが出てよし」

「なお、身ちよ「黙れ」」

「別に何も「止めろ」…アツハイ」

見た目に言及されると怒りに身を染めるのも変わっていない。

寧ろ、キレが掛かっていると見ていいだろう。

「貴様に分かるか!?真面目に勉学に励んでも、模擬決闘で相手を打ち負かしても!男女問わず出てくる感想は『かわいい』だ!!」

「愛されているって事だろ」

「舐められているんだよ!!大体お前は人に頼られすぎだ!何だ!俺も霧を出せば信用されるのか!」

「そうやって一々身長とか気にしてるから可愛がられるんだろ。可愛いという概念がお前への信用だ。では、出航の用意をさせてもらうので先に寮へ戻っているぞ」

「ま、待て!話はまだ終わっていない!!」

「ははっ!!里帰りして両親に誇るが良い!身長が一センチ伸びましたってなあ!」

「貴様アアアアアアア!!!」

元より、コーリスは人を煽り倒す人間では無い。

ノリで皆がなじる相手に対し便乗する訳でも無い。ただ、単純に思うのだ。

『スルトだから良いか』…と。

「ふう…」

馬鹿の相手をするのも疲れるという物だ。

クラスメイトからは『お前も含めて馬鹿と言っている』なんて愚語を吐かれるが、全く持つて間違いだ。

スルトより頭良いぞ、俺。

なんて思いながら二時間の間昨日里帰りの為に纏めた荷物を確認し、トラモントへ旅立つ空挺に乗り込んだ。

やはり晴天の中乗る空挺は至極の心地。

里帰りと言ったが、俺の場合それは少し違う。

一度村長である義父に預けられた身だが、義父は俺が8歳になる頃に病気で死んでしまった。

結果、義父の親戚であるレルフ一家に養われる事になった。

当然第二の親を失って悲しかったが、くどくど毎日を過ごしてはあの日に助けてもらった礼にならない。

そしてレルフ一家は俺をリュミエールに送り出すのに悩みに悩んだ。俺がトラモントから出発した時には号泣していたそうだ。

もし、俺がトラモントからリュミエールへ向かう光景を見せたら哀しい思いをさせるかもしれない。

だから、半端に過ぎすよりは顔を見せる程度にしておこうと思う。何より、俺はもう一つの家に行かなければならない。

「元氣してるかな？おじさん…」

おじさん。

叔父ではない。俺を見つけてくれたエルーンの大人。

〇〇〇とフィラの父。今日はその一家にお邪魔させてもらう事に

なっている。

特に○○○とは手紙を送り合っていたので、家の事情は把握済み。歓迎してくれるそうだ。

ちなみにフィラは病気を直すために既に近隣の島に旅立っており、彼女とも手紙での交流をしている。

だが、フィラはお互い元気な姿で会いたいそうなので、病気が治ってから会う事にするらしい。

「はあ…」

しかし、度し難い。

レルフ一家への訪問の問題を手紙で○○○に相談したとしても、思っていた返答が来なかったのだ。

『どの様に面会したら良いんだろう?』という質問に対し、帰ってきた手紙にはこう書いてあった。

『何も無理してレルフさん達と一緒に過ごす必要は無いんじゃないか? コーリスだってまた親元を離れるのは辛いだろう? 騎士になることを約束して送ってもらったんだからもう少し立派な姿になって戻って来た方が私は良いと思うな。お互いそれなりの覚悟を決めて来たんだろ。もし、トラモントが恋しいなら私の家に泊まれば良い。何、お父さん達も喜ぶさ』

と、帰ってきたのだ。

またトラモントの森で静かな日常を過ごしたいという思いも無くはないし、何よりおじさんにも会っておきたい。お婆さんの美味しいご飯も味わいたい。

極限まで自分の欲望と戦いながら選んだのは…

『ありがとう。お願いする』

欲望に負けた己の姿だった。

だが、アイツが積極的に誘ってくるのは珍しい事で、自分でもそんな態勢に憶えはない。

とはいえ浮かれているのは俺も同じなので、早くトラモントに着いて欲しいと思う。

早くあの薄い霧が立ち込める島に行きたいのだ。

常人には分かんと思うが、薄い霧の中から見える晴天の空は美しい。

霧の島なんて呼ばれているが、大抵の日は薄い霧が立ち込めているだけだ。

更には夕方に真っ赤な景色も楽しめる。

ん？それは他の島でも変わらん？

…それはそう。うん。

・・・

騎空艇から降りて見えたのは森。

その奥に見えるのは霧に囲まれた小村。だが、今日行くべき場所はそこでは無いので、向かうのは明日以降とする。

変に姿を見せる必要は無いので、霧を出しつつ村外れの森から入っていく。

こうすれば、人を避けつつ更に魔物の感知も行える。

もう視覚との共有も訓練により慣れたような物だ。それでも広範囲に及ぶ感覚には目眩を起こすが、半径200メートル程なら問題は無い。

将来的には島一つ分の範囲まで伸ばしたいが、先生にドン引きされたので辞めようと思う。

妥協して、今の目標は街一つ分だ。

時間があれば距離を伸ばす訓練を続行したい物だ。

「…」

無言で山までの道のりを歩くが、霧の中に四足歩行の生物が侵入した事を感じ。

中型の狼か…？

こちらに迷うことなく近付いてくる事から、匂いでこちらを嗅ぎ付けている事は分かった。

「……」

更に近づく。

もう50メートル県内に姿を表している。もう自分の姿は薄っすら確認されている。

脚が収縮している…恐らく飛びかかる気か。

敵意を確認した所で念の為持ってきた長剣を鞘から抜き腰に構える。そして、目を瞑り足で地面を鳴らす。

これは一種のルーティーンのような物で、戦闘前にこのように決まった動作を行う事で心身を研ぎ澄まし、余分な考えを心の剣で斬り裂く動作。

20メートルもの近さに達した時、既に生物の特定は完了している。

それはウルフリーダー。凶暴な野獣であるランドウルフで最も力を持つものが呼ばれる名前。

一際大きく、爪をまともに受ければ人の傷は内蔵まで達する力。ランドウルフが強くなる方法は正に弱肉強食と言った風情で、例えば人は食わずとも生態系を乱した結果そうなると言える。

騎空士の依頼でも数多くの討伐が依頼されている事からも危険性が伺える。

そんな相手への温情は一寸たりとも存在しない。

ただ、斬る。

あと飯に持って帰る。

「」

自分の意思すら意に止めず、剣を持った右腕と地を踏みしめる左足に精神を上乗せする。

相手が唾液を垂らしながら万全の筋力でこちらに飛びかかる。

「ガアアアア!!」

敵意と殺意を乗せた雄叫びを上げながら。
だが、

「ガアアアアア——」。

相手の喉笛を引き裂く。

それを行おうとした時には既に——

「……………?……………」

大狼は喉笛を切り裂かれ絶命した。

自分の暴力の顕現——雄叫びを最後まで上げる事も出来ずに。

自分が失敗した事だけを察知して獣は事切れていった。

「……………ふう」

深めの息。それは溜息ではなく安堵の息。

簡単な決着だったとしても今のは純粹な死合。その場に絶対の安
全は無い。

今、俺が使った動作は死角返し。

獣にしろ人間にしろ、人の及ばない位置の死角を取るのは有効な手
段。

だが、角度に関係なく解っている俺なら死角を取ろうとしている相
手の死角を取れる。

原理としては簡単で、死角を取ろうとしている人間はそれに全力を
注ぐ為一瞬だけとは言え一直線の動きになる。その直線の呼吸を乱
し、例え小指で小突いても主導権を握る事が出来る。

但しこの動きが出来るのは、恐ろしく耳が良い…又は俺のように感
知系の魔法を使えるか。

こう思うと我ながら便利な魔法だなと思う。

クラスメイトと打ち合う鍛錬で使えば面白いほど倒れてくれるか

らな。問答無用のクソ技認定されたよ。

まあ、バ火力のスルトと力自慢のドラフ共にはゴリ押しでやられたがな。

「…さて」

この狼、捨て置くには無作法と言うもの。

勝手ながら、これから行く家へ献上する夕飯にさせてもらおう。エルーンは自然に生きる者、これも狩りの一貫として大事に食べてくれるだろうさ。

時間差で流れてくる血を止める。

首を直接切断した訳では無いので血が飛び散る事は無かった。

身体にも血が付着していない事から、剣術としてマシな範囲内だと考えた。

狼を縄で縛り、結び目を背負って山登りを再開。

「…ああ」

見知った景色。

山の上に見える幽霊屋敷のような見た目をした建物。懐かしい。

「」

気分が高潮していくのを感じる。

今の自分はきつと笑っているのだなと思う。

「」

森の景色を横目に登れば時間を忘れて結果が訪れる。

もう玄関に着いた。

少し緊張しながら呼び鈴を鳴らす。

「……」

程なくして、直ぐに走ってドアを開けようとする音が聞こえる。
今更緊張するな。自信を持って入ってやろうではないか。自分の
身だしなみも問題ない。血も何も付いていない。
ドアが開けられる。

「っ…コーリスか!？」

待っていたかのように俺への期待の言葉が掛けられる。
それに笑顔で返す。

「久しぶりだ「きやあああああああ
!!!!???'」

…え？

何で？

いきなり叫んでどうした？

何故家に逃げる。

「……!!!」

自分の身体に異変でもあったのかなと下に視線を向けて…気がつ
いた。

——ああ、そりや逃げるわな。

「剣…拭いてなかった」

8. 騒なる旅路、静なる帰路：②

「どうした！何かあったのかってうあああああ!!!」

「早くあいつを倒してくれ父さああああん!!!」

「くっクソおお死なば諸共オオオオ!!!」

「俺はコーリスです信じてくだs——ガボオツ」

「いや何やってんのあなた達」

.....

「コーリス君とフェリは思春期だし：そういう事は可笑しくないけど。貴方は流石に見過ごせないわ：」

「いっそ馬鹿にしてください：」

ここに項垂れている人間は三人。

愚人第一号のコーリス。

愚人第二号の父親

風評被害にあった少女。

三者ともかなりの絶望が見られる事から、正気に戻ったと言える。

コーリスは血塗れの剣を持ち狂人顔負けの笑顔で対面。

少女は殺人鬼に対面する恐怖を実感。発狂。

彼女の父親は娘を守ろうとコーリスへ特攻。

ちなみに『フェリ』とは○○○の妹、フィラが付けたあだ名である。わざわざ姉をあだ名で呼ぶ理由は分からないが、フィラ自身と近い存在でいたかったのか。

ともかく、この場ではコーリス以外は皆彼女の事をフェリと呼ぶ。今は場に従いフェリと記す事にしよう。

先程冷静になった様に見えたコーリス達だが、皆場の雰囲気当てられたのか非常に変質していた。

コーリスは喜怒哀楽が激しい情緒不安定者に、フェリの父は流れに飲まれる哀れな男に、フェリは極度の羞恥心によるストレスで豹変。

無事だったのは現在コーリスが狩った狼を捌いているフェリの母だけである。

「まあ、何はともあれコーリス君！先ずはお疲れ様！こんなに大きい狼まで持つてきてくれて、ありがとうね」

「いえ、別に買った物でもありません。先程襲われたので倒したのですが、流石に放置という訳には行きませんので…」

「あらーこの大きさのランドウルフを狩れたの!?強くなったのねえ…」

「二年間鍛えましたから。それより、俺としてはさっきの鞭術の方が気になりますね」

先程の暴動の時、フェリは父親に加勢しコーリスの剣にどこからか出した鞭を巻き付け無害化させたのだ。

コーリスは純粹な疑問を持ってフェリに視線を向ける。

そこには悪意も何も無く、ひたすらに先の剣の手応えに理由があると思ひ聞いたままでだ。

だが、話題を向けられたフェリはぎこちなく視線を反らす。

「別に何も…」

「ああ、フェリね。この子コーリス君が居なくなつてから急に自分で身を守る術を身に着けようとしたのよ」

「ちよつと母さん!!」

「…?理由は」

「いや、昔からコーリス君の霧のおかげで森で遊べてたわけでしょう?危険な生物がいたら避けられるから。でもコーリス君がリュミールに行ったら森から安心して出られないじゃない。だから君ほどじゃないけど、それなりに本人は練習してたのよ?」

「…当たれば相応の威力が出せる鞭は効果的だが、決して簡単な武器では無い」

「それが…どうしたんだ」

「いや、お前が強いと思っただけだ」

「……………」

フェリの沈黙はどんな意味を持つのか。

本人にとってはコーリスが居なくなつた後の気休めの様な物。率先して魔物を狩るわけでもないし、森の中心に赴き従来のコーリスの様に鍛えていた訳でも無い。

ただ、自分が集中出来る事をやりたかつただけだ。

そうで無いと、退屈で仕方が無かつたからだ。

だが実際、自分の力を認められたのだ。

果たして素直に喜ぶべきか、本当に自分は嬉しいと思つていいのか、悩ましい所なのだろう。

だから、彼女は母の証言に恥ずかしみを覚え、頬を膨らます事しか出来なかつた。

「何だその顔は」

「コーリス君コーリス君！女の子が言つてほしい言葉は『可愛い』『可憐』『美しい』『見惚れた』などなど e t c …」

「母さんはもう黙つてて!!」

「あの叫びで可愛いは無理が」

「お前もだ!!」

身も蓋もない母の言葉を全力で遮るフェリ。

真面目に悩んでた所を純情乙女に仕立て上げられても困ると言うもの。かと言つて女つ気が無いと言われてもムカつく所。

父親は数十分間無言なのでフォローも望めない。

疲れが溜まっていく様だと頭を抱えている。

「さて、ここの空気も温まってきた頃だし、少し早いけど夕飯にしちやいましょう」

「…!!」

「コーリス君つたらあからさまに目を輝かせて喜んでるわね！楽しみ

だったのかしら！」

「はい！あつちの食事リュミエールも好きなのですが、こつちの味トラモントが忘れられなく
…」

「やっぱり都会の味は違うの？」

「それはもう調味料ガンガンと…。あ、そういえばリュミエールに
ラーメンという大変美味な物の屋台が来ているのですが、これがまた
最高に美味いんです。もし他の島に行く機会があったら食べてみて
下さい！」

自然な流れでラーメンを布教する男。

彼は何故かラーメンに好き嫌いが通用すると思っておらず、ラーメ
ンが最高級の食物と捉えているようだ。

「へえ…どんな食べ物なの？」

「まあ短的に言うのならば熱々のスープに浸る龍の如き長さの麺とい
うものが入っていて更に野菜細かく言うのならばもやしやねぎなど
大変食べやすい物、肉は大変肉厚で少し甘みがあり満足感があります
大将曰くチャーシューと言おうそうです。更に更にメンマと言おう名の
なんとも形容し難い深みのある味と食感の食べ物も食欲を増進させ
ます。そして多種に渡る味があり味噌醤油塩、豚の骨の出汁を取る豚
骨まであるのですここでメニューを選びを楽しみラーメンが届くまで
どんな味か期待に胸を踊らせます食べる前から幸福感が凄いこれが
ラーメンですどうですか？」

「う、うん。コーリス君がすごく気に入ってる食べ物だったのは分
かった」

「というかお前…夏に熱々のスープって…」
「？ラーメンに時期関係ないぞ」

コーリスはこれ程の情報を凡そ7秒で言い切った。当然常人には
聞き取ることは出来ず、その歪んだ愛情に引くのみだが、ここで驚く
べきはフェリ。

一言一句聞き漏らさずに内容を理解し感想を述べる。

幼馴染力が成せる聴力なのだろうか。
とにかく幸せな男である。
そうしている間で料理は完成している。

「はい、お待ちどうさまーランドウルフのお肉を出汁に鍋にしてみました。新鮮だからそんなに臭みは無いわ」

「うわあ……美味しそうです」

「確かに美味そうだ……ほら父さんも起きて、ご飯だ」

ここでようやく起こされるフェリ父。

鞭が痛かったというより娘に手加減無く痛めつけられたという事実が辛いらしい。

——いただきます。

エルーンの風習と言うより本能だろうか。

食前の号令は感謝、そして形は祈りに近い。多くの者が声に出し料理を口に運ぶが、生命への感謝に密接に関わってきたのはエルーンだ。

口には出さず、心から届くように。

ここに居る四人とも、目を瞑っていた。

「うん。美味しいよ母さん」

「でしょ？美味しい野菜と美味しいお肉。合わせて不味い訳無いもの！」

「だね。それでコーリス君、どうかな？」

「……………美味しいです」

少し間を空けて答えたコーリスは、ひたすら静かに料理を口に運んでいく。

その表情、虚無。

食事を楽しみにしていた時の輝かしい目は無く、不機嫌までに行かずとも、エンジョイ精神の欠片も無い表情だった。それを見かねてか、感想を聞いた父親は尋ねる。

「…く、口に合わなかったかな？」

「いえ、美味しいです」

「そ、そうか。何か、思い詰めてる事でもあるのかな？」

「いえ、特に」

「や、やっぱり僕が居ると邪魔かな？」

「そんな事はありません」

「何さつきから質問攻めしてるのよ。コーリス君なら何時も通りじゃない」

「何時も通りでは無いだろう。さつきより悲しげな雰囲気じゃないか」

「だから何時も通りっていったじゃない。ね？フェリ」

「そうだな。コーリスは変わってないよ」

父はぐぬぬ…と唸る。

（それなりにコーリス君の事を見てきたが、これと言って特別な特徴は無い。何時も平坦な顔をしていて、態度も崩す事は無い。娘はコーリス君の鍛錬を見に行くが、帰って愚痴を漏らす事も無かった。かと言ってここまで露骨に静かになる人間でもない筈だ…さつきのは久しぶりの再開でお互い舞い上がったのもあるだろう…）

「あ、すみません…。食事の際には状況関係なく黙って食べる様になっているんです。食べる事は好きなので、味に浸る時間が欲しくて…」

「…そうなのかい？」

「そうなのも何もコーリス君はいつもこうだったじゃない。貴方コーリス君を気にかけてきた割には余り見ていないのね」

妻の率直な言葉で少し胸に傷を負う夫。

コーリスは月に一回は必ずこの家の食事に誘われて来たので、家族にも周知の事実だった筈なのだが、この父親は違ったようだ。

フェリの父は地理学者。

トラモントの霧の起源を探る為に住み込んできた男だ。それ故か観察眼はそれなりに鋭いのだが、如何せん空気が微妙に読めないという点があり、更に学者として致命的な『他人の意見に流されやすい』という性格も相まって意思が弱い。

更には幼少期のコーリスに嘘を付いた事が後ろめたく、無意識に彼の深層の追求を避けていたのかもしれない。これは本人にもコーリスにも知る由は無いが。

「美味しかったです」

鍋に盛られた料理の味を一通り堪能し、数が減りすぎない程度に食したコーリス。

手を合せて、満足げな微笑みを見せながら料理の感想を口にした彼はまた真顔になった。

そして、何故か次は耳が垂れ下がった。

エールの特徴的な感覚器官。

獣を思わせる大耳は感情的に動く事が多い。

喜ぶなら多少の振り、落ち込みは下に垂れ下がる事が多い。

それから察するにコーリスは落ち込んでいる。

と、フェリの両親は考察する。

「コーリス君、悩みがあるんだろ？話してみなさい。親身になって聞く事は出来ないが、経験から君に教えられる事もある筈だ」

「そう。私達もコーリス君の落ち込む姿は見たくないわ」

「……………」

聖人の提言と言えるまでにコーリスへの気遣いを見せるが。

これに対しコーリスは口を閉じるまま。

いよいよ深刻だなと二人は心配するが、

「ああ、違うよ二人共」

フェリはそれを否定する。

コーリス自身の問題をフェリが遮る。

「この耳の垂れ具合は…食事を取った後は眠くなるだろ？コーリスはその眠気と今戦ってる」

「いや瞼動いてないよ!?!耳で眠気表現出来るのか!?!」

「…?そんなに可笑しいかな…」

「耳の垂れ具合で読み取る貴女も凄いわね…」

フェリはコーリスに詳しい。

しかも身体的特徴にまで。

この事実は両親を非常に驚愕させ、フェリも少し変わり者なのかなと考えさせられたという。

…

「早いもんだね…2日経つのも」

「結局前と余り変わらなかったわね」

コーリスが滞在して二日が経ち、三日目の今日はコーリスが村を回る日。

この二日間は特に変わりが無かった。

フェリ一家がコーリスの学校生活などを聞き、コーリスはトラモントの生活を聞いた。

伸びた身長と比較、新聞によるファータ・グランデ空域の情報を元にする口論など、他愛もない事で彼らは楽しんだ。

今はコーリスとフェリが何やら話し込んでいる様子。

「しかしあれだな…あの二人が離れる姿が想像できないな。いや、恋人の様な間柄には見えないけどさ」

「確かにそうね。昨日の鍋、コーリス君が皿洗いを申し出て…台所に立ったとき。いつの間にかフェリが横に立ってたのよ。喋りもしないでずっと二人で何かしてる姿を見るのも久し振りね」

「うん…魂のパートナーって奴なのかな?」

「そうなのかも知れないわね!」

両親は二人を見て微笑む。

彼等は仲違いはすれど、最終的には必ずよりを戻す。

フィラが仲裁に入る事もあったが、仲直りの一步を踏み出すのは二人同時同じタイミングだった。

恋仲の様に初々しい物ではない。親友のように日々語り合ったりなどもしない。

それでも、彼等が縁を切る風景が想像できない。

(だってほら、)

(また笑顔で話し合ってるじゃないか)

満足げに彼らを見る両親に気付かず、コーリスとフェリ

は温かい雰囲気では話をする。

それはきつと、別れの挨拶では無い。リュミエール行きの騎空艇に乗る時、フェリはまた送りに行く予定だ。

「船は何時に来るんだ?」

「15時40分だな」

「次はいつここに?」

「そうだな…来年は忙しくなりそうだからな。最低でも三年後くらいにはなるだろう」

「そうか…」

「まあ、安心しろ。フィラが近い内に帰る筈だ。あと半年もしたら完全復帰出来るらしい。楽しみにしておけ」

「そう、だな。うん。楽しみにしておくよ!」

「その鞭術。フィラに何と思われるんだろうな」

「う、まあ…荒れたと勘違いされるかもしれないな。取り敢えず、お前

が次来る時は剣を破壊できる程の威力にしておくか」
「どんな威力だ」

二人はけらけらと楽しそうに笑う。

寂しさが全くないわけでは無いが、また会う楽しみに比べれば些細な物。

コーリスの硬い拳と、フェリのか細い拳が合わさる。

コツン、と。小さな音を立てるが、それは何よりも硬い絆で結ばれていると確信している。

「またな」

「ああ、またな」

コーリスは迷う事なく村へ行き、まずレルフ一家を訪ねた。

無論文通で顔を見せに行くと言っておいたので驚きこそされないが、一年間顔を見ていなかった義息が来るのは大変嬉しいものだったらしい。

特に叔母のコーレはコーリスに抱き着いてはおいおいと泣く為、今日中に帰る彼に罪悪感を湧かせたくらいだ。

人間誰しも年寄りの涙には逆らえないのだ。

去らないというわけにはいかず、先に何か会話をしようと思ったがレルフが遮る。

『騎士になる過程の話は騎士になってから存分に聞くから、村を回って来い』と。

本人達ももう一回息子と別れるのは辛いもの。

ならば帰ってきた時の楽しみを増やせば良い事。

コーリスはその気遣いに甘え、村を周った。

幼児に発見され、剣を触れさせないようしながら面倒を見た。

年齢が近い者には近況を聞かれたが、『まだまだ遠い』としか返せず、目を丸くして驚かされていた。

どうやらコーリスは超人か何かと勘違いされているのかもしれない。コーリスの怒りに触れれば何処にいても見つけ出してくる事を思えば確かに領けるだろう。

大人達には成長した姿を喜ばれ、果物等を次々と渡していく。コーリスの好物を的確に渡していく姿は感動的だ。思わずコーリスも涙が出てしまった程に。

トラモントの民度は全空一。コーリスはそう確信したのだ。そうこうしている間にも船が来る。

名残惜しげだが、コーリスは去年と同じ様に激励を受けながら乗り込む。

フェリ一家、レルフ一家を含め皆が再会を確信してコーリスを送り出す。

—— 鏡が似合う男になって帰ってこい!!

—— はい。吉報を届けられる様にします。

レルフの叫びに返すようにコーリスは小さく呟き、トラモントを後にする。

それが今世の別れになると知らずに。

9. 狂宴

「そういえば、今思ったんだが」

「んん？」

ふと誰かが問い掛ける。

「今日って模擬決闘の日だよな？」

「そうだな」

此処はリュミエールの中枢にある士官学校、それに追随する様に建設された闘技場。

戦闘の技術を教え込む場、或いは実技により経験を積ませる場。

卒業目前には、トーナメント戦によるリュミエール伝統の決闘大会が行われる。

これはリュミエール国王が見に来るくらい王道なイベントである。

今日そこで行われるのは模擬決闘。

生徒達が平等な状況から行う1v1ダイマンの勝負である。そこでは安

全性を求め、そして正々堂々闘う事を心掛ける。

…筈なのだが。

「あいつら使ってるの…実物じゃね？」

「あつ」

今苛烈な決闘をしている二人は、あろうことか木造りの物などでは無く、鋭利な刃が付いた真正銘の武器だったのだ。

そして、その武器を使っている二人は。

「相変わらず芸が無いなア!!」

「燃えてるだけで胸を張れる奴の言うことは違うな…ッ!!」

当然、KYエルーンと愚童ハーヴェインである。

状況を説明すると、霧を出して行動を予測しようとしたコーリスに対し、炎で霧ごと無力化しようとするスルトの戦闘になるだろう。

決闘という真摯な場において相手を煽り合うのもどうかと思うが、相手の気を少しでも動転させる手段としては適していると言える。

だが、何時も同じ煽りを繰り返している二人にしてみれば意味は無いと思えるので、結局何もプラスになっていない。

二人の剣撃。

それは似ても似つかず、独特の型を生み出していた。

コーリスの剣は防御。霧による予測で攻撃を回避または往なし、カウンターを狙う態勢。

逆にスルトの剣は猛攻。炎と剣撃による同時攻撃は避けられない訳では決して無いが、彼の剣は相当に難しい。

剣に炎を纏わせ攻撃してくるのに対し、剣を交わし合うことになるのだが、剣とは無関係に独立し襲い来る炎まで存在している。

加え、彼の身のこなしはハーヴェイン由来とは言え上物が過ぎる。一年間の努力では無く、スルトの場合炎術と運動神経どちらも才能による物だった。

霧というものは案外魔力で払える物なのだ。

炎で蒸し返し、風で払い、闇で飲み込める。

霧が完全に優位に立てるのは水属性ぐらいでは無いだろうか。コーリス自体霧だけに頼る戦術を取っていると思われがちだが、彼の剣術も弱くない。

戦いにおいて起こる興奮による呼吸、可動のズレが一切無い。堅実に過ぎる程の安定性、それが強みなのだが…。

「……!!」

「体幹は自らを支える物だな?では、他人からの干渉を考慮してない訳だ!!」

——自分がずれ無くても、相手からペースをずらされれば意味が無

くなる。

人は熱を反射的に退ける。

熱せられた物に触れた瞬間、大抵の人間は『あつつ!!』と声を上げ素早く手を離すだろう。スルトの熱気に当てられれば、来たるべき苦痛を避ける為身体の芯が崩れそうになるが、意識してしまえば耐えられるものである。

だが、意識していても体の支点を崩されれば無意味となる。

身体を逸らすために使われる踵をつま先で突かれ、強張っていた身体が低空に投げ出される。

「ござか…ぐへ!?!」

足払いを食らった後の様に身体が地面と平行になった瞬間、顔にお見舞いされたのは剣の柄頭による打撃。

実物を使っているからとは言え、相手に手傷を追わせる訳にはいかないという判断だろう。

いや、単に頬を打撃により歪ませるコーリスの顔を見て馬鹿にしたかったのかもしれない。

その証拠にスルトの顔はにんまりと意地の悪い笑みを浮かべている。

だが、剣の使い方についてはコーリスも同意見だったそう。

「——は?。」

バランスを崩した瞬間、剣を振っていた。

「——いばいふ!。」

刀身の側面、剣の樋と呼ばれる部位がスルトの顔に直撃し、バランスボール顔負けの勢いで跳ね飛ぶ。

スルトの方が一手早かったとはいえ、ほぼ同時に剣による物理攻撃の威力には差が生じる。

種族の関係上、普遍的な体格のエルーンと小人のハーヴィンでは力の差は歴然。

ドラフの腕力だとスルトは恐ろしい事になっていたかもしれない。冗談抜きで顔面が吹っ飛ぶのでは無いだろうか。

起き上がったコーリスは頬から下向きに攻撃が通った顎を抑え、スルトは涙目になりながらも鼻を庇い相手へ向かい出す。

「……………」

「……………アア?」

鼻を抑え、自分の身に何が起こったかを実感する小人。金属の塊で殴打された部位からは血が溢れ、自らの炎で蒸発していく。

——心が、燃える。

自らの有利をただの体格差で埋められた不条理、相手より大きいダメージによる屈辱。

怒りを爆発させるのに時間は不要。

スルトが燃える。

「やって、くれたな」

「お互い様だ」

「初撃は俺だ」

「その隙を突いたのは俺だが」

「鼻血が——出ているんだぞ?」

「ティッシュいるか?」

「うん」

怒りからの衝突。

それは唯の気遣いで避けられ——

「でもな、コーリス」

「ん？」

「俺が欲しいのはな」

「……ああ」

コーリスは察する。

このハーヴィンが罪に寛容な訳が無いと。

未だ収まっていない炎、収まるどころか猛烈に広がっている。

炎が、口を開く。

「貴様の鼻血による精算だアアアアア!!」

「冴えてるな懺悔里帰りイ!!」

半狂乱になって剣を振り回すスルト。

狙うはコーリスの鼻。炎の勢いを剣に乗せ、全力で鼻を叩くつもりでいる。

だが、戦乱はやがて収まるのが道理。

「そこまでー!」

お互いの頭にチョップを食らう。

静止の声と共に制裁を下したのは我らが先生。

「何やってるんですか貴方達は!?!」

「先生どけ!そいつ殺せない!」

「粛清!」

「ぐはッ!!」

野蛮な暴言を吐いたスルトの腕が背中に拘束され、二度目の手刀が突き刺さる。

「コーリスさん。貴方の言い分は」

「正々堂々勝負を挑まれたら受けるのが騎士の役目」

「粛清！」

「ガハッ！」

コーリスにも手刀が刺さる。

「勝負を挑むも良し、受けるのも良し！ですが、命を容易く奪う実剣で戦うなど不霊頑冥!!」

「ちゃんと柄頭で殴りました!!」

「尚更剣を使う必要無し！木剣で充分。特にコーリスさん。貴方の殴り方は危険極まりない。角度が少しでも横だったら顔が斬れてましたよ」

「…はい」

「二人には罰を与えます」

どのような罰が向けられるのだろうか？

バケツ持ちか、逆立ちグラウンド周回か？

―否。

闘技場という場に相応しい罰がある。

「私の持つ生徒は28人。貴方達の他の26人を同時に相手取ってもらいましょうか。二人に分ければ13人という事になりますねえ…」

「――え」

「無論一人づつ倒すという生ぬるい物ではありません。同時です同時」

「ち、ちよつと先生!?コーリスはともかく、俺にはとても捌けん！」

「捌かせるつもりなの罰ではありません。貴方達と共に鍛えた26人。精々揉んでもらいなさい」

「――ヒィ」

コーリスが声にならない怯えを漏らした後、背後を振り向くと既に

木剣を構えた26名。

教師が割り振りを決めた訳でも無いのに自然と半分に分かれている。

実に優秀な生徒達である。

「おま——」

言葉を吐ききる前に突風が頬を掠った。

今のは風属性の魔法。

「ごめんね、コーリス君」

エルーンの少女が細剣を構えた風を纏わせる。

他の生徒達も魔力を滾らせる。

「こんな状況だけど…私達全員、力を試すいい機会だと思ってるよ?」

「く、」

「じゃあ…行くね」

「クソツタレ共がアアアアアアアアアア!!!」

獰猛な笑みを浮かべた生徒達によるリンチは、決して教師による本意だけでは無いだろう。

日頃の鬱憤。

コーリスの霧による感知。やられた側は途轍もないストレスを覚える。

例えるならば、鬼ごっこで人を追い詰めたが、手を尽く避けられ、時間切れまで粘られるという感覚だ。

いつの間にか剣も木造の物にすり替えられている。

戦禍は訪れた。

「はあー！」

顔横に細剣が振り抜かれるが、見てから回避は可能。一対一なら他愛もない。

だが、あと12人もの攻撃が襲い来るのだと思うと苦笑いすら浮かべられない。脳の処理伝は関係無く、単純に身体が追い付かない。

——足元に剣。

飛んで回避。

——頭上に振り下ろし。

剣の腹を踵で蹴り剣を飛ばす。

——腹になぎ払い。

鏢迫り合いによる衝突、そしていなし。

——背後からの斬撃。

相手の手首を掴んで体重移動、回避。

——水の噴射による気配の阻害。

——どうしようもない。

——肩に向かって…剣。

避ける。

——避けた先にドラフのシールドバツシユ盾による殴打。痛い。

というか頭に食らったら死ぬ。

……。

「無理」

巨体のドラフのシールドバツシユは格別。

手加減で体に食らわせてくれたがやばい。剣を盾の前に置いて最低限の防御はしたが、まともに食らったら骨が砕ける。

だって今でも面白いくらい飛んでる。

青タン出来るとかいう問題じゃない。泣くよ？

「ふ、う……」

肺から息を吹き出し、苦しみを開放する。その息には溜息も混じっていたと思う。

スルトはどうなっているだろうか？

あいつの場合炎を撒き散らしていれば……ん？

横に何か飛んできた。

これは……!!

「カ、ハア……」

「す、スルトオオオオオオ!?」

虫の息になって捨てられたスルト君だった。
な、何故？

「幾ら炎でも……氷と水で攻めれば冷めるよね？」

「あ、悪魔共が……!」

微笑を帯びる魔性のヒューマン。

目を光らせるドラフ。

細剣を構えるエルーン。

唯一のハーヴェインはボロ雑巾。

あつちの13人も此方に合流した。

「多数対一。今更だけど可哀想だね。騎士としても駄目な行為だと思う」

喋るはクラスでも理知的で評判のヒューマン少女。

今にでも慈悲を貰いたいものだ。

「でも——霧がうっとおしく思えてきたから……!」

矢張り戦闘モードになると冷徹マシンに変容する。
理知的というのは戦闘において慈悲も容赦も持ち合わせない唯の
機械なのだ。

証拠に目の光が薄くなった。

ははっ信じられるか、アイツ12歳なんだぜ？

「…正直ドラフの突進だけは食らいたくないのよ」

「シールドバツシユ禁止？」

「いや、少し分断させて貰おうか」

木剣を置き、両手に魔力を宿し。

虚空に向ける。

余り使いこなせるか不安だが、手が青色に光っているからまだ成功
できるだろう。

「…何を」

「――刮目しろ。専売特許は霧だけじゃない」

俺は魔力の量は桁違い。

霧を島全体に行き渡せられる程なのだ。もし俺に火が使えたら：
島を燃やせる可能性もある。

実際使える魔力は霧と、補助魔法。

そして…

「――エンシエアント・イアス」

防御魔法。

ヒューマン、ドラフ、エルーンの三すくみが偶然出来上がっていた
事が幸運となり、ドラフとヒューマン・エルーンの間には透明な壁を作
る事が出来た。

「なっ…っ？」

「俺が霧だけの一芸に留まるとでも？ 甘い。数で押し切れれば終わると…っ？ 舐められた物だな」

「だけど！ 今まで使ってこなかったじゃない…！」

「俺はそこの馬鹿とは違う。巨大な壁を生み出すより霧を出して最低限の動きをした方が効率が良い」

「つまり…今までの私達は本気を出すに値しなかったってこと…っ？」

「そうとも言える。実際、力勝負のドラフを除けば簡単な相手ばかりだった」

「へえ…ッ!!」

憤怒に染まる表情。

挑発は効いたと見えた。冷静さを失った攻撃は見切りやすい。

こちらのペースに持ち込めれば簡単だ。

加えて、ドラフ達が魔力と筋力による壁の突破を試みているが無駄。

俺の渾身の魔力を込めた壁だ。そもそもが堅いし、一枚二枚破られようがまた作れば良い。

片手で作ることになる分強度が落ちるだろうが、また割らなければいけないという強迫観念が精神的なストレスを催し、疲労困憊にする事も可能。

懸念は遠距離による攻撃。

魔法と物理攻撃を同時に繰り出されれば派手に負ける事になるだろう。

困まれても敗北必須。

怒らせて視野を狭める他ない。

「ドラフ共が合流したら俺の不利だが、先程まで有利だった身だ。ドラフが8人程減った所で問題ないだろう？」

「…」

「袋叩きで勝てると思っていたのだろうか？やれば良いだろう。正面から攻めれば終わりだ」

「後悔、しないでよ？」

「この壁により後悔という概念はお前らの物となった。精々吠えていろ」

誘導完了。

前方からの戦闘を認知。

——行ける！

相手に殺意がない以上、此方の粘り戦法は完全な物となり、消耗勝ちを狙える。

スルトが数人倒してくればまだ余裕があったのだが、心が先に折れたのか一人も倒せていない。

勇猛果敢が軟弱千万に早変わりだ。

俺は勝つぞ。

「来い——俺が揉んでやろう」

「上等ッ!!!」

売り言葉に買い言葉。

最後の戦いが幕を開けた。

今回の授業による負傷者

スルト・ヴァーグナー

- ・腹部に打撃痕。猛烈な一撃を受けたと思われる。
- ・鼻部に打撃痕。骨にヒビ一步手前である。

コーリス・オーロリア

- ・頬に突痕。別状なし。
- ・腹部に打撃痕。別状なし。
- ………全身に打撃痕。特に書く事はない。

他の生徒達に外傷無し。

無傷で授業を終えたと判断する。

——担当教師 リエス・コルセン

要するに：コーリスは一撃も当てれずに負けたのである。

10. 霞のように朧気で、暖かく

リュミエール聖士官学校は三年間の登校が求められる。集められる人間のその年に11になる者である。

ファータ・グランデ空域には「城砦都市アルビオン」という名門の士官学校を有する島があるのだが、その生徒達はやがて領主になるべく武術大会で競い合い、勝った者は一生その島から出る事は出来ないという情報がある。

領主では無いものの士官学校を卒業した生徒達は各国で活躍すると約束される程の名門。

内容としては充分だが、領主としての扱いが呪いのようで、近付く人間は数少ない。

そして、リュミエールの士官学校の生徒達は年齢が低い。

ファータ・グランデ空域では、最低13歳から軍への起用が認められており、大体国毎に年齢が決められているが、リュミエール聖王国は13歳からでも聖騎士団に入る事が出来る。

と言っても、雑用とまでは行かないが危険な仕事は一切させられない。

そんな安全第一を謳うリュミエール国の士官学校。

一年目には戦術、陣形、騎士としての精神が叩き込まれ、半年以上もの時を経て自らの武器を持つことを許可される。

二年目には実践経験を重視され、一対一による決闘演習を行い、犯罪者に対抗する為の対人技術を育む。

聖騎士は騎士とは違う。

魔物の討伐よりも人間の平穏を望む。民に害を与える要素を打ち払うのが聖騎士なのだ。

そして三年目。

ここで彼らは真の意味で聖騎士となる為にある催し物に注年しなくてはならない。

——エル・グロリアス。

卒業試験という訳では無い。

士官学校で培った力を発揮する場として設けられた大会。実剣と魔法を使う事を許可される真正正銘の決闘。

トーナメント戦で行われるそれに優勝したならば、若年にして多量の名声を得るだろう。

何故か？

理由は明白。このリュミエールを統治する聖王が閲覧する事になるからだ。

リュミエール聖騎士団に所属するのにも苦勞は掛からない。そのくらいの評価を受ける事になる。

それがエル・グロリアス。

さらに、その出場権を得るのは8人のみ。士官学校の教師を担当した者が審判を務める為、危険とみなした場合の判断が早くなる事もあつて安全性がある。

聖騎士の一步は騎士団で踏みしめられる物ではなく、この島に来てから既に始まっていたのだ。

無論、士官学校を卒業しなくても聖騎士団には入れるので、最終的には聖騎士団の入団試験に委ねられる訳だ。

開催時期は三年目の3月。

リュミエールと密接な関係にあるヒュードラツへの騎士団長、リュミエール聖騎士団長、アルビオンの貴族階級の人間達までもが見に来るこの大会。

開会式はたった今行われていた。

「――諸君らは未だ卵。しかし何者にも勝る純金」

聖王の声が高らかに響く。

目前には祈るように姿勢を正す生徒達の姿がある。これから正義の道を進まんとする勇者達への細やかな激励。

「――さればこそ、その身を更に磨き……この世界の宝となれる様精進せよ」

「はっ!!」

打ち合わせの必要も無く、小さな戦士達は声を揃えて応える。数年の苦楽を共にした仲間達は今を以って最大の弊害と化す。

ここに開会式は終了し、トーナメント表が配布される事になる。誰が相手かなど祈る者はいない。全力を出すまでの戦いで相性での憂いなど不要。

ある者は多大なる自信と誇りを持って。

ある者は自身の誇りを守り抜くと誓って。

英雄譚——末章の幕開けだ

——誉れ高い。

不思議と心に定着した感情はそれだった。素直に嬉しかったのだ。自分の成果を存分に吐き出す事が出来る事。

実力だけで無く、騎士の振る舞いを求められる上での選出。

規律を破り鉄剣で戦った時もあったが、死ぬ気で評価を取り戻した為、実力点多めで選んでくれたのだろう。

今までの修行。

トラumontでは褒められた物であったが、結果的に村の役に立っていたか。ただの自己満足では無いか？

迷う事は多々あった。

士官学校で友を得、互いに高め合って初めて実感する意義。唯の素振りでは得られない誇り。

誇りとは自己満足の極地では無いかと言われる事も少なく無い。

それでも自己の顕現として人に必要な物なのだろう。

自分にとって有利な条件を作り出す霧。

この魔法が助けたのは自分だけだ。他を助けた事は一度たりとも無かった。

その為に座標の指定、魔力の調整に力を入れ、独自の防御魔法を作り出す事が出来た。

或いはスルトとの対比になりたかつたのかもしれないし、皆と比べ唯一無二の人間になりたいというエゴなのかもしれない。

悪を打ち払い民を助ける騎士がいるのならば。

民を守ってから悪を受け止める騎士がいたって問題ないだろう。

「…」

自分は一回戦目…か。

相手は水属性使いのエルーンの女性。素早い動きが特徴のスピードファイターだ。

試合開始まで30分程時間があるので、瞑想でも行おうかと、思っていたのだが。

「最初からか、精が出るな」

「む。そういうお前は最後尾か、スルト」

「お前の相手は？」

「ロイス」

「ん…疾いのが来たな。風属性じゃないのが珍しいくらいなの」

「そっちの相手は」

「…デルジ」

「…ドラフだな」

「ドラフだ」

スルトは少し青い顔をして苦笑する。

半年前の訓練の罰が余程トラウマになっていているらしい。火を掻い潜られて腹パンを食らった経験は苦味しか無く、巨体を相手取る事を嫌っていた。

そう言う此方もエルーンの刺突を全身に受けて悶絶した経験があるのだが…。

兎にも角にも、戦闘技能を備えたエルーンは疾い。

イメージトレーニングをしておくに限る。

ロイスは細剣による刺突に水を纏わせて威力を向上させる戦い方をする。

剣に満遍なく魔力を行き届かせる為、流麗にして俊敏。弱点は存在せず、つけ込む隙を与えない。

ならば、剣技に重点を置く。

——刺突：いなし、斬り込む。

——大振り：避けて打撃。

——魔法：避けるか壁。

『決めた』

脳内で今回の戦いの重点。その三要素を詰め込み、自分の剣の鞘を撫でる。

剣の打ち合いなれば、剣の損傷も念頭に置いておくべきだが、鞘も打撃に使えなくは無い。

しかし、騎士という振る舞いを求められる中で鞘での掠め手は卑怯卑劣。

リュミエール聖騎士団のモットーは『清く、正しく、高潔に』。

うむ。自分で選んだ道ながら小難しい物だ。

傭兵の方がよっぽど楽かもしれない。

加えて戦いそのものを視認しづらくする霧も使いづらい。

これが魔物相手ならば無双出来たかも知れないが、対人は苦手だ。どうしたものか…。

む。時間だ。遅刻したら相手の不戦勝となってしまうので行かねば。

一回戦開始の時間が来た。

決闘場には何も特別な物は置いておらず、規則正しい球形の広場で二人が対面しているのみである。

真ん中には審判役の教師。

彼はコーリス達の教師である。生徒達の情報を知り尽くしているからこそ、もしもを回避する事が出来る。

彼は普段の気怠けな表情を完全に飛ばしながら、声を張り上げる。

「――両者！」

対面している二名は声に反応し得物を胸に構え、天に切っ先を向けるように持ち変える。

この大会には外部の武器の持ち込みは禁止されており、当然個人的に防具はつけられない。

リュミエール聖士官学校のブレザーのみである。

軽装ではあるが、彼等には鎧よりも重い誇りがあつた。

剣を構える姿は天に祈りを捧げるかのよう。

または自らの精神を統一しているのか。

彼等自身にしか心情は分からないが、国王達の目には昔騎士を指すだけの彼等は映っていない。騎士となった彼等を見ているのだ。

「――コーリス・オーロリア」

「――ロイス・モクラレル。世を清める聖水の如く華麗に戦います！」
名乗り。

礼儀として名前を言うだけでも良いし、自らの心を奮い立たせる為に信念を口にしても良い。

そんな彼等だが、最後に言う言葉は必ず一つ。

「いざ、尋常に……」

1秒後の衝突。
それに備え、誰かが息を飲んだ。そして、

「勝負!!」

戦いが幕を開けた。

響くは金属音。

地面を駆ける流水と霧。

一速も乱れぬ剣技の応酬。

この場の誰かが、美しいと言った。

「せいっ!」

「……………」

細剣による刺突の5連撃。彼女が繰り出した剣技は常人には視認できてもその場で避ける事は不可能と悟った。

コーリスは一撃目をなんとか見切り避け、二撃目を剣に当て逸し、三撃目を降を後ろに飛ぶ事で回避。

飛んだ後に追い打ちが彼に迫るが剣を地面に突き刺し相殺。

そして剣の柄を持ったまま身体を捻りながら飛び、相手の脇腹に回し蹴りを当てた。

エルーンとは獣の性による生活か身体機能の側面なのか定かでは無いが、俊敏でしなやかだ。

走れば疾く、攻めれば鋭利な矛となる。

毎日柔軟を熟さなければ硬くなる男の身体でも、エルーンの習性は適用される。

無論、男女の筋力差は考えるまでも無い。

「がはっ」

「っ…」

渾身の一撃だったのだが、水を纏った剣の腹で受け止められた事により足に鈍痛が走る。

だが、相手も金属を伝わってダメージが届いたようで、体制を崩すまでの攻撃は出来たようだ。

そして彼女は笑う。

「今日は、随分、と。豪胆ですね…」

「…」

未だ痛みが抜け切っていない腹部を抑えながら一言一句迷わず言葉は紡がれる。

コーリスは何か心に引つ掛かる事がある様で、その言葉の続きを聞いている。

「今までの貴方なら…魔法を使って受けの姿勢を保っていた筈ですが」

「姿形が見えない決闘など見世物にもならんだろう」

「なら、これは手加減なのですか…?」

「いや、それはあり得ないな」

手加減では無い。

霧で感知する戦法を使っていたとしても軸となる剣技が必要。数々のクラスメイトを屠っていた剣技と互角の彼女はコーリスと渡り合えていると言っても過言では無い。

それを悟ってか、ロイスは花が咲いたような笑顔を見せた。

「——良かった」

「む?」

「散々打ちのめされた相手と渡り合えていると実感すると…：努力が報われた感じがしますね」

「そうか」

「それに、貴方はやりづらそうですし」

「何故そう思う？」

「表情に出てなくても分かりますよ。エルーン同士のシンパシーでも言うのでしょうか？心なしか耳が垂れているように見えます」

「…逆にお前は真っ直ぐに立っているな」

「ええ。本調子なのでツ!!」

ここからが本番と言わんばかりにロイスは剣に水を纏わせて地を這うように薙ぎ払った。

——速すぎる！下、右、ひだ…違う！

フエイント混じりの刺突斬撃はコーリスを焦燥に駆らせ、彼の動きのキレを奪っていく。

剣自体から逃れようとするならば高密度の水を発射しわざと回避させ体力を奪う。

対してコーリス。

逃げるだけでは拉致が開かないと判断したのか接近戦に持ち込む。だが、彼女にとって近接の高速戦闘は望み通りの展開。

先程と何一つ変わらない展開が始まり、コーリスの体力低下による敗北の一矢が刻まれるかと観客の誰もが思ったが…。

「…？」

彼女が感じ取った異変。

それはコーリスの剣に霧が纏わりついているという事。

『コーリスさんは何を考えている…？』

霧を広範囲に撒き散らして戦いを掌握するのは彼の得意分野だが、剣に纏わせる程度の範囲では懐に入っても感知されないではないか。『いや…何か一つ盛り込んでくる。霧に何か違う魔法を混ぜて攻撃に転用…？防壁に使う目くらましか。それとも見栄えを気にしての極小範囲使用？』

余分な考えが通り——捨て去った。

どちらにしろ剣による戦闘は避けられない為に、全力で五連…否、八連撃を繰り出した。

予想通りコーリスは剣で刺突を受け：彼女は過ちに気が付いた。

その時には既に遅く、剣筋が綺麗に明後日の方向を向いていた。

『しまったしまったしまった!!』

『剣より先に霧に触れたら剣の軌跡を晒すのと同じじゃない！コーリスさんの反応を見るに彼は剣しか感知していない!!』

剣に霧を纏わせると言っても、剣の周りに霧が発生する訳だから、剣の打ち合いには先に霧に当たる事になる。

霧を突破するまでの僅かな感覚をコーリスは読み取り、打ち合いになる筈の剣を逸らすことで高速刺突の連続を消す事が可能。

彼女は逸らされた剣を持つ腕の痺れを感じとり、がら空きの左手で水の塊を作る。水の塊は空間に固定されたかのように配置された。

隙を突いたコーリスが振り下ろした剣に水の塊が直撃し、剣の威力が半減する。

「はぁあ!!」

剣の方向を立て直し、渾身の力でコーリスの身体を狙うが、ブレーキは掛けられるようにする。

細剣の刺突は簡単に人の身体を貫通してしまうので、寸止めして相手に負けを認めさせる事が重要だ。

だがしかし、コーリスの剣に触れなくても霧に触れた時点で彼には既に剣速が視えていた。

「しゅっ!!」

コーリスは驚異的な反射速度で身体を捻り、寸止めされる筈の刃が目と鼻の先に来る直前に避け、逆に彼女の首筋に長剣の刃を充てがった。

「はあ…はあ…！」

この間正に二分も無い。

超人的な速度で戦った二名は、今しがた戦いを終えた。

「此方の…負けです」

諦めが付いたような表情をしながらも彼女は気が晴れた様だった。前日から続いた緊張が解れ、お互い全身の力が抜けている。

「…最後の…一撃。見事だった」

「普通に防いでるじゃないですかー」

ロイスは文句を言いたげに『ぶー』と呟く。
最後の…一撃。

それはコーリスが避けた全力の一振りではない。

避けた後のコーリスの腹部に向けられた、水の斬撃だった。片方の一撃に全力を掛けながらも背面から左手による奇襲もかけていた。だが、それは彼の防御魔法による防壁で防がれている。

間一髪の防御。

故に手の平サイズにしか拡大されおらず、防壁は掌から発せられる為、反射的に手でガードしたという訳だ。

恐らく相打ちに持ち込み引き分けを狙ったのだが、完全なる受けを持つ彼には一手及ばなかった。

「勝者、コーリス・オーロリア!!」

迎えるは両者への労いを表す歓声と拍手。

剣を向け合った二人は鞘へ納め、コーリスが手を差出しロイスを立てせる。

観客は皆一瞬の攻防に興奮を隠しきれていない。

「いてて…」

「大丈夫か？」

「脇腹が痛いのと…最後のコーリスさんの顔が殺気立ってて腰が抜けてしまいました…肩貸してくださいよー」

「まあ、構わんが…」

肩を組み歩き出す彼等に教師であるリエスが近づき講評を述べる。

「お二人共。お疲れ様です…」

「なんか疲れてますね…」

「普段上げない大声を出すとは疲労感が出るんですよ…あー怠。ま、取り敢えず講評行きますかー」

「あ、はい」

「まず、コーリスさんですね。瞑想してた割には本番にバタついてましたね」

「…」

「まああれだけ速い刺突なら臆しても仕方のない事です。剣に霧を纏わせる機転、そして油断をせずに奇襲を防御。エルーンだからと一括に出来ない反射神経をお持ちのようですね。いや、貴方の場合は鍛えたというべきですか。取り敢えず60点くらいです」

「ありがとうございます」

「そしてロイスさん。思考の隙を与えない刺突の練度、魔力と剣技の併合による逃げ場消滅スタイル。慈悲も容赦も無くて結構。しかし終盤で焦りましたね。彼を先に追い詰めようとする点は評価しますが、彼に戦闘スタイルを見せすぎたようです。最終的に読まれ打ちのめされましたね。奇襲はバツチリでしたよ。えーと…75点くらいですかね」

「ありがとうございます!!」

「ロイスさんは休む事。コーリスさんは次へ向けて反省しておきなさい」

「はいー!」
「では」

そう言つてリエスは二回戦の用意をしに持ち場へ戻つていった。
ど真ん中の決闘場から出る為の通路を二人は歩く。

その途中でロイスは言いたい事があつたらしくコーリスと話している。

「いやあしかし」

「ん?」

「貴方の雰囲気は変わりましたねえ」

「何だ藪から棒に」

「いえ、入学当初から変わったと。あの時の貴方の言葉は目の前を真つ暗にさせる夜空のように冷たかったです。あいも変わらず今も霞かすみのように朧気で伝わりにくい言葉遣いですが…なんて言うのでしょうか…相手への氣遣いというか身体を包み込む暖かみがありますね」

「…実は詩人志望?」

「そんな訳ありませんよ!…こんだけ努力して来たんですし…負けましたけど。ま、夏に馬鹿やつてラーメン食べ過ぎたのがいけないんですかねー」

「ラーメンのせいにするなたわけっ!」

「イタ、イタタタタタ!!!ちよ、私女ですよ!?!髪を引つ張る必要がありますか!折角腰まで伸ばして…餡色と評判で人気だったんですからねえ!!」

髪を離れたコーリスにギャーギャーと抗議する彼女。

スルトと喧嘩する何時もの彼とは違い、今は楽しそうな状況だ。

同種族の関係か、彼女とは馬が合ったらしい。

「俺だつて滅多にない銀…いや今思えば灰に近いな…。取り敢えず、

「注目を浴びていたぞ」

「へん！男の華奢さに何の価値がありますか！エルーンは比較的スラリとしていますから見た目が良いのは当たり前なんですよ」

「それ男ドラフの前で言うなよ。俺が殺される」

「でも女子ドラフはムキムキが好きじゃないですか。やっぱり同種族が惹かれ合うように世が形成されてるんですね」

「なんか冷めてるな…お前」

「生まれてこの方恋愛感情抱いたことないのですよ。貴方も同じでしよう？」

「うーん確かに」

「将来騎士職が恋人なんて言う残念な人間に育ちますよ私達は」

「それは嫌だな…」

言いたい事を言い合い彼女と他愛もない会話をした。

待機室と観客席への道が見えたら肩を貸すのを止めて、一旦配置されてるベンチに座らせる。

「客席まで送るか？」

「いえ、少し休んだらゆっくり上がりますよ。スルトさんの戦いも気になりますから」

「なら、俺は行くぞ」

「はいはい。あ、スルトさんとの試合、頑張ってくださいね」

「…？次は違う相手だが。それに奴と当たるとしても決勝戦だ」

予選でのコーリスは最初の試合。

スルトは最後の試合に当たっている。

当たるとしても決勝戦、彼等が三度目の戦いに足を踏み入れる瞬間だ。

違和感のある激励に首を傾げるコーリス。

それに対しロイスは緩やかに笑う。

「どうせ貴方達はぶつかり合う運命にあるんですよ。それに」

「それに？」

「私はクラスで三番目に強いんですよ？それに勝ったコーリスさんはスルトさんに当たって当然です」

「…それは自己評価か？それとも大衆が認める評価か？」

「どちらもです。自信が無ければ騎士なんてやっていけませんよ」

「ああ、違くない」

結局、彼女の腰が回復するまで話し込んだ二人だが、観客席から迎えに来た友人に話している姿を目撃され、関係性を疑われたのは別の話。

当然、二人はサバサバとした友人関係であり、恋愛感情を微塵も沸かせていない。

気が合う二人が好き勝手呟いているだけの下らない会話である。

そして気が付いたら二回戦が終わり、両者の戦いを分析出来なかったコーリスは一つ落ち込むのだった。

11. 炎のように苛烈で、真つ直ぐに

——いつ頃からだろうか。

この身体を疎ましく思ったのは。

スルト・ヴァーグナー。生まれつき炎を秘めた身体を持っていたことから、伝説の炎の巨人——伝承に残っていた星晶獣の名前を付けられた。

：自覚するまでは炎なんて出なかったがな。

俺が産まれた島はフレイメル島。

覇空戦争後に星の民が残した技術を転用し、工業が盛んな国として有名なバルツ公国という国がある島だ。

そして、俺はフレイメル島にある数少ない自然溢れる緑の山、その麓の里に住んでいたのだ。

この里は一種族が固まって在住する形式とは異なり、普通の島と同じように種族間のわだかまりは一切無い。

故に、皆互いに寄り添い合って生きてきた筈だ。

しかし、無邪気ゆえの残酷さがある。

俺はハーヴィンだ。四種族の中では淘汰される弱者であり、活かせるのは商業のみ。

幼い頃は皆身体が小さく、身長の関係など無に等しかったが、年が明けるにつれ俺以外の体躯が大きくなっていった。

今の時代種族差別など滅多にないが、子供にとってはそんな常識無関係：結果的に、虐げられたのだ。

今までの友人に。

悲しみよりも、燃えるような怒りが湧き上がる。

気が付いたら目の前の大木が発火していた。自然火災と大人達が駆けつけて来たが、子供達の目は木よりも俺の手を見ていた。

当時何も理解していなかった俺は火が消えてほしいと心で願い、結果的にその場に火が無かったかのように消えた。音も立てずに。

だが、炎の跡は恐ろしい物で：木が焦げるどころか燃えた部分が抉れるように消失し、近くにあった水溜りが完全に蒸発していた。

幸運にも俺は炎のコントロールが出来ていたが、制御できなかつたら：想像もしたくない。

それから友人達は弱虫と罵ることは無くなったが、化物と呟く様にはなつた。

当然だ。俺だつてそうする。

そんな環境が嫌になつて、俺は大人達に相談したのだ。

前の不可解な火事も相まって、俺の言う事がすんなり受け入れられた。

ただ、証明とばかりに周囲に炎が広がらない場所に案内され、鉄塊を用意された。

曰く——『この鉄を液体にしてみせろ』

地面に流れ出ないように筒の中に置き、大人達が危険と感じ俺から離れると、すぐに開始した。

このとき俺が意識したのは、『燃えろ』では無く『溶けろ』。

生命ではなく物体に対面したために満遍なく振るわれる業火。7秒経つたときには完全に高温の泥が筒の中に収まっていた。

その日から一週間も経たないうちにバルツ公国の中心部に飛ばされた。

曰く——『お前は国にいる方が幸せだ。決して、俺達がお前を億劫に思つた訳ではない』。

結果的に幸せになつたかもな。しかし言い訳に過ぎないだろうに。

炎の力を売り文句に工場に預けられ、生活を保証する変わりに溶鉄の手伝いをする事になつた。

秒で金属を融解させる俺の火力を見てか中々に重宝され、働きに見合つた金額：お小遣いの様に感じていたが生活に困らない量を貰つた。

それが嬉しくて当時はかなり働いた物だ。

それから3年。9歳の事だ。

山から巨人と獣が合わさつた様な魔物が降りてきた。近くにいたから溶かした。

生命を融解させる温度を持つ炎に対し、少し自分で奇妙な気分を
持っていたが自信も付いた。

だが、人に対してはこの力は振るえない。人を燃やすなど言語道
断。

だから：町に盗賊団が襲ってきた時は何も出来なかった。

無差別に家を荒らし回り、金品を奪っては島を変えまた奪う。

質の悪い事に、そいつ等は騎空艇を持っていたのだ。

それが奪った物か、奪った金品で買ったものは定かでは無いが、子
供を人質に金品を奪い去っていく姿にムカついた。

が、逃げ足が早い為どうする事もできない。

そして、何を思ったのか夜中の工場に侵入して来た。

俺と同じ部屋で寝ている大人は皆既に様子を見に行っていた。

ちなみに大人はほぼドラフだ。

職人達は皆自分たちの作った盾を用意し、盗賊団に対し果敢に何処
かで見たシールドバツシュを打ち込んでいき、盗賊団は壊滅した。

しかし、一人だけは外に逃れ錯乱した様子で民家の子供を攫って騎
空艇の乗り場まで走っていった。

自分よりも幼い子の首にナイフを突き立て、狂ったように笑うその
姿を見て——心が爆発した。

今までの経験上あり得ない速度で周りの景色が通過し、俺の足は綺
麗に盗賊の頬に吸い込まれていった。

人質は足元に転がっており、盗賊はその真逆の方向に吹き飛んでい
た。心なしか頬が焦げていた気がする。

どうやら無自覚に炎の威力調整が成されていたようで、無機物、危
険な生物には温度の加減は無いが、危険が無い又は人に対しては出力
を下げている事が分かった。

しかし衝動のままに足から炎を出して飛ぶ経験はあれが最初で最
後だろう。

思った以上にこの炎は俺の心と似通っているようだ。

程なくして：助けた子供からこんな言葉が出た。

『きしさまみたいー』

この子は騎士の事を言ってるみたいだったが当時の俺は何を言っているのか分からなかった。

『岸…？生地？あ、キジ？』

みたいな反応だった筈だ。

仕方無いだろ。騎士は鎧を纏って武具を使う存在だ。

肉弾砲をかます騎士などいてたまるか。

きっとこの子は、人を助ける形を見て騎士と思ったのだろう。

大人達が駆けつけて、子供の言ってる事を理解した俺は、騎士というものに興味を持った。

貯まっていた金を初めて使い、騎士の本を読んだのだ。

——人を助け、誇りを胸に日々戦う勇者。

そんな事が書いてあった気がする。

『誇りか…』

正直に言う社会の役に立っている今の姿は自分にとっての誇りで、職を変えようなんて気はさらさら無かったのだが…。

本に書いてある一つの項目に釘付けになった。

【彼等の前には力も才能も関係ない！その心に秘めた勇気が本質なのだから！】

『んん…？』

——弱虫ハーヴェイン！

『……………う』

——チビスルト!!

過去の虐めがフラツシユバックし、無性にハーヴェインが弱いという事象を覆したくなった。

しかし自分は炎だけで剣なんて使えない…あれ？

武器を作るうちの工場なら何とかなるかも！という浅ましい考えで剣の指導を手当たり次第に要求した。

『剣について教えるだあ…？まあ武具を作る俺達にとって知識は持つとかなきゃ駄目な物だけだよお』

『頼む…毎日の三倍働いたって良い！給料も今のままで良いから!!』

『そこまで言うなら良いが…』

と言う事で古参ドラフに劍の指導をして貰ったが、死ぬほど劍が重い為筋トレに励んだ。

それから1年。

どうやったら騎士になれるか明確に考え始めた。

騎士なるとしてもハーヴィンの強さを証明する事が最優先…。

『アルビオン…？歳が足りないしキナ臭いから駄目だ！次』

『ヒュードラツへ…？実力主義っぽいしハーヴィンっただけで馬鹿にされそうだ！次』

『傭兵…？怪しくは駄目だ！次』

候補をどんどんかき消して、ある島が目についた。

『リュミエールの”聖”騎士団？』

聖、という文字にえらく何かを感じた。

当時の俺はバカだったのである。聖を神聖なものと判断し、ハーヴィンの強さ証明が難しいのなら高貴な物にのしあげて二度と尊厳を踏みにじれない様にすれば良いのだ！と一人納得していたのだ。

神聖な場所では差別も無いだろうから。

決めた俺に大人達が悪乗りし、士官学校へ通う為の資金を負担した。

もし騎士になれなくて俺が帰ってきてても職があるのだ。

寧ろ帰ってきて欲しいと思われたくらいに。

それだけ俺の炎は役に立っていたらしい。

そうして騎士団長を目指した俺は野望の為に奮闘していたのだ…。

これまでの経験上俺の性格は傲慢と形容できる程に出来上がり、傲岸不遜な態度を示してきたのだが…。

——本気で騎士を目指す奴等を見て、自分を燃やしたくなった。

「く、くそ…」

「立てるか」

「……ああ」

「ならばよし」

予選の第四戦目。

そこには膝を付いている巨体の男とそれに比べ小柄すぎる男が立っていた。

この試合は明らかに先程までの激戦とは異なる事象が重なった。

勝者はハーヴェイン族のスルト・ヴァーグナー。

試合時間は30秒にも満たず終了。

スルトは無傷。相手のデルジは膝に多少の火傷を負っているが、人体に支障はない。

内容は単純だった。

デルジは盾と剣を扱う戦闘スタイル。試合開始と同時に何故か目の前にいたスルトに度肝を抜かれ、盾を構えるも背後に回られ、やがてスルトの動きと共鳴するような炎に巻かれ、属性のないただの魔力を乗せた剣で風圧を起こし炎を振りまこうとするが、その時には既に首筋に剣が添えられていた。

余りの剣幕に教師は講評も付けられない。

単純に力量の差としか言えなかったのだ。

お互いの安否を確認したらスルトはもう控室に向かっていた。

会場全体は静寂に包まれている。

試合が一瞬で終わる事もあるだろう。しかしハーヴェインが金属の塊を振り回し、恐ろしい程の技量でドラフを追い詰めていった事実に啞然とするばかり。

そして驚くべき事にスルトの表情は無表情。

入学時には傲岸不遜、年が明ける頃には騎士の作法が染み付き、上から目線ではあるが驕りは消えた。

だが：ここまで無感情な男だったのだろうか？

断じて否。しかし勝利の喜びも、戦術の成功による安息も今の彼に

は感じられない。

感情の起伏を自ら抹消している。

彼の根底には未だにハーヴィン族のイメージを変えようという目的がある。

それでも、彼は変わった。

ハーヴィンを助けるといふ目的も：人助けという側面が変質したものであり、彼が真に望んだものは「理不尽な優劣が付く事象の完全消滅」。

照れ隠しなどでは無く、彼は表面上の心理としてハーヴィン族を至高の存在にのし上げようという自覚がある。

だが、彼は基本種族関係なく優劣の「劣」の部分に対して寛容であり、理不尽に【優】になる存在に途方もない反骨心がむき出しになる。幼子の命を脅かしてまで盗みを働く盗賊。

闘争本能のままに街を荒らす怪物。

種族的価値観に囚われ他を虐げる人間。

何時だつて彼が牙を向いたのは人の犠牲の上に立ち上位の存在となつた者。

スケールの違いに関係無く、彼はそれを無意識に憎悪の対象にしている。

——その起源は、何一つ自分の存在を肯定しなかつた里に対する憎しみ：単純に言えば無邪気な怒り。

実の親に化物と扱われる環境は実に憎ましい。

彼がコーリスの過去を聞いた時は不憫に思っていた。同情もした。涙も出そうになつた。

彼は涙脆いのだ。

そして：スルトは自分が惨めに思っていたのだ。

互いに過ぎた力を持って生まれ、親から捨てられ違う場所で愛を知った。

それが彼等の共通点だ。

しかし、相違点が一つある。

コーリスの人生は親から愛を得られず捨てられ愛情という概念を

持たぬ状態から始まったが、スルトは親が存命なので、愛を知っていた上で捨てられたのだ

彼の炎は常人とは違う。

それは温度、出力の話では無い。もつと摩訶不思議な物である。

それは、感情と共鳴して炎が渦巻くというもの。

彼が弱虫と罵られた時からなのだ：超高温の火を放出出来るようになったのは。

爆発しても足りない屈辱からくる怒り、親から見放された事による憎しみ、子供の命を奪わんとする愚者への激情。

それがコーリスの炎を模っていた。

彼は気づいている。職人達と暮らし、安らぎを得る度に出力が弱まっていた事を。

士官学校で友人と過ごし、豊かな時間を過ごす度に負ける回数が増えていった事を。

だから——彼は厳選した。

迷えば炎が揺らぐ。

悲しめば炎が収まり温度が下がる。

怒れば物体を溶かす業火。

憎めば巻き取るような炎。

そして：見つめれば真つ直ぐな聖火に。

彼は決めたのだ。

リュミエール聖騎士団長になるという夢、その目標を達成する為にどんな事でも受け入れると。

迷いも断ち切る。

悲しみを振り切ろう。

怒りも忘れ。

憎しみよりも大事な事。

只ひたすら愚直にこの大会を勝ち抜くと決意し——余分な思考を捨てたのが今のスルトである。

彼は誰にも負けない。

誰にも止められない。

水を蒸発させ、風を飲み込み、土を焼く。
光に匹敵し、闇を掻き消す。

——全てを包み込む霧でさえ、彼は吹き散らしてみせる。

しかし…この場において自分の殻を破ったのは彼だけでは無い。

もう既に始まった準決勝の場から、何かを吹き飛ばすような轟音が
鳴り響く。

それは自分の好敵手による物だと理解し、スルトの奮起は収まる事
をやめた。

『なんで!!!』

準決勝。

予選でスルト・ヴァーグナーが最後の勝利を納めた事で準決勝の組
み合わせが決定した。

といっても、トーナメント戦なので勝者が誰と当たるかなど分かり
きっていた事だ。

二回ある内の一回戦目。

カードはコーリス対ルブロ。

ルブロとはヒューマン族の剣士。

身体強化魔法による攻防一体の戦士で、攻撃魔法は風。

コーリスが一回戦目に戦ったロイスより強いかと聞かれれば正直
見劣りはしてしまうだろう。

戦いというものは相性が付き纏う物。

幾ら自分の闘い方を極めようと弱点を都合良く突かれれば無に帰
す。

そして、彼は余り攻撃に魔法を使わず、肉体戦闘を仕掛ける戦い方だった。

それはコーリスに対して余りにも相性が悪い。

にも関わらず、鍛えた身体で何とか劣勢を覆し：互角の剣技を繰り広げていた筈だ。

：途端、空気が変わった。

『――曲げられないか』

独り言のように小さく呟かれたその言葉を確かにルブロは聞いた。少なくとも相手に向けた言葉ではない事をルブロは理解した。

瞬間、壁に叩きつけられていた。

襲い来る激痛に疑問を懐き続けながらも、彼は勝つための思考を捨てなかった。

そして、一瞬で結論に至った。

『防御魔法を：剣の腹に纏わせたのか』

攻撃を食らった際の打撃音。余りにも広く伝わる痛み。

遠くへ飛ばされる程の威力。

その結論へ至るための材料は整っていた。

『間違い無い。僕の攻撃を受けている途中に肉体に強化魔法を掛けていたな……！』

身体強化魔法は人体を動かす騎士という役職において基本中の基本だが、掛けるまでの時間が長く、実戦では前もって掛ける等をしておく必要がある。

身体強化魔法の向上は、如何にして掛けるまでの時間を縮められるか。

この決闘において、試合前から仕掛ける事は許されない為、受けのコーリスが責めない時間を利用し、ルブロは肉体を強化したが、まさか斬り結んでいる途中に相手も掛け出すとは思わなかった。

完璧な感知能力を持つコーリスには容易い事なのだろう。

そんな才能による理不尽に：彼は憤った。

「ふざけるなあああ!!」

あまり得意では無い属性魔法の風を足に纏わせ跳躍、コーリスに猛突進していく。

見るからに猪突猛進な攻撃に、残酷な程に反応する霧。

突進する前から自らの足元に充満していた霧がコーリスの脳に伝わり…そして。

攻撃がコーリスに当たる寸前、壁に阻まれ身を地に落とす。

そして背中に柄を叩き込まれ、ルブロは暗闇に意識を落とした。

「…勝者、コーリス」

歯止めが悪い審判とは裏腹に湧き上がる観客。

唯一黙って見ているのは教師と生徒達だけだ。

教師はコーリスに近付く。

「何故気絶させたのです?」

「怒りによる突進を見て、止めるべきだと判断しました」

「それには確かに同感ですね。しかし壁にまで激突をさせる攻撃…貴方は危険とは思わなかったのですか?」

「……」

「これは次に活かせではありませんね。単純に反省しなさいと言う事です。焦り過ぎですよ。スルトさんがそこまで気になりますか」

「はい…」

「彼もまた、少し間違えば危険な攻撃をするでしょう。傭兵の在り方としては良きもの…しかし騎士としては感情を捨て目標に固執する事が何より恥ずべき事」

「…すいませんでした」

「分かればよろしい。ではこれで」

リエスは次の試合に向けて歩き出すが、懸念は拭い冷めない物だっ

た。

（確かに目標の為に容赦を捨てる事はまあ…多少は利になる事です。だが、その為は何をしてでも成し遂げるといふ思考は危ういのですよ…。強い力を持つものなら尚更気を付けるべきです。……まあ彼等もまだまだ子供ですしね。自製の心を持たせておくべきでしたか…）

人は頂点に近付く程に焦り、平常心を保てなくなる。それが顕著な子供だからこそ、何事も起きないようリエスは祈るのだった。

12. Competitive spirit

「——コーリス・オーロリア」

「——スルト・ヴァーグナー」

「いざ——尋常に……」

「勝負!!」

騎士となるべき者の決闘場。

才と努力を日々積み重ねた者だけが勝ち残る事を意味する。

その場で剣を振るい、誇りを刻み国にその身を献上する事を約束される。

それがエル・グロリアスという名前の意味する事象だ。

「やっぱりか……」

準決勝で俺が相手を気絶させた事で勝ったが、まさかこうも早く相手が決まると思っただけはなかった。

二回目の準決勝が終わり、トーナメントに載った名前はスルト・ヴァーグナー。

…矢張りか。

心の中で口に出した感情と同じものを呟く。

予選の時点でそもそもスルトの様子は目を見張る物があり、何か何時と様子が異なっていた。

その疑問に対し、予選のあいつの戦闘を見て合点がいった。

恐らくは…勝利の為に余分な感情を消し、勝ち抜くという一つの目標に視点を定めて行動しているのだ。

奴の炎は感情と同義。燃やすと心に決めて発動するのでは無く、感情の起伏によって広がるもの。

怒りによって広がり、悲しみによって狭まる。

大変わかりやすいが、唯一良く分からない事がある。それは、物事を真摯に見つめる時には炎が一番良く動く事だ。

温度が著しく上昇する訳でもなく、唯動きに迷いが無くなり、奴が望むように動く。

それが一番研ぎ澄まされている今が奴の最強。

決勝戦が始まる事によって更に奴の目標への執着心が高くなる。

無論、俺も勝つ為への行動に迷いを断ち切ろうした。

結果が先程の防御魔法による殴打。相手を壁に叩き付けるという暴挙。

しかし俺はドラフ程の力は無いし、身体強化魔法も掛けていなかった。

唯：力が、拳から途方もない力が湧いてきて——人を殴り殺せそうな気がして止まなかった。

自惚れというのだろうか：しかし本能的に確信めいた物があつたのだ。

リエス先生は気付いていた筈だが、敢えて言わなかつただろう。

あの人は良い意味で放任主義だ。自分で解決するべき問題と判断してくれたのだと思う。

「ままならぬ物だな…」

唐突に決心をした所で意味は無いか。

今日の為に精神を統一せしめたアイツが上手だった訳だ。

今まで何らかの形で争ってきた訳だが、それは口での言い合いが大半という恥ずかしい事実。実際手合わせをする時は高揚している時のノリと言える。

今回ばかりは派手にぶつかり合うことになったが。

多分あいつの大火力を正面から受ける事になるだろう。火とは人体にとって忌むべき物であり、魔法による使役を抜けば危険極まりない代物である。

俺の防壁は属性による弱点は無く、単純な衝撃によって破壊される物だ。

火によって破られるという事は、魔力で構成された壁が溶けるほど

の温度があるという事。

：これはかなり消耗するが。

防御魔法と霧魔法の兼用をするしかない。

剣に防壁魔法を纏わせた打撃は素早いスルトにとって悪手。感知、そして防御。隙を見つけてカウンター。

結局この戦い方に行き着く自分に溜息を吐く。

いつも悩んでおきながら、戦い方は不変的。無駄な時間を過ごしていると思えない。

いや、鬱々しい感情は捨てておこう。

どう足掻こうと死力を尽くす戦いになる事は確実なのだから。

この戦い：予想するに短期決戦にはならないだろう。そこは俺の努力次第だ。

後は、奴の戦い方によるな。

臨機応変で対応し――

『――ようと思ったのだがなあ!!』

噓せ返る程の熱気。

四方八方に絶え間なく襲い来る剣撃。

炎に触れなくとも空気をも取り込み熱風となって襲いかかってくる為に、目を上手く開けていられない。

あと…

「いやなんで避けに行くんですか!? 攻めましよう果敢に! 奥手! コーリスさん奥手すぎますよ!!」

「図に乗るな有利属性がア!」

一回戦で戦ったロイスが非常に煩い。腰の痛みが直ったのか身を乗り出してギャーギャーと叫ぶ。

他のクラスメイトから羽交い締めにも尚野次を飛ばす。取

り敢えず後で泣かすでしょう。

水属性使いだからか火に対して逃げるといふ思考が無いようだ。

あんな奴の事は無視………出来ないな。

辛うじてスルトの頭には霧が漂っている為、滅多に使わない段階的な濃さによる霧の効力——それらを四段階に区別したものを行使。

第一段階【霞^{ヘイヌ}】

それは薄く、範囲は狭い。広げようとするなら相当に魔力を注ぎ込む必要がある。

主に感知にしか使われない為、補助的な位置付けになる。

第二段階【霧^{ミスト}】

第一段階よりも少しだけ濃くなった霧。範囲はあまり変わらない。

この霧に影響を受けた者は思考が鈍くなり、半端な構えでは茫然自失の状態となる。

第三段階【霧^{フオグ}】

明確に俺の魔力を定義つけた名前。

更に濃くなり、見た目は自然発生する霧そのもの。

この霧に影響を受けた者は霧の中に入ってから今に至るまでの記憶を消される。その人間の人生の記憶が消える訳では無い。ただ霧の中で何をしたか、何をしようとしたかを忘れるだけである。

だが、記憶が消えるまでは2分程の時間がかかる。

第四段階【■■■】

今スルトに使っているのは第二段階。

思考を鈍らせ少しでも動きを止める為だ。だが、第三段階へ至る為の一手が足りない。

濃くするにつれ魔力を使うのだが、短い時間で到れるのは第二段階までであり、次に至るためには集中する期間を要する。しかしスルトの攻撃を捌き、霧の形を保たせ補強するという課題を並行処理出来るわけがない。

俺はとことん手数に弱いらしい。

そして、俺は散々『霧を出す』と言っているが、細かく原理を追求すれば単純な事では無いと分かった。

今でも余り理解してはいないが……。霧は水蒸気を含んだ大気の温度が下がる事で生じる物だ。大気に含まれていた水蒸気が空中に留まる事でそこら中に発生する事が出来る。

魔法とは詠唱によって自らの魔力を呼び覚ましたり、または杖を介し外へ放出する等の使い方ががあるが、人体から火や水を出す原理を説明しろと言われても困るだろう。

皆、出来てしまうのだから。

だから、俺も深くは考えていない。コントロールさえできれば些細な事と考える。

恐らくは俺の魔力には大気に影響を与え、発生した霧を操作する原理があるのだろうが：理解出来ない。

その点で言えば感情で全てが変わるスルトの方が珍しいだろう。

「そこ、危険だぞ」

「……ッ」

後退した先には蠟燭の火の如き不変の赤。設置された炎を防壁で覆い消し、向かい来る剣を弾く。

だが、度重なる鉄の衝突に耐えきれなかったのか剣の先の刃溢れが目立つ様になってきた。

それは奴の熱の影響もあるのだろう。刃物を熱するとなまくらとなり使い物にならない。

融解する程の温度では無いが、常に炎に炙られ続けると少しの綻びで耐久性が著しく下がる可能性が高い。

ならば……こうするまで。

「怯め」

劈く衝突音。

誰もが鐘を鳴らしたような異音に目を見張る。

劍の補強も兼ね、ありったけの魔力を注ぎ込んで超高密度かつ硬度が高い物体を作り上げる。

先の試合では巨大な長方形の棒に見立て、攻撃範囲を広める為に使ったが、今の応用は劍の形を残したまま使用するという物。

相手が真面目に劍を受ける程に得物に掛かる負荷は相当な物。回避の姿勢では無く防御の姿勢を取ってしまったが故の好機。

しかしスルトの劍は折れない。いや、炎の勢いでこちらの劍を押し戻した…。

俺はそここの面積を持つ騎士劍を使っている為、案外折れる物だと判断したが…：奴の炎の矛先は俺では無く劍を押し戻す為の勢いを作り出す事に執着したらしい。

奴は生き物には手加減をする。

だがノーリスクで本気の炎を打てるチャンスが無駄にはしない。

魔力量が関係しない故の無限。スルトを無力化したいのなら廃人にでもし無ければならない。

生物の中で最も感情が発達したと言われる人間に於いて、奴の力は相性が良すぎる。

「少し焦ったぞ」

そう吐き捨てられ、加速した足払いを食らい地面に転がる。

奴は今にも劍を突き付けようとするだろうが、又もや好機。

「確かに焦ったな」

吐き捨てられた言葉を広い戻し、魔力を練る。

もう何度作ったから分からない防壁を再構築し、今度は劍筋に対し斜めに差し込むように防壁を当てる。

銃弾に弾かれた刃物の様に奴の劍が飛ばされ、ダメ押しのの如く奴を背中から防壁で押し、此方に倒れ込む様に動かす。

「と獲った!!」

何故かロイスと二人で叫ぶ勝利の確信。

倒れ込んできたスルトに対し劍を捨て、制服の項部分と襟を掴み、逆に仰向けに叩き付ける。

そして即座に全身を型どるように防壁もとい防壁スーツを纏い、袈

袈固めをする。

魔法を纏ったのは燃え上がる奴の肉体から身を守るためだ。幾ら人に死を与えないといつても火に触れたら火傷くらいはしてしまう。人はどんなに覚悟をしても痛みから逃れる事は不可能。身体を壊しながら目標を実行出来るのは死も恐れぬ超人か破綻者のみ。だから痛みを受けない様にする。

そして、ハーヴェインの筋力では全身全霊の袈袈固めを逃れる事は不可能だろう。

「ツウ!!!」

唸るように藻掻くスルトだがもう遅いと確信する。

この大会の勝利条件は、相手が気絶するか無力化された場合。

聖騎士にとつての無力化、それは【相手が負けを認めた場合】と【相手を何の弊害も無く殺せる一歩手前の場合】、そして【相手の自由を奪い拘束した場合】である。

生憎魔力はあと五割程残っている。

今俺の壁を溶かせないスルトが現状を打破し、新たに構築される壁を破壊する事は出来ないと考える。

スルトの感情は下向きな物となっていく。

勝つ為の迷いない思考の中に、密かに浮上してきた不安。負けるかもしれないという思考が奴の炎を冷たくする。

そして…忘れた頃にも霧の効力はやってくるだろう。

迷った思考に思考自体を鈍らせる魔性の霧。人を混乱させるのに時間は掛からなかった。

俺は実感した。今だけは勝利という傲慢に浸れると。

——だが、それも一瞬の事だった。

ヴァーミリオン
炎纏

瞬間。奴が技名らしき物を呟いた瞬間だった。

スルトの全身に凄まじい熱気が下から上へ循環し、その勢いはこちらが一切触れなくても分かる程に危うい。

端的に言うならば、サウナだろう。通常とは比べ物にならない程の熱気に会場が蒸されているようだ。

そして——奴は俺の両腕を掴み。

「ほんの少し焦ったぞ」

何時もの神経を逆撫でする様な口調に戻りながら、獰猛な笑みを浮かべ、射出される業火による腕力の驚異的な補助を受け、力づくで俺の拘束を破り……蹴り飛ばしてきた。

恐ろしい速度で腹を蹴られ、壁に到達する事は無いまでもかなりの距離を転がり止まる。

そこで顔を上げて初めて拝んだスルトの外形は最早スルト・ヴァーグナーでは無く——

——炎スルトの化身トそのものだった。

「……」

正直、奴の名前の由来が炎の星晶獣であるスルトとは知っていたが、伝承にある通り炎まみれの姿になるとは思わなかった。

ヴァーミリオンとは朱色を表す言葉だ。

炎の朱、それを体現した姿が奴の切り札だった訳だ。

炎を纏った手足はそれぞれが尖り爪を形成しており、胸の中央には魂を表現するかの様な球型の炎が渦巻いている。赤い直線が入った黒髪は炎と共に舞い上がり、象徴的な黒目は橙色に光っている。

剣も持ち合わせず、体術で圧倒的なレパトリーを得られ、霧の無効化。

打つ手は無いが、取り敢えず剣を拾いに行く方針で戦おう。

先程と同じように——否、両側から防壁を出現させ、動きを封じる。

壁は透明に近く、目視で避けるのは難しい。結果的に壁に挟まれる様にして拘束されたスルト。だが、あのスルトなら壁を溶かしても可笑しくは無い。その火力を測る為にも必要な手段だった。

念の為：足に身体強化魔法を掛け走力を上げる。そして剣を拾う為に走り出す。が、

「やらせん」

目の前にスルトがいた。

落ちていた剣を更に遠くへ弾かれ、此方の身体を捉えようと飛び込んでくる。それを全力で躲し、距離を取る。……結果的に走力を上げておいて良かったな。

確かにスルトの虚を突き壁を押し当てる事は出来たのだろうが、溶かすなんて物では無かった。近くに寄っただけで壁が灰の様に砕けていったのだ。

それにより拘束される前に俺の目の前に躍り出たのだろう。くそつたれめ。

更に同じく剣を飛ばされていたスルトだが、剣に残っていた熱気が主に呼応する様に燃え盛り、奴の手に飛んでいった。加えて炎の射出による擬似的な空中浮遊。

もう何でもありである。

「……やばい」

正直もう頼れるのは地味に残り香となっている霧。

掻き消されたと言っても霧は霧散するだけで完全な消滅はあり得ない。

その霧を掻き集め、第三段階に移行させ思考の記憶を奪う。その隙に剣を回収し：捨て身で最後の打ち合いに望むしかない。

挑むしか無いではないか。

水でも浴びたい気分だ。しかしこれから浴びるのは水風呂無しは無限サウナ。

自らに吐ける情報が無い拷問みたいな物だ。

クソ：恨むぞ、スルトに負けた奴等！ロイスがスルトに当たって

れば良いものを…!

もう知らん。当たって砕けろだ。

「……………いくぞ」

「葛藤だな…だが俺だつて熱い。身を削っているのはお互いだ」

「ではそこまで熱くなれる感情とは何だ」

「それはな、負けん気だ」

「ああ…」

妙に納得した。

負けず嫌いは良くも悪くも熱くなる性質がある。コイツの「勝つ為にどんな事でも受け入れてやる!」という気持ちに【絶対に負けん!!!】という勝利への執着を上乗せした事であなつたのだろう。

それを確信して少し楽な気持ちになった。だつて…

「いいな、それ」

「うん?」

「俺にも出てきたぞ……負けん気」

負けず嫌いなのはこつちも一緒なのだから。

13.” Rejoicing or ” Desp
air”

「な、なんですか…あれは」

「多分、スルト君とコーリス君」

「む、ルブロさんですか。目を覚ましたのですね」

「…まあね」

静まり返った観客席では、予選でコーリスと戦ったロイス、そして準決勝で戦ったルブロが現状を語り合っている。

お互いにコーリスに敗北した身故、そしてクラスメイトとして高めあってきた故に今決勝戦で戦っている二人の力は分かっていた筈だった。

「……」

「ありやりや。コーリスさんがリンチ状態です…なんか複雑」

「君はコーリス君の肩を随分持つけど何かあるのか？」

「自分が負けた相手です。それが今一方的にやられていると力関係の差を強く感じちゃいますから…」

「同感だ。ただ、戦い方の相性があるにしろ、今のスルト君には誰も勝てない気がするね。虚を突けない。実際僕は隙を付かれて彼に身体強化を使わせてしまったが、今の彼にはそのような仕掛け方が出来ない」

「ああー派手に吹っ飛びましたからね」

「…思い出したくもない」

「でも、一つだけ間違ってる点ありますよ」

「？」

「コーリスさん、身体強化魔法なんて使ってませんでしたよ」

「……は？」

「いやー筋肉って凄いですね人をあそこまで吹っ飛ばせるなんて」

「そんな訳があるか！人智を超えている…13の男が人を殴り飛ばせるか。エルーンだぞー！」

「でも見た感じ身体に何も施されてませんでしたよー」
「何なんだよ……あいつ等は」

最後の呟きは、クラスの総評とも言えた。

暑い怠い熱い痛い具合悪い寝たい。

もうこのまま倒れてしまいたいくらいには身体の調子が悪かった。だが、寝るには目の前の赤い物体を倒さなくてはいけないらしい。上等だ。負けず嫌いとは性質が悪い物。

ねちつこく攻め続けてやろう。

半分の既存魔力。半分と言っても常人の三倍はある筈だ。

こればかりは特殊な生まれつきに感謝する他無い。

非凡同士のぶつかり合いだが…最初に当たってくるのはあちらだろう。

攻撃と防御。

面白い程に分かれた俺達の得意分野はここでも発揮される訳だ。

「行くぞオ!!」

「来いー!」

頬を釣り上げ八重歯を出しながら突撃して来るスルト。

剣の切っ先に炎の凝縮体を浮かび上がらせ、大砲の一撃と何ら遜色の無い一撃が此方に向かって飛んでくる。

「アアア……………!!!」

剣を地面に刺す。そしえ一秒後の衝撃に添え、奴の一撃ただ一つを防ぐ大防壁を両手で象る。

ギリギリまで力を込め続け、烈火の一撃が俺を吹き飛ばす瞬間。それを待ち続け尚溜める。

「ヴァルカン・インフェルノオオオオオ!!」

「エンシエアント・イアス!!」

その威力は——大地を震撼させ。
人々の安寧を踏み躪る炎火の如く。

——だが耐えろ!!ここで足を少しでも浮かせれば俺の負けだ!
風圧と攻撃の負担で身体が浮きそうになるも無理矢理膝を付き堪える。

空間に固定された壁が揺れる。

一撃目に衝突。二撃目に焼却。

余波で身体が痺れる程の爆発で壁が抉れる。

壁越しでも伝わる熱は確実に壁を壊す力を持つという証拠。

——作り続ける!!壊された所で関係無い!

大砲をも防ぎ切る大防壁は容易く壊され、二枚目の作成を余儀無くされる。

片手で壁の保持をしながらもう片方の手を構築に使う。身体を循環する魔力の枯渇、そして身体からスルトの背後に霧を出し続ける事による力の酷使。

攻撃をまともに受けていないが、鼻と目から血を出し続ける姿は面妖な物なのだろう。

だがそんな物ではスルトは躊躇わない。

——何時間でも壁を持たせろ!!霧が奴の身体に到達するまで!

霧による一時的記憶の消去。

突撃による風圧で霧を自動的に撒いているが、奴は霧が近寄っている事すら解っていない。

突撃中にこれから何をし続けるかを忘れさせる事で一時的な行動速度を低下させる事が出来る。

少しだけで良い。高密度な霧を奴に纏わせれば……

「ガ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「はアアアアアアアアア!!!」

自分が何をしているのか。

その間にスルトは今悩まされていると言う事だ。

だが、そもそも第三段階は霧に入ってから記憶を消す物だ。

スルトは霧の影響を受ける前から突撃していた。

何故記憶に影響が…？

それを解き明かすのは難しい事では無かった。

奴が形態を変化させた時、周りに漂っていた第二段階の霧。効果は人の意識を鈍らせるという物。

それはスルトの頑固たる意思が跳ね除けていた。

しかしそれが幸いに今の状況を作り出している。霧の影響を受けていないが為、それが接近している事に気付いていなかったのだ。

魔力を込め霧を濃密にした時、薄つすらとスルトに干渉していた第二段階の霧が昇華され…第三段階へと位を上げていた。

だが、記憶を奪うには不十分な密度だった。

それ故に、後から作った霧で元々纏わせていた霧を補強し、無事行動の意味を忘れされる事が出来た。

——ただの幸運。運命の巡り合わせなのか…それは分からない。

自分は神も幽霊も悪魔も信じられなかった性分だが。

…今だけは運命フエイトエピソードの瞬間と擲揄やゆされる奇跡に感謝するべきだと思っ
た。

勝利への希望が開け、俺は真つ直ぐに駆けていった。

「ぐッ…!? 苔脅しがあー！」

霧で記憶を失ったが、その中で新たな戦い方を組み上げたらしく、片足に炎を宿らせ噴出。

高速回転と身体の捻りで剣を此方に振るってくる。

対して俺は素手。

「ち、ちよつと!!何やってるんです!?!」

「正気か!?!」

「コーリス……?」

観客席の困惑も解る。

ただ不思議と……これが最適解だと判断してしまった様だ。

そう実感して右手に防御魔法を纏わせ――

――炎剣の切っ先が当たるように手を振るった。

『化物だああ!!!』

『に、にげろ!』

『邪魔よ!!どいてえ!』

『ママ……パパ……』

忌まわしい記憶。

7年前、故郷に巨大な獣が現れた時の事だった。

阿鼻叫喚。人が人を押し、前へ前へと自らの保身の為に他を淘汰する醜い人の形。

しかしそれも仕方の無い事だろう。

既に死人が出た。

数十秒前に殿しんがりを努め化物を退けようとした勇敢な大人。

だが、その大人が蹴散らされる姿を見たからこそ絶望も際立つという物。そして偶然近くにいた老人は、猛獣の爪による袈裟状の大傷を受け死亡。

何かの間違いかと思った。

トラモントは自然溢れる島。その為にモンスターも多少なりとも

存在する。

だからこそ、民家と遜色の無い体格の獣を捕捉出来ない筈が無かったのだ。長年眠り続けていたのか、鳴りを潜めていたのかは定かでは無い。

村が喚いた理由は、不意打ちに近い衝撃だったからだ。

——逃げるぞ、コーリスや。

——う、うんっ！

幼い頃の自分は義父に先導され、即座に家に避難した。

冷静な大人達が短時間で見抜いた事がある。あの獣は人には反応するが、ただ目の前にある建築物を壊すような性格ではないことが分かった。

そして嗅覚が退化している事も。身体の老化による思考力または五感の劣化。あの獰猛な獣は老体だったのだ。

村長である養父は直ぐに騎空士達への依頼書を描き、村で飼っている鳥型モンスターに持たせ、観光地として有名なアウギユステ列島に送った。

——こんな小島を救ってくださる者がいると良いがな…

と、一抹の希望を抱いて。

間もなくして、鎧を纏った集団が村を訪れた。

騎空士達にしては揃いすぎている身なり。碧々と輝く鎧を着こなした戦士達が七人程助太刀にやって来たのだ。

完全な武装をした彼らにとって、徘徊老人のように彷徨う魔物の討伐は簡単な物だったのだろう。

魔物が倒された瞬間、閉ざされた町からは人が溢れ出し、戦士たちにお礼を言っていた。

村長からは報酬金、その他村人達は食物などを献上しようのしたが、戦士達は跳ね除けこう述べた。

——報酬など不要。我等リユミエール聖騎士団、自らの正義に従っ

て人々を助けたのです。数々のお礼だけで我々は希望を持って往けるのです。それよりも死者の弔いが先でしょう。

村の未来を救い、尚死者の弔いまで手伝う精神は自分にとって輝かしい物。

くどいが何度でも言おう。

俺はこの姿に憧れたのだと。

——憧れるだけ。

騎士を目指そうとした。

身体を鍛えた。人を救おうと決意してからは村の人々の手助けを心掛けた。

義父が死んだ。

泣き喚いた。沢山の人々の心に救われた。新しい家族に迎えられた。

森で○○○とフィラに会った。泣いていた。迷子な上に霧に囲まれ家に帰れないらしい。

送ってやった。相手の親に感謝された。父親の顔を見てハツとした。

その家族と仲良くなった。

○○○が友達を作りたいと言ったので村に連れてきた。大人はともかくエルーンの子供が俺以外だと一人もいなかった上に、山に住んでる事が珍しかったらしく、注目を浴びていた。

涙目だった。人見知りらしい。知らん、頑張れと言ったら家に帰りたいと言われた。帰らした。

フィラが病気になった。

謎の難病という絶望は子供ながらも理解できた。

空元気が辛い。

○○○と喧嘩をした。思春期とフィラの事も相まって鬱憤が溜まっ

ているのだろう。

俺に出来ることは無かった。

数々の事象が組み合わさって、俺の夢は出来ている。

身体を鍛え、木剣を不器用ながらも作り、剣術を扱える者に師事したりもした。

士官学校で戦術と歴史を学び頭脳を鍛えた。

それらの経験は全て今の決闘に活かされていると感じる。

だが、俺が今追憶したのは。

——父の、拳だった。

—————

「：フウウウウウ」

「な、なにい!？」

振るわれた剣に対して俺が取った最適解。

それは奴の獲物を掴む事だった。

「ええええええええ!？」

どっかで叫び声が聞こえた。

多分ロイスだ。まあそれはどうでも良い。

確かに剣や炎を防壁で直接防ぐ事は正解だが、拳で直接刃物に触れるなんてのは理解できないだろう。

人の命を奪える刃物に対し、如何に予防策を持つかが人体を触れさせる等まともな精神では出来ない。

人には恐怖心というリミッターがある。それを邪魔と思う人もい

るだろうが、恐怖という拘束具があるからこそ人は死を回避できる事もある。

それを完全に無視した行動は、奴等にとっては理解できない物。——しかし頭にある父の姿の前ではどんな行動よりも正しいと本能的に実感した。

「離せ!!」

獲物を封じられたスルトはまともな判断を下せない。

霧による混乱、そして攻撃への対応の不可解。

奴が出来る事は剣に炎を滾らせ俺に拘束を解かせようと粘るだけだ。

しかし焦った感情では炎も弱まるというもの。

「ハアアアアアアアアアア!!!」

「な、ま、まさか!!」

掴んだ剣を離さない。

底から湧いてくる腕力。喉がはち切れんばかりに叫んだ叫び声。

それ等が織りなす結果はつまり……

——バキッ

スルトの剣を折る音が響いた。

今度は観客席の全員がざわめいた。

クラスメイトどころか、数々の騎士達を見てきた騎士国の王達ですら驚愕を隠しきれない。

…やってやったと少し自分が誇らしいが、調子に乗るのは良くな

い。

異常者を見る目を向けてきながらも足払いを打ち込んでくるが、全力の力を持って足払いを此方も行い、相殺を上回る効果を発揮。

炎の補助が無ければハーヴィンの筋力を打ち負かす事は可能。尚かつ剣をブチ折る謎筋力が湧く俺が負ける道理は無い。

逆に奴を転ばせる。

「負け、るかアアアアア」

「シイイツ!!!」

全力を出して戦う者同士譲れない物がある。

言うまでもなく勝利。

その執念をまたもや再燃させたコーリスの速度が上昇する。

——折れた剣に炎を纏わせ転びながらも斬り上げる。

腕に拳を纏いガード。

——魔力の渦による熱気の充満。

無視。気合で耐える。

——背後からの魔力奇襲。

予め張ってあった防壁で防ぐ。

霧で頼っていた感知を全て眼で判断し完封。

最後の手段として奴は炎の突撃を繰り返してくるだろう。

「ヴァルカン……インフェルノォ！」

剣が折れたからか威力は半減していると予測する大技に向かい俺はまた攻撃に飛び込んでいく。

「さつきはキツかったが……次は掻き消す！」

突撃に伴い剣の先が衝突すると同時に、足に纏わせた筒状の防壁で剣を蹴り威力を殺す。

剣を離さないスルトは一緒になって飛ばされるが、まだ余力があるのか受け身を取る。

——それを見て勝ちを確信した。

防ぐなら結構。

乾坤一擲の全力を叩き込む。

狙うは中央。奴が防御する為に構えるであろう剣諸共構わない。

全身全霊の力を感じ、駆け出した。

「……な」

その走力、スルトが体制を立て直した瞬間と同時に目の前へ到達出来る程。

思わず奴は回避では無く剣による防御を重視した。

「予想通り」

心の底から笑い、決着を付けるべく腰を沈める。

イメージするはトラモン^{霧の島}トでの自分では無く、それより昔^暗での父。父が戦っている姿を見た記憶は無いが、戦いに身を置いていた存在である気がしたのだ。

或いは自分がそんな存在に生まれついた実感か。

「——キ」

足を曲げ。

腰を捻り。
肩を開く。
拳を握り。
前を見る。
穿つは剣。

本能で渾身と思える一撃を放つ。

「エエエエエエエエエエエエツ!!!」

空間を支配するかのように劈く人外の雄叫び。
それと同時に起きる金属がひび割れる音、そして倒壊する壁の一部。

幸い観客席に異常は無い。
決闘場に立っていたのは――

「…つかれたあ」

――疲れた顔をしているコーリスだけだった。

「――」

壁に激突し、意識を刈り取られたスルトの容態を審判は見に行き、
勝敗を判断する。

そして――

「勝者……コーリス・オーロリア!!」

瞬間、観客席から惜しみの無い拍手が広がった。
クラスメイトからは勝利への祝福。
有権者からは決闘への惜しみない感動。
聖王は新たな騎士の誕生を喜んで。

この場で唯一の経験を噛み締めたのは——紛れも無くコーリス・オーロリア唯一人だったのだ。

その後彼は聖王直々に言葉を受けた。また、大会で戦った小さな騎士達も『我が国も安泰だな』という言葉を送られた。

コーリスは純金で出来たトロフィーを貰い、なるべくスルトに触らせる事の無いように決意し、部屋に飾った。

士官学校はまだ卒業の時期では無いものの、もう思い残す事は無いようだった。

しかしスルトだけはリベンジを考えているようで、寮で泣き喚きながらコーリスと食事を取る風景は異様だった。

新聞記事では彼らの戦闘風景が連連と書き連ねられており、一種の物語の様だと民衆は思ったとか。

一時的な勝利を得ただけでも、きっとコーリスは成長したのだらう。

限界を超えた魔力の使用、度重なる幸運と謎の力が合わさった故の

勝利。彼自身、これからも勝ち続けるつもりではあるが、現実を見てみると二度目は無いな、とも思っている。

それでも大きな進歩。

幼き日に抱いた夢を実現させる一步を大きく踏み出したと言える。う。

しかし、三週間後。

そんな希望と祝福を受けた彼に、ある情報が飛び込んで来た。島の新聞、そして全ての民に配られた用紙に書いてあった指令。

それは――

――ファータ・グランデ空域全土へ告ぐ。只今を持って霧の島・トラモントへの渡航及び輸出を一切禁止する事を決定した。今の状況、そして安定性を考慮するのなら今後一切この取り決めが破棄される事は無く、異議を申し立てた所で意味は無い。之はファータ・グランデ全空域の指導者と会談した後に決定した事である。

：彼が得たのは祝福か？それとも絶望か。

それは言うまでも無いだろう。

――序章 完。

1章 リュミエールの路次

14. Dahlia's emotions

「え」

朝が来た。

朝起きて、寮でご飯を食べて。

服を着替えて。

何時もと同じく新聞に目を通した。

見るのは数々の島の情景。

文字でしか表現された多くの島は興味を唆るに妥当な代物であり、それを見るだけでも冒険をした気分である。

中でも出会いの島と呼ばれるガロンゾ、観光地としてのアウギユステは鉄板のネタである。

だが、小さな項目であれどトラモントが載る日もある。

トラモントといえばラクリモサ、という風潮がある。

ラクリモサとは日の光が当たらない場所で育つ希少な花である。

美しい紫色の花弁は収集家達の注目を集め、取引が行われる事も多かった程だ。

後は大して注目される事も無いが、品種が強く植えてしまえば何処でも育ちそうな花もあった。

その花はラクリモサと比べて希少さに欠けるが、フィラが好んでいた事を思い出した。

思い出に耽って新聞を読み終わり、体を伸ばして欠伸をしていると郵便入れに何かが入った音がした。

あの馬鹿はまだ寝ているし、グルシさんは馬鹿の飯を作るのに力を入れていて途中なので、俺が取りに行くことにした。

白い封筒。それには【緊急通告】と書いてあった。

何か良からぬ事でもあったのかと思いい中身の用紙を取り出し、それを読もうとした。

【トラモントをこれより渡航禁——】

一行目のこの文字が目に入った瞬間、俺は外に飛び出していた。
一心不乱に向かう先は街の中央。

国の条例が変わった時や、流行り病が流行してしまった場合等に使われる情報伝達用の看板だ。

緊急の通告なら、朝に見られる事が多い看板には人が沢山いるだろう。

何より家の郵便入れには悪戯をする事だって出来る。

落書き用紙をぶち込んで相手を怒らせる事だって出来るのだ。

——そう、悪い冗談だ。

顔中に滴る冷汗を拭いもせず、看板が建っている場所まで走り抜け、顔を上げる。

「——あ」

そこには先程の用紙よりもよっぽど細かく、多い文字数で概要が書かれていた。

【これより霧の島・トラモントを——】

「——」

【濃霧と暴風が発生し続けた事による渡航の危険が——】

「——」

【商業船の運転が困難になり——】

「」

【死者の増加が相次いだ事で――】

「」

【如何なる理由があつても、あの霧を危険と判断し――】

【渡航及び輸出と輸入を禁ずる事に決定した】

「……………」

声が出なかった。

なのに周りの声は聞こえる。

「霧、ですって」

「怖いわねえ…」

「ま、あんな幽霊島無くたって別にいいだろ」

「馬鹿！人が死んでんだぞ！軽々しく言うな！」

「行ってみたかったのに…」

「霧が拡大してなくて良かった」

――ふざけるな。

なんて、そんな言葉が吐ければどれ程鬱憤を晴らせたか。

事實は受け止められた。だが絶望までも受け止められる程精神が強い訳では無い。

その後俺はずっと抜け殻の様に生活していた。

帰郷の事などどうでも良い。だが皆の安否が確認出来ない事が何よりも辛い。文通すら送れないのだ。

クラスメイト達の慰めも、先生からの励ましも、スルトからの激励も、何もかもが頭に響かない。

この伝令の原因はトラモントの霧が濃くなり過ぎた事で、視界的危険があつた事だ。

日に日に霧の濃さが強まっていき、島を三度調査しに行つたが、騎空艇は一つも帰つてこなかつたらしい。恐らくは霧と同時に発生していた暴風の影響だろうと考えられている。落ちたのだろう。

一時的だけでも霧が晴れば渡航が出来るかもしれないが、一向に晴れる気配が無いのは素人目でも分かるし、何よりトラモントは霧の島なのだ。

不変の暗闇。正体不明の暴風が収まる気配が無ければ意味が無い。別にショックで部屋に閉じ籠つたりはしない。

ただ、捨てた訳では無いが騎士の夢を一切語らなくなつたのと…周りが余り見えなくなつた。

人から話しかけられても上の空。

クラスメイトに話し掛ける事は一切無く、グルシさんとの会話は手伝いをすると言つた義務的な物のみ。

スルトが隣にいる事だつて気にしていなかつた。

何もしない何も得ない。

そんな無価値な時間を過ごしている時が、一通の手紙によって終わろうとしていた。

手紙の差出人はフィラだ。

ここはガロンゾ島。

フィーニス諸島を形成する複数の島々の一つであり、騎空艇の製造・整備技術が盛んな島である。

様々な理由で騎空士や商人、職人達が行き交う事が多い為、出会いの島と呼ばれる事があるが、大抵は約束の島と呼ばれている。

今この瞬間にも、人の出会いが輝かしく始まろうとしていた。

…その人物達の顔を見なければ。

「フ、イ、ラ、ああああああ!!」

「コーリスさ、あああああん!!!」

他の島からガロンゾへ渡る騎空艇から降りてきた少年と、それを迎える様に走ってきた少女。

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら抱き合う光景は、生き別れた兄妹の再開を思わせながらも、濁音混じりの泣き声のおかげで異質な物に出来上がっていた。

さあ、もう一度言ってみよう。

ここはガロンゾ、出会いの島。

出会う方は人それぞれなのだ。

ロマンの糞もへつたくれもない。

「コーリズぎあん！トラモントがあ！トラモントがあ…」

「わかってる、皆までいうなあ…大丈夫だきつと帰れる…!!」

「うあああああん!!!」

町で叫んでいるが、騎空艇の船着き場では人がおらず、職人達は工場に籠もっているので注目される事が余り無いのが幸いか。

虚無の体現者になっていたコーリスに届いた手紙。

それはガロンゾで療養していたフィラによって書かれた物だった。

内容は只一言、『会いませんか?』という言葉と日時の指定。少なくとも質素な手紙だが、所々が滲んでいたり、文字が縊れている所を見ると涙ながらに震える手を抑えながら書いたのだろう。フィラと数年間接してきたコーリスにはそれが本来の字では無いと理解できた。

それから三分も掛けず、彼は手紙を送り返した。

只一言『会う』という言葉を添えて。

今回の邂逅はそれによる物だ。久し振りに会う事と、故郷への不安で心が溢れたのだろう。

世間体など気にせず年相応に泣いている。二人ともまともな声変わりなどしていない年なのだ。これくらいは目を瞑ろう。

コーリスには一度帰郷した故の身近な絶望。フィラにはもう顔を見せる事が出来ない未来の絶望。

互いに心を癒やす時間が必要だった。

「……ここじゃあれだし、場所変えよつか」

「ああ」

場所も場所、話をするには華が無さ過ぎる場所なので町の方へ行き配置されたベンチに腰を掛ける。ガロンゾは整備場ばかりで町並みに魅力が無いと思われがちだが、ファータ・グランデ空域屈指の生産力がある為、街の経済も潤うと言うもの。

決して狭くは無いし、住人も気の良いものが多い。

契約を結ぶ場合も、一々手続きをする事も請求書も使わず、口約束で行われる。まあ…それは別の理由があるのだが。

島の住人達も存在を知らない、星の獣。

”契約”を司る星晶獣——ミスラの力による物だ。

人の無意識や事象に訴えかけ、契約や他愛ない約束までも絶対尊守させる。その事実によりガロンゾ島の住人達は決して契約を破らず、古くからそう有るべきと育ってきた。だから彼らはミスラの事を知らずとも、島の形式に違和感を持つ事なく過ごしている。

フィラにとって孤独な旅となった二年前だが、島の人々の優しさが良い刺激になったのか、適応出来ているらしい。

病を治してからはお世話になった女将さんが経営しているパン屋で働いており、看板娘として活躍しているのであった。コーリスは彼女の姉なら無理だな、と失礼な事を思ってしまった。

「……の皆はね…優しいんだ」

「そうか」

「一人ぼっちだった私の面倒を見てくれた人が沢山いたの」

「良かったな」

文面に表すと如何に薄情な掛け合いかが分かるだろう。慣れ親しんだ友という間柄なら話は別だが、平常運転でコレなコーリスはとも人付き合いが良いとは思えない。

目上の人間に対しては敬語なので、少しは違和感が消えるかもしれないが、年下の少女にこの素っ気の無さはとても残念だ。この男に血は通っているのだろうか。体温はあるのだろうか。

フィラは分かっている、彼には余裕が無いと。

言葉に対しても返答はする。此方の目を見て会話もする。しかし耳だけが違う。

損傷をしている訳でもないのに垂れ下がっている耳が気の落ち様を表現している。コーリスが憂鬱な気分なのは誰から見てもわかる話だ。

尚、フィラ自身も同じくらいに耳が垂れ下がっているのだが、本人は気が付いていないようだ。

「楽しみだったんだ」

「何がだ？」

「家の下…村の人達も、コーリスさんが言ってた通り良い人ばかりなんですよ？」

「ああ、良い奴らだよ」

「私が病気を直してから皆と会ってみて、沢山お話しして…友達作ったりするのが楽しみだったの。お姉ちゃんもそうだったのかな」

「…あいつは家で寝込んでるお前に対して悪いと思っただろう。俺と話す事はあっても買い物の時以外村には決して行こうとしなかった。お前の為に何かができる訳でもない、かと言って自分の時間を作るのは嫌気が差す…そう言っていたよ」

可哀想な奴だ、とコーリスは思った。

人一倍寂しがりや、なまじ真面目な性格が祟って苦悩に悩まされる毎日。買い物にも自分が同伴しないと落ち着いてもいられない人見知り。

そしてドジを踏んで荷物を落とす自分が回収する。今思うと中々に危うい奴だったと感じる。

一度気を許せば舌が回るが、怒らせればひたすら避けられる。嫌われる訳では無いが、気まづさが勝るのだろう。

彼女が自分の殻を破り、堂々とする日が来るのだろうか、なんて的外れな心配をする彼であった。

何となくコーリスの考えている事を感じ取って、フィラは微笑む。

「ふふ、おつかしいの」

「ん？」

「コーリスさんがまだ家とあんまり関わってないくらいの時…私とお姉ちゃんて毎日の様に山を駆け回ってたんだよ？」

「天然野菜でも取りに行ってたのか？」

「遊んでたの」

「……………マジで？」

「ホントだよ。笑いながら二人で競争みたいに」

「あいつが？ええ…」

分かりやすいくらい目を点にし、口を開け絶句するコーリス。

想像すると可笑しい物だ。

買い物にも一人で行けない。時間を持って余した時は大して面白くも無いコーリスの鍛錬を木の陰から見て過ごし、何をコソコソ見ているのかと問い掛ければ、『な、何でもないっ！』と意地を張り帰宅。

終いには暗くなり、地面が余り見えなくなると極稀に『ふええ…』という謎の声を上げる。

そんな彼女にも、キャツキャウフフと風のように駆け回る時代があったなど。彼には到底信じられない。

「…何で俺があいつと関係持ててるのか疑問を覚えた」

「きつと、孤立してた人同士だからじゃないかな」

「村には友達がいどうぞ」

「でも、一人でいたでしょ？」

コーリスには友と呼べる者が沢山いた。

にも関わらず人と過ごしている光景があまり見られない。鍛錬を始める前から、彼は森で一人過ごす事が多かったのだ。

エルーンの本能か、性格が及ぼした行為かは分からないが、彼は何時も森に趣き昼に切り株の上で眠っていた。

比較的明るい昼間には野生の獣が襲ってくる事は無い。暗闇と霧に乗り襲う様に進化したトラモントの生物は昼間の活動が活発では無いのだ。

惰眠を屠るコーリスの姿が興味を引き、そして迷子になった彼女等が助けを求めた事で関係が始まった。

意味は違えど、一人だった彼等は妙に馬が合うのかもしれない。

「一回帰ったときも余り変わってなかったんでしょ？」

「ああ。自衛を意識したのか鞭術を齧ってるらしいが」

「あはは…何かズレてるんだよね」

「全くだ。しかもそれなりに上手いとききた」

心底意味が分からないと言う様にはにかむ二人だが、話せば話すほど愛おしくなるトラモント。

帰郷——それは彼等にとって最も望む事である。

自然と空気が湿気を帯びる。

「——会いたいなあ」

「……………ああ」

「病気を直す為に皆が助けてくれた。でもお礼を言う事も元気な顔を見せることも出来ないや」

「酷い話だ。態々霧が晴れる見込みが無いと言われたよ」

「何でトラモントにだけ霧があるのって何度も怒って泣いちゃったよ」

「好きなだけ怒れ。一番権利がある」

「でもね、今日は嬉し泣きでもあったんだ。コーリスさんに会えた。私と同じ悲しみを持つてる人がいるから…少し話せば楽になれるかなって」

「俺もそう思ってた手紙に応じたよ。だが」

「……話せば話す程、辛くなるね」

この現状に前向きになれるほど、人間という生き物は思考を止めていないし、薄情でもない。

傷の舐め合いとは、聞こえに対し中々に効果的である。しかし、それが癒やしという結果を齎すかも分からない。

ただ、何かを得る事は確実である。

それが身を焦がす程の怒りでも、全てを忘れる程の嘆きでも。

何かを得た彼女は、垂れ下がった耳を揺らし、泣きそうになるくらいの笑顔で言葉を出す。

「世界って——たまに意地悪だよね」

「だって……誰かが見張ってるのかってくらい、物事がそのまま過ぎるんだもん」

——過ぎていく物語には、優しさも苦痛も無い。

只そうなっていたという結果があるだけである。

15. 気合如雨露

— 母さんが死んだ。

— 父さんも死んだ。

— 流行り病で皆が死んだ。

— 子供も死んだ。

— 私もこれから死ぬ。

— そうだ、花でも積みに行こう。死ぬなら好きな物に囲まれた
い。

— 頭が痛い。むねが苦しい。からだいたい。

— …近くから何か聞こえる。あ、お医者さんだ。

— それ…すと？ふ、じみ？何をいつてるんだ？まあ、いいや。

— さいごだけど、ワガママぐらい言わせてほしい。

— 神様。お願いします。どうか病を消して下さい。皆を生き返
らせて上げて下さい。

— 二人に………会わせてください

— 妹のフィラに。

— ■■な。

——……………コースに。

「ふう……………！」

「まだ終われません……………」

「当たり前だよ……………」

どうも、コースだ。

只今地獄の様な苦しみを味わっている。その地獄には自ら進んでいるのだが。

もうフィラと会ったのも二ヶ月前になる。

何とか気分を戻して、無事士官学校を卒業。それから一月したら始まるリュミエール聖騎士団の入団試験。

入団試験の内容は大まかに分けて三種類ある。

・戦術や、どんな状況でも臨機応変に立ち回れる戦略的知能を測るテスト。

・騎士として優先すべき保護対象、誇りや潔さに重点をおいた聖騎士としての振る舞いを測るテスト。

・武芸の腕も着目される体力テスト。

三つの内二つは精神的な試験であり、士官学校という専門的な場で鍛えてきた俺達には特に苦戦するものでは無かったし、武芸に関しても他人に引けを取ることには無かった。

この点で言えば、騎士に憧れて他島から試験を受けに来た人間よりも有利に事を運んでいると言える。

しかし基礎体力を見るテストの仕様が困り物だ。

柔軟、素早さ、握力などは普通の物と何ら変わりはないのだが、持続力を測る長距離走が曲者である。

何と距離指定は無いのだ。

只、試験官であり現リュミエール聖騎士団副団長でもある人物がい

い笑顔でこう言った。

『体力尽きるまで走り続けろ』と。

用意されたグラウンドを倒れるまで走り続ける地獄。

本気で騎士を目指しているからこそ手を抜くなど言語道断。でも出来ればやりたくない。

やる前から気分は最悪だった。

今走っているのは七人。

士官学校生の奴は俺を含めて三人しかいない。他はもう少し年上の人間達だ。

今俺の横にいる二人はロイスとルブロ。奇しくもトーナメント戦で戦った二人だ。スルトは頑張ったが種族的なデメリットを消す事は不可能だったらしく、クラスメイトの中で最初に脱落した。それでも半数以上が脱落していた後なので優秀だろう。

あ、今一人倒れた。

その場で倒れられると走りの邪魔になるから試験官が秒で回収に来るが、試験だからといって体力を使い果たされると困るらしい。あまり良い顔はされないのです、自分の限界を見極め気絶しない程度に終わろという事だろう。

体力尽きるまで走ってほしいのか温存して立ってほしいのかどっちかにしてくれまいか。

「ぐっぷっ」

「ロイスウウウウウ!!!」

「彼女の犠牲は無駄にしてはいけない！頑張るよコーリス君！」

「……くそっ！」

「ぐっぷっ。」

良く分からないが胃から何かを出してそうな音を発生させながら脱落するエルーン女史。

多分54周目くらいでは無いだろうか。一周で400mあるらしいのでここまで持った方がおかしいのでは無いかと思う。

残りはルブロと俺、他3人である。

肉体能力が高いドラフは筋肉密度が災いし、発汗量が増えてしま

い、結果的に脱水症状を引き起こしてしまう。エルーンは逆に細身なので、その辺はヒューマンと変わり無いと判断できる。

その中でも身体強化を使いこなすルブロは元々体力方面を鍛えているせいか長持ちする。

ぶつちやけ俺が耐えているのは気合に過ぎない。顔中汗がドバドバである。

したがってこうなる。

「ギブだ」

「え、ちよ、はああ!？」

「すまん。お前、孤独」

「く、くそー!この腑抜けが!」

60周目でキリよく終了。

あと一周多く走っていたら病院送りだったかもしれないので、流石に辞めておいた。

コースの内側に退避し、糸が切れたように倒れ込む。

太陽が眩しい。寝てしまおうか。

「大丈夫か?」

様子を見に来たのは副団長様。

碧色の鎧に剣と盾を背負った黒髪ヒューマンである。堕ちそうな意識を敬意と気合で踏ん張り直し、何とか言葉を返す。

「な、なんとか無事で…す」

「なら安心だ、もう片方は中々に耐えるな。ほれ、水」

「ありがとうございます…」

貰った水を喉に通す。

副団長以外にも団員が周囲に水を配っている。何とホワイトな環境なのだろう。

「他の地域の方々も凄いのですね…」

「そりやそうさ。アイツら18とかそこらだろ?お前らは13か14

だぜ？あつちの方が年季つてもんがある。士官学校で学び有利になつたとて過信しちや駄目だな」

「す、すいません…」

「ま、体力的な面で見ればお前らに不合格者はいないだろう。心構えもよし。最後まで走り切るのはやる気の現れだと言うのも確かだが、瀬戸際を見極め引く事も大事だな。特に守る側の俺らからしたら」

もつと規律に沿つた堅い人格かと思いきや、柔軟そうな兄貴肌である。

アドバイスが無意識に行う人間のようだ。

凄く優しそう。気が楽になつた。

「何はともあれおつかれさん。お前らはの情熱は確かに清々しく、正しい物だと思うよ。リュミエールのモットーにピッタリだ。結果が結び付けば是非とも騎士団でしごきたいね」

「はは…」

優しくはあるが、厳しくもあるのだろう。

騎士団で新人がこの人に根性を叩き込まれている光景が容易に浮かぶ。

真正の兄貴。騎空艇操縦士のサレアさんを彷彿とさせる人格。

ちなみに俺に前ブチ切れたサレアさんはポート・ブリーズ群島領内のエインガナ島に生まれたため、またトラモントに住んでいる訳でも無いので取り残される事は無かつたようだ。

嫌な風を感じたとか何とかでトラモント周辺を担当していた後輩に注意を促していたらしい。火属性使いなのに。

ポート・ブリーズが運ぶ風が好きでちまちま帰郷するらしい。火属性なのに。

花が好きらしい。花を燃やし尽くす火属性なのに。

何だかんだ気遣つてくれるいい人である。

「では、良い週末を」

副団長は手を振りながら背を向けて違う方向へ言ってしまう。

水筒を置いて行ってしまうから、『忘れてますよ』と声を掛けようとしたが、その前に違う人影が倒れ込んできた。

「も、もおう、無…理い」

ルブロ、お前もか！

普段落ち着いたキャラをしてるが人の腹に倒れ込んでくるとは恐れ入った。

取り敢えず水を叩き込み背に手を添え、起こす。

一向に立ち上がれそうに無いため、体力的なガタが来たのだろう。

「っ、つかれた」

「頑張ったな。立てるか？」

「足が動かないよ…すまない、おぶつてくれ」

「構わん。しかしこういう時にドラフがいれば楽なのだがな」

ドラフを含めた同年代の奴等は既に集まっている。

恐らく反省会の後に帰宅コースなのだろう。此方としてはシャワーを浴びて寝たいのだが仕方がない。

ルブロをおぶつて輪に向かう。

試験はこのランニングを終えた者から自由帰宅。一応皆は俺達を待っていてくれたらしい。

「反省会です。リュミエール聖騎士団のモットーは？」

「清く！」

「正しく！」

「正しく…：…なんだっけ？」

「論外です脳筋共」

別に筆記試験で出てこない物を何故か問いかけを反省会とする暴挙に出るとは。質問者はロイス。

返答者はドラフの方々。

別にドラフは頭が悪い訳では無いのだが、未だに暑さの影響で頭が回っていないのかもしれない。

ちなみにロイスは熱烈な聖騎士団ファンであり、碧色の鎧で揃えている姿が琴線に触れたらしい。自分がその鎧を着るためにそこまで強くなれるとは未恐ろしい。

そしてリュミエールクイズに答えられなかったら、一時的にゴミを見るかの様な視線を向けられる。

「分かったぞー！」

一人が手をポンと叩き声高らかに宣言する。

品定めするように見つめるロイス。

「清潔に、だ！」

「高潔に、です!!」

「えー違うの？」

「清潔感なんて毎日体が洗ってれば済む話だろうがア！」

「ぶぱあ!!」

愚かな回答をした者は制裁という名の水撃を顔面に食らう。貴重な水分だ。中々に涼しめそう。

「試験の反省をしろ。それなら多少の情報交換が出来る」

回復したらしいスルトが腕を組みロイスに喋りかける。奴もやはり帰りたいらしく、今回はまともな論を掛ける。

「では…えと。大して記憶してないので、状況打開策の問題を振り返りましょうか」

「ざっくり言うと『一般市民が凶悪犯罪人の人質に取られました。犯罪人は今にも人質の命を奪えます。そして引き替えに逃がせとあなたに要求してきます。どのように対応しますか』みたいな内容だよな？」

「それで合ってます」

「俺は自分を人質にしてもらおうよう頼み込んでから隙を突いて打開するって書いた」

「近接戦闘では此方に分があればの話ですね」

「これくらいしか思いつかないな…」

答えたのは友達のエルーン男子だ。

同じ種族故に対策法も独自の物になると思ったが、魔力行使も関係ない普遍的な考えだ。事がうまく進めば名案と生るのだろうが、加害者のスケールが大きくなればなる程成功率が下がり、相手の警戒心を煽る愚策となってしまう。

だが、これは一般的な回答をしろと言われている訳ではなく、自身が出来る事を答えろという質問なので、彼にはこれが最大限の解答なのだろう。正しい解答をしていると思う。

騎士の役目は民を守る事。

まず国民の安全を確保するという点で正しいと言える。

「人質になるという点では俺も一緒だな」

「……………マジ？」

「マジだ」

意外だ、と皆声を上げる。

人質作戦はスルトも考えていたらしい。しかしスルトと言えば猪突猛進ゴリ押しがモットーのイメージがあつた為、一時的にも敵にへりくだる様な事はしなれないと思つていた。

意表を突くのならばハーヴェインに油断してくれる可能性が高いため有用だが。

「人質になるという事は簡単には離されないという事。つまり密着状態となる。後は諸共燃やすだけだ」

「同時に殺されるリスクがありませんか？」

「なら熱源を一点に集中させれば良い。予備動作を感じられない程度に溜め、一気に温度を高める。炎という物はな、簡単には耐えられないんだよ。心で耐えようととも身体は自然に危機を察知し鈍痛として現れる」

刀傷では無く炎傷。

我慢できない程の熱源を喰らえば、炎をかき消す為に転がり回るこ

とは間違いない。火属性を持つ者ならではの作戦と言うわけだ。

他の属性では難しい可能性が高い為、比較的人体に有害な火は効果的と言えるだろう。

ちなみに試験前に書類などを伝ってその人間の戦いの情報などが知られている為、試験でわざわざ自分の戦い方、使える魔法等を書く必要は無い。

余り炎の特性を理解してもらえなかったスルトは目を瞑りロイスに訴える。

「俺は言った。そろそろお前も聞かせろ」

「あ、私ですか。股間蹴ります」

「クソだな。コーリスはどうだ？」

答える前に両者が頬の引っ張り合いを始めてしまったため、答えようにも聞いてくれないだろう。

意見を言うために何とか二人を抑え、試験時に書いた答えを言う。

「気付かれないように霧を使って記憶を飛ばす。思考のタイムラグの間に顎や鳩尾等の急所を突き無力化。こんな物だ」

「股間も急所ですよね？ね！」

「う…ん。まあ、効くには効くだろうな。だが、鎧を纏った足で股間を蹴ると言う事は、相手の未来を消す事に繋がる。お前にその覚悟はあるか…？」

「ありますよ。無論、自分が蹴られる覚悟もね」

「…良からう」

『『いや良くねえから……………！』』』

顎を思いつ切り叩けば気絶してくれると言うのに、悶絶を選ぶ時点でロイスは危ういのもかもしれない。

しかし本人に覚悟があるのなら止める資格は無い。

「くだらん。俺は帰る」

「くだらん。俺も帰る」

そして流れるようにスルトと共に帰宅。

ルプロを適当に預け、静止の声を振り切り真っ直ぐ帰宅。

どちらが先に風呂に入るかをジャンケンで決め、負けたので腹いせにお湯の温度を高めにする。

勘付かれて、俺が入っている途中に冷水をかけられた。
クソ。

翌日、入団を認めるとの旨を書いた用紙が来た。

飛び上がって喜び、手紙をトラモントに送ろうとして、その手を止める。

愚か者め。忘れたのか。閉鎖中だというのに。

しかし何故か。

夢が叶った瞬間だというのに。

報告する相手がいないだけで……ここまで空虚な物なのか。

俺は三週間ぶりに胃から物を吐き出し、最悪の気分で床についた。

16. ペーパー騎士

「何だっつてんだあのガキ……!!」

男がいた。

その男は平凡だった。しかし今は違う。瞬発力は天性の物というが、それでも下らない^{盗み}事を繰り返す内に常人よりも鍛え抜かれ、誰も自身の顔を捉える事が出来なかった。

男に失敗を報せる事象は訪れなかった。

自身を覆うローブを着、間抜けな面をしている商人から食料を奪い、路地裏を変則的に駆け抜け、後はローブを捨て住処に籠もる。

それだけで生活が出来てしまった。金に困れば金自身を盗み食料以外の問題も解決出来てしまう。

盗む方法は顔を見られぬ様分捕るだけ。レベルの低い盗難だが、幸運にもその男は足が早くなれるだけの素質があった。

今日も正義を謳う馬鹿な騎士団が頑張る中、裏で犯罪を冒す背徳性を味わおうとしていた。

珍しい事に今日は街に霧が立ち込めている。街の地形を把握している男にとっては寧ろ良い環境と言えるだろう。

絶好の機会。その筈だった。

「詰みだ」

「ッ……!!」

盗みを働き逃げた瞬間、謎の少年が男の前に姿を表したのだ。

所属をリユミエール聖騎士団、突き詰められた罪状は盗難。そして現行犯により拘束するとの宣言。

いいカモだった。走れば後ろに姿は見えず、追いかけて来るような気配も無い。

結局のところ、正義など口先だけの自己満足。憧れとして自己完結するのが正しく、現で語るなど夢見心地の現実逃避。

馬鹿なガキだ…と、内心で見下しながら路地裏の道を曲がると、さっきの少年がいた。

男は一瞬動揺するが即座にルートを変え、逃げ道模索の演習を脳内

で行う。遭遇を全くの偶然と捉え、霧を利用し完全に相手の視覚から消える。

多少遠回りだが苦ではない。逆方向に逃げながら順々に帰宅への道に近付くと、少年がいた。

「またもや道を変え、一旦商店街へ赴き人混みに紛れ気配を絶つ。」

行き渡る人影で自らの姿を誤魔化しながら住処へ向かうと、少年がいた。

「男は気味が悪かった。」

何処に行つても追いかけてくるという事実よりも、但自分が向かう先に佇んでいる違和感が心地悪かった。

次なる方法は、走力による振り切り。顔を見られていないというメリットを最大限活かし、力の限り逃走する。

5分間の全力疾走を乗り切り、住処の前に移動すると、相も変わらず少年がおり、今に至る。

「恐ろしい脚力。なんの捻りも無い盗み方をしても捕まらない訳だ」

「……見てたのか」

「俺が側にいた訳では無い。お前が盗みを働いたという事実を知ってるだけだ」

「……」

（このガキ…やっぱり気持ち悪い。先回りを考えるのは普通だが、なぜ常に俺の行く先にいる？路地裏の地形を理解するのは可能だが人の逃げ方を理解するのは普通無理なんだよ！加えて霧も出てる！エールの聴力に物を言わせても無理な物は無理な筈だ!!訳わかんねえぞクソツタレがア！）

「思考を巡らせた分だけ苛つきが募る。」

「で、大人しく捕まれ。盗み方は決まって同じ、ならば顔は知られずとも同一犯と疑われて当然だ。そしてお前の盗みによる被害額は五百万ルピ。娯楽を抜きにすれば稼ぎが必要なく天寿を全う出来る額だ。罪は重いぞ」

「……ヒヒ」

「…？何が可笑しい。俺はお前の顔を見ている。逃げてても無駄だし、

罪が重くなるだけだ。諦めろ」

「いやあ…馬鹿だよお前ら」

「む」

不穏な空気を察してか少年が腰を低く構え身構える。

少年の得物は騎士剣。一般で呼ばれる騎士剣とは両手で構える長剣な為、鞘に収める必要がある。

つまり、既にナイフを抜いている男が有利だった。

男は駆け出す。

「いつも自分が負ける事を考えねえよなあ!？」

不意の全力疾走+刺突。

身構えていても反応しづらい動き、それは真っ直ぐな軌跡を描く攻撃。

この男は知っていた。人が油断するタイミング、それを実体験で。数十年盗みを働いたが、ボロを出さなかった訳では無い。顔を見られたら――。

「やはり――!」

「ハハ! 聖騎士はガキを小間使いにして消費していく仕事かあ?」

ナイフの連撃。

少年、避ける事は出来たが武器を取り出せず防戦一方。

「今まで来た聖騎士もガキばっかだなあ! 殺しても死体が見つかんねえから島を出たって判断して馬鹿共は疑わねえよ!!」

「何人殺した!」

「これから数えてみるよ! ハハハ!!」

「外道が」

少年が急に動きを止め、避ける体制を止めた。

そして、繰り出されるナイフに向かって籠ガントレット手に守られた腕を振った。

「いっ!」

ナイフが弾き飛ばされ、加えて腕に来た衝撃による痛みには男は怯み。

「終わりだ」

顎を殴られ気絶した。

「――あれ？」

此方コーリス・オーロリア15歳。聖騎士団に入ってから二年が経つ。所属は一般兵。リュミエール聖騎士団にはそれぞれ役目を持つ部隊があるのだが、年齢の若い者・新人は所属を持たない一般兵に割り当てられる。

部隊は他の島へ遠征したりと、活動範囲が広いが一般兵は自国の領土のみ。

よって見回りなどの任務が非常に多い。特に俺の霧は目立つため許可が必要だが有効な為、事件が起きた日の近くは俺に任務を割り当てられる事が多い。

今は現行犯兼多数の盗難事件の容疑者と対面し、実は大量に聖騎士を殺していた事実を前にし、かなり焦ったのだが。

顎に一発入れたら倒れた。

生命を多数屠ってきた人間の得物捌きとは思えない。顔しか狙ってこないし。

取り敢えず硬い縄で捕縛し、オフだが見回りをしてくれる副団長の所へ向かい報告をしなければ。

「――て事がありました」

「ああ、なるほど。まあ団員が殺されたという話は嘘だな。そいつ、弱かったら？」

「ええ」

黒髪赤眼、そして眉目秀麗。

気前の良い性格も合わさってモテモテな副団長ことエクシンダ・オクトさん。

年齢21歳にしながら副団長に実力で申し上がり、偶に異常な程の身体能力を見せる事で有名だ。

特に跳躍時の滞空時間が可笑しい。浮いてるんじゃないかなと思うほどだ。

男をガツチリと縛り付け、丁度お縄に付けてきたところである。今は男が本当に聖騎士団を殺していたか聞いている所だ。

「お前はまだまだ子供だからなあ…新人と見たか。ありもしない事実をさも当然に見せかけ、ナイフをチラつかせ振り回せば以外にビビるもんだ。お前を動揺させるのが狙いだっただのかもな。だが、顔を狙ったって事は少なくとも殺意はあったって事だ。なあコー坊よ」

「理解しました。でも怖かったです」

「悪かった悪かった。でもいい感じに舐めてくれるだろ？子供に強く出れるのが大人ってやつだ」

「だからといって態々兜を取らなくても…」
「そうカツカするなって」

——悪い奴に会ったら兜取って少し偉そうな口を聞け。そうすれば大抵の奴は油断する。ガキな自分を利用すんだよ。

副団長のアドバイスに従い追跡を実行したが、正直あの男が本当に強かったらどうなってたんだろう。

この人頭は良いんだけど偶に人で遊ぶから困る。いや、危険なら俺の所に逃げてこいって言ってたから大丈夫なんだろうけど。

「でだ、自慢の剛力は活躍したか？」

「変なあだ名で茶化さないで下さい…。エル・グロリアス以来ゴリラって言われてるんですから」

「そりゃ剣を素手で折るなんて普通の人間には出来ないぜ？」

「窮地に陥った時にしか出ないですよこれ。剣を折った時は力任せじゃなくて何らかの技術も合わさってたので尚更良くわかんないです」

「寧ろ虚を突くには良いかもな。任意に越したことは無いが」

スルトとの決闘。剣を折り、炎撃を逸らすなどの活躍をした力。

それは今の所は自らが危険な状況と感じた場合のみ湧き上がる。

怒りも興奮も必要無く、焦燥に駆られながらも窮地を打開するという必死な意志がトリガーになっていてるのかもしれない。

この力がそういう物なのか、使いこなせれば任意で引き出せる物なのかは良く分かっていない。

しかし先程の様に力任せに振るうだけならまだしも、スルトの時の様に剣の芯を捉え、完璧な位置把握から繰り出される指圧で破壊する技術が存在する事が分かっている為、火事場の馬鹿力という訳でもないだろう。

早いところ感覚を掴まなければ…

ん、何やら副団長が紙にペンを走らせてる。

「こんな感じでお前ら噂されてんだぜ？豊作ってな。霧情のコーリス、炎身のスルト、麗慧のロイスだとよ」

「…ああ、霧情は無情、炎身は炎神、麗慧は冷水と掛けてるというわけですか」

「シャレてるとは思う。だが個人的に面白みが足りない。俺も若い頃はもつとヤンチャをしてなあ、嘲りを通り越して怒りを覚えさせる程口調が鄙陋でねえ…聖騎士何てやってると周りの堅物が移ってユーモアが欠けてしまうんだ」

「…ひろろ？何を披露するのです？」

「ああこつちの話。お前も近い内にワカル」

「???'」

副団長は良く難しい言葉を使う。

言葉を理解出来る大人達は皆口を揃えて変態と罵るけど、俺にとっては仕事は出来るし面倒見も良いしで兄貴分にしか感じない。

脳内の次元が違いそうなスルトとロイスも副団長にはお世話になってるしな。

「でコー坊。この後どうすんだ？」

「引き続き見回りに当たろうかと。街を歩くので兜が必要です」

「ああ、ほらよ」

「ありがとうございます。ふう…落ち着く」

「落ち着くのか。俺は蒸れて嫌だった」

「集中力が上がる気がするからです」

「そりゃ本当に気分的な物だな。兜の機能関係ないだろ」

何か言われてるが、フルフェイスの兜は良いものだ。

頭は重いし、視界は狭まる。しかしそれを超える安全性と心の安心感が生まれる。

リユミエール聖騎士団は銀色の鎧にデザインされた紋章、支給される蒼色の武器等の特徴を捻じ曲げなければ多少の改造は許される。元が優秀なので無闇に変える事は無いが。

「コー坊。見回りは他に任せて俺に付き合え」

「生憎俺は休暇貰ってません。職務放棄は出来ませんよ」

「違う違う。一応仕事だよ」

「団長の命令なのでですか？」

「んーまあ広く言えばな。魔物退治ってやつだ」

魔物退治。

街の外に蔓延る危険な生物を倒す事で平穩を得るという意味がある。

人々からの依頼を優先するが、依頼が無くても自主的に退治する事が多い。最近と同僚の馬鹿スルトが片っ端から狩りまくってるから仕事が出来ない。というか一回も魔物退治をした事が無い。

いや、適材適所という言葉があるがスルトを使うと効率が良すぎる。魔力による火じやないので実質無限。燃やし放題という訳だ。

なので俺には盗賊などの捕縛を任される。

身体強化が得意なルブロは万能かつ迅速な為何でも出来る。ロイスは知らん。頑張ってるはず。

「何事も経験だぜ？大事になった時に腰が抜けちゃ意味が無い」

「猛獣くらいなら故郷で狩ってました」

「化物にあった時はどうする？ドラゴン龍エレメンタルや属性生命体には太刀打ち出来ず、

更には子供の姿をした魔物。それに向かって剣を振れるか？」

「斬れますが精神を病みそうです」

「あ、別に殺せて訳では無いんだぜ？あくまで退治。人を率先して

狙い、甚大な被害を出した奴は問答無用で消すが」

「ならいけます。ドラゴンを見た事すらありませんけど」

「集団で掛からないと倒せない。そう思っときゃ十分だ」

「了解です」

「で、行くか?」

「霧をもう一度使います。怪しげな動きをする者がいないのならお付き合いまする事になるかと」

「オーケイ」

街を覆う霧を出し、人々の動向を探る。

脳は霧の魔力に適応してきたみたいで、情報に耐えきれないようになった。

感知するのは屋外の人々。

屋内は霧が入らない為、効果は無い。

霧が街の隅々まで行き渡ったら、行動を読み取る。

公園で遊ぶ子供。客を捕まえようと必死な商人。馬車を走らせ帰宅を命じる貴族層。イチヤつくカップル。野道で用を足す犬。

不可解な行動をしている人間は一人もいない。今の世の中、野盗に襲われる事は珍しくない為、護身用に小剣を持ち歩く者は多い。だが人をすぐ刺せるような場所に得物を仕舞う人間はいない。それを見極める事で悪人かそうでないかの区別をつける事が出来る。

結果的に、今すぐ人を殺せる者はいないという事が分かった。

なので自分の経験を優先する。

「索敵、終わりました。魔物退治を優先します」

「分かった。だが経験値足り得る魔物がいるか分からないぜ?」

「経験になるに越したことは無いですが、それだけの為に魔物を倒す訳では無いでしょう。あくまで民を守る為、我々は存在しているのですから」

「曲がらないねえ…15ならもうちよつと荒れてても良い気がするんだが」

「清く正しく高潔に、ですよ」

「モットーさえ守ればここは甘いからなあ…入団する時に真面目にな

るだけで俺みたいのが副団長なれちまう」

「清いのかも正しいのかも高潔なのかも分かりませんが、人の為に何かをするというのは誇って良い物なのでは無いですか？」

「自分の誇りは他人から見れば驕りおごりになるかもしれないんだぜ？自分が幾ら人の為に何かを成し遂げ、自信を持ったとしても：傍目から見れば自己満足、偽善なんて捉えられる事もある」

「そんな捻くれた考えが多いのですか？」

「捻くれてなんか無いだろ。価値観は人の数と同数。例えば石像を美しいと思つた時、共感してくれる奴がいるとするが深く見れば違う感性だ。自分は石像の顔が綺麗と思つたのにソイツは石像の手を綺麗と言つた。それだけでエンパシーにヒビが入り、関係に綻びが生じる」

「むう…」

「自分の行動に誇りを持つのは結構、他人の気持ちを一々考える必要は無い。ただ一つ、自分の感情は有数だと分かつていれば良いんだよ」

「難しい話です」

「ま、お前は新米だからな」

「自分は屈辱と捉えます」

「俺は単なるアドバイスのつもりだ」

「早くも共感性が崩れましたね」

「実例を持って理解出来たじゃないか」

はあ：何だかこの人は良くわからない。

頭も回るし人付き合いは良いしで関わりやすいんだが、ずっとこの人の口先で踊らされている感じがしてならない。

年は近いのに、何か妙に達観した心情を持っていて：なのに彼の振る舞いには若々しさしか感じない。

変なヒトだ。

17. 分岐点

——墮落とは、何なのだろうか。

正義から悪に落ちる事…？

しかし正義の定義は別のもの。哲学の世界では、正義の反対は別の正義と言われている。

それもその筈。正義とは独善的な物であり、個人の信じる物を正義とするなら、それに対する意志も正義となるだろう。

悪とは所詮正義を志す者が、敵対者に対して断定する名前なだけであり、結局の所明確に線引きをする事は出来ないと言える。

客観的では無く、主観的に見れば分かりやすいかもしれない。

人を助ける事を良しとする人間は、人を殺した時に墮落する。世の為に働く人間は、犯罪に手を染めると墮落する。

逆に言えば、人を殺す事を正義とする人間がいるのならば、それにとつて人を助ける事は墮落するということなのだろう。

ならば彼の墮落とは何だろうか？

人を救う為に騎士となった彼だが、救い方は千差万別。

魔物に襲われている人間を救助する場合、先に人を助けるか魔物を倒すか。世を正す為に行動する場合、善人の助けとなるのか悪人の始末を一方的に行うのか。

無論この議論に正解は無い。

ただ思うのは、矛盾すらないこの疑問に彼は迷わずにいられるのだろうか。

迷った上で、信念に基づいて行動できる程彼の精神は強いのだろうか？

スルト・ヴァーグナーは種族差別を許さない。だからその為に憤り、その為に無茶をする。

ロイス・モラクレルは聖騎士を愛する。憧れでは無い故に失望しない。何故なら自分自身が騎士という要素を構成しているから。

ルブロ・マイスは上に縋り付く。未熟を常に恥、実力の限界を越え

ようと日々戦う。故にその思いに停滞は無い。

コーリス・オーロリアは憧れを終えた。

私は思う。肝心なのは夢を叶える事ではなく、夢を叶えた後にどう生きるかであると。

既に私の教育を終えた彼の实力は申し分無い。それどころか現在の騎士団の實力からすれば上位に入る強さだろう。彼のいた代は皆とても優秀だった。

教育を終えた今だから解る。

あの三年で彼の人生経路を考えられなかった事は失敗だったと。何かを成す為に騎士になった者は多けれど、騎士になりたかっただけの彼はとても難しい。

人を救うという意識はあるし、尊い事だと彼も思っている。

これは推測であり、彼にとっても無意識な事だと思う。しかし考えられずにはいられない。

——恐らく、彼にとって救う行為とは目的の二の次に位置した物だったのでは無いか？

一般的な信念は：人を救う為に騎士団に入り、その立場を最大限利用するという物だ。

しかし彼の場合、憧れた理想になった事で、自らを助けた騎士がやっていいたから自分もそれに習い助けるといいう物。

最早便乗に過ぎない。

悪い事では無いが、無意識にそう判断している縁がある。

騎士になる夢を果たしたその実、自分がやっていた事は単なる猿真似に過ぎないと知った時、彼はその矛盾に耐えきれぬのだろうか。

騎士という物は道具だ。平和を称した偶像、国が使用する武器とも言える。ならば命の尊厳を破壊する行為も厭わない。

リユミエール聖騎士団の一部隊、『遊撃隊』は戦闘時には哨戒・陽動による補佐が主な役割だが、一般には知られていない裏の役割として墮落した団員の粛清、犯罪者に関してには手に負えないと判断した場合には暗殺を行う。

当然捕まる前に殺める事になるので、国として他殺の容疑を仮に掛

ける。

「コーリスの霧は遊撃隊として役に立ちすぎる。他人の行動を簡単に把握できる事から肅清にも事欠かないだろう。妙な事をしたらコーリスに見つかる。それが抑止力になるかもしれない。」

これらの要因から、彼の配属される隊は遊撃隊以外に無いだろう。だが、遊撃隊が墮落しては団の均衡が一気に崩れ去る。

諜報活動の一環で、国の機密情報を知っている彼等なら簡単に国を滅ぼせるからだ。

だから、遊撃隊は仲間も手にかかるケースがある。

もし、人を救うという姿を真似て騎士になった彼が……裏の行動を目にした時、彼は聖騎士団を続けられるのだろうか。

人の命を殺め、人の行動を疑り深く探る。この行動に、彼は適応出来るのだろうか。

否、してしまうのだろうか。

私は、これからの配属が…

——彼の分岐点だと思うのだ。

「コーリス・オーロリア！貴公の配属先は遊撃隊とする！！精進せよ！」
「はっ」

騎士団に入って三年。

基礎の二年と研修の一年を過ごし、その後に行われる配属先の発表を今されているところだ。

リュミエール聖騎士団は部隊として、戦闘の重点を担う【本隊】、傷を負った者の治療・民間の救出を行う【医療隊】、国の守護・治安の維持を測る【守護隊】、戦闘時の偵察・陽動を旨とする【遊撃隊】が存在

する。

後は一般兵が散りばめられている。

俺の能力を考えれば遊撃隊に入るのは必然であり、そこに何の遺憾も抱かない。

寧ろサポートは得意だ。存分に名を広めてやる。

『清く、正しく、高潔に』というのはリユミエル聖騎士団自体の motto で、各部隊に別々の目標意識がある。

本隊——『勇往邁進』

医療隊——『窮鳥入懷』

守護隊——『歲寒松柏』

遊撃隊——『綱紀肅正』

本隊は前に進み、医療隊は手を差し伸べ、守護隊は意志を崩さず、遊撃隊は正しさを貫く。

簡単に言えばそんな物だ。

遊撃隊の情報は役割面の関係で明確に伝えられる訳では無いが、それでも知られているのは『正義審問』。

相手に正義の是非を問い、真実を引き出す手段である。これは相手への疑いを起点とする行為なので、好く者は少数どころか一人もいないだろう。

審問に掛けられたと言う事は疑われたという証明に違わず、自らを見直す機会……ともいえない。

疑いの目を持たれているという事は、逆接的に疑いの目を常に向けている人間がいる事。日頃から裏表の判断がつかない人間を信用するのは難しい話だ。

つまり、審問の役割を担う隊員は相応の覚悟がいる。

戦闘時の陽動に比べれば、残酷と言えよう。

「スルト・ヴァーグナー！本隊への配属を命ず！存分にその炎を振るうがいい!!」

「はっ—」

妥当。

ドラフ達はまあ…守護隊か。

医療隊はある意味エリートが入れるところだ。回復魔法は貴重とされる時代になっているからな。

「ロイス・モラクレル！貴公は本隊だ！励むように！！」

「はっ！！」

妥当…うん、妥当。

寧ろどの隊でも出来るだろう。地味にあいつは浅い切り傷なら癒せるくらいの回復魔法使えるんだ。

真の天才はロイスかもしれない。

「ルブロ・マイス！貴公は守護隊への配属を命ずる！国の盾となり、誇りを保つように！！」

「はっ」

身体強化なら守護隊向きだろうな。

なるほど、人数で考えるより、人の向き不向きを考えた結果か。

スルトは殲滅能力、ロイスは回復持ちながらも強い実力から本隊。

俺は察知能力、記憶忘却による動きの制限から遊撃隊。

ルブロは身体強化による高い耐久性と運動能力から守護隊。

ヒューマンとエルーンは得意分野、ドラフは力から守護隊、ハー

ヴィンはそもそもスルトしかないない。

こんな配分か。

「以上38名！解散！！」

「はっ！！」

教官の声で皆が解散する…と思いきや元クラスメイト達が残る。すると突然肩を組まれながら誰かが言う。

あ、ロイスだ。

「士官学校同窓会……やりますよ!!!」

「「おー!!!」」

面倒くさい。

「くだらん、帰る」

「くだらん、寝る」

「くだらん、鍛える」

「その馬鹿三人組を捕まえろおおお!!」

「「うおおおおああ!!!」」

ロイス司令官により突撃して来る元クラスメイト達。

同窓会を拒絶したスルト、俺、ルブロはもみくちやにされながら店へと連行されるのであった。

「かんぱあーい!!」

「「乾杯!!」」

「最近、星晶獣の詳細が書いてある歴史書が盗まれたみたいですよ」

「星晶獣にもマニアがいるんだろ。俺も読んだことあるけどほぼ凶鑑だぞ。古っぽい絵が乗ってあるだけだ」

子供麦酒、まあ端的に言えばしゅわしゅわのアップルジュースだ。

色が麦酒と似てるから子供麦酒。

アルコールは無論入っていない。ただ雰囲気味わう物。

うん、うまし。

席はロイスが手早く予約したので14人が入れる程の大会場と
なっている。もう14人は別の場所。

別に普通のレストランだろうから良いのだが、もし高級料理店だっ
たらと思うとゾツとする。

こちらら鎧を脱いで着替えただけなのだから、作法も何も無いの
だ。

ジャケットの着用は必然ツツ。と言われても困るし。

「注文をどうぞ」

「フライドポテト五人前を2つ、シーサイドサラダ三人前を3つ、特製オムライス1つ、シチューのセットでエヴィフライ1つ、ベーコンのソテー1つ、レジェンドステーキを3つ、和光ビール2つ、リュミエールスペシャルランチセットを6つ。後、子供麦酒14杯お願いします」

「かしこまりました。しばらくお待ち頂くことになりましたが…」

「お構いなく」

「では、失礼致します」

あらかじて決めておいたメニューを俺が頼み、またもやどんちゃん騒ぎが始まる。

そして店員の言葉を聞き、今思った。

「ロイスウ…その…」

「ん、なんでしょう？」

「ここってやっぱり…良い店？」

「良い店も何も、歴史ある店ですよ。何せ私の家系ですからね」

「…お前の家は料理屋の家系なのか？」

「あ、言ってませんでした？私貴族ですよ」

「……え」

「…ん？」

俺の顔が凍り付いた所で皆が顔を向けてくる。

いや、だって、ロイスが貴族だったら…。今までの失言、暴言、エル・グロリアスでの傷……………。

貴族とは国の権力で言えば上位の存在となる。そんな家の娘に精神的・身体的傷害を与えてしまったら…。

死んだ、おれ。

「自己紹介を改めてしましようか…。みなさーん聞いてくださーい！！」

「なんかはじまったぞ？」

「さつきなんか貴族がどうか…」

皆が集まってきたところで、ロイス様がお開きになる。

「改めまして！聖騎士ロイス・ヴァンリヒテン・モラクレルをどうぞよろしく!!」

「あ、ああ」

「あれ？ヴァンリヒテンって、数百年前の商業家の名前？というかミドルネームって事は……………」

「「貴族」」

「はい！何かコーリスさんが急にビビり散らかし始めたので明かしてしまおうかと!!」

「アガ、あががが」

「コーリス!?どうしたア!？」

「貴族ニ：喧嘩売り、マクツテタ。処刑ハ：処刑ダケハ許シテ」

「こんな反応されるから私は士官学校で言わなかったんです」

リュミエールでは貴族、王族はミドルネームを名乗る。

但し書類などに使うのはあくまで名 ファーストネームラストネーム 前と姓。

ミドルネームを使うのは当主のみである。

「私の家…モラクレル家は覇空戦争後、商業家としてこの空域の経済に貢献をしたそうなんです。その時の当主がヴァンリヒテン・モラクレルですね。ちなみに彼は料理も得意で、商業が落ち着いたら王族に使える料理人を請け負ったらしいです。どこの島かは分かりませんがね。で、数代跨いでリュミエールに来た訳です」

「なる程。その丁寧な口調、慣れた礼儀作法。富んだ知識と学力も全て英材教育の賜物か」

「正解ですコーリスさん」

「丁寧な口調…敬語なだけで口悪いだろ」

「突っ込むな。流れに任せろ、水のように駆け巡るんだ」

(ぎよい)

(お前ら黙れ。この話題普通に気になるんだ)

ヴァンリヒテン卿自体は有名であり、歴史を習う上では欠かせない

人物だ。

モラクレル家という物は貴族階級の話であり、一般市民の我々とは縁のない話なので知る由もない。

「ならそれを活かして家を継げば良い話では無いのか？」

「それはつまり…騎士になるよりも家を継ぐほうが理に適っている。と言いたい訳ですか」

「ああ」

「左様ですか。そうですか」

「……」

「……チツ」

(いま舌打ちした!? 貴族階級の娘っ子が!)

(いやコーリスの言い方も悪い。『その努力って意味あったか?』って暗に言ってるようなもんだぞ)

(折角の同窓会が…こんな雰囲気じゃ飯も不味くうんめえええ!!!)

(やっぱロイス家継げ!! そしてサービスしてくれ!! 美味の暴力や!!)

(近距離だからって脳内会話をするな。うるさい)

(すまんなコーリス。ラーメンより美味いわ)

(殺すぞ)

(なんで?)

先程の発言により、静まり返った雰囲気となってしまったが、近距離限定で魔力を繋げる事で思考を相手に伝達する技術を行使している為か寧ろ煩い。

いわゆるテレパシーと言うやつだが、距離が少しでも離れるとアウト。更に魔力を繋げるので、予め魔力の特徴知っておかねば繋げる事も出来ないの、士官学校生限定の会話だ。

本来隠し事などをする場合に使うのだが、隠そうとして相手に介入された瞬間終わるので意味が皆無。

なので色々聞いていたロイスは憤る。

「先程から黙って聞いていれば好き勝手ぺちやくちやと。騎士に憧れ早十年…鍛錬と勉強の日々。貴方達みたいな半端モンとは格が違う

「んですよ」

「ふん。一騎打ちの負け惜しみにしては随分と陳腐な言い回しだな。そんなザマではかのヴァンリヒテン卿も涙を抑えきれないだろうな」

「あ？」

「ん？」

「決闘やますか？」

「余興にしては丁度いい。【陽動兵にも劣る本隊】という間抜けな絵面が出来上がるな」

「正しくは【本隊の足元にも及ばない落ちこぼれイキリエルーン】ですよ。しかし今日はやけに喋るじゃないですか……遊撃部隊に選ばれたのが一人だけだから寂しくなっちゃったんです？」

「な、何をいいだすかかとおもえはえはえ」

「動揺しすぎです。本当に寂しかったんですね……」

「ハイ」

そりや顔見知りがない中敬遠されがちな遊撃部隊に所属となれば憂鬱にもなる。

「ここらで優越感を稼いでおかねば一生前を向けん。」

「場所は寮の中広場。ルールは……そうだな。【気絶した方の負け】にしないか？」

「明日の予定は？私は休日ですが」

「無論、休みなどない。必要ない」

「いや洒落になりませんよ本当馬鹿ですか？」

「構わんよ。一度勝った相手に負ける方が難しいというもの」

「……………泣かす」

「お前の水による擬似的な涙だろう？空虚だな」

「」

端的に言うと、俺は一方的に負けた。

気絶というルールは奴にとって、【殺さなければ良い】という物だったらしい。

何故か決闘の記憶が失われたが、他の奴らに一部始終を聞いたのでロイスの恐ろしさを知る事が出来た。

- ・ 敢えて木剣の柄で鼻を殴打する。
 - ・ 水を口の中に入れて溺れさせる。
 - ・ 小さな水たまりを作り、相手の髪を掴んで顔を押し付ける。
 - ・ 相手のつま先を全体重掛けて踏む。
 - ・ 無言&殺意の腹パン（七回）。
 - ・ ■■■を蹴る。
- などなどだ。

俺が記憶を都合良く忘れた理由も解るといふもの。忘れなければ俺は廃人になっただろう。

今こんな事を語れるのも皆が治癒魔法をかけてくれたお陰だ。

ところで、俺は何時間寝てたんだ？

え、2日？じゃあちこ——

18. 軌道修正

「――三階の中央に飛び道具及び銃器持ち二人：入口に鈍器持ち三人、隅に暗器持ち二人」

「ご苦労。恐らくは麻薬の売買グループが我々を袋叩きにする為の布陣だろう」

「お言葉ですが：このような仕事は本隊の秩序立てによる制圧が道理なのでは？」

「遊撃隊隊長の文書によると、〔後ろ足が立つ組織の殲滅は隠密かつ確実に行うべき〕、要するに騎士団の評判を落とさない為に私達がいるという事だ」

「それが遊撃隊」

「そうだ。準備に移れ：取り逃した場合お前に捕縛してもらおう」

「了解」

「よし、作戦位置――」

少数の精鋭達がその言葉を聞き、チェスの駒を並べるかの如き迷いのない精密な陣形が作られていく。

建物の入口には突撃兵、窓の周りには狙撃兵、裏口には捕縛用の罟。そして、一定の範囲から外には俺を含む兵。

「開始ッ!!」

その叫びと共に、小さな戦場が生まれた。

禁薬ヘヴン。

体を活性化させると認識させ、強制的に喜び、快楽を与える危険物。

絶望、興味、傍観、刺激、依存。

下らない一時の感情に敗北し、手を伸ばしたものはやがて人生にお

いても苦汗を飲まされる事となる。

無論、彼らは自分が負けた事にすら気付いていない。

そして、禁薬という呼び名の通り、合法的な薬品では無い事が明らかだ。

しかし依存性や多幸福感からか完全に社会から抹消する事は出来ず、高値で売るには丁度いい。

裏の世界は違法の取引上等クソツタレ世界だ。今まさに下請けの組織をあぶり出し、縄に付けてやった。

それでも奴らは諦めない。

いや、そもそも終わったとすら思っていないのだ。既に薬品は売り捌かれており、下請けの自分達すら止められないお前らは凡俗だ、と。そう目が語っている。

腹立たしい。憎い。嫌い。悍しい。疎ましい。恨めしい。

何故悪気の一つも見せられない？

何故他人の世界を見ようとしらない？

お前らによって人生が狂った人達は、それまで狂っていない生活を続けていたのに。

魔物に襲われ、引き裂かれ、貫かれ、穿たれ、食われる……そんな死に方なんて迎えない人達だった。

本人は幸せと思っている？

……人生が狂っていたからヘヴンを求めた？

——お前等はツツツ!!!!

「やめろ」

「っ!!」

激情が硬直する。

今作戦での責任者、所謂リーダーだ。

その人に手首を掴まれ止められる。意識を向けてみれば、自分の剣が犯罪者の肩近くにあった。

ああ……殺そうと思ったのか。
無意識に。

くそ、さつきから頭がおかしくなりそう。人間の底知れない悪意の一部分、背景、現状、感情、思考。

それらに頭を掻き回される気分だ。不思議と言いたい事は一つだが。

「……お前等」

「あ？どうしたガキ。腐ったか？動機でも漁るか？幾ら盛り返した所でお前等が信じる平和なんて一生訪れねえんだよ。ああ、なに？被害者の気持ち考えた事あるかって？説教？残念ながら気持ち考えた上で反抗に及べる程覚悟キマツてねえんだわ。シコー停止よ思考停止。寧ろ考えすぎて辛くなってるお前が一番惨めだと思うがね」

「——ああ」

「耳を貸すな……。正論だとしても腹に入れてはならない物がある」

「いえ……頭は冷えています。ただ単に気になったのです」

「……分かった、程々にしておけ。そして理解納得したなら選択をするのだな。遊撃隊とは魔物への遊撃を意味するのでは無く、聖騎士団としての遊撃。つまり本隊を光として成立させる為の影という意味。このような仕事はザラだ。耐えられない様なら致し方ない……お前はただ子供だ」

沈黙すらも返すつもりは無い。

元より返答など期待してはいないだろう。生意気な下っ端と思っ
てくれても今は構うものか。

俺は、聞かなければならないのだ。

俺自身の為に。先生に言われた事を成す為に。

班長と先輩方は遠目で此方を見ている。俺の声が聞こえない程度に気を遣ってくれているのだ。

感謝、そして少しの恨みつらみ。

こんな仕事ならば、任務前に説明してくれても良いではないかと。

そんな事を思いながら目の前の罪人、それもリーダー格の男に問い掛ける。

——これで、何か変わるのだろうか。

「一つ聞きたい」

「斬りかかってきた奴が持つ冷静さじゃねえな。情緒不安定か？」

「…すまない」

「そこで謝んじゃねえよ」

「取り敢えず聞かせてもらう。その、俺が斬ってしまいそうになった時もあったのだが、何故平然としていられるのだ？お前等は違法物を売りさばき、信用を得る事でのし上がり上を目指そうと思ったのでは無いのか？」

「……ま、そんな事も考えたか」

「それを邪魔したのが俺達騎士団だ。罵詈雑言くらいは受けるつもりだったがお前だけは表情が終始変わらなかったな。覇気の無い、諦めた顔だが」

「好き勝手言いやがってガキが……まあ、売買が成功するに越した事は無いがな。違う点と言やあ上を目指そうなんてつもりは無いという事だな」

「生きるため…か？」

「さてな。ぶつちやけはした金で泥食って生きるくらいなら？同じクソみてえな金額の仕事なんて幾らでもあるし、俺は多分シリアルキラーでも精神異常者でもねえから働こうと思えば働けただろうな」

「なんでだ」

「あ？」

「そこまで客観的に見れるなら何故辞めなかった。何故自分の事すら

置いて非人道的行動が出来る！他人も自分も見捨ててお前は何がしたいんだ！」

「——死にたくねえんだよ」

「…」

「死にたくねえ——嗚呼死にたくねえ。そう思つて生まれてた訳でもねえ。かと言つて人生謳歌なんて特に考えもしねえさ。でもな、他の人間を見てるとよ…俺にもワンチャンあるかなつて思うんだよ」

「…あるわけがない」

「そう、ある訳がない。それでも楽しいを知りたくなる。はした金でへこへこ頭下げる事に慣れて、人が馬鹿になつちまうヤクを売つてもよ…買った奴は気色悪い笑顔で『ありがとうございます』つて言うんだよ。馬鹿かつての。何回『人生壊れてんぞ』つて言いそうになつたか分かんねえや。売る事と買われる事に慣れすぎて相手の笑顔を見る度にな…実は俺良い事してんじゃねえのつて感じた。んな訳ねえのにな」

「お前はそうせざるをえない環境に生まれたのか？」

「…まあ捨てられるつてもそう重いわけじゃねえんだ。本当にキツイのは守る対象がいる事だな。俺の場合はノロマな弟さ。少しでも俺達を可愛そうと思つた奴は密かに食いもんを持つてきたよ。それで生き長らえてきた」

「——で、馬鹿な俺達は少しでも恩返ししようと思つてねえ頭で考え、ゴミでも雇うこつという仕事に着手…結果騎士が来た」

「今回と同じか」

「ああ、違う。ベテランの集まり＋α…お前みたいな優秀な奴じゃ無くてな、新人の集まりさ。俺はそんなとき15だったからおとなしく捕まつて最低限の飯貰おうと思つたんだがなあ…11の弟が自分の生活が破壊されると思ひ込んでな」

「殺したか」

「殺そうとしたのは確かだ。実際手が逸れて脇腹に浅い突き傷。それで焦つた騎士達が弟の胸を斬つて終わりだ。俺は普通に逃げたがな」

「騎士^{俺達}を恨んでいるか？」

「最初は恨んだ。幸せにしてあげようと弟の為に日金を稼ぎ、その弟も自立しようとか俺と一緒に働いた。で、その弟が殺されていつか復讐してやろうと思った」

「でもな、後々考えて分かったんだ。弟が斬られた時に先に動いたのは足だったって。浅い正義感がただの義務感に変わったのに気付いていなかったんだ。幸せになろうとしてたのは俺だった」

「それで、腐ったのか」

「諦めたな。俺に出来ることは金を貰って上から渡された薬を売り、バレない程度に逃げる。使えない部下は身代わり要員になるが、まあ何も感じねえな。同じ屑同士」

「——聞きたい事は終わった。これからブチ込む」

「お前天然か？それともワザとそういう無遠慮キャラやってんのか？同情するもんじゃねえのか普通の人間は。して欲しくはねえが。俺からも少し聞かせろ」

「なんだ」

「騎士つてのはよ、正義感で動いてるもんだ。人を助け悪を挫く…まさに守護者と言ってもいい」

「だな」

「でもお前等みたいに汚れ役がいる。汚れ役にも珍しいガキがここにいるがな。で、健全な精神で善行を日々重ねる本隊だが…遊撃隊前に手を汚させる無慈悲さも兼ね備えている。どういう精神持ってたんだ？」

「誰に対してだ」

「団長も、お前にもだよ。まともな精神持つてる奴がまともな行動で人を助けようとして違う人間を殺すなんて耐えられる訳ねえだろ。普通辞めるわ」

「何が言いたい？」

「お前——この仕事に信念持つてねえだろ」

「話は終わりだ」

「終わらせねえ。久し振りに騎士の嫌がる顔を見れたんだ、弟まで持つてくぞ」

「引きずってるじゃないか弟の事」

「諦めただけで忘れたわけじゃねえ。続きだ。信念ありじゃその乖離性で腐って騎士を辞めたくなる。じゃあどうだ？騎士としての行動理念が自分で固まってなきや迷い惑って結局その境遇に適応しようとする。今のお前がそれだ」

「違う。俺は騎士に——」

「お前やっぱ馬鹿だよ。夢叶えたのに現実見えてねえじゃん。普通現実見てから夢叶えるんだぜ？」

「現実など今思い知っている…!!」

「甘え。お前もお前で普通とは離れた人格をお持ちだな。さつきお前が環境に適応しようとしていると言ったが撤回する。お前は諦めてるだけだ。ベクトルは違うが本質的に今の俺と同じ。丁度俺が腐ったのは16だが…お前何歳？」

「……………17歳」

「うは、似たもの同士だな」

「ふざけるな!!!」

「わはははは!!!」

くそ、こんな筈じゃなかったのに。

腐った奴相手に、人の命を弄んだ奴に、自分すら捨てた奴に……
見透かされる
本音で話す事は、ここまで——

「遅れました…申し訳ありません」

「構わん。どの道お前なら逃さんだろうし、緊急の用事も来ていない。今回の任務はお前が居たおかげで迅速に終えられた。部下の負傷もない。感謝する」

「いえ…自分にできる事をやったまでです」

「お前に出来ることは俺達が束になっても出来ない。自分を卑下するな…」

珍しく優しい顔で部隊長が頭を撫でてくる。

痛い。撫で方が荒い。耳が曲がる。俺17。

そういうのは肩に手を置いてやるべきだ。

強面の男にやられて嬉しいものではない。照れる事なんて以ての外。

まあ大人のエルーンお姉さんにやられると少し——ほんのすこおーし嬉しいかもな。

「で、どうだ」

「どうだ、とは?」

撫で心地ですか?最低ですよ耳が痛むし頭皮捻じくれたかと思いましたがよ。大体子供も抱いたことない強面二九歳の貴方が簡単にエルーンの耳を調伏出来るとでも?

フツ!笑わせる。

知り合いに静かなエルーンがいますが耳を触ると烈火の如く反応し嵐の様に身をバタバタさせますよ。

まあエルーンの耳にも差がありますからね。脇の下をこちよこちよしても効く人がいたりいなかったりするのでそれと同じ様なものです。

同種族ですら測れない距離というものがあるのに貴方がそれを理解できるとは思えないんですよどうですか？

貴方に妻は出来ますか？

「なんか殴りたい…」

「俺そんな挑発的な顔してました？」

「『貴方に妻は出来ますか？』って煽られた気がするな……」

「マジかよ」

「当たっていたのか。それよりどうだつていうのはあれだ。お前が遊撃隊を続けるのかつて話だ」

「続けますよ」

「そんな簡単に承諾するべき物じゃない。軽く覚悟をするな。覚悟イコール

Ⅱ 手を汚す——同義だぞ？」

「分かっています」

愚問だ。

「なら今だけは聴く在れ。そして猶予を与える。考え込んで何方かを受け入れろ」

「猶予も余裕もありません。この仕事をやります」

「何故そこまで迷いを捨てる？さつきまで迷亭していたお前が」

「対話して気付いたのです。自分はどうかやら…頭がおかしいみたいなのが。何でも受け入れ享受しているように見えて唯諦めているだけ。なのにそれを俺は自覚できていない。欠陥的な思考です。でも、逃げたしまえば現実を見て諦める事も出来ない。今『この能力霧が役に立っている』を知っている。となれば、諦めるのは自分の境遇だけで良い。逃げてはならないのは、諦めてはいけけないのは俺で救える命です」

「その覚悟——虚偽は無いか？」

「ありません」

「ならば付いてくるが良い——コーリス・オーロリア。恐ろしき霧の申し子、傍観を捨て絶念を選んだ騎士。誇りは国に委ね、自己を薄め尚かつ保て。お前は遊撃隊の柄になり…支え、剣身である本隊を守り

捨てられる」
「了解」

（この子は本当に人を守り、自らを滅するのだろう。尊い意思だ。卑下するのは誰であつても許される事では無い。憧れしか持ち合わせしていない少年が瞬く間に騎士としての理想系を描いた。だからこそ

—— 生が苦となるだろう
人としては欠陥品だ。

19. 座

猛りがあった。

何人をも寄せ付けぬ熱があった。

だが――

「次」

空気を支配する”凜”が座しているからには、熱も冷めるだろう。

リュミエール聖騎士団の朝は早い。

そして、青いのだ。

入団したばかりでは何処を向けばいいのか分からない新人達は、風情を理解する為に二年間の研修へと移る。

そして、研修には必ず目付け役が必要だ。

聖騎士団長と二人の引率の合計三人が新人の育成に携わるのだ。

その二人の引率とは一年間の周期で入れ替わる。

今回の引率は…

「コーリス・オーロリア、到着しました」

「ロイス・モラクレル、到着いたしました！」

因縁多きエルーンコンビである。

そして、新人達を引き連れた二人に返答するのは聖騎士団長。

中央に佇み凜とした金色の髪を靡かせる優男。

「む…今回の引率はお前達なのか」

ルクス・ベルバレク。

若くしてリュミエール聖騎士団を統治する——最強の男である。

「コーリスにロイスか…スルトは来年か？」

「恐らくは任務に駆り出されるので引率に有り付く暇は貰えないでしょう」

「そうか…いや、スルトがいると俺が楽しんでしまうからな。珍しく骨のある奴だ。俺と5分間戦い続けられたのはアイツが初めてだよ。で、さっきから黙っててどうした？コーリス」

「まさか暇じゃないのに駆り出されて不貞腐れてる訳じゃないですよね〜？」

「…俺の事はいいでしょう。彼らが置いてけぼりを食らってます」

「ハイッ！いじけ確定〜！」

「……………」

「そこまで、だな。確かに彼らを無下には出来ない。お前の言う通りだ。では、改めて自己紹介をしようか。俺はルクス・ベルバレク。リュミエール聖騎士団団長をやっている」

「本隊所属、第一部隊のロイス・モラクレルです！よろしくお願ひしますね！皆さん」

「コーリス・オーロリア。遊撃隊所属、作戦実行部隊に今は属している。よろしく頼む」

一泊置いて

「三宜しくお願ひします!!」

自分達もそうだったと懐かしい顔を向けるコーリスとロイス。

3人とも帯剣しているが、鎧などを着用せずに籠手や脚絆で済ませている。その為何時かは兜で隠されている顔が明らかになっている。

二人とも決闘から5年経っているためか、もしくはエルーンの為か

凜とした顔付きになっている。

大人び、端正な顔付きはエルーンの特権とは良く言ったものだ。ヒューマン基準で言えば美顔が並んでいると形容していいだろう。

しかしエルーン基準で言えば普通の顔付きなのだ。

「この二人は君達の引率として騎士団のノウハウを叩き込みくが、俺は違う。聖騎士団団長は忙しい……だから一定の周期・時間にしか関われないだろう。悲しい事に新人の進化を目の前で見えることは叶わない」

これも言われたなあ、とウンウン頷く二人。

団長が説明している隙にこれからの事を確認する。

「確かこの後は団長は解散して、俺達が施設の紹介をするんだよな？」
「はい、そうです。手筈だと訓練風景を多少見せる時間がありましたけど、まあ私達がされて来た様にやっていけば良いと思いますよ。問題児もいなさそうですし」

「いや、本性は武器を持ってば解るものだ」

「遊撃隊で得た経験ですか？」

「ああ、対人が増えたからな。多少の才能がない限り武器種は本人の性質に依存する」

「私は？」

「お前は自分のスペースを作るのが上手いだろ？細剣は脆いから自身の緩急と高い集中性が必要になるな。だから余裕を持って自我を保てるお前に向いていたと言う事じゃないか？」

「へー。じゃ、何でコーリスさんは長剣を握ったんです？」

「体幹が強かったから」

「まあ丈夫ですしね。堅実な戦い方をすれば長剣も中々に強力です」

「カウンターもそこそこ狙えるぞ」

「でもそういう戦い方する人って絶体性格悪いですよね」

「……」

「堅実に見えてちまちま攻めてるだけで、こっちが疲れるまでずっと逃げられるんですよ？こちらの体力が無くなったらトビウオみたい

に意気揚々と剣振ってきて、斬り込んだら急に受け身になってカウ
ター。霧で死角なし。防御魔法で跳ね返し。コーリスさん、マジウザ
いです」

「ではお前の強さを述べてやろう。水の魔力は攻撃防御共に優れ、目
くらましも可能。お前自体が速いおかげで対応が難しい。攻められ
続けるとこつちが辛いな。だかしかし俺が勝っちゃうんだよなあ」

お互い笑っていたが、ロイスの目付きが少し変わる。

まあ『殺してやろうか』という一時の軽い殺意なのでいつもの事だ
ろう。

「…水って結構便利ですよ、人を苛つかせる霧と違って。生命の源と
まで言われる根源的な属性ですから。人を活かす魔力と言っても良
いくらいです。戦いだけの為に存在するんでも？」

「論点をすり替えるな。生まれで決まる魔力で背比べだと？馬鹿馬鹿
しい。それはお前が最も嫌う貴族の在り方では無いのか？論破」

「何口喧嘩程度で上に立った気でいるんですか？騎士なら行動で示し
てくださいよ。ハリボテメンタルさん？論破」

「論破の仕方が雑。目先の事象の否定しか出来ず本来の討論を忘れて
いる。ロンパ」

「そもそも私が仕掛けたのに対し煽るように対応した時点で底辺の精
神。討論とかつこよく言っているも只の口喧嘩。騎士として情けな
く悲しく哀れ。ロンパ」

「国語が苦手なせいで論破をはき違える悲しい女。彼女の名はロイ
ス。ろんぱ」

「コンプレックスを抱えているものに限って成績マウント。ダサいだ
けで無くウザくて不要。ろんぱ」

「ただの悪口。ろんぱ」

「真実だけを伝えています。ろんぱ」

「ろんぱ」

「ろんぱ」

「……………」

「——であるからにして、君達にはこの国を守る騎士にn」ガキン！
キン!!バギャー!ゴジャ!!」

「ちよ、何か後ろで斬り合ってるんですけど聖騎士長!?」

「きやああ!!今、膝が顔につ!!鼻が!」

「か、髪を掴みながら斬り合ってる!」

「手を引け○女たがああああ!!!」

「ばっ……!!!もう一回言ってみろや糞○カス野郎があああああ
!!!」

唐突に始まった殺し合い（傍目から見たら）を繰り広げる両者。

きつとこの音声を録音して公共に流すならば、規制の限りを尽くされる事だろう。片や騎士の振る舞いを極めたとされる男。片や由緒正しき貴族——モラクレル家のご息女である。

何故このような事になってしまったのか。

研修を受けに来た者達は思う。

聖騎士長の言葉に気を使い、一言一句逃さず心に刻みつけていたというのに、気が付けば後ろの人達が何か喧嘩…剣で戦ってる。

混沌此処に極まれり。

一時離れた二人が息も絶え絶えに口を紡ぐ。

「クソエルーンが…トラモントでどんな教育受けてきた!」

「毎日遊んで過ごし!霧が出たら家で遊べ!」

「遊んでばっかで勉強しねえからメンタル育たねえんだよ!あー貴族で良かった!勉強豊富ですわ!」

「勉強ばっかしてっから煽ってばっかで本当の友情知らないんだろう

な！悲しい女だ。生き遅れんぞ！」

「聖騎士長！会話が下劣すぎます…聞くに耐えません!!あの二人を止めてください！」

「あれ？聖騎士長さんいない」

「——少しうるさい」

「ごは」

「がつ」

痺れを切らした聖騎士長、ルクスは打撃による意識の消失を促した。

自分の長話に熱中する余り、聞き手や他の環境音を気にしなくなる癖はあるが、今回は基準を超えたらしい。

やたらスツキリした顔で話を続けようとする。

「さて、続けようか」

「あの…お二人はそのまま大丈夫でしょうか？」

「ああ、そうだね。君達を任せる以上俺の話には参加しておいて貰わないとな。起きろ」

「ぶがああっ!!」

「ばがつー!」

「うわあ…!」

気絶している二人にさらにもう一発。

アウギユステの浜辺に上がった魚の様に身体が跳ね上がり、混乱した表情で団長を見る。

「さて、説明は終わりそうだよ二人とも。何か彼らに言うことは？あ、謝罪じゃないよ。自分達が安心できる存在だと証明してくれ」

「……………無理です」

「じゃあ後で無茶振りするからそのつもりで。で、何だかんだ士官学校を卒業している者や腕に多少の自信がある者に言いたいんだが、人を救う以上実力が無いと困るんだ。底意地つてのは最低限必要な物で、別に尊くとも何ともない。だからさ——かかっておいでよ」

「自然な流れで新人に喧嘩売るの止めてください。それに乗ったスルトさんが秒殺されたの忘れてませんかからね」

「いやはや、自分の目で見ないと力なんて分からないだろ？俺から攻撃はしないし、ここは広い。大丈夫さ」

「治癒魔法使えるのロイスだけですよ。新人達も使える可能性がありますが、疲れさせるのはどうかと…」

「疲れるのはロイスだけさ。頃合いは弁える」

「はあ…」

この男はいつもそうだ、とコーリス溜息を吐く。

一度気になった物に追求を止めないし、自分の意見を曲げない。屁理屈も言わない。ただのゴリ押し。

自分達も目をつけられ、酷い目にあつた事がある。

それはコーリス達が子供で、生意気という言葉が似合う年頃だったからだ。嬉々として勝負に乗った。

30分もかからず血気盛んで恐れ知らずの集団がこの男によって浄化されたのだ。

「何はともあれ木製だが剣、槍はある。斧は無いな…薙刀で我慢してくれ」

結局、新人たちに逃げ場は無かった。

「てやあー！」

「ふっ！」

「やっぱり士官学校は教え方が良いね。連携は初歩中の初歩としても、バランスがいい」

一人がルクスの足元を斬り払い、回避を促す。そして、回避先のルクスの背後には挟み込むように詰め寄る二人。

しかし、手応えは無い。始めからそこにいなかったかの様に二人の背後にいた。振り向くと同時に剣を破壊される。

腕だめしに当たってルクスが提示した条件がある。

- ・彼が一度でも攻撃を食らったら負け。
 - ・彼からは攻撃を仕掛けない。
 - ・武器を破壊された者は戦線を離脱する。
- という物だ。

これなら怪我人は少ないだろうと考案したルクス。嬉々としてカウンターを決めてゆく。

「虚を突くのはいいが、万人に通用すると思わない事だ」

「くそ……」

「後は一人。一対一で俺に意地を見せてみるかな？」

「……いきます!!」

「いいね」

褒めておきながらすらすらと攻撃を避け、破壊。

木剣同士の激突なのに、破壊される側の剣は両断される。

異常な破壊方法。

「いやー、楽しかった」

「お疲れ様です。気は済みましたか？」

「コーリスか。寧ろ火が着きそうで怖いね」

「程々にして下さいよ。新人だって暇じゃ無いんですからね」

「じゃあ…お前等は暇という事か？」

「ええ…まあ。新人達は色々仕度を降ろす必要がありますが、俺達は任務を減らされてますので」
「よし」

あ、何かまた企んでるな。と諦めるコーリス。
大方破壊された木製武具の注文をしておけだとか、説明の引き継ぎだとかを任されるのだろう。

不安を懐きながら、団長を見る。

息を切らしている新人約20名に話しているようだ。

「君達は大分強いよ。実戦で成長できる素質は皆持つてるね。だからさ、成長例を見てみたくない？」

「成長例…ですか」

「例というか…指針みたいな物かな。それを見本にして頑張ってもらいたい。丁度いいのが二人いるからさ」

「二げっ」

「新人の前で俺と戦ってくれるな？コーリス、ロイス」

「……………はい」

「勝手に返事しないでください！私は嫌ですからね！！」

「ダツテコトワツテモニゲレナイジャン」

「キリツカエ!!、キリ！」

「むり」

「早く構えて。魔法は禁止」

いつものアドリブ無茶振りに辟易としながらも、二人は死んだ目で腰に差した金属製の剣を抜く。

その目は憎悪と絶望に染まっている。矛先はルクス。

二人は構えて、前を見据える。

「——合わせて下さい」

「分かった」

空気が変わる。

剣気がビリビリと部屋を刺し、それを受けたルクスは満面の笑みで告げる。

「第2ラウンド開始って奴だな」

ルクスも剣を抜き、二人への迎撃を試みる。

「せいっ!!」

初手はロイスの突きによる率先に始まる。

正面からの彼女が剣を振るった瞬間に出来る影に紛れ、横からコーリスが斬りつける。

「甘い」

が、聖騎士長。

コーリスの剣を受け、刺突よりも速い蹴りでロイスを巻く。一瞬で有利性が覆った。

空いた手でコーリスの手首を掴み、剣を止める。

「堅実な立ち回りは飽きたか？掠め手が顕著になってきて少し寂しい気分だ」

「両方出来ますよ!!」

膝でルクスの手を外し、剣での応酬再び。

そこでロイスは斬り合いの最中、彼の身体の合間を縫って刺突を繰り返す。

一歩間違えれば味方の身体に穴を開ける恐れがある連携。

更に二人は入れ代わり、主体になっていたコーリスのフェイントに釣られた団長はロイスの剣を躲す必要が出来た。

「ははっ！怖いね」

「軽口が過ぎますよ団長！楽しいのは貴方だけだと思いますっ、がぁ！！」

「はっ!!」

遠心力を付けた渾身の横薙ぎは鈍器の激突に匹敵する。

如何に女で非力なロイスでも、しなやかさを味方に付ければ怯ませるに造作もない。

ルクスは初めて笑みを崩し、正面から剣を受ける。

互いに一歩引き、均衡が訪れる。

「いやはや、隊は別なのに連携のレベルは上がってるとは。謎だね。遠距離恋愛かい?」

『殺しますよコーリスさん』

『なんで俺!?!』

『挑発に乗らないでくださいね』

『情緒不安定かお前は！しかしどうする…意外に躲してくる。あれより柔い連携は悪手だぞ』

『ならば、奥義。行きましょう』

『アレ…をか?』

『アレです。対極に挟んでいる今ならやれます』

『…やるか』

「会議は終わったかな？プライバシーー気にしない君達にしか出来ないよそれ?」

「そんなもん必要無いんですよ。億劫な心持ちが不要なんです」

「耳が痛いね」

今度はルクスが詰め寄る。

狙いはロイス。崩しやすい方から崩すのは常道だろう。

『来ました!』

『行くぞー!』

激突する寸前、コーリスは剣をルクスに向かって投げた。

しかし速度はルクス以上。剣はロイスに向かう。

躲した後の隙を狙ってくるのかと、ルクスは剣を素早く振り、彼女を崩しに掛かる。

そこでロイスは驚きの行動に出た。

先に届いたコーリスの剣と最後のルクスの剣。2回剣を振り、後の剣を受け止める。

「珍妙だね。面白いが残念すぎる」

剣を放したコーリスには時間の重荷が背負わされる。

その摂理を当たり前に理解しているルクスは遅れて気付く。

その時には既に背後を取られていた。

更にロイスが剣圧をかける。

「ほんとにさあつー!いつ練習したんだ!」

先にロイスに届くであろう投げられた剣をコーリスに向けて弾く事で、ルクスへの2連撃目へと同時に彼に剣を持たせ挟み撃ちにする。

しかし剣の先を弾いてコーリスの方向へ飛ばすのは至難の業。高等技術以前にその技術を磨く理由が無いし必要ない。

よってその連携の真髄。それは…

「二運に決まってるだろうがああああ!!!」

憐れな新人たち。

色々な感情を混じらせ今日に至る彼等は、初めて同じ心を通わせた。

『馬鹿だこの人達』と。

20. 波のように快闊で、繽紛たる

(これはちよつとまづいかもな…)

偶然、偶然だ。

ここまで綺麗に背後を取られた事はない。何せ運任せの攻撃だ、初見では見切れまい。

と言つても、頭が硬い俺の落ち度でもある。

『燃やし尽くしてやる！環境破壊・城壁焼却・世界抹消オールオーケーじゃああああ!!』

『完封されたからってキレないでスルトさん！』

『不甲斐ない…ん？——ばぎや!?』

『『コーリスが瞬殺されたああ!!デジャブ!』』

新人だった頃の彼等の闘争心は変わっていないらしい。

その無鉄砲さも。何処かすこしズレている、はつきりと言つてしまえばアホな子達だった。

あの時もまあまあ強かったかな。真面目に相手してあげていたし。

とはいえ完封した。ここで敗北心を植え付けて向上心へと昇華させる。その為の俺だ。

今この二人を見て、狙い通り成長したと言える確信がある。最後の曲芸を抜きしても見事な連携だった。

『君と君。えーと、コーリスとロイスだっけ?』

『は、はい!』

『君等は相性がいいね。良いコンビになれるよ』

『遠慮しておきます。私…この男嫌いなので!!』

『俺は自分より弱い奴…興味無いんで(キリッ)』

『あ?』

『ん?』

『殺すぞ?』

『上等。目の玉腫らしてやるからな』

わざとやってるのかと思うくらいすぐ喧嘩をする。

実力者に限って一癖あるという風潮は間違っではないかもしれない。

現に彼等の中で頭一つ抜けているのはコーリス、スルト、ロイスだ。コーリスはずば抜けた防御力と魔力量を持っている。

スルトは攻撃力が異常だ。

ロイスは攻撃防御の劣りを誤魔化せる速さ。

とはいえ、これは僕の分析の範疇。どんどん色々な戦術を身に着けるだろう。

現に遊撃隊に所属したコーリスは、防御よりの戦い方に相手の裏をかく戦い方を混ぜ込み進化させた。

ロイスも速さに高い正確性が合わさった事によって連携のレベルが上がっている。

もう彼等は新人じゃない。

聖騎士だね、立派な。

なら、真面目に相手をしなければ。

俺は——団長だからな。

「終わりです!!」

「終わりだ!!」

前からはロイス、後ろからはコーリス。

勝ちを確信した両者は邪悪な——下衆な笑みを浮かべて聖騎士長を屈服させようと襲い掛かる。

(散々ボコられてきたんだ……泣かしてやる！)
(二人で勝つのも癪ですが……勝ちも勝ちですねえ！)

最早外道の所業としか思えない戦い方。

それも運で成された結果だと考えると、第三者視点で見ればムカつく事この上ない。

先程巻かれた新人達は、反面教師という言葉が胸に刻んだ。

魔法も魔力による身体強化も使えない。

これが詰み。

しかし何故か戦局は……変わる

「!!!」

斬りかかろうとしていたロイスの手には、何も握られていなかった。

(剣を……取った、の?)

刹那の思考、合理性を求めるのならそう結論付けるしか無かったのだ。

(やって……くれる)

優越感、自尊心、全力、誇り。

それらを全て乗せた剣を防ぐのでは無く奪った。そしてその剣を利用して自分の勝利に焚べようとしている。

少し……気に障る。

相方のコーリスの方をちらりと見る。

同時攻撃の為、ロイスの剣で防ごうとしても間に合わない。ならば奪う過程で防ぐしかない。

その無茶を、やってみせた。ルクスはそういう強さを使いこなせる男なのだ。

どういう動きで自分の剣を奪ったのかは知る由もないが、コーリス

の剣は弾かれた。

ならば、次に来るのは彼への迎撃。

コーリスの剣を盗まずに弾いたのは、その方がやりやすいから。ロイスの方が簡単だと感じられたからだ。

経験を積んだ彼女はそれを理解できた。

簡単に言えば、舐められたのだ。

怒りが炸裂する。

「コーリス!!!」

「ッ!!」

彼を呼んだ声はロイスの物。

どんなに怒りが募ろうが人を呼び捨てにした事は無かった。喧嘩はしたとしても、彼等は仲間なのだ。

共に研鑽し、高め合った。尊敬すべき人。

それを忘れなかったロイスが、初めて強引な手に出た。

(——負けてたまるか)

アイコンタクト。

コーリスは弾かれた剣の柄頭を全力で蹴り、ロイスの方角へ無理やり飛ばした。乱雑、地面に激突した剣を全走力で回収し、ルクスへ斬りかかる。

当然、コーリスはルクスの峰打ちによって外に飛ばされ、壁に激突する。武器も失った為戦線離脱は避けられないだろう。

だが彼にとってはそれでも良かった。

——今においてはロイスの方が強い、と。

「ハアアアアアア!!!」

「なっ!?!」

ルクスは急激に加速したロイスの剣に反応出来なかった。それは
またもや虚を突かれた弊害と言っても間違いでは無いが、もう一つ理
由があった。

ロイスの全力の突きが、加速し続けているのだ。

身体強化無しの限界突破。通常の人体の速度を遥かに凌駕してい
る。

その速さ——形容するなら。

一秒に五突。

一息いっそくにして十突。

ルクスにとって謎にしかない。

彼女の全力を見切ったからこそ、その成長の異常性にだ。

「避けさせてえ……たまるかアアア!!」

「さっきまで運任せだった癖に……くっ!？」

「鈍いッ!!」

後手に回った聖騎士長の足を払い、体勢を崩す。

速度は上がり続け、正確性は失わない。

アドレナリンの分泌という理論も通じない強さがあつた。

だが、その理由は存在する。

士官学校生にしか分からないロイスの特徴があるのだ。

彼女は、火事場の馬鹿力——その爆発力が異常に高い。

本来火事場の馬鹿力とは、怒りやストレス…ピンチな状況下での精
神の爆発というべき物によって起こる。

無意識下での力のリミッターが外されて、一時的に強い力を生み出
せるという物。しかしそれは、常識的な力の範疇だ。

しかし彼女は力の向上の上限が異常に高い。現に両手用の長剣を
片手に持ち、突きを繰り出している。

加えてスルトの様に特異体質でも、コーリスの様に前例のない魔法
を所持している訳でもない。

要するに。彼女は……

たまにいるキレると異常に強くなる奴なのである!!

「ぐ、ぬうああああああ!!」

「……………」

辛うじて鏝迫り合いにまで持っていったルクス。

しかし自分の純粋な腕力にまで追いついてくる爆発力。彼自身、負ける気はしないが勝ち手にも思い付く物はない。

体力切れを狙うつもりも無い。そのような行為は実戦で事足りる。真剣勝負には似つかわしくない。

と、思った時点で彼は自覚する。

見世物のつもりが真剣勝負と思い込む程に白熱していたと。

(ならば……倒す)

どうせ彼女も止まらないだろう。

大きく開かれた目、低い走行姿勢。スルトを追い詰めていた時のコーリスと似ている。

獣らしくなって来たと言う事だ。

お互いに3歩引き、次の一撃に捧げる。

「本気を出す……行くぞ、ロイス」

「倒しますッッ!!」

ルクスは直上に構え、ロイスは姿勢を更に低く保ち地を蹴る。

両者ともに一秒後の激突に全力を掛ける。

(ま、まずい。団長の負けん気が発動してしまった。ロイスも止まらない……怪我人が出るぞ!!)

コーリスは予想外の展開に焦燥とし、即座にこの戦いを止めようとする。

激突の余波で新人達が怪我をしてしまったらどうしようもない。自信の言葉すらも聞かないだろうと踏んだ彼は、勇気を絞り出した。そんな彼に構う者は無く。

「ハアアアアアアア!!!」

「――」

ロイスが駆け出し、ルクスが構える。

決着が着く、その刹那。しかし飛び出す影。

「そこまでだああああ!!!」

コーリスである。

駆け出した俊足のロイスを見事絡め取り、衝撃で吹っ飛びながらも羽交い締めにして止める。

「なっ！コーリス!?どういうつもりだ！」

「大人になって下さい！貴方が本気を出せば人も施設も粉々です!!うわっ!？」

「離せえ…!!離してください…!!!」

「落ち着け！」

男に奥せず強きかな。

羽交い締めにして完全に拘束されても尚止まらず抗い続けるロイス。その力は完全にドラフ並みだ。

その力は完全にドラフ並みだ。

「落ち着け、飲み物でも飲んで休もうな。な？」

「いいいません……!」

「面倒くさい任務も請け負ってやる!!休みが増え円満に過ごせるんだぞ良いよな!」

「——アア……!ぐ、がギギい!!」

「欲しい服でも何でも頼め!!お洒落してみたい年頃なんじゃないのか!?!知らんが!」

どんな懐柔策も耳を貸さず。

彼女が今欲しいものは勝利なのだ。何を言っても無駄な様子で暴れようと試みる。

そこで、冷静さを取り戻したルクスが声をかける。

「ロイス、勝負は預けよう。今度また強くなつて、正式な場でな」

「——」

「強かったよ。コーリスも、良いアシストだった」

「それは……まあ……ありがとうございます」

「じゃ、俺はこの辺で失礼するかな。案内は出来るな?」

「おそらくは」

「迷惑かけて悪かった。ではな」

「………団長」

「どうした?ロイス」

「勝負……お忘れなく」

「………ははっ。分かった」

勝負は一段落。

ロイスの怒りも冷め、コーリスは拘束を解いた。途中から萎縮してしまった新人達にコーリスは声をかけ、各施設への移動を促した。

(長時間戦っていた気分だ……十分も掛かってないが)

余り戦闘に参加していないとはいえ、疲れた気分になったコーリス

なのであった。

さしてある事に気づく。ロイスがいない。

ふと背後を見てみると……雑巾みたいにへたっているロイスがいた。

頭から地面に倒れ込んでいる。

「すまない。少し待っていてくれるか。ロイスの様子を見に行ってくる」

「了解です！お疲れ様です!!」

「頑張ってください！コーリス先輩！」

「……？」

ブチギレロイスを見たせいで完全に触れてはいけない人認定をしてしまった新人達。

アホと思っていたコーリスは苦労人として見ている。問題を起こした回数は彼の方が圧倒的に多いのだが。

伸びている彼女にコーリスは話しかける。

「…ロイス？」

「……必要以上の力を出してしまいましたあ。うごけませえん…」

「つまり？」

「運んでください」

「デジャブ!!!」

何か前にもあった気がする光景。

今回は肩を貸すだけでは済まず、背負う羽目になった。

「すみませんコーリスさん…。あ、そうだ」

「？」

「服、買ってくれるんですけどよね？庶民的な服が気になります」
「マジでクソだなお前ほんと!!」

言われた事は忘れない。

団長との再戦も。彼が好きなのを買ってくれる事も。

だから怒りも誇りも信念も、何もかもが溜まりやすい。

ロイス・モラクレルはそういう人間だったのだ。

「お会計700ルピになります」

「……710ルピからで」

「またのお越しをお待ちしております」

くそ、くそ。

コケにしゃがんで。誰があの場合を止めてやったと思ってるんだ。確かにキレたロイスは止まらない、そこに関してはアイツに乗っかって剣を貸した俺も悪いだろう。

でもだ、聖騎士長はそれに乗ってはいけないだろう。興が乗ったとかそういう問題ではない!!

しかも庶民的な服が欲しいとか言ってるそこその値使わせやがって……!1000ルピ以上は高値と判断される世の中で、未成年にとって700ルピの散財はかなりの痛手。

それをあの女あ……!

まあいい。

店の雰囲気は物静かで気に入った。自分の物を買うのも良いかもしれない。入った時に見かけたが、滅多に見かけないエルーン用の穴開き帽子もあった事だ：一品しかなかったから早めの購入を検討し

ておこう。

今は大人しく店を出よう。ロイスはこれが欲しいと指してから何処かへ行ってしまった事から、恐らく外で待っている。

ああ、ちゃんといた。

「お、買えました?」

「中々に高かった。殺す。特に理由は無い」

「何だかんだそう言っ買ってきてくれる奴隷根性だいすきです!」

「だまれ」

「で、私も二品三品買わせるのは流石に無いと思ったので、自腹で購入致しました!」

「ほう…」

気が利くじゃないか。

一品で済ませるだけ摂政な心がけだ。して、何を買ったんだらうか?
?

「それがこれです!じゃじゃーん……穴開き帽子!!」

……

………そうか。

最後の望みを、お前は奪ったのか。

「死し晒さらせや小娘がアアアアア!!」

「ちよつ、マジありえねえ!服投げんな!」

「くたびれ果てた俺のお:最後の癒やしがあ…」

「ほい!つと…。つたく、欲しかったんですか、これ?」

華麗に買ってもらった服をキャッチするロイス。

いつの間にか戦利品も被っている。割と本気で哀れに思われているのか、心配するような声色で問い掛けてくる。

くそう…くそう…。

せめて、俺が買えないくらい高い帽子だったら。

諦める事が出来る。

質感が良さそうだったからな。耳が痛まないよう穴の内側にはふわふわの何かが付いている。

庶民にはあのふわふわの名前が何かも分からんな。うん、質素な革素材ばかりだったからな！

さぞかしあのふわふわは高いだろう。

「ロイスロイス」

「はい？なんでしよう」

「その穴にふわふわが付いてる帽子、何ルピだったんだ？」

「ふわふわ？ああ、ここに少しファアがありますね。で、値段ですか」

「ああ」

「300ルピ」

「」

くたばっちまえこんちくしょう。

「落ち着きました？」

「くたばっちまえ」

「コーリスさんも身だしなみとか気にするんですね」

「きもちよさそうだったんだ、このぼうし」

「気持ちいいですよ、耳の付け根とか。マッサージされてる気分です」

「よかったな、ほこるがいい」

「だめだこりゃ」

鎧は重い。兜も落ち着くがずっと被っていると息苦しい。

一応剣も持ち歩かなきゃいけないから背負ってるが、腰が痛くなりそうだ。

何せ休日で偵察任務も無いから私服で歩けるが、もしもの場合聖騎士として動く為に帯剣しておく必要がある。

その殺伐とした印象が少し気に入らないので、軽く動きやすい服が欲しかったり。帽子を被ってみたかったり。

：お洒落もしてみたいのだ。18歳だからな。

何も気にせず過ごさせた少年時代程単純じゃない。

「あ、伝令鳥ですよ」

「む」

伝令鳥。

それは人に飼い慣らされる鳥類の事であり、手紙を送ったりする場合に使われる。

トラモントでも村長義父が活用していた。

その鳥は此方に向かっており、ロイスの肩に着地した。

嘴くちばしには紙切れが挟まっており、それを取ると伝令鳥はこちらを見つめる。

「読め、という事だな」

「えーと、何何？」どろぼうがみせに入ってきた。お父さんとお母さんがつかまつちやったの。だれかたすけて」って………行きますよ!!」

ロイスは血相を変えて焦る。

伝令鳥は俺達を案内するつもりで先導し、それを追いかける形で駆ける。

「距離はそんなに遠くない筈だ。」

「いい判断だ。推測するにその子供は今隠れながら文章を書いていたな。伝令鳥も剣を見て俺達が聖騎士だと察したか、褒めてやる。お前は出来るトリだ」

「クエエエー!!」

「ええ!今のうちに行きましょう」

「勝算は?集団だとして完勝できると思うか?」

「出来ませよ!!」

「どうやる?」

「霧と水、これだけ!」

「適当だな!」

「良いんですよ!私達に勝てる悪党なんて存在しません!!」

「ははは……」

全く持つてこいつは強引だ。

しかし俺もまあ……

「同感だ!!!」

サーチア^見アンドキヤ^敵プチャ^捕チャー^縛開始!

このあとめちやくちや捕まえた。

21. 廃人形とクリアハイド

辺り一面花畑。

——たのしいか

周りに霧が沢山だ。

——たのしいな

森の空気が潤しい。

——みんなはいやがる

一人の雰囲気を楽しむ。

——じゃまはふたり

今日もお客がやってくる。

——あれ？ひとり

友達が見ている。

——ここのうさぎごあんない

何が楽しいか聞いてみよう。

——ひとりでいるとしんじやうよ？

剣は振りすぎると疲れてしまう。

——うさぎにあてたらたいへんだ！

食事を摂ろうと一休み。

——てごろなうさぎがそこにいる

今日もご飯が美味しいこと。

——ひとの■ ■ ■はおいしいです

霧が充満するその花畑にはいつもラクリモサという花が咲いていて、
そこを少し曲がればいつもの切り株があるんだ。

.....？

.....、

何だこれは？

——しってるでしょ？
知らない。

——うそつき

いつもそこで剣を振ってる。辛くないのだった？へっちゃらさ。いや…へっちゃらでもないのかな？疲れているからな。

ふふん。どうだ、詳しいだろ？伊達に毎日■ていないさ。なに？どうして毎日■ているのだった？それはー…：うーん…：えと…。あ、暇じゃない！別に暇だから行ってるわけじゃないからな！え、じゃあ何でって…：そう言われても…。

見ても楽しくは無いな…：オススメはしないよ。ますます謎だな私は…。なあ、コーリス？

誰の記おごはん

あ、コーリスはいないのか。島に行っちゃったからなあ。フィラは？あれ？あ、ああ…：そうだ…：ガロンゾに行ったんだ。月日は経ってるんだもん…：…何だかここ最近現実と夢ってあんまり変わらないって思えてきたよ。

え

「…イカれてるな」

夢らしき物から目覚め、最初に出た言葉は恐怖によるものでは無く、自分の精神状態への不安だった。

自分は頭がおかしい。

それは最近分かった。自身への犠牲、苦痛を我慢するのでは無く諦められる異常性。それは上司大人からも指摘された事だ。まあ、指摘されたからと言つてこの精神の拍動を止める事は出来無いので、俺はずっとこのままだろう。

しかし、数年前に途絶えた友人の——現在。

今生きているであろうあいつの思考を勝手に妄想して自身に囁かせるほど頭が狂っている自覚は無い。

それはあいつへの侮辱だ。

俺や妹を頼っていた事はあつても、依存していた訳ではない。ましてや現実から目を背ける事は絶対にしなかった。それを睡眠間の一時的な状態で否定し捻じ曲げたのだ。

我ながらあの光景を作り出した頭をがち割りたくなる。

トラモントは今——うるさい。

霧だつて自然の一部だ。常識的な循環だから。心配はいらない。また霧が晴れたら、フィラと一緒に帰る。それでいいんだ。だから、今はただ人の為に生きるのだ。

色々な島に行つて経験を積んだ。その上で理解したのは、この世界がまだまだ救いを必要としているという事。

簡単に言えば、平和とは言えないということだ。

それを解決するのは俺じゃないだろうし、もしかしたら聖騎士団すらも及ぶ範囲では無いのかもしれない。だけど、がむしやらに助けよ

うとして努力をする事は醜い事とは言えないのではないのだろうか？

助けた人間にお礼を言われたとき、確かな満足感と暖かみを感じた。

これを真に感じられない程に腐ってしまうのならば、それはもう救い難い存在だろう。誰もが避け、忌避し、放逐した後に忘れ去る——トラモントの様に。

邪な感情。憎しみは、事象そのものに。

俺はこれを忘れない。

俺はトラモントを忘れようとしている人間を…憎んでいる。逆恨みの様に。

憎んでいるからと言って、別に邪険にする訳もなし。かと言って肯定するつもりもなし。とにかく忌々しい感情が残っているだけだ。

今思うと、その薄ら恥ずかしい感情から逃れようと構築した世界があの夢だったのかもしれない。

島でのんびりと日々を過ごし、アイツ等と一緒に何かをする。そんな日を夢見ていた。

依存していたのは俺だったらしい。

そして、変えもできない現状に心が喚く。

俺は順調過ぎる程に——腐ってきている。

腐ってもいいから——せめて機械的に。

人を救うだけの——理想型に。

でも最後に少し——ちよつとだけでもいいから

——楽しい日々を返してほしい。

——リユミエール聖国中央地区。

そこには聖騎士団の本拠地があり、その中のある一室に俺は招かれた。

「アウギユステ：ですか」

「ああ、観光地故な。最近犯罪が増えている。具体的な解決は自治体
が対応しているが、根本的な原因の捜査を行ってもらいたい」

「了解しました。しかし自分一人では少し広く感じます。突然霧を
生させても困るでしょうし、二人での同行の許可をお願いしたいの
ですが…」

「一理ある。もう一人の手配もしておこうか。文書を作成しておく
ら渡しておくように」

「貴方から声を掛けないのですか？」

「無駄な詮索は止めておけ。何の為に私がお前に声をかけたと思っ
ている」

「……申し訳ありません」

「行け」

「はっ」

目の前の人物に対し敬礼をし、その部屋から出る。

隠密部隊でもある遊撃隊は、本隊の援護以外は遊撃隊隊長からの文
書で任務に当たる。

その為か隊長の姿を見た事がある人間はいない。国の裏の顔とし
て動く隊長が、安易に情報を漏らされる可能性を少しでも減らすため
だ。顔や素行、言動など、少しの行動でさえも漏らす事はできない。
しかし、そんな行為でさえも。

やろうとすればの話のだが、俺の霧で探れる。ある意味釘を刺され
たのかもしれない。わざわざ俺にコンタクトを取り、任務の情報を教
えるという事。

つまり、俺を監視していると同義。

俺が変な勘繰りを持たないように。霧の危険性を見極めるために。

隊長である彼は俺を睨むのだ。

隊長の姿は理解したが、心の奥底——国への思いや名前は知らない。しかし隊長は俺の全てを知ろうとしている。

聖騎士になって五年。年にして十八の若僧は、まだ信用するに値しないという事だ。

「二日だ」

「はい、二日です」

「……アウギユステは、全空の中でもかなりの大きさを誇る島。その全域の調査を二日で終わらせ、事件を起こしていた奴等の捕縛を終えたと?」

「仰る通りです」

「……ここに」

「?」

「ここに お前と同行した者からの報告書がある。無論私がお前を監視するよう頼んだわけでも無い。ただどの様な事をしてどの様な人物が黒幕で、どの様な解決法を取ったかを記録してもらっているだけだ」

「ええ……」

「こう書いてあるな……【霧を水に混ぜて使用した】と。さて、どんな魔法だ? お前の霧は独立した存在だった筈だが?」

「時間さえあれば水と共存可能なレベルに霧を調節し、アウギユステの水分を含んだ海霧うみぎりを発生させる事は可能です。島民達も海は海霧すいむ、川は水霧すいむと判断していたので違和感も与えていない筈」

「なるほど。私の認識不足だったな。お前の霧は中々に応用が利くを見た。他の属性ではどうなる?」

「火に混じれば煙霧えんむ、氷属性とは上手くかみ合えば氷霧ひょうむとして使える

と思いますが……実用性に欠けるかと。これらは有害なので」

「なる程。あくまでも自然的な霧の体系が望ましいと」

「はい」

「ご苦労。下がれ」

「はっ」

重苦しい場が空気を支配する。

遊撃隊は道具。任務をこなすならば迅速かつ確実に遂行する事が最善。

実際暗殺任務は滅多に降りてこないが、国を脅かす可能性のある疑わしき者への監視などは行なわなければならないので、隠密行動や感情を隠すやり方を仕込まれる。

今回の任務も何時ものように隠蔽工作を行い、人々に混乱を招く可能性を潰し遂行した。

期間は指定されていなかったが、今回気合を入れて終わらせたのは理由がある。

それは、俺に課せられたもう一つの任務がある故だ。その確実性を調べるために、この任務を終わらせたと言ってもいい。

任務の内容は、遊撃隊隊長への正義審問相手の誇りを利用し、真実を問う。主に何らかの疑いを掛けられたものに対し行なわれるリユミエール聖騎士団独自の言葉戦い。詳しくはコーデリアのフェイトエピソードを。による調査。

依頼者は——国王及び聖騎士団団長。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

遊撃隊隊長の部屋を出て、任務の経過を報告する為に聖騎士長の私

室へ向かった。

…何だか若いうちにエラく働いてる気が。扉を開け、その始終を話す。

「……コーリス」

「はい」

「無理してないか？」

「この任務についての心配ならお構いなく。俺と隊長の間に友好的関係は皆無です。寧ろあちら側が俺を警戒しすぎている節が見えます」
「まあ、お前の能力は人によれば恐るべきものだ。万物に作用する探知能力なんて都合が良すぎるからな」

「聖騎士長は…」

「ん？俺がどうした」

いくら俺が都合良い能力を持っているとしても、俺に上司を疑えと命令した事に負い目を感じているらしい。また、国王も同じお気持ちだと言っていた。

とても優しい人々で作られた国だと心底感じる。

だから、これは俺がやるべくしてやっている事だから。

「裏方の仕事なんてやらなくても良いと思います」

「——何故だ？」

「俺が報告する必要はあっても、貴方や陛下が私に気を使う必要は無いのです。遊撃隊は聖騎士団の正義を確かにする物。俺はその遊撃隊自体の組織性を保つ為にこの任務を受けました。人を欺いている訳でもありません。そこまで精神的苦痛を感じていませんよ」

「…あの時、ロイスとお前が俺と戦っていたとき。その後、休日にも関わらず盗賊を捕縛してきたときは…笑えていたな？」

「……………」

「仲間との数少ない交流はお前にとって楽しみなのか、遊撃隊によって既に感情の操作を仕込まれ、それを使って以前のお前との違和感を

消しているのか……。俺にはどちらが正しいか判断できない。その現状が、若者に無理を強いている今が……。俺は気に入らない」

「俺が取り繕っている……。そう仰るのですね」

「何れにせよ、お前は変わったよ。変わってしまった。変わらざるを得なかった。そして変えたのは俺達大人だ」

お見通し。

隠しているつもりも無かったが、聖騎士長にとっては皮を被っているように見えていたか。

既に俺は人を疑う癖が染み付いてしまっている。人間の些細な行動に疑問を覚えてしまっている。それは、良くない事だと分かっているのだが、それでも人を万遍なく信じる事なんてもう出来ないだろう。

森では隠れ家を作り、徒党を組んで人を襲う盗賊もいる。

海を穢し、環境を破壊し寄生する人間も少なくない。

如何にスルトが猛ろうと、ロイスが笑おうと。その裏に何があるのかと探ってしまう。俺の霧は、人の内面を映してはくれなかった。

「その霧は、外面なら何でも感じ取れる。だからお前は家屋に干渉しないよう最低限の範囲で絞っている。だが、霧は大気。触れてしまえば否応無しに感じ取れてしまう」

人の醜さも。世界の残酷さも。幸せの尊さも。不幸の冷徹さも。全部知ってしまった。

「——人は死にます。捨てられれば腐り落ちます。刺されれば血の泡あぶくを沸かせて動かなくなり。殴り蹴れば苦しんで暴れまわり、肉ホロホロが疲れて死にます。溺れて、燃えて、食われて奪われて叫び笑われ見られ通られ踏まれて斬られて突かれて打たれて追われて撃たれて逃げて射られて媚びて生き延びて棄てられ笑って狂って泣いて襲われ犯され——!!」

「……………」

「そうやって人は、死ぬのです」

任務に向かうたび、誰かが死んでいる気がしていた。

霧を出すたび、誰かが殺されていた。

その場へ向かうたび、亡骸を回収していた。

死人に口なし。気付かれない殺人は只のゴミ掃除。そんな現実、どう変えろと言うのだ。

世界中で少しづつ、ほんの少しづつ進み、されど止まらない悪意をこのちっぽけな感知能力でどう止めるのか。

——俺に、人が死ぬのを感じるだけであるというのか。

現実を吐露し、間もなくして聖騎士長が口を開く。

「俺達聖騎士は、求められても求められなくても視界に入れば助けに向かうことが出来る。逆に、知らない事にはとことん無干渉を強いられる」

「だから俺が……………」

「そう。だから全てを見通せるお前が期待された。そして期待通り、いや期待以上の成果を挙げたお前は聖騎士の鑑と言っても過言では無かった」

「そんなものではありません」

「そんなものだから、だ。正しく能力を使って欲しいと遊撃隊に入れたら、お前は道具として使われていた。遊撃隊にとっては、都合が良すぎてどうしようもない程の逸材だったろうな」

「…」

「お前自身上手く動いていたおかげで、ここ最近の事件解決数は段違いだ」

「……………解決はできても、未然に防ぐ事ができていないのです」

「ファータ・グランデにも犯罪は数多く存在している。このリュミ

エールだって例外ではない。人目につかない場所さえあれば何時だって人が殺される。その瞬間をお前は感じられない訳がないのに」「ええ」

「——全て俺のミスだ。お前の能力を活かそうと資料を読み込み、遊撃隊にも然るべき指導を行えと通達した結果がこのザマだ。周りの状況を整えるばかりで、お前の精神状況を考える事ができなかった」

ああ、何か聞き覚えのある。

『ゴリスや。お前は特別な事をしようとしなくていいんじゃないぞ。周りはお前を誰でもない只のお前として見ている。自分の考えが他人と違うのも良し。周りと違うのが嫌なら合わせても良し。悪いのはお前を哀れと生意気に感じていた……この死にかけの老骨じゃ』
『爺ちゃんが悪いだなんて、思っていない』

義父、かな。

あの時と同じ答えでいいか。

「俺は失敗だと思っと思っていますよ」

聖騎士長は知っているとばかりに口を噛み締め、その上で真摯に俺に公言する。

「お前は絶対に、誰に対してもそう言う。だから、俺は——狂ったお前に……狂わせたお前に言わなければならぬ」

「……は」

「数十年前に就任した遊撃隊隊長は、遊撃隊の体勢を変えてしまった。それは聖騎士の顔を立てるために行っている行為としては、余りにも残酷だ。だから、【清く、正しく、高潔に】という精神を軽視していかか確かめ、彼等に誇りを取り戻してもらいたい。考えたくも無いが、本隊への連絡も断ってしまった遊撃隊隊長は、誰も姿を知らないという形式上まったく正体を知られていない。陛下からも数十年前に就任したという事実しか聞かされていないし、陛下自身もどんな行

動を行っているか把握しきれていない。だから、裏切りをしやすい身分ではある」

「だから、コーリス。自分を殺して、聖騎士団の駒になってくれるか？」

……なぜ、泣きそうな顔で懇願する。

貴方は何故聖騎士団に入って、聖騎士長に登り詰めるに至ったのか。俺は、貴方を筆頭とするこの勇ましい軍団に憧れたというのに。そんな勇ましい人が、何故俺を捨てる事に苦痛を感じている。

勝手に憧れて、勝手に壊れて、勝手に絶望している俺に同情する必要無いはずなのに。

俺の内面は、何時だって純粹で狂っている。

だから、貴方が何を思おうと。

誰が何を言おうと。リュミエール聖騎士団の恩に報いて、その為ならば。

いくらでも言い返してやろう。

「——喜んで」

2.2. 備々の歎き：①

「これは陛下から賜った物だ」

「…綺麗な剣ですね」

聖騎士団長が俺に見せたのは、黄金色と碧色が特徴的で——まさに宝剣と呼ぶに相応しい代物だった。

以前謁見の間に赴いた時、その剣は玉座の装飾として認識していたが、それそのものが宝だったらしい。

聖騎士長、副聖騎士長は過去に多大な成果を上げたことで褒美として陛下にその役職や武具を賜ったと聞いていたが、彼が今持っているのは戦うには向いていない剣だ。

恐らく用途は別にある。

「これは権威の象徴。俺達が騎士ではなく聖騎士たる所以と言ってもいいだろう。リュミエール聖王の意志であり、聖騎士団の在り方を証明する剣だ」

「特別な力が宿っているわけでもなさそうですね」

「そうだ。しかし陛下の意思を体现すると成れば話は別だ。どんな力よりも心に響くさ。無論一定の人間にしか知られていないがな。俺やエクシンダエクシンダ・オクト。リュミエール聖騎士団副団長、そして各部隊の隊長だ」

「なる程。その時が来たら、と」

「お前に預ける。奴が黒だと分かれば捕縛し、この宝剣を以て正義審問を行う。もしも、だ。もしも逃走し他国へ渡る場合は」

「——暗殺」

「国を守る為なら致し方ない、とは言いたくないな。その時は多くの遊撃隊を派遣する事になるだろう。お前が隊を率いてな」

「了解」

「頼む……………はあ」

そうやって彼はため息を吐く。

こう言つてはなんだが、団長は戦闘狂の側面が無いとは言い切れない。彼は剣がとても好きなのだ。

刀身の銀色が好きで、物体を両断した時の断面は鏡の様だとよく言っていた。それは貴方の剣技が色々可笑しいからですと口にしても尚剣への万能感を語る。

鞘に納めるとスツキリするし音もいい。何より裝飾等で特色が出る。彼は戦いが好きなのではなく剣を使う事が好きなのだ。

——だかしかし、生命を傷つける刃は好まないらしい。

それは血で汚れるから、剣が錆びるから、という理由ではない。人を傷つける剣は荒々しく、暴力の権化として映るからだ。

何より人の凶暴性をむぎむぎと見せ付けられている気がして、世界が綺麗なものと思えなくなる事がたまらなく嫌らしい。だから、人の清らかさを見る事ができる戦い——決闘を好む。

彼曰く、『剣と四六時中にらめっこして、強い人間に決闘を申し込み続け、魔物を頑張つて倒したら団長になっていた』とのこと。…才能に自覚が無いのも怖いものだ。

そんな彼が、此度の任務に良い感情を抱いているはずが無い。

「散々放置されてきたんだろう…組織の腐敗つて意外と身近にあるんだな」

「この国は信頼という感情で成り立っています。現在の遊撃隊の体制は他の隊に認知されているものではありませんから、気付かれないのも仕方が無いかと」

「悪性とは言えないしな。何より盲信が起点と推測している」

「…それで、任務の経過ですが」

「——どうだ？」

俺は遊撃隊の調査の任務を受けている為、権限により他の任務は打ち切られている。最終的には遊撃隊隊長への正義審問を目標とするが、遊撃隊そのものへの懸念なので、何かしらの思想に侵されてはいないかと調べる必要がある。

遊撃隊を調べ回っていることは隊長も知っているので、彼は自分が

怪しまれている事に気付いている筈だ。

そしてこれは推測だが…彼が俺を危険視している事。それを考えれば、俺の能力の危険性を主張し提言する事で組織の混乱を招くかもしれない。俺の能力は国の重鎮達に知られており、その上で行使を許可されているが、これを機に考えを改める可能性がある。

組織の混乱は秩序の崩壊を招く。これは止めたい。

「小部隊の隊長から隊員の様子を調べましたが、変わった様子はありません。が、これが少し問題です。常に誰かを疑い欺く体制を整えること。この遊撃隊の思想がそういうものだ、と当たり前の様に受け入れられている事です。彼らには疲弊した表情もありません。聖騎士長の予想通りの展開です」

「…なる程な。暗殺自体は滅多に行わない。しかし人を疑う必要はある。その行為に信念は無く、あるのは義務感か。底から改善する必要があるな」

「はい。本来の役目——戦闘時の陽動、攪乱を元に行動。そして聖騎士団の揺らぎを支える事。そのように認識させる事を目標とします」
「よし。俺が正義審問をしても良いんだが…それは本隊の役目では無いからな。それを乱しても困るだろう？」

「体制の指摘なのにルール破ったら意味ないですからね」

状況の確認を速やかに終え、聖騎士長は宝剣を俺に差し出す。

その柄を掴むと、凄まじい重量感が物理的に襲ってきた。今思えば装飾用に宝石がふんだんに使われているので、言ってしまうえば剣の形をした金塊だ。

重くないはずが無い。思わず両手で抱えないと落としてしまいうだ。

「この剣の金属密度はどうなっているんですか…？」

「大事な物なんだから壊れないように念入りに作るだろ。作る過程で魔法とかも使われているから生半可な硬さじゃない。まあ斬るのには向いていないけどな」

これを片手で持ち相手に突き付け、正義の在り処を問う。物理的な重さに加え精神的な重圧もやってくる。何せ尋問に当たる行為は初めてだ。

そも、あれは相手に騎士道精神がある事を前提とする。突っぱねられてはどうしようもない。

「この後陛下の前で正義審問を行う。招集も既に終えている。時間通りに奴が来ればお前の出番だ」
「分かりました」

聖騎士長はそう言って、陛下の元への移動を促した。

「コーリス・オーロリア。招集に応じ参上致しました」

「うむ。面と向かって話すのは初めてだな。お主の功は耳に届いていないぞ」

「は。よりリユミエールの役に立てるよう精進いたします」

「期待している」

今俺の目の前にいる壮年のヒューマン。

彼がリユミエール聖王その人である。決して多くを語らず、兄である先代聖王が急死してから次の聖王へ繋ぐために玉座に座る事を選んだ人間だ。今回の遊撃隊の事例も、陛下が急遽聖王となった為聖騎士団の体制を把握しきれなかったのだろう。それでも完璧に近い統治能力。尊敬に値する御人だ。

「コーリスよ」

「どう致しました？」

「不甲斐ない事だが、今更引つかかった事がある。ルクスに言う事が正しいのであろうが、聞いてくれるか」

「御意」

寡黙以前に国王としての振る舞いから、陛下は軽々しく会話を広げない。混乱を嫌う道理があつてこそその話だが。

それ故にこの話題は意味のある物なのだろう。

「…兄の死因が病死だという事は知っているな？」

「国中訃報の知らせで混乱の渦中におりました故、よく覚えています」
「兄は王として生きた。暗殺、失墜、裏切り…それら全ての可能性を恐れつつも耐えて生きた。末路は当人の病。救えない話で終わるはずだったのだが、妙に腑に落ちない事がある」

「遊撃隊が孤立したのは兄が死ぬ5年前。士官学校にいたお前には想像できないだろうが、遊撃隊は多大な成果を齎した。正に全盛期。リュミエールの治安も当時の遊撃隊が作り出したと言つても過言では無い」

実際、この成果から信用に足ると判断され、国の為に孤独になる事を許された部隊だ。

小部隊長に飽きるほど聞かされていたから分かる。

魔物の襲撃が全く無いのもその影響だ。トラモント、スルトの住んでいたバルツ公国等はしばしば魔物が入り込んでいたのでその点の違いはよくわかる。

「魔物を排除すれば国に入る余地が無いのは当然の事。だが、事前に危機を察知して魔物を斃すという行為は決して簡単なものではない。遊撃隊は本隊の援護を目的とする部隊。そも、手前勝手に行動している物では無いのだ」

「観測者が一人いれば情報にはこと欠かない、と判断するには無理がありますね。伝達から部隊の編成、対応に当たるまでの時間はそう短いものではありません。見回り任務の途中、偶然侵入しようとしている魔物がいたから排除した、なんて事もありません」

「加え、その数年後に盗まれた星晶獣に関する書物。我が国は星晶獣

に精通している訳ではない。だからこそ学者たちが知恵を絞り、”もしも”の場合に対応出来る可能性を作っている」

その書物が盗まれた時には既に俺は聖騎士になっていた為、その情報も噂の限りとしてだが耳に入っていた。一般的に知られる覇空戦争の歴史書には戦争の背景は乗っけていても、どんな戦いかは明記されていない。

単純に星晶獣が現存しているからだ。それを利用する事は不可能では無い。悪用を防ぐ為、意図的に隠された歴史。

だが、国が保有する物は別だろう。少なくとも、この地で起きた戦禍は記録されていても可笑しくない。星晶獣の能力、対応策も細かく書いている可能性がある。その数冊の内一冊が盗まれた。当然、許可されている者しか見る事ができないので、遊撃隊の隊長が直々に王に許可を求めたのだろう。

今までの戦績を兼ねて頼み込んだのであれば、降りない事も無いと考えられる。

「それが盗まれたとなれば学者達の混乱は必須。覚えている限り盗まれた本の詳細を絞り出させた」

「…それが魔物の動向と関係が？」

「——少なくとも一体、関係のある獣がいた」

「その獣はどのような物だったのですか？」

「名はシヨゴス。”求心”を司る星晶獣であり、古来近辺の国を陥落させた指揮官だ」

「指揮官…ですか」

「シヨゴスの権能…それは心に接近するという物だった」

「それはつまり…」

「そう。自我を持つ生物への対話^{アプローチ}を目的とした獣だったのだ。記録によれば数多くの飛竜、巨獣を率いての物量戦を仕掛けてきたらしい」

「恐るべき力です…確かにその獣を使えば魔物を使役する事も可能で

しよう。しかし」

「解っている。シヨゴスがいたとして、それを利用できる程遊撃隊は強くない。星の獣は簡単な代物ではないのだ」

「詳細は本人が来るのを待ちましょう。私が必ずや情報を引き出してみせます」

「盗んだ輩が遊撃隊隊長とも限らないし、そも彼奴は何も罪を犯していないかもしれない。その点を留意せよ」
「はっ」

∴少し気になった事がある。

覇空戦争は星の民が作りし獣、星晶獣を用いて空へ攻めてきた事による戦いだ。各島々の大地を芽吹かせ続ける程の力を持ち、その権能はまさに天災と言ってもいい。力の差異はあれど、人間にとって脅威でしか無かった存在だ。

そんな無謀な戦いに勝利したのは∴空の民。不条理を覆したのは、知恵と覚悟。そして何より数。

島が攻撃され国が滅びる度に対抗策を絞り出し、戦力が尽きるまで対峙し続けた。人間という種が滅びる可能性もあったと聞く。それ程までに玉砕覚悟の特攻を繰り返し、遂に勝利した。

だがしかし、先程のシヨゴスは何かおかしい。生物への対話を試み、率い、統率して国を滅ぼした。

そう、空の生物を使う事だ。

強力な魔物しか使っていないと仮定しても、この空域には数え切れない数の魔物がいる。対話し、率いる程の知能があればそれらを集め一曲集中させる事で、時間はかかるが国のみならず島を落とし支配する事も出来ただろう。

全ての空の民が結集して対応したところで他の星晶獣に攻められ終わるだけだ。如何にしてシヨゴスを退けたのか。

単純に弱点を見つけたのか、能力の限界があったのか。

もしくは——無力化する方法があるのか。

いや、待て。生物への対話と言ったな？

飛竜、巨獣、属性生活体、妖精等の強力な存在。ならば、人間へのアプローチも可能。

人間を操れば戦争の勝利は確定……だが現に空の民は勝利した。

となればどのような対抗策を取ったのか。そして一部は契約により使役できる星晶獣の存在。意図的に高く作られた知能。

強力無比な星晶獣の利用法……支配ではなく対話。

まさか。

懐柔――

「伝令!!!」

「……!!!」

唐突に開かれた扉の声で思考が途切れる。

訪れたのは遊撃隊長長では無く、城を守る門番だ。かなり焦燥とした様子で声を出す。ただ事では無い。

それを察した陛下が問う。

「何事だ!!」

「このリュミエールに多数の魔物が接近!!!他の島から魔物が集まり徒党を組んでいます―」

「何だと!？」

「空中を移動できる魔物が巨獣達を運びこの国に向かってきています!!」

「まさか……今すぐ全隊を招集!各部隊に医療隊を行き渡らせ戦いを継続させよ!特に守護隊の援護は怠るな!」

「既に聖騎士長が部隊をまとめ出撃しております!その点は問題ありません!」

「よい!ならば民の避難急げ!」

「はっ!!!」

伝令を終えた門番が去ってゆく。
俺も出撃しようとして陛下に伝えようとした時、
またもや扉が開く。

「で、伝令！」

「……何事だ？」

「遊撃隊隊長を招集しに出向いた遊撃隊隊員2名が死亡！心臓と喉への傷からして、遊撃隊隊長が殺害したものと——」

シヨゴスの権能を受けた魔物と近い挙動。重なる遊撃隊隊長。嫌な予感がした俺は怒りをぶつけるように彼に詰め寄った。

「隊長はどうなった!!」

「し、島を出た小艇が一つ発見されました！恐らくは逃亡したものと……魔物はそれに見向きもせずこちらへ進軍してきます！」

「クソツツ!!」

疑っていた事がバレていた！

王からの招集以外に勘付かれる要素は無かったはずだ!!

いつ……？

「コーリス」

「……！」

「霧を出すことを許可する。記憶を奪えば進軍の速度も減るだろう」

「……御意」

そうだ。今は魔物の討伐を最優先に考えろ。

国を守れコーリス。人を助ける事がお前の役目な筈だ。

「感謝致します。陛下」

一礼して、俺は町に出た。

未だに魔物が入ってきてはいないものの、外門でかろうじて食い止

めている兵達は確認できた。何故か空からは攻めてきていないらしい。

違和感を覚えてながらも霧を噴出し、魔物だけを認識するよう形を変えた。

感じたのは恐ろしい数の魔物。

集めたのは数だけか強さとしては大したことが無い。消耗さえ避ければ倒す事は容易だろう。だが、一定の間隔で次々と巨大な魔物が配置されている。明らかに人為的な進軍。

シヨゴスか隊長か。何らかの意思が介入している事は間違いない。

「——関係ない」

魔物であろうと、星晶獣であろうと、人間であろうと。

敵ならば、倒す。

そう決意した時、広い広い霧の中で。

”何か”が言葉を発した気がした。笑っている気もした。

ただ言葉の中身だけははつきり聞こえた。それはこう言った。

「さあ、霸空戦争の再開だ
S.A. (???) (%?)」

2.2. 備々の歎き：②

「ポート・ブリーズには騎空艇の離陸が見られなかったとの報告」

「フレイメル島、アウギユステ列島、ルーマシー群島も同様」

「分かりました、報告感謝致します」

現在、逃亡した元遊撃隊隊長を追う為に様々な島を虱潰しに巡っている。その報告を受けているところだ。

3日前に起きた魔物の侵攻。あれは逃亡する為の目くらましに等しい。出来るだけ俺達に時間を使わせたいのか、広範囲に渡り一定の魔物が配置されていた。加えて、こちらの情勢を見極めて配置のパターンを変えてきた事もあった。

しかし、倒せない強さでは無かったし、何より攻めるには意欲的では無かった。

こちらの戦いに合わせ、様々な対応をする魔物達。俺には戦い方を模索して楽しんでるようにしか感じられなかった。

本来なら俺も積極的に追いたいのだが、島にいきなり霧が充満してしまつたら島の民の混乱を招くし、何より俺がいるとバレてしまう。

だから場所を特定し、追いつめるまで霧は使えない。逃げの一手を潰す為に使うくらいだ。だから、遊撃隊隊長の素顔を知る者として司令官として任命された。

ポート・ブリーズは腕の立つ騎空士が多い。見慣れない騎空艇が離陸したならば気付く者も多いはず。

フレイメル島は工業の発展した国だ。正式な離着陸場以外で着陸する事は難しいし、見逃す事は無いだろう。

アウギユステ列島は観光地で、海の危険が少なくない。だから警備体制は万全だ。

ルーマシー群島の民は無干渉を貫いている。だからこそ俺達に嘘をつく道理は無いし、自然豊かな土地で生活しているからこそ、騎空艇の気配にはすぐに気付くだろう。

「アルビオンも無し。ガロンゾはありえない。メフォラシユには行く必要が無いし、ノース・ヴァストに行くには命を賭ける必要がある。ダイダロイトベルトには行く事が出来ないと推測。目立つ島はこんな感じですよ。どうですか？聖騎士長、副聖騎士長」

「おおよそはそれで良いだろう。だが人が住んでいない島の搜索はどうする？人が住んでいないだけで一人くらいなら住める可能性があるぞ」

「おいおい忘れんなよルクス。島だって領域だ。その辺はメフォラシユの国家が睨みを効かせてんだろ。無人島に価値は無いが、領空で好き勝手やられんのはムカつくってな」

「確かにな。だがコーリス：残る島はアマルティア島だぞ」

「アマルティアは豊かな島ですが何分特徴に乏しい。逃亡先候補としてワザと調査をしています。ここで賭けに出ても良いかと」

「コー坊。他の候補は？」

「奴が使役している可能性があれば、シヨゴスが眠る島でしょう。本に書いていなかったらしいので場所は不明ですが、個人的にはアマルティアの線を推したいです」

「その心は？」

聖騎士長が厳しい顔で問う。

当然だ。国の未来が掛かっているこの状況で、半端な理屈をこねても時間の無駄だからだ。正当な理由が必要だ。

「ポート・ブリーズには風、ティアマト。フレイメル島には火、人工星晶獣コロツサスの戦禍。アウギユステ列島は水、リヴァイアサン。ルーマシー群島は大地、ユグドラシル。アルビオンは契宿、名前は不明。メフォラシユは星の民との戦いで使用されたゴーレム技術。これらの島は全て星の力を抛り所として発展しています」

「逆に言えば今の世界、星晶獣なくして島は成り立たないと？」

「少なくとも、文化は一步遅れるでしょう。今ですら星晶獣の解明は出来ていない。別の世界の物体みたいな物です」

「コーリス。お前は星晶獣と戦った事は無いだろう？俺とエクシンドはがあるが、大星晶獣以外はそこまでの強さじゃない。多種多様な権能さえ見抜ければ、強力なモンスターと考えてもいいだろう。理解出来ない境地に存在するが、力は常識の範疇だ」

「確かにシヨゴスは大星晶獣ではありませんが、本体は不定形の肉塊と聞きました。権能の形式上本体が雲隠れして時間をかければ大星晶獣を超える被害を出せるでしょう」

「だからこそ安全策を取るべきだ。目星をつけて絞るよりも、まだ詳細が不明な島へ各部隊を立ち上げ、当たりが出たらそこに援軍として駆けつける。シヨゴスを使うとしたら広く魔物の布陣を作る可能性もある」

「そうですね…。その方向で行きますか」

結局の所、透明にする魔法でも使わなければ何処かの国の領土を侵してしまう事は明白。

俺はアマルティアだと思っただが…。

「取り敢えず、隠密に秀でた騎士達を率いてアマルティアに行ってみます」

「何かあったら直ぐに駆けつけ…。いや、事が起きる前に対処したい。他の騎士は真横の島に待機を」

「分かりました」

「アマルティア…。やはり何か妙だ」

星晶獣が感じられる程の特徴は無い。

かと言って歴史に沈んだ廃棄物の様な外見でもない。これは明らかに近代的な遺跡。森が茂っている。

「何だよ。これ…」

「…これは破壊痕ですか？」

「最近のやつっほいぜ。しかも…血も何も付いていない」

「微妙に違和感を感じますね…」

近くにいた仲間がひび割れた地面と瓦礫を見付けた。

魔物というのは元来凶暴な物で、獣とは違い明確に害あるものと区別されている。だが、その性質故に生物しか襲わない。争った形跡の中で黒ずんだ血すら見つからないのは逆に不自然。

そして人が争って出来る痕跡とはサイズが違う。巨大生物が歩いた跡だと言われても納得出来る。

「…陣形を」

「…応…」

ここにいる騎士は皆俺より年上だ。

年上の中でもベテラン。この様な危険性を察知する任務においては隊列が何より。

即座に盾兵が盾を構えて周りを囲む。魔法部隊は内側で掩護。剣士は切り込み兼監視。

「森へ向かいます。薄い霧を出しますので、上空からの奇襲に備えてください」

剣を抜いて霧を出す。

本来ならば勘付かれる為、これは得策では無いと思っていた。

蓋を開けてみればどうだ。警戒するなど言うほうが無茶である。ならば不測の事態を感知した上でねじ伏せる。

「魔物が出たら即対応。元遊撃隊長には国家転覆罪の疑いがありま

す。気絶させた上で捕縛か死を」

任務の再確認をした。

当然皆命を奪う覚悟は出来ている。国を守る為なら身を汚す事を避けはしない。

俺達は森へ進んでいった。

「7時の方向飛翔体！3時の方向地中に潜航あり！」

「了解！」

急に魔物の数が増えた。

しかも強力では無いが対処に時間が掛かる物ばかり。戦略性を持って襲ってきていると感じる。

50体を超える魔物を倒したが、未だに一定の間隔で襲いかかってくる。王国に迫ってきた時と同じだ。

そして――

「――」

「どうした!?!」

「皆さん。100m前方に元遊撃隊長がいます。投擲物の警戒と…信号弾を打ち上げて下さい」

「団長を呼ぶんだな?了解」

いた。

見付けた。

諸悪の根源。

――許すまじ。

怒りを滾らせ前進しようとした時：

地面一帯から巨大な竜が現れた。蛇の様な輪郭を持つが、動きは遅い。

目の前に現れた竜の目玉に剣を突き刺し、脳を掻き混ぜ撃破する。

「地の竜!? チツ…逃がすかア!!」

「間を突っ切ります! 盾兵3人ほど着いてきて下さい!」

「コーリス! お前は!」

「居場所が分かるのは俺だけです!」

「分かった! 健闘を!」

俺が倒したのを含めて地竜は残り5体。

問題ない相手だ。

…しかし何を考えている。

今の布陣で理解した。奴はシヨゴスの権能で魔物達に俺達を攻めるよう促し、また戦略までも教えている。

だが、地竜は巨大であれど強大では無い。

地面を潜るために硬い甲殻を持っているが、その重さ故に動きは遅く、更には弱点が明確。

そんな魔物をけしかけた所で大して時間稼ぎにならない。加えてあの距離まで接近しておきながら今更逃げる。その事から察するに

…誘われている?

俺に不意打ちが悪手だというのは理解している筈。

「…彼は止まりました。そして周囲に3体魔物が急接近してきます」

「種類はなんだ?」

「鳥類です。恐らくデカイだけなので剣でも捻込めば倒せるかと」

「…ムカつくな。何か」

「わかります」

煽っているのかと疑うレベルで攻めてこない。
だが、それが間違いだと言うことに気づいた。

「…なっ!？」

「コーリス!？」

足に何か絡みついている。

これは…いや、これがシヨゴスか…!

紫色のブヨブヨした不定形の肉塊。その肉に埋め込まれた数多の
まさか鳥の肉体に同化して触手を伸ばしてきたとは……!

クソっ!油断した!

肉塊の姿をしているとは聞いていたが…スライム型の生物とは…

「離せッ!」

剣を突き刺し離そうとするが遅かった。

万力のごとく締め付けた触手を振り回され、丁度奴がいた場所まで
吹き飛ばされた。

「すいませんッ!」

「気にすんな!こっちは任せろ!!」

直ぐに体制を立て直して視点を切り替えると、奴が剣を構えて俺を
斬ろうとしていた。

「シイツ——」

鏑迫り合いが、その場に金属を音を響かせたのだった。

○○○○○○○○○○

「ハアッ！」

「……」

鏑迫り合いが終わった。

元遊撃隊長の剣は折れ、コーリスは健在。

立ち姿には静寂が宿っていた。

「その剛力、使いこなしていたか」

「俺は拳術が不得手です。だからこそ剣を持つ手で斬撃に伝播させる」

「……なる程」

「……話、あるんでしよう」

「そうだな」

「彼等を魔物で殺すつもりも…無いのでしょうか？」

「ああ」

「なら何故…国を出る時に二人殺したのです」

「騎士団に俺を敵と認識させる為だ」

「…」

コーリスは思った。

自殺願望ならばそれでも良かったと。だが、相手は確固たる意思を持って現状を作った。覚悟を決めた人間というのは厄介なもので、何かしらの結果を齎すのである。

「聖騎士は腐ってしまった。最早腐肉を貪り汚れ役を行うだけの組織に過ぎない。そこに意思や胸に掲げた使命は存在せず、今や行政機関の傀儡と変わらん」

「だからこの一件で皆の団結力を高め、騎士としての本懐を遂げさせよう」と

「そうだ」

「結論は得ました——やりましょう」

「……ああ」

お互いに剣を構えた。

コーリスは両手で相手の攻めを待ち構えている。もう一方は右手で小剣を逆手に持ち、左手で腰に下げた何かを探っている。

その瞬間、ナイフがコーリスの眉間に飛来する。

それに驚く事もなく彼は手でそれを掴んで投げ返した。だが既に敵は彼の懐に入り込んでいる。

狙われたのは首。

彼は防御魔法で壁を貼り、遂にはその小剣は届かなかった。

斬り合いは続く。

「これは相手の裏を搔く暗殺術の一種だが、今の遊撃隊の技術でもある」

「……?」

「知っているか? 遊撃隊は本来尖兵の役割を果たす物。本隊がどれだけ順調に任務を果たして人を助けられるか、そのサポートを熟す者」

「それは今も同じでしょう」

「否」

元遊撃隊長の踵や手首に仕込まれた暗器がコーリスの急所を的確に狙っていくが、全て剣術により無効化されていた。

「今や国の邪魔者を排除する部隊でしかない。無論俺以外に暗殺を経験した者は存在しないがな!」

「それは引き受けたと言う事ですか!」

「それが前団長から渡された使命^呪だった! 俺は自身の死を持って共通の敵と成し、聖騎士本来の在り方を思い出させる!!」

「ならばもう十分だろう!」

「いいやまだだ!!」

コーリスの斬り払いを躲した彼は魔法を発動する。
風の魔法。斬撃に特化させた風圧は容易く人体を切り裂く。
だが盾を裂ける風は存在しない。

コーリスの盾はスルトやルクス以外には切れけない代物なのだ。

「国には魔物の9割を向かわせる！その襲撃を経験した後、本当の意味で奴等は自身の役割を回願する事になるだろう!!」

「だから俺を狙ったのですか！」

「そうだ。お前が計画の要！お前の存在がこの計画に悪影響を及ぼす！だがもうこれで終わりだ…!!」

「ッ!?!」

「シヨゴスは求心の獣！魔物との対話で各島の魔物を根こそぎ懐柔した！最早既にリュミエールは囲まれているぞ！」

「……………」

「今こそ実行の時！やれ！シヨゴ——……………」

「——終わりです。元遊撃隊長」

「……コーリス？ここは何処だ」

「貴方はもう何も分からないし」

「何を言っている…?」

「そして——」

「な」

「俺を憎む事しか出来ない」

「が、は——!」

「今は、ただ俺を憎んで下さい」

「きさ、ま……コ——り……!!」

「もう、お休み下さい」

コーリスの霧は4種類ある。
感知の霧。茫然自失を促す霧。記憶を一瞬飛ばす霧。

そして……………

記憶を奪う霧である。

元遊撃隊長の首から鮮血が舞う。

コーリスの剣の切っ先にはドス黒い血がこびり付いて、生臭いナニカを充満させていた。

コーリスは虚ろな目で死骸に語りかける。

「人を憎みながら死ぬ事は、ある種上等だと愚考します」

返答は無い。

「勿論安らかな死や、死に怯えることもなく一瞬で死ぬ事も楽でしょう。しかし…」

静寂が痛い。

「無念も苦悩も無く、只憎悪という感情に身を任せられるのは…………ある種楽と言えるのでは無いでしょうか」

血の匂いが漂う。

「貴方は、本気で国を思っていた」

「遊撃隊が腐り始めて、団長を任されても尚、自身の身体のみ汚し続け

て…壊れた」

「国王の命令でも無く、組織の横行でも無く、ただ役割に徹した結果腐った遊撃隊を…貴方は正そうとした」

「国を危険に陥れて、魔物を退けた後には人々は真の平和を追求すると」

「…………でも、終わりです」

「アマルティアに眠るシヨゴスは求心を司る獣。契約者のアプローチが無ければ動かないと文献に書いていたそうです」

「貴方は死んだ。後は、私が身を汚します」

「…………お休み下さい」

記憶を奪う霧とは、読んで字の如くである。

相手の記憶の一部分を切り取って取り込む。奪った記憶は自身で閲覧でき、その情報を組まなく理解できる。

但し他人の記憶を自身が喰らうということは、相応の負荷が存在する。人格面での影響を考慮すれば乱用は望めないし、コーリスの道徳観念上でも拒まれる。

「シヨゴスはこれで眠りに付くか…。国の魔物も自身の島へ戻るだろう」

コーリスは遺体を回収し、踵を返して盾兵の元へ歩いた。

「…終わった。帰ろう」

その時だった。

「…………？」

目の前にシヨゴスが突如現れた。

「シヨゴス…?」

一応剣を構えるが、シヨゴスは身動きもしない。
ゆっくりと触手を広げて、目玉はコーリスをじっと見ている。

「何が目的だ…?」

眠る体制かと思われた矢先――

「矢張り控は愚かだ
±※÷☒※%00…」

「!?」

コーリスの脳裏に言霊が過ぎった。

「これは…!」

「星を未だに理解してない
☆×☒※π!!?%00」

「お前…まさか!!」

コーリスの誤算。

それは、シヨゴスは確固たる意思を持っている事である。

「が――!」

大地が鳴動し、空が裂ける程の衝撃。

コーリスの意識はそこで途切れた。

最後に彼が聞いたのは――

大量の翼音だった。

――1章 完。

2章 極光が潰えた日

23. Re：覇空戦争

「な、に…が？」

炭の匂い。

炎が木々を乱雑に燃やしており、空には未だに魔物の咆哮がこだましていた。

「……あれは、シヨゴスの声か」

コーリスは身体を起こし、そして自身の霧が晴れていた事に気がついた。

傷は幸い負っていない為、彼は直ぐに仲間の元へ戻ろうとする。だが、またある違和感に気が付いた。

気絶している中で、仲間が誰も自分の元に来ていないのだ。任務の達成関係上げしかけられていた魔物を排除して駆け付ける筈なのに、誰一人周囲に存在しない。

疑問に思いながらも、コーリスは騎空艇まで戻ろうとした。

…そこで、ある物を見つけてしまった。

「……………は」

血塗れの鎧、腕、足、撒き散らされたのは腸。

「う」

えづきが収まらず、嘔吐を何とか堪えた。
死亡者1名――

「……」

首だけが消えた死体。

――2名。

「さん…よん……」

――5名。

「みんな…?」

そこでコーリスは上空を見た。

空は蒼くなど無かった。

巨大な飛竜が渦を巻いて空を支配していた。

一瞬だけ、シヨゴスの目が此方を向いた気がした。

「コーリス!」

「っ!」

生存者。

地竜の相手をしていた盾兵である。兜は既に破棄されており、汗を撒き散らしながら駆け寄ってきた。

「バリクさん…!」

「霧は出すな…バレル…!!」

「…何が、起きたんです」

「…大地が揺れた」

それはコーリス承知している。
その揺れでコーリスは頭を打ち付け、意識を飛ばしていたのだから。

「バカでかい竜が何十匹も一気に飛んできて……着地で島が揺れた」
「それで……」

「盾兵は皆体制を立て直したが……本来隊全体で相手する竜がうじゃうじゃいるんだ……皆食われた」

「生存者は……」
「俺達だけだ」

言葉が出なかった。

30人も隊が一瞬にして粉々になったという事。そして離陸用の騎空艇も破壊されていると聞いた。

「この島にはまだ竜が……？」

「……いいや。もういない。恐らくリュミエールを中心に他の島への準備を勧めている所だろう。協力されては困るから、一つずつ国を破壊するつもりだ」

「……どうすれば」

「団長が来るまで待つ。それだけしか出来ることはない」

二人は再び上を向いた。

竜巻の様な竜の大群の真ん中には、一匹の竜が此方を凝視していた。

偵察の役割を果たすのか定かでは無いが、此方を見ているという事は――

「まずい……逃げましょう！」

二人は駆け出した。
なるべく見晴らしが悪い場所へ。

だがしかし、既に竜はすぐ隣の島から飛んできていた。

「バルクき——」

彼が視認した物は爪。

コーリスは身体的全能力を行使し全力で上体を反らす。

「ぎ——!?!」

ブチヨン。

トマトを潰すかのような音が自身の頭から聞こえてきた。
だが彼の意識は途切れていない。

ならば何が起きたか。

「ぐ、ああ……………!」

左耳に莫大な熱。

ブクブクと反響する音。半濁する意識。

痛み。

僅かに当たった竜の小指により、コーリスの左耳の半分は抉られていた。

「コーリス!!」

「逃げろ——!!」

彼が盾兵に逃げろと言った刹那。

盾兵の身体が引き裂かれた。

「ああ……！」

絶望とは、とても言えない。

これは最早地獄。

「ああああああ!!!」

コーリスは殺された先達の死を哀しむ暇もなく、叫びながら反射的に剣を振るった。

しかし竜の鱗には刃が通らない。何故なら竜の倒し方というのは、鱗の合間か目玉の奥に剣を突き刺し肉体を破壊するという物。生物としてのアドバンテージが違った。

「がはっ！」

無造作に振るわれた尻尾がコーリスの全身を打つ。

ギリギリ盾を展開できたとはいえ、その衝撃により彼は全身を木に打ち付けられた。

「くそ……が」

竜には鬪るという趣味はない。

ただ視界に収めた物を敵とみなし、食い殺すか潰す。

コーリスに最早逃げ場は無かった。

——だが、真の聖騎士というのは。

絶望を光へと導く英雄である。

「フランベルジュ・メルト!!」

突如竜の身に獄炎が飛び交う。

その熱量、鱗を溶かし全身を気化させていた。

激情の炎。

感情によって熱量が変わる魔力。

最強の火力を持つハーヴェイン。

スルト・ヴァーグナー。

「おま、え……」

「久しぶりだな。コーリス」

何年も経っておきながら、その小ささは何一つ変わっていないなかった。

「……掴まれ。飛ぶ」

「……ああ、分かった」

コーリスはスルトが彼だけを助けようとした事から、既に死亡者の確認は取れていると推測した。

スルトはコーリスの左耳を見て、拳を握りしめた。

直ぐに踵から炎を放出し、アマルティアから飛び去る。

「お前……一人で飛んできたのか……?」

「そんな訳無いだろう。島には付けなかつたが、騎空艇を多数浮かせてある。そこから飛んできたただけだ」

「…リュミエールは？」

「島には着陸していないが、上空にずっと留まっている。俺達は空中戦を仕掛けるぞ。奴等が島に上陸したらどうしようもない」

騎空艇に到着し、彼等は一先ずの足を得た。

「コーリスさん！大丈夫ですか!!!」

「ロイス…?」

「心配し——」

駆け付けたロイスが包帯を巻かれていたコーリスの耳を見て絶句した。

血を見たからでは無い。生存者の数で絶望はしたがそれでは無い。ただ、本来あるべき耳の先が存在しなかったのだ。

「治ら、ないの…?」

「音は聞こえる。集音が鈍るから音が霧散するとは聞いた」

「他は…!？」

「お、おい…!」

彼女は直ぐ様彼に駆け寄り、見るからに付いていると分かる手足を触り始めた。

指の先まで確認し、最後には手を握りしめて祈るように抱えた。

「良かったあ……………」

「…ロイス。戦況は」

「…不味い状況です。空に留まっている竜たちはファータグランデ全

体から集めた魔物と推測されています。未だに数が集まっているという事は…恐らくシヨゴスが魔物との会話を続けているということでしょう」

「今回の任務は聞かされたか」

「先程に緊急で。極秘と聞いていましたがそれどころでは無いようです。契約だけでしか動かない星晶獣の暴走。それが今回の結果です…」

「…いや、シヨゴスは暴走していない」

「…それは？」

「あれは、自分の意志で戦争を仕掛けている。恐らく過去に人間を懐柔して偽りの情報を書かせ、さも自身には自我が無いと未来の人間達に思わせたんだ。アイツは明らかに空の民を見下していた」

「見下す…？」

「『空は学んでいない』と言われたんだ」

「上等。潰しますか」

「待て待て待て話を聞け」

「怒りで頭がどうにかかなりそうなのを抑えているんですが」

鞘に手をかけるロイスを宥めつつ、状況を把握する。

今、シヨゴスは手数を更に増やしていて、その狙いはリユミエールだけでなく空域そのものと言える。だが、最初にリユミエールを狙う事は確定。

その事がますます彼女の怒りを加速させていた。

世話になった先輩達を殺され、友の耳を抉られ、更には国を陥れようとしている。

赦されざる傲慢。

「二人とも。来てくれ」

そこで騎空艇を寄越した本人、ルクス団長が現れる。

「团长…」

「コーリス…耳は？」

「痛みは勿論ありますが…問題はないかと」

「ツ…問題ない訳ないでしょう！」

「ロイス!!」

「何ですか！」

「今は言い争っている時間がない！コーリスの力が必要になる……！」

「……………分かりました」

「だが…遊撃隊長を任せっきりにしてしまった俺の下手際だ…すまない」

コーリスは素直に違いますとは言えなかった。

「…それで、次の作戦は」

「ああ。今説明する。来てくれ」

騎空艇の真ん中には乗員が全員集まっていた。

「先ず此方の兵力を説明する。騎空艇6隻。戦いに参加できる兵士は221人。国に接近した竜の陣は俺とエクシンダ、スルトで倒した。他の国にも救援を要請している」

兵力を聞いて強面の騎士が呟いた。

「騎士はもう少しいた筈ですが…」

「アマルティアの死体を見て心が折れた者もいるという事だ。避難誘導の任に当たっている。間違っても逃げたなどと下らない形容はするなよ」

あの後アマルティアの生存者を改めて探したが、集まったのは遺族の元へ還す死体だけだった。獣に殺された人間がどのような姿で死ぬのか、騎士たちは思い知ったのである。

「先ず、飛竜への対処だが……スルトとエクシンダ、俺しか直ぐに倒せない事が分かった。中でも効果的なのはスルトが溶かす事。俺とエクシンダでは少しずつしか削れない。よって、引き付けた後に一気に撃滅し、中心にいるシヨゴスを狙い撃つのが理想的だ」

スルトの特性は感情の炎。

魔力と魔法には全く関与しない異能。無限の広がりを見せる。

怒り。その極致に至れば生命を融解させることなど容易い。

「他の皆は引き付けと援護を頼む。騎空艇を旋回させつつ魔法や大砲での迎撃は効果的だ。砲撃に関しては頭に命中すれば屠れる。そしてコーリス」

「はい」

「壁を作り続けてくれ。白兵……彼に魔力を貸してサポートをこなせ。そして3段階目の霧の開放。竜の動きを一時的に止める。各艇へ伝達！急げ!!」

「はっ!!」

既に、猶予は無かった。

耳に包帯を巻いたコーリスは剣を握りしめて集中していた。

「……恐らく、私達が落とされればファータグランデは危ういでしよう。あの数の空中機動力では簡単に国が落とされます。本当に……戦争です」

「スルトがいなければ詰みだった訳だ。そしてアイツが死ねば詰み。絞り出すしかあるまい」

「耳は聞こえますか？」

「少し左に違和感を感じるが…俺には霧がある」

「なら、私は左に立ちます。いざという時にはアレを…」

「…しかし、アレは俺の魔力ありきだろう」

「本当にいざって時には借ります。二人だけ落とされた場合とか…」

「最後っ屁ということか」

「そういう事です。その時になったら何体か竜を殺して潔く一緒に死にましよう…：はあ、成人はしたかったですね」

「…：死ぬ気か」

「いいえ。全く。…でも、貴方が死ねば私達は死にます。私達が死んでも貴方は死にます」

かつてのクラスメイト達は違う船にいた。

コーリスの様に戦局への影響が大きい者は実力者が多い場所に固められる。

恐怖で戦線を離脱した者の中にも一部、彼らがいた。

ロイスとて、死にたくは無い。

国を守る為に命を懸ける覚悟は持っていたが、今日それが求められるとは思ってもいかなかった。

「…：あの魔物達は、國を狙っているんですから、私達が間に割り込んでいくんですよね」

「そうだ」

「怖い、ですね」

「やらなくちゃいけない」

彼女は、漠然と思った。

死体すら残らない死に様。でも死んだ後の意識なんて分からないからそんな事は関係なくて、ただ、自身の存在が踏みにじられる事を

恐れた。

「5分後の合図が来たら霧を出す。それまで、横で待っている」

「…なら、少し話しましょうか」

「そんな暇は——いや…話してくれ。死ぬ前には思い出が欲しくなるものだ」

コーリスやスルト達が死ぬば状況は悪化する。

そして、スルト達が生きる状況を作るのがコーリスだ。段々と彼に狙いを絞り、最終的には集中攻撃を浴びせられるだろう。

つまり、コーリスの船は犠牲になる可能性の方が高い。

寧ろ、コーリス達が死ぬまでに竜達を一掃するのが理想と言える程に、生存率は低い。

団長は有志を募った。

強い者のみ、だがしかし国の犠牲になる覚悟、惨めな死を迎える覚悟のある者に頼んだ。

拒否権はあった。そして、即答した者はロイス以外に存在しなかった。断った者はいなかったが、それでも死の恐怖に脅かされた意思は存在した。

先程まで生きると宣言していた二人は、敢えて言わずとしていた死を語った。生存宣言に、価値は無いと分かったのだ。

——二人は、死ぬまでに抛り所が欲しかった。

「私は、勿論おばあちゃんまで生きたいですし…何より国の若者達を育てる強い騎士にもなりたかった。貧乏じゃない程の家を建てれるくらい稼いで、アウギユステの端で海を見つめながら暮らす。そういうのも良いかなあと思いました」

「家は継がないのか」

「弟に任せます。フィラちゃんとも仲いいですし」

「やらんぞ」

「冗談ですって。でも、貴族は一度言った事は何を持ってしても覆し

てはいけないのです。今回の作戦前、遺書を書かされましたよね？アレにも書きました。こんな事になっちゃったから国が残らないと渡せませんが」

「…俺には後の事は書けなかった。ただ、感謝の意を察に伝えた。トラモントには送れないからな」

「…やっぱり。帰りたいですか？」

「会いたいんだ。アイツに」

「フェリちゃんに？」

「……………ああ」

「男の子ですね」

「…」

「楽しかったですよ——相棒」

「最期までよろしく——相棒」

戦いが始まる。

「…はい。回します」

操縦者が指示を受け、皆に捕まっているように声をかける。

砲兵は砲身を固定し、震えている手を抑えながら立っている。

魔術部隊は目の間にいる盾兵の後ろにいなながらも、何時も感じる心強さが微塵も感じられなかった。竜に丸呑みにされ、防御の意味を感じさせないからだ。

それでも、爪や属性の息は肉壁として効果的にもなる。盾兵の覚悟は、この場にいる誰よりも優れていた。

この絶望の中で、二人。

コーリスとロイスは優しく微笑んでいた。それを見た周囲も、直ぐに笑った。

——我等、リュミエール聖騎士団。

——空に蔓延る悪を誅し。

——光となりて希望を成す者である。

「目標地点まで——3」

竜達が此方を向いた。

「——2」

翼を動かし。

「——いちイイ!!!」

その牙を持つて船を食いちぎらんと吠えた。

「霧を出せええええええええ!!!」

「了解!!」

その空に大きな霧が充満し、翼の竜巻を包み込んだ。

シヨゴスが対話出来るのは知能がある魔物のみである。本能だけ

で動けばこの様な霧も跳ね除けるだろう。

だが、記憶を飛ばした違和感に対して竜の知能は反応してしまっ
た。

「砲撃準備!!」

この次の作戦は、動きを止めた竜達をルクス団長とスルトが霧ごと
消し飛ばすという行動に移る。

何千もの飛竜を一度に倒す事は出来ないが、船に肉迫する個体を退
ける事は可能。

スルトの剣に炎の渦が、ルクスの剣にヒカリが集まる。

「ラグナロク……!!」

「ノーブル……!!」

炎は円上に。光は横風に。

「ヴァーミリオン!!!」

「エクスキューション!!!」

その炎は竜の肉体を気体へ回帰させ、その光は竜の肉体を粒子状に
崩壊させた。

渾身の怒りと魔力を込めたりユミエールの最大火力。

霧が一瞬にして晴れ、動きを止めていた竜達が反応を始めた。手前
にいた生物は既に撃退され、横並びの騎空艇への距離は開いていた。

次なる飛竜が襲い来る。

だが、それが作戦。

「てええええええ!!」

砲撃命令。

歴戦の砲兵達は牙が襲いかかろうとも照準を顔色一つ変えずに熟す。

当然大技のタイムラグを狙った竜達は被弾する。

霧に包まれていたのは此方も同様で、直ぐに照準が合わせられない事を知っていた。

竜達は確固たる知識を持って挑んだのである。

だが、元遊撃隊長はシヨゴスを意思のない者として扱ったが故に：
コーリスの情報を伝えていなかった。

目の前で記憶を奪った光景を見たが、シヨゴスの優れた知能は彼がソレを日に二度使えない事を見抜いた。

失念していたのは——コーリスの霧は段階毎に能力が別れていることだ。彼は霧を認識阻害用の自然現象としか認識せず、遊撃隊長の位置がバレたのは探索用の魔法を使われたと勘違いしたのだ。

分かりやすく言うと。

コーリスの霧はそもそも知覚を基本としている事に——シヨゴスは気づけなかった。

「照準オーケーです！撃ってください!!」

「ありがとうよコーリス!!」

彼の霧で竜の位置が把握できた。後は接近に合わせて弾を撃つだけ。

この攻勢削れたのは総数の3割ほど。此方の土俵に持ち込めた段階で後7割。数は以前として絶望的である。

それでも、シヨゴスを苛つかせるに十分だった。

「小C!
S」

横並びの竜と船が並んでいるのなら、機動力に勝る魔物達が迂回して攻めれば良い話。

…だが、右にはハーヴェインがあり得ない熱量を纏って浮かんでいる。近寄るのも一苦勞な状況。光の剣を撃った男は攻撃範囲が広い。シヨゴスは考えた——潰すなら霧の少年と。

「戦争は終わらせぬ……！」

何処かで触手が蠢いた。

その瞬間、後方の竜が其々の身に宿る属性を解放せんと口を開けた。

戦争は始まったばかりだ。

24. だに

シヨゴスという星晶獣の話をしよう。

約五百年前の歴史であるが、確かに存在した戦争。その名を”覇空戦争”。

数千年前から星の民は空の世界を事実支配していたが、空の世界の主導権を正式に争った戦争はこれが唯一と言える。

その中で星の民は多くの星晶獣を創り、シヨゴスは初期型の一柱だったのである。

元来星の民は感情に疎い性質を持っていた。その理由は決してその様な生態という訳で無く、発達した技術力と戦闘力が感情を育てる機会を奪っていたという理由がある。

勿論、感情を宿らせた者もいた。

絶対として君臨する為に力を求める者。自身の運命を呪うが故に知によってそれを脱却しようとした者。失った自身の恋人の姿を模って星晶獣を創り出した者。

だが、シヨゴスは感情を理解できない研究者が空を学ばせる為に創り出した獣である。

低級の獣の様に最低限に抑えられている筈の知能も解放されていた。シヨゴスが生まれた時の唯一の不満はその醜い肉体だけだろう。そのくらい初期型にしては優遇されていた兵器だった。

「合理性に欠けるな」

「何故シヨゴスを創ったか。それがか？」

「ああ」

「直に分かる。それに本体の機能は最低限の強度に抑えた」

シヨゴスの存在理由は誰にも理解出来なかった。

獣を持つ星の民が圧倒的有利。不平等な条約を結ぶにしても月とは違い言語は同じな為、意思疎通に特別な物は必要無い。

——起動開始から8時間後。

シヨゴスは初めて空の知的生物との邂逅を果たした。空の民。敵である。

「ヒイ!？」

「恐怖。必要。無。シヨゴス。特性。求心」

「ひゃあああああ!？」

言語の知識はあるが、会話という使用法を学んでいないシヨゴス。多眼の肉塊が目の前に現れたとなれば取り乱すどころか発狂もおかしくは無いだらう。

「対象。意識。消失。対象。復活。待機」

結局、その日は気絶した男がまた起きて、即座に逃げ出すのをじつと見ていた。

シヨゴスは知能の設定は極めて高い訳でないが、学習機能の上限はどんな生物よりも高く作られている。

彼はアプローチの仕方を変える為に、空の民の営みを数年に渡って観察し続けた。創造主は空の民と同じ言語を用いるので、動物や魔物と会話をするよりはまだ簡単だったのだ。

——起動開始から21年後。

星の研究者達も星晶獣に対して何かしらの想いや理想を込めて作る事が多くなつた。自身の作り出した星晶獣達が感情を発露させ、その逆流を受けるが如く自分達も感情を育てていったのである。

未だシヨゴスは戦いという物に直接触れていないが、全ての生物との会話を可能にしていた。彼の能力は意思の疎通。自身の言葉が伝わる様に、相手の脳に対して意思を変換する能力。会話事態を完成さ

せれば後はどうにでもなった。

そして彼は、戦士達との関わりが多かった。

それが同郷であれ、空の民であれ。

「アンタも難儀な事ねえ…」

「空の民の区別は明白だ。人間に害する意思を持つ生物が魔物。猛獣が反射的に襲うという行動では魔物と見做されない。従って私は魔物とみなされていない。戦士達に偏見は無いのだ。メドゥーサ、君は恐れられているのか？」

「当たり前でしょ。メドゥシアナと何人石にしてきたと思ってるの」

「初期段階の話だろう？今の君は」

「人間とは、何もしていないわ。これからもね」

「……理解に苦しむ。君は何を持ってその容姿に造られたのか、考えた事は無いのか」

「お姉ちゃんとは違ってなんでアタシだけ小柄って話？石にするわよ」

「私が侮辱を嫌う事は君の周知の通りだ。私が言いたい事は、君の姿が人間に沿って作られているという事だ」

「知らないわよ。そんな事。アンタは何でそんな見た目のよ」

「さて。案外、私が魔物を率いて空の民を撲滅する事を望んでいたのではないか？この通り、何もしない肉塊と成り果てたが」

感情を持った獣達は、空の民の心に寄り添う事が多かった。

或いは自身の役割に矛盾を感じ、理性を初期化された者もいる。

シヨゴスと話していたメドゥーサという星晶獣は、戦争の虚無を知り得た者でもあった。

「あー！シヨゴス君いたいたー！」

「サテユロス」

「ぎゅー!!」

「何よこの光景」

サテユロス。

快活な少女に見える星晶獣であり、スキンシップとしてハグを持ちかける事が多い。シヨゴスも即座に人の形に肉を變形させ、それを受け入れた。

旗から見れば眩しい笑顔の少女がブヨブヨとした肉塊に抱きついているのだから、受け入れがたい光景となる。

「君は作られた当時から明るい性格だったな。創造主には似るものか？」

「私は私だもん！シヨゴス君もそうでしょ？」

「そうだな。私は確かな学びを得た」

「アンタねえ：学んだ結果がその回りくどい口調なの？」

「感情という物は確かな影響力を持つ。空の民の学者の語り口は私にとって大変心地が良かった。細分化されているのにも関わらず脳内に滑り込んでくる明瞭さ。これ等も先に育ってくれた感情の成せる結果だ」

「うーんと…つまり、気に入ったって事？」

「そうだ」

「何が明瞭よ。最初っからそう言いなさい」

「君は言葉を端的に求め過ぎだ。もう少し頭を回転させろ」

「こっ…！ん…！！」

「メドウちゃん抑えて!!」

シヨゴスのやっていたことと言えば、理由の無い戦いを理性によって抑えていた事。

対話。それは理性が許可した最大の生存方法である。それを利用して、シヨゴスは戦いを事前に抑える事が出来た。

とはいえ彼の見た目がそれを困難にさせていた事実もある。

会話が出来る化け物というだけで、逆に警戒されるのは当然と言える。だが、彼は決して取り合わなかった。起きてしまった戦争では巻き込まれそうになる生物達を引き連れて秘境に潜り、起きる前には必

ずアプローチをかける。

彼が善性か悪性かは議論の余地があるが、少なくとも当時の空の民の中では無害という認識だった。

年月が過ぎれば彼の生態に興味を持った学者が訪れ、両者共に充実した時間を過ごしていたし、戦争に疲れた戦士に自身の理論を語る事で視野を広げさせていた。

加えて彼の知能は既に他の星晶獣を上回り、結果的に彼の知見にはメドゥーサやサテュロス等といった戦争を嫌う者が影響を大きく受けていた。

—— 起動開始から43年後。

「結局私はどうするべきだったのだろうか」

「知れた、事……空の民は戦うべき相手……ならば、その頭脳を我々の勝利に結び付け——」

「黙れ。聞き飽きた」

「な……！」

「愚策だったな。あの様な陳腐な物を最終兵器にするとは。そう思わないか。フレイ」

「く……」

覇空戦争末期。

多くの星晶獣は自身の役割に抗い、空の民への理解を深めていった。つまり、裏切りである。

人間と共存する者もいれば、人間社会から離れる者もいた。両者も、戦争から離れる事は一致していた。

そこで完全なる勝利を目指し導入された星晶獣。

名をアジ・ダハーカ。軍配を司る多頭の龍である。その能力は、星晶獣の役割を再認識させ、意思を戦意に転換するもの。簡単に言えば、洗脳の様なものであった。

つい先程まで空の民と会話していた星晶獣が突如として人間を焼

き払い始めた。

メドウーサが石化させ、彼等の身体を砕いた。

意志の強さが伴っていれば、その権能を跳ね除けることは出来たが、それでもアジ・ダハーカの影響は大きかったのだ。

シヨゴスはその光景を見て初めて戦争に顔を突っ込んだ。反射的な行動ではあったが、アジ・ダハーカとの会話を試みたのだ。結果は失敗。

アジ・ダハーカは役割に忠実な猛獣の様なものであった。

自らの力を振るい、外敵を確実に駆除する。高度な目的意識を植え付ける科学者の技術と、空の世界の獣を忠実に混ぜ合わせた結果がこの星晶獣だったのだ。自身の行動に疑問を持たないし、思考の前には蹂躪が来る。対話の余地は無かった。

最終的にはナタク、エニユオ、ポセイドン、マキュラ・マリウスという四体の星晶獣によって鎮圧されたが、この戦いによって、星晶獣の中でも明確な派閥が出来上がった。

星の民側か、空の民側か。少なくとも、シヨゴスは星の民の敵と見られた。

「私の能力は、使い方次第で生物同士の心を繋げられるものだ。だが、肝心の同族には無意味らしい。それは言葉通りの意味ではない。お前達には感情の是非が分からないからだ」

「何を…言って」

「空の民は何故敵なのだ。お前は何故戦っているのか。何故役割に徹しているのか。何故創造主に忠誠を誓うのか。自身は兵器だと宣うのに、何故激情を持つのか。お前の様な星晶獣の中に一つでもこれ等の質問に答えられた者はいなかった」

「……」

「だから私の様な醜い肉塊に敗北するのだ。感情の先に意思を持っていないから」

シヨゴスは進軍した。

獣、空の民、魔物。意思疎通の通訳を請け負うことで一時的に勢力をまとめ上げ、敵を星の民と断定した。

空の軍は今やシヨゴスが率いる非人類と、此方に友好的な星晶獣。勢力図が一気に変わり始めた。

そして——戦争が終わった。

平和が訪れた。誰もが休暇を享受し、笑顔を振りまいていた。

シヨゴスは空と敵対した。

——起動開始から44年。

「アイツを狙え!! アイツだけやれば烏合の衆だ!」

「なあ!?! 何だお前らやめつギヤアアアアア!?!?!?!」

「くっ…魔物を唆したか…! 醜い獣め!」

空の民、星晶獣、獣と魔物。

3つの陣営により勝利を収めた空だが、その内の獣と魔物を率いたシヨゴスは危険視された。

人間にはシヨゴスの権能が、対話では無く洗脳に見えたのだ。人間に害する魔物を率いていたのも一因であり、戦争が終わった後も魔物

の行動は変わらない。人間を襲う。

一方獣は魔物とは違い人を意味も無く襲わないとされる動物であるが、その彼等もシヨゴスに従っていた。

「君達が私を庇う必要は無いぞ」

「……今なら人間に勝てるかと?」

「君達が人を襲うのは、単純に住処を欲している故か」

当時の魔物の定義は現在と異なる。

当時は人間を害すれば何でも魔物足り得たが、現在では魔力で構成又は強化された怪物という定義。つまり、住処を追われて抗う獣すらも魔物とされていた。

シヨゴスだけがその意思を理解出来、人間に伝える事が出来た。だが、人間はそれよりも早く行動に移した。

数多の国同士で編成された連合隊が、森で悠々と獣と暮らしていたシヨゴスに襲いかかったのである。

「コアを破壊されない限り私は死なない。だから君達は命を大事にするといい」

シヨゴスはまだ、人間を許していた。

その戦いは両者少ない犠牲で事を終えたのだった。

——起動開始から45年。

シヨゴスは、違和感を感じていた。

襲いかかってきた人間達が動きを止めた。島を転々とし、追われな

がらに過ごしてきたが、調査の目が及ばなくなった。

「彼女達は何をしているのだろうか…」

会わずの友達を思い浮かべ、シヨゴスは平穏を望んだ。

——起動開始から47年。

シヨゴスは理解した。

人間が自分を突如追わなくなったのは諦めではなく、準備だったのだと。

人間達は先に魔物から討伐する事を選んだ。

『シヨゴスに洗脳される前に、どうせ害獣なのだから、これを機に撃滅しよう』という理由で、生態系は尽く空の民に崩壊させられていた。

事実、近隣の島には人間しか生息していなかった事もあった。

また、動物の亡骸が島々で見られる様になった。

感情を理解出来るシヨゴスにとって、人間も獣も違いは分からなかった。それ故に怒り、狂い、人間に与することを辞めた。

その初めの裏切りに——シヨゴスは人の言語を捨てた。

——起動開始から48年後。

シヨゴスと魔物が一国を落とした。

——起動開始から51年後。

シヨゴスが”戦争”を開始した。

——起動開始から52年後。

シヨゴスが四体の星晶獣と相対した。

「?…?…?…?…?…?…?…」

「終わりだ。シヨゴス」

「S No.±…」

「不協和音…お前は言語という音を捨てたのだな」

シヨゴスの戦争行為は、創造主が望んだ通りの戦火を齎した。種としての上位に当たる魔物が物量と戦略をもって人間に敵対する。先ずは民家を襲い、食料と土地を踏みにじり、城を落とす。

だが、一国を落とした所で知古の星晶獣が自身を止めに来た。シヨゴスは追い詰められ、遂には自身の体積の8割を失った。味方であった魔物も人間と星晶獣に殲滅された。

「…!…」

「…虚しいものだ。あの戦争を止めたのはお前だったというのに」

メドウーサ、サテユロス、ナタク、バアル。

4名がシヨゴスを止める為に戦った。

ナタクは力の象徴とも言える存在であり、炎と槍術を用いる戦闘特価の星晶獣である。魔物を焼払え、かつシヨゴスの元へ直進できる速度を持つ。

バアルは雷を操る事が出来、それは彼の力の一端ではあるが、動きを止めるに最適だった。

「馬鹿やったわね…アンタ」

「私は間違っていない」

「? π……!」

× 「……なら、何であんなに殺したのよ」

シヨゴスは、反射的に多用していた人間の言語を用いて、息も絶え絶えに声を荒げた。

「お前達は……感情を理解し獲得しておき、ながら……何故、獣の声に耳を貸さ、なかつたのだ……!?!」

「獣……う？」

「そう、だ……私達ではない……動物の獣だ……! 彼等は、感情と、意思を持って……姿形以外……私には人間との違い、が……無いと思えた……!」

「シヨゴス。お前、何をされた」

「何もかも……だ……!」

言語と種族という物は理解に於いて重要である。

同時に価値観というのは千差万別と思われているが、それもまた完全な理解ではない。

人間には獣の価値観が分からないと言われるが、実際獣達は彼等と
思う事は一緒である。種を守り、住処を守り、命を繋ぐ。

彼等が家を作る様に巣と群れを作り、飲み食う様に餌を求める。彼等と解り合えないのは言語という壁があり、姿形が異なるからだ。

「私は……悲しみを、聴いた。だが、人間はそれを、痛みによる雄叫びにしか捉えなかった……。知っているか……? 覇空戦争の真つ最中でさえ……今よりも動物は多かった、のだ……」

「人間に對話は通じなかったのか……?」

「通じるからこそ……恐れられたのだ……。皮肉なこと、に人間は獣が自分達程知性を持つと思っていなかったそう、だが……知性を持ち、自分達に並んだ時の想定はしていた……」

「その想定が、この結果か」

ナタクは事の顛末を理解した。
そして吐き捨てる様に言葉を紡いだ。

「…星と、変わらないじゃ無いか」

「これが、人間なの、だ…ナタク」

「だが、シヨゴス。お前が人間を滅ぼしてしまったら、それこそ空は…
いや、世界の在り方は」

「人間など必要あるものか」

シヨゴスは憎しみを持ってしまった。

彼にとつて人間も獣も等しく尊い命である。何方も踏みにじつて
はいけないとしていた物だったが、それも忘れてしまった。

彼が軽蔑していたのは星の民では無く、人間の育ちすぎた感情だつ
たのだ。

それを彼は、親しい獣を殺された直後に自覚した。

「私は星の民、を侮蔑する…。しかし、生きる為の、最低限の感情、を
孕んでいた古来は、そうでなかった、筈だ」

思えば彼の創造主は彼を何の為に作ったのか。

『直に分かる』という言葉は、本当に正しい物だったのか。それは分か
らない。

強いて言えば、創造主は恐ろしい先見性を持ち、人間嫌いで、植物
や動物が好きだった。

創造主にとつての”直”は覇空戦争後だったのかもしれない。

「人間をねだ、やしにし…本当の生の循環が、守られるまで、私は感情
を使い続け、よう…！」

「……」

「空の民に、呪いあれ」

純粹に考えて、感情が無いのに対話をして魔物を率いた事を疑問視すべきだろうが、どう足掻いても人間にとって彼の対話能力は洗脳に受け取られるのだ。

そして再生途中の彼を起こした騎士の男は言った。

『腐敗した奴等の目を覚ます——』と。

失笑を禁じ得なかった。

人間は自らを正す為に同族を刃を向けるのか。何百年経つても人間は変わらない——否、悪化していると言える。無意味に種を危険に晒すのは人間だけだ。矢張り、世界を存続させるには第三の種族が必要。

しかし、一定の周期の再生を無視して自分を叩き起こしたこの男を利用するしか手は無い。少し待てばまたあの四人が自分を封印しに来るのだから。

だから、シヨゴスはなるべく意思を持たない駄肉を演じた。

この男は自分の力の使用法を理解していたのだから、それに則ってリユミエールとやらを襲い、四体の星晶獣に勘付かれるまで隠れて獣達を再集し、戦力を蓄える。

封印される直前に比べて獣達の数減ったが、龍種等の寿命が長い生物は一代またいでシヨゴスという存在を語り継がれている。

その者達の背に乗って、各地の同族を説得し、人間への対策を練り始めた。当然静かに暮らしたいだけの者もいたが、それでも構わなかった。人間が死んで困る訳でも無かったからだ。

そして人間に飼育されている者は生活に苦しむ可能性があるが、その時は星晶獣達が人間に変わった行動を取ればいい。

……つくづく、人間は不要なのではないか？

シヨゴスは、偏った視野の狭さを自覚せず、ただ人間を滅ぼす事を考えていた。

種としての在り方、育ちすぎた感情を排斥する——元来の星の意思を原動力とし、彼は只管睨み続ける。

——ルクス、コーリス、スルトの三人を。

25. Last stand

「ツ…ブレス！」

属性というのは何も人間だけが持つ物ではない。

寧ろ人間の物よりも威力が高い元素を放出するのだ。その中でも注意するべきは火、風。

船自体が破損する火は当然として、風は騎空艇の操縦方法の関係上どうしようもない。

「火は俺が相殺する!!その隙に風を叩け!!」

遠方でスルトが叫んでいる。

彼は性質上魔力切れという概念は無いが、それでも少し油断したら四方八方から噛み千切られる可能性がある。

そして船体に襲いかかる圧縮された水流。

レーザーと形容しても良い一撃がコーリスの船に襲いかかる。

「ケーニヒシルト!!」

かつての防壁を遥かに凌駕する硬度の壁。

コーリスが習得したりリュミエールの魔法。ルクスの『ノーブル・エクスキューション』と合わせて秘術と呼ばれる蒼き盾である。

一軍の主砲を耐える程の盾に激突した水流は霧散し、彼の盾の前には水は無力だという事が明らかとなった。

その間にも砲弾は着々と風属性の龍に命中していく。

「いける……」

「いや、まだです。シヨゴス本体が分からない」

龍の背中にこびり付いて一緒に飛んでいると推測される親玉は、未だに姿が見えない。恐らくはど真ん中、一番奥に陣取っている可能性があるが、最悪なのは何処かの島に逃げている事。洗脳でないなら、シヨゴスが何処にいても龍達は動く事ができるからだ。

だが、戦略を常に変えているのなら現在進行形で指揮を執っていると考えられる。

獣が戦略を彼から教わったのなら、彼が分かりやすく言葉を伝えて、その通りに動いている筈だからだ。

防戦の最中、観測手が声を上げた。

「真下から来ます!!」

下から弧を描くように曲線の飛行をする龍。

大砲が効力を成さない角度。死角である。だが…

「はあー!」

弧を描くというなら。

最も低い位置に龍が到達した時点で——コーリスは盾を置いておいた。

勢いに乗った彼等の頭部は見えない壁に激突した様にぶつかり、一時的に飛行を中断された。

無論直ぐに翼の動きを再開させるのだが…

「そこは浮力の限界地点…落ちろ」

龍はまるで下に引つ張られるように雲に沈んでいった。

原因は空の世界を構成する重要な要素——浮力である。数多の島を浮かせ、騎空艇飛行を可能にする力。ただし、あくまで一定の場所より上空という範囲である。限界地点を下回った物は何であれ見えない下の世界に落ちる。

龍の翼の大半は浮力と風を利用した物。

語るまでも無く、墜落死である。

「あの地点に魔法を設置するとは…座標指定、お見事です」

「動けない今だから出来る。それよりもロイス。周りは？」

「団長が絶好調なおかげで大分数が減らせてます…スルトさんと違って飛ばませんからギリギリの戦いになってますけどね…」

「副団長の所は」

「最前線だから結構危ないです。今の所は近づいた龍を副団長が蹴散らしてる形ですか」

「そうか……ッ！」

何かを感じ取ったコーリス。

その視線は後方に。

「後ろだ！ロイス!!」

「——ブルームーン!!」

半ば反射に近い動きでロイスが剣を振るう。

その細剣の刀身に水を纏わせ、三日月状の斬撃となって龍の顔へ飛んでいった。

「ナイス！」

「どんなもんですか！」

ゼロ距離での炎を狙っていた龍の口内に一閃。

属性を司る器官ごと水の斬撃で炸裂させ撃破。斬撃の鋭さに関して言えばロイスはほぼ抜けている。

しかしコーリスは疑問に思っていた。

『何故接近されて誰も気づかなかった…？』と。

その疑問はすぐに解消された。

「闇も居るのか……厄介な……！」

「珍しい属性の癖に更には群れるとか……」

闇属性。光を飲み込む属性であり、定義する事は難しい。何故なら、それは自然現象ではないからだ。

完全な魔力で構成された属性。黒いエネルギー物質での攻撃や、此方への弱体、そして——認識阻害。

どういう訳か闇属性は概念的な能力に近く、此方の何かを遮るという風に作用させれば、今の様に龍の気配を薄くできるのだ。

更に——

「……!?」

「まさか……」

騎空艇に響く足音。

新手である。

「ここからが本隊ほんたいという事か……!!」

龍の背に乗った巨獣型の魔物が船に飛び移り、襲いかかる。

個体名は——単眼の巨人ゴライアス、炎の巨獣ヴァルカンライオ。

「やっと役に立てそうな敵が来たなア！お前ら！守り抜くぞおおお!!」

「了解!!」

そこで盾兵達が待っていたとばかりにコーリスを守りに前に出る。水撃を防ぐ彼が消えれば落とされる。

優先順位を間違えるほど騎士達の覚悟は甘くない。

「……コーリスさん。少し待っててください。斬ってきます」

「相手は恐らく古戦場を踏破するレベルの魔物だ。間違ったら死ぬぞ」

「ご安心を。魔物相手の方が得意です」

ロイスは覚悟を決め、コーリスの側を離れる。

『早い所盾を固定して俺も加わらなくては…だが』

防御魔法は3種類存在する。

盾を媒体とし、魔力を注ぎ込むことで強固にするもの。前もって術を仕込んでおき、自動で発動するもの。そして、座標を指定し空間に設置するもの。

コーリスが扱う者は空間に設置する物だが、座標の指定には時間が掛かる上に精度が命である。

自分の魔力を空間に放出し、緻密に織り成す事で盾にする物だ。走りながらでは絶対に出来ない技術。

だからこそ、その空間に盾を固定さえしてしまえば良いのだが、その間固定している分の魔力が持っていられる。魔術師の数十倍の魔力を持つコーリスにも負荷が大きい物だ。

現在コーリスが『ケーニヒシルト』で作っている盾は23枚。霧を出していない珍しい戦いとはいえ、消耗は中々に多い。

コーリスは早めに結論を出した。

「偵察さん！」

「はい!?何か御用で…?」

「貸してください」

「分かりました！」

偵察兵から魔力を貰う事で力を補充する。

コーリスは予め戦闘前に船の人間と魔力源の感覚を繋いでおいた。戦闘時に手渡しが可能。

逆にコーリスが貸し与えれば一時的な超火力も出せるが、今は得策

ではない。

「…あと2個くらいで……」

戦局は、拮抗していた。

スルトはただ只管不安だった。

何一つ苦勞ない毎日を過ごしていて、遊撃隊に入ったコーリスは逆
にやつれたと同期は語っていた。

『アイツはそんな玉じゃない』

『……コーリスさんは、寧ろ強くない方だと思います』

『負けた俺への嫌味か！』

『精神的です！』

『…むう』

『ハーヴェインイジメに耐えて寧ろ無敵になった貴方とは違ってイチイ
チ気にする男ですよ』

『…よく知ってるな』

『相棒ですから』

『そんな関係だったかな…？』

遊撃隊でコーリスは自らの手を汚した訳では無かった。

だが、多過ぎる死と醜さを誰よりも知った。

そしてついさつき、コーリスは初めて人を殺した。それで終わら
らば良かったものの、耳を奪われ、未だ戦っている。彼は守る対象が
いれば闘志が湧く人間だから、学生時代の様な調子に戻っていたが、
それでもスルトは…。

——友を傷つけられて許せる訳が無かった。

「団長!!」

「分かっている!!」

ルクスは光を極めた騎士であり、スルトに並ぶ殲滅力を持つが、魔力が尽きる懸念がある。感情を炎に変えるスルトよりも燃費が悪い。副団長も戦闘スタイルは異なるが同じだ。

つまり、今の内に龍を全滅させなければならぬという事。

「偵察兵! ショゴスは見えるか!？」

「まだまだ! まで、これは……!？」

「どうした!」

「まずい! コーリス達の船に龍以外の魔物が集中している! 此方を早く片付けないと!」

「…コーリスとロイスなら耐えてくれる筈だ。余裕が出来たら運び手諸共焼き尽くしてやる。陸の魔物が何処の島から湧いてくるか、確認しておいてくれ!」

「分かった!」

スルトはこれで33体もの龍を焼き払った。しかし衰えず。

火の勢いはかつて人間を震撼させた星の獣にも劣っていない。

彼は、無意識の内に獣に恐怖を与えていた。

「ヴァーミリオン」

スルトは、真の意味での生命の災厄。

炎を纏って、ただ焼き尽くした。

前線では。

「副団長！2隻落とされました！次は俺達に来ます！」

「不味いなあ…」

副団長のエクシンダは、魔力を剣に変える力を持つ。

その巨大な剣で持って龍を葬っていたのだが、射程が無い。

その赤い瞳を不快げに細めながら部下に告げる。

「魔法部隊はさつきと変わらず目を狙ってくれ。アイツら結構ゴツイ奴等運んでくるからあわよくば落とせるかもな。無理だったら船で対処。死にそうだったらスルト来るの祈れ」

「了解！」

「…ヤレヤレ。ここまで踏み入れるつもりじゃなかったんだけどなあ」

「……副団長？」

「ああいや、コッチの話。じゃ、ガンバロウ」

彼の巨大な剣が翼を切り裂き墜落させるが、物量はどうにもならない。

現在6隻あった船が2隻落とされ、推定死者は70名程だ。

普通なら一網打尽で全員落とされているのに、何とか耐えられているのはスルトとコーリスの盾とおかげと言っても過言では無い。

本来なら炎、水と風で船を撃ち抜かれている所だ。

「団長とコー坊の船が落ちたら終わるな。なら——」

エクシンダは、心底面白そうに…部下に気づかれない様に嗤った。

「後で見せてもらおうぜ？なあ、コー坊」

その直後…

「…あーあ」

彼の乗っていた船の操縦部が、完全に刳り取られた。

「この騎士団、まあまあ楽しめたんだけどなあ」

それがエクシンドアの、最期の言葉であった。

——コーリスの船。

「副団長の船が……」

「余所見は駄目です!!」

一人の盾兵がそう呟き、ロイスは咎めた。

何故なら目の前の巨獣が更に一体増え、その剛腕を振るおうとしているからだ。

物理的な船の破壊。敵はそれを狙っていた。

「ぜいッ!!」

炎の拳を水で無効化し、ロイスは頭部へ刺突を繰り返した。

「堅っ……!」

結果的に倒せたが、あと2体。

ロイスの体力は着々と削られていた。

その時。

「っーやば——」

彼女は舟板を揺らされた事によりバランスが崩れ、その隙を狙った

バジリスクの胴体に付いている多数の目玉は、数十秒間視認した相手に毒を伝播させる恐ろしい性質を持つ。それを察知したコーリスは前面を避けた。

すかさずヒドラの5つの首が質量で押しつぶしを狙うが、魔法部隊により防がれていた。

「ヒドラは俺達任せろー！」

「ありがとうございます！」

盾兵と魔法部隊がヒドラを受け持ち、剣士はバジリスクを相手取る。

巨大な魔物はその体を振り回すだけで鈍器になる。人間の対策は単純に避けるか、奇襲をかけるかしかない。

敵が尾を振るだけで数の理など吹き飛ばすからだ。

だが、作法に則れば成せる。

彼は側面から回り込み、また、ロイスは船での倉庫にある銃を胴体の目玉に打ち込み始めた。

魔物はその堅固な鱗や骨などで銃弾を致命傷にしない様に立ち回るが、急所なら別である。更には傷に蓄積する熱。抗えるのなら生物でない。

しかし痛みで暴れ回られたら此方の船も損害を受ける。その前に殺すのだ。

コーリスはエリマキの様な器官を切り裂き脳への道を開ける。

「ぜやア——！」

道が開けば突くのみ。

止めはいつだってロイスなのだ。

そしてヒドラは重量が非常に重く、存在しているだけで船が壊れる可能性があったので、盾兵が誘導し、魔法部隊が一斉に発射。奈落へと叩き落された。

一息ついて、二人は確認をする。

「外から来てますか？」

「砲兵が命がけで止めてる。盾のおかげで下からは来ない。裏は団長が守ってくれている。前線もまだ——」

「……………」

「——前線が、いない」

「気付いていませんでしたか。…先程、3隻とも落とされました」

「…そう、か」

「後はこのこと、団長の船と、スルトさんが乗っていた船です。実質の前線はスルトさんの所…ここはボーダーラインという扱いです」

彼等が気がついた時には既に大群が押し寄せていた。

(やるしか、無いか)

コーリスは賭けに出る事を決意した。

霧の第四段階【灰霧】オブリビオンの発動を。

龍の記憶を奪いシヨゴスの位置を炙り出す。

だが、奪う記憶の範囲は奪いたい記憶に関連する事全てだ。つまり、シヨゴスと関わっていた寿命が長い龍種の記憶を一遍にねじ込んでしまう可能性がある事。つまり、コーリスの脳が耐えきれず、人格崩壊、廃人化すらもあり得る。

コーリスは自分一人の犠牲でどうにかなるならそれもやるだろうと自覚していたが、自身の自我の崩壊は設置した盾の崩壊を意味する。

それ即ち、戦いの敗北を意味する。

ロイスは、彼が危うい事を考えている事に気付いた。

「……………」

「…なに、考えてるんですか」

「どうしたら、勝てるのかを」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

戦争という物には無縁だった。

ファータ・グランデは戦争とは関わりが少ない空域だし、何よりリユミエールは他国との関係は悪くない。

それが間違いだった。

敵は人では無かった。星晶獣がその能力を活かし、人へ悪意を向けた結果が現在だ。

軍隊が相手取るレベルの魔物を嵐の如く差し向け、数百人が空から落ち、大砲の弾も風向きも何もかもが俺達を殺せる状況になった。

そもそも、シヨゴスの位置を割り出せた所でそこまで辿り着けるのか。スルトに突破してもらうのか。スルトに連絡する方法はあるのか。

分からない。

スルトは生き残れるだろう。

遠くから狙い撃ちされない様に立ち回れば、逃げる事も出来る。当然アイツ以外は死ぬが、諦めない筈だ。だが、シヨゴスは現在進行形で兵力を補給している。大型の魔物を大雑把に集め、人間が苦手とする空中戦を仕掛けたから俺達はここまで追いやられているのであって、地上なら何とかなつた筈だ。命運を分けたのは、シヨゴスが先手を取って国を実質の人質にした事だ。

どうすれば。

俺の魔力でロイスがシヨゴスを狙い撃てば或いは。いや、その前に船が落とされる。

そんな時だった。

「——砲撃？」

「どこから……？」

あらぬ方向から砲弾が飛んできた。

それは龍が形成する渦に向かって1発、2発、5発と途切れなく飛んできた。

遠方に、騎空艇が見えた。

白と青の旗が見えた。

「あれは……」

「……………フェードラツヘ？」

援軍。

時間が経てば、同盟国の危機に救援を送るのは当たり前であって、それでいて……増援まで俺達が保たないのが想定だった。

希望を灯すには、十分だった。

「抗え」

誰かが呟いた。

「抗え!!」

誰かが叫んだ。

「戦ええええ!!」

皆が叫んだ。

呆気にとられていた龍が意識を取り戻し、此方に突撃してくる。当然、奴等の目標はリュミエールの壊滅を始めとするの各国の陥落。

最早大砲は尽きた。

舟板に噛み付く龍との戦いになる。

「「我等リュミエール聖騎士団!」」

その意志は、何よりも尊く。

「清く、正しく、高潔に!!」

これが、最後だとしても。

26. 魂の咆哮

轟音が鳴り響く。

咆哮と、炎と、金属の音が混ざり合つて、血なまぐさい音を奏でていた。

一人は、光が尽きながらも卓越した剣術で敵を殲滅している。

一人は、炎を全身に纏いながら生命を溶解させている。

一人は、希望を見つげながら抗っている。

泥沼の様な身体、太刀筋のキレなど既に失つたが、コーリスは戦い続けていた。

ルクスの様に全面に立つて守る訳でも無く、スルトの様に殲滅する事で船を守っている訳でもない。コーリスの船の全員が死力を尽くして運命に抗っている。

「ハア…ハア!!」

剣士は肉面が見えれば只管得物を振り回し、剣が折れれば銃を持ち込み撃ち込む。

盾兵は盾を翼膜に押し込み、盾が無くなれば拳を目に突き刺す。

魔法使いは力が無くなるまで魔法を使い続け、折れた杖が尖つていれば傷穴に刺し続けた。

医療部隊は自身の寿命が縮んでいる事も気にせず、戦士達を癒やし続けた。

コーリスも同じだ。

口内、眼球、首元。脳髓に届きそうな部位を意地でも狙っていた、傷を付けたあとに魔力で作った盾を直接ねじ込む。殺せなくとも、動けなくすれば良い。勝手に落ちてくれるのだから。

彼等の瞳は気狂いに等しかった。

爪で体を抉ろうとも常に相手を睨み、最後の抵抗と言わんばかりに武器を振るう。龍の巨大な牙で身体が2つに引き裂かれようとも、その死骸は怨敵を永遠に見ていた。

きつと、彼等は死んだ後も戦い続けるのだろう。

そう思わせる風貌がそこにあつた。

「コーリスさん……コーリスさん！」

「なんだ！」

「何でもありません生きているかの確認です!!生憎後ろが見れないので！」

背中を預け合う両者は既に傷を何度も経験していた。

肩や腰に何度も切り傷を付けられ、その都度医療部隊が自らの命を絞り出して癒やす。ロイスは自分で回復魔法を使えるが、それでも限界があつた。

エルーンの耳が逆立ち、眼孔を獣の如く開き、低姿勢で戦う姿は、彼等が死に際にいる事を物語っていた。

しかしそれでも、二人は笑っていた。嗤うのでもなく、嘲笑うのでもない。ただ、楽しんでる訳でもないのに、笑っていた。

——たとえ私が死の影の谷を歩もうとも、災いを恐れない。あなたが私と共にいるからだ。旧約聖書 23遍4節

「ッ！」

「そこォ——!!」

真横から介入した巨大な顎^{アギト}。

ここに来てようやく二人は一緒の方角を見て——眼光を残像として残す程の流麗な動きで、その口内から喉めがけて両断を心がける。

「は、アアアアアアあ!!!!!!」

「ぐぬうああああああ!!」

コーリスはその身体が秘める剛力で以て、ロイスは憤怒による自らの限界超越で以て、敵の血に変えた。

だが——その代償は重く。

「っ……」

「あ……」

二人の剣は、木の枝の様に儂く折れた。

その刹那の時を、敵は逃さなかった。

○○○○○○○○○○

『私達は、相棒になります』

『……?』

『私は本隊。貴方は遊撃隊。それ等になんの違いもありません』

『……?』

『何がなんだか分からないって顔してますね』

『いや、うん。意味が分からない』

『…だーかーらー』

この日も私は、何時ものように彼を呼びました。

遊撃隊に入ってから一層浮かない陰鬱な顔をしている彼を、休日偶然見つけたんです。

彼は士官学校時代からそうでした。

元の顔が関係している分もありますけど、ちよつとの事で抱え込んで悩むのです。そして、厄介なのは、彼の悩みにその『ちよつとの事』

じやない物が紛れ込む事。

彼は捨て子で、つい最近育て親や幼馴染に二度と会えなくなりました。

それはちよつとの事ではありません。深刻な苦しみです。

だから、私は彼に言いました。

『頼れ、という事です』

『……………』

トラモントという島が封鎖され、それでも立ち直った彼がまた悩んでいる。遊撃隊には黒い噂が多い。彼は雑用時代から頑張ってたから、皆さんからの評価は高かったのですが、それでも毎日疲れ果てて帰ってくるのを見ます。

スルトさんと私は、それを見て鍛錬に望むのです。

彼が苦しまないくらい任務をこなしてやろう、と。

その意を汲み取ったのか、何時もなら余計なお世話と一蹴する筈の口は閉ざされていて、目からはほんの少しの涙が溢れていました。

『ありがとな。だけど、俺は盾だ。守るなら、俺にやらせてくれ』

私は、この時から正しい意味で人を守りたいと思ったのかもしれない。

いつの間にか空で龍と戦って、何とか生き残っていますけど、本来なら一体倒したただけで勲章貰えるくらいの働きなんですからね？

皆、落ちて。もしかしたら、元クラスメイトもあそこにいたのかもしれませんけど…………私達は最期まで戦えます。

『はアア!!』

脇腹を左手で治癒しながら剣を振るった。

その痛みを我慢する度に、貴方は此方を見えています。でも、それは杞憂です。私だって、強いんですから。多分…私の方が、痛みに強いんですから。

だから、ほら。

笑って下さいよ、コーリスさん。貴方には、皆がいます。

変人の団長も、チャラ男な副団長も、馬鹿なスルトさんも、皆貴方を信頼しています。

だから貴方も私達を——

——私を、頼って下さい。

そう思いながら、折れた剣と共に自分の最期を、悟りました。後悔はありません。

だって——私が彼を守って死ぬんですから。

○○○○○○○○○○

剣が折れた両者に向かって裂かれた口腔を向ける龍。

最早二人に逃げ道は無い。

だが、敵が想定している動きとは別に——ロイスが前に出た。コーリスを後ろに倒しながら。

彼女は美しい慈愛の目をコーリスに向けて、彼を守った。

そしてそのまま——コーリスは足を踏み出した。

「……………だから言っただろう」

龍の口が、何かを詰め込まれたかの様に膨張した。

「俺は、盾だと……!!!」

「コーリス、さ」

龍はその言葉に対する答えを持たない。

「根絶やしにされたいか」

スルト・ヴァーグナーは絶えず飛んでいた。

この戦闘における魔物の7割は消失した。しかし、此方の弾薬と兵力が尽き、フェードラツへの援護があつてようやく壊滅せずに済んでいる。

本来ならばシヨゴスを見つけていてもいい頃だが、一向に見つからない。それが、苛立ちを倍増させていた。

生命を溶かす程の高熱。最早自然現象の範囲を超えた出力だが、依然として敵は抗戦姿勢を崩さない。

ここまで来たら、他の国に兵力を回して着々と対応に追わせる筈なのだが、聖騎士団を壊滅させる事に拘っているようにも見えた。

それがスルトの考察である。

それは正しかった。

魔物達を突き動かしているのは人間への怒り。”戦略”という概念に馴染める程彼等は人間に近しく無かつたのだ。有利な筈の空中で数多くの同士を失えば、怒りで暴走し、騎空艇に飛びかかって可笑しくない。シヨゴスの会話の能力では、説得は出来ても意志の固定は出来ない。つまりは、統率が取れていない。

かろうじて自分を守る陣形は保っているが、いつ目の前の炎に溶かされるのか分からない。

人知れず、シヨゴスは追い詰められていた。

(長らしき男の光は既に途絶えたか：ならば、外敵と見做すべきはこの炎の少年のみ)

霧を使えば味方の視界も悪くなる為、コーリスの妨害は望めない

し、何よりスルトは他の船の状況を把握出来ていなかった。
シヨゴスはそれを理解していたから、未だに生きている。
スルトもまた、追い詰められていた。

(何とかして本体を焼き尽くさないと…!!)

炎を噴出し、群れに突撃しようとした瞬間――

「っ!？」

龍の群れで構成された竜巻に、一つの槍が突き刺さった。

「なん…だ?」

「?」
「\$€×!!!!」

スルトの疑問と共に、謎の叫び声が木霊する。

それは、シヨゴスの声だ。

そして、群れに突き刺さった巨大な炎の槍は、その勢いを増し、爆撃に近い衝撃を生み出した。

「うおっ!?!」

堪らずスルトは爆風に晒されるが、その彼を一人の男が回収した。
脇に抱えられたハーヴェインは直ぐに上を向く。

「良い炎だ」

「……………だれだ?」

その男は、斧の様にも槍の様にも見える紅い武器と、青い鎧を着て

いた。

そして、最大の特徴は——浮いている事。

「よく耐えた。勇敢な戦士達」

その男の名は——ナタク。

「これは……………」

騎士団長ルクスは人生で最も珍妙な光景を目にした。

それは、此方に襲いかかった幾多の魔物達が石になって、空へ落ちていったのである。

呆然とした表情で彼は生き残った部下に声をかけた。

「…だれか、すごい魔法使いでもいたのかい？」

「魔法じゃないわよ」

その声は、部下の物では無かった。

程よく透き通り、子供の声にも聞こえるソレは、自身が乗っている船から聞こえたものだ。

彼は直ぐに振り向いた。

「行くわよ、メドウシアナ。これは、アタシ達の責任なんだから」

「キシヤアアアアオア!!!」

そこには、独特な形状の装備を纏った紫髪の少女と、巨大な蛇。

ルクスは聡く理解した。
彼女は、星晶獣だと。

「私達は……失敗したんだから」

その憂いを帯びた声と共に、空間から吐き出された光線は敵の絶望を表す石像を作り出した。

「死なないで……死なないでコーリスさん……」

「……に、げ」

「嫌です……いや、だ……!!」

左腕に風穴が空いたコーリスは、出血と激痛による意識の混濁を引き起こし、かろうじてロイスの悲鳴で意識を保っている。

だが、彼の腕を奪った龍がまだ此方を見ている。

ロイスは崩れ落ちた彼を引き摺り、少しでも牙から逃れようと足掻く。

コーリスは、自分は助からないと悟った。

だが、運命は常に偏るものだ。

「きやあっ!?!」

目の前の龍の頭部に、青紫色の硝子の様な、それでいて巨大な剣が3本、煌めいた。

「大丈夫。二人共助けるからね」

それは、慈愛に満ちた優しい声だった。

ロイスはその声に途方もない安心感を覚え、コーリスは無意識に母を思い出していた。

彼等の目の前に、一人の少女が振り立った。

快活で、母性的という矛盾を抱えた風貌は、人外のソレだった。

愛くるしい見た目をした少女が手をかざすと、二人の傷は忽ち塞がっていった。

「な……」

「これは……コーリスさんっ！腕！」

コーリスが驚きの声を上げるも、少女は申し訳なきように彼の腕を撫でながら説明をする。

「ごめんね。私は癒やしの星晶獣じゃないから、人間の回復力の限界を超えられないの。だから……傷も残るし、君の腕は……」

「……いえ、感謝します」

「………良い子、だね」

千切れかけの内側の傷が塞がる事で、外側の腕は肘下から弾き剥がされるように落ちた。

彼に痛みは無かった物の、その光景は痛々しい物であった。守られたロイスは、碎けんばかりに歯を噛み締めながらも、一時の激情を抑え目の前の少女に問いかけた。

「救援感謝致します……それで、貴女は……」

「私はサテュロス。安心して、もう死なせないよ——!!」

サテュロス。

そう名乗った少女は巨大な剣を出現させながら叫んだ。

「コーリスさん……サテュロスって」

「ああ、文献で見た事が…」
「…凄い」

戦場には炎、光線、巨剣が入り混じり、圧倒的な攻撃力で敵を殲滅していく。騎空艇も無しに飛ぶ事が出来、大砲や至近距離での大火力でしか下せなかった龍を一薙ぎで撃墜。

「さてー！」

此方に迫る龍を一網打尽にしたサテユロスがロイスに向かって呼びかける。

「その水属性っぽいキミ！」

「はっ…はい！」

「あと横にいる魔力たつぷりの良い子！」

「はい！」

「これから炎と蛇と私の剣があちこち外周している龍を倒した後に、中心へ雷が降るから、その後に出たギョロギョロ目玉を狙い撃ちしてくれるかな!!」

「へ？雷？」

「私の友達！ともかく、雷でビリビリしてる敵に水でビューンって当てれば倒せると思うんだ！」

「は、はあ…」

「その魔力たつぷりな子に借りればいける！がんばれ！」

何という無茶振り。

ミス無しで敵を狙い撃てと彼女は言うのだ。だが、ひと目でロイスの属性とコーリスの魔力性質を見極めた為、決して考えなしの発言では無い。

それに——コーリスが貸し与え、ロイスが撃つというシチュエーションは、戦いの前に既に想定していた。

「まさか…死ぬ時の最後っ屁の技を要求されるとは…」

「…えーと、アレ、凄く腕痛いんですけど」

「そう言うな。俺なんて腕無いんだぞ」

「そーゆうブラックジョークはやめようね!？」

緊張感のない会話に思わずサテュロスが声を上げる。

「適応力高くない!?一応子供だよね…?」

「あと一年で大人になります!サテュロス様!」

「貴女のおかげで大人になります!サテュロス様!」

「何か凄い感謝されてる〜!!」

命を救われ、国を救われた相手なので真面目に腰を曲げ感謝の意を示す両者。彼等の中でサテュロスへの感情はリスペクト100%だ。

「じゃあ準備が出来てきたって訳だね!皆、最後に頑張るよ!!」

その声と共にロイスは両腕に魔力を集中させ、コーリスは彼女の肩から魔力を注ぎ込む。

「……っう……」

「ロイス、掌に極集中だ。限界まで溜めて方角が絞れたら一気に前に押し込ませ。それで暴発はしない」

「分かっていますけど…うっ、コーリスさんの魔力やっぱりおかしいですって…血管の中を活力が暴れ回ってる感じ…で」

彼女は苦しんでいる訳ではない。

単純に過剰に元気が湧いてきて怖くなってきている状態だ。人の疲れをふつとばす程の活力が彼の魔力にあった。

その間にもサテュロスは腕をふるって剣を操る。

終着まで、後少し。

「サテユロス……なる程。そういう事か」

「…どうした、ナタク？」

「少年、お前の名前は何だ」

「スルト」

「よしスルト。これから俺はお前を離す。出来る限り外側にいる魔物を焼き続けろ」

「構わないが……巻き込まれないか？」

「俺の炎よりお前の方が熱い…それは認めねばなるまい。だが、範囲と精密性は俺の方が手慣れている。避けるのには造作もないさ」

「…分かった。外側だな。中心は？」

「中心に固まっている龍は俺の仲間が落とす。うまく躲せ。その後はどうやらお前の仲間がやる様だ」

「な!？」

「安心しろ。お前の仲間の側にいる者は信用できる」

「う、うん……」

そう言ったきりでナタクは手を離し、空中で二手に分かれる。

「機動力が違う……!」

火力そのものはスルトの方が上なもの、速度、範囲、精密性は完全にナタクが上だ。彼の何処にその様な推進力があるのかは不明だが、空を泳ぐ様に高速飛行をこなしていた。

(……任せた方が良さそうだな)

少し周りを見渡せば、巨大な蛇に乗って石化の呪いを振りまく少女、爆発する水晶の剣を操る少女もいる。

彼の星晶獣への見方が少し変わった。

「勝てるぞ……！」

退路、兵力、反撃、全てを奪ってリュミエールは勝利に近づいている。

「……ん？」

希望を抱いたスルトはある一点へ視線を向けた。

上空に黒雲が集中している。

察しの良い彼は気づいた。

「ロイスとの相乗効果か!!」

雷と水。

彼は詳しい科学的現象は分からないが、水に雷が広がる事は理解していた。

「と言う事はもう一人いるのか」

「どう？えーと……君の名前は」

「ロイス・モラクレルです！」

「も、もられ、もらく？………ロイスちゃん！いけそう!？」

「(ゴリ押しした……) 最大限の威力を出す為なら……もう少しです」

「サテユロス様。シヨゴスは硬いですか？」

「君は」

「コーリスです」

「コー君！君は良い子だからコー君だ！」

（基準がわからん）それで…」

「シヨゴス君はねえ、凄く脆いよ」

「見た目通りですか」

「そう。でも、星晶獣だからコアを破壊しないと時間かけていくらでも復活できちゃうんだ。だからコアを撃ち抜いて欲しいの」

「…逃げ足が早いのですか？」

「…ううん。私達が倒せなかった。殺してあげられなかった」

「……」

コーリスは何かを察し、会話を切り上げロイスへ集中をした。

「コー君…それ、大丈夫？」

「え？」

「身体、光ってるけど……」

「……なんだ、これ」

サテュロスによつて直された無数の傷の跡、それが青黒く発光していた。

「…多分、コー君の魔力つて人の何十倍もあるから、多すぎて外から見えちゃってるのかも。傷になると皮膚が薄くなるから」

「こんな色が…？」

以降コーリスが魔力を巡らせている最中は身体の一部が不気味に光るという事になる。

人によつては、禍々しく見える色である。

人から、離れた様にも見える。

ぎこちない空気が流れた瞬間、ロイスが顔を上げた。

「そろそろいけます」

「分かった。照準は俺が合わせる。痛みには備えろ」

「……え、痛いのか？」

「……まあ、高圧レーザー出す様な物ですから、腕は痛いですよ」

「口、ロイスちゃん……どのくらいに怪我に……？」

「運が良ければ肩が外れるくらいで済みますが、今回の規模になると両腕は間違いなく折れます」

「おれっ……!?!?ご、ごめんなさいいい!!」

即座に土下座をするサテュロス。

「頭を上げてください！別にキレイに折れますから治りますから！」

「怖かったら止めてもいいよお!!」

「ここまで溜めた以上放出しないと暴発して船が壊れます……」

「ヴェツ!!?!?」

今度は人間が出さない声で飛び上がった。

周囲の騎士達も放心状態だが、サテュロスの慌てようを見て我を取り戻した様だ。

「な、なんで先に言わないのおおお!!」

「最適の選択だから、です……」

（だ、駄目だこの子達……覚悟が違いすぎる!!）

片腕に慣れ始めたコーリスを見てもう一度戦慄し、彼女は騎士への見方を改めた。

（そういえば……あの時覇空戦争もそんな感じだったな……人間さん達って……）

仲間が倒れても、何度でも立ち向かう人間の姿は何百年も前に見ていた。当時はまだ体系が確立していない医療魔法を必死に振るう少女、若いながらもリーダーとしての責任を全うしていた少年、その二

人に絆された騎士の星晶獣。

ならば――

「なら………任せたよ！ロイスちゃん、コー君!!」

そして、サテユロスは口を精一杯開いて大声を上げる。

「バアルくん!!準備おーけー!!!」

すると、それに応えるように黒雲に雷が見え始める。

その場に似つかわしくない電子音の様な、不思議な音域が展開された。

「Callinger…この戦いの終止符を今こそ打とう!」

拡大された音声は、この戦場全ての生物の耳に届いていた。

少しして、ギターの様な楽器を持った青年が顕現した。

「あれは…楽器ですかね…?」

「音楽の星晶獣…?」

「二人共、バアルくんの演奏で雷が降るから!今の内に狙ってね!」

二人は『マジかよ』と思った。

星の民は何を血迷って楽器で雷を降らす兵器を作ろうとしたのだ、と。

「シヨゴス。最早お前の意思は統一性の無い不協和音に堕ちてしまった。ならばこの空に共鳴を取り戻すのが先決!」

「chjjjjjjddd b!!」

何処からか、またシヨゴスの声が聞こえた。

コーリスが感じた様に脳に意味が伝わる訳でも無かったが、あの肉

塊が抗議をしている事は何となく分かった。

きつと、遊撃隊長の様に道を踏み外した獣だったのだろう。

星晶獣達との浅からぬ縁を彼は感じた。

そして彼は無言でロイスの手首を掴み、標準を龍の集合体の中心部へ向けた。

「雷で恐らく身動きが取れない。ゆっくり狙えば行けるはずだ」

「はい」

「噛む物はあるか？」

「…いえ、一瞬で終わる痛みですので」

「分かった」

ロイスの手には、凝縮された水の玉がはち切れんばかりのエネルギーを伴って脈動している。

雷が、唸った。

「さらば友よ——無量の天恵に溺れるが良い!!」

「ラウダー・レゾナンス!!!」

○○○○○○○○○○

私は、決して失敗する筈が無かった。

落ちてしまえばどうにもならない空中戦を仕掛け、更には龍達や巨獣を集め完膚なきまでに叩きのめした。

船の半数を沈め、騎士達を奈落へ葬った。

あの憎き星晶獣共に実質の封印を繰り返されていた私は、偶然とはいえ起こされた。

一定の周期の復活の数ヶ月前であった為、まだ彼等は私の復活に気

づいていなかった。

私の戦い方を彼等は知っている。

だからこそ、短期決戦でリユミエールを滅ぼし、兵力を集めるつもりだったが、イレギュラーと言うべきか、炎の少年、霧の少年、光の騎士：それ等の要因が重なって時間がかかり、最終的に4体が駆けつける時間を許してしまった。

最も戦闘力が高いナタクは一方的に此方を蹂躪し、メドゥーサの石化は空でのアドバンテージを捨て去る即死技。サテュロスも攻撃手段と回復手段を併せ持つ万能型の戦闘能力を持っているし、バアルの雷は総じて生物に有効。

つまり、負けに等しい結果に追われている。

——許せるものか!!

くだらぬ情で私を殺せず、この戦いで犠牲を増やした貴様等が今更何をしようというのか!

愚か、愚物、愚鈍。

ナタク、君の槍は何を貫く為にあるのだ。

メドゥーサ、君の魔眼は誰を止める為にあるのか。

サテュロス、君の優しさは現実性を伴っていた筈だ。

バアル、君は不協和音を嫌っていた筈だ。

そんな憎しみを吐露している間にも此方の手勢は削がれていく。

騎空艇に仕向けていた者はナタク、サテュロス、メドゥーサ、炎の少年に削がれ、私を守ってくれている者達はバアルが狙っている。

——私は、逃げるべきか?

逃げて、どうできるのか?

ナタクのスピードに勝てるのか?メドゥーサの光線から逃げられるのか?

わから、ない。

私は詰んだのか。

それともまた半端に倒して封印を仕向けるのか。

それとも——私を殺すのか。

○○○○○○○○○○○○○○○○

目の前に降り注ぐ雷鳴は龍の飛行機能を奪い、奈落へと突き落とされていく。

だが、本命は中心への痺れ。

伝導した雷は落とすほどでは無いにしる生物の身体を痺れさせる。

そうして開いた群れの中心部には——

「今だよッ！撃って!!!」

龍の背から剥がれたシヨゴスが驚愕の視線で此方を見ていた。

「ツツツツあああああ!!!」

それは、怒り。

彼女の、万全で満遍で凝縮された憤怒。

仲間の死、コーリスの腕と耳。

かけがえの無い物を奪った敵に報いを。
掌の水球が、敵を求めて蠢く。
そして遂には激流の水圧となって。

「——トライデント・オブ……!!!」

天をも穿つ魂の水槍。

「アニマアアアアアアアア!!!」

音と空気を割る程の速度を迎えた彼女の一撃は、正しくシヨゴスの
眼球内の——コアを撃ち抜いた。

27. 全てはここから

「痛ったあああああああ!!」

ボキツボキツという生々しい音と共に放たれた一撃は雷と融合し、閃烈と共にシヨゴスのコアを貫いた。

「命中した……」

「という事は…サテユロス様!」

「うん…終わったよ!」

シヨゴスは最後までこちらを睨みながら、そして叫び声すら挙げず…だがしかしその破れた目はこの世への恨みの全てを語っていた。そう言えるほど凄絶な風貌だったのだ。

やがてその身体は醜い素体に対し恐ろしく幻想的で…綺麗な粒子になって空中を舞い、その長い機能を終えた。

「……」

サテユロスは笑いも涙も何も表さなかった。

ただ、虚しみると、これで終わったという実感のみ。コーリスにとって、シヨゴスの生き方には何か儂い物を感じたが、それだけだ。

シヨゴスは騎士の大半を殺した敵であり、そして今死んだ。

それだけが、コーリスにとってのシヨゴスである。

「…サテユロス様。ロイスの痛みを和らげてくれますか?」

「もちろん。頑張ったね、二人共」

折れた両腕の骨を直ぐに治すことはサテユロスにとっても難しい。

彼女に出来ることは、治癒力を高めて少しでも回復速度を上げる事。

「あたり、ました…?」

「ああ」

「よかつ、た」

ロイスは意識を手放した。

その様子を見たサテユロスが慌ててしまいが、コーリスが止める。
「俺の魔力を貸したとはいえ、それを水に変換しながら溜めるとなると、相応の負荷がかかる筈です。今は、無理矢理にでも寝かしておくべきでしょう」

「死んじやった訳じゃ無いよね!?!」

「無いです」

生き残った騎士は……数十人。

彼の乗っている船の人間も終盤のダメ押しで何人かが犠牲になった。

生存者は負傷者のロイスを中に運ぶ。

これでリユミエールに着くまでの処置はできるだろう。
操縦士が生きている事も大きい。

「……ごめんね」

サテユロスが、唐突に謝る。

「なぜ、謝るのです」

「私達が彼を殺さなかったか——」
傾く。

「——え」

騎空艇が、傾く。

その要因は3つ。

1つ、長い戦闘で燃料が尽きかけていた事。だが、リュミエールに着くまでの分はあった。

2つ、船を支える部分が終盤の襲撃によって軽く破損していた事。だが、致命的では無かった。

そして。

——3つ、属性攻撃が飛び交う戦場に於いて、気流が乱れた事。運悪く、乱れた気流の部分にコーリスの船があった事。

彼が、船の部屋にいなかった事。

「コー君!!」

サテュロスがコーリスを掴もうとするも、片腕の彼はバランスを取れず落ちていく。

それを、メドゥーサとナタクは見逃さなかった。

「つメドゥシアナ!踏ん張りなさい!!」

宙に浮ける巨大な蛇——メドゥシアナはその体躯を存分に使い傾いた船を下から押し上げた。

「つ……間に合え!!」

ナタクは全速力で炎を噴射し、垂直に近い角度で落ちるコーリスを追いかける。

コーリスは漠然とした顔で、静かに目を閉じた。
やがて気流に振り回され、意識も喪失し。

ふかい、ふかい霧に飲まれた彼は。
不思議な夢を、見ていた。

『コーリスは何処だ——あの祝福の子は』

『あの子に何の用？』

『■■■■、お前の息子は卓越した素質を持っている。族長の決定で儀を行う事にした』

『ツ……………まだ3歳よ。まさか…入神湯を飲ませるつもり…!?!』

『それが我々——カルム一族の光明足り得るならば、是非もない』

『……………外道が』

『…今夜、私とコーリスで島を抜ける』

『君は正気か』

『湯を飲まされた。子供を殺されるならこんな一族に従う理由はないわ』

『……………逃げられると思っているのか』

『逃げる専念すればね』

『…分かった。俺も行く』

『死ぬかもしれないよ。貴方は私より弱い』

『…俺だって人の親だ』

『見直した。それで、逃げる島はトラモント』

『聞いたことがないな…』

『……………なによ、あれ』

『おかあさん…?』

『喋っっちゃ駄……………!?!』

『貴様か。我々を吸収した空の民は』

『きゆう、しゆう…?』

『空の民は、生まれ落ちてその身体を育成するに少なくない時を使うが……貴様は、か弱き今が最も恐ろしい』

『だ、だれ…?』

『……穢わらしい無垢が。自覚も無いのか』

『こ、こないで、お母さんをかえして…!!』

『もぬけの殻だ。空の偵察用そらに遣わした雑兵であったが、文字通り空からになっている』

『ひ、やだ』

『——貴様。我々の記憶を盗ったな』

『…?』

『幽世かくりよの天敵だ。今、殺す』

『や、やめてえ!!!』

『ひっ…ぐす……』

『大丈夫かい?こんな山で一人。君の名前は…?』

『こ、』

『…(こ)?』

『コーリス……』

『コーリスや』

『何?義父さん』

『お主は、捨てられた時の記憶は無いのじゃったな?』

『……うん』

『なら、捨てられる前の記憶はどうじゃ。今思えば、聞いた事が無い』
『知らない』

『…はて。確か父は木を売りに、母はお前を捨てにトラモントに来たのだと言わなかったか?』

『それしか分からない』

『…それでは、お主はどうやって生きてきたのだ』

『……育った記憶が、ない』

『——なんじゃと?』

『コーリスは、何で騎士なりたいんだ?』

『…迷う人を、救いたいから』

「」

コーリスは、心地よい風と共に目が覚めた。

ひんやりとしていて、揺り籠の様にぼんやりと意識を擦ってくる。
そんな感触だった。

「…起きたようだな」

「あなた、は…?」

「ナタク。先程の戦いで助太刀に入った者だ」

横になっている彼に近づいた男。

コーリスはそれがスルトの近くにいた星晶獣で、落ちる自分を助け

てくれた恩人だという事に気づいた。

「助けて下さり…ありがとうございます」

「構わない。元より俺達の怠慢が許した戦いだ。本来ならば、此方の咎だ」

「…？」

「その話は後にしよう。ひとまず…サテュロス！」

直ぐに『なーあーに!』という返事が帰ってきた。

「起きたぞ」

「ほんとお!？」

此方に駆け込んでくる足音。

「コークーン!ぎゃっ!」

「怪我人に飛び付く者がいるか」

「ぶー!傷は治したもん!」

コーリスに飛付こうとしたサテュロスをナタクが足で止める。

渦中の彼はまだ状況を把握できていなかった。

「今は…？」

「まず、先に言おう。戦いは終わった」

思わず、彼は息を吐いた。

「だが、乱れた気流がこの破損した船を揺らし、運悪くお前が落ちた」
「…」

「刹那の瞬間ではあったが、間に合ったぞ」

「…感謝の言葉も、ありません」

「それで、腕を見てみる」

「？」

「失くなった方ではない。右腕だ」

言われた通り、コーリス自身の腕を顔に持ってきて、確認した。直ぐに、異変に気がついた。

「……………透けている？それに…何か、白い」

「……………それは、ある星晶獣の影響だ。お前の身体を変質させた」

「何ですって？」

「俺達はしばらくリュミエールにいる。お前の身体が落ち着いたら、説明をしよう」

気になる前置きをされたので、コーリスは微妙な顔をするが、ナタクやサテユロスの表情が余りにも悲痛だったので、突っ込めなかった。

「それで、気流は」

「バアル——雷を落とした奴が無理矢理にだが戻した。この船はリュミエールへの帰路に着いている。無事に帰れるぞ」

「他の…人達は？」

「大丈夫。炎の子は精神的に疲れたのか寝ちやっただけ、それだけ。ロイスちゃんは安静にしてる。団長さんの船は全員無事。あれ以降、誰も死んでないよ」

「…よかった」

良くは、ない。

7割程の犠牲が出たのだから、決して良い結果では無い。

「俺達は重症者の方へ行く。何かあったら呼べ」

そう言っつて、ナタク達は別の船へ移動し、それを皮切りにコーリスは一息ついた。

と思つたら、今度は少女が彼に向かって歩いてきた。
紫髪の少女、メドゥーサである。

「……………」

「……………」

「……………あんた、まだ子供じゃない」

「え？ええ、お互い…？」

「…馬鹿。アタシは星晶獣よ。あんたの40倍は生きてる」

「…そうですよね」

「……………」

ぎこちない時間。

メドゥーサの感情は哀れみの一言。その矛先が彼の腕なのか、耳なのか、それとも未知の透過なのか。

コーリスは、困りながらも一言聞きたい事があつた。

「長く生きたら、見えるものはあるのですか」

彼は500年を生きる星晶獣が、兵器には見えなかった。

恐ろしい武器や能力を用いているが、それでも動作や表情が、人間のそれと同じだったのだ。

…それはシヨゴスに対しても同じ考えだった。

「…いいわ。答えてあげる」

無愛想な印象からは真逆に、彼女はコーリスの横で座って語り始めた。

「何年生きたって、何度人間の死を見続けたって、そう簡単になれないわよ。私達は基本的な死の概念が無い…だからこそ同情は出来て

も親身になれない」

「貴女は人に寄り添って生きてきたのですか…？」

「んな訳無いでしょ。サテユロスみたいな奴の事を言うのよ」
「…」

コーリスは理解した。

サテユロスが怪我をする度に喚き立てて、生死の確認を繰り返すのも、心配症なのもあるが……そもそも人の死が分からないからだ。

どのくらいで死ぬのか。コアさえあれば修復する彼女達にとつては違う世界。知識があつても、不安になるだろう。文字通り、一撫ですれば簡単に砕け散る命なのだから。

それを経験した事があるのか、メドゥーサは言い聞かせる。

「だけどね…長く生きると必ず後悔が強くなる。どんな些細な事でも、それが過去の取り返しの付かない事であっても、生き続けている以上ずっと悔やみ続けてしまう」

それは、妙に実感の籠もった言葉だった。

「サテユロスは、アンタ以上にアンタの腕と耳を悔やんでる。未だに腑に落ちないわ。アタシ達を作った奴が何で兵器に感情を入れたのか」

話す事は話し終えたのか、メドゥーサはナタク達の元へ言っってしまった。

返答する間もなかったコーリスを巨大な蛇が慰めている。

その後、帰還したコーリス達は街の人々の献身により、円滑な治療体制を受け、無事に傷を癒やした。

遊撃隊は解散、聖騎士団の活動を休止。

以後、入団試験の緩和を計画。

このシヨゴスによる戦禍は後に『リユミエールの空乱』と名付けられ、平穏なファータ・グランデの風に一石を投じた。

死亡者数——152名（アマルティア島へ向かったコーリス小隊29名を含む）。

これを機に隣国フェードラツへと同盟を結び、騎士団の援助を受ける。

また、解体された遊撃隊員は本隊への再編成が計画された。

国王自らの説明により、遊撃隊への風当たりは弱くなった。

中でもコーリスは復帰困難となっていたが、彼の魔力性質を治療過程で研究した科学者が義手を提供する事を決意。

つかの間の平和が、訪れた。

空戦終結から一ヶ月後。

「コークーン！こつちこつちー!!」

コーリスは、自身の身体に起きた異変について、ナタクから説明を受け、森へ来ていた。

リハビリ中なのか、患者服にコートを羽織った装いで、片方の袖はゆらゆら揺れており、彼の道案内は意外にもメドゥーサだった。

「手を煩わせて申し訳ありません」

「左側に立ってるだけで何が疲れんのよ」

棘が目立つも、メドウーサの態度は明らかに気遣いを含んでいた。

「来たか」

サテユロスと共に迎えたのはナタク。

だが、もう一人の姿は見当たらない。

「バアル様は…?」

「アイツは…音探しと言っていたが、分からなくていい。俺にも訳がわからん」

どうやら、気分屋の様だ。

「では、お前の身体の事だが」

「ナタク様。その前に」

「なんだ?」

「昼時ですので、ランチにしましょう」

唐突にそう言い放つと、彼は手に持っていたランチボックスを開ける。

中には芳醇香るサンドイッチ。ふわふわのパンに、水気のあるシヤキシヤキレタス。少し多めのハム。それが食事を必要としない星晶獣達の食欲を唆った。

何故なら、どれも一級品の具材だからだ。

「わあ…!」

子供っぽいお手本の様なリアクションはサテユロス。メドウーサは息を呑み、ナタクは表情を変えず。

明らかに6人分作ってあるし。かと言って本当に食べるべきなのか。コーリスが大食いなだけじゃないのか。…6人分?メドウーサ

ナノ分もか。と、ナタクは複雑に悩んでいた。

「ねえ！これ食べていいやつ!？」

「どうぞ」

「アンタ：やけに大きい物持つてきてると思つたら：」

「メドゥーサ様もどうぞ。夜までは保つのでバアル様の分も」

「アタシはいらないわよ」

メドゥーサが断るも、隣の友人は既にかぶりついている。

目をキラキラさせながら顔を振り、如何にもご機嫌な所作を繰り返す。メドゥーサは何だかそれが微妙にムカついた。

次にサンドイツチを食べたのはメドゥシアナだった。

サテュロスの次にコーリスと仲がいい蛇。蛇の味覚に合うのかと彼女は疑問に思ったが、そもそも蛇の姿をしたメドゥーサの身体の一部の様な物なので、問題なかった。

「メドゥちゃん！これすごい！美味いよこれ！ねえ！」

「うるさいわね…」

「こんな美味しい物作れる人いるんだ！」

「俺が作りました」

「本当!?!凄いいね!!」

「サンドイツチ以外の食べ物は全く作れませんが、これだけは譲れません」

いや、サンドイツチが作れるなら色々派生するだろう、普通。とメドゥーサは突っ込みたくなかったが、そんなに気安い関係じゃないので、プライドに免じて黙った。

「ふむ、美味」

ついにはナタクも食べ始めた。

「…一口だけよ」

ナタクが食べるならいつか、という一種の諦めを孕みながら、メドゥーサも口に入れた。

感想は。

「……………悪くないわ」

何というか、お手本の様なセリフだった。

「野菜は新鮮…肉も美味しい。お前は農業でもやっているのか？」

「いえ、良い物を買ったのです」

「子供のうちはあんまり無駄遣いしちゃ駄目だよ」

「キシユウ……」

少女と蛇に注意されるコーリス。

端から見れば、星晶獣との会話は親戚を思わせる親しみがあつた。

ちなみにメドゥーサは空気に耐えられないのか何処かへ言つてしまつた。

「一応5年は働いてましたから…ルピには余裕があるのですが」

「うーん…どうも騎士団のイメージが違うなあ……最近は子供の内から戦わせられるの？」

「いえ、ほぼパトロールです。魔物や危険人物は相手にしません」

「その割には、お前もスルトも、そしてあの少女も一流に近い動きをしていたがな」

「俺達3人は特別でして…」

「ほう。なら、スルトの火力は何だ。人の子が出せる物ではないぞ」

「あれは感情が炎になるという特異体質です。魔力は一切使っていません。暴力的な感情ほど生物にとって害のある炎になると言っていました」

「…星の力も感じられなかった。突然変異というやつか」

「おそろく」

「して、お前は？俺が見る限り技術は優れるが特別な何かを感じない」

「ふむふむ。ナタク君はわからないか」

「お前には分かるのか？」

「コー君とロイスちゃんは私が見たからね。性質は分かるよ」

サテユロスは、一目でロイスの水の力とコーリスの魔力量を見抜いた。感知系の能力というよりは、魔力というものに対しての慣れ。炎と武術を合わせるナタクとは違い、魔法主体の戦い方をしているからだ。

「俺は魔力の量が現時点で常人の1.2倍程です。成長と共に上限が増えていくようです」

「え！増えてるの!？」

「軽く研究室に通いまして。そこで、量を測ったら…6年前は7倍くらいだったのです」

「…道理で。あの威力の水圧線が作れる訳だ」

あの戦闘で一定の期間を生き残れたのは、間違いなくスルトとコーリスが攻めと守りを担っていたからだ。

加えてロイスに貸すだけの魔力を彼は残していた。奇妙な話であるが、事実だ。

「後は…霧出せます」

「それは」

「人の集中から記憶まで奪う霧です」

「記憶…」

「調整すれば一部分の記憶を消すだけに留まりますが、この霧本来は記憶を奪って俺に還元する性質を持っています」

ナタクとサテュロスは、絶句に近い感情を表したものの、直ぐにそのデメリットに気がついた。

「人の身には持たんな」

脳への負荷は耐えられるものではない。

遊撃隊長は誰とも関わりを持っていなかったから、少ない情報で負担が大きくなかったが、シヨゴスの記憶を取っていたら、間違いなくコーリスは植物状態に陥っていただろう。

「だが、お前の身体は既に人ではない」

「…あの後、時々身体が透ける様になりました。肌の色は以前よりも白く、体温も低くなりました」

「……」

サテュロスはナタクの率直な言葉に心を痛めた。

だが、それ以外に表しようがないのも事実。

「これでは、死人ではないかと。思ったのです」

「…半分は当たっている」

「それは、星晶獣の能力ですか？」

「そうだ」

ナタクは一息つけて、続けた。

「星晶獣セレスト」…何を司るか俺達には分からない。巨大な騎空艇の様な形をしている。権能を役割のまま行使する…自我の薄い獣だ」

「能力は…」

「死を奪う能力……だよ」

コーリスの間にサテュロスが答えた。

「正確には、死の要素を奪うといった形かな。死んじゃった人の体の腐敗を止めて、一時的にゾンビにしたり、死ぬ直前の人の死を奪えば、限りなく死体に近いまま動く身体に出来る。人の死の要因は病、老い。死体なら腐敗だからね。そのどれかを奪えるの」

「絵面は良くないですが…生存に繋がるのでは？」
「ううん」

老いを止めれば戦士は長い戦いを乗り越えられる。
病を除けば人は幸せを享受できる。
だが、サテュロスは首を横に振った。

「セレストの本領は能力に当てられた人を使役すること」

コーリスは全てを察した。

「そして、その人達を養分に自身を強化できる」
今度は彼の予想を超えた。

「目の前で死んだ仲間がゾンビになって襲いかかる。死にそうな仲間で傷を癒やされる。これがセレストの齎した戦争。精神的にも、空の人達を苦しめたんだよ」

「う……」
「でも、瀕死か死後の人間しか能力の影響が及ばない。セレスト自体を使役する誰かも必要だった。なのに」

「……」
「コー君は私が回復した……セレストも近くにいなかった……!!なのに……!!」

瀕死のコーリスはサテュロスによつて癒やされ、落下地点にはセレストの滞在する島が無かった。

なのに、コーリスは生きながらにして死を、老いを奪われた幽霊としてその身を躪にしている。死を奪うという芸当はセレストにしかな出来ない。少なくともナタク達は見たことが無い。それが恐ろしかった。

「本来、セレストは瘴気を放ち死を奪う。回収する直前、確かにお前の身体に瘴気が残っていた」

「…瘴気？」

「灰色の、濃い霧の様な瘴気。かつて奴はそれを戦場に充満させた」

コーリスは、何か違和感を覚えた。

それは、こじつけに等しい何か。

「瘴気…霧…灰色…？」

「…コーリス？」

「ナタク…さま、セレストは今、どこに居るのですか」

彼の思う場所にさえいなければ、いなければそれだけで良い。

ナタクは、コーリスの様子を不審に思いながらも答えた。

「より一層霧が濃くなった場所。恐らくは、元々は霧の島として知られていた場所だ」

彼の最悪が的中した。

「トラ…：…モント」

「むっ？」

「トラモント…：…その霧の島の名前です。そして…」

彼は、絶望を紡いだ。

「俺の……故郷ふるさとです」

ナタクとサテュロスは、自身の心が凍りつくのを実感した。

——2章 完。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「こんな所にいたのか。メドゥーサ」

「…アンタ。音を探すなんて下らない嘘をついてまでアイツを避ける必要あった?」

「俺なりのケジメでもある。それに、避けているのはお前の方だろう」
「…わけ、わかんないのよ」

「何がだ」

「ナタクとサテュロスは気づかなかったけど……アイツ…セレストの霧を自分から吸ってた…!!」

「まさか…奴の住処とは程遠い筈だ」

「アイツの身体に瘴気が集まった…アタシは確かに、見たのよ……」

「………どういう事だ」

「アイツ、今はもう幽霊よ。でも、それを受け入れてる様にも見えた」

「それが………怖いのよ」

「…お前は彼が怖いのか」

「魔力の色だって……人間の色じゃない…」

「彼は怪物か?」

「それは…違う。でも…これからどうなるか…アタシは分からない」

「そうだな。だが、一つ言えることがある」

「……なによ」

「怪物はサンドイッチをこんなに美味しく作れない。そうだろう?」

「……バカみたい」

「彼は誇りある騎士だ。今はそれ以上でもそれ以下でもない。それを忘れるな。裏面を見ようとするのはお前の悪い癖だ」

「アイツ、アタシの事を子供って言った」

「表面も裏面も見えているじゃないか」

「アンタ…どういう意味よ……!!」

「コーリスは聡明だな、と」

「殺すツツツ!!」

3章 邂逅のフアータ・グランデ 27. ゾーイだぞい!

「覚悟はいいかい？この義手は身体の魔力系と？がるから痛いよ」

「……5カウントでお願いします」

「分かった。落ち着いたら声をかけてくれ」

「………すウ———お願いします」

「じゃあ…行くよ?」

「………はい」

「5、4」

「ゼロ!!!!!!」

「ぎゃあアアアアアアアアアア
!!!!??」

「こういうのって案外不意打ちが安心するんだよ」

「……ゆるさ、な」

「取り敢えず動かしてみなよ」

どうも、コーリスだ。

あの戦争が終わって、遊撃隊が解体された後には長い休暇が待っていた。と言つても、無償の見回りくらいはしなきゃいけないけど。

フェードラツへの援助も得て、何とか騎士団の体制は保てている訳だが、どうもあっち側の研究者が俺の身体を調べたいらしくて、セレストの件を誤魔化そうとしたが、遂には看破された。

そして、魔力容量を確認した後、フェードラツへ協力の元、義手を提供してくれる事になった。

肘下を覆う黒いガントレットの様な義手は、鎧を役割も果たす。逆に言えば、日常生活では外さなければいけない物だ。

その仕組みは、ガントレットの中の魔力受信物質と、俺の身体にある魔力系（魔力を司る神経のような物）を繋げさせるというもの。

勿論物理的に神経を繋いでいるわけじゃない。あくまでも俺の魔力と義手の機械がリンクしているだけ。つまり、魔力の放出口を増やしたのだ。自身の神経に異物をねじ込まれて繋がれた様な不快感があったが、効果はどうだろうかと動かしてみる。

「…うわ」

「指の一つ一つに至るまでに線を敷いている。そこに触覚は無くとも、腕を動かす感覚のまま動く筈だ。左手だから、慣れるための訓練をすれば戦闘もこなせる。なんなら、見回りくらいなら今から出来るぞ」

「これ：外したらまたあの痛みが…？」

「あれは拒絶反応だよ。神経を繋げるならそれに限らなかつたけど、魔力を通すなら一度適応した君の身体は苦しまない。既に君の身体自身が一部と認めているからね」

「すごい…」

「魔力は内で循環させているから放出はしていない。だが、それを動かすのに少なからず君の魔力を借りている。だから戦闘に用いれる上限は減った。君にとつては豆粒程だろうが…」

「軽さも、頑丈さも良さそうです。剛力で殴ったら壊れますか？」

「勿論。だが、君の盾を纏えばそれなりに守れるだろう」

正直、剣を両手で振るときの練習は必要だ。

感覚がない分、目でカバーしなければならぬ。

「我々もセレストについての研究が出来た。礼は必要無いよ。何よ

り、君の妹分に頼まれたからね」

「…フィラが迷惑を」

「泣きながら頭まで下げて君の腕を願った少女に対する言葉か？僕達は研究者である前に人間だよ。彼女の懇願は心を動かす意志があった」

「腕を見て…随分泣かれました」

「痛々しきは耳の方が強いけどね。ともかく、あの子は大事にするんだよ」

フィラは空戦の終結後直ぐにリュミエールに渡ってきた。

いや、確か安全確認の為に騎空挺の渡航制限がかかってたから、正確には直ぐじゃないか。

ともかく、俺が生きている事は伝令鳥の手紙で伝えていたから、来るとは思っていなかった。結果、腕と耳を見られた。

ワンワンどころかこの世の哀しみ全てを体現したかの様な表情で静かに泣かれたものだから、場所を急いで変えた。

フィラを泣かせてしまったのだ…アイツに殴られても文句は言えない、なんて思ってしまった。

「この後はどうするんだ？」

「ひとまず団長に復帰の目処が立ったと報告します。見回りから慣れなきやですね。片腕生活は不憫でしたし」

「ロイス女史よりは上等だろうね。両腕が使えないと動かせるのは口だけだ。まあいつも通りか」

な、なんという皮肉。

「…未だに入院中ですからね」

「あの戦いの決め手は彼女なのだろう？復帰後はそこその地位を約束されそうだね」

「…副団長含め大半の騎士は亡くなりましたので、穴埋めとしてはあ

り得ます。ですが、団長は副団長を二人にすると行っていました」
「二人…?」

「片方はスルトかロイスだと思えます。他はベテランの方で」
「君は?」

「自己評価を語るのは恥ずかしいので、言いません」

「副団長は指揮力の問題だ。君は兵を動かしていたじゃないか」
「義手、感謝します。この礼は必ず」

俺は逃げた。

もう夜だったし、寝たかった。あと恥ずかしい。戦いの後は街の人に死ぬほど褒められたから、もうお腹いっぱいだ。

——翌日。

「みてみてーコーリスに腕ついてる」

「辞めなさい!そういう冗談は…え!」

何時も散歩中に遭遇する親子に腕を驚かれた。

義手の定着は夜だったし、誰にも見られずに帰ったからな…。

「コーリス君…それ」

「義手を貰いました。鎧型で違和感ありません」

「動くのー?」

「ああ、動くぞ」

子供の目の前で少しだけ動かす。ガチャガチャと音が鳴るだけだが、この子にとっては面白いらしい。玩具にでも見えたのだろうか。

「ねえ、コーリス」

「どうした?」

「——よかったね!」

「……ああ!」

賢い子だ。喪失の苦しみを理解している。

「では、お二人とも。お身体に気をつけて」
「ばいばいー」

昨日団長とほんの少し話し合って、復帰して見回りに加わるのは一週間後、戦闘は俺が戦えると団長が判断してからという事になった。その期間、何をしても休暇になってしまう。

騎空挺の交通状況が以前に戻ったから、観光客の案内をしてもいいし、屋台の手伝いをしてもいい。

なんなら森で寝てもいい。サテユロス様達は何処かへ言ってしまったが、再開を誓ってくれた。良い夢も見られるだろう。

俺は安息に思いを馳せた。今の俺は安息に程遠い存在だからだ。

寿命では死ねない身体になってしまったし、セレストの養分対象だからトラモントに行けば真っ先に死ぬ。ナタク様によると、俺を吸えばセレストの力は増し、暴走を引き起こすらしい。それは、ファータ・グランデの混乱を引き起こす。俺は、故郷に手出し出来なくなった。セレストが能力を解除すれば、俺は人間に戻れるらしいが、失った老いは取り戻せないらしい。

この身体にどう付き合うか、考えておく必要が出た。

俺は答えを探している途中、無意識に街の門へと歩いてきてしまった。

——そこで、■■■に出会った。

「……………」

リユミエールの門には、蒼を基調とした鎧を身に包んだ白髪の少女が立っていた。紅い瞳に褐色の肌。一級品の装飾品を思わせる重厚な盾に、水晶の様な剣^{つるぎ}。

サテユロス様の力で構成された大剣を思わせるソレと、彼女の眼は浮世離れた――超越した存在を思わせた。

彼女は俺に気付いて、先程の子供の様に表情を明るくし、近づいてくる。

星晶獣…？

サテユロス様と似た雰囲気を感じるが、微妙に違う。超越者という言葉が似合う見た目とだけは言っておく。

彼女は口を開いた。

「探したよ。意外と早く会えたようだ。コーリス」

「…？」

知人では無い。

だが、彼女は俺の顔を見て明確に『コーリス』と言った。同名の人物と間違えた可能性はゼロ。ならば、フェードラツへの者だろうか。あの国の騎士団の鎧は統一性があるので、この少女の様なデザインは無いと思っていたが…。

「フェードラツへ王立騎士団の人ですか？」

「いや、違う」

「…リユミエール聖騎士団入団希望者ですか？」

「違う」

「……………」

騎士士にも傭兵にもこの様な人物はいなかった筈。

シヨゴスが人に化けた…：否、ありえない。ロイスが撃ち抜いて消滅した。俺の親戚か？それならばまだ分かる。髪の色は似てるし、俺

は父と母と過ごした記憶は無いからな。

「堅苦しいのは止めましょう。敬語はいらない。私と君との関わりは初めてだが、今は私を信頼してくれて構わない」

「何故俺の名前を知っている」

「ずっと、見てきたからな」

「いつから」

「君が一人になってから」

「何故」

「君が幽世の兵を倒したからだ」

かくりよ…？

聞いたこともない。何だそれは。

いや待て。この子は俺をずっと見てきたと言ったな。俺は幼少期から現在に至るまでストーカー被害にあっていたのか？プライベートルも食事から入浴、睡眠までもが見られていたと？

とんだ変態少女だ。

…そうじゃない。明らかに俺より年下な見た目なのは何故だ。やはり人外の者か…！

「一つ聞かせてくれ」

「何だ？答えられる事なら何でも答えよう」

「君は…何年生きている？」

「ふむ。空の世界で過ごした期間に当てはめるなら…今日で3ヶ月程か」

「空以外に住んでいた事があるということか？」

「目ざといな。君は」

「生まれて何年だ」

「…そうだな。大元は2000年程か」

やはり星晶獣…！

だが星晶獣は霸空戦争に於いて作られた存在であるはず。戦争は400年前……この子は更に昔から存在している事になる。

剣は持っていないが——やむを得ん！

「お前——何だ」

「拳を収めてくれ。誤解させてしまったな。私自身はここ数百年の目覚めだ。それに……君を害する気は無い」

「星晶獣か？」

「そうだが、君の知る者達とは起源は違う。私は分化した存在に過ぎないよ」

敵意は無い……だが此方が霧を出そうものなら不信感を抱かせる。それは良くない気がする。ナタク様よりも強い力を感じるからだ。

構えた拳を下ろして、アプローチを続ける。

通行人達は少しだけ此方を見ていたが、彼女を旅行者だとも思っただろうか。俺の腕をチラ見して直ぐに去っていく。二人だけの空間がここに作られているのを感じた。

「君の住む世界をこの目で見たい。案内してくれないか？」

感じる力とは反対に穏やかな雰囲気だ。

俺は彼女の善性を信じる事にした。

「おいしいご飯があると個人的に嬉しいのだが……」

「……分かった。案内しよう」

「それは楽しみだ」

「君の名前は」

「個体名か。確かに空で生きるには必要だ。うん……ジ・オーダー……いや、コス……うん。何にしようか」

「……」

「そうだ、これが良い。空の生命——」

「——ゾーイにしよう」

——1人目。

「しかしよく入る物だな」

「空の食べ物はおいしい。体を持たないと味わえない幸福だ」

ゾーイと名乗った——というかさつき考えた名前の少女は黙々と、食い意地を張らず…それでいて多量の食事を摂っているのだ。栄養よりも味を目的としているのだろうか、店員に一言一句感想を伝えているのも彼女の幸福を感じさせる。

「次は何処へ行く?」

「む…私としてはずっとここに居ても良いのだが」

「食べるだけじゃリユミエールの魅力は伝わらない。ここのお子様ランチ（大人用）は絶対一級品だが、この国はそれだけがトレードマークでは無いからな」

「では、何が有名なんだ」

「聖騎士だ」

「昔から思っていたのだが…騎士と聖騎士との違いとは何だ?」

少し定義が難しいが…。

「何方も国と民の為に存在している事に違いは無い。だが、聖騎士は救うという行動を重視しているのだと思う。守るのか、救うのか。結論は同じでも、道中は違うと思わないか?」

「守る…救う。私には少し難しい」

「そうか？」

「私は結果的に救う行為をしていたのかもしれないが、本来の役割は調停だ」

「調停…中立という事か」

「そうだ。世界の危険を無くしたうえで空の生命に委ねる。決して過度な肩入れはしない」

「先程から言葉の裏を突く様で悪いが…ゾーイが空に顕現している時点で世界に危険性があるという事にならないか？」

「危険は過ぎ去ったんだよ。少し前にね」

「なに？」

「星晶獣シヨゴスによる蜂起。あれは世界に及ぼす要因としては微弱すぎる程に粗雑な物だったが、限り無く可能性の低い未来では、空の崩壊を招いていた」

…………シヨゴス。

アイツが何をしたかったかはどうでも良い。腕と耳の恨みもあるが、それも置いておく。だが、あのまま放置しておけば…そこまで進むのか。

「私は、どんなに微小でも空の危機の可能性が生まれた瞬間、顕現する。事後であってもだ。だが、君に会いに来たのは別の理由だ」

「結論から言うとう？」

「君を鍛える」

「…ごめん。やっぱり最初から説明してくれ」

「幽世という者達が地の底に存在している。彼等は空の世界とは別次元の力を扱うのだが、その中でも力の弱い偵察が空に度々訪れる」

「地の底…まさか、空の下には大地があるのか？」

「元より、そこを世界と呼ぶべきだったのだが…一先ず置いておこう。その偵察を君が倒した」

「…どんな奴だ」

「残念だが、君の失われた記憶での事だ。言っても記憶に無いと思う」

「嘘だ。記憶が無いのは3歳より前だ…」
「少なくとも、私が見た君は幼子だったよ」

俺が剣を振るい始めたのはトラモントで義父が死んでからだ。その前までは俺に戦う力は無い。

……いや、まさか。霧を――

「正解だ。霧を使って記憶の全てを奪った君は、その情報に脳が耐えきれなくて自身の記憶ごと飛ばした。偶然残ったのは恐らく君の母と父の生活の一部だろう。私が見ていなかった時の…」

「なら――父と母が何処へ行ったか、知っているか」

「知っている」

「俺を捨てたのか？」

「断じて、違う」

「…」

確かにある。暗闇の森の中、母が料理を作って父が木を斬っていた記憶。：トラモントの景色と似ているが、それは俺達が元々住んでいた場所の記憶という事か。

バツサリ記憶が無いから、俺を捨てたのかと思った。

ゾーイを信じるのなら、それは事実では無かったという事。受け入れられない程に急な話だが、依然として父と母は消えた。その謎は。

「君に全てを伝える事も出来るが…」

「…いい。それよりも俺を鍛えるとは、どういう事だ」

それを知るには、まだ覚悟が足りない。

俺はまだ自身の存在に疑いを隠せないからだ。

「幽世の力には抗えない摂理がある。ただ、君の力は彼等に相性が良

い。その性質は唯一無二だからな」

「霧が…か？」

「正確に言えば、君の能力は霧では無いよ」

なんだって？

「君の力の本来の形は『吸収』。何かを吸って自身の力に変える。その性質が何らかの要因で霧の形を取っているに過ぎない」

「…そんな筈は」

「霧に魔力を込めれば込める程奪う力が強くなり、最終的に君に還元される。意識から記憶へ。更に、大気中に満ちる元素でさえも取り込んでいる」

「どういう事だ」

「君が何故人外すらも超越する魔力量を持っているのか。それは大気に溢れる魔力を吸い上げて自身の糧としているからだ。本来ならば人の上限がある筈だが…」

ゾーイは悩む素振りを見せて、最終的に言わない事に決めたのか、言い淀んだ。
情報が完結しない。

つまり、俺の体質は全て吸収の副産物と言えるものだったのか？

俺はただの人間な筈だ。

だが…ゾーイの話を聞けば…：…化け物じゃないか。人の記憶を食らう生物なぞ、自然の摂理に反している。

まるで無意識に吸収を求めているかの様な――

「…待て」

「なんだ？」

「ナタク様は…セレストが瘴気を以て死を奪うと言っていた」

「そうだ」

「本来セレストは眼前の敵に対して、更に命令を下す者がいなければ

能力を發揮しないとも……」

「合っている」

「——俺は自分から人間を辞めたのか」

28. 一人去るとき

ゾーイが十人前を追加で注文し、それを食べ終えて店を出た二人は歩きながら語っていた。

「私が言うのも何だが、人が人たる所以は心にあると思う。だから、君は例え幽霊になったとしても何も変わらない」

「…」

「むう…慰めようとも触れない。自己を認めないと透けてしまうのか」

均衡と調停の使徒、ゾーイはコーリスの肩に手をかけたが、その手は空を切った。

幽霊というのは生きた屍とは違う。存在はしつとも実体は希薄。その身は自己認識と共に決まる。

そこでコーリスは。

「」

精神統一を図った。

アンチ情緒不安定と言い換えてもいい程感情のリセットが早い彼だが、ゾーイから聞かされた隠^ネされた^ダ事実^レの嵐には心底衝撃を受けたのだ。

情報のロード中。そして彼は受け入れた――

「情報の整理をしよう」

「ふむ。案外大丈夫なのか？」

「俺は何かしらの理由でトラモントに来ていて、そこでカクリヨって奴と出会って少なくとも母さんは行方不明。カクリヨの記憶を吸い尽くしてショックで記憶喪失。俺の霧は吸収の能力が霧の概念と混

ぎったもの。セレストの影響は俺が無意識に吸い込んだ結果。俺は幽霊。セレストの能力が解除されなければ老けない。体温低い。透ける。ほんの少し白い」

「そうだ」

「……俺の人生なんなの」

「ああ！また透けた……」

——やっぱりちよつと受け入れられなかった。

「耳と腕無くなってまだ追い打ちか……疲れる」

「そ、そのうち良い事があるさ」

「それで……俺を鍛えてカクリヨキラーにするのか？」

「君の同意が得られればな。……あと、これは非常に言いにくい事なのだが……」

「む」

とても。とても言葉を選んでゾーイは口を開く。人間社会に疎い彼女は、言葉の知識はあれども意味が詳細に相手に伝わるコミュニケーションが苦手だった。

なるべくコーリスが不快にならない様に、考えたのだ。

「……君の、その……寿命が無制限だと……好都合で」

「……そうか」

「わ、私は申し訳ないと思ったが……がしかし、コスモス意思が言った以上……」

さりげなく上司に責任転嫁。

コスモスというのは、ゾーイ達使徒の大源たる存在である。

コーリスはぶつちやけほんの少しムカついた。

「騎士の仕事がある。悪いが直ぐに付いていく事はできない」
「ということは……協力はしてくれるのか!？」

「ゾーイの強さは分からないが、俺は強くならなければならない。鍛えてくれるなら是非もない。それに…カクリヨは危険な存在なのだろう」

「ああ。君は能力を使いこなせれば吸収の過程で自らへの還元を打ち止められるだろう。実質、篡奪という形になればノーリスクでの行使が出来る筈」

「…後は無駄に多い魔力量の使い道が欲しいのだが」

「ん？簡単じゃないか」

「え」

魔力を攻撃に使用する場合、自らの魔力を属性に変換して放出しなければならぬ。属性は才能と遺伝に左右され、練習すれば炎や水を出せるという事はない。

コーリスは霧。それ以外は無い。あくまで彼の作る盾と壁は魔力を固めて形にするもの。物理的な変化と言える。だから、盾を無限に作るという戦争状況以外では余ってしまうのだ。

だが、ゾーイは既に彼の使用方法が見えている。

「勢いさえあれば、そのまま出してしまえ」

「え？」

「魔力をそのまま出すんだよ」

「うーんと…意味あるか？」

「魔力を単純なエネルギーでもある。それを奔流に見立てて放出するんだ。そうだな…君達の言葉で分かりやすく言うところ——」

「と？」

「——ビームだ」

「ビーム」

「極太で光るレーザーだ」

「極太」

「私もよくやる」

「よくやる」

「ガンマ・レイと呼んでいるのだが」
「ガンマ・レイ」

言っていることが分からなそうに分かってしまう内容で、啞然としたコーリスは言葉を輪唱するしか出来なかった。

「…それをやろうとした人間は今までいなかったのか？」

「この様な技は光の魔法という印象があるからな。魔力量の力押しを戦闘に組み込む者はいなかった」

「…」

「しつこい様だが私は君を見てきた。君の趣味と合っているんじゃないか」

「しゅ、趣味？」

「隠さなくてもいい。スルトの炎、ロイスの水圧線。ルクスの光剣。ああいう大技に憧れているんだろう。君の読んでいる漫画にも——」

「あー!!!」

黒歴史を晒された子供の様に、コーリスは辱められていた。

「…話を戻す。君が騎士の仕事をやり続けても構わない。たまに手伝ってもらえれば…いや、私が王に直接かけ合えば事情の把握も進む…か」

「…信じてもらえるか？」

「私達は存在を隠している。アプローチは初めてだが…むう、理想を言えば君が騎空士になってくれたら助かる。人助けならばそれでも出来るはずだ」

「…理ある」

コーリスは迷った人を助ける過程として騎士に憧れた。

騎士そのものを崇拜している訳ではないが、トラモントを救ったリュミエールの騎士達を思えばその姿でいたいと思うのだ。

「効率的に君を鍛えつつ、人助けもするとすると……私が騎士になるか」

「いいのか!？」

「寧ろ私がそれを聞きたい」

「リユミエールは今人手不足で：シヨゴスみたいな奴に襲われたら今度こそ滅びる。ゾーイが協力してくれるならありがたい話なんだ」

「だが、私には学が無い。聖騎士になるにはどうしたらいいんだ？」

「意志、最低限の身体能力・戦闘知識があればいい」

「：君の試験の時みたいにか？」

「多分。字は書けるか？」

「うん」

「なら大丈夫だ。だが、入団試験の時に俺に会っても絶対に話しかけるなよ。あくまでも試験官と向き合うんだ」

「分かった」

「日程だけ確認するから、今日はこれで」

「ああ」

ゾーイは不安に思っている。

人間として勉学に励んだ事もないし、試験という物の経験がないからだ。コーリスが受けた入団試験を見ていた事もあるが、試験を受ける彼を見ていただけであって、ペーパーテストの紙面を見ていたわけでは無かった。

「あ、聞き忘れていた。ゾーイは何処に住んでいるんだ？」

「寝る必要も無いからな。常に歩いている」

「：騎士になれたとしてもそれでは怪しまれるな。俺の寮に掛け合ってみる」

「ありがとう」

「ではな」

会話が終わってコーリスは城へ向かう。

ゾーイはその背中を慈しみの目で見守った。だが、直ぐにその視線は鋭い物へ変化した。

（自身の権能を行使したいという欲求は存在するが…コーリスの無意識の吸収はそれに類するのか。もし、彼の中で無差別に記憶を吸ってしまったら…という欲望が生まれてしまうなら…）

彼女は齒を食いしばって、拳を握りしめた。

（その時はコーリスを殺さなくてはならない）

その目は、空へ向いていた。

（そうならない為にも、力の使い方を教えなくては）

彼女は失敗の許されない大仕事を前にした人間の様に、堅い決意を滾らせた。

（あの子はまだ、迷っているからな）

コスモス^{大源}の目的は、彼の力を借りての幽世の殲滅。

ゾーイの目的は、彼が力に飲まれないように導く事。

その過程において、二つの目的に矛盾は無かった。

「団長、入団試験の目処は立っていますか」

「コーリスか。試験は2週間後。だが、そこそこ数になるぞ」

「志願者が多いのですか？」

「現在人手不足のリユミエールだが、幸運な事にあの戦いで敵を退けた事で有名になってな。騎士に憧れる者が増えたらしい」

「フェードラツへや星晶獣の助けもあったというのに…」

「新聞の記事なんてそんなもんだよ。それより、今思いついた事なんだが」

団長室に來たコーリスを歓迎したルクスは、一つの提案を思いついた。

「お前が義手に慣れて討伐任務に就けるまでは時間がかかる。ちょうど良い機会だ。試験官をやってみないか？」

「試験官…ですか」

「お前は色眼鏡で判断を下す人間じゃないだろう？」

「具体的には何を？」

「簡単だ。人格の判断。それだけで構わない」

「色々な試験があつた筈では？」

コーリスが入団する時には終わりの無い体力テスト、制限された状況での判断力、騎士としての心持ちの表明等、戦う者としての最低限の力量を確かめられた。

だが、ルクスが言うには人格だけ気をつければ良いとの事だ。試験の形が変わつたのかもしれない、とコーリスは感じた。

ゾーイを騎士にするには試験官という立場の方が良いと思つた彼は、その提案を拒否しなかつたものの、何故そこまで簡略化された試験を実地するのか気になった。

「聖王様の指針でな。実力よりも人格の重視、そして過剰な自己犠牲を強いる在り方の撤廃を重視したんだ」

「では、訓練の時間が増えるのですね」

「ああ。何なら、新人をお前が鍛えてもいい」

「教えるのは不得手ですが…検討します」

「ああ。で、試験官にもう一人。ロイスだ」

ロイスはあの戦争の後、サテュロスの治癒効果もあつてか骨折の回復が順調に進んでいる。後一週間でリハビリ期間へ入る見込みだ。

「ロイスには既に伝えた。くれぐれも喧嘩はするなよ」

「はい」

返事だけは真つ直ぐなコーリスである。

きつと口喧嘩をするだろう。

「そうだ。要望はあるかコーリス？」

「いえ」

「隊員達の要望を聞くようにと聖王様が気を使っているな」

「俺はたまにガロンゾに行ければそれで良いです」

「フィラちゃんか」

「：何故貴方達は皆フィラに詳しいんですか」

「騎士団に差し入れをくれたからな」

「それは分かりますが：喜び過ぎでは？」

「お前の同期からはアイドル的な扱いを受けていたぞ」

「は？」

「ああこれ言わないほうが良かったな」

コーリス、殺意の波動。フィラに色目を使っている者はフィラ自身が認めた男のみである。

剣を早い内に新調しておく事を決めたコーリスであった。

試験当日

コーリスとロイスは鎧こそ身につけていないものの、騎士団の制服を着て、長机に座っている。ちゃっかり剣も後ろの壁に立て掛けているが、これは保険だ。

「本当に面接形式だけなんだな…」

「驚きましたね。明らかにヤバい人を弾けばいいのでしょうか」

「リストは：あつたあつた」

（よし：ちゃんとゾーイも申し込んだようだな。寮でやり方教えといてよかった）

ゾーイはコーリスとスルトが世話になっている寮に入った。手続きは彼女自身でこなした事にコーリスは疑問を抱いたが、彼女は心外といった表情を浮かべていた。

スルトは微妙にゾーイの存在に違和感を覚えたが、外の世界を余り知らないので誤魔化しが効いた。今では元見習い騎空士という肩書になっっている。

「そういえばコーリスさん呪いはどうですか？」

「駄目そう」

「周りだけ年取るのって嫌じゃないですか？」

「まあ…嫌だ」

セレストによる幽霊化は既にリュミエール国民には周知されている。隠し通せる物では無かったからだ。白い肌と透化の要素は住民に疑念を抱かせるには充分だった。

それでも、あの戦線にて”戦い”を成立させたのは彼。誇りに思いこそすれ排他などする筈もなかった。

リュミエールにとって、コーリスは一人の英雄である。

「お前らが引退したら、俺も大人しくするかな」

「介護してくださいよ。ボケたら困りますから」

「過剰な介護こそが人をボケさせる事をお前に教える」

「いやほんと…なるべく老けてから引退したいんですが」

「何でだ」

「若いうちに騎士やめちゃったら結婚迫られるんですよ」

「貴族の暮らしは分からね」

「ボーダーラインはアラサーです。多分32くらいで諦めてくれるかと」

「聞いてない」

何が悲しくて生き遅れを肯定しなければならぬのか。

「そろそろか。…ノックは2回。それも見なくちゃいけないのか？」

「まあ当たり前前の礼儀ですからね」

面接形式は2対1。

質問に答える形で騎士の理念を語る。アドリブで問い詰めても問題ないと二人はルクスから聞いている。

すぐさま、ノックの音が2回。

「失礼します！」

ガチャリ、とドアが開いた。

ヒューマンの少年。年は15程だろうか。実直な雰囲気を感じる。

「おかけください。試験官のコーリス・オーロリアです」

「同じく試験官、ロイス・モラクレルです！」

「グリムです。よろしくお願ひします！」

グリムと名乗った少年は礼をしてから椅子に座った。

マニユアル通りの展開と言える。

「では、グリムさん。何故リュミエール聖騎士団に入りたいと思いましたが？」

（ロイス…いきなり本題か。出身地等を聞いても良かったんだが…あ、書いてある。アウギユステか）

「は、はい！騎士として人を救う姿に憧れたからです！」

「騎士団はフェードラツへもあります。何故リュミエールを選んだのですか？…あ、いえ！特に理由が無くても落とさないので大丈夫ですよー！」

（それ言ったら駄目なやつ…）

「…以前の大乱でリュミエールの騎士達は打撃を受けながらも国を守り通したと聞きました。僕は、その姿に憧れたんです」

「…分かりました」

（は、はえーすごい立派。騎士が好きただけで入った私とは大違い…今でこそきちん意識ありますけど）

面接官として不甲斐ないロイスに変わり、コーリスがアプローチをかける。

「アウギユステには我々騎士の様な存在はいないのですか？」

「いえ…駐屯している騎空士がいます」

「では、騎士とその人達の違いを貴方なりに説明してみてください」
(コーリスさん少し厳しくしないでですか？答えづらそうです)

視線での抗議は受け流され、少し不機嫌になるロイス。口裏合わせ
すらない大雑把さは、彼女に後悔を与えた。

「…彼等は、アウギユステを故郷としている人間です。騎空士として
多くの島を渡りながら同志を集め、最後には戻ってきます。ですが、
あくまで彼等がそうしたいと思っっているからこそその形は保たれて
いるのであつて、国を守る事が前提の騎士とは違うものだと思います
…」

「分かりました。説明ありがとうございます」

(思ったよりちゃんと言えるんだな…俺はこんなにハキハキ出来な
かったのに)

その後も何方かという試験官の知識欲を満たすためだけの質問
が続き、キリのいいところでグリムを帰らせた。

何となく居心地の悪い雰囲気を訪れ、二人は口を開く。

「…グリム通す?」

「これで通さなかったら私達は質問して遊んでただけのクズになりま
すよ…」

「本当にマトモな奴だけ判断すればいいのか…?」

「人を守りたいという気持ちは騎士の始点です。その心さえあれば、
明確な騎士としての定義を入団前に求める事はしなくてもいいで
しょう」

実際、彼らの裁量だけで入団が決まる訳ではない。

ルクスは二人がどの様にして人間を見るのかを知りたかっただけ
で、本当の試験とも言えるべきは入団後の研修だ。騎士団という組織
に馴染めない人格の者は排斥される。

2人、3人と続けて合格を通し続けるコーリスとロイス。

そして、36人中最後の2人になってようやくゾーイの番が来た。

(頼むぞゾーイ…今の俺達は凄く緩くて優しいから当たり障りの無い

答えを言い続ける……！)

コーリスは祈った。

天然気質かつ空の世界にそこまで馴染めていない彼女が、どれだけの社交性を発揮できるか。

短い間隔でノックが響き、ドアが開く。

「失礼する……む」

ゾーイが思わずコーリスの方を見た。

彼は目を逸らしたので、彼女は彼の意を汲んで直ぐに前を向いた。ロイスは少し違和感を覚えたが、コーリスの耳でも見たのだろうと解釈した。

「ゾーイだ。よろしく頼む」

「……試験官のコーリス・オーロリアです」

「……？知っているよ」

「え」

今度は誤魔化しきれず、ロイスは直ぐにコーリスに脳内通信を試みた。士官学校時代から続く、魔力同調による会話である。

コーリスは焦ったが、寧ろ一部の事実を公表する事でこの場を乗り切ろうとした。

『コーリスさん……この方と知り合いで？』

『……最近寮に入った子だ。試験内容は明かしていない。無論俺が試験官だという事も。先程はその反応だろう』

『……見るからに天然気質ですけど。剣持ってるし』

『問題ない』

ロイスにとっては、ゾーイの容姿はそこまで驚きに値しなかった。明らかに上物な剣と盾を持っているものの、民族等の容姿の違いだとして彼女への疑念を振り払った。

貴族として、歴史の教育を受けた彼女だからこそその理解だろう。直感タイプのコーリスとスルトとは違った。だからだろうか、珍しく先に質問しようとした。

「同じく試験官のロイス・モラクレルです」

「ロイス。君の事も知っている」

「えなんで？」

コーリスは諦めた。駄目だった。誤魔化すという事が出来ない女だった。せめてもの抗議として相方に気づかれないようゾーイに激烈な視線を送ったが、彼女は『どうした？目が痒いのか？』と、母性溢れる心配をしただけで、何も伝わらなかった。

ゾーイはトラモントで拾われた以降のコーリスの生活を全て見てきている。当然スルトやロイス、騎士団の人間の事も把握していたのだ。当の本人達にとっては不気味極まりない事実であるが。

そして、ゾーイは練習してきたのだ。騎士団に入ってコーリスの協力を得る為に。

コーリスがいない間はハキハキと喋れるように毎日発声練習をしていたし、姿勢も鏡を見て整えた。清潔感にも気を使い、出来る限りアホ毛を目立たなくした。努力の方向性はともかく、決して『コーリスが通してくれるだろう』といった楽観的な邪念は持っていない。だから天然なのだ。

「あの戦いで、よくぞ生き抜いた」

「……貴女、何を知って——」

ここで、ロイスは彼女への認識を改め、警戒対象に入った。だが。

「——ゾーイさん。ここは私達が貴女に問う場面です。どの様にして彼女を知り得たのかは追求しませんが、一先ず私達の話を聞いていたいただきたい」

「あ、ああ。心得た」

青筋を浮かべたコーリスが拳を震わせながら会話を断ち切った。流石のゾーイも彼の言葉で自身のミスを理解したので、余計な事を言うまいと自戒した。

疑念が晴れないまま、ロイスが聞く。

「出身地はどこですか？」

「…メフォラシユだ」

「王都メフォラシユ…ゴーレム技術が発展した国ですね」

「そうだ」

「では、何故騎士になりたいと思つたのですか？」

「…私は今日に至るまで戦い続けて来たが、それは使命の為であつて攻める為でも、守る為でも無かつた。だが、その使命の為には私一人の力では不十分。私は騎士の共存する形態を見習いたいと思つた。だから聖騎士になりたいんだ」

「…」

ロイスにとっては、彼女の背景は分からない。この答弁において彼女は出身地以外嘘をついていないし、誠実であつた為、ロイスにもその覚悟だけは通じた。だが、肝心の使命が何なのかを深堀されればどう答えるのかは分からない。

「その剣は…？」

「癖というべきか…持つてきてしまった」

「…：門番のミスですね。気にしなくて結構です」

「ありがとう」

実際は剣と盾自体もゾーイという存在の要素なので、隠す事ができ、会場にもその様に訪れたが、緊張からか姿を見せてしまった。

その事に気付いたゾーイは上手くはぐらかした。

「ところで…リュミエール聖騎士団のモットーは知っていますか？」

「…：” 清く、正しく、高潔に”」

「はい。そうです。もし騎士団に入れたら、常に意識しておくの良いですよ。自分の立場を再認識できますから」

「分かつた」

「では、気をつけてお帰りください」

「…：もう終わりなのか？」

「おや、もっと話したいですか？」

正直、ゾーイはもう頭を精一杯使つて気が気でなかつた。

「…いや、お言葉に甘えさせてもらおう」

調停の使徒、爆速の帰宅であつた。

「…ゾーイ通す？」

「何ですか、通して困る事でも？」

「違う。ただ、他の人より優しく対応していたなと」

「彼女は自分が天然という事に気づいていたでしょう。ですが、姿勢、声、目線から努力した事は伝わりました。その時点で文句無しですよ。それに…」

「それに？」

「彼女、本当はリュミエールに興味ないと思います。それでも何らかの目的の為に目指した。モットーもちゃんと覚えている。入ろうとして今日に至った事は明白です。私の事を知っているのは…まあ新聞にも乗りましたから多少は…」

「…」
コーリスは自分が焦っていた事が馬鹿らしくなって、気を引き締める。素性は一切知り得なくとも、行動理念を完璧に見抜いたロイスに驚きながら、彼は最後の人間の項目に目を向けた。

——同日、リュミエール士官学校第一寮。

「ただいま」

「おかえりコーリス。どうだったんだい、期待の新人はいたかい？」

「みんな真面目ですね。バトルジャンキーがいたので一人だけ落としてました」

「おやまあ…」

寮のおばちゃん、グルシが帰宅したコーリスの話聞いた。

「ゾーイちゃん、ソワソワしてるよ。緊張したんだねえ」

「通りましたよ」

「それは良かった。報告してやったらどうだい」

「一応結果来るまで伝えません。そういう決まりですから」
任務に出ているのでスルトは不在。ゾーイは部屋で自己反省を行っている。結果的に二人だけの暖かい空間が出来上がった。

コーリスは義手を外し、一息ついて外を見た。グルシはその姿を見て少し考えてから小声で語りかけた。

「——あの子、普通の子じゃないね」

「…分かるのですか？」

「何か秘めてる物がある。というより、隠す必要をそこまで感じていないようだね」

「グルシさんからは、どう見えますか」

「子供、だねえ」

グルシはゾーイを始めて視認した時、星を連想した。次に、子供。そして、孤独。

ゾーイは自らの行動を誰にも理解されず、理解されようとせず、理解される必要が無かった。その立ち居振る舞いが、良くも悪くも孤独を想像させるのだと言う。

「あの子は堂々としてるけど…コーリス。あんたは隠してるね？」

「…はい」

「うん。遊撃隊の時より前向きな目つきだ。後ろめたさによる隠し事じゃないようだね。なら、安心だ」

「聞かないのですか」

「私は老い先短いババアだ。死ぬときにこつそり教えてくれればいいさね！」

コーリスは少なくとも自分が分かりやすい人間である事は自覚している。そして、その隠し事が暴かれたとしても周囲の人間は変わらない。

何故なら、コーリスは信用されているからだ。

そして、ゾーイを善人と見ているからだ。

「おばちゃんただいま〜！」

「スルトが帰ってきた様だね。ゾーイちゃんも沢山食べるし…コーリ

ス、手伝っておくれ」

「はい」

コーリスは、いつかこの国を去らなければいけない事を嫌にも理解して、その暖かみに身を委ねた。

29. 友情努力勝利ビーム!!!

「——ふっ！やア!!」

寮の庭。草木が覆い茂る自然、緑。木々はゆらゆらと踊り、小鳥達は声を揃えて囀り飛ぶ。

…なんて事は無く、そこに居るのはひたすら汗を振り撒きながら木剣を振るう青年。

そんな彼の努力を、明日騎士団の研修を迎えるゾーイは笑顔で見ていた。

ガチャガチャと音が鳴る義手に苦戦しながらも、療養中に失った筋力と体幹を戻す為、コーリスは奮闘している。

「いい声だ……やはり人の努力は素晴らしい」

お供の竜2匹と戯れながら、彼女はコーリスの挙動をじっと見ている。そしてその視線を気にすることなく、コーリスは剣を振り続ける。

(やはり握り直しにズレが生じる……目でいちいち追ってては義手の動きが遅くなる……いつその事位置を覚えて慣れておくか)

触覚のない新たな左手は、剣を握っている感覚が存在しない為、目で確認しないと剣を構え直す際に空振りが多発してしまう。だが、その確認作業は戦闘での行動に遅延が発生し、隙となって相手の有利を誘発する。

そこで彼は、構え毎の左手の位置を把握し、毎回同じ位置に左手を置いておくことで動きを最適化しようと考えた。

「これならいける——ハアツ!!」

両手で構え振り下ろす。

彼の剛力と合わさった剣圧は草木を軽く揺らし、静寂と共に動きを止めた。

歯車が噛み合った様に、コーリスの剣技は整った。

そして、その事を確認したゾーイは声高らかに宣言する。

「よし。剣を抜いてくれコーリス！」

「…金属のをか？」

「ああ——次は私が相手になろう。君の盾を使っても構わない」
「分かった。宜しく」

コーリスが抜剣した後、ゾーイは左手に盾、右手に剣を出現させ仁王立ちの体系を取る。これが自然体からなる彼女の構えだ。

彼は感じた。”やりづらい”と。

コーリスの剣術は待ち。相手の攻撃を防ぎ切りカウンターを狙うもの。だが、ゾーイは自ら攻める気は無いのか、こちらを見据えるのみ。自動的にコーリスが攻めねばならない。

思えばゾーイの力の一端を見るのは、彼にとって初めての事だった。

「——！」

「む…中々に重い」

剛力による急接近に横薙ぎ。

想定よりも素早く感じたゾーイは剣での受けを諦め、盾で防いだ。だが、防がれた現状に反して、コーリスは彼女に対し意外な考えを持っていった。

(反応は鈍い…？もしかやゾーイは単純な剣での応酬は不得手か)

彼が知る中で最も武力に秀でているナタクよりも高位の実力を持つ彼女が、反応速度に遅れを取る事が不可解であり、彼は一つの考えが過る。

それは、ゾーイが魔法剣士に近い戦闘スタイルの可能性があるという事。先日語られた、彼女がよく使うと言った”ガンマ・レイ”と呼ばれる光線、そして戦闘を見守る2匹の竜。恐らくは、本来の戦闘スタイルはその竜達をサポートに回しながら圧倒的な魔力の奔流で以て敵を駆逐するものだろうと、コーリスは考察した。

それならば剣だけの今が人間の範囲内の反応である事に違和感が無い。

「ならば——」

「ふむ」

コーリスは左手でゾーイの手首を掴み取り、右足で彼女の軸をず

らそうと払った。

だがしかし足が払われる間際、彼女は——浮いた。

「なっ!？」

「何を驚く」

彼女の足は地を踏みしめておらず、軽く浮遊している。

不発の足払いは大振りの隙となつてコーリスの危険を作る。直ぐに軸の足に対し逆に力を入れ彼女の剣の範囲から逃れようとするが、意趣返しと言ふべきか、ゾーイがコーリスの剣先に盾を引つ掛け、そのまま身体を捻じり回転切りを繰り出した。

間一髪義手から盾を形成して斬撃を防いだが、彼は改めてゾーイが常識の埒外の存在であると理解した。

「よく防いだ。一応刃は収めたが、そのままでも良かったようだ」

「……フウ」

「まだまだ行くぞー!」

ゾーイは浮いたまま剣を振るう。飛んでいる訳では無い。だがしかし空に留まつた状態で水平移動が可能であり、足先の重心を無視できる程の自由な動きを見せた。

(突き、そのまま払い……盾突き、縦——今!!)

「ハア!」

ゾーイが繰り出した一連の自然な流れはリユミエールの剣術にも精通する動作。剣の動きだけ見れば、ロイスの攻撃と似ている。突きを躲されたなら払い、盾突きで視界の塞ぎも兼ねてその後になら上から両断。コーリスはその後の隙を狙う為にスレスレで横に回避し、その回避動作と共に剣を振るう。

しかし。

「甘い!!」

ゾーイは振り下ろした剣を逆手に持ち、下から上へ身体ごと回転させる事でコーリスの剣を弾いた。人間の拳動を超えた身技であったが、それを予期せぬコーリスでは無い。

「本命はこっちイ……!!」

弾かれた右側の反動を利用し振るわれた左手に多重の盾を構成、纏

わせる。その腕は大質量の鉄槌となってゾーイの身体を地面に押し付けた。

「とどめ」

盾で拳を防いだものの身動きが取れないゾーイに対して右手の剣が襲いかかる。

だが、彼女は今度は剣ですら防がず、逆に地面に剣を突き刺した。

「…まさかー」

コーリスは思わず飛びのいた。

すると、地面から蒼色の光が迸り、ほとぼし 一帯を軽く焦がした。

出力は抑えられているものの、大地に魔力を通すという力技はコーリスにとって目新しい物だった。

「常識では測れん…」

「そうか？初見で見切っているじゃないか。だから攻め手を変えてみるよ」

「…」

全ての攻撃を何とか回避したコーリスを褒め称えつつも、未だ戦いを終えるつもりは無い様だ。ゾーイは剣を盾に収納し、それを構えた。やがて、光と共に剣の柄と盾に収納された刀身が巨大化していく。

それは彼女の背丈に近い大きさの大剣である。

「私の盾は失くなったが、君の盾も使えなくしてやろう」

「……………来い」

「了解した」

今度はゾーイが先に仕掛ける。

コーリスは自ら構成する盾で耐えられる威力かどうかは分からな
いが、彼女の発言から、受けるべきでないかと判断した。

（だが、それは恐らく高密度の魔力媒体…本来ならばゾーイの言う
ビームの出力を上げるための巨大化だろう。重さを扱うには踏み込
みが必要だ。宙に浮いている今、その剣に振り回されるのは…）

そう。ゾーイは試したのだ。

恐ろしい破壊力を持つ武器を急に用意しても、彼が正しく反応出来るかを。だからこそ、彼女は騙した。

彼女はその大剣を振りかぶる直前に——伸ばしたのだ。

「な——槍かッ!!」

「盾を消したね、コーリス」

（しまった…!）

大剣を変化させ三又の槍へ。

急速に突きへと移行した動作の前には彼も後退るしか無い。

「悪手だ」

「くっ!」

その槍は斬る事にも秀でており、後ろに逃げただけでは薙がれて完封されてしまう。

そこでコーリスは地面に剣を突き刺し固定する事で槍の横薙ぎを止めた。そこからはスピード勝負だ。彼は武器を捨てた状態でゾーイの懐へ駆け抜け、左脇で槍の持ち手を捕まえて彼女の動きを止める。

槍から手を離せばゾーイの勝ちは確定したが、彼女はコーリスの技を見る為に敢えて受け入れた。これは勝負ではない。コーリスの戦闘への慣れの一助だからだ。

そのまま右手でゾーイの腹へ剛力の一撃を狙う体制で寸止めし、この鍛錬は終了した。

一息ついて、座り込んだコーリスがタオルで汗を拭った。

「初見殺しが過ぎる」

「よく反応したよ。次からはこの子達も参加させよう」

「勘弁してくれ…!」

快活に吠える2頭の竜を腕に乗せながらゾーイは彼の手を掴んで立ち上がらせた。

「君は基本的に左手を盾を作る為に使っているから初見への対応が出来ている。この調子で行けばルクスの許しも得られるだろう。頑張ったな」

「…ありがとう」

「ふふ、どうしたしましてだな」

傍から見れば、姉と弟であった。

自分よりも背の伸びた弟を、昔と変わらず褒めるような光景を想起させる、そんな暖かい暇だった。

ゾーイはとても気持ちの良い笑顔で口を開いた。

だが――

「じゃあ、次だ」

「…つぎ？」

「ああ。待望の――」

「ま、まさか」

「――ビームだ」

ビームである。

「ほ、本当にやるのか…?」

「ああ」

「これで、ビームが出るんだな…!」

「そうとも」

「本当に本当だな!」

「君には嘘をつかないよ」

剣を置き、コーリスは義手でガツチリ右手を掴んで空へ向ける。魔力を滾らせた事により彼の傷が青黒く発光し始めたところで…そのまま口を大きく開き――

「うおおおおおおお!!!」

彼は手からドス黒――否、ドス青いと言える光を放った。

だが、それはビームとは程遠い煙の様な物だった。直ぐにゾーイはそれを止めさせた。

「駄目だ！速度と凝縮が足りない！あれではガスに等しい！」

「だって…お前、勢いが大事だって…」

「ならばその勢いが足りなかったという事だ!!」

「うう…」

剣での応酬ですら慈愛の心を持つていたゾーイが、ビーム一つで鬼教官と成り果てた。生まれつき当たり前の様にビームを撃てたゾーイは、人の苦勞が分からないのである。

「もう一度！」

「くっ…うおおおお!!」

今度は一瞬だけ細く光り、また直ぐにガス状に戻った。

「どうしてだ!!」

「知らない…」

「コーリス！何か隠しているんじゃないか…？後ろめたい事があるんじゃないか!?!真っ直ぐな心じゃないとビームは撃てないぞ！」

「ごめんなさい…」

「ああ、いや…そういうつもりじゃ、ないんだが…」

普通ビームを撃てる筈が無いのに、コーリスは急に自分が悪いのは無いかと惨めに思い始め、自己肯定力が著しく低下した。

ゾーイがどうしたものかと唸っていると、そこに一人の人間が現れた。

「うるさいぞお前達！今何時だと思ってるんだ！」

「正午」

「ナニイ!?俺は昼まで寝ていたのか!?!」

「生活習慣の乱れは良くないぞ」

ハーヴィン、スルトである。

コーリスのビーム練習の音で目覚めた彼は、苦情を入れるべく文句

を言いに来たが、ゾーイから残酷な真実を告げられた。

「それよりも聞いてくれ。コーリスがビームを撃てないんだ」

「そんなもの撃てるわけ無いだろ」

「コーリスなら出来るんだ!!」

「お、おお…そうか。確かにロイスは水で撃ってたしな…」

「何かいい案はないか!?! スルトは大火力が得意だろう!」

「…ん、お前なんで知って——」

「——あ」

ゾーイは試験の後、迂闊な言動を避ける様にコーリスに説教されたので、言葉には気をつけていたが、つい口走ってしまった。

「…まあいいか。腕の立つ傭兵だったのだろう? 俺の力くらい見抜くか」

「そ、そうだ」

スルトの一方的な理解で事が済んだ。

思わずゾーイの頬に汗が滲む。

そして、コーリスの力の可能性を理解している彼は、一先ず口添えをする事にした。

「コーリス、よく聞け。ビームかどうかは分らんが、大火力の出し方を教えてやる」

「スルト…助かる」

「先ずはイメージだ。身体の底からエネルギーを絞って手から一気に放出」

「……ゾーイからも、同じ様なことを言われた」

「そうなのか」

「…何か、具体的な技術の様なものは無いのか?」

「気合だ」

「……」

クソボケが、とコーリスは思った。

天然気質と感覚派が二人もいるところもストレスが溜まるのかと、彼は思い知った。

「あ、もうひとつある。技名だ」

「技名…？」

「名前があるとその技のイメージがしやすい」

「：俺、リユミエールの技使ってるから名付けとかできない」

勿論嘘である。

この男、ちゃっかり自身の霧に段階別で名前を付けている。

だが、ゾーイはコーリスの心までは分からない。バレずに済んでい
る。

「なら、私達が付けよう。数分待ってくれ。スルトと二人で案を出し
合ってみる」

「…」

画して、シンキングタイムが始まった。

——10分後。

「そろそろいいか？」

「ああ。完璧だ」

「俺のネーミングセンスは良いぞコーリス」

「じゃあ聞かせてくれ」

「では、私からだな」

ゾーイは自身有りげに鼻を鳴らして言った。

「”ガンマ・レイ”だ」

「それお前の技名じゃ」

「お揃いというやつをやってみたかったんだ。ビーム仲間。所謂ビー
友だな。コーリス、友達になろう」

「何言ってるんだお前」

「今の口ぶりだとゾーイ、お前はビームが撃てるのか!？」

「ああ。撃てるぞ」

「何なんだこいつ…」

スルトは余計に混乱した。

数日前に急に寮に入りだした女が、人智を超えた力を持つ事を隠そうともしない。そろそろ彼でも気づきかけてきた。

そして、受けが悪いと感じたゾーイは渋々次の案を語った。

”コズミックキャノン”

「何か凄い大層な名前を付けられてる気がする…」

「これでも駄目か…わがままな」

「…取り敢えず全部言ってみてくれ」

溜息をつくゾーイにイラツとしたコーリスだが、たくさん候補があるのならばは聞いてみようかと決心。

”ルーラー・バースト”

「…却下」

「…”フェイト・イグニッション”」

「却下」

「…”アウトバースト”」

「…却下で」

”ラストバーストレイ”」

「…なんか混ざってるな。却下だ」

「く…”コーリス・キャノン”!!」

「却下だ！」

””コーリス・ビーム”!!!」

「却下ア!!」

悲しい事に、人間に見合う技名は彼女には思い浮かばなかった。コーリスは見た目とのシナジーを気にするタイプ。技名だけ大層でも満足できない。存外面倒くさい男なのだ。

「ふん。ゾーイには荷が重い様だな。俺に任せろ」

崩れ落ちたゾーイと代わり、スルトが前に出て尊大に振る舞った。

”ラグナロク”

「…」

”レーヴァテイン”

「…火、だな。方向性が読めた。もういいわ」

「貴様！」

スルトも駄目だった。火に偏ってしまふ。

半分諦めた状態でコーリスは呟いた。

「もう”ストリーム”とかそんなんでいいぞ」

「え、ダツサ…」

「コーリス、君の事は理解しているつもりだが、それは良くない。私は君の事を想って言っているんだよ…？」

「じ、自分を柵に上げやがって…」

ジメツとした空気が流れる中、ゾーイが手をポンと叩いた。

「そうだ。これにビーム感を出すために”ラピッド・ストリーム”としよう！」

「急速な奔流…確かにアリか。コーリス、やってみろ」

「え、あ…分かった」

何となく方向性が決まったところでコーリスが手に魔力を集中させる。

「これで成功したら…私はコーリスを完璧に理解していると言える。

そうだなスルト？」

「お前の言ってることが分からん」

聞こえてくる頭の悪い会話を無視してコーリスは叫ぶ。

「ラピッド・ストリーム!!!」

「——っ!!」

スルトが目を見開く。

右手に青黒い光が一気に収束し、空間がほの暗く変わり始めた。紛

れもなく甚大な魔力の影響である。

思わずゾーイは笑みを浮かべた。

「いけるか!?ゾーイ!」

「ああ行けるとも!やってしまえコーリス!」

「分かった!」

そのまま天を貫く勢いで放出——出来なかった。

収束した魔力はまたガスの様にプシュプシュと音を立て霧散した。流石の本人もこれには困惑の表情だ。

「何故…?」

「疲れたのかコーリス?」

「いや…まだ余裕がある」

「もう一度やろう!」

「…ああ」

気が逸れたのかもしれないと自戒し、コーリスはより一層集中する。

「ラピッド・ストリーム!」

先程と変わらず高密度の光が集まる。

「ここからが正念場…む!そうだ…!私達が応援すれば…」

「なんだと?」

「スルト!コーリスを応援しよう!」

「は、はあ?」

「諦めるなコーリス!ビーム!ビーム!ビーム!ビームは気合!」

「いきなりどうした!」

ビームが絡むと、というより自身の戦法をコーリスに教えられる事

が嬉しかったのか、少しハイテンションなゾーイである。無論本来のキャラでは無い。右手をブンブン振りながら応援する様は、上司コスモスが見たら頭を抱えるだろう。

「フレー！フレー！コーリスッ！きあスルトも！」

「くっ…フレー！フレー！」

「馬鹿共が……」

半ば呆れた状態で放出しようとするも、先程と同じく霧散の兆候が見えた。

「諦めるなやればできるコーリスはできる男なんだだからビームを撃てる頼むコスモスよ天司長よ創造神よ彼に力を!!」

「フレー！フレー！」

「こ、ここは地獄か…？」

只管意味の分からない応援を叫び続ける女と、同じ単語を叫ぶハーヴィン。

救いは無く、またもやビームは失敗した。倒れ込むゾーイを無視してスルトがコーリスに話しかける。

「だめ、か…」

「ふむ…なあコーリス。直球な名前だからいけないんじゃないか？」

「何？」

「例えば…そうだな。ラビツトとラピッドを合わせて”ラビッド・ストリーム”とか」

「言葉遊び…兎にビームの要素はないぞ」

「だが、オリジナル性が生まれ愛着が湧く。もう一度やってみろ」
「……分かった」

これが最後だ、というつもりでコーリスは溜め始めた。

「——ラビッド・ストリーム!!」

「先ずは1段階突破か。………なんだと？」

収束。その段階は成功している。そして、先程と明確に違うのは収束している光の周囲には輪のような物が”シユン、シユン”と音を立てて上昇していく。

迸るエネルギーが更に増量していると思わせる音だった。

コーリスは確かな手応えを感じた。

そして放出。しかし音が途絶え完全な静寂が訪れ、失敗だとゾーイとスルトが落胆した瞬間——群青光が天を貫いた。

「う、おおおおお!!」

「ほ、ほんとに成功したぞ?」

「やはり君はビームが撃てる! ああ…泣きそうだ!!」

「なんか凄い出てる!? ゾーイ!! これどうしたら良い!」

その極めて太い光線は雲に穴を開け始めた。

流星にこれ以上は周囲の建物に影響が出始めると懸念し、コーリスはゾーイに選択を委ねた。

「やむを得ない…! 一端止めよう! 魔力を断ち切れ!」

「わ、分かった!」

魔力の放出を断ち切って、数秒して彼の光線は収まった。

数秒後、驚愕に腰を抜かしたコーリスの肩をゾーイは叩いた。

「出来たじゃないか! 何故兎でビームが出たのかは分からないが、とにかく良くやった!」

「あ、ああ…」

「後は剣からも出せるように…む?」

ゾーイの視線の方向は食堂から繋がるドアから。

そこから寮長のグルシが血相を変えて走ってきた。

「アンタ達無事かい!?ゾーイちゃんも!」

「グルシか。私達は至って健康だ」

「さっきの光はなんだい…?ここから出た様に見えたけど」

「ああ、コーリスを鍛えていたんだ」

「…?兎に角、アンタ達の起こした事が原因なら、不味い!」

「何故だ?」

「聖騎士団がここに来るよ!!」

「「あ」」

雲を割るほどの光が発見されたならば、異常と見なして騎士が駆けつけてくるのは当然である。

無論、この後コーリスが滅茶苦茶怒られたのは言うまでもない。それはそれとしてルクスに事情を話し、許可を得た上で彼は剣先からビームを撃つ練習をゾーイと共に行った。

この日から街でのコーリスのあだ名は”ビーム騎士”となった。

そしてそれが原因で聖騎士を目指す子供が増えたのは本人も預かり知らぬ話である。

30. ガロンゾの調べ

「——リュミエール聖王。君に話がある」

「何奴：!？」

「私は調停の使徒、ジ・オーダー・グランデ。ここは君の夢の中」

「…これは現実か」

「安心しろ。起きた後の記憶は保証する」

「貴様：星晶獣か」

「その通りだ。そして、私は実際に存在する。今から言う言葉を信じてほしい」

「何の用件だ」

「コーリス・オーロリアを貸してもらいたい」

「貸すだと？彼はこの国の騎士だ。決して物ではない…!」

「すまない、言い方が悪かった。私が行動する時に、彼と一緒にになる様に計らって欲しいのだ」

「共に行動…だと？貴様、一体何処に」

「リュミエール聖騎士団親米、ゾーイという名に聞き覚えは無いか？」

「っ…コーリスと共にあの光線問題を起こした騎士か」

「そ、それは…兎も角。私は世界の秩序を守る為に作られた存在だ。それにはコーリスの力が不可欠。君が許してくれるならば、夜にでも君の部屋に顕現する事が出来るが、そこで話すか？」

「信じられる証拠はあるのか？」

「なら、証明しよう。私は空を観測していた。君だけが知っているコーリスの霧の特性、あの空乱の始まり、助けに来た星晶獣の全てを余す事なく知っている」

「…」

「今すぐに信じるといふ事は無理だろう。その代わり、私が騎士として最善を尽くしこの国の助けとなろう。それで私の信用が得られるのなら何十年も、何百年も。そして、彼が死ぬまで」

「貴様は——」

「おっと……ここまでの様だ。私の権能では十分な時間を得られない。話は後日にしよう」

「おーい。朝だぞ。起きろー」

珍しい事が起きた。

ゾーイが爆睡している。本来寝る必要の無い彼女は、何時も普通の人間が起きるそれなりの時間に扉を開けるのだが、今日は何度声をかけても起きてこない。

ゾーイの性質を知る俺だけが違和感を感じる由々しき事態だが、取り敢えず薄っすらと霧を入れて状況を確認する。

「…ベットにいる？横たわっている…本当に寝ているのか」

しかし…研修を終えて疲れたという線はあるのかもしれない。面接の時に精神的な疲労が垣間見えた為、沢山の人間と接する場所では思った以上に辛い事があるのだろうか。

取り敢えず、ノックしてみる。

すると、予想に反して直ぐに返事が来た。

「…うん？コーリスか。すまない。すぐ開けるよ」

ドアが開いて、ゾーイが出てきた。

髪には寝癖も無いし、なんなら服装は固有の鎧。リュミエール聖騎士団としてでは無いが、正装のゾーイだ。ますます疑問が湧く。先程寝そべっていた気配は何だったのか。

「出るのが遅かったが、何かあったのか？」

「…聞かれる可能性がある。一端入ってくれ」

「ああ」

何か事情があるのかと察し、ゾーイの部屋に入る。

「慣れない事をしていた。集中の為に寝そべる形を取っていたんだ」

「それは…?」

「人の夢に顕現した」

「は?」

「コスモスがその様な能力を持っていて、それを少し参考にしたんだ」
「そ、そうか」

超常的存在は何でも出来るのか。

もう突っ込むのも疲れたが、それでも相手を聞かなければならぬ。ゾーイの行動には今の所不必要な物は無いのだから。

「誰の夢に?」

「リュミエール聖王」

「……………アエ!!?」

「何だ。その声にならない声は」

王だぞ?

リュミエールで一番偉い人だぞ?この女…

「君の事はこれから話す予定だが、少なくとも私という存在は理解してもらえたよ」

「…一方的な会話じゃないだろうな」

「失敬な。短い時間だったが多分伝わった」

「多分」

心配だ。大方『信用を得るために働こう』とか大雑把で有無を言わない言葉を使ったに決まっている。ゾーイはそういう生き物だ。

俺は未だにこいつが社会に染まれるのが不安だ。なのに飯の頼み方とかを心得ているのが凄くムカつく。他も学べ。

「俺は今日剣を受け取りに行ってからガロンゾに行く。何か分からない事があったら周りに聞く事」

「心得た」

ビーム事件の後からゾーイとの修行は苛烈さを増した。

彼女との戦いに2匹の竜が参加し、不思議な息で眠らせて来たり、凍らせてきたりするのだ。本人曰く、まだ力の3割も出していないと

言っていたが、2割すら出してない気がする。

加えて習得したビームの使い方が対空かつ大きめの魔物しか無い。結局霧に頼らない回避方法を模索するだけの修行になりつつあるが、一応色々練習している。

剣に魔力を籠めて斬撃を飛ばしたり、ビームそのものを剣から出したり、盾を尖らせて攻撃に転用したり、本当に色々だ。

ゾーイ自身も騎士団として研修に励んでいる。新人に見合わない実力は過去に騎空士をやっていたというカバーストーリーを適用。活動自体もそこまで難航してないらしいので、恐らく大丈夫だろう。

俺は朝食を食べ終え、鼻屑にしている職人の所へ向かった。

「ゴリスです。剣を受け取りに来ました」

「おう、入れ入れ」

その鍛冶屋は聖騎士団へ武具の提供をしていて、俺の剣は一番の腕を持つ親方に作ってもらったのだ。

あの戦いで折れた剣の代わりに支給された剣を使っていたが、やはりオーダーメイドが良い。その為には功を立てる必要がある、団長は聖王から賜る事もある。今回俺とロイス、スルトは戦いに貢献した事もあって一流の職人3人に作ってもらう事が許された。特にスルトはハーヴェインであり、専用の剣無しでは戦うのが難しい。先にスルトの物を作り、ロイスに続いて俺が最後なのだが、何故か出来上がるのに時間がかかったのだ。

その完成品が目の前にある。

黒曜石を思わせる真っ黒な装飾が柄に埋め込まれており、それ以外は一般的な長剣……いや、刀身も薄っすらと黒い。

「これがお前の剣だ。長さは一般的な長剣、多少刀身の幅が広く、かつ重めでも構わないと言ったな？」

「はい」

「よし。弟子二人が作ったスルトの”パッション”とロイスの”クレッセント”よりも時間がかかった理由を教える」

親方はポケットからある結晶を出した。

黒く、四角い幾何学的模様が目立つ大きめの石つころの様な何かを。

「こいつはダマスカス骸晶。希少金属だ」

「ダマスカス：ですか」

「聞いたことがあるだろうダマスカス鋼。それを作る為の結晶と言ってもいい。今回お前の剣にそれを練り込んだ」

「…何故俺の剣に？」

「お前に合うからだ。守りに徹する戦いなら何より丈夫な剣がいい。ルクスからもそう頼まれてる。どれ、硬さを見せてやる」

「何を…」

親方は横においてあった巨大なハンマーを担いで剣めがけて振り下ろした。固定されていた剣の刀身にぶつけければ間違いなく欠ける。それを咎める隙も無く俺は呆然とその行動を見守った。

だが、剣には傷一つ無い。

「結晶の状態を混ぜてこれだ。それどころかこのハンマーが痛んでるくらいだぜ」

「そんなものを…何処で？」

「アマルティアだ」

アマルティア島。シヨゴスが封印されていた未開の島であり、かろうじて文明の跡が残る無人島である。

世界でも有数の希少金属がその場で簡単に見つかったとは信じ難いが…。

「俺は、一つの仮説を立てた。ダマスカスや伝説に残るヒビイロカネは稀に自然に出来る鉱物ではなく、戦いの中で精錬された鉱物なんじゃないかってな」

「精錬、ですか」

「ああ。過去数回の記録で発見された場所は火山や深海。乱気流を抜

けたら船に素粒子が落ちていたって話もある。自然が作り出した物とは思えねえ」

「となると…あの戦いの余波で？」

「実際に拾ってきたのはルクスだが…星晶獣の力、スルトの炎、竜達の6属性。それ等のエネルギーがアマルティアの鉱石に何かしらの影響を与えた可能性がある」

「…」

「何はともあれ剣は無事完成した。紛失さえしなければ30年は使える筈だ。持っていけ」

「ありがとうございます。…結構重いですね」

「卓越した硬度でそこそこの重さがダマスカスの特徴だ。お前の力なら使いこなせる」

「剛力との兼用…」

「銘は”ノスタルジア”。大事に使え」

俺は新たな剣を早速装備してガロンゾ行きの騎空艇に乗った。ガロンゾは交通網が発展した豊かな島であり、観光名所であるアウギユステに次ぐ需要を持つと称される島だ。

当然多くの人間がその島に向かう訳だ。

だからたまに変な人が船に乗っていたりする。現在俺の横に立っている小さな女性もそれだ。魔導士めいたフード付きの服装に、刺々しく枝分かれした杖。曲がった姿勢と低く響く陰気な笑い声。ハッキリ言おう、ヤバい人だ。

あ、こつち向いた…。

「ヒビ、ねえ君…不健全民だねえ…」

「…」

お、俺に話しかけてるのか…？

怖いな…む、無視。

「そのエルーンお兄さん、ちよつといいですか…ヒヒ」

よく見たら彼女の横にはもう一人エルーンがいる。

俺じゃない筈——

「おつすウ!!」

「どわあ!？」

急にデカイ声を…というか声が高い。子供なのか？

「無視はいけないよね…でも分かるよ…陰気な奴に話しかけられた時って相手がこっちの顔見なくせに無視されたって一方的に被害者ぶるから質悪いっすよね。でもこっちだってワザとやってる訳じゃないしなんなら空気変えようも頑張つて声出してるわけでその結果にもうちよつと救いがあつても思うつて事なんだよね…あ、健全民は別」

「ご、ごめんなさい」

何か急に喋りだした。

やつと此方を向いたが、綺麗な顔付きに反して不健康そうな顔色と隈…特に目がイッてる。

「不健全…というか死人な君に聞きたいんだけどさ」

「は、はい」

「仲良くしてた人間に裏切られるつてどういう気分だと思う？」

「裏切り…ですか」

深刻な表情で問いかけた彼女の目には一種の後悔が見えた。きつと、並々ならぬ思いでこの問いを投げかけたのだろう。言葉を選ばなければ…。

「好きだった人間がいたの」

「はい」

「同じ図書館に通つてて…私つてほら、体がちっこいから…取つてもらった時…恋に落ちたんだよね」

「…はい」

「それ以来よく話す様になってて…充実した日々を送ってて、ああ、楽しかったなあ」

「……はい」

な、何か綺麗な話だぞ？

「ついに私が彼に告白したら…」

「…」

「フラれた」

「……」

「彼はただの常連。舞い上がったのは私だけ」

「……」

「ひ、ヒヒ…所詮健全民と不健全民は交わらないって事だよね」

ヤバい…また目がイった…！

「でもさア…わざわざ私達不健全民と関わり持っている癖にそこまで興味ないって……これ裏切りじゃない？」

「……はい？」

「健全なんだからさア…私の気持ちくらい察せるよねエ。それなのに分かってて振るってさ……そういう事だよね」

「…如何に健全で優れた人間だとしても、他者への理解万能では無いと思いますよ」

「不健全民らしい答えをドーモ少年…」

雰囲気明らかに変わった。

この人は振られてこうなったのか…？少し顔色を伺ってみる。

——瞬間、彼女は俺の胸倉を掴んだ。

「だからさア！片方から一方的に気持ち押し付けちゃうと私とジェームズみたいになるから結局の所同族しか仲良くなれないって訳なんだよオ!!少年は私を裏切らないよねエ!!?!!」

「ヒツ…!?!」

血走ったガン開きの目で俺に意味の分からない言葉の羅列を叫ぶ。怖い。此方の正気まで失う。背筋が凍り足が震える。左腕の感覚まで無くなってきた。今思ったら義手だからそもそも感覚ないわ。なんだ、俺は死ぬのか。てかジェームズって誰だ。

「なんだ！健全民は強引な方が好きなのか!? チューか!? チューすれば恋人になれるのか!? 答えろ少年!!」

「ご、ごういんなのは、だめで——」

「早く答えろオ！おなか殴るぞー!!」

「ひ、ヒイイい!?!」

あまりの恐怖に——思わず身体が透けて。

「あ」

「ぶけえふ!?!」

目の前の少女は思いつ切り甲版に顔面を叩きつけた。周りの人間は見て見ぬふりをした。

だから俺もそうした。

「…ヒヒ、頭が物理的に冷えたよ」

「ジェームズさんの気持ちが分かりました」

「やめろオ!!」

ガロンズに着いた俺はフィラが来るまで時間を潰すことにしたのだが、俺の足を掴んでまで少女が着いてきたので、一先ず撒く事を念頭に会話を始めた。

「失恋中でちよつとあたまこんがらがっちゃった」

「ちよつと…?」

「相談できる友達は一しかいないんだけど森に籠もってるからねえ」

「友達…」

「……あ、もしかしてガチソロ専の方? ねえねえソロ? もしかしてりつちよより下がいましたア…? 友達全くいない系…!?!」

「…はあ」

友達がいない様に見えたのか、気味の悪い笑顔を絶やさず俺を煽る少女。名前はりつちよか。変な名前だ。

何となく俺は聖騎士団のエンブレムを見せてやった。

「へ、何それ?」

「リュミエール聖騎士団に所属する事を証明するエンブレムです」

「聖、騎士団…?」

「はい」

「健全民…だと?」

聖騎士団という単語を聞いた瞬間、りつちよさんは手をワナワナと震わせて目を覆い隠した。

「ひ、ヒヒ、アハハハ…信じてた同族が段々変わってって健全民になる光景は沢山見てきたけど…そもそも勘違いは初めてだなあ……………」

「…」

「でもさア…騎士団って青春とはかけ離れた感じで努力一本、辛そうだよねエ。異性もいなそうだしね…寮とか男ばかりなんでしょ?」

「寮には1人女性の騎士がいます。騎士団全体にもそれなりに」

「……………青春よござんすねえ」

ほんの少し不貞腐れた態度を見せた。

もう何が正解か分からない会話になってきた。

「所で、何故ガロンゾに？」

「んー…まあ、ちよつと各地を回らなきゃいけないくなって、ここ経由で色々やりくりすんのよ」

「なるほど」

「少年はー？」

「幼馴染と会いに」

「ハイハイ健全健全しよーもな。私幸せそうな空気吸うと身体が拒絶反応起こすんだよね」

「そうですか」

「あ、船きた。じゃあの」

「お元気で」

やっと消えてくれたか…。

彼女は唯の陰気な女性に思えない。俺という存在を見透かす様に自然と話し掛けていた。加えて透けた身体に対し何も驚いたりアクションを取っていない。

不健全とは、もしかしたら俺の身体を…？

加えてあの少女は途中から俺を少年と呼んだ。年齢も名前も何も教えていないというのに。

彼女は…まさか…。

俺の思考はフィラの声によって掻き消された。

○○○○○○○○○○○○○○○○

少女はひたひたと歩く。

満足した表情にも見えるし、卑屈さを煮詰めている様にも見える様相で船に乗り込む。

側の誰にも聞こえない、か細い声で彼女は呟いた。

「あそこまで不健全なのは久しぶりかも」

身を外に寄せ、風を浴びながら彼女は追憶する。

(生き長らえるのは偶にいるけど、生き永えさせられるとしたら…セレストかなあ。でも、セレストの近くにいないとあれにならない筈) 戦争の記憶、呪いの記憶、死の記憶。

それ等を彼女は覚えている。

「ボンビーを解決できたら、ちよつと助けてあげようかな」

気まぐれな感傷で彼女は未来を見据えた。

「折角だし…ストーキングしておきましょうか」

彼女はコーリスの片足にしがみついた瞬間に術を仕込んでいた。

彼女の司る物は呪い。呪いの星晶獣”リツチ”は軽度の呪いを使用し彼の居場所と状態を常に把握し続ける。その気になれば遠隔で呪殺する事が出来るが、彼女は事情により本調子ではない。本調子でもやらないだろうが。

(ちよつと顔いいしね。ジエームズ程じゃないけど)

自分の行いを正当化しつつ、今の彼の状態を見ようとした瞬間。

「」

無言で目を見開いて、直ぐに目を閉じた。

冷や汗を流してその行いを後悔したのだ。

「あちゃあ………」

心底、後悔した。

「……人外の方でしたかあ」

ゾーイですら気付かないコーリスの秘密を、人知れず彼女は知ってしまったのだ。

リユミエール聖騎士団の拠点で一人の少女が窓を見ている。

ロイス・モラクレル。聖国貴族ヴァンリヒテン家のお転婆娘であり、なまじ強いせいで齒向かうものは黙らされている問題児である。

現在彼女とコーリスは一定の周期で各島の環境を調査しており、片方はリユミエールに残って報告をする形である。つまり、コーリスは今リユミエールにはいない。

この任務は実質旅行の様な物であり、密かに観光を楽しむ騎士が多いのだ。

「お、届きましたね伝書。さてさて成果は…」

鳩が脚に持った手紙を彼女は確認する。

『現在小島バンカレラに滞在中。マファイアが中規模の闇市を取り仕切っており、禁薬ヘヴンの流通が盛ん。街の人間は日常的に麻薬を摂取しており、強制されていない事から日常の一部にまで溶け込んでいると推測できる。更に、子供には副作用が見られない事から中毒の危険性を住人は認知している上で使用、子供には使用していないとも言える——』

「…覇空戦争時の歴史が色濃く残った島ですか」

マファイアの起源は覇空戦争が終結した後の社会変化である。力で自らを守る事を優先した人々は今とは違う形の自警団を作った。

しかし次第に力を支配に向けるようになり、影から風流を牛耳る事で組織として大きく成長した結果が現在のマファイアである。

ロイスは続きを読み始めた。

——禁薬は各国の条例に基づき正式に禁止された薬物であり、放置する事は聖騎士団の理念に反する為、合法的な介入は可能だが、得策ではない。また、マファイアを一掃したところで中毒に陥った住人への対処は容易ではない。——

「ふむふむ」

——そして、どうやらマフィアはよそ者を監視していたようで、文章を途中で破壊されてしまったので書き直した。——

「……ん？」

違和感を覚えつつも、彼女は読み続ける。

——コーリスという名は知られてはいなかったが、彼等の目は非常に鋭く、俺を逃がす気は無いらしい。直ぐに包囲された——

「…」

——ので、殲滅した。』

「はっ。」

ロイスはキレた。

行く先々で問題を起こさなければ気が済まない男を一発でも殴りたくなつたのだ。

恐らくコーリスが倒した集団は組織の一角。このまま彼が及ぼした危害を認知されれば袋叩きにされる。ましてや身分が割れてしまえばリユミエールが標的にされる。

「あん…のクソボケがアア!!」

怒りを行動力に変換し、彼女は剣を携えて騎空艇の停留所に向かって走り出した。

小島バンカレラ。

ある群島の一部を担っており、のどかな土地が特徴の田舎である。その中心部にある村の外れには縄で縛られた大の大人が30人程座らされていた。

そして彼等の前にはエルーンの青年。黒光りする剣を携え、腕を組んで目の前に立っていた。

コーリスである。

一人の男が叫ぶ。

「誰だ…てめえ！」

「犯罪者に言うことは無い」

「くそ…っ！どうなつてやがる…縄が…！」

「俺が来た時にはこうなつていたぞ…：記憶していないのか…？」

「…記憶がねえ、なんだこれっ…糞がア！」

言葉に出さないだけで、捕縛されている人間は皆この状況を作り出された原因を思い出せない。彼等にとつては目が覚めたら縄で身体を自由を奪われ、無力化させられていたという現実離れした経験のみが残っている。

これは、紛れもなくコーリスの霧の第3段階。

近接した記憶を飛ばす霧である。

彼等は麻薬の密売人であり、マガザンという大規模なマフィアの一員。平和な島で禁薬を日常に浸透させる事でのどかな支配を行っていたのだ。

村を訪れた瞬間その事に気づいたコーリスに対し、彼等は暴力によつての口止めを凶つたが、彼等は敗北した。

無論、戦いどころか会つた事すら忘れていたのだが。

「さて、このまま統治国に引き渡してもいいんだが…お前達は組織として大きいのか？」

「言う訳無いだろうが」

「…国そのものに繋がりがあつたりしてな」

「っ」

「当たりか。堂々と一つの島を麻薬経路にしてる時点で妙な点しかないと思つたが…この島に入った時点で俺を逃がす気はなかつた様な」

淡々とした口調に反しコーリスは焦っていた。

「群島を統治する国が絡んでいるとしたら、このマフィア達を突き出して此方が消される可能性が高い。経済政策の一環として薬物や暴力を使用しているのなら、尚更コーリス個人では解決出来ない問題だ。」

他国の介入や同族の争い以外に止める方法が無い。

島に入った時点で悪手だったという事実には彼は苛つきを隠せないが、直ぐに気配を察知して柄に手を掛けた。

「——あら、貴方がやったの？」

凜としていて、何処か優しい声が響いた瞬間、コーリスの脳は最大限の警報を鳴らした。

(この気配は…まずい…：…飲まれる…：…!!)

声は彼の背後から聞こえるが、振り向けない。

未知への恐怖が腰の稼働を拒絶しているのだ。足音も聞こえず、何らかの術でも無い。

——それは、真心だった。

「強いよね…でも、あまり焦っちゃ駄目よ」

「——!!!」

優しきだった。万感の真心を込めたその言葉は安心感と恐怖の二律背反を彼に与え、身動きを不可能な物にしていた。

やがて声の主が現れる。

美しい羽衣に長い黒髪に閉じられた目、短い手足はハーヴェインの特

徴であり——空中に浮いている。

「落ち着いて、ゆつくり話を聞いて」

その女性は柄に掛かった彼の手を優しく解いていき、その風景に暴漢達は心を飲まれていた。

コーリスの未知を刺激し、暴漢達の母性を刺激した。

この世に蔓延る争いなど、この女性の言葉一つで収まると——そう思わせる領域がここに完成していたのだ。

「——私はレイ。貴方の名前を教えてください？」

「……コーリス・オーロリア」

ここに、一つの未来が生まれた。

ここには実質二人しかいない。

マフィアも存在はしている。だがしかし、彼等の心は虚空の彼方に飛び去ってしまった様だ。

コーリスはレイと名乗ったハーヴィンの仕業だと無意識に理解した。恐ろしいナニカ。

それでも彼はレイと話してみたいと思ってしまったのだ。

「彼等は自分の権力に溺れ、他者を踏みにじる事による成果を選んだのね……この村はもう、穢されている」

「貴女は……？」

「貴方はあまり良い気分はしないでしょうけど……私もマフィアよ」
驚きを隠せなかった。

この慈愛の化身と呼ぶべき女性もマフィアなのか。僅かに疑心が生まれた。

「マフィアにはね、二つ形があるの」

「……覇空戦争後の混乱期。自らの力で他人を支配する事を選ぶか、守る事だけに使うか。……後者は自警団の様な形であると」

「ふふ…良く知っているのね。その通りよ。マファイアである事を強調するつもりは無いけれど、私が活動するには後者の形が適しているわ。もっと分かりやすい言葉で言うなら…抑止力ね」

「抑止…」

「マファイアに介入出来るのは、同じ規模と種類の勢力…貴方とは種類が違うの。ねえ…聖騎士さん？」

「ツ…」

身が割れている。

疑心は警戒へと引き戻された。

レイは構わず続ける。

「名前だけ新聞に載っていたのを見ただけよ」

「顔を知られば個人的な恨みを買います。俺としては機敏にならざるを得ない」

「私が怖いかしら…?」

「はい、とても」

コーリスは彼女の前では嘘は意味を失うと考え、正直に答える事にした。会話に於いても、レイは彼の一步先を常に行く。

レイは少し微笑み、懐に手を入れた。

「何を…」

「貴方にあげる」

「これは…飴？」

「まだまだ落ち着かない様だから、それを舐めてゆっくりしましょう」
「……ありがとうございます」

(毒ではない…袋にも細工はない。市販の飴だ)

警戒を見せる事すら得策ではないと感じ、コーリスは礼を言って飴を口に入れて噛み砕いた。

——バリ、ボリ、バキ。

レイは思わず笑った。

「ふふっ」

「…？何です」

「飴はね、口の中で転がして舐める物なのよ」

少し緩んだ空気が流れる。

だが、レイは同時に彼の行動に対し「可哀相」と思った。その行動だけで、彼の本質が垣間見えたからだ。

そして、その際にコーリスがアプローチをかけた。

「もし良かったら、どうぞ」

「サンドイッチ…私にくれるの？」

「飴のお礼です」

「なら、有り難く頂くわ」

これは探りである。

コーリスは誰にでもサンドイッチを撒き散らす性格ではない。あくまで、これをどう受け取るかによって相手の性質を吟味するという狙いだ。

そして、レイは疑いも無く彼のサンドイッチを受け取って口に入れた。警戒の素振りも見せない彼女を見て、コーリスもこの人物の本質を理解した。

未だ、両者共に腹の探り合いの最中である。

「美味しいわ。貴方が作ったの？」

「はい」

「子供達にも食べさせたいくらいだわ」

「それが貴女の仲間ですか？」

問い掛けに対し——無言で、彼女はコーリスを見た。

「何故、そう思ったの？」

「貴方なら、そういう形容の仕方をすると思って」

「半分は正解。でも、表し方だけじゃないの。私にとって彼等は本当に子供達よ」

「その人達は何を？」

「この村の保護の準備。私はこの人達を無力化しに——」
「っ……」

刹那、銃弾が彼等を襲った。

一人の暴漢がレイの影響から戻ったのか、会話している今を隙と見て銃を取り出したのだ。

コーリスは剣で、レイは術を使い網のような防御膜を作り防いだ。

「あら…縄で縛られていた筈なのに」

「安物を使いました」

「うっかりさんなのね」

一人が力づくで縄を解いたお陰で他のマファイア達も体勢を立て直し、此方に銃とナイフを構え始めた。

コーリスがレイの前に出る。

彼女は相手を縛る摩訶不思議な術を使えると見たが、その前に銃で撃たれてはどうしようもないからだ。

「ここは俺が。貴女は自分の身を守って下さい」

「それには及ばないわ」

「む…？あ、ちよつとー！」

レイがコーリスの目の前に回り込み、頬を両手で掴む。

如何に小さい身体だとしても、二人まとめて蜂の巣になる程度のものにはなっている。思わず声を上げるが…。

「大丈夫——」

その時、閉じられていたレイの瞳が開いた。

その眼は黒曜石の様に黒く、ガラス玉の様に透き通り、更に光沢が

あつた為、青空を介して青く光っていた。

本来眼球がある部分に直接美しい宝石がねじ込まれているかの様な、グロテスクで禍々しい魅力がその瞳には宿っていたのだ。

そして至近距離でその瞳を見たコーリスは、自身の身体に異物が介入した感覚を味わった。

「…が!？」

「――阿頼耶識」

瞬間、コーリスの身体は脱力したかの様に崩れ――消えた。

「なっ!？」

マフィアが驚き周囲を見渡すが、何処にも彼はいない。

彼は消えたと誤認する程のスピードを以て背後へ回ったのだ。

困惑した表情のまま、コーリスは剣を振った。

正確に言えば――振らされた。

それだけでマフィア達の身体が風圧でよろめいた。驚きつつも

コーリスは高密度の霧を彼等の周囲に集中させた。

「凄い力…これは特殊な強化手段…：カルム一族ね」

目を開けたままレイが呟く。

その姿を見たコーリスは自身の滾る力を彼女の影響だと理解した。彼の身体に宿る剛力が更に強化され、その上で操られている。

次々と敵が地面に倒され、レイは倒れた彼等を操り無力化した。短い戦闘を終え、後はコーリスへの術を解除するだけだ。彼女は目を閉じようとして――

「まあ…もう解ほどいてしまったのね」

「――貴様」

――首筋に剣を当てられている事に気がついた。
無表情のままコーリスが問いかける。

「何故操る。言え」

「ごめんなさい。少し…貴方の力が知りたくて。どうやって私の瞳から逃げたのかしら?」

「瞳から魔力を介して俺の精神に入り込んだのだろう。流し口から俺の魔力を逆に流し、中和して溢れさせた。そうすれば術は大破して使い物にならなくなる」

「驚いたわ。貴方って思った以上に危ない魔力を持っているのね」

「直接流しこもうか」

「それは嫌ね」

コーリスは一先ずレイの首から剣を引いた。

「何者だ」

「唯の生命。少し他の人達よりも長生きなママよ」

「…今は剣を収める。旅行気分だからな」

「あら、見逃してくれるの?」

「当たり前だ」

剣を鞘に収め、彼は言った。

「戦闘に於いては俺の方が強い」

そのまま笑みを浮かべ――

「さ、この男達を連れていきましよう?」

「…ええ、そうね」

何事も無かったかのようにコーリスは村へ戻った。

レイは最後まで笑えなかった。

「ママ……ご無事で!？」

「大丈夫。この子が守ってくれたから」

「貴方が……!?感謝します」

「いえ、自分の身で精一杯でした」

村に戻ったコーリスは、レイが「子供達」と形容した傘下に手厚い保護をされていた。

何故なら、彼もある種の被害者だからだ。

最も、現在はレイの側近らしき人物に感謝の意を伝えられている。どうやら、レイは一人で抜け出したらしい。

「所で……この村の人達は大丈夫かしら?」

「それが……彼等はヘヴンを強制されていなかったのです……。ゆっくりと生活に馴染む様にこの村に溶け込んだせいで、抜け出すのは大変かと」

「副作用も絶対では無いわ。時間をかけて説明と治療を施していけば元に戻るはず。今は、この村を守る事に専念しましょう」

「了解です、ママ」

「俺からも一つ」

コーリスがポケットから聖騎士団のエンブレムを出しつつ、会話に介入する。

「俺は偶然この島に来たリュミエール聖騎士団の者ですが、群島を仕切る統治国自体がこのマフィアとの繋がりを持っている様です。後始末はどうしますか?リュミエールの立場だとしても国を相手取るには証拠が少ない」

「ふふ、聖騎士団がマフィアと関わってもいいのかしら?」

「なら、俺個人の関わりにするまで。貴方達の関係を知るつもりは無
いですが、少なくとも尾を掴まれば上が潰しに来るのでは？」

「そうね…彼等が倒されたこと事態を隠せば良いのだけど…」

「ママ。いつその事本陣を叩く決意が必要なのは…」

「力に物を言わせてはあつちの思う壺よ。人質が取られれば此方は手
出しできない」

「…しかし！」

「この村には利用価値が無いと思わせるのよ。諦めが付けば戦いを好
まない私達に手は出さない」

「面子を気にするのなら私達を攻めるのでは…」

「彼等が一方的にカタギに手を出したという事実があるなら、どうか
しらっ？」

「…！それならば多少は」

偶然マフィアが取り仕切る島の一部に訪れたコーリスにとって、
頭が痛い話であったが、リュミエールに責任を押し付ける必要は無く
なりそうなので安心している。

後の懸念としては…

「俺の存在を隠して欲しいのです。せめて、聖騎士であるという事は
秘密に」

「責任を自分に押し付けられるのが嫌だから？」

「いえ、逆です。国に迷惑がかかるなら俺個人に恨みを買わせれば良
いのですが、その前に騎士を辞退しなければならぬのです」

「一人で背負う覚悟はあるの？」

「はい」

「…私は暴力が嫌い。だけど、暴力を使わなければ手に入れられない
平穏もある。貴方は理想論で片付ける気は無いわよね？」

「ありません」

コーリスは敢えて睨み返した。

自身の覚悟を安く見るなという言外の抗議である。

その眼光を受け、レイは沈黙の後…今度こそ笑った。

「コーリス」

「はい」

「もし、これから永い時を経て…貴方がどうしようもなく困る事があるのなら、私の元へ来るといいわ」

「…」

「——私がママ助けになってあげる」

「申し訳ありませんが——」

コーリスは笑わずに言った。

「俺の母さんは一人だけです」

コーリスは無言で立ち去った。

その後、コーリスの証拠はレイが仕切るスーオ・ファミリーによって抹消され、村を守りつつ禍根を残さない理想的な結果を齎した。

コーリスはリュミエール行きの騎空艇に乗って、島に駆けつけた口イスと共に帰宅していた。

今は相方の怒りを引き受けている。

「何ですぐ問題ばかり起こすんですか!!」

「襲われた。どうしようもなかった」

「それに加えて運良く善のマフィアが助けてくれたア!?!んな訳無いでしょう!創作でしか見た事ありませんよそんなの!」

「善と言うには妙な形の集団だった…あれは家族だ」

「はあ?」

「一人を中心に全てが構成されている組織。歪という他あるまい」
「…また変な人に会ったんですか。船にいた不健康そうな人も…船の事しか話さない美少年も」

「この身体になつてから妙な出会いが増えた気がする。なあロイス。因果とはこういう物の事を言うのか？」

「因果論…？まあ、私も星晶獣の方達に遭遇してからというもの、他の島へ行く機会が増えましたから、案外ある機会を起点に道筋が決まっ
ていくのかもしれないね」

「何事も、ゼロから分岐していくのか」

「そうですね…」

ひよんな事から戦争を生き延びた彼等は、しみじみと奇妙な出会いについて思いを馳せた。

32. レイの示唆

「聖王と話をつけてきた」

冬の季節。

朝起きたゾーイの開口一番がその言葉だった。

タイミング的にもう一度夢を利用したと考察するコーリスだが、彼女は驚きの言葉を続けた。

「7回目でようやく終わった」

「やっぱりか…」

案の定コミュニケーションが取れていないのか、7回も会話の機会を作ってしまった様だ。

夢に顕現する事は可能でも力を多く使う為、ゾーイは二度目以降は現実世界での会話を試みた筈だが、それでも伝えきれないから此度の夢を利用したのか。

その場合、彼女はとんでもなく会話が下手ということになる。

「夢に現れたから彼は私を非人間と扱ってくれたよ。そのお陰で君についての話題に移りやすかった」

「聖王の理解がなければもっと伸びていたのか…」

ゾーイを超越的存在と断定する一種の現実逃避が無ければ彼女の行動を理解する事は難しい。

コーリスの様に精神状態のリセットが容易に出来ない人間は、頭が痛くなる程の新しい情報の数々を飲み込み、正確に咀嚼する事でようやく事情を把握する。

コーリスは思わず聖王に畏敬の念を抱いた。

「それで、私の事は正確に伝えたが幽世の存在は全く触れていない。少なくともこの世界の平和の為に君が必要と話し、尚かつ君自身を道具の様に扱うつもりは無いとも話した」

「王は何と言った…?」

「君の意思を尊重すると言っていた。それは君の身を案じての事だが、同時に君自身の覚悟を測っている」

「…分かった。少し時間をくれ」

「了解した。ゆっくり考えてくれ」

覚悟とは、方向性が明確に定まっている物にこそ効果を発揮する。

世界の安寧を脅かす存在と戦う覚悟と、平和そのものを担う覚悟は別物である。敵を倒すのか、平和を継続させるのか。

そして、世界にとっての平和は何なのか。

未だ狭い世界で過ごしているコーリスには分からなかった。

「世界を見る必要がある。少なくともファータ・グランデは…」

コーリスはある人物の元へ行く為、騎空艇に乗り込んだ。

ここは小島バンカレラ。

マフィアに利用されていた島であり、先週コーリスとスーオ・ファミリーが仮初ではあるものの平和を取り戻した場所である。

その証に、ギヤングの住処だった場所には雪が積もっていた。

島の人間は現在ファミリーの頭首であるレイによって、マフィアや薬物への知識を与えられており、少なくとも被害者としての意識を持たされたのだ。

そして、スーオ・ファミリーの統治下に置く事で島そのものを守りつつ、虐げられてきた人間を保護する拠点にも活用されている。

その拠点の最奥、レイの元に一人の部下が走る。

「ママ。客人です」

「お客さん…？誰かしら」

「彼が来ました」

「分かったわ。思ったより早かったのね」

自身の元に訪れた人物の名前を聞く必要も無く、レイは客人を出迎えた。

「こんにちは、コーリス」

「こんにちは、レイ」

二人は対等の存在として互いを認識している。

力と年齢という要素を排斥して、単純に立場を求めた結果だ。

だが、少なくともコーリスは自身の疑問を解決する為にレイを頼ったのだ。

「私の子になるつもりではない様だけれど…どうしたの?」

「その…空の知識が足りません」

「それなら教えましょう。カルニ、お茶を持ってきてくれる?」

「分かりました」

レイは側近に命じて茶を用意させ、その後二人にするよう頼んだ。

机に向かい合う様に座った二人は穏やかな雰囲気を出しつつも片方は緊張して、もう片方はいつに無く笑顔であった。

「前はあんなに素っ気なく島から出ていったのに。随分早く私を頼るのね?」

「…母になってやると言われてすぐに領ける人間はいません」

「血の繋がりがりじゃないって言ったでしょう。それに、子供を助けたいと思う大人は変かしら?」

「俺は19です…!」

「私にとっては子供よ」

「…何年も生きてる様な口振りを」

「あら、レディーの年齢に探りを入れるのは失礼よ」

反抗期の子供を躲す様に、茶化す口調で彼女は接していた。言葉では常に一歩先の視点で務めるレイの前では、文字通り全ての人間が母

と子に見えてしまう。

レイとの会話は、そういうものなのだ。

「でも、私の子になる時は貴方がどうする事も出来ず行き詰まった時。停滞は迷いであり、今の貴方にはその時は来ていない。今回は困った事ではあるけど、どうしようもない事情ではないのでしょうか？」

「はい」

「よろしい。ところで…歴史は好きかしら？」

「嫌いです」

「ごめんなさいね。空の知識には歴史学が欠かせないわ」

好き嫌いで教え方を変えるほどレイは甘い女ではなかった。

「今の世界は覇空戦争による影響で作られているから、戦争後の歴史に沿って教えるわ」

「…分かりました。ありがとうございます」

「なんなら、今日は泊まり込みの方がいいかもしれないわね」

「えっ」

”そんな長い…?”という弱音は吐けなかった。

数時間が過ぎた。

二人は身を寄せて地図を読み込んでいる。

「ポート・ブリーズには豊かな風があつて、商業・交易が盛ん。何より目立つのは信仰」

「信仰…あの国には宗教は無かった筈ですが」

「神と讃えられる存在はありふれているでしょ？」

「…島と契約した星晶獣ですか」

「そう。詳細は知られていないけど、この空域は島と契約した獣達が多く存在している。自然へのアプローチは確かに島を豊かにしているわ」

「まさか……！人間と共存出来たのは……星晶獣そのものが島に身体を明け渡す事で命を委ねたからですか？」

「そう。それ等を大星晶獣と呼び、島の崩壊はその獣の死を意味する。つまり獣が害意で島に危険を及ぼす事は無いということ」

「ある種の人間愛……という様にも受け取れます」

「……………反吐が出るわね」

「……………え？」

「何でもないわ。続けましょう」

不穏な空気が流れる事が多々あったが、レイは確かに正確な知識を彼に与えている。

「獣達の存在理由は兵器。感情を与えられたからこそその謀反は違った形で空の世界を変えた。結局のところ、星の民から離れた所でその力是不変わらない。いえ、寧ろ感情のまま生きる事は制御が効かない危険な状態であるという事かもしれないわね」

「確かに……」

「そして、暴走というケースが多いのにも理由があるわ。彼等は自身に与えられた権能から逃れられない」

「役割に従い続けるという事ですわ」

「貴方達を襲った獣も、無意識に自身の能力に飲まれたのでしょね。彼等は未だにそれを理解しないのだけれど」

星晶獣を語るレイの口調は何処か冷たく、怒りが滲んでいた。

「加えて、星のシステムは空に一部を残した。七曜の騎士よ」

「ファータ・グランデは黒騎士……でしたか？」

「ええ。メフォラシユの王都から選ばれた騎士よ」

七曜の騎士。

空域を統治する騎士であり、恐ろしい力を持っている。空域を遮る障流域を単身で渡る事が出来る強者。

その力は人智を超えていると言われており、一人の戦力は大国に匹敵する。

「その他にも星の勢力に対抗する為の戦力として十二神将。今はその立場から解放され、別の役割に準じた」

十二神将。

空の世界の十二方向に存在する神社に配置された戦士。

無病息災を謳う人々の為に祈りを捧げ、煩惱を取り払うのが役割である。

かくいうコーリスも年始には何度か神社に赴いている。その中でも十二神将の姿として確認できたのは南南東、南、南南西の守護神達。会話を交わしたのは南の守護神、サンチラであった。

午だけに馬が合ったのか、コーリスは少しだけ十二神将の役割を聞いていた。

曰く、煩惱という物は概念では無く実際に形として集まるものであり、野放しにすると危うい存在であると。十二神将は皆戦士にしては若い少女達であるが、星と戦ってきた集団としての名残がその強さに潜んでいた。

「空の世界の変遷はこれくらいしか情報が無いわね。他に聞きたい事はある?」

「…では」

コーリスは、一つの賭けに出た。

「空の下について、知っていますか?」

「……………」

彼がゾーイから聞かされた話では、空の下の大地に住む幽世達は現実そのものを捻じ曲げる力を持っている。そして、何より認知されない、影から空を侵食している存在だという。

コーリスはレイが長年生きている事を知った上で問いかけた。

「…私でも、空の下は見たことが無いわね。落ちてしまうもの」「分かりました。ありがとうございます」

知らないのなら致し方ないと、素直に話題を収める。

沈黙が続き、レイはポツリと呟いた。

「——私は、星の世界が憎い」
「…」

「同胞、子ども、父、母、兄弟、自然、文化、感情…そして平和を奪った星の世界を許容できない」

「その時から…生きているのですか」

「…ええ。同胞達が私を生かした。私は彼等のためにこの眼で星と戦ったわ」

レイは、閉じた瞼から一筋の涙を流した。

「貴方は普通に生きていいのよう？」

「なりません」

コーリスは断固として否定した。

目を開けたレイが彼の右手を握る。

「侵された貴方の身体の残滓からは星の気配がする……これは、死なずの呪いね」

「なら、俺の考え方も分かるはず」

「後悔し続ける事になるのよ」

「後悔も行動も幾らでも出来るという事です」

レイは驚いた表情でコーリスを見る。

彼の発言は無限に生きる事を示唆しているのだから。

「それに…」

「…」

「俺は貴女も助けたい」

……………。

「何故そこまで救世主になろうとするの？」

「救いたいのではありません。ただ、皆が自然に生きれる世界を作りたいんです。誰に支配される訳でもなく、ありのまま生きれる社会を」

「綺麗事は世を救わないと言った筈よ」

「成就するまで戦い続ける。無限に近い時を経て、何も変わらない程世界は無情でしょうか」

「無情よ」

レイは言い切った。

「貴方は道半ばにして確実に死ぬ。意思を引き継ぐ人間も作れず、世界を半端に変えて死ぬ。その呪いを受けた人間がどれ程いたと思っているの？不老になった程度で世界を変えられるのなら私が既にやっているわ」

厳しく、コーリスの耳に届いた。

それに対する返答は――

「…煩いですね。やるんです」

――逆ギレであった。

思わずレイの額に青筋が立つ。

「聞き分けのない……！」

「俺には家族の情報はありません」

「それは理由にはならないわ」

「昔から親しい人間は既に空の情報からは遮断されました。空戦の生存者として新聞に名前が並べられた程度で、俺に関する情報は極度に薄い。その理由が分かりますか？」

「……いえ」

「俺も貴女と同じく、裏で生きていた人間なんです」

「……まさか、初めて会った時から……!!」

「はい。マフィアに襲われたのは想定外でしたが、元々この島に来たのは外法の罪を問うため」

「聖騎士団……名ばかりの行動ね」

レイは決して裏事情に疎い訳ではない。

どの国にも表には出せない闇の側面がある。スパイ、暗殺、金に物を言わせた外交の出来レースすらも見た事があった。

しかし、ここまで普通に生きている人間がその様な側面を持っているとは思わなかったのだ。疑う理由が無かったと言うべきか——
否。

レイは1つのことに気が付いた。

コーリスはそもそも自身の闇を隠していないのではないかと。

仕事でも無く、暗躍でも無い。疑うことも無く自身の役割に身を委ねた……役目が思考に先立った異常者。

それが最も適切な表現だ。

それがコーリスなのだ。

忘却の性質を持つ霧は、それを助長していた。

「そして俺も一つ分かりました。レイ」

「……何かしら」

「貴女は人を殺した事が無い」

空間が、凍りついた。

「貴方は人間の純性を信じている」

コーリスだけが口を開く。

「正義を信じる者は悪を理解出来ず、悪に堕ちた者は正義を信じられなくなる。ならば、人間足り得る性質を信じる者は…」

無表情のままレイの手が震えた。

「純性を信じられるのは…純粋な人間だけでしよう」

「…：ならば、貴方は悪だと。そう認識すれば納得するのかしら…！」

「会って数日の男に何故敷居を跨がせるのです」

「…」

「子供は純粋さの欠片。貴女にとって俺が本当に子供なら、信じたという事ですか？」

「帰りなさい。…残念だけど。貴方とはこれで終わりよ」

「では最後に。万人を救おうとしている人間は世界を信じてなんかいません」

「…え？」

「それが出来るのは自分だけ。信じているのは自分なんです」

答えを聞かず、これを機にコーリスは二度とこの島を訪れなかった。

「いいのか？」

「レイは何らかの理由で俺を信用していたらしいが、だからこそだ」

「何故だ」

「俺に諦めを覚えようとしているからだ」

「…しかし、少なからず世話になったのだから礼はしておくべきだと思うのだが」

「…机にはルピと果物を置いておいた。それに、大人しく帰らなければ眼を使つて意地でも殴つただろうな」

「逆鱗に触れたのか？」

「純粹さに対して疑いをかける様促した。当然苛つく」

「…はあ。良き理解者だと思つたのだが」

「一番合わない。ゾーイから見ればどうだ」

「…：そうだね。私から見れば彼女が生きた約400年。身を穢さなかつた事には敬意を表するが、歴史に生きるには短すぎる」

「しかしどうやって…」

「霸空戦争の最中、何かしらの理由で命を伸ばしたのだろう。不死身ではない」

「外法、か」

「彼女の生き方は多くの人間を救っている訳ではない。だが、目の前にある命を確実に救っているという点では、尊いものだ。だからこそ、理想論には人一倍厳しいのだ」

「…少し、理解できた」

「もう遅いかもしれないけどね。それよりコーリス。ルクスが呼んでいた」

「団長が…？」

「リュミエールの門で待っていると」

「分かった」

コーリスが帰国すると、門の横には金髪の男が立っていた。

リュミエール聖騎士団団長、ルクスである。

鎧を着ず、プライベートな装いでコーリスを呼び出したのだ。

「突然呼び出してすまないな」

「いえ」

「世間話でもしないか？」

「分かりました」

本題の前に口で遊ぶのはよくある話だ。

二人は近くの地面に座り込んで会話を始めた。

「遊撃隊の再編成が決まった」

「…どのように？」

「ちやんとした遊撃だ。そして、法を破った者への正義審問。暫くの間はこう言った隊にする」

「安心しました」

「無論、お前が隊に組み込まれる事は無い」

「…！」

「王から聞いたよ。リュミエールを去るんだって？」

「…はい」

「ははっ。思い切りのいい奴だ」

カラカラと笑った後、空を見上げた。

「こんな事言ってもアレだが、俺は嬉しいんだ。お前が絶望の中元遊撃隊長を殺して、更に空戦で仲間を失った。耐えられずに自害するんじゃないかってずっと思っていたんだ」

「しませんよ」

「だから嬉しいんだ。星晶獣や街の人々のお陰で徐々に本来のお前を取り戻した事がな」

「…」

「だが本来のお前に戻ったという事は、逆に迷いが無い直進男が生まれたという事。お前は自分が信じた事に只管突き進むからな」

苦笑混じりにコーリスへ笑いかける。

「世界規模の願いなら当然……国を出るしかないからな」

「…すいません」

「構わない。戦力を失った痛手は新人育成で補う。それに、この国との関係を断つ訳じゃ無いんだろ？」

「はい」

「もしこの国と絡む犯罪者が国外に出たら、頼む事があるかもな」

「誠心誠意ご協力させて頂きます」

「よし。言質は取った」

ルクスは立ち上がって、コーリスの肩に手を置く。

凜とした表情を崩さぬまま、真っ直ぐ彼の目を見て言い聞かせた。

「だが、リュミエール聖騎士団団長としてはお前の決断に正当性を見いださなければならぬ」

「…はい」

「——力を示せ。2ヶ月後王の前で決闘を行う」

「了解」

「最後の団長命令だ。勝ってみせろ」

コーリス・オーロリアにとっての最後の試練が、ここに始まった。

33. 霧と光

「——今より、決闘を行う。双方、準備は良いか」
「コーリス・オーロリア、元より」
「ルクス・ベルバレク。元より」
「よろしい。では——始めッ!!」

——1日前の事だった。
スルトがコップを落としたのは。

「お前、今なんて」
「聖騎士団を抜ける」
「なんで」
「夢の為には騎空士にならないと駄目なんだ」
「……ああ、そういう事か。愛想尽かしたのかと」
「リュミエールには懇意にするよう団長から言われた」
「うんそれは良い事だ。他の奴には言ったか？」
「団長から伝わってる。ロイスに会うのが怖い」
「タマキンは守れよ。アイツはすぐ蹴る」
「……ああ。あと、ゾーイも一緒だ」
「はあ？騎士になってまだ2ヶ月くらいだろ。辞めたくなくなったにして
も……何でお前と」
「ま、色々あるんだ」

ボロを出すまいと、多くの事を語らない様に意識しながらロースト
チキンにかぶりつく。
そう、今日はクリスマスなのだ。

勘のいいスルトは疑わしくコーリスを見つめるも、自身も目の前のチキンを手に取った。

数口咀嚼し、彼は気まずそうに言った。

「…デキてるのか？」

「消すぞ」

「すまん。お前の好みは静かな年上の女性だったな」

「まったく失礼だな」

「はは、すまんすまん」

嘘である。

この男、遠い故郷の幼馴染の事しか考えていない。

「…それで、年は明かすのか？」

「勿論。だが、それまでにやらなくてはいけない事がある」

「なんだ？」

「力を示し、俺の行動に覚悟を求める。団長との決闘だ」

「——なる程な。年が明ける前に戦うのか」

「ああ」

「全く…急すぎるだろ。お前」

「タイミングが難しくくてな」

「しかし…お前が消えたら俺はボツチでクリスマスと年末を過ごすことになるな」

「国が許すなら遊びに来る」

「それはいいな」

クリスマスや大晦日等といった日は家族と過ごす人間が多い。

普段寮を取り仕切るグルシは家に帰り、子や孫達と共に過ごす為、自動的にコーリスとスルトだけになる。片や故郷が消失、片や勘当紛いの住み込み。当然過ごす場所は静かな寮だ。

ゾーイの咀嚼音さえなければ。

「何をしみじみと二人とも。チキンは変わらず美味しいというのに…雰囲気は大事だろう？」

「5分前までクリスマスの日程を知らなかった女のセリフか？」

「好きなだけ美味しい鶏肉を食べていい……なんて素晴らしい日だ」

「…」

「ゾーイ。クリスマスは別にチキンを食べる日じゃない……いや、一応食う日なんだけど……子供にとつての大イベントなんだ」

「それくらいは理解しているとも。子の純粋な願いが叶う日だろうか？
だがチキンは何なんだ？」

「一説によると、開拓者達が新たな世界を発見した時、何時も食べていた牛や豚が無く、その土地にあつた鶏を食したらしい。謂わば、開拓者達にとつての記念日に鶏肉を食べるようになり、それが日常に浸透したという事だ」

「ふむ……では、そもそもクリスマスとは何なんだ」

「それについては分からない。何故か全空の文化として残っているが、起源についての情報はこの世界に残っていないらしい」

「謎だな」

「だが、開拓という言葉にはとても力を感じる。コーリス、君の夢はある種の開拓であると言えるだろう。同じ様にスルトも種族の壁の開拓を望んでいる。これは人間にしか無い能力だ」

ゾーイは真摯な眼差しで二人に言った。

「——私には、それが許されていないからな」

(開拓、か)

剣を天に構えながらコーリスは考える。

道を切り拓く事が人間としての特権だとするのなら、何故現状を守り通す聖騎士の在り方が美德とされるのか。

長い歴史の中、世界を本気で救おうとした者は少なくない筈で、尚かつコーリスよりも圧倒的に優れていた者の方が多い筈だが、それが成される事も無く、国家という縮小体の中でそれぞれを守る事に尽力

した。

ゾーイが提示した道が正しいとは一概に言えない。彼女の存在そのものを疑う気は無いが、幽世の存在に関しては何処か急な話に思えたのだ。無論、それは幽世が実在していないという疑いでは無く、あくまでコーリスがそれを打破できるという憶測について。

もしかしたら、危険溢れるコーリスの能力を制御する為に理由を用意する事で自身の監視下の元、力を付けているのかもさしれない。

(どの道、感謝はしなければな)

チラリと横を見れば、見覚えのある聖騎士達が決闘を見守っている。

彼等は士官学校での同級生。あの空戦に参加し生き延びた者、戦いを辞退し街の避難に努めた者、数が減っている様に見えるのは…恐らく戦いで死んだ者もいるという事。

他の聖騎士が存在しないのは、これは私闘であるからだ。

あくまでルクスが一方的に挑んだ戦いであり、その責任を見届ける為に最も誠実とされる立場の聖王が立会人となる。

聖騎士にとって決闘は邪とされるべきものなのだ。

試合ではない。

だから、相手が倒れるまで戦う。

それが現在だ。

「——ふッー」

先に仕掛けたのはルクス。

様子見の横風ぎは回避を誘発しにくい先手であり、当然相手は逸らすか受け止めるかの二択になる。

コーリスは黒き剣で以て斬撃を逸し、金属同士の接地面に火花が散った。

(知っている。私はこの戦いを知っている)

側で見ているロイスは6年前の試合を思い出し、今の展開に既視感を覚えた。

自らが攻め、コーリスが守りに専念し、結果隙を突かれ敗北した。今では体力もキレも前以上だが、それでも彼の守りを崩すには魔力が必須。

だが、ルクスは剣も魔法も高水準。

その剣は瞬く間に相手を切り刻み、光の魔法は相手の肉体を塵に変える。

(…後悔だけは許しませんよ。勝つんです、コーリスさん)

ロイスは、リュミエールを去るコーリスに無意識の怒りを向けながらも、友としてエールを送った。

「…」

言葉は無い。

決闘に於いては戦闘の最中。軽口なぞ以ての外。

だが、それでもルクスは一声与えたかった。

(…掠め手を考えるのはよせ。お前は既に遊撃隊ではないんだ)

コーリスに染み付いた敵の裏を取る戦法。

対人に疎いゾーイには効果的であったが、コーリスの強みを活かせていない。

彼の強さは、崩しづらい防御に加わった膂力。

今の彼は、虚を突く事に専念しているだけである。

(下らん攻めを繰り返すなら——終わらせるぞ)

ルクスは剣と足に光を纏わせ、速度と剣撃の力を倍増させ、一息でコーリスの懐に潜り込んだ。

彼の右手を掴み、腹に向けて柄を打ち込んだ。

「ぐっ……は」

腹に速度が加わった打撃を食らい思わず後退るコーリス。

その隙にルクスは追撃に渾身の斬撃を繰り出す。

「っ」

かろうじて盾で防いだコーリスの頬に又もや拳が突き刺さる。

光の魔法は決して人間を光の速さに届かせる事はしない。だがしかし、速度を上昇させる事に於いては風属性にも劣らない。それに加え出力の上昇。

火の出力と風の速度を合わせた様な光に加え、ルクスの剣術が混ざる事で驚異的な肉体の稼働に成功していた。

謂わば、反応する前に叩く動作。

「――！」

だが、目の前にいたコーリスは消えていた。

霧による記憶飛ばしの影響と考えたが、直ぐに別の正解を理解した。

(…なる程。噴射か)

脚から魔力を噴射させる事でその場から立ち退いたのだ。

防御魔法を習得してから重い鎧を外したコーリスにとって、速度戦は多少得意なものであったが、それでもルクスの速さには叶わない。虚を突く前に行動される。

ならば、力で勝たなければならない。

コーリスは集中した。

目を閉じ、剣を中段に構え――

「ツツツツツ!!」

歯を噛み締めて飛んだ。

「更に速い……!?!」

ルクスが腕を動かした瞬間にコーリスの長剣が激突する。振り切る前に当てられた為、当然彼の肩と腕は後ろに弾かれる。

彼の剛力を以てすれば常人を超えたスピードは実現出来るが、技術は補えない。故に追撃の数発はルクスに見切られ回避される。

…だが、げに恐ろしきは彼の攻撃回数。

強化された身体によつて、重さを伴う長剣をナイフを振るうが如き速度で繰り出す事が可能。加えてダマスカス骸晶が使われた武器な為、受け止めるルクスにはかなりの重さがのしかかる。

エールのしなやかな瞬発力、剛力、丈夫な剣。

全てが噛み合っていた。

「…帰ってきた」

「…はい」

「これが、コーリス・オーロリアの戦い方だ」

スルトとロイスは彼の姿を見て懐かしそうに目を細めた。

騎士団に入団して町を守っていた…聖騎士コーリスの戦い方が戻ってきた。

コーリスは完全に闇から帰還した。

「ハアア!!」

(この力……受け流すしかあるまい……!)

ルクスは敢えて剣を受け、その軌道を滑らせるカウンターを考えた。

だが、彼は動きを止めるべきでは無かった。

「ぐはっ……!」

義手に展開された大盾がルクスの身体を吹き飛ばした。

シールドバツシユである。

「く……!」

すかさず体制を立て直し、コーリスに対する防御は寧ろ悪手だと考えたルクスは目にも止まらぬ速度で連撃——しかし防がれる。

「なっ!?!」

これは、見切りでは無い。

コーリスの剣には霧が纏わせられていた。つまり、打ち合いの最中、どの方角から攻撃が来るかを感知できれば、魔力の荒使いが可能。な彼にとって防ぐ事は難しくない。

方角。それだけ分かれば巨大な壁で防げるのだから。

やり方は出来ているという訳だ。

無表情のままルクスを追い詰めていくコーリス。

そう、彼は対人において絶対的な強さを持ち合わせている。空戦の様に大火力が必要であったり、一方的に空中で囲まれた状況では活躍は難しいものの、ゾーイやレイといった実力者は既に彼に対し”完成した強さ”という評価を下していた。

彼を打ち崩すにはスルトの様な人智を超えた力か、破壊の概念を持つ攻撃でなくては効果が薄い。

「レイディアン・レイ!!」

「……」

だが、ルクスとて優れた騎士。

光の雨を降らせコーリスの頭上を一時的に支配した。

降り注ぐ光の槍を回避するには中心に近すぎるので、彼は敢えてルクスに接近し被撃回数を減らそうと試みた。

この魔法の狙いは霧の引き剥がしであり、自身の攻撃をコーリスに通す一助として用いた。

回避に意識を誘導されたコーリスに斬撃が襲いかかる。

「ぐあっ……」

盾の構成には間に合わず、上体を反らしたものの傷を負ってしまった。

(…脇腹か。激しく動けば血が出過ぎる)

ならば、どうするか。
動かずに倒すしかない。

——瞬間、ルクスの顔面付近に青い光が通過した。

「え」

誰かが思わずに零した困惑の声。

限りなく短い間隔の後、背後から落下音が響いた。

それは、風穴が空いた瓦礫。

コーリスは剣を持った右手を向けていたのだ。そして、地面に得物を突き刺すと、周囲を囲う様に透明の壁が構築されていく。

「ケーニヒマウアー。ケーニヒシルトの応用で余波を防ぐ領域を作りました。ここから先は大火力を以てお相手します」

その言葉と共に彼の傷が光り始め、薄い霧が充満した。

この空間こそが、コーリスの戦場そのものと化してきたのだ。

一挙手一投足が感知され、やがて濃くなる霧によって思考が乱され、記憶までもがリセットされる。

その間に打ち込まれる光線は相当な威力。

一対一で戦うのならば、やはりコーリスが最強であるとルクスは再確認した。

「望むところだ…！」

大量の魔力を剣に纏わせ、ルクスが駆け出した。

戦況——コーリスに傾き始める。

○○○○○○○○○○○○○○○○

俺は普通に負けそうだ。

お前はいつも変なタイミングで強くなるな？

だが、誰もが知っていた筈だ。

コーリスの防御魔法と霧をフル活用すれば、むしろ負ける方が難しいと。対人において意識の障害は絶対的な強さを持ち得る。

人智を超えた火力は俺の人生経験上スルトしかない。

星晶獣でさえ、純粹な破壊力を持つ奴は少ない。何故なら、獣達は概念系の能力が多いからだ。感情を持つ時点で霧の餌食になるのは確定。

あの戦いが空中でさえなければ難なく勝っていたと言えるほどにコーリスの影響は大きい。

そして、変わった。

後々ロイスに聞いた話だが、コーリスは死ぬ寸前に星晶獣の助けによつて命を紡いだらしい。それからだ。

——お前が焦りだしたのは。

余裕が無い。

本人は夢の為には幽霊の身体が好都合と言っていたが、ならば何故そこまで生き急ぐ？

…突然現れた銀髪の女も気がかりだ。

あいつの周りだけが急速に動いている。俺達は蚊帳の外なのか。

それならば——せめて…せめてだ。

ほんの少しでもリユミエールでお前の理解を深められれば…助けになるかもしれない。

俺が勝てば、お前に余裕を与えられるかもしれない。

ロイスとスルトも喜んでくれる筈だ。

…エクシンダも報われる事だろう。

「次で終わる」

「…はい」

霧が深まれば徐々に俺の自意識や記憶を一時的に奪われる様にな

る。そして、霧が充満したこの場においてはそれが連鎖的に続き、実質の無力化となる。

ならば、奥義で以て霧ごと払うのみだ。

一度腕を振り下ろしてしまえば記憶の遮断など無意味。

一撃で決める。

「ならば、俺も奥義で——」

俺の剣に光が集まると同時に、コーリスの剣にも魔力が込められていく。

白く黄色い光に比べて、蒼く薄暗い色。

なる程。前のビーム事件はそれの練習か。

「陛下…御下がりを」

「うむ」

この規模では壁が壊れるか…？

いや、コーリスの事だ。二重構造にはしているだろう。

なら、安心して大火力を放てる。

「…行くぞ」

「行きます」

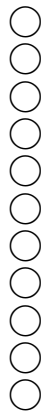
——この一撃、リユミエールの意味と知れ。

「ノーブル・エクスキューション!!」

「ガンマライト・エクスキューション!!」

——はは。嬉しいことをする奴だ。

…リユミエールの奥義から着想を得ているとは。



光と光がぶつかり合い。

霧で遮断されていた視界が明け、エネルギーの衝突が地を揺らす。ノールブル・エクスキュージョンはリュミエールの秘技の一つであり、極めて凝縮した魔力を剣に滾らせ放つシンプルな破壊技である。光の属性を扱える者だけがその技を習得する事が出来たのだ。

そして、今放たれたコーリスの技は秘技のイロハを踏襲した極大威力の斬撃。

剣から大砲のように放つビームとは違い、斬撃として押出し続ける。

一度に放出できる魔力量が互角だとしても、凝縮された光を放つルクスと光を放ち続けるコーリスでは質が違う。

つまり、一度でも突破されればルクスの負けとなり、拮抗状態を打破されればコーリスの負けが近づく。

駆け引きも何も無い、破壊の押し付け合いが始まっていた。

「リュミエールの秘技……この程度で打ち負かせると自惚れるな……!!」

「……強い……!」

ファータ・グランデでも極めて規模の大きいリュミエールの軍事力。そのトップに立つ男の力は桁違い。

だが、コーリスはレイとゾーイとの邂逅によって自身の力の解釈が広げられた。

レイの眼に操られた時は放出の概念を知り、ゾーイとの戦いでは推進の意味を悟った。

コーリスは、溜め続けた。

剣の先に斬撃と、もう一つ。

剣の根本に魔力を溜め続けたのだ。

「が……ぐ」

光には熱が伴い、火とは違い直接触れなければ熱も感じない。だ

が、コーリスは既に光の奔流に飲まれかけていた。
しかし未だ——溜める。

「…終わりだ」

ルクスが腕に力を込めるた瞬間——コーリスの溜めが完了した。
「今ア!!!」

恐ろしい密度の蒼光が音も視界も飲み込み、ルクスの光を打ち消していく。

「何…!?!」

「属性の無い魔力はただそこにあるエネルギー！俺はそこに速度を加えた…!!」

「速度——」

「つまり…溜めるだけならば手元に置いておいても不利は無い——俺の勝ちです…:~:~!」

「…見事」

属性は時に自らの肉体を害する。

何故なら、自然現象の顕現そのものであるからだ。故に空の民は武器を媒介して力を放出していた。

コーリスの魔力に属性は無い。

エネルギーとしての力を推進力で押し出しているだけ。つまり本質は物理攻撃に近いものだ。

手元で溜め続けても自身に害はない。

ルクスの光が絶え、爆発と共に壁が解除された。

「…勝者は」

聖王が煙の中に立つ影を見据える。

彼は、剣を天に掲げていた。

「コーリス・オーロリア」

コーリスの道は、ここから始まった。

34. Ba and Va

決闘の後、大晦日の馬鹿騒ぎも終えた日の深夜。

「レイに勝って、ルクスに勝って…後は全力のスルトに勝って私にリベンジかい？」

「スルトには勝てん」

「…生命を融解させる程の熱量。確かにあの子がいればリュミエールの平和は保たれるだろう」

「ゾーイにも俺が何千年生きたとして、勝てそうにない」

「それはどうかな。戦略の違いはあれど、私自身の力にこれ以上の成長は無い。星晶獣は人造物だからね…物には役割以上の力は発揮できなないのが普遍的さ」

「人間の良い所は知能だけでなく、進化だということか」

「そういうことだ」

俺は自室でゾーイとこれからの計画について話していた。

「騎空士は信頼と知名度の仕事だ。依頼でさえあればどの国家にも属さずにどんな出来事にも介入出来るが、戦争に関われば傭兵や侵略国家からの反感を買いやすい。初めは雑用に近しい動きしか出来ないが、構わないか？」

「無論、構わない」

「よし。なら、最初はポート・ブリーズに行く。一人だけでも商人との繋がりを得ておく」

「フェードラツへに行くのはどうだい？規模が大きく、君も顔を通せる筈だ」

「それはあくまでリュミエール聖騎士団のコーリスとしてだ。細かく言えば魔力質。変に自由な身柄だと実験台になるかもな。それに…あの国の場所は少し危ない」

「確か…多くの国が集まって出来た島だったな？」

「ああ。近隣のウェールズとは仲が悪いと聞く。そしてウェールズは小国ダルモアに少しずつ攻め入っている様だ。フェードラツヘが強い事は間違い無いが、関わるのはよしておこう」

「戦争で潤う平和もあるという事か…」

「それでもファータ・グランデは平和な方だ。他の空域ではリュミエールの様な国は少ないからな」

ファータ・グランデに於いて戦争自体は珍しいものだ。

リュミエールとフェードラツヘが友好関係を持てたのも、此方側が大損害を受けたからであって、普段ならば戦火に巻き込まれることを予測して不干渉を貫くはずだ。

同じ騎士の国だが、あちらの島は戦争が絶えない島であり、此方は自然豊かな商業国の集団に近いものだ。もしフェードラツヘが争いを好まない性質ならば、大国との？がりを以て抑止力とする方針だろう。

しかし、それは同時に相手が他の国との？がりを持つ可能性を生む。

「取り敢えず、今日は寝て……そうだな、願掛けにでも行くか」

「願掛け…？」

「ああ。十二神将の神社——」

今年は確か…

「——犬神宮だ」

「あったかい…」

「犬神宮限定マフラー…結構高いな」

朝日が眩しい時間。

俺達は早起きをして騎空艇に乗り込み、少し島を跨いで犬神宮に到着した。

可愛い子犬のマークが特徴のグッズが沢山売られており、お守りも購入しておいた。俺は『厄除御守』、ゾーイのは『交通安全』と書かれたものだ。

そして参拝には多くの人間が朝早くから訪れており、この行事が空にとつて根強いものである事が伺える。

「凄い列だ。人々は皆、祈りを捧げる為にここに集うのか？」

「ああ。何となく自身の未来を案じて祈るんだ。例えば幸福な未来を約束されなくても、神社でお参りをする。そういう不思議な楽しみがここにはある」

「ふむ……」

「後5分もしたら俺達の番だ。心の中で自分の願いを呟く」

「確か、手を合わせて目を瞑るんだっただな？」

「そうだ」

周囲の賑やかな会話で俺達の声も小さく聞こえるが、この雰囲気は穏やかで心地良い。ゾーイはこういった風情を不思議に思うが、それでも好ましく思ってるようで何よりだ。

今まではスルトやロイスと昼に行っていたが、早起きが出来るゾーイがいるなら問題はない。朝に起きれない奴を態々起こす程薄情じゃないからだ。

「……………コーリス」

ジリジリと前に進んでいると、次第に周囲の音が困惑を含んだ声に変わっている事に気づく。

つま先立ちで前を見ても人が多すぎて見えない。

「何かいる様だ」

「魔物か…？それなら私が殲滅するが」

「いや、逃げる人間が一人もいない。変人でも現れたか」

ざわついた声だけがこの場を跋扈し、進まなくなった列に後列の人間達が意義を申し立てる。

だが、混沌としたその場が一声によって掻き消された。

「盗賊と言っても所詮は素人…貴様等の様な蛮族に祈りを捧げる資格は無い！失せるがいい!!」

「ひ、ひいえあああ…」

「なんだこのガキ…?!強えぞ?!」

「に、逃げろ!!」

凜とした少女の声が響けば刃物を持ったガラの悪い3人の男達が寒冷の中、大汗をかいて犬の様に足を回転させながら走り込んできた。

小声でゾーイに話す。

「…どうやら、荒くれ者が参拝の場を汚したらしい」

「彼等はいつもの同じ格好をしている気がするな。人間荒れると皆あの様な姿になるのか?」

「言うな」

コソコソ雑談していると、またもや声が聞こえたと思ったら、今度は『しゃりん』という音が一回。

紛れもなく、斬撃音。それも刀の音であった。

「まだいる様だな…纏めて相手をしてやろう。遠からん者は音に聞け！我が名はバジュラ!!何なら腕に自身がある者も挑んで来ていいぞ！」

「うおおおおおおお!!」

「剣の道に進む者として我慢できん！俺も行くぞー!!」

「今年初のファイトクラブだああ!!」

何やらガタイのいい男達も突っ込んでいった。

どうやら荒くれ者達を撃退した女性：少女が剣士達の情熱を誘発してしまつた様で、次々と手合わせが始まつている。

「お参りどころじゃない」

「どうするコーリス。お雑煮だけ食べて帰るか？」

「そうするか……ッ!?」

台無しになつてしまつた参拝を見て帰ろうと視線を変えた瞬間大男が吹っ飛んできた。

どうにか躲せたが、ドラフを吹っ飛ばせる力があちらの少女にはあるのだろうか。

「むははは！よく飛んだのお！それ!!」

「ぐはー!」

「ぐおおお!!」

前を見ていると今度は二人飛んできた。

その後も十人、三十人と飛んできて、やっと少女の姿が見えてきた。

犬の様な耳に巫女服の少女。

だが、目立つのはその白髪。純白が太陽に照らされて、神秘的な美しさを醸し出していた。

刀を持っている事から戦士の役割——十二神将だ。

「む？貴様等もこのバジユラと打ち合いたいと言うのか？よろしい。剣を構えるがいい」

「いや、俺は」

「うん？上物の剣を持っているではないか。特に我々お手製マフラーを身に着けている貴様。強く見えるぞ」

「私も参拝をしにきただけだ」

「そうか。なら、もう少し待つがいい」

そう言つてまたもや戦闘を始める少女。

近くで見ると恐ろしい戦闘力だ。その細い腕で独特な形状の刀——柄に向かつて刃が付けられた弓の様な形の刀を扱い、軽々と巨漢の剣を逸している。

だが、先程の様に人間を吹き飛ばす技術は見えない。
あれは何だったのか。気になる。

「ああ…もう私が来る前に……………」

神社の者が駆け付けたのか、溜息を溢しながら一般の参拝客に頭を下げる。此方にも頭を下げてきた。

彼女も犬の様な耳に巫女装束。明確に違う点があるとするれば、あの少女と真逆の金髪で、普通の刀を腰に差している事だ。

戦闘員が複数いるのか……………?

「申し訳ありません…」

「いえ。ところで、あれは恒例行事だったり?」

「違うんです。あそこで暴れている女の子…私の姉なんですけど、戦うのが好きで……………」

「姉?」

「はい。…申し遅れました。私は犬神宮の主。十二神将―西北西の守護神、ヴァジュラです」

「あ、貴女が……………」

「はい」

「じゃあ、あれは?」

「…ただの巫女、という事になります」

「……………」

あんな巫女どこにもいねーよ。

「…それよりも姉さん!何やってるんですか!!」

「おおヴァジュラ!先程蛮族達が煩惱を撒き散らしながら荒らしまわっていたのだ!揉んでやったわ!」

「私が来るまでに一般人諸共吹き飛ばしていたじゃないですか!?!」

「がなっってくれるな…皆楽しんでたからいいだろ。Win―Winだ

ウインウイン」

「待っている人に迷惑をかけて申し訳ないと思わないですか！謝ってください!!」

「えー…寅とらだつて暴れたじゃないか」

「東北東は煩惱が溜まりやすいので戦闘によって場を浄化しなければならなかったんです!!それに公然と暴れてたらラオラオ様が見過ぐす筈が無いでしょう!」

「ラオラオ?あのマスコットもどきか…デカイ顔してうぎつたいのう」

「姉さん!!」

姉妹喧嘩、というよりは妹が割を食っているようだ。

自由奔放な姉に十二神将は務まらなかつたが故の苦勞、心情を察するばかりだ。

ゾーイも面食らつて言葉が出ないようだ。

「十二神将…その特殊な力に対して平和で自由な立場。不思議なものだ。種族としての壁さえ超えかけている」

「風の噂だが、寅の十二神将は桃から産まれるらしいぞ?」

「人の神秘はまだまだ未知な部分も多いな。……コーリス、劍を盗られているぞ」

「うん?」

すかさず腰を見ると劍だけが鞘から抜き取られていた。

重さの変化すら気づかせない手腕…いや、単純に俺が鈍かつただけか。

「ほう、劍にしては切れ味よりも硬度に重きを置いているか。しかしこの重さは最早大劍…普通ならば圧して斬る使い方だが」

手ぐせの悪い姉がこちらを見る。

「エルーンの長所を潰すとは思えん…貴様、もしかして強いのか?」

「多少は腕に覚えがある」

「それはそれは僥倖!!なら一打ち——ばごっ!」

「私にも限度があります、姉さん」

「つ、強くなったのお、ヴァ：：ジユラ」

妹による愛のゲンコツで撃沈した姉。

その後普通に参詣した。

「ふむ：なるほどなあ。私の妹は十二神将として煩惱と日々戦っているが、星晶獣とはそこまでだ」

帰ろうとした俺達に興味を持ったのか、姉の方が俺達を場に留め、島の入り口付近の腰掛けに案内してきた。

特に予定は無いし、十二神将の情報も欲しいので素直に会話を楽しむ事にした。

「煩惱、とは人々の悪しき心の様なものだと聞いているが」

「言葉の意味ではそうだ。だがなゾーイよ。その煩惱自体が集まって形を成し、空に敵意を剥く。成り立ち自体が煩惱からだからその魔物も煩惱と呼ぶしかないのだ」

「呪いの様なものか？」

「然り。十二神将は力だけの存在では無く、神力を以て奴らを浄化する役割の方が重要だ」

十二神将特有の力があるという事か。

そして、それは祖先代々からの系譜でもあると。

そこで、俺は気になって聞いてみた。

「純粋な戦闘力ではヴァジユラと妹のヴァジユラ、どっちが強いんだ？」

「……ん？我はバジユラだぞ」

「え、いやだからヴァジュラと妹のヴァジュラはどっちが強いんだ?」
「……………ん? 我はバジュラ……………いや無限ループだろうが! 我はバジュラだ!!」

「だから姉のヴァジュラと妹のヴァジュラだろ」

「我はバジュラ!! 『バ』だバー!!」

「ヴァー……………?」

「バだ!! ハに点々付けてバ! 妹はウに点々付けて小さいア!!」

「…ああ…! ようやく分かった。バジュラとヴァジュラか!」

「いやだからバジュラとヴァジュラだ!!」

「今そう言っただろうが!」

くそが。

頭がおかしくなってきた。

「大体響きが似てるとしてもどっちかと言えばバに寄るだろ!! 何でもヴァに引つ張られるのだ!」

「いや…何か十二神将っぽい名前はヴァかなと」

「ならば貴様が知ってる十二神将の名前を言ってみろ!」

「サンチラ」

「小さい文字どころか濁音すら入ってないが!」

「ヴァジュラって神々しいだろ。バジュラは何かパチモンみたいで」

「貴様!!」

二人でもみ合っていると、ゾーイが肩に手を置いて諭してきた。
自分が情けない。

「コーリス、ここは君の落ち度だ。素直に認めよう」

「…済まなかった、バジュラ」

「フン…!」

「私からも謝らう。ヴァジュラ」

「貴様アアアアア!!!」

あー…まだ文字には完璧じゃなかったんだっただな。

第2戦が始まってしまった。

「き、貴様この天然が！これ以上ややこしくして我の名前を馬鹿にするでないわ!!」

「君はヴァジユラ。君の妹は…えっと、ヴァアジユラ。発音はこれで完璧な筈だ」

「そこまで露骨にヴァを強調しなくてよい！どっちも発音的にバだ!!」

「…分らない」

「一般教育を受けてないのか!？」

「うん」

「!？」

あー長くなりそう。

俺達は結構人の気遣いに助けられてたのかもしれない。傍目から見ると天然ってこんなにキツイのか…。

「変な奴らだ…17年生きてきてこんな奴等を見た事が無い。…ああ質問の答えがまだだったな。妹も十二神将の中では武に秀でた者ではあるが、我のほうが強い」

やはり小さな身体で多くの巨漢を相手取る力量。

只者では無いか。

俺は納得したつもりだが、ゾーイはそうではないらしい。

「十二神将としての才能は無かったのか？」

「生憎と存分にある」

「…ますます分らないな」

それはつまり、力量も才能も妹よりも上回っているのに何故十二神将でないのか、という事だ。

確かに、戦う事が好きならば十二神将としての役割もそう悪いものでは無いはず。

…十中八九。

「人格、だろうな…」

「そろそろキレるぞー、我」

「違うのか?」

「違うわ」

「まあ細かい事は聞かん。ゾーイも細かい詮索は嫌いだろ?」

「ああ」

「煽るだけ煽って納得するのも性質が悪いぞ貴様等」

それはすまん。

俺達をジツと睨んで咎めた後、今度は俺の左腕を見てきた。

「……む?なんだ、その腕。やけにガチャガチャ言う」

「これか? 鎧デザインの義手だ」

「…か」

「ん?」

「……か、かつこいいなあ………!!!」

え、ええ…。

結構男前な感性を持っているようだな…?

「ちよ、ちよつと斬らせてくれんか?」

前言撤回ごいつヤバイ。

その後も身の丈話から始まって、俺の人生の経験をバジュラに話していった。

彼女はとても興味津々で、瞬きもせずに食い入る様に俺の声に耳を傾けていた。

「世界の為に騎士を抜けて旅立つとな」

「ああ」

「威張るだけの理想論者は好かんが、思い切りのある者は好ましい。……あの空戦、私の耳にも届いていた。その戦いに生き延びた貴様ならば実力も相応だろう」

品定め、と言うことだろうか。

何を考えている…？

「しかし剣の道だけは独学では成らん。如何に天賦の剣才であろうと、道に触れなければ創造すら敵わんからな」

「…」

「どうだ？ポートブリーズに行く前に、一つ犬神宮で剣を学んでみないか」

「ここで…!？」

「十二神将随一の戦闘技術、それが犬神宮の在り方だ。貴様にとっても悪くないだろう？」

「しかし許可は…？」

「構わん。我が貴様の剣を教えてやる。刀でなくとも問題ない」

「…ゾーイ」

俺は選択を委ねた。

以外な提案に面食らったという事もあるが、正直自身の剣術には劣っている物を感じていた。

だが、旅にはゾーイの目的も伴う。一存では決められない。

ゾーイは考える素振りを見せて、直ぐに結論を出した。

「私は賛成だ。コーリスが強くなる事に不都合はない。寧ろ、私からも頼もう」

「決まったな。ではなコーリス、ゾーイ。犬神宮の巫女長、バジユラは何時でも貴様等の根性を歓迎しよう」

そう言い残して、バジユラは妹の元へ戻っていった。

「：ゾーイ」

「なんだ？」

「バジユラは強いか？」

「人として、そして剣士として空の中でも上位に位置する実力者と
言ってもいい」

「人として？」

「精神面、という事だ」

「心の強さと技術が相まって、優れた戦士という訳か…」

「…いや、戦士としては限りなく弱いだろう」

「何？」

「彼女には戦士として致命的な欠陥がある」

「それは…なんだ？」

「いずれ分かる」

含みを持たせつつも、その言葉の続きを隠すゾーイの表情は何時もに比べて…哀愁が漂っていた。

35. バイバイ、リュミエール

「鎧、エンブレム、剣。私、コーリス・オーロリアは陛下に全てを返上致します」

「……うむ。ご苦勞であった」

玉座の間。

今この場にいるのは聖騎士長と聖王、そしてコーリスの3名だ。彼は騎士団を抜け、鎧も地位も返上し新たな姿となって空を旅する。

コーリスは跪くのみ。

静かに王の言葉を待っている。

「だが…剣はお主の物だ」

「…陛下」

「私は空戦での活躍を踏まえて剣を作る許可を出した。だが、それはコーリス・オーロリア個人への敬意を込めた物。元より騎士団に還元する必要もない」

「…有難きお言葉。感謝します」

「ルクスも構わぬな？」

「これからの彼の成長を予期すれば最善です、王よ」

「ははは！ 違うない」

ほんの少し、リュミエールを去る事への圧力を込めた笑いは、厳格な王にしては珍しい温情がこもっていた。

「して、コーリス。行く先の検討は付いているのか？」

「はい。元々はポート・ブリーズに拠点を置く予定でしたが、数奇な出会いの元…犬神宮にしばし滞在する事になりました」

「犬神宮とな？ 此度の神事将と関わりを持ったのか」

「正確には、その親族です」

「お主は行く先々で奇妙な出会いをするのだな。その縁、大事にする
といい」

「はーい」

あの空乱を経たコーリスは数々の出会いを得た。

ナタク、サテユロス、メドゥーサ、バル、ゾーイ、リッチ、レイ、
バジユラ、ヴァジユラ。

4体の星晶獣は彼に勇気を与え、ゾーイは使命を与え、レイは世界
を教え、バジユラとヴァジユラは力を与える。

リッチは何もない。

出会いがコーリスの空っぽな内面を満たしていき、そしてこれから
もそう在り続けるのだらうと、王は思いを馳せた。

ゾーイはコーリスを待っていた。

ルピを入れた袋を盗まれない様に見張りながら、空をゆつくりと眺
め、未来への懸念を払拭すべく気合を入れる。

「この国が空の一端すらも遠い規模だとは……空とは、広いものだ
な」

世界を俯瞰するかの様に扱える調停の使徒であっても、実際に顕現
して過ごす事で、何か感慨深い物を感じたのだ。

それが例え空の世界の7つの空域の一つで、更に数ある島の中の一
つの国に過ぎないとしても、ゾーイはこの国に思い出を残す程に影響
を受けた。

「コスモス……貴女が天司長と創り上げた世界は、とても美しく育つ
た」

彼女は、蒼き空の更に向こうにいる元身に報告をした。

例え直ぐに移り変わる平和だとしても、その営みこそが空の民と言
える。

星の民には成せなかった温かみだ。

少し時間が過ぎて、ゾーイの元にスルトが訪れた。

「スルトか」

「…なあ、率直に聞かせてくれ」

ゾーイと同じく空を見渡しながら、ハーヴィンは語りかけた。

「何で、騎士になつてくれたんだ？」

「……まさか」

「コーリスに連れられるのか、コーリスを連れて行くのか、それは俺には分からないけど。少なくとも…お前、態々騎士として働く必要は無かったんじゃないか」

「私は義理を…」

「騎士として物凄く短時間だが…ゾーイの活動は非常に褒められた物だと聞いた。元よりコーリスと共に空に旅立つのなら、寮を借りるだけで良かった。嫌な言い方だが、その程度で俺達に義理を感じる必要はない」

「……困ったな。どう言えばいいのか」

「コーリスは、確かに俺達の大事な仲間だ。お前は、リュミエールからコーリスを奪う事に罪悪感を感じたのか？」

「罪悪感…：そうかもしれない」

「俺はバカでチビで考えるのも苦手だ。でも、謎に包まれたお前を王が認めた時点で、敵ではなくとも…その未知に触れてはならないものだ」と理解している」

ゾーイは隠す事に専念していた訳ではない。

何故なら、そこまでこの国に介入するつもりは無かったからだ。しかし、寮や騎士団で実際に人と過ごす内に、無意識の緩みが彼女を包んでしまった。

「お前は間違い無く優しい奴だ、ゾーイ。コーリスと何かを成す為に空に行くのなら…」

「…」

「アイツを助けてやってくれ」

「元よりそのつもりだ」

「家族愛を求めて…得られないからこそ友を求めた。だが、アイツは故郷を失い、この国に依存するしかなかったんだ」

「私はコーリスと…」

「友だち、だろ?」

「とも、だち…:か」

ゾーイにとって、コーリスは庇護対象であり、コスモスの手段であり、利用する武器でもある。如何に彼に優しく振る舞おうと、幽世に對抗するために利用した事に変わりはない。

その過程でコーリスが世界を救うという目的を得た現在でも、それはゾーイが促したものではない。

彼女は、素直に彼を友達と呼べる立場では無いと感じた。

それが、ゾーイの罪悪感である。

「…:頼むぞ」

「了解した」

スルトはこれ以上は野暮であると感じ、簡潔ながらも重い言葉を彼女に残した。

「む?コーリスを見送らないのか」

「ん、あー…こつちもやる事があってな」

「そうか…」

「まあ、お互い踏ん切りはついてる。心配するな」

今度こそ、スルトは城に戻っていった。

ゾーイと合流したコーリスは、もう何回も訪れた騎空艇の乗り場に向かっていた。

しばらく世話になる事は無くなる。

「お！コーリス！またどっか行くのか？」

「はい。次は犬神宮に」

「頑張るねえ。また任務だろ？」

「……いえ」

「…？そうか。ま、乗っている間は休んでな」

幾度となくコーリスを送り出した操縦者も、彼がリュミエールを後にする事には気づかなかったのか、いつも通り準備をする。

出発までに時間がある為、ゾーイが口を開く。

「…誰も、見送りにこなかったな」

「平日で皆は仕事だし、街の人たちも知らせてないからな」

「少し、寂しい気もするが」

「いいんだ。今世の別れじゃあるまいし」

「そうだが…」

何か、ゾーイから齒切れの悪さを感じるコーリス。

彼は少しだけ察した。

「案外、お前もリュミエールを気に入ったんだな」

「あ、当たり前だ！ご飯は美味しいし…日差しも温かいし…明るい。皆が活き活きしてる」

「以前顕現した時は？」

「暗い街だった。傭兵達が依頼に目を光らせ、街の人々は毎日少しずつパンの欠片を減らしていく……もう2百年も前の話だ」

「そうか」

「リュミエールは、素晴らしい国だよ」

少ない滞在でも、人の温かみが感じられると評されて、離れた身だ
というのに、コーリスは嬉しくなった。

だが、その愛国心を咎める様に、騎空艇の動作が始まった。

「……………これで聖騎士も終わりか」

「…」

国が恋しくなる前に彼は室内に籠ろうとしたが、ゾーイがその手を
掴んだ。

「どうした」

「……………コーリス…！見てみる！」

「？」

「あれは……………ルクスとスルト……………ロイスもだ!!」

ゾーイの興奮した声を聞き、離れていくリュミエールの景色に目を
向けると、城から真上の位置に大きな文字が見えた。

Good luckの文字は誰よりも彼を導いた団長の光で。

saluteの文字は誰よりも彼を案じていた相棒の水で。

from friendsの文字は誰よりも彼の友であった少年
の火で。

「…お、れは」

「…コーリス？」

故郷から離れる希望、故郷が無くなる絶望。

騎士としての覚悟、空乱で失った仲間。

長年強く在るべしと、そう務めてきたコーリスの感情は遂に限界を迎えた。

「こんなに……恵まれていいのかつ!？」

リュミエールの住民が協力して魔力を集め、それに3名が属性を込め、大砲と共に放出し文字を描く。

勿論彼を送り出す騎空艇の操縦者も協力者である。

旗から見れば唯一人を送り出す為にしては大掛かりで、愚かな大國に映るかもしれない。

——しかし、国を守り続けた騎士に賛辞と激励を評さぬ程、彼等は情熱を捨てていなかった。

彼の目から涙が溢れる。

その姿を見たゾーイは罪悪感より先に、ただ背後から抱きしめて、その頭を撫でた。

「いいんだ。君は、頑張ったから」

「みんな…」

「皆、君の頑張りを知っていたんだよ」

Good luck, salute from friends.

「…ふふ。バイバイ、リュミエール」

ゾーイ心からの感謝をリュミエールに送り、優しく微笑んだ。

—とある島。

「んー」

「どうした、サテユロス」

「コー君がね、泣いてる気がする」

「えっ怖…アンタほんとにヤバいんじゃない?」

「コーリスは前に進む事を選んだ。無駄な干渉はあの国を墮落させる事に繋がると、そう決めた筈だぞ」

「いやストーリーキングしてる訳じゃないからね!」

「どうかしらね」

「どうだかな」

「むう…：ナタク君もメドウちゃんも意地悪!気がするだけだよ!」

「それが余計怖いのよ」

「バアルの様に自分を探しに行く事を勧める」

「ひどー！ー！ーい!!!」

「…でも、何でそんなにアイツを気にかけるのよ」

「うーんとね、気にかけるっていうか…：コー君ってさ、凄い事とか簡単な事だとか関係なく、誰にも出来なさそうな例外中の例外を起こし
そうじゃない?」

「ふむ…：直感的な意見だが、一理ある」

「だから楽しみだなーって! たった数十年待てばファータ・グランデ
が変わっちゃうって思うと!!」

「考えすぎね」

「どっちかという気にかけてるのはメドウち——ぶげ!」

「はいはい、途中からアタシに振る流れはもう飽きたわ」

「それって認めてるって事じゃ」

「メドウシアナ、口を塞ぎなさい」

「キシヤアアア……」

「む、めぶむがむごぼみもじばむばる」

——ガロンゾ。

「あの少年……健全な見送られ方しやがって……!!」

「りつちよを殺すつもりなのかな……!」

「……あの裏切者!!!」

「オイ!!うつせえぞその魔導師の女ア!!」

「ヒっ!サーセン……もうしません許して下さい……」

「チツ……気持ちよく寝てたつてのに……」

「……あーあ、りつちよは何時もこんなんですよ」

——スーオフアミリー本拠地。

「ママ、彼がリュミエールから出ました」

「まあカルニ。誰があの子を追えなんて頼んだのかしら」

「誰も。ただママには報告しておくべかと」

「いつまで経っても夢から覚めない愚かな子。そんな子を私が気にする必要は無いわ」

「厳しさは愛であると、貴女は私に説きましたね」

「……悪い口が回る様になって。悲しいわ」

「彼の事は知りません。しかし、貴女が怒りを覚えるという事は、彼を子供でなく……対等に見たという事」

「……」

「ママの後を追う存在になり得るのなら、私は彼を尊重します」

「………親の心子知らず、ね」

「……コーリス。命を延ばした人間が幾度と無く奔走し、何故未だ平和が成されないのか。それはその者たちの力量と覚悟が足りなかった訳じゃないの」

「………人には、人の限界がある。それは命、そして」

「魂にも……」

——犬神宮。

「ふっふっふっ……」

「また悪巧みですか？姉さん」

「悪い事ではないぞヴァジュラよ。客人の用意だ！」

「……え、彼等と呼んだのは本当なんですか？」

「面白くもない嘘を付くわけ無いだろう。父上にも許可は取ってある」

「何でそんな許可を……」

「犬神宮の剣技は他に比べて広く知られておる。技を隠す事に何の生産性も無いのだぞ？」

「それもあると思いますが」

「ま、結局我が頼んだからだろうな。父上も甘いな」

「……………姉さん」

「む？」

「楽しみですか？」

「おうとも」

「……………引きずらないですか？」

「…ヴァジュラ」

「…」

「二度と、聞くな」

霧に包まれた島。

「今日は誰の話をしようかな……………」

「そうだ、私の幼馴染の話にしよう」

「私が3つの時に父さんが屋敷に連れてき……………どうしたニコラ」

「”その話はもう50回は聞いた”って？そうかなあ…そんなに話していたかな……………」

「モモもそう思うのか……………ジジもフージーも」

「もう島から出れなくなって何年経ったかも覚えてないよ。ふふつ…
何だか村にいたおばあちゃんを思い出すよ」

「私の頭はおばあちゃんになつちやっみたいだな。もう村の人達の名前も朧気だ」

「……………ちゃんと騎士になれたのか？」

「——コーリス」

4章 犬神宮の冥福

36. ようこそ犬神宮へ

犬神宮。

空の世界に十二社存在する神宮の内の一つであり、神将の根城。

十二方位の西北西を司る守護神、ヴァジュラが煩惱や厄災を払い、浄化する者。

その神宮にコーリスとゾーイが訪れた瞬間、二人は奇妙な感覚に出会った。

「辺りが静まった……いや、鎮まったというべきか」

「神気、というものだろうか」

空気は過剰なまでに澄み、人々の音は止み、風の音だけが枯れた木々の幹に罅割れた音を鳴らさせている。

ただ進む。

「…誰もいないのか」

「いや、これは……」

年始で参詣者が並んでいた拝殿と、供え物が置かれているという弊殿を通り抜け、目の前に位置する大きな建物——本殿に進むにつれ、気配が強まる。

一般人にとって本殿は決して中を見る事が叶わない建物だが、二人はその場に誘われている気がして、目の前まで移動した。

「……」

本殿の入口の前に、一人の少女が立っていた。

——十二神将が一、ヴァジュラである。

「——ようこそ、犬神宮へ。コーリス様、ゾーイ様」

「此方こそよろしく頼む」

挨拶は返すものの、ゾーイを含めてヴァジュラの存在を認知していた者はいない。

突然現れたのか、元より立っていたのに気づかなかったのか。

だが、直ぐにその様な分析は不要と判断した。

違う何かが起こりそうだ。

「コーリス様は巫女長バジュラの推薦の元、神将の剣術を学ぶ権利を得た事になっています」

「推薦…？」

「はい。犬神宮は十二神将の中でも戦闘に秀でております。故に、その剣術は保存され、流派の一つに至ったのです。私の姉は免許皆伝。つまり、人に教えられる立場にあるのですよ」

「なるほど…」

免許皆伝とは、その流派の奥義を伝授され、その修了を認める事。

17歳で免許皆伝。未恐ろしいといえればそれまでだが、生憎とコーリスは流派について詳しくは無い。

そもそも母数が少ない上に知名度も低い。刀の道を極める人間にしか道場の把握は難しいだろう。

「ですが」

「む？」

「最低限の実力は保証して頂きたいのですよ」

ヴァジュラが怪しく笑ったと同時に脇道から8人程の巫覡ふげきが現れる。いずれも帯刀しており、成人ではあるが若く見える。

腕試しという事だろう。

「彼等は剣術を納めた実力者。勝っていたらだきたい」
珍しくゾーイが叫んだ。

「此方は学ぶ立場だ。既に剣を学んだ8人を同時に相手取るなど理に
かなっていない!!」

「…こちらとしては、最大限の評価でもあるのです。姉さんは弟子を
取りませんから」

「何…?」

「私の姉さんは才能が人の形を取っていると形容しても良い程に強
く、高く、聡い。言葉では言い表せない何かを秘めています。10歳
で空を割った程に」

空を割るとは、文字通りなのかとコーリスは疑った。

「そんな姉が、一方的に貴方を強くするというのです。ならば、それ相
応の評価を既に下すのも当然です」

「…」

「そして、この評価は同時に警戒として捉えてもらっても構いません」

…要するに、『途轍もない強さの姉が態々お前を指名したんだから、
8人くらい倒してもらわないと納得できないんだよ。てかお前何な
んだよ』という事である。

しかし急な話。

ゾーイが不機嫌気味なものも無理はない。彼女は不平等を嫌う。

「急な話である事は謝ります。準備が整っていないのなら時を改め—

—

「心配は無用だヴァジュラ!」

謝罪の言葉を断ち切り、ゾーイが自慢げに腕を組んで話す。

この言葉によって周囲の人間が抜刀した。

コーリスも戦闘の準備に入る。

「コーリスはこういう事もあるうかと船でパンを沢山食べたんだ。満腹で準備も整っている。心配はない：食料は買い溜めしておいたからな！」

「8割はお前が食ったがな！行くぞ巫覡達!!」

彼は剣を抜いて8人の戦士達に駆け出した。

戦いは思ったよりすぐ終わった。

一人目は速攻腹パンで飛ばし。

二人目は後ろから斬りかかってきたので足払いで顎を地面にぶつけ。

三人目は強かったから、鏢迫り合いに持ち込んで剣の重さで有利を取った後に蹴り飛ばし。

四人目と五人目は前後から攻め、避ける事による同士討ちで勝手に刀をぶつけ合って仰け反っていた。仲良く腹パン。

六人目は恐ろしく強かった。七人目が邪魔をしなければコーリスは普通にやられていたかもしれない。

八人目は大振りで彼の剣に当てたせいで刀が折れていた。

一人に対して刃物を持った八人が攻めると言っても、お互いが傷つけ合う可能性を考慮すると躊躇うものだ。リュミエールでも多対1の想定はされていたが、あくまで対魔物。

「全然剣学ぶ意味無い人来た……………」

ヴァジュラがワナワナと震える。

あくまで才能がある初心者と思われていたようだ。

彼女に初心者狩りの自覚はあったのだろうか。木剣も無しに。

「元騎士でな。バジュラから聞かされていないのか」

「…私は世俗に疎いので、外の世界をあまり知りません」

「おうおう、知ろうとしてないだけだろー」

「お」

「ね、姉さん!？」

そして、いつの間にかヴァジュラの横にバジュラがいた。

「剣の打ち合いどころか大半が肉体にのされている。修行が足りんなこ奴ら」

気絶した一人目を木の枝で突きながらバジュラは呟く。

一方、ヴァジュラは俯き拳を震わせる。

「こ、ここうなつたら…!」

彼女は刀を抜き、正面に構える。

右手で縦に構え、左手を広げたまま後ろに回す独特な構え。

先程の8人は剣を学んだだけであって、大神宮の本懐を学ぶ事は出来ていないらしいとコーリスは考察する。明らかに構えが普通の剣術と異なるからだ。

「——1本、お願いします」

プライドか。

それとも闘争心か。

何方にせよ、逃げるのも癪。

「此方こそ、よろしく頼む」

コーリスも構えながら剣を構える。

「——ッ！」

「——！」

第2戦が始まった。

得物を打ち合つて先に驚いたのはコーリス。

駆け出す速度は剛力を用いた物であるが、ソレを伴つて振られた剣に対応するヴァジュラの瞬発力に驚いたのだ。

そして、次に驚いたのはヴァジュラ。

彼の肉体の強靱さは先程の腕試しにて確認したが、剣の重量は恐ろしく……名刀であるが故に折れなくとも、往なさなければ押し倒された峰が自らの肩に痛手を負わせていた可能性があると危惧した。

故に彼女が取った選択は——前に飛ぶ。

(消えた……?)

コーリスの剣の衝撃を殺し、往なすと同時に彼の懐へ潜り込む。無論コーリスがその行動を許す訳もなく、剣を逆手に持ち替えて振りかぶるが、そこには既にヴァジュラはいない。

その動きでコーリスは理解した。

(……成程)

そう、犬神宮の剣術とは。

——エルーンの身体しんたいで無ければ習得するに能わず。その靱やかを以て常に有利に立ち、蹂躪するもの。

奇しくも、常に背後や死角を突き詰めるという点では霧を用いたコーリスの戦い方に似ている。ならばやるべき事は一つ。

来るべき場所が分かっているのなら、その場所に武器を置けばいい。

(背面受け…!!)

ヴァジュラの身体は今度こそ仰け反る。

「とどめ」

剣を首に、狙いを定める。

そのまま首に剣を添え、戦いを終了させようとしたが、ヴァジュラは回避を選ばなかった。

それは、バネであった。

(跳ね…!?)

両手で刀を持った状態で仰け反ってしまえば、三日月の如く身体が間抜けな隙を晒す事になる。

そこで彼女はその反りを利用し、背面から更に地面に向けて刀を突き刺し、その反動で空を舞う。

突き刺さった刀を掴みながら飛ぶのだ。

無論、抜くのに必要な力は大きい。だからこそ跳躍の勢いは消される筈だが、彼は通り過ぎたコーリスの背中を利用した。

「ぐっ！」

感じた重み。

ヴァジュラはコーリスの背中を踏みしめる事によって刀を抜くと同時に更に上へ飛んだ。

対空への備えは踏まれた事により体勢を崩されたコーリスにとって鈍いものとなる。

加えヴァジュラが選択した技。

「兜割り——!!」

兜割り。

それは、見世物を起源とする技であった。本来防具に身を固めた敵を両断するのは不可能である。故にその頭の防具のみを両断する催しが剣の達人の間で行なわれていた。

両腕を上段から万力の力で振り下ろす。

しかし、結局この技でも戦場で兜を割る事は不可能に近かった。

だが——齎される結果は、敵が防具を付けていない場合無残な物と変わる。

木刀だろうが何であろうが、棒状の物を頭めがけて振り下ろしたのなら、どうなるかは想像に難くない。

(俺を殺す気か…!?)

そう思われても可笑しくない程の本気が、ヴァジュラにはあった。寸止めが流儀とはいえ、自らの死を錯覚させられたコーリスは筋肉を隆起させる。

剣の腹を正面に——渾身のぶん回しである。

「うおおおおおおおおおお!!!」

「ッ——」

無防備の振り下ろしに剣の腹が激突——するかに思えた。

ヴァジュラが剣の勢いを削いだことは先程と同じだが、異なる点はコーリスの剣を空中で踏み、最速で地面に着地した事だ。

またもやコーリスは背後を…否、真下を取られた。

真下からの斬撃に背面受けは通用しない。

そこでコーリスは足で刀の側面を蹴り落とした。

飛んでいく刀を急いで回収しに行くヴァジュラだが、コーリスから離れた事によりアドバンテージは消えた。

「…恐ろしい身のこなし」

「そちらこそ…守りの方が得意の様ですね」

互いの利点を突く戦いでは無く、自身の弱点を守り合う戦いに近い。

千日手とは言えないが、恐ろしく長い戦いになると両者は予感した。

——10分後。

「ッ——!!!」

「はあっ!!!」

疲れ知らずの若者、互いの疲労を狙って削り合う。

——30分後。

「!!!」

「:!!!」

声を出すのが辛くなり、二人は無言で背後を取り合う。

——1時間後。

「:はあ、はあ」

「」

ヴァジュラが疲労により鈍くなる。

同時にコーリスが先に攻めるケースが多くなった。

——2時間後。

「あ、が…」

「はあ…はあ…:…くっ」

攻めきれなくなったコーリスが疲れ、ヴァジュラが飛べなくなつた。

——3時間後。

「ビュー……………」

「ぜ、は…」

お互いに虫の息で走る事すらまま成らなくなる。
負けず嫌いの境地ここにあり。
傍目から見ていたゾーイとバジユラが欠伸を漏らす。

「どうやら、互いの戦い方が決定力を削ぎ合っているようだな」

「流石犬神宮の剣技…コーリスの力をあそこまで避け続けるとは」

「だが、それだけでは無い」

「…？」

「エルーンの軽さを活かした剣術など他の島にもある。何故我々が戌と呼ばれているか分かるか？」

「…十二神将はそれぞれ動物の特徴を持っていると聞く。君達は犬に似たからではないか？」

「半分は当たりだ。だが、本懐は共闘」

「共闘…」

本来、戌の十二神将は将自身の剣技と――

――4時間後。

「――ヒュー…ふー…う!!」

「は、あ…ああ、ふ」

互いの手を掴み合う牽制の様な形を取っているが、彼等はそれによつて立てている事を理解しているのだろうか。

得物も振れない。

走れない。

喋れない。

でも負けたくない。

「あつ」

だが、遂にその均衡が崩れ：ヴァジュラが先に倒れる。

次にコーリスが倒れると思われたが、火事場の根性で膝を付き耐える。

それを見たヴァジュラがコーリスの足を掴む。

「が、は…お、おい、流石に生き汚いと思う、ぞ…：…！」

「姉さん以外に、は負け、られませ」

「頼む：俺は剣を習いに来ただけなんだ…！お前との決闘じゃない…！！」

「私を倒してから認めます…！！」

「この…！」

掴まれた足を引っ張られ、次はコーリスが倒れる。

受け身を取らなければ意識が飛んでいただろう。

ヴァジュラの上に被さらない様に必死に避けたが、それさえもダメージとして蓄積した。

そして。

「そこまで」

戦いは唐突に終わりを告げる。

心で呟かれた『おせーよ』は、コーリスとゾーイの総意である。

「姉さん…私は、まだ」

「…なあヴァジュラよ。貴様はコーリスを引き倒すまでして勝利を求めたな？」

「はい…」

「…：…なあヴァジュラよ。コーリスが貴様を気遣って横に倒れたのを見たな？」

「…：…はい」

「…：…なあヴァジュラよ」

「はい」

「人間性で負けちゃいかんだろ……………」

バジユラ、渾身の正論であった。

「すまん。我が妹の独断。しかしこの場で最も権威があるのは十二神将である妹なのだ」

「次からは手軽に頼む。コーリスは疲れているんだ」

「心得た。稽古は明後日からにする」

妹を俵担ぎで運ぶバジユラと、コーリスに肩を貸したゾーイが向かい合う。

結局のところ、バジユラを満足させる程度の力は見せる事が出来たようで、コーリスは無事に門をくぐる事が出来た。

彼女はコーリスの額を突きながら謝る。

「服も食事も此方が出そう。要らぬ汗をかかせて済まんかったな」

「ありがとう…」

「外の島の者達は術まほうを使いながら戦うのだろうか？ 剣だけで十二神将相手にそこまで戦えるなら上出来中の最高だ」

「…?」

「想定していたより出来ている、という事だ」

本殿を背にバジユラが改めてその言葉を言う。

「ようこそ大神宮へ。歓迎しよう——門下生コーリス」

十二神将の真髓を、コーリスはまだ知れていない。

37. 何かがおかしい家

「君がコーリス君か」

「お世話になります」

「寛いでいくといい。君の事はバジユラから聞いている。家主として、この家に滞在する事を認めよう」

——ヴァジユラとの試合の後、彼女の父はコーリスを一時的に住まわせる事を認めた。

そして同刻。

ゾーイが姿を消した。

置き手紙には、『君が修行の間、少し世界を見渡す』と書いていた。彼女は一時的に使徒としての役割に身を任せたのだ。

——2日後。

「すぴー…」

コーリスは自身の布団に潜り込むバジユラの吐息音にて目を覚ました。

叫びもせず、払いもせず、逃げもしない。

だがしかし——恐怖が強すぎた。

一人で寝たはずだ、気配も無かったはずだと、そんな未知の恐怖感が彼を金縛りの如く不動にした。

そして数分後、コーリスは自らが男である事を強く意識させられた。

「あ、あ」

如何に快活な少女であっても、17も歳を刻めば大人びてくるもの

だ。艶やかな白髪も相まって、バジユラは天女の如き美しさを持っていた。

回りくどいが、つまり…コーリスはドキツとしてしまったのである。

性欲にまでは及ばないが、その煩惱は布団に侵入した少女への恐怖を消し、彼を動揺させ――

「――ま、夢か」

――現実逃避ニ度寝ツ!!

早朝5時の事であった。

――1時間後。

案の定二度寝から復活したコーリスが叫んだ。
劈つんざく声にバジユラが覚醒し耳を抑えのたうち回る。

既に起きていたヴァジユラが驚き部屋に突撃。

ヴァジユラ、本気謝罪。ガチ土下座

コーリス、恐怖により人生で数少ない涙。

バジユラ、未だ耳を抑え苦しむ。

――数分後。

「姉さん、お覚悟を」

「勘違いでコーリスを襲わなかった事は褒めてやる」

「お前…」

怒髪天のヴァジユラが姉への尋問を開始した。

「我が朝に弱い事は知っているな？」

「ええ、まあ」

「折角我がコーリスを弟子に取るのだ。朝に強いこ奴を朝から鍛えてやりたい親切心からよ」

「良いことだと思いますが…」

「なら、こ奴と共に起きる方が無駄が無くて良い」

「…」

「私の容姿は他の十二神将のお墨付きだ。悪い事でもあるまいて」

「……………姉さん」

暴論ではあるが、それは納得できなくも無い理由であり、美人が自身の寝床に潜り込んでいるというのも、悪くないのかもしれない。

……………ただし、それは未経験者の言葉だ。

「朝起きて自分の布団に女性が入っていたら……………普通男性は怖がりますよ……………」

「え？妹、もう一度言え」

「怖がりますよ…」

「何でだ」

「逆で考えてみて下さい」

「我が起きたら伊達男イケメンが布団に…？」

「はい」

「……………怖。すまんコーリス。我が悪かった」

ようやく理解出来たのか、腰を折って謝るバジユラ。

「まあ貴様なら別に良いがな」

ポツリと漏らした言葉を、ヴァジユラとコーリスは聞き逃さなかった。

「ッ!!」

「耐えてくださいコーリス様！惚れちゃ駄目です!!」

「し、心臓があっ！」

心臓の鼓動が止まらないコーリス。

女性を甘い言葉で誘惑する優男がいる様に、男性の心を鷲掴みにする優女のような存在もいるのだ。

如何に故郷の幼馴染へ想いを寄せていても、他の女性へ鉄心を貫ける男などいない。いない…いないと言ったらいけないのだ！

「ブハハハ！顔を赤くしておるぞ貴様！」

「誂うのも大概に！姉さん！」

「誂う？本心を言った上でソレだから笑っておるのだ」

「あつが！」

「一々コーリス様をキュンキュンさせないで下さい！」

19年の生の中で、思春期を迎えてからここまでコーリスを揺さぶる人間はいなかった。

ロイスは相棒、ゾーイは友達、レイは母親面の知人であり、サテユロスやメドゥーサは恩人だ。

成人入りかけ（肉体年齢は19から進まないが）の男が2つも年下の少女に心をこねくり回される光景は厳しいものがあるが、何よりそれを自覚しているのは彼である。

彼はまた逃げた。

「す、素振りしてくる…!!!」

「あつーそつち便所だ」

「うぐ」

濁った声とグルグルの目と共に、コーリスは庭へ走っていった。

「煩惱退散煩惱退散煩惱退散煩惱退散」

ただ一つの言葉を永遠に呟きながら素振りをする事五百回。
疲れによって正気を取り戻したコーリスが横のバジユラの視線に
気が付き、またもや素振りを再開しようとする。

「そんなに我が嫌か」

「自分の情けなさに嫌気が差してきた」

「はは、男よのお」

「やめろツ!!」

ただの木刀は彼の力にとつては軽すぎる為、五百回素振りをする事
など容易だったが、如何せん刀を扱う振り方では無い為、バジユラは
新鮮な気持ちで見っていた。

”叩き斬る”、のう…」

「不恰好か?」

「いや全く。須らく良き」

そう言つてバジユラは瞬く間にコーリスの背中を取り、掌を彼の腹
筋に当てた。

「あー堅い」

「お、おま」

”縮地”。まあエルーンだから速いのは当然だ。それよりもコーリ
スよ。我はかっこいい物が好きだ」

「なに?」

「男子もいつだつて剣や刀、鎧が好きだろう?」

「…確かに」

「浪漫溢れる実用性の欠片もない巨剣を振り回していたとしたら、そ
れはもう最高だ。我の理想とも言える」

「…?」

「貴様はそれに近い」

「……………え?」

ドラフ程の筋肉は全く無いが、それでも凹凸がハッキリしている身体に重い長剣、高い身体能力があるのにエルーンだという反逆性に、バジユラの感性は刺激されたのだ。

「まあ、何というか、そのだな…」

「なんだ」

鼻を擦って言葉を濁すバジユラに違和感を持つコーリス。

同時に彼はこのような状況は混沌とした未来に繋がることが多いという謎の持論を展開していた。

そして彼女の口が開く。

「貴様を我好みに育てることにした」

この言葉によって先程の胸の高鳴りは無に帰した。

「まずは師匠と呼んでもらおうか」

「ば、バジユラ師匠」

「おーおー気持ちいいものだ。師匠と呼んだからには毎日一緒に打ち合いをしてもらおうぞ?」

「お前：初めて会った時と性格違くないか」

「初対面で相手の何が理解出来ようか。我は元よりかつこいい物が好きな女だ。強いて言えばこういう状況にも焦がれていた」

バジユラは純粋な格好良さを好む者。

更に言えば、ハーヴェインが武術で活躍したり、ドラフが魔法を極めたりと、そういう逆的な生き方も好きだ。

少年の様な心を持った武神。

それがバジユラであった。

「……ん」

煩わしげにバジユラを凝視していると、コーリスは彼女の一点に目が行った。

髪の毛である。一点だけが微かに光った気がしたのだ。

「頭にゴミが付いてる」

「なにっ。どこだ？」

「俺が取る」

変に触らない様気を遣いながらコーリスがその一点に触れると――

「……」

「なんだ？ 早う取ってくれ」

――光った物は。

「か、み……っ？」

白髪の中に一本だけ、金色の髪の毛。

(これじゃまるで)

元々は金髪だったかの様で。

違和感に気が付いたとき、既にコーリスは宙を舞っていた。

「…あ」

死ぬ、と思った。

「ツツツ!!!」

最期に見る物はきつと、憤怒に身を染めたバジユラの表情——そこまで見えて、コーリスは魔力全開の盾を展開した。

「…煩わし」

無表情のまま盾を刀で削り続けるバジユラ。

その間にコーリスは何とか受け身を取り着地した。

唐突な激情による戦闘について、彼はただ一つ思った。

地雷を、踏んだのだと。

「…」

木刀を捨て、剣を抜く。

朝の混乱故に、剣を差したまま木刀を振っていたのは彼にとって幸運だった。

だが、この戦闘において彼に剣は必要なかった。
何故なら…

「な——」

バジユラと打ち合う事など不可能だからだ。

(盾を斬られた? 20枚も重ねたのに…!?)

過剰とも言える装甲だが、死の直感が彼にそうさせたのだ。

結果的に二十もの盾を両断され、既に息のかかる距離に彼女はいた。

自身に限りなく近い距離まで接近されれば、盾は無意味となる。
コーリスは破れかぶれで身体を反らした。最早話し合いは無く、殺し合いの雰囲気だと悟った。
ならば、と彼は霧と光線ビームを開放する。

「遅い」

バジユラはコーリスの両手から放たれた光線を紙一重で躲し、後退する彼を追い掛ける。

同時に放たれている霧は未だ第一段階。感知に限定された使用方法だが、彼にとつては動きの理解だけでも最優先であった。
だがそれも。

「が…!？」

コーリスに襲いかかる頭痛。
使うにつれ慣れていった霧の情報処理の負担が、少女一人によつて再発させられている。

何故か？

それはバジユラの挙動が複雑かつ速すぎるのである。
一息の間にどれだけの動きを組み込んでいるのか、それを理解しようとしたコーリスの霧は彼の脳に大きな負担を与えた。

(くそ……ここまでか)

目前に迫るバジユラの姿を見て、コーリスは遂に意識を失った。

最後に見たのは、彼女の泣き顔だった。

「今年のコーリスは厄年の様だ」

「本当に申し訳ありません。姉の非礼、決して許されるものではなく……犬神宮の主として客人に傷を残すなど、到底——」

「ヴァジュラは悪くない。バジュラの逆鱗に触れた俺が悪い。多分」

意識が覚めるまで永遠に頭を下げていたヴァジュラを宥め、コーリスは自らの災難を呪った。

(空戦後の方が戦いが増えている気がする……)

ある種、空の広さを知ったというべきか。

様々な人間がいて、様々な強さがあつて、様々な要因で戦う事になるのだと、彼はしみじみ理解した。

「僭越ながら、姉さん……いや、バジュラが怒った理由に心当たりはありますか？」

「……髪を見つけたんだ」

「……髪？」

「バジュラの髪の中に一本、金色のを」

「……………」

「ゴミが付いていると思って、取ろうとした時に見つけた」

その言葉を聞いて、ヴァジュラは見せた事も無い悲痛な表情を浮かべ、数秒間の沈黙の後、コーリスが先に口を開いた。

「気が付いたら飛ばされて……俺は最初、髪の毛をゴミ扱いされた事に対する怒りだと思っていた。だが、バジュラの顔は……」

とても言葉に表せない。

怒りの表情なのに、泣いている様だったのだ。

「…バジユラ今、何を」

「父上の元で叱りを受けています。心配なさらずとも、二度とコーリス様に手出しはさせません」

「…」

不可解であった。

この家には何かあるのでは無いかと疑う物があった。

『戦士として致命的な欠陥』とは、ゾーイの言。

『十二神将ではない理由は、人格でも才能の欠如でも無い』とは、本人の言。

（戦士として致命的な欠陥。それは、戦えない事だ。だとしたら武力が足りないから戦えないのでは無く、体力面…？いや、俺よりも早く動けた。息も切れてなかったから、常人以上の体力は備えている筈だ…何だ？）

思考が淀む。

（精神面の弱さも欠陥足り得るが、それは剣士としても同じ事。俺の光線にも物怖じせずに向かってきた。ゾーイの分析は間違っていたのか…？）

だが、答えを導くだけの材料は揃っている筈だと、未だ思考に身を落とす。

（しかし何故白髪の中に金が……いや待て、冷静に考えてあの歳で白髪に髪が変色するなど病気しか有り得ない。ゾーイ、お前が見た物は病気か）

そして彼はある意味答えに近づいた。

（病気だとするのなら身体が弱る筈だ。だが、あの運動能力に弱さを感じられない。十二神将として活動できない理由も含めると………いや、まさかバジユラは——）

核心に迫ると同時に、ヴァジユラの声が彼の意識を戻す。

「…何か気がかりに？」

「…いや、何でもない。だが、後で少し家主様と話させてくれないか」「父上ですか？」

「今回の事はお互い詳細を話しておかなきゃいけないと思って」「分かりました。部屋に向かいますよ」

「今は説教中なんじゃないのか？」
「構いません。姉は怒られている時だけは静かです。外で待っていていれば何事もなく済むはずですよ」
「済まない」

コーリスとヴァジユラは立ち上がり、家主の元へ向かう。

（この家の人間は何処かバジユラの破天荒な行動を読んでいる様に見える。黙認さえも。俺を勝手に連れてきても、家主が直ぐに許可を出すくらいだ。もし俺の読みが正しいのなら、それ等はある状況下で周囲の人間が必ず取る行動だ。わがままが通せる状況——）

ますます、コーリスはこの家に疑心を抱いた。

「……で待ちましょう」

二人は音を立てずに、努めて静かに振る舞った。
襖で仕切られた和風部屋は、内部の音をいとも簡単にこちら側へ運んだのだ。

「父上…申し訳ありません」

妹と同じく、生真面目な謝罪だった。

耳を澄ませる必要もなく、彼等の声は緊張を共有させる。

「…私が言いたいののは説法では無い。コーリス君が気づきかけてしまったのも、解っていた。だがバジユラ、彼を危険に晒した以上…」

気づきかけてしまった、という言葉聞いた瞬間コーリスはヴァジユラの方を見た。

彼女は視線を合わせない。だが、心無しか冷や汗が見えた。

不審な容貌だったので彼は追求を始めようとしたが、その意志はすぐに消えた。

「あ、ああああ!!い、嫌だ…!!」

狼狽えた叫び声が聞こえたからだ。

「バジユラ、落ち着きなさい」

「コーリスだけはどうか…どうか父上…!!!わた、あ…わ、我の、我は二度とこの様な愚行は…!」

コーリスは気分が悪くなった。吐き気さえも覚えた。

その気分には理由が無いが、強いて言えば、この場所が気持ち悪かったのだ。

「こ、コーリス様…」

「何だ」

「状況が宜しくないようなので…その、お外に」
「…」

これ以上聞かせたくない様だ。

バジユラの痲癩は最早発狂に近い。

呂律が回らず、暈を引きずる音がたまに聞こえる程度には、錯乱している様だった。

「さいごなんです!!少しくらい…じゃなくて、さ、そんな気がするのです…!どうか、どうか!!」

頭を擦り付ける音が聞こえてからは、彼等の顔は病人の様に青白くなった。

「…ヴァジユラ?」

同時に身体を伏せるヴァジユラに声をかけると、返事が無い。
聞こえるのは姉の叫び声と、妹の小さなえづき声だ。

「…っ捕まれ」

震える右手でコーリスの手を掴むと、ヴァジユラは左手で自身の口を抑えて吐き気を堪えていた。

彼は雰囲気の重さを何となく『吐きそう』と形容していただけで、ヴァジユラとは異なる。

(この家は危険かもしれない)

彼は戦場以外の場所で初めて恐怖を感じた。

ヴァジユラを便所へ運ぶ過程で、姉の声は聞こえなくなったが、こ

の家に満ちる陰鬱とした空気はますます濃くなっていった。

そのままヴァジュラを使用人に預けた後、コーリスは普段から使用されている居間に移動した。

理由はこの家に対する違和感を覚えた起点がここにもあつた気がしたからだ。

居間の台に飾られているものは家族を描いた絵画の様に見えるが、描き物にしては随分と鮮明かつリアルすぎる。

「確か…古代文明の、写真というやつだったか」

フアータ・グランデには古代文明の遺産として、正確に形を写し取って一枚に収める機械がある。

写真機を持つている者は少なく、大半が写真屋として活動しているため、ルピを払って撮ってもらうというものだ。

「…」
そして彼は犬神宮の写真の裏に隠されていたもう一枚を発見した。
写真立ての中に重ねられていたのだ。

写真には、大人の男女二人に姉妹が二人写っていた。

変わらない強面の男性と、朗らかに笑う女性。二人の子供の片方は明るい金髪で、もう片方は赤ん坊であるが故に、ほんの少しだけ髪が生えている。姉が赤ん坊を抱えており、後ろから両親が支える…そんな家族の写真だった。

「…」

姉が、金髪。

「この男の人は家主様。ならばこの女性はあの二人の母親…二人とも金髪…：か」

赤ん坊はヴァジュラ。姉がバジュラなのは言うまでもない。

「…ん？」

更に裏にもう一枚、あつた。

今度は3人。

先程の写真と同じ男性に、少し成長した姉妹。妹に見える方は刀を持ってはしゃいでいる。父親らしき男性がそれを咎める様に慌て、悪戯げに笑う姉の方が写真を取れと促している景色だ。

微笑ましいものだ。

…バジュラの髪に白が混じっている事以外は。

——ミシ

「っ!!!」

写真に絶句している場合では無かつたのだ。

廊下の足音に気が付くには遅すぎた。

(使用人か…いや、足音の間隔が狭い。二人いるのか？それにしても規則的すぎる。そもそも人じゃない…？)

急いで写真を元の位置に隠して、偶然を装い部屋を出ようとする。
最早長く留まっては逆効果。

彼は自ら戸を開けた。

「!？」

すると目の前にいたのは――

「犬!？」

大人の背丈くらいある、超大型の犬だった。

「…どうも。ナガルシャです」

「ナニイイイイイイイ!!?」

更に喋った。

38. 死臭香る森

「な、なななな」

どうも、コーリスだ。

今おかしな現象に遭遇した。

：犬が、喋ったんだ。

敬語で、しかもいい声で。

でも…かわいい。

デカさと微妙な筋肉質を除けば、垂れ下がった頬が愛らしさを強調している。万人に媚びるような可愛さでは無く、のペーっとした雰囲気の大犬だ。

「貴方がコーリス殿ですね。詳細はヴァジュラ様から聞いていました」

「あ、ああ」

「バジュラ様はやんちゃでしょう。苦労お察しいたします」

やんちゃどころの話では無いが、それよりも犬だ。

犬型の星晶獣と言われる方が納得できる。

よく見れば小犬が2匹ほど背中に乗っていた。こっちは普通の犬だな…。

そして何度も言うが、かわいい。

「ナガルシャ…だったな？」

「はい」

「この家ではどういった立場なんだ」

「闘神ヴァジュラ様にお仕えする戦犬、という立場になりますね。あとは背中の彼等の面倒を見るくらいです」

「せ、戦犬…？」

「戌の十二神将は犬と共に戦うのが本来の作法なのですよ」

戦えるのか。

だとしたら…ヴァジュラだけでもあんなに強いのに、本領は犬のサポートが乗るといふ事になる。

十二神将の中でも武闘派ということが身に染みるな。

かわいい。

「…コーリス殿？」

「なんでもない」

これは憶測だ。

いや、確信に近い。確信は革新へと変わり、更なる核心へと迫る――何言ってるんだ俺。

ともかく…。

犬神宮に分かりやすく犬がいるなら、他の神社はそれぞれの動物がいるのか？

羊とか鼠も…いやでもサンチラの近くに馬はいなかったな。会わなかっただけか？

…蛇も？辰も？

うん…それは少し独特だな。犬がいいな、犬。

ここに来てよかった。

「それより…バジュラの事なんだが」

「はい」

「何か秘密があるのか？」

「人間誰しも隠し事がありますよ」

「絶対に触れてはいけない事は？」

「あります」

「分かった。もう聞かん」

「助かります」

バジュラの地雷は既におおよその予測がついた。

考えたくない事だが。

——バジユラは老いている。

年を取ることでは無い。あくまで、体の機能が劣化していくという事だ。

現時点では、それが考えられるが…あの動きが出来ているのに老化というのも腑に落ちない。

だから、拙い推測だと考える。

老化による白髪を気にしているのならばそもそも髪を染めたりして対策する筈だ。俺が踏んだ地雷はもつと別のものかもしれない。

更に周囲の人間の対応も考えると——いや、それはないか。

そんな事はあつてはならない。

『最後…そんな気がする』と、バジユラは言っていた

「コーリス殿、背後に〴〵注意を」

「脅しか」

「いえ、本当に」

「む——？」

「私の主がおりますゆえに」

声を出す前に後ろを向こうとすれば、既に肩を触られ。

細く、白い手が見えた。

「ヴァジユラ……！」

「うぷ………最悪の気分です。まさか姉さんがあそこまで………」

「…お前ら、俺をハメたか」

「害するつもりはありません。私は主様の言いつけ通り、コーリス殿と面識を持つとしただけなのですから」

「う、お………え………はい。大事な話です。父も姉も皆知りません。

十二神将としての私の判断です」

「おい今少し出さなかったか？何とは言わんが今才エって言ったよ

な」

「も、もう平気です……出るものがありませんから」

「それでいいのか神将……」

口を抑えつつも視線を逸らさないヴァジュラは、どうやら俺を逃すつもりがないようだ。

ゾーイがこの場所の安全性を理解した上で姿をけしたというのなら、まさしくタイミングが悪いという事になる。

隠されていたこの家の狂気が、俺が一人になってから現れたのだから。

その事実には鬱憤とした心情が溢れ出す。

「…信じすぎたか」

気付けば、そんな事を言ってしまった。

「え？」

「何でもない。それより話を」

「あ……はい。ですが聞かれて欲しくはないので後に時刻と場所を指定して伝えますね」

「分かった」

必要な情報を貰ったのでここに用はない。ヴァジュラの元から立ち去り、外へ出た。

「……………」

俺は、あの空戦の後に恵まれすぎていたのかもしれない。

サテユロス様やナタク様は純粋に空の民を好んでいるし、レイだつて俺の事を心配してくれていたのは心から感じた。リュミエールの皆は俺を送り出してくれた。

だからか……犬神宮の人達が純粋なのだ、そう思っていた。だ

が、もうやめる。

別に悪人とは思っていないが、俺が気を許すべきではない人種だ。

「は……すぐこれだ」

外に出れば監視の目が3人分。

俺がバジユラに接触するのがそんなに重要か？

「……不愉快至極」

逃げ出す事も、考えておこう。

——午後20時、本殿前。

「……人は、いませんね」

指定された時刻に約束の場所を訪れ、既にその場にいたヴァジユラは周囲を、確認する。

その動きに芝居がかっている物は感じなかったが、俺はつい聞いてしまった。

「お前がいる時は監視が外れるのか？」

「……どういう事ですか」

「俺が外にいる時は常に監視する人間が3人いた。だが、ヴァジユラがいる時は誰一人として俺を見ない。神宮の外の村にまで普段なら監視が及んでいる筈なのに」

「……………なんですか、それ？」

「知らなかった、のか？」

「私は何も指示していません……まさか、父さんが……」

俺の言葉を聞くと、ヴァジユラは驚いた様子を見せ、次第にその表情を怒りへと変貌させていった。

同じく側にいるナガルシヤも眉をひそめる。

「主様。どうやら家主様はバジユラ様とコーリス殿を未だに関わらせる様子」

「…ナガルシヤ、周りに誰かいる？」

「誰一人として」

「それも態と、という訳ですね。分かりました、取り敢えず着いてきて下さい。私以外入れない祠に行きます」

本殿の奥に位置する森、そこには十二神将であるヴァジユラのみが近づける祠があるらしいのだ。

ただ、祠自体には本人であつても入れない。

ナガルシヤが鼻を効かせながら周囲を警戒する。

「…コーリス様」

数秒して、ヴァジユラが口を開いた。

「此度のご無礼、姉が変わって改めて——」

「大丈夫だ。それよりも俺がこれからすべき事を教えてくれ」

「………逃げて下さい」

「…何？」

「この島から、逃げて下さい」

…どういう事だ？

よりによって、何故ヴァジユラがそんな事を。

「姉さんは、コーリス様に対し異常な執着心を持っています」
「……」

確かに、バジユラが父に懇願していた時の言葉は『コーリスだけはどうか』だったな。

会って数日の男に何を思ったのか。

「…かつて姉さんは、何もかも満ち足りた人間でした」

「人生に満足していたと？」

「正確には、今ある幸せが最上の物だったのです。ですが…コーリス様と出会い、満足の先に物足りなさを覚えてしまった」

「…人との出会いに飢えていただけでは無いだろうか？」

「はい。姉さんの秘密についてお話します」

話すだけでも辛いのか、ヴァジユラは一呼吸置いて、ゆっくりと言葉を紡ごうと試みた。

「姉さんはじゅ——」

「悲しいなあ、ヴァジユラ」

——。

「えっ」

「まさか我から………」

「ねえさ、ん」

「奪おうなどと」

迷いは無かった。

「退け!!!」

流石神将というべきか、声に即座に反応したヴァジュラとナガルシヤが後方に飛んだのを確認して、俺は剣を地面に突き刺した。

魔力を地面に流し炸裂させる——ゾーイの得意技。

「ガンマレイ!!!」

バジュラの足元から現れる蒼い光は、高密度の魔力だが、人を確実に殺すだけの威力は無い。

ましてや属性のない俺の魔力は、エネルギーの奔流として相手を吹き飛ばす事は出来るが、火や光程じゃない。

更に言えば、バジュラは避けるだろう。暫く光の柱を出しておけば時間稼ぎにはなるだろうが、足りない。

だから本気を出さねばならない。

「ナガルシヤ、匂いで本殿への道案内を頼む」

「案内…？確かに夜道は暗く、視界も封じられますが」

「少し違う考えだが、頼む」

「了解致しました」

言葉を失ったヴァジュラは、次にどうするべきかを視線で俺に委ねてきた。

つまり、彼女にはバジュラから逃げる手立ては無いということだ。

「壁を作る。ヴァジュラは俺に掴まってくれ」

「…コーリス様？」

「ナガルシヤ、言葉はいらぬ。本殿まで駆け抜けてくれ。視界が更に悪くなるぞ」

ナガルシヤの準備はとうに出来ている。

後は——俺が瞳を閉じるだけ。

「……霧が」

「ヴァジュラ、絶対に離すな」

ヴァジュラを右手で抱えて、盾による壁を展開。
霧を全開に——第一段階へ移行。
バジュラの元に第三段階、忘却の霧を展開。

——第六感、霧の目発動。ミストアイ

「ナガルシャー！」

視覚を閉じた俺の声を聞いた瞬間、ナガルシャは駆け出した。正確に、木々に触れる事なく闇を駆けて行く。

そして俺は足に剛力を込め、魔力の壁を蹴りながらナガルシャの動きを頼りに移動する。

「コーリス様!!」

「分かっている！こちらに着いてきているな…!!」

霧の目は、俺の霧が持つ感知能力を最大限活かす状態。視界を封じ、周囲の把握は聴覚と霧によって行う。それによって脳の負荷は減り、バジュラの動きも処理できると踏んだ。

代わりに遠くまでの感知は難しく、ナガルシャの様な案内役がいなければ正確な移動は出来ない。

だが、視界が悪い場所は俺の得意分野だ。

「随分と気が散っている様だな……バジュラ？」

理不尽に対抗して、煽る様にアイツの名前を呼んだ。

○○○○○○○○○○○○○○○○

コーリス、コーリス、コーリス、コーリス、コーリス、コーリス、コーリス、コーリス、コーリス」

何故だろうか、たった数日の面識である男が彼女の脳裏に焼き付いて……その感情を焦がしていた。

もはや、狂愛。

感情に才覚があるのなら、彼女はこの分野で全空一を競えるだろう。

「コーリス………はあ、頭が桃色だ」

自身の感情に支配されたバジユラはその脳内を言葉で表現した。

「そうだ……島から出ていこう」

しかし、以前とは違う自分を理解して寧ろ客観視出来たのか、冷静さを取り戻したかのように見えた。

「ヴァジユラと父上、皆……あと、コーリスにも謝って………最期まで生き——」

その言葉は最後まで紡がれる事は無く、背後の気配を感じた瞬間、またしても彼女は感情をピンク色に染めた。

「——あははッ!!!コーリス!!!」

「私もいますよ姉さん!!」

「ヴァジユラ!?!」

「私も」

「ナガルシャまで……!?! 貴様ら何で……!」

3方向からの攻撃、ある種で強靱な精神がコーリスの霧をある程度

中和していたが、ここまで接近を許したのはその影響もある。

3段階目の霧は記憶を吹き飛ばすが、バジユラには2段階目の意識障害の影響しか出ていない。

それに気付いたコーリスが、3名でバジユラの無力化を試みたのだ。

後方にコーリス、前方にヴァジユラ、横にナガルシヤ。

「くっ！」

流石に反撃は無理と考えたのか、バジユラは高く飛んで木の枝に掴まった。

奇襲を掛けられた事実思わず牙を向くが、彼女は自身が原因なのだと直ぐに思い直して妹の顔を見た。

ヴァジユラの額には青筋が立っていた。

「随分コーリス様を見た時より反応が違いますね、姉さん……いや、バジユラ」

「そ、それは…その、妹が刀を持ったら面を食らうだろ？」

「私に刀を与えたのは貴女です」

「そうだが……ナガルシヤあ……」

「今回の一件は全てバジユラ様に責任があると思います」

「……………コー」

気まずそうに妹、犬を見回して最後にコーリスを見ると……

「ツツツツツツ!!」

思わず顔がにやけきってしまい、急いで顔を反らした。

生憎と霧で全てを把握しているコーリスは彼女の奇妙な行動の全てを感知している。

つまり、朝殺そうとしてきた女が自分の顔を見てニヤけた上に恥ずかしそうに顔を隠しているのだ。

意味不明である。

「…朝のお前はそんなんじゃないぞ」

「……………」

姉の乙女のような立ち居振る舞いに度肝を抜かれたのか、ヴァジュラとナガルシヤは絶句してバジユラの顔を伺う。

だが、この場にいるバジユラ以外の3名の気持ちは同じだった。

——『バジユラは、狂ったのだ』と、

「…さて」

言うべきことが決まったのか、コーリスが意を決して口を開く。その目は未だ閉じられたままだ——という事は、戦闘を続ける気である。

その所作に本来であれば疑念を持ち警戒をする筈のバジユラがそれどころでは無いというのは幸運だったのかもしれない。

…否、不運か。

「——俺、明日に島を出るからな」

「」

0.5秒の静寂。

バジユラの爆発までに行動する程の時間は無かったが、既に備えている3名には関係のない事だった。

「駄目だアアアッ!!!!!!
!!!!!!」

目の光を失ったバジユラがコーリスに向けて突貫する。

そして3名は、その行動を知っていたのだ。

時は数分ほど前に遡る。

『お二人、このまま逃げますか?』

『逃げ切れると思うが……家に戻っても逆に収集が付かん』

『密室で姉さんには勝てません。……暗闇を利用できるここで迎え撃ちましょう』

『了解致しました』

『アイツに弱点とか無いのか?』

『……信じ難い事に、気が散りさえすれば結構隙が出ます』

『……なに?』

『ただ、姉さんはどんな状況でも許容する人だったので、動揺や混乱の感情を一切示しませんでした』

『だが、今は違う』

『はい。そして冷静さを失った姉さんは必ず恐ろしい速度で標的に直進するんです』

『つまり、それさえ対処できれば』

『無力化は理論上可能です。それでも強いですけどね』

『……そういえばヴァジュラとナガルシャのコンビネーションは見たことが無かったな』

『私もコーリス様の本当の戦い方を見た事がありませんね……少し楽しみにしています』

『森が荒れるぞ』

『え、その様な規模で……?』

『……なり振り構わない形なら、視界も戦場も何もかも狭くなるが、構わないか?』

『……ああ、はい。お手柔らかに』

(いい機会だ。ゾーイとの修行の成果、試してやる)

森という故郷を感じさせる場で、コーリスは一人昂ぶっていた。

「ほ、ほんとに止めた……」

突撃したバジユラの刀を防いだのはコーリスが展開した盾であり、衝撃が木々を揺らしたのだ。

刹那の時であったが、何かが割れた音をナガルシヤは感じた。

そして、当事者であるコーリスは実感を得た。

(23枚…盾は23あればバジユラの攻撃を防げる!!)

——霧の目による感知能力の増大は、魔力による盾を作り出す際の座標指定も高速化させる。

今の彼は恐ろしい速度で魔力を操る事が出来るのだ。

「シッ——」

そこに斬り込むはヴァジユラ、そして頭上からナガルシヤが。

即興のコンビネーションは十分な効果を発揮した。

「……………チッ」

思わずバジユラの忌々しげな舌打ちが響いた。

……………それは、嫉妬からであった。

39. 即日リベンジ

— 生まれた時は、何でも出来た。

— いや、今でも出来る。

— だが、私の身体は日に日に変わっていく。

— 私の目が、耳が、金色が…失われていく。

— それでも、私は満足して日々を過ごしていたはずだ。

— 村や神社の皆、父上にヴァジュラ。そして…今は亡き母上に愛されて、幸せだったはずだ。

— なあ、コーリス。

— 貴様は何故、そんなにも。

— つまらなそうに生きているのだ。

— 何故我はそんな貴様を……

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「があっ!!」

3方向からの同時攻撃に対し、バジユラが取った行動——それは”吠える”事だった。

その行動により3名は咄嗟に攻撃を止め身体を動かした。

——瞬間、周囲に奔る白い斬撃。

「…」

「ッ！」

「!!」

コーリスは備えによる盾で、ヴァジユラは目視による回避で、ナガルシヤは野生の勘による後退でそれぞれ防御行動を取った。

突然の斬撃は速度こそ優れたものの、攻撃力は実物の刀に劣るものだった。木々に薄い切り込みが入る程度の事から、人体に直撃さえしなければ掠つても痛手にはならない程。

しかし…コーリスにとって、ヴァジユラの反応こそが恐るべき物だった。

見てから反応したという事は、バジユラの攻撃法に心当たりが無かったという事になる。つまり、妹である彼女にさえ知らない攻撃が多く存在する可能性があるのだ。

「これは…武神の魔力…!」

「どういう事だ」

しかし、攻撃自体は初見でもその技がどういう物から放たれたのかは知っているらしい。コーリスはバジユラに目を向けつつ聞いた。

「初代十二神将…バサラ様が使っていたとされる、武具の形を取る魔力です。ですが、姉さんの魔力は私と同じ神将としての祈りの能力だった筈…魔力のコントロールも精々刀から斬撃を飛ばす程度」

「だが今、確かに無から斬撃が飛んできた」

「”剣気”…その気になれば木々を両断せしめる威力かもしれない。コーリス様、なるべく自身の身を守ってください」

「分かった。回避はそちらの方が得意そうだな」

再びバジユラの足取りを感知し、コーリスは森に紛れる。

意外な事に、バジユラの感覚は常人に近い物であるらしく、背後からの奇襲に即反応、という事はない。

ただ、気付いてからの反撃が恐ろしく早い為、その反撃を防なかつたら体が2つに増える事になる。

バジユラに殺意は無くとも、反射的な攻撃は平気で敵を殺す。コーリスはその事を経験から充分に理解している。

(やはり…視力も聴力も常人よりやや下か)

木々を伝って移動する際の葉の音にも反応を見せず、想定していたよりも柔軟に奇襲を繰り出せる事に彼は納得した。円を描くようにバジユラの周囲を疾走するヴァジユラとナガルシャ、そしてパルクールの様な動きで暗闇を統べるコーリス。

バジユラの苛つきは最大限に達しようとしていた。

「――フウ」

だが、その所作は焦燥とは程遠く。正座した状態で刀を鞘に収め、柄頭に隠された短刀を顕にした。これが、バジユラの双刃刀そうじんとうたる所以である。そして収めた鞘を両手で持ち、短刀の先を虚空に向けて構えた。

(…槍?)

長い持ち手と短い切っ先は槍を想起させた。そしてバジユラは両手を捻じり脇下にまで移動させ――

「シツ——!!!」

——コーリスは、鞭が空を打つ音を聞いた。

「ぐあっ!?!」

空気が破裂した音。音速を超えた証。短刀を槍と見做したバジユラの突きが、正確にコーリスの居場所目掛けて放たれたのだ。斬撃飛ばしを突きで応用させた飛び道具。不可視の射撃に近い。

「くっ……!」

先程の斬撃から警戒心を高めたコーリスは全身を球状の盾に包んで移動していたが、胴の位置に当たった突きの衝撃は彼の身体を吹き飛ばし、地面に落とすまでに至った。

「まずい…ナガルシャ!」

「行きます!!」

あくまでバジユラの狙いはコーリスだという事を念頭に置いていた彼女等は、2方向に分かれて同時に攻撃を繰り出した。

牽制の斬撃、その後ヴァジユラが刀を上空に投げた。それを空中で啜えるはナガルシャ。降り立つ犬刃と共にヴァジユラの魔力が籠もった斬撃が炸裂する——神将の奥義。

「きんがしんねん金牙神然!!」

V字の爆発はバジユラに少なくない傷を与えたが、彼女は痛みにも構わずコーリスの元へ進み続ける。動き出してはもう遅い。ヴァジユラとナガルシャを容易く抜き去る。

「貴様から来てくれるなんてなあ…コーリス」

浮足立った語尾からは抑えきれない情念を感じられた。鞘を又もや外し、2種の刃をコーリスに向ける。

「あはははははは!!!」

「コーリス様あ!!!」

何故か棒立ちのコーリスに突撃するバジユラ。妹が静止の声を上げるも聞及ばず、その顔は狂気に染まっていた。

そしてその刃がコーリスに触れるに至った所で――

「……………え」

バジユラは、彼の冷たい瞳を見た。

暗く、昏く、儂く、闇い瞳を。そしてその瞬間――彼女の意識が完全に霧散した。

「え、い、今…すり、す、すり抜けて」

「幻覚を…?」

神将の彼女等が見た光景は――刀がコーリスの身体をすり抜け、バジユラが躓いて転んだという物。刀どころか、人間さえも彼の身体を通過したという事実には、幻と形容するしか無かった。

だが、最も不可解なのは…バジユラが起き上がらない事。一層霧が濃くなった事。

「悪いが、蹂躪する」

「……………はッ!?き、貴様ア!!」

心此処に在らずといった風貌のバジユラが復活した所で、既に彼の行動は終わっていた。

彼の幽霊としての性質を活かした透過は相手の動揺を誘い、その動揺は霧が付け込む心の隙間となる。相手が自身の身体を通過した瞬間に濃縮した霧を放てば、無条件に第三段階の霧が相手に繰り出せるのだ。

それは、相手が現在何をしていたかを忘れさせる魔性の霧。如何に判断に優れるバジユラであっても、状況そのものを忘れさせてしまえばどうという事はない。

「グっ!?!」

忘却によって動きを止めた相手には盾の結界を。人体の形に沿って堅固な盾を纏わせれば、相手は今の体勢から身体を動かす事は出来なくなる。だが、その様な複雑な盾を作る事は難しいので、あくまで四肢の関節のみの固定だ。

「あ、がっ!?!」

そして剣を胴に突き刺す事で一連の動作は終了するが、コーリスに殺意は無く、しかしこの技は対人にしか使えない初見殺し。ここからバジユラを無力化するには気絶させるしかない。

つまり、意識を落とす必要がある。

「ふ……い」

左手を使った絞め技は頸動脈を圧迫させ、バジユラの脳へ酸欠を促した。無論抵抗するが、コーリスの腕力には及ばない。そして、彼はバジユラの斬撃を知っている。如何に四肢を封じた所で、虚空から発せられる斬撃があつては寧ろ密着状態の今が危険だ。

だが、それも想定済み。

(集中状態かつ、気合を入れなければあの斬撃や突きは放てない様だ

な……)

バジユラの攻撃は強力だが、決して万能ではない。動作の内に吠える事が必要だったのだ。

それをさせない為に、コーリスは生身の右手を——前腕をバジユラの口に啞えさせた。

「む?!ば、むが!!」

危機的な状況を理解したバジユラが藻掻き、声を荒立てて宙に浮いた足を振り回すが、殺意のないコーリスは冷静に：気を失うまでの情けを捨てた。

きつと、生まれてから経験した事のない恐怖と苦しみを味わっているであろうバジユラだが、未だに抗っていた。

「……っ」

その痛ましい姉の姿に、例えコーリスの意向を理解出来ても目を逸らしたいヴァジユラ。着々と、戦いが終わろうとしている。

「む”ー!!! ヴうー”!!!」

耐え難い苦しみでの最後の抵抗。涙を流しながら、口に含まれたコーリスの右手を噛み砕かんばかりに力を入れた。彼の腕の血がバジユラの喉を通り、呼吸を妨げたとしてもその抵抗を止まらなかった。

「…」

だが、コーリスがその程度で止まる訳がない。

「……よっ」

彼女の手足の力が抜け、口元が緩んだのを確認して、コーリスは遂に手を離れた。霧を解除し、感知能力が途絶える。

離れた手からは、少なくとも血が滴り落ちた。

「ご無事で!?!」

「ナガルシヤか…バジユラは問題ない」

「そうではなく…いえ、そうでもあるのですが! 貴方の手は…!?!」

「見た目だけだ。深い傷じゃない」

戦いが終わった事により、コーリスはやっと目を開けることが出来た。外は変わらず暗いままだった。

遅れて駆け寄るヴァジユラが口を開いた。

「何故…義手の方を啞えさせなかったのです」

「歯が折れるのは死ぬほど痛いからな。それに加えれば俺の腕の皮膚など軽い」

「…感謝します」

「言うが、バジユラへの気遣いでは無い。お前の姉の首を絞めて苦しめたのは事実だ。だが、本当の本当に歯が折れるのは痛い。やんちゃなこいつなら、迷わず義手に噛みに行っただろうからな」

出来る限りならば、コーリスは平和主義である。

「取り敢えず…ナガルシヤ、姉さんを運んでくれる?」

「了解です」

「これからどうするか…」

「姉さんを捕縛した今、コーリス様を倒せる人物はいないかと。なので、私が少々融通を効かせます」

「どうやるんだ?」

「コーリス様は出来るだけ怖い顔を。それだけで十分です」

「…こんな感じか」

取り敢えず、彼はシヨゴスを幻想した。あの空戦での怒りを思い出す事により、生々しい憎悪を表現しようとしたのだ。

「ひっ……！」

「いい感じですが、コーリス殿」

「……………」

何か釈然としないコーリスであった。

——ヴァジュラの家の一室の前。

「家主様の部屋……？ヴァジュラ……本当にどうするつもりだ？」

「お構いなく。私に任せてください！上手く行きますから！コーリス様は怖い顔をしていればいいのです」

「では私は倒れたバジュラ様を目立たせる様に立ちましょう」

「お前ら一体何を——」

コーリスが言い切る前に、ヴァジュラは襖を蹴り飛ばした。

「——は？」

状況の不可解さが極まり、反射的に声を上げるコーリス。部屋の中にいたヴァジュラの父も同じ様な顔をしていた。品行方正、年に似合わない礼節と敬意を持っていた彼女が、襖を蹴り飛ばした上に……鞞に収まったままの刀を肩に担ぎながら自身の父を見下しているのだ。

自身の娘に殴り込みをされた部屋の主は度肝を抜かれたが、ナガル

シヤが背負っているバジユラの姿を見て、その驚愕は更に加速した。ちなみにバジユラは何故か安らいだ表情で意識を失っている。

「私も限界ですよ、父さん」

「バジユラが：負けた、だと」

「コーリス様と姉さんを接触させる：姉さんの望みを尊重するその気持ちは分かります。ですが、神将として、大神宮を統べる者として言わせてもらいます。巻き込まれただけのコーリス様に危害を加え、あまつさえ監視の目を向け：重圧を与えた後に迫撃。なんと愚かな事か——恥を知れ」

気配が変わる。ヴァジユラの瞳が金色に光った。口調さえも彼女の物とは異なる。その重厚で荘厳な有り様に、コーリスは口を噤むしか無かった。

：演技の怖い顔を添えて。

「許してもらおうとは思わない：！だが——」

「あと、姉さんはコーリス様が一人で倒しました」

「ん？」

「：なんだと!？」

「ええ、呆気なく。後から向かった我々が見たのは、倒れ付す姉さんの姿です」

無論、嘘である。だが、コーリスは疑問の声をつい上げてしまった。そこにヴァジユラが念を押した。

「ですよね？コーリス様」

「ウン」

「ほら、言ってるじゃないですか」

「馬鹿な……」

コーリスは理解した。バジユラの阿呆っぽさはこの親から受け継いだのだと。そして…コーリスの表情も相まって、ヴァジユラの父は本当に信じていた。

「彼が犬神宮に敵意を向けたら…無事では済みませんよ」

「なっ…！」

「無論、私とナガルシャは彼に付きます」

「な、なぜだ…!!」

演技臭さがやや残る口調ではあるが、ヴァジユラの言葉は心に迫る恐ろしさがあった。確かに、1枚で砲弾さえも防ぐコーリスの盾…その20枚を一瞬で粉々にする力を持つバジユラが負けたのだ。数日で彼女の異常さを、彼はよく理解した。今日のリベンジで見た能力も、その一端に過ぎないのだろう、と。

そしてヴァジユラが大きく口を開く。

「私情の為に無辜の人間を巻き込む事を善しとする十二神将など、消えてしまえばいいのです!!」

(あ、多分これ本音だな)

なんとなくバジユラを撫でながらコーリスは内心でツッコんだ。

「…だが、だがあ…」

歯を食いしばり、壮年のエルーンは叫んだ。

「その子には…あと2ヶ月しか時間が遺されてないんだぞ!!」

——沈黙。その言葉には、ヴァジユラとナガルシャでさえも押黙るしか無かった。

「…………お前」

巻き込まれた当人だけが、その言葉に深い実感を持ってしまったのだ。コーリスは今一度バジユラの顔を見た。

「そういう事だったんだな……」

薄々察していた事ではあったのだ。命までもが近いとは彼にも予想がつかなかった。

「やけにバジユラの思う通りに事が進むと思っただけです。見ず知らずの人間を大神宮に迎える事から、衣食住…払うといった金さえも拒む。今、合点がいききました」

「コーリス様…」

「もうすぐ死ぬバジユラの為に、出来るだけ我儘を叶えてあげようとしていたんですね」

コーリスが日々この家を感じていた違和感は、バジユラへの従者達によるぎこちない気遣いであった。余命宣告をされた病人に対する周囲の対応に近いものがあつたのだ。それが我が子ともなれば、やりたい事をさせてあげたいのが親としての心であろう。

想定外であつたのは、バジユラに恋心が芽生えた事か。

「心中、お察し致します」

「コーリス君……」

家主は、頭を…身体全体を使って謝罪の意を示した。

「すまない……すまない……!!」

「……」

コーリスは急激に怒りが収まっていくことを自覚した。どんな事

情であれ、襲つてきた事実は変えられないと固く決意していたが、同情の念を抑えられない。

その日は、虚しい謝罪だけが響き…コーリスはこの島を去る事が出来なかった。

そして…誰もバジユラが目を覚ましていることに気が付かなかった。

——深夜。

「……知られてしまったからには、というより……もう此処にはいられんし」

自嘲する様に笑つたバジユラが、静かな夜に犬神宮から離れた。

自らの寿命も知られ、父に迷惑を掛けた、妹や忠犬に刃を向け…コーリスを襲つた。最早、自身が生きている事さえ恥を感じているのだ。

「次にあ奴を見たら…我は我を抑えきれない」

それは、恋を知らなかった武神の暴走。何事にも満足していた彼女が初めて心から欲した望み。尽きる命の焦り。それが、彼女をここまで狂わせた。

「……せめて最期は、一人で潔く過ごそう」

誰もいない土地で天寿を全うする事が、今の彼女が行おうとしている事。布で姿を隠し、騎空艇に乗り込もうと歩くが…。

「……！」

島の入り口の石段に、男が座っていた。

「……コーリス、なぜこの時間に」

「…………よっ」

コーリスは、賭けに出ていた。この少女を助ける事はできなくとも、救う事は出来るのではないかと。

「生憎と、寝なくてもいい身体でな」

困った様に、そう笑いながら。

40. ×ジユラ

バジユラはコーリスを一瞥した後、早足で横を通り抜けようと試みたが、その手は彼に掴まれ足を止められた。

「何処へ行く、バジユラ」

「何処かは分らん。此処ではない」

「何をしに」

「何もしない為に」

「どんな理由で」

「……」

「ヤケになっているんじゃないのか」

「……うるさい」

麗しくも苛烈だった巫女が、今では野良犬の様な荒々しさしか残っていない。齒を食いしぼり、コーリスを睨みつけるが…彼も同じ様な物だ。何方かという狼に似ているその瞳と耳は、バジユラの心を見透かした。

「自分を律せない愚かな姉は、妹に合わせる顔が無い」

「…」

「誰にでも迷惑をかけて暴走する様な人間は、一人で死んだ方がいい」

「黙れ…!」

「お前ほど大変な立場じゃなかったが、こういった考えの人間は山程見てきた」

リュミエールの遊撃隊での任務は、彼に現実の厳しさを教えた。貧困、中毒、復讐…それ等に取り憑かれた人間は最終的に、自罰的な考えを持つ様になる。そして、勝手に一人で死んでいく。そういった国

が、沢山あった。

「だが、自分の感情を抑え、他者を巻き込まない様努力していた奴がいた。幼年の頃から…小人の騎士だと馬鹿にされていた奴が、そいつ等を殺せるだけの恐ろしい力を持っていたのにだ」

語りは続く。

「人一倍怒りやすいのに、その怒りの本質は仲間に対する害である奴もいた。鎧がカッコいいという理由だけで騎士になったというのに、誰よりも騎士としての矜持を持ち合わせていた女だ。俺を守る為に死のうとした程の…」

それは、コーリスの側に何時も寄り添っていた友人達である。炎のハーヴェイン、水のエルーン。懐かしく感じる程の遠い過去では無いが、彼にとってはかけがえの無い思い出。

だが、バジユラには関係の無い人間である。

「それがなんだ……！立派な人間を見習えという事か…?!」

「違う」

「回りくどい…簡潔に言え…！苛つく…!!」

「感情を抑えられない人間なんてのはいないという事だ」

大した慰めでもなく、説教でもない。強いて言うならば、経験からの情報…考えを伝えるだけの物。

「なら…ならあ……!!」

バジユラの混乱が強まる。

「この…我がお前に思う感情は何なんだ……?!お前を見た瞬間、私の脳髓を桃色に染め上げる悦楽……実の妹にさえ一瞬“邪魔”と感じる私の愚かな思考を……抑えようものならしているというのに……」

!!

「その感情に浸る感覚は」

「……………心地、良かったっ」

「……………そうか」

コーリスは複雑に思う。バジュラが執着心を含んだ恋心を自身に向けている事は理解しているが、それは彼女の人生を思えば自然なものなのかもしれないからだ。寿命を予期され、満足に生きて死のうとしていた矢先に出会った愛。それを欲しようともあと数カ月で尽きる命。そんな状況で正気を保てる程の人間は少ない。恋に恋をするという問題とは全く異なる。

それでも言うべき事は言っておかなければならない。コーリスは口下手で、それはもう子供の時から幼馴染にガチビンタを食らうほどの阿呆ではあったが、口は良く動く人間だ。

「…今の俺を見て、どう思う」

「……………なに…?」

「お前から見て、お前がした事も踏まえて今の俺はどう映る」

「……………勝手に連れてきておいて、勝手に殺されそうになって、勝手に襲われて…勝手に巻き込まれて、その上で何故か我等に牙を向かない……………愛おしい、異常者」

「異常か…」

リュミエールやトラモントでは余り馴染みの無い言葉であった。

「だが、それは違う。俺も我慢しているんだ」

「…?」

「正直、初日ヴァジュラと戦って粘られた時は苛ついたし、監視の目も大声を出して驚かせてやろうと思っていた。お前に至ってはぶん殴ってやりたい」

「…殴ればいいではないか、こんな女」

「でも、お前を含めてあの家から背を向けるのは目覚めが悪いとか……いやお節介かもしれん。俺は世界を救う為に旅をするとお前に前言ったが、聖人としての在り方とは程遠い」

「俺は、ただ迷う人に選択肢を提示できるだけの世界を作りたいんだ」

トラumontやリユミエールの人間はコーリスの本質を理解している為、どんな状況でも受け入れ人を救う異常者と捉えることは絶対にならない。彼は、極端我慢強く……極端に目的が広いだけのエルーンなのだ。

シヨゴスを絶対に許さないし、レイの様に正論を突き付けても跳ね除ける。だから、コーリスは壊れない。

「だから、お前は どうしたい」

「どうしたい……だと?」

「ああ」

「……くは」

それは、乾いた笑いだった。

「ははっ……残された2ヶ月で何がしたい、だと? なにもできないし……何も意味は無い。いつそ前倒しで死なせてもらった方がマシなものな」

「……おい」

「それとも貴様を寄越せ、と言っても領かんだろう? 我の想い、欲するものは人間であるコーリスなのだから……何とも不様な欲望だ」

「それは」

「いっそ我が消えてしまえば、ヴァジュラの苦勞も減るだろうさ」

「!!!」

「!!!」

パチン。コーリスがバジュラの頬を右手で張った音である。あま

りの突然さと速度に思わず彼女の身体はよろけた。

”痛い”と言う前にコーリスが口を開いた。

「これはトラモントで”愛の鞭”と言われている」

「…は？」

「歯を食いしばればバジユラ。そうすれば2発目への恐怖は消えるだろう」

「え」

「自分の失言が分かるまで何度でも、例えお前の顔が腫れ上がってフサイク不細工になっても俺にはどうでもいい。ただヴァジユラを言い訳に使った時点でお前は姉としてクソだ」

”だから、やるんだ”という意思を感じ取ったバジユラは、真顔のまま近づくとコーリスに恐怖を覚えた。

「悪いが途中でやめる事はない。分かるまで張らないと態々お前に暴力を振るった意味が無いからな」

「あ、や…」

「お前の父親はお前の事を想っていた。ナガルシヤや妹はお前の側に付かず、俺の味方をしてくれたが…それでも正しさの範疇でお前の為に常に思い悩んでいた。巫覡達はお前の為に俺に怪しまれようと毎日監視を続けた。そしてお前は一人去ろうとしていた」

「われ、は…」

「失いそうな愛情を相手に叩き付ける…故に愛の鞭ビンタ」

意味の分からない言葉を羅列するコーリス。余談だが、命名者はファイラである。彼女の姉がコーリスをビンタする光景を見て着想を得たのだ。少しトラモントで流行った。

「感情のはけ口を誤るな」

そして、何事も無かったかのようにコーリスは追及する。

「怒りも悲しみも…考え無しに解放すると良い事が無い」
「…」

「先ずは全てを俺に教える。決してヤケになるな」

バジユラは、黙って頷いた。

「…元より、我はヴァジユラという名前だった。2歳下の妹はルーナという名前だな」

石段に二人が並んで座っている。両者とも空を見て、一方は独り言の様に語っている。

「何事にも…いや、戦闘に於いて天賦の才を持って生まれた我は、神将として育てられた」

バジユラは髪を弄くり、次に目に指をかけた。

「程なくして髪のはんの一部が変色し、目も少し悪くなった。身体は充分に動いたのだから、我は気にせず鍛錬と祈りに励んだ。だが…」

彼女は一泊置いて、自身の耳を摘んだ後、コーリスの無くした片耳を撫でた。

「耳が聞こえづらくなつてからは流石に違和感を感じた。貴様程では無いだろうが…今でも聞き取るのに神経を使う」

「上部が失われたただけだ。集音に問題があるだけで、聞く能力はある」
「む、そうなのか」

「ああ。続けてくれ」
「分かった」

次は心臓を指した。

「6歳の頃、呼吸が浅くなるのを時折感じて…意識もぼんやりする事が増えた。この時点で、医者に見せた時には余命は2年。内臓の機能が弱くなっていたのだ」

「2年……どういう事だ」

「名だ」

「名前…？」

「神将の世界では名は大きな意味がある。その神格を表した名を変え
る事で、我が身を終わらせんとする呪いの様な物を収めようとした」

「だから、バジュラに…？」

「正確には、否定の意を込めた——」

彼女は自身の指で掌をなぞった。

「——×^バジュラだ。効果はあった。ヴァジュラの運命であった死を、
名前を否定する事で捻じ曲げたのだ」

「そんな事が可能なのか…？」

「祈りの世界は摩訶不思議なものだ。案外因果で繋がっている。だ
が、代償もあった」

暗い目で、彼女は地面を見た。

「名を変える儀式は先代の十二神将…私の母が行った。霊廟に刻んだ
名を消す作業だったが、神将としての力を使いすぎてしまったらしい
……その場で息絶えたのだ」

「……そうか」

「問題だったのは、既に神将となった者の運命を捻じ曲げると言う行
動。我が一般人であったのなら、母は死なず、そして私の命も延ばせ
なかった」

名は運命としてその人物と定着する。例え同名であつても、運命は個人としての人間と共にあるのだとバジユラは語る。今のバジユラにとつて、ヴァジユラという名は死の運命として定着してしまったという事だ。

コーリスには理解できない世界だった。

「妹にはヴァジユラの名が与えられた。あくまでも我が死であり、その死はヴァジユラであるという繋がりがあつただけよ。ルーナがヴァジユラになる事は、新たな神将として迎え入れられただけに収まった」

「なるほど…」

「難しいだろう。我も感覚的にしか分からんが、今の扱いでは我が先代で、私の母が先々代の様な物なのかもしれん」

「何故、神将の扱いがここまで人間と異なるんだ？」

「十二神将は初代から紡がれてきた役割というだけで無く、命であり…循環でもある。この世界の現象としての存在にまでなつてしまつたのだ。人々の悪性を祓う現象。それを捻じ曲げるのは、物理法則を変える様な物だ」

「では、お前の寿命は…」

「…：勘が良すぎるぞ、コーリス」

ため息を吐いて、バジユラは語った。

「先祖返りか…初代の力だけが私の身体に宿り、身体能力等が元々私の持つていた物に加わつて二重となつた。幼子には重すぎる力よ。だから、前借りするかの様に我は力を増していき、同時に命を持つていかれた」

「神将という現象の…不具合の様な物だとも言うのか」

「…まあ、戌の我々が元より他者に身体を明け渡す力を持つていたからな。御霊降ろしというものだ」

「だからあの時…」

家主に怒ったヴァジュラの口調が変わったのは、代々の神将の人格が一時的に表面化した物であったのだと、コーリスは理解した。

「母のおかげで、今に至るまでを命は延ばせた。白く染まる髪が止まらなかつた時は、この世の全てを憎んだものだが」

その笑い声は、泣き声にしか聞こえなかつた。

「…コーリス。我は死にたくない…」

「…」

「怖くとも、受け入れる事は出来ていた…：それなのに、今はこんなにも死が悍ましい」

流れる涙を隠そうともせず、両手でコーリスの右手を掴んで懇願した。

「せめて…死ぬまでは…：一緒にいてくれえ…」

「分かつた」

「え……」

思考の合間も無く、反射的な返答に見えた。

「お前が家族と向き合い、自分がしたい事をするのなら…：俺は絶対に止めないし、お前の助けになる」

「な、なんで…：そこまで」

「お前を助けたいと思つたからだ」

コーリスは笑つた。その顔は、ゾーイですら見た事もない安らかな物で、子供の様でもあつた。

そして、爆弾を投下した。

「俺は一応…幽霊でな」

「!?」

「立場的には死人で」

「!?」

「でも完全な霊体でもなくて」

「!?」

「だから人間の様にいつまでも生きられるらしくて」

「!?」

「でも魂は次第に腐るらしくて、不死身ではなくて」

「!?」

「故郷は歴史から消えそうになってて」

「!?」

「冥に旅をするゾーイは人間じゃなくて」

「!?!?!」

「!!バジユラ?」

「じよ、情報が……がが」

意味不明な背景に頭を唸らせるバジユラ。コーリスにまともな話を期待するのが間違いである。結局のところ、彼は空気の読めない奴なのだから。

「…元の調子になったな。なら立てっ!」

「わっ!おとと…」

コーリスが強引にバジユラを立ち上げらせ、神社を向かせる。

「元気というわけでは…混乱しているだけで」

「じゃあ、一人で死にたいか?」

「……いやだ」

「ヴァジュラに」

「謝る」

「父に」

「気持ちを伝える」

「よし」

コーリスはニコリと笑ってバジュラの手を掴む。

自己満足ではあるが、彼にここまで人助けの自覚を与えたのはバジュラが初めてである。ある意味で、釈然としない彼の今を照らしたのかもしれない。

それ程までに、コーリスは子供の様だった。掴んだ手を離さないように、二人は神社へ戻っていった。

「…しかし夜中だ。二人で入れば…バレるか？」

「…一緒に寝ても」

「え？」

「今日だけ…一緒に寝てくれんか…？」

「……………」

コーリスの表情が、消えた。

——幕間：その夜の会話。

「なあ」

「うん？」

「なんで我を救いたいと思ったんだ？」

「まあ…その、故郷に幼馴染がいたんだ」

「……………ア？」

「人付き合いはお前と違って苦手だったけど…自分で悩んで、何とか一人で問題を解決しようとして、失敗して…思い詰める奴だった。人に頼る事が苦手で、行動しようとする意思が良くも悪くも強かった。そして、自身を想ってくれる妹がいた」

「……………」

「だからかな…似ているという訳ではないが、支えなくなる点はお前と同じだった。多分、この神社の人間も俺と変わらないんじゃないか」

「……………そうか。ちなみになんだが」

「ん？」

「その幼馴染……………女か？」

「うん」

「エルーンか？」

「うん」

（……………宿敵イ…!!）

41. 着々と

——早朝。

「……そろーり」

のそりと音を立てない様に布団から抜け出すコーリス。思えば布団という寝床も彼にとつて不思議なものだった。床に柔らかい生地を敷いて寝そべるといふ概念は、最初は拒んだものの、寝てしまえば恐ろしく心地よいものになっていったのだ。

だが、昨夜のバジュラの提案を断りきれなかった為、布団には彼女が眠っている。起こさないように、そして騒ぎにならない様早めに布団から出て外の空気を吸おうとし…現在に至る。

「おはようございます」

「おはよう」

毎朝日の光を浴びているヴァジュラとの挨拶も慣れたものだった。静かな空間で朧気な冷気を感じながら、コーリスは犬神宮の下へ、村へ、そして島の入り口まで歩いた。そして呼んだ。

「——ゾーイ」

返事は一瞬で帰ってきた。

「——ただいま、コーリス」

「おかえり」

世界の俯瞰という役目を終えたのか、微弱な光と共にゾーイが現れた。

「数日しか経っていないが、何かあったかい？」

「バジユラの秘密を知った」

「……………そうか。あの命の灯火は、とても小さかったよ」

「それで…」

”殺されかけた”という言葉を言おうとして、やめた。コーリスでも流石に空気を読んだ。バジユラに同情的になっている彼女にそれを言うのは忍びない。

「2ヶ月ほど時間をくれ」

「分かった。悔いの無いようにね」

「ゾーイはどうするんだ？」

「一端姿を消し…いや、リュミエールでバイトでもしようか」

「バイト…？」

「実はもう受けて来ちゃったんだ」

追いつかない理解を放置し、ゾーイはコーリスに1枚の紙を見せる。

「リュミエールランチ」。時給200ルピで賄い有り……………賄いに引かれたか」

「これで食費に君のルピを使う必要もないし、暇も生まれないさ！」

「地味に社会性高いのな…」

失礼な感心をゾーイに向けたところで、コーリスは彼女の口元に目が行った。汚れが付いているというか、モロに食べかすである。

「こんな朝に…何を食べた。食べかすが付いているぞ」

「え？む…こ、これは」

「酒場か…世界を見渡す力を使って疲れた後に行ったんだな」

「…」

「何ルピだ」

「…2000ルピ」

「そうか……………使い過ぎ」
「うぐっ」

バイト十時間分を一食で浪費してしまうあたり、ゾーイの金銭感覚…というより食欲の正直さに呆れてしまうところであったが、コーリスの貯金には余裕がある。

「リュミエールを出た時には68万あったから……………犬神宮に住まわせ
て貰ってる札に払って……………別に余裕あるしバイトしなくてもいい
ぞ」

「穀潰しには…なりたくない」

「今の俺に刺さる言葉だな」

溜息を付きながら、コーリスは一応の金をゾーイに手渡して神社に戻った。

「コーリス君……………重ね重ねすまない!!」

「我儘言ってますみませんでした…」

(この家族皆土下座してくるな…)

バジユラが朝に弱い事を忘れていたコーリス。案の定ずっとコーリスの部屋で寝ていた彼女を父親が発見し、彼に謝罪するという光景がここに存在している。既視感を禁じ得ない。

しかも今回はバジユラもセットだ。

「取り敢えず…家主様。これを」

「……………うん?」

「ルピです。衣食住のお礼として受け取っていただきませんか」

「そ、そんな此方こそ…」

「此方こそ？」

「娘から話は聞いているよ。この子と一緒にいてくれるんだって…！」

「はい」

「…！ありがとう…ありがとう…！良か…ったな…あバジユラ!!」

大量の涙を流し娘と抱き合う父親。こつそりこの部屋を覗いている従者達も手ぬぐいで涙を拭いている。愛が深い神社であるとコーリスはしみじみ感じた。

一通り落ち着くと、家主は改めてコーリスと向き合った。

「…せめて、当初の目的である『剣術の指南』を娘にやらせ、効果が見込めればそのお代としてこのルピを受け取るという形では駄目かな…？」

「こちらとしては数日住まわせてもらってる有り難みがあるのですが…」

「私としては君にこそ深い礼を言いたい。どうか」

「…分かりました。しかしバジユラは良いのですか」

「……どうだ、バジユラ？」

話がいつの間にか進んでいる事にハツとしながら、バジユラは長考する素振りも見せずコーリスに頭を下げて述べた。

「ふ、ふつつかものですがよろしくおねがいします？」

呂律が回っていないかった。

あの日滞ったバジユラとの修行が、今日からまた始まった。

もつとも、バジユラに教えを乞うといっても、彼が優れた剣士であるので意見交換の様な物になってしまう。彼が刀を使うとするのなら話は別だが、この指南を受けた理由は刀の技術を長剣での戦い方に組み込む事。

彼女も難儀はしている。だが、この2人の日々は確かに充実した物となった。

「斬ると言っても切れ味や腕力に依存しちや駄目なのは長剣と一緒に。背中と胸を使って振り、刃が当たる角度にも気をつけないとな！」

「案外刀との違いは無いんだな。じゃあ突きは？」

「確実な損傷を与えるため、刺した後に捻ると良い。私の持つ柄頭の方の短刀は不意打ち用に近いが、本来の突きはもつと危ないぞ」

「ヴァジユラは斬る方が得意そうだったな」

「神将の戦い方は斬撃が主流だからな」

——ある時は雑談に留めたり。

「すまんかったのう……ヴァジユラ……」

「ぐす……もういいんですよ……姉さん」

——美しい姉妹愛を見たり。

「34433……34、44………！」

「ひゃ、121……ぐえ」

——ある時は肉体鍛錬で心と体をスッキリさせたり。

「よっしや——斬ったあああ!!!」

「ば、馬鹿な…30枚の盾を」

——バジユラの斬撃テストをしたり。

「もう一回！もう一回ですコーリス様!!ナガルシヤがミスをしました!!」

「妹よ、ナガルシヤの動きは完璧だったぞ。金牙新然はお前がミスった。まあどのみち…」

「はあ…はあ…二度とやるかクソ……」

——ヴァジユラ神将との本気勝負に勝っちゃったり。

「ふい……気持ちいいー」

「お風呂は良い物ですね…」

「だなあ……」

——神将の護犬と風呂に入ったり。

「コーリス！今日はどうどんが出るぞ！」

「うどん…?」

「見る方が早い！これだ!!」

「……太いラーメンだな」

「らーめん…?まあいい、食べるぞ！」

「いただきます…うお、もちつとしてうまい」

「うま、うま……」

——頭を空にして美味しい食事に没頭したり。

「しかし鞘を持って短刀を槍に見立てるとか良く考えるなあ」

「犬神宮は柔軟な戦い方が自慢だ。我が貴様だったらもっと多くの戦い方をするだろう」

「例えば？」

「放つ前の光線を斬って枝分かれさせたり…盾に光線を反射させたり」

「…前者は面白そうだが、後者は無理だ」

「何故だ」

「…だって鏡じゃあるまいし。ただの堅い盾にビーム当ててもどうにもならん」

「え？」

「ずっと前からの疑問なんだが、何でお前らは盾に反射能力を付けたがるんだ？盾は防ぐ物だろうに」

「………浪漫の分からん奴だ」

——なんか技の考案もしたり。

「手や剣の先を光線の噴射口に見立てているのですね！なら私も一つ案を出しましょう！お口です!!」

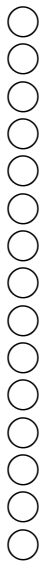
「!？」

「流石にそれは出来………るかもしれない」
「!？」

——なんならヴァジュラも案を出してバジュラをドン引きさせたり。

色々遊んでいた気もするが、一週間過ぎとして結局バジュラと本気で立ち会う事になるのだった。

理由は言葉で伝えられるほど頭が柔らかくなかったからだ。



「取り敢えず結界は貼ってもらいました。姉さんの全力でも耐える筈

です」

「ありがとう。バジユラで問題無いなら俺の心配も無用だな」

どうも、バジユラと3回目の戦いを迎えるコーリスだ。1回目は地雷を踏んだ時の不意打ちに近い形。2回目は森での猪突猛進バジユラ。だが、今回は互いに本気を出す戦いだ。以前の様に簡単にはいかないだろう。

3日前に戦ったヴァジユラも強かった。神将としてなので、ナガルシャを含め本気で戦ってもらったが、精神が強靱なせいか意識障害の霧は無効化されるし、炸裂する斬撃のせいで霧そのものが払われて当たりにくかった。ナガルシャの動きも戦士として優れているし、口に啞えた刀での錯乱は非常に厄介だった。

最終的に周囲に盾を置いて跳ねまくる戦法でゴリ押したが、ヴァジユラも切り札に”ミタマ降ろし”という技を使ってきた。なんでも、この島に住む精霊等に身体と人格を貸し、彼等の能力を使うというもの。水が飛んでくる斬撃が風のように変化するわでとんでもなかった。だが、ナガルシャとの連携が組めないのがデメリットだった。

結局最後も高速戦闘になったが、ミタマ降ろしが切れて疲弊しているヴァジユラがナガルシャとの奥義でミスをして……その一瞬の隙をビームで貫いて霧を通して盾で押し潰して勝利、という形に終わった。

「意識を失うか、完全な行動不能状態を負けと見做すが……いいな？」
「構わん」

腕を伸ばしているバジユラからの確認を返す。

見たところバジユラの武装は双刃刀のみ。だが真に危険なのは初代神将と同質の力とやら。精神状態が強く作用するらしいが、以前の気が散っていた時でさえ発生した斬撃の速度は恐ろしいものだった。それが今回は純粋な勝負。あいつの精神も整っているだろう。

さて、どうするか。愛^{ノスタルジア}劍の調子を見ながら今の内に観察する。身体能力の高さは初代の力の影響というのは知っている。視力や聴力は悪いが、判断力の高さは脅威。魔力と違って刀による物理的な斬撃は躲すことが大前提。少し前の実験で盾を30枚斬られた。

「…」

少し空気がピリついてきた。戦いの匂い。

鞘に収めた剣を腰に差し、あまり使う事は無かったが、遊撃隊時代の暗器も反対の位置に装備しておく。

あと、一番の問題は…：義手だ。これが壊ればリユミエールまで行って直してもらおう必要がある。だが、”平和な場所なのに腕試しに戦いまくって壊れた”なんて言い訳が通用するとは思えないし、そもそも騎士団を抜けておいてダサすぎるので、損傷には本気で気を遣わなければならぬ――

「ばー!!」

「うおっ!?!」

色々と考えている途中にバジュラが大きな声で驚かせてきた。背後のすぐ近くに寄られていたのか…。

「何をそんなに緊張している？我なんて刀一本しか持つとらんぞ」

「：ヴァジュラは強かった。だが、お前はそれ以上なんだろ」

「おうさ。まあ…殺し合いの話だったら間違い無く貴様は世界最強だ。だが、今からするのは試し合いだ。元より貴様も血生臭い戦いは嫌いだから気持ちちは分かるが」

「荒れるぞ、この鬨いは」

「楽にしておれ、気持ちよく飛ばしてやる」

「…前は噛み付いてきた癖に」

「はは。貴様の血、恐ろしく不味かったぞ。鉄の味ですらない溝^{ドブ}の様

な」

あの夜の噛み跡は未だに残っている。傷として残る訳ではなさそうだが、歯型がビツシリだ。しかし失礼な奴だ。血がドブみたいだなんて……化け物みたいに言うな。

「さて、もういいか？」

「ああ」

バジユラが緊張を解してくれたみたいだ。ありがたいが、気が緩むのは避けたい。

「えー、両名準備もできた事で……」

ヴァジユラが合図を出してくれる筈だ。一瞬の踏み出しの為に全身の筋肉を総動員させる。

バジユラも同じく構えるが、妹のソレとは違い、片手を地面につき刀を逆手に持った——4足歩行の獣の様な体勢だった。

「では……始——」

”め”の音を聞く事なく、俺達は互いに大地を蹴った。

……フライングした。

——小話：知らないおじちゃん①

物心が付くほど育ってから見てみると、わしの住む島に一定の周期でエルーンの男が来ている事が分かった。長老……まあ、わしの祖父なんだが、その男に出会うと毎回頭を下げた挨拶をしてから談笑しているのだ。

長老はこの島で一番偉いのに、何で頭を下げるんだ？

『むむ……あやしいぞ』

納得出来るほどの脳みそを持っていないくらい幼かったわしは、隠れてそのエルーンの男に会いに行った。

——毎回だ。この島に来るたび墓参りだ。しかも、わしの先祖達が埋まってる墓。怪しいだろ、この男。

『ご先祖さまになんのようにだ!!』

開口一番森から顔を出して叫んだ。

男はその灰色の髪を揺らしながら驚いていた。訳が分からん。よくよく顔を見れば若く、族長が頭を下げる程の覇気も無かった。そこから辺でひっそり暮らしてそうな顔。

しかし——どんな老人よりも悟った様な顔をしていた。

『……君は』

『な、なんだ』

『ああ、すまない。挨拶がまだだった。こんにちは』

『こんにちは！……って違う！なんのようだ!』

『元気だな……』

わしの顔を知っていたかの様に、そして懐かしげに見てくるので、不可解極まったわしは威嚇したのだ。片足を地面にガンガン叩きつけて抗議する様に。いやあ、6歳の時とはいえ情けなくて恥ずかしいな。

で、男は名乗った。

『俺はコーリスという』

『こーりすう……？きいたことがある気が……七なんだかの騎士にそんなのいなかったか？』

『今は騎空士だ。【祈望きぼうの騎空団】という名前だな』

『あー知ってるぞー！3人しかいないやつだー！』

『……………』

当時有名だった騎空団の団長であった男は聞いた。

『君の名前は？』

勿論わしは答えた。

『ヴァジラだ！十二神将になる為に修行してるんだ！』

『……………！』

名前を聞いた瞬間、男は少し驚いた後に笑った。

そして首を傾げるわしにまた聞いた。

『バジラ、か？』

その絶妙な発音の違いをわしは見逃さなかった。

『”ヴァ”だ！ヴァー!!』

『ははは……ごめんごめん』

——これが、わしとコーリスおじちゃんの出会いだった。何故”おじちゃん”なのか、だと？……聞いて驚くなよ？

この後長老に聞いたんだが、なんとおじちゃんはこの時105歳だったのだ!!驚いたか!!

「いや、おかしいだろ」

「どうしたヴァジラ？」

「……なんでもない。それよりもおじちゃん！今日もガルと奥義の練習をしたぞ！」

「そうか。偉いなヴァジラは」

「えへへ……」

今日も今日とておじちゃんは変わらない。

いつも通り、膝の上で頭を撫でてもらうのだ！えへ。

…でも、おじちゃんはわしを船に乗せてくれないんだ。なんでだ？

4.2. 灰の楔、或いは扉：①

——次元が、違う。

戦いを見ているヴァジュラが感じたのは、それだけであった。自身とナガルシヤの本気を以て、苦戦させるに至った筈のコーリスの動きが、全く異なるとさえ思えた。

「落ち込む事無き様、主様」

「ナガルシヤ…」

「彼等は、理外の者なのです」

励ましの言葉も、言い換えれば現実逃避。

コーリスの霧も、蒼黒い光線も、尽きぬ盾も、恐ろしき臂力も、何もかも理解出来ない。

だが、それはバジュラを見ても同じだ。戦うと決まれば一瞬で懐に潜り込み、一撃必殺の斬撃を何十回も繰り返す。無から斬撃を発生させ、空を割る巫女。

そんな中で、渦中の当事者は激しい音を奏でていた。

(これが本来のバジュラの力……短刀の攻撃は視認すら危ういが、なる程分かりやすい。主体の刃を振りかぶる時の隙を無くすわけか) (…ふむ、あの剣を直接受けてはならんな。刀どころか肩まで砕けるわ。ヴァジュラはよく往なしたものだ。だが、盾の効力は我の前で無意味と知っている筈。くく、後退が目立ってきたぞ(コーリスう?)

彼等が一度足を踏み締めれば土煙が舞い、一度剣を交差させれば疎ましい金属音が響く。閃光の様な火花が巫覡達の目を置き去りにし、何とか追いつけるのはヴァジュラとナガルシヤ、一部の実力者のみとなった。

「コーリス様は…私に手加減していた？」

「いえ、恐らくは主様の戦い方と相性が悪かったのでしょう。此方の攻撃力が足りない気もしますが、懐に入り続ければ持久戦の利もあつた筈です。彼はバジユラ様の様な攻め手には得意な筈ですから」

「じゃあ、あの霧は？」

「それは分かりません。ただ、あのコーリス様から生み出された霧に限って感知、意識阻害、極短期間での記憶消去が可能な事が分かっています」

「……つくづく、対人特化です」

ヴァジユラが思わず溜息を零した。

それと同時に二人は一定の距離を保ちながら横に歩く。打ち合いは一段落した様だ。

「さて、攻め手を変えるぞ」

バジユラが柄頭の短刀を鞘に収め、純粹な刀として形を整えた。それに対しコーリスは右手をひらりと掲げた。

「お手柔らかに」

霧が充満した。視界が狭まっていく中で、バジユラの弱々しい感覚が警報を鳴らした。

「針かつー！」

飛来したのは暗器の飛び道具。斬ることは出来ず、牽制としてしか使えないような小型の針が4本彼女の胸部に飛んできた。バジユラの反応速度はその針をいとも容易く弾くが、肝心のコーリスの姿は見えない。

(――ならば)

「があッ!!!」

吠え。森の時とは違い、律した精神で繰り出される戦神の斬撃は容易く大地を削る。霧など、淡雪の様に消え去った。

だが、バジユラは理解っていた。この動きはコーリスによつて強制されたものであると。

「誘導癖もそこまでだッ!!」

だからこそ、バジユラは横一闪に刀を振るつた。ヴァジユラと同質である――彼女本来の魔力を込めた斬撃は、祈りや精神に依る性質を持つ。つまり、その威力が高ければ高いほど彼女には余裕があるという事だ。

足場に置いていたコーリスの盾が、全て破壊された。

(…想定内だが、当てずっぽうで縦に振られてれば負けていたかもしれない)

ヴァジユラの時に使用した、盾による足場を構成し加速する戦法は彼女には無意味となったのだ。霧の危険性も認知されている。

霧を晴らせる者に対して攻めあぐねるといふのは、彼の士官学校時代からの弱点であり課題だった。

「ならば」

コーリスの剣に魔力が宿った。黒き刀身が蒼く染まる。

(…あれは不味い!)

過剰な魔力を感じたバジユラは技を撃たせまいとコーリスに接近する。しかし、コーリスの技であるガンマライト・エクスキューションは、撃っている間に魔力を溜め続ける技。つまり、発動に時間が掛かる事は無い。

ここで初めてコーリスはバジユラの一手先を行った。

「ガンマライト・エクスキューション」

「なっ…!」

隣人に話しかける程度の平坦な声で発せられた奥義は、接近したからこそバジユラの身体に当たった。

「ぐ、ああ!!!」

奔流が身を焼くが、同時にバジユラは気づいていた。この技は継続して当たる事が危険なのであって、一秒程度なら直撃しても致命傷にはならないと。

(…ならば!)

彼女は苦痛の叫びを斬撃発動に使用し、地盤を掘り起こした。そしてその面を蹴る事でコーリスの奔流から逃れたのだ。まさしく曲芸。自身の力の使い方有多義に渡って解釈できるバジユラの本当の強さが垣間見えた。

「取ったぞコーリスウ!!」

これだけの光線を放てば隙が見える。迷わずコーリスの真後ろに向かったバジユラ。

コーリスは怪しく笑った。

「備えているとも」

バジユラを極端に過大評価していたからこそ、彼は何重にも技を重ねる。何故なら、その魔力量が重ねる事を許しているから。

剣を持っていない左手を後ろに向け、彼は叫んだ。

「ラビッド・ストリーム!!!」

それはゾーイ、スルトと協力して開発した対巨大生物用の極大光線。溢れんばかりの魔力を一気に放つ、先程の技とは異なる仕組みの技。

それでもバジユラは一瞬の判断で身体を反らし、胴へ直撃する筈だった物を脇腹へ被弾させた。巨大な光線故に腕や足にも次第に影響が出るが、一瞬でも両手が動けばそれで良かった。

(何をやる気だ…!?)

次は、バジユラが笑う番であった。

再び短刀を抜き、二つの刃を平行に構えて獰猛に、そして勇敢に笑った。

「ぐ、はは——行くぞ。我の奥義」

「……!!」

静観していたヴァジユラに冷や汗が見えた。幼き頃、空を割った姉の姿が今垣間見えたのだ。

バジユラの眼と刃が金色に光る。

「りようさいけんぼ獵碎犬戌!!!」

その黄金の斬撃は、コーリスを逃がすまいと両側から挟む様に飛来し、彼が張った数多の盾を切り刻みながら——ゼロ距離で炸裂した。そしてその炸裂は爆風と共に新たな斬撃を生み、空へと上昇していったのだ。

「あれは……!?!」

高密度の光線と音速の斬撃。それ等が混ざり合った余波が歪な空間を見せていた。
端的に言えば、空気が裂けていたのだ。

(や、ば…、…死——)

(が…寿命より先に消し炭になるやもしれ——)

そして二人はその刹那——互いに触れた。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「……?」

そこは薄暗い洞窟だった。おかしい。俺はさっきまでバジユラと戦っていた筈だ。走馬灯にしてはこの場所についての記憶がない。何方かというところには——

「空戦の時に見た……」

そう、空戦で騎空艇から落ちて意識を失った時に見た、知らない記憶。それに近いものだ。

「いや、それは違うぞ」

「…誰だ！」

若い男の声。聞き覚えもない。後ろを振り向くと、金髪の男が立っていた。

「俺は初代神しよ——」

「!!!」

そうか、初代の神将か。そこまで分かればいい。

——丁度、殴りたかったところだ。

「ぶ……！はは…初対面で殴られたのは初めてだな」

「バジユラなら、切り刻む程度では済まんぞ」

「…そうか、お前…結構あの子を大事に思ってくれてるんだな」

「ああ、存分に絆された。お前の力が原因で寿命が縮んでいる事も知った」

「当然の怒りだな」

その男はヴァジユラが身に着けている服の男性用といった様相で、網のようなアクセサリーが目立った。何より彼女等に顔が似ているが……人ではない気迫が伝わる。神聖さと言った方が分かりやすいだろうか。

男は頬をさすりながら言った。

「さて、俺は初代十二神将、闘神金剛伐折羅——の」

「の？」

「の、力の具現化みたいな物だ。本人じゃない。あの子の命を縮める原因になった力そのものだ。つまり、初代十二神将が実際にあの子に入っている訳じゃない」

「なら、尚更目の前のお前が原因だと」

…殺すか。八つ当たりだが、力の具現化に命の価値を見出す必要は無い。好きにさせてもらう。

「お前思い切り良さ過ぎだろ。剣を収めてくれ」

「話す事など何もない」

「あの子が短命の原因とか聞きたくないのか」

「ただの偶然。人から腕力や脚力を概念として奪う事が出来ない様に、一部分としてもバジユラの力である限り取り除いて寿命を延ばすなんてことは出来ない」

「…知っていたのか。そうだ。本当に偶然で…ただ誰よりも神将としての才能があるから、産まれる前に初代の力を降ろしてしまった」

「だから、お前に何の価値も見出していない。人や星晶獣、精霊…とにかく生命体は尊重するがな」

「生命の定義か…思ったより傲慢な男だな」

初代の人格を基にしてその姿は出来ているのだろうが、こいつから情報を貰ったところでバジユラを助ける事は出来ない。それはもう分かっている。

一家の話聞いたからな。先代の神将が命を賭しても十年しか延ばせなかったんだ。本当に、どうしようもないのだろう。

驚くべきは力が人格を持っているということ。そいつは軽薄な表情から一転して、真剣な眼差しで此方を見つめてきた。

「——生命体の存在を尊重するなら、もっと身近な奴を理解してやっただらどうだ？」

「——は？」

何を言っているんだこいつ。

「お前があの子の力である俺の元に現れた。それはつまり、同質の力が影響——いや、共鳴か。それが理由だ」

「きよう、めい…?」

「要するに——」

どういう、ことだ？

「内にもう一つの存在を持つ人間同士の共鳴現象、ということだ」

「…?」

「恐らくあの子は今、お前の中に触れている筈だ」

……………俺の中に誰がいるのか？

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「なんだあ、ここは」

いやはや。我はコーリスと戦って絶賛消し飛ばされ中だった筈なんだが、何だここ。我は恐ろしいくらいの上空を落ちる事なく歩いているぞ。

下を見れば勿論大地が見える。そして——

「…あれは海、というやつか?」

青い青い水が際限なく広がる。確かアウギユステには海があるんだっただな。

「…あれ？」

ここで我は違和感に気付いた。何もかも俯瞰できる程の上空から——何よりも冴え渡る視力にも違和感を抱いたが、それよりも、島の輪郭が見えない。際限のない海が広がり続け、反対側には大地が無限に。上を見渡せば蒼い空が往々と我を見下しているが、島の輪郭が見えない為、空の下が無い。

…こんな大きな島、いやこれはもう世界というレベルだな。そんな場所があるのか？

「ひっ…ぐす」

「…!？」

なんだ!?!泣き声が聞こえるぞ!だが…男にも女にも聞こえる声だ。近い…!

「奪ってごめんね…水、土…」

「？」

「負担掛けてごめんね…風…!!」

「気候に謝ってどうする」

「オロロジャイア…」

「実はおちよくってるな貴様？」

意味の分からん言葉を羅列する泣き声。煩くて敵わん。どうでもいいが、もう少しこの光景を歩いて見てみようか。貴重な体験であるし、何より美しい風景だ。犬神宮の夜明けでもここまで晴れ晴れとした爽快さは無い。

「……………」

歩く。ひたすら歩く。いや、歩くというより視点が恐ろしく早く動く。全能の神になった気分だ。世界を一瞬で見渡している気がする。そして、我は気付いた。この世界は我等が住んでいる場所ではない。

まず、海が多すぎる。そして、次に陸が多い。島という概念は海にちらほら浮いている物にしか当てはまらない。空は上にしかないし、この大地が空に浮いているという証明が出来ないのだ。

「……あ、一周した。ふむ、真っ直ぐ歩いて輪郭が見えんという事は、本当にこれが一つの世界か——あと」

「う、ひぐ」

「さつきから五月蠅い!!泣き虫めが!」

何処にいても聞こえてくる泣き声にうんざりして、我は空に向かって思いつきり手をぶつけた。

…空を切る筈の手が、何かが崩れる音と共に当たった。

「…へ?」

空間に、ヒビが入った。

「なんじゃああああ?!!」

そして崩落する世界。

わ、我は世界を滅ぼしてしまったのか…!

「ま、まずい…腹切り程度じゃ済まんぞこれ……む?」

あたふたしていると、剥がれた世界の中から頭になったのは、我がよく知る世界。

「お？あれは犬神宮…か？じゃああの水が目立つ島はアウギユステ
…というか輪郭が見える。空に浮いてる。やっぱり世界はこうだ
よな…？」

「ち、ちがうんだよ」

「おうおうやつと姿を現し——」

先程とは違い、背後から聞こえる声に対応して後ろを見ると……。

「……コーリス？」

「……え、えと！」

「……………」

小さい子供がいた。涙目で、エルーンの耳が生えていて…:なにより
灰色の髪が目立つ。コーリスを幼子に戻した様な見た目だが。

——歪な角が二本生えていた。

「おうおうおう我の前でコーリスの偽物とは良い度胸だなあ！その角
さえなければ良い再現性だと褒めてやったが…:甘いわ!!」

「え!?!き、君が彼の何を知ってるのさ!」

「黙れ!…さつきからウジウジとその見た目で泣いてたのか!?コーリス
はもつと夢げで…:言つてしまえば妖艶だ!!あとかつこいい!」

「彼をそんな目で見ないでよ!」

こ、こいつ…:知った風な口を聞く。泣き虫の癖にコーリスの事とな
れば必死に反抗してくるぞ。

仕方ない。少しこいつに興味が出てきた。

「興味が湧いたぞ。名乗れ!」

「……廃棄はいきの理ことわりを持つ楔…:アウゲイアス。『灰』と呼ばれていたけ

ど、名前の方が好きだ」

「楔……お前、我が何でも知ってると思ってるか？」

「お、思ってる……」

「ならさっきのはずっと独り言か？」

「う、うん……」

「………はあ。どうやら、迷い込んできたのは我の方らしいな」

「お帰りはあっちだよ……？」

「帰らんわ」

「え!？」

興味が湧いてきたと言っただろう。

「理だの楔だの、分からん事ばっかだ。せめて我がここに來た理由だ
けでも教えてくれ」

「……ちよつと待ってね。今許可取るから」

「…許可？」

「オロロジャイアー!!話していい!？」

「人名だったのか……」

目の前の奴が空に向かって叫んだ。そしてそれに対する返答は無
かった。所詮独り言の類だったのか、あるいは物狂いか。もしくは一
人過ぎて拗らせたか。

だがこいつは親指を上を立てて自信満々に笑った。

「例外だけど貴重なタイミングだからヨシ!」だって!良かったね
!」

「…頭大丈夫か？」

失敬だと言わんばかりに口を尖らせたこいつ…いや、アウゲイアス
だったか…?とにかく、私の頭に触れてくる。

「…な、なんだ」

「質問は後で聞くから、外に出たら決して口外しない事。特にコーリスには言わないでね」

「なんでだ？」

「僕は彼のファンなんだ。決して僕の後を追ってほしくないからね」

「……分かった」

「じゃあ、心して聞いてね？」

先程まで泣いていた姿には思えない、演劇が始まるかの様な素振りであちこちを見ながらアウゲイアスは語り始めた。

「僕はコーリスの身体に宿った力。そして君は初代十二神将の力を降ろしてしまった人間。お互い内に存在を秘めた者同士が干渉し合って生まれたのが今の状況。君が僕に触れ、コーリスは初代の力に触れているだろうね」

「で、君は勿論初代の力を自覚しているけど……コーリスは僕の事を全く知らないんだ」

何故だ、という問いは出ない。口が開かない。さつき触れられた時に何か細工を……。

ともかく、聞こう。

「……さつき君が見てたのは創られた当初の世界。アレが色々な過程を経て今の空の世界になったんだ。僕達“楔”は、あの世界を世界たらしめる為の効力であり、圧であった」

……という事は、楔とやらの力が無くなったから今の世界になったという事か……？

「お、恐ろしく物分りがいいんだね。そうだよ……楔の大半は消えるか、力を失って破棄された。今じゃ7、8体くらいしか残ってない。僕はその中でも“廃棄”の役割で、世界に不必要なもの、害あるものを取

り込んで捨てる役割を持つてたんだ」

ほへー。結構大事そうだな。

「でも僕死にかけちゃつて…それで世界に影響を及ぼす物を廃棄出来なくなったから…こんな世界になつちやつた訳で………」

つまり、戦犯？

「ひ、ひどい……でも、そうかも、ね。海なんてあんなにあつたのに滅つちやつたし、大地も空に浮くしかない。だから”水”と”土”の楔は弱体化しちやつて……今の世界で重要な”風”に負担をかけちやつたんだ」

でも貴様は生きているではないか。

「この力は重要だからね……何とか存在を維持して、力だけでも受け継がせる必要があつた」

それがコーリスか？

「うん…親友——オロロジャイアがその子のどこまで案内してくれて……はい、今に至ります」

……人間に宿るには重荷過ぎやしないか？星晶獣ですら我等の手に余るというのに、世界が創造された時からいる奴等が1人間に宿るとは……。

「い、今は楔が無くても世界が維持されてるから……！コーリスが大丈夫なのは保証するから！」

「いやそこまで懸念はしてないが……あ、喋れた」

「それ、で…どう思った」

「さっぱり分からん」

「け、結構噛み砕いたからね…君の理解力に甘えちゃった」

てへ、と頭を搔くアウゲイアス。あざとさが凄いぞこやつ。

「まあ理解力が高いのは…もうすぐ死ぬから達観しとるのやもな。はははー！」

「ぶ、ブラツクジョーク…」

「ちなみに生きてる楔とやらは今我等の世界にいるのか？」

「1人はずつと働いてて…他の6つは寝てる。絶対的に存在を保証できるのはこの7体かな…僕も死んだ様なものだし」

「ほう…寝てるのか」

「で、ここからが問題で…コーリスの力は僕由来んだけど、その…幽世のクク■野郎共と混ざっちゃいまして…」

「く、ク■…!？」

「あの■売のク■ファツ■ンの塵芥共が…ぶっ殺してやる…!!」

えー、聞くに耐えんので自主規制させてもらう。悪く思うな。

何やら幽世という者に対してすごい殺意を抱いている。

「…ごめんね。それで、僕由来の力である”吸収”がク■共のせいで捻じ曲げられて、霧になったんだ。吸って好きな時に捨てる能力が、”奪う”という概念に寄っちゃって。あ、幽世って何って思うかもしれないけど、こいつ等だけは知らない方がいいから聞き流して」

「…おう」

「本来楔は世界の有り様によって持つ人格が変わるんだけど、コーリスに同化して彼に依存する形になった僕は、彼の影響を受けた人格を持つに至ったんだ」

「どういう事だ？」

「働いていた頃の僕は、もう廃棄の名の通り……邪魔な物は焼き尽くす破壊装置だったんだ。コーリスのお陰で、ひ弱だけど豊かな感性を持てた」

「ふむ」

…分からん！

「…一方的に宿っておいて何だけど、感性を持った僕は思った。この子にはこの子の人生を全うしてほしいんだ」

「しかし、それは困るのではないか？」

「うん。でも思ったんだ。この世界が変わってしまった今、廃棄の楔はいらない。一応の保険として僕は生き続けるけど、今は四元素と生死…そして時間さえあれば大丈夫」

アウゲイアスは慈しみの籠もった表情を見せた。それは、コーリスには出来ない様な顔。見た目は同じだが、根本的には違う生物であると認識させられた。

「いつかコーリスが楔の権能と向き合う事になるだろうけど、その時は僕なんか放って理想を歩んでほしい。迷う人間を救うなんて、素晴らしい夢だよ。掃除ばっかしてた僕とは大違い……だからこそ、彼のファンになったんだ」

「なるほどなあ……」

「君はあの子の事が大好きみたいだから、理解しているでしょ？」

「……いや」

「え？」

「今思えば我、あいつの事全く知らんな。一目惚れだったからな！ハハハ！」

「……………そういえばそんな感じだったかも。コーリスは天然だからなあ……君の問題にも顔突っ込んだじゃったし」

「兎にも角にもコーリスについては任しておけ！今は戦闘中だが、強

い男にしてやるからな!!」

「…うん。お願いね、空の子供」

奴はそう言つて、眩しいくらいの笑顔を見せた。

「…あ、聞き忘れた。結局貴様からしてもこの状況は予想外か」

「うん偶然。でも、君に会えて少し気が楽になったよ。コーリスの方は全く得してないだろうけどね。何より君に宿るのは力だけが先祖返りしたみたいなものだから本人じゃないし。辛辣な事を言うけど：僕とはレベルが違いすぎて不要だ。有益な情報すらない」

「……」

「でも、君自身は魅力的な人間だ。力に縛られることなきよう——最期まで頑張つてね」

「…おう！言われるまでもない！」

「それじゃ、またね」

結局奴は最後までその姿のまま手を振っていた。

——ああ、意識が戻っていく。コーリスとまた戦闘か。

…こんな話を聞いたら、やりづらいな。

「短命の娘と長命の子が関わったらこんな風になるなんてね。ほんとにびつくりだよ」

「あ、オロロジャイア」

「やつほー！アウ君も元気そうだねー！」

「”も”？君は不健康そうに見えるよ…？」

「なにをー!?僕はまだまだ働けますとも!それより君の方も問題ないかい?」

「うん。一切問題ないよ。懸念点で言えば……土と水が弱体化した原因の一部は僕だから、彼等が人格を得たら僕を憎むかもしれない。連鎖的に僕の力を持つコーリスを狙う事になるんじゃないかって思うんだ」

「なるほどねー。でも問題ナッシング!楔の人格は空の形に依るからね!つまり、平和であれば温厚な友達が増えるって訳さ!」

「…コーリスが世界に影響を及ぼしたらどうするの?」

「…………幽世と混ざっちゃった以上、君の力がある分害ではないけどねえ、僕が干渉出来なくなっちゃったから、そこは怖いかな。バジユラちゃんがコーリス君に良い影響を与えてくれる事を祈るよ」

「結局のところ、バジユラちゃんに話す事を許可した理由ってさ……」
「うん」

「島から出ずに満足してすぐ死んじゃうからって事だよな。だってこの情報ばら撒かれたらオロロジャイアの努力帳消しだし」

「……コーリス君との接点がなければ触れる事すら無いからねえ……………」

「ねえ、オロロジャイア」

「…んん?」

「創世神、ぶっ殺したいね」

「ノーコメントで!!!」

「本音は?」

「土下座しても絶対許さない!!」

「あはは」



コーリスとバジユラの技が衝突し、爆発を引き起こした。両者は結

界の壁に激突し、暫く動かない。

「…まさか、死んだ訳では無いですよね？」

「深手ではありませんが、そんな事はないでしょう」

「様子を見ますか——って言ってる間に…」

ヴァジュラが静寂に一石を投じようとした瞬間、コーリスとバジュラが同時に起き上がり、互いを見つめ合った。

バジュラは瞳が金色に光り、コーリスの瞳は灰色に光る。明らかに先程から様子が変わった両者の間には誰にも入る事は出来なかった。

「……」

「……」

そして何やら察し合ったのか、頷き合い、獰猛に笑った。

「積もる話はこの後で!!」

第2ラウンド、開戦——！

4.2. 灰の楔、或いは扉：②

ずっと考えていた。

この力、霧は何なのかと。ゾーイが言うには、元々持っていた吸収の力が霧の形に変質したらしい。

——じゃあ、吸収の力は何処から来たものなんだ？

ゾーイにすら分からない俺の力の源。バジユラは、その何かに触れてきたのだろうか。

意識が戦いに戻って来るとき、初代神将の力は言っていた。

『内側に干渉されたお前は、この後の戦いにおいて限定的にその力を引き出され、経験した事の無い自分を思い知るだろう』

『なに？』

『気張れよ、創世の理を背負わされた少年。飲まれば、お前の中身が閉じこもってる意味が無くなるぞ』

よく分からない事を言っていたが、俺の能力の理由は…バジユラと同じ物だということは分かった気がする。

俺に巢食う存在。しかしその姿を感じさせる事は全くない。

——ならば、その要素も一人の『コーリス』として自身の力にするまで。

俺が持つ時間など、文字通り腐り果てるまであるのだから。



コーリスは右手を掲げた。また霧が起こる。忘却の霧、放浪の霧、そして認識の霧。

灰の残光を残す瞳はバジユラを捉えながら、同時に蕩けていた。

（ああ…世界が灰に染まっていく。灰色に変わっていく……。そうか——）

霧に触れた空気が光に変質し、コーリスの傷口に集まっていく。

（——世界は、こんなに要らないものが多かったのか）

互いの奥義を直接ぶつけ合った二人は、少なくとも戦闘不能の傷を追うはずだったが、高すぎる威力が爆発を生み、互いが吹き飛ばされる事で逆に深手を免れた。

それでもコーリスには切り傷が多かったが、どういう仕組みか——霧を介して得た光がその傷を完全に治してしまった。

その光景はバジユラであっても目を疑う物であった。

「空気中の元素を……取り込んだ……？」

自然に親しい精霊達をその身に降ろす事が出来るヴァジユラだけが、コーリスの行動に推測を立てる事が出来た。コーリス本人であってもその行動に理屈を立てる事が出来ない異常事態。

アウゲイアス由来の吸収の力を以て、空気中に満ちる元素を取り込み、細胞に変換——再生。”楔”の力を一時的に引き出された彼は、無意識でありながらも全能感に身を包まれていた。灰の意思が混入しているのだ。

「ははは！随分あやつに似た雰囲気になったな。だが以前の貴様の方が目以外は格好良かったぞ！」

「あやつ……？」

「はっ…いかんいかん…。兎も角、我も貴様が触れたおかげで絶好調になってしまった！熱りが覚めるまで手伝ってもらおうぞ！」
（アウゲイアスとの約束を破るところだった…!）

触発されたのはバジユラも同じだった。初代神将の力を十二分に発揮した状態の彼女は、ミタマ降ろしを行った神将に等しい。漲る神気は、本気のヴァジユラと同質の物だった。

（アウゲイアスの力…だがコーリスの使っていた力と性質は同じものだ。警戒するべきは出力の差か、応用力か…。まずいな、超常も超常…自然そのものを相手にしている様なものか）
（今なら何でも出来そうな気がする。風の元素を吸収・開放………廃棄!!）

彼を癒やしていた光の余剰分が右手に収束し――

「――Usabotihsek!!」

――灰色の光線となってバジユラに襲いかかる。

「芸の無い奴よ！」

身体の一部が焦げているバジユラだが、動きに問題は無い。寧ろ力が万全に引き出されているからか身体能力にも磨きがかかっている。以前のコーリスでは有り得ない色の光線を躲し、自らも攻撃に転じる。

「大口真神…そして！」

牽制として回転する斬撃を放ち、そして再び――奥義。

「猟碎犬戌!!」

今度は炸裂させない二つの斬撃として襲いかかった。人体を真つ二つにする切れ味は持っているが、今のコーリスに放つても問題ないと彼女は判断した。何故なら、今の彼は恐ろしく強く、果てしない存在に変化したからだ。

先程彼が撃った灰色の光線も、一瞬でも当たれば戦いが終わっていたかもしれない。

その恐ろしい想定とは真逆にバジユラは微笑んだ。

(我が避けると分かって……いや、信用して撃つたな。全く過大評価が過ぎるぞ……もつと好きになるだろうが!!)

(やばい……流れてバジユラを消し飛ばすところだった。しかし何だあの言語は……まあ、いいか)

目の前に斬撃が迫って来たにも関わらず、防ぐ動作も見せないコーリス。いつの間にか剣を鞘に収め、今度は左手を前に出した。

(……なんだ? 掌を上……)

すると彼の掌に、霧が竜巻の様に渦巻く球体が出現した。

(……!!!)

バジユラは自身に対し、人生に於いて最も危険な状況であると警報を鳴らした。

次の瞬間にはコーリスが球体を上に放ち――

「塵灰じんかいのガーベージ」

――全てが飲み込まれた。

「ヴァジュラ!!絶対に結界を維持しろ!!」

「はい!!」

その球体は、空間に漂う火、水、土、風の元素を、そしてバジュラの斬撃に加え——酸素までも飲み込んだ。

結界外とバジュラの周囲に影響は出ていないが、彼の周囲は世界の要素が消え、色が抜けていた。文字通り、灰色の世界。そして——

「U^鹿r^棄e^棄t^棄u^棄s」

——その言葉と共に、空へと虹の極光が解き放たれた。

コーリスが生み出した球体が、小規模ではあるものの範囲の全てを飲み込み、廃棄の理の力で空に放出された。程なくして灰色の空間に色が戻るも、バジュラは思わず言葉を失った。

「私の奥義を受け止めるだけの為に……馬鹿!やり過ぎだ!」

「……自分でもヤバいと思ってる。なんだこれ」

「一応人を巻き込まない様に調節出来てるのが呆れるが……見ろ!」

バジュラが指を指した先には雲。

……虹色の雲。

「雲に色が付いちちゃっただらうが!!」

「あー絵本みたいですね」

「ヴァジュラ!? 現実逃避はいかん!」

(くそ……このままでは何でもありのコーリスに負けてしまう。我も気を引き締めねば!)

アウゲイアスの理不尽さに辟易としながらも、バジュラの戦意は衰えない。何故なら、彼女は切り札を使っていないから。

そう——彼女自ら生み出した究極の剣術。

「かかってこい」

「行くぞ!!」

逆転した立場の中でバジュラが駆け出す。

しかしそこに一つの光が現れる。

「…ゾーイ!」

「今度はなんだ!?!」

結界の中に侵入した光の中から現れたのは、ゾーイだった。だが、彼女らしくない焦燥とした表情は、コーリスの瞳を見た瞬間に更に膨れ上がった。

「コーリス!」

「どうした」

「君は……………」

突然の乱入に驚きの声上がるも、ゾーイはただ一点…コーリスのみに対し問いかけた。

そしてその顔は、恐怖に満ちていた。

「君は“コーリス”か？」

「ああ。詳しくは分からないが、俺の中にいる存在を刺激された事によって力が表に出たらしい」

「内にいる存在だと…そんな筈は！君は過去に幽世と交戦してしまっただけで…!!」

「悪いが、今はバジユラと戦っている。安心してくれ。その幽世からの干渉は感じていないから」

「……………」

ゾーイは無言でバジユラを見た。バジユラは戦いに水を差されたからか、苛つきを抑えられていない。未だに勝つ気であるのだ。

だがそれよりもゾーイにとって驚いた事があった。

（彼女も力が増している？コーリスとバジユラの間になんかあったんだ……………？）

少し考えて、自身の知識では分からないということをつかっていたゾーイは、この戦いが均衡への脅威となる事を視野に入れ、見張る事を念頭に置いた。

「すまない…邪魔をした。あまりにもさっきの虹が異常だったからね」

「悪かった。少し興奮しすぎた」

「……………じゃあ、また後で」

その異常な力に疑問すら覚えていないコーリスに違和感と疑念を抱きながら、ゾーイは身を隠すという体で空から彼等の戦いを見届ける為に権能を使った。

またもや、二人になる。

「あやつも規格外の様だな」

「やり過ぎたか…すまん。待たせた」

「構わん。さて、やろうか」

先程に比べ、コーリスの意識が戻って来ている。アウゲイアスの権能に意識を飲まれかけていた結果が先程の吸収攻撃だが、ゾーイによる乱入が意識を反らし、彼の心に戻した。

「――」

「ハアアアア!!」

コーリスは愛剣を右手に、そして左手に小剣の様な武器を創り出した。盾を作る際の魔力の応用で、剣の形をした凝縮体となる。

(…やはり魔力だけでは切れ味の再現は難しいか。形だけだが、それはそれで使いやすい)

剣として使うのならば、精巧な金属の仕組みまで再現するのが理想だが、魔力を固めた物にそれは不可能だった。

「シツ――!!」

「――おっとツ！」

しかしその小剣を振りかぶれば、衝撃波が大地を揺らした。

(金槌か!?以前のコーリスならば形だけで鈍器の使い方になっただろうが……これも楔とやらの力か!先程空に放った力の余りを再利用……!)

だが、バジユラは同時に好都合と感じた。

(近接に切り替えてくれるのなら…本望!!)

「はあッ!!」

第二撃として振りかぶる黒剣に、バジユラは敢えて刀を合わせに行った。

そして――

「度肝を抜かすなよう？」

蠱惑的な笑みと共に、刀越しにコーリスを地面に叩きつけた。

…否、彼自らが地面に突っ込んだ。

「がぼッ!？」

想像を絶する苦痛がコーリスを襲う。高所から叩き落されたかのような衝撃。そして、受け身を取れなかった事による直撃。”転んだ”と形容できる程度の低さであるのに、彼が受けたダメージは計り知れないものだった。

加えて目立った外傷では無く内側への衝撃が痛手だったので、楔の力を使った再生も不可能となる。

だが、何とか彼は立ち上がった。

(剣越しで俺を投げたという事は……柔術の様な技術を武器で応用したというのか?!?だが、刀は柔らかくない……人体の様に幅広く相手に絡められる物では無い筈……)

有り得ない技であった。しかし、コーリスは思い出した。初めてバジユラと遭遇したとき――暴漢達は彼女に投げ飛ばされていたのだと。

「……まさか、出来るのか？」

刀で相手の剣を捉え、そこから相手の力の重心を抑えて投げ飛ばす。奇跡的に噛み合えば、理論上は出来るのかもしれない。無論バジユラは狙ってやったのだらうと彼は考察する。

そうなってしまうえば、剣での打ち合いそのものが無意味となってしまう。

彼が攻め手を変えようとした時には遅かった。

「行くぞオ!!」

「——あ」

襲いくる刃に対し、胴を反射的に剣で守ってしまった。また、刀と剣が当たった。

(不味——!!)

「もう一本!」

今度は寸前で剣をズラしたが、逆にその力を利用してしまい身体を打ち付けてしまう。だが先程と違い受け身を取れた。コーリスは距離を取って光線を放つ。

「それはもう見た!」

直線上に飛んでくるのなら斬り伏せるのみと、彼女は光線を正面から真っ二つにしながら彼に直進していく。

「ならばッ!」

刀越しに投げられてしまうなら、バジユラの刀を避けつつ剣を振ればいい。カウンターを狙ったコーリスの剣が彼女に当たる寸前に

至った。

——それは過ちだった。

「阿呆め」

バジユラは刀を一旦捨て、素手でコーリスの両手首を掴み、背中に回した遠心力を以て大地に顔面を叩きつけた。

薄れそのような意識の中、彼は自戒した。

（馬鹿か俺は…?!武器で応用した投げ技を使えるなら、元より身体を用いた技術を使えない筈が無い…!クソ!）

しかし考察は忘れない。

（俺の力が曲げられている……?いや、剣を振る力そのものを利用して投げているのか。そして重心崩しの技——）

「合気か!」

「ご明察!だが訂正すると——」

バジユラが落ちた刀を拾い肩に担ぐ。

「——合気剣だ」

合気道。相手の重心を乱し、相手の力を利用して相手を崩す柔の技。身体能力の不条理を解消する、弱者の為の技として捉えられてきた技術。

「我が唯一、自ら鍛錬し生み出した境地。神将として才能も関係ない、唯一人の人間の身技」

「何故隠していた…」

「恐ろしく疲れるからだ」

「なに？」

「初代の力がある限り、斬撃等は呼吸をする様に生み出せる。だが、これは魔力も何も関係ない…：私の頭と身体で行うもの。極度の集中と律心が必要だ」

「…」

「だが、貴様によって最大限引き出された初代の力のお陰で身体自体の動きは活性化している。だから、コーリス」

バジユラが目を大きく見開いた。

「空の明け方まで、我は戦えるぞ」

今度はコーリスが溜息をついた。

「手加減とか、そういうのは必ず勝てる相手にするべきなんだもんな」
敢えて向けない様になっていた楔の力を再び全開放する。互いが現状発揮できる最大限を叩きつけんと吠える。

「――A r o s、e z a k、i a h…」

「詠唱か――！」

目を閉じ、コーリスが楔の言語で以て無意識の詠唱を唱える。再び球体が生み出され、周囲の気流が一気に収束していく。

「な……!?!」

ただ、一つ違うのは…：球体が3つある事だった。

「――A h a r o s、i r i j a m o t i h s o h」

「させるか！」

一つの球体が鳴動する。発動前にバジユラが向かうも身体そのものが吸い寄せられて上手く動けない。

「——Ez^風ak、eow^強wi^意iko^をyo^得ut」

二つ目の球体が風を生み出す。

「——Ia^灰h、uru^迷sn^よak^りiki^帰roy^還iem^す」

三つ目の球体が霧を生み出す。

そして、全ての球体が呼応し混じり合おうとしている所で——

「猟碎イ——犬戊オ!!!」

彼女は自らの奥義を3度打った。合計6つの斬撃が均等に球体の元へ吸い込まれていく。だが、吸収されてしまえば寧ろ糧となり、廃棄される瞬間にコーリスの攻撃に変えられてしまう。

それを彼女は理解していた。その上で。

「吸収して廃棄！その仕組みさえ分かれば…吸収を打ち切った瞬間に当てて先に爆発させられる!!」

「——チイ」

アウゲイアスが持つ廃棄の能力は、空の世界に害あるもの、又は不要な物を吸収し捨てる事。その過程で吸収だけを選び自己再生に使う事が出来るが、あくまで捨てる事が本懐。

しかし吸う状態から捨て去る状態へ移行する合間には無防備な隙間が存在する。それは、吸収した物を一つにまとめる為に変換している時だ。

バジユラはその瞬間を狙い、先に攻撃を加えて反応させる事で、開放される筈だったエネルギーを破裂させた。

「そう何度も見ていれば野良犬でも仕組みに気付くわ！自身の能力に理解が及んでいない証拠だな！」

「くっ…」

「だがそれもよし！理不尽は我も嫌いだ！弱点があつてこそ人間だろう!?魅力も増すしな！」

「何を言っている!?!」

「止めだアアア!!」

球体を破壊された余波を防御する事で精一杯なコーリスは、正面から飛びかかるバジユラの斬撃を受け流さなければならぬ。だが、冷静さを欠いていたのは彼女も同じ。

楔の権能に目が行き過ぎて、コーリスが持つ盾の力を忘れていた。

「がっ!?!」

バジユラに斬られる盾でも、走っている本人に直接当てれば動きは止まるのだ。

コーリスが展開した壁に身体をぶつけたバジユラは、空中で弾かれて動きを止めた。そして――

「ハア!!!」

彼の渾身の回し蹴りが直撃した。

「がはっ…、!!!」

五臓六腑に染み渡る灼熱の痛み。結界の壁に激突するバジユラを、コーリスは更に追撃する。

「シィィアアアア!!」

声にならない叫びと共に彼の剣が結界に突き刺さる。恐るべき速度でバジユラ目掛けて繰り出された突きは、楔の力をも退けていた結界に穴を開けた。

しかし間一髪、バジユラは避けた。

「決める…!!」

「…!」

合気剣を以て今度こそコーリスを沈めんと刀を振るう。鏢迫り合いを決めた彼女は彼を投げ飛ばそうとした。

「…な、に?」

「はあ…はあ」

しかしその手首が動かなかった。

「手首を止めれば刀は細かく動かせん。流石に投げられないだろう……」

「これは…空気が固まって…!」

「お前の言う通り、俺の力は吸収して開放するものらしい……開放する為に一旦一つに固める事も今気づいた。だが…」

「まさか…!」

「固めると言う事は、吸収した物の形を操るといふことだ……さつき絞りの絞りがすが、利用させてもらったぞ」

吸収から廃棄に移行する段階で、吸収した物を一つに纏めるのならば、それは形を変える為に操っていると同義。先程吸収し、バジユラによって散らされた空気が彼女の手首を固定している。

皮肉にも、バジユラのお陰で気付かされた性質を利用した一手だった。

そして、純粹な鏢迫り合いならばコーリスの力が勝る。彼はこのまま押しきろうと魔力を全開にした。

「ガンマライトォ——!!」

バジユラは横に、コーリスは縦に得物を構えて鏢迫り合いをしている。手首を固定された彼女は肘や腕の角度を変えることでしか刀を動かせない。詰みである。

……笑ったのは、バジユラだった。

「一手、此方が多才だったな」

「な——」

そう。バジユラの刀は横に構えられている。そして双刃刀は二つの刃が上下に付けられており、全体的なシルエットは弓に似ている。

そして——以前森でバジユラと戦った時、ヴァジユラがコーリスに語った言葉。

『初代十二神将…バサラ様が使っていたとされる、武具の形を取る魔力です。ですが、姉さんの魔力は私と同じ神将としての祈りの能力だった筈…魔力のコントロールも精々刀から斬撃を飛ばす程度』

初代の魔力は武具の形を取る。それは、刀だけでは無い。

「弓——」

「楽しかったぞ、死んでもいいくらいに」

バジユラが持つ双刃刀のそれぞれの刃の先端——その裏に、弓の弦のような魔力が接続されていた。そして彼女の左手には矢とも槍とも呼べる巨大な矛。

手首が動かせなくても、ボウガンの様に糸に固定すれば一応の発射は出来る。ましてやこの至近距離。コーリスの被弾は免れない。

バジユラは思いつ切り腕を引絞った。

「けんけんひきゆう犬剣秘射」

「くそ——」

次の瞬間、コーリスは今度こそ爆発に巻き込まれた。

「負けた、のか」

「おう。ま、初見殺しはお互い様だしな」

辛うじて意識を保っているが、立つ事は出来ない。横倒れのままコーリス。その近くに膝をついて座っているバジユラはニンマリと笑う。

「覚醒したかと思いきや普通に負けた気分はどうだ？悔しいのう悔しいのう……ぶふっ！」

「……良く分からないけど、あの時は只管気持ちよかった」

「……………!？」

「変な意味じゃない。あと煽ったの忘れないからな」

彼は未だに壊れない義手に対し逆に畏敬の念を覚えつつ、バジユラの顔を見た。

「お前の中にある力に会った後、戦いに戻ってきて俺が見た物は、全てが灰色に染まった世界だった」

「そりゃあ、目が灰色に光ってたんだから視界が灰色になったんじゃないのか？」

「じゃあお前は世界が金ピカに見えたか？」

「いや」

「それに…余剰な物が沢山見えた」

「余剰？」

それはアウゲイアスの見ていた世界なのか。

「いらぬ物…そんな漠然とした感覚が俺の行動を決めていた」

「難儀だな。ある意味戦いづらかっただろうに」

灰色の世界など、色の抜け落ちた視界の強制に他ならない。溜息をつき、コーリスは目を閉じた。

「……なあ、お前は俺の中の力を見たんだろう？」

「ああ。話もしたし、騒ぎもした」

「教えてくれないか？どんな物、いや…どんな奴か」

「…ふむ、しかし約束でな。お前に伝えるなという内容だ」

「困るな…ゾーイですら知らなそうとは」

「何故ゾーイが知らないと困るんだ？」

「ある意味、平和を望んでいるからな…未知は一番恐れるべきものと言っし」

「ほう……」

バジユラは言葉を選ぶ。確かにアウゲイアスの事を伝えてはならないが、それはそれとして彼にその事とどう向き合うのかは委ねられた。

何より、強い男にすると明言したのはバジユラであった。

「ただ、言える事はある。その力は貴様を害することは無い。そして…力を使うのは貴様自身だ」

「……だな。そう思うことにする」

「頭が空っぽの方が生きやすいだろうしな！はは！」

荒れ果てた戦場に似合わず、二人はヴァジユラが様子見に来るまで笑い合っていた。

「そういえば、何故透けなかったんだ？」

「ああ……幽霊の身体は自分を認識しない様に、空っぽな頭で否定しなきゃいけないんだ。今回はずっとハイになってたからな」

「ほえー」

空は、未だ蒼いまま。

43. 春風駘蕩終わりを告げる

『ヴァジュラはあったかいねえ………』

母は幼い我を抱いていつもこう言っていた。母が我に温もりを感じていた様に、我も母の温もりを心地よく思っていた。

我がヴァジュラであった時、即ち母が生きていた日々はとても長閑のどかで、充実してはいたが時の流れが遅く感じた。

『強くなるぞーヴァジュラは！』

父は我に剣の道を教えた。神将としての剣技は母に教わっていたが、軸となる純粋な剣道は父の方が優れていたらしい。

そんな父はいつも我の才覚を褒め称え、いつか訪れる将来に期待を込めていた。我も答えたいと願い努力し、比例する様に力が身に付いた。

『おねえちゃんががんばれ！』

ルーナであった頃の妹は、我の修行を横から輝く瞳で見物し、応援の言葉を贈り続けてくれた。少し成長すれば水や昼食を運んできてくれるようにもなった。思えば、今は活発さはなりを潜めたが、周りを気遣える性質は昔から持っていたものなのかもしれない。

すぐ呼吸が浅くなる我を心配していた。

『われは十二神将になる！母上を早く楽にさせてあげたいのだ！』

『私はまだ若いから大丈夫よ？でも、ありがとう』

母はいつも寝る前に我の頭を撫でてくれた。母の腹の中で丸くなり、妹と共にその温かさを味合うのが一日の終わりだった。この時訪れる朦朧とする意識が眠気のサインだと我は思っていたから、決して

風邪を引かない様に布団まで歩き……歩――

『ん？バジユラ……髪を見せてみて？』

『母上……私は眠いぞ』

『ごめんね。すぐ終わるから』

『……なんだ？母上』

私の頭に違和感を覚えた母上は眉をひそめた。私の髪の毛が一本白くなっていた事に気付いたのだ。若白髪、というやつだろうと我は思っていたが、10代ならまだしも6歳の我にそれは無いと母は頑なに否定した。

『……年老いた人間の様です』

『われはまだ6歳だ！』

『怒らないの。すみません……どういう事ですか？』

『ヴァジユラちゃんの見方は老眼と同じです。水晶体の調節機能が落ちている……耳は老人でも個人差があるのですが、これは病気による物では無い』

母が参詣客の伝手で呼んだ医者とは、私の身体の違和感を老化だと判断し、白髪は順当に老けによる生理現象だと強調した。

母の手がワナワナと震えていたのを、我は漠然と感じ取っていた。

『お母さんがなんとかするからね……！』

いつも通り元気で、変わらない表情のまま母は何処かに行った。

母は帰ってこなかった。

母は死んだ。

『ほら、寝るぞ。ヴァジユラ』

『嫌だ…お母さんと一緒に寝たい…』

『我が一緒に寝てやるから』

『……お姉ちゃん』

ヴァジュラとなった妹は母の影を求めた。それは決して現実逃避では無く、死を理解したからこそその絶望と渴望。我にしたって、妹がいなければ母の後を追っていた可能性があった。

『眠たくないのか、バジュラ』

『え、あ…うん』

父の言葉でようやく我は自身の身体の変化に気が付いた。夜でも意識が明朗としており、呼吸も滞り無く行えている。

そしてもう一つの事実——母が我の為に死んだ事を薄々と察した。だが。

『髪が…また白く』

駆けた。自らに対する理不尽への怨嗟と、母を奪った運命への憤怒。終わらない慟哭。心の碎ける音が聞こえた。

きっと我が気を取り戻せたのは、我以上に怒る父の姿が記憶に残ったからだろう。

『姉さん』

年が進む。妹は我のことを”姉さん”と呼ぶようになり、丁寧な言葉遣いを選んだ。父は我に対し心配性になったが、それでも生来の優しさを捨てなかった。

我は我で道場の奴等を鍛えるのも面白かったし、妹を立派な神将として導くのも悪くない人生だと思った。時間制限付きではあるものの、また長閑でぼんやりとした日々が始まった。

でも、時々思ってしまう。

——私の人生に意味はあったのか、と。

初代十二神将は侵略を進めた星の民から空を守る為に戦った。その様な時代に生まれていたらこの身体も役に立ったかもしれない。だが今は：少なくとも生きるだけならば平和な世界だ。無理をして戦う必要は全くない。妹が十二神将になれば犬神宮の役割も継続できる。

では我は何の為に生まれ、何故不必要に短命なのか。日に二度はその考えに苛まれた。自身を呪わずにはいられなかった。

ただ、その時だった。

『む？貴様等もこのバジユラと打ち合いたいと言うのか？よろしい。剣を構えるがいい』

『いや、俺は』

胸が：この薄い鼓動が高まるのを感じた。

余り見たことが無い灰色の髪に、大剣と形容すべき得物：：そして何処か疲れた瞳。

コーリスは、私の愛そのものだった。

『迷う人を救いたい』

何の為に生きているかを問えば奴はこう答えた。だが我がコーリスに感じたものは倦怠。少なくとも生き生きとした目標を持って動いている人間では無いと思った。

実際には、我と真逆で終わりのない命を課せられ、その未知数の人生に不安を抱いている事を——奴は語らなかつたが、我は気づいた。つまらなそうに、生きていた。

『姉さんは、思いを引きずらないのですか』

嗚呼、言わないでくれ妹。今更になつて欲しいものが、我儘が私の脳を染めた事なんて。何故コーリスを島に招待したのか、何故断れないと分かつて父に頼み込んだのか。コーリスが島に来たとき、その旅路に横槍を入れた罪悪感を覚えるべきだったのに——乙女のように喜んでしまった事なんて。

我はコーリスを欲した。今での私の時間が加速した。衝動的に、焦燥的に、妄動的に動いた結果——我はコーリスを殺しかけた。

『お前を救いたい』

許すな、馬鹿。我は貴様の優しさを知っている。我を助ける方法が無いとしても、命尽き果てるまで共にいると言つてくれる事も分かつていた。だが：我が幸福の中で死んだとしても、貴様は違うだろう。死んだ者の想いを背負つてしまう人間だろう。

我は貴様と共にいたい。想つてほしい。だが、悲しんでほしくないのだ。ただ、私の事を一人の人間として覚えておいてほしいのだ。

：重い女だ。死んだ人間を記憶し続ける要因こそ悲しみであるというのに、それを望んだ上で悲しんで欲しくないなど。

『最期まで頑張つてね』

そしてコーリスの内側にいる超常、アウゲイアスは我にそう言った。その応援は素直に受け取るとして、何処かおかし。何故我が主体になつて、死ぬまでの道筋を幸福な物にしようと周囲が躍起になつているのか。

違う筈だ。コーリスが強くなる為にここに来た筈だ。

『いいんですよ、姉さん』

すまない妹よ。我は自身の幸福の為に生きるのを辞める。

『よかったなあ…バジユラ』

ごめんなさい父上。我は緩やかに死ぬつもりは無いのです。

——我の生きる意味を、コーリスに預ける。

コーリスがこれから少しでも楽できるように、不条理を解決出来るように……ほんの少しでも、矮小で無意味な私の人生でも。

「コーリスにとって意味がある人生でありたい」

我は母の墓前で呟いた。

我の全霊を持って彼の力となろう。剣でも、精神でも…何らかの支えになる様に。

我が憧れた母は、尽くす女だったのだから。

○○○○○○○○○○○○○○○○

俺が初めてバジユラを見た時、妹を困らせるわんぱくな少女だと思っただが、同時にしっかり者にも見えた。言葉に表すのが難しいのだが、その姿は立派な”姉”だった。

ヴァジユラと違って長さが目立つ髪も、彼女から幼さという要素を抜き去っていると思った。

あの戦いの後、バジユラと俺はより一層武器を交えた。端的に言うのなら、合気剣を教わっている。しかし長い鍛錬を必要とするこの道で、ましてや言語によって容易く教えられるものではない技術をどう伝授するのか。

…結局、投げられて覚えるという事になった。バジユラが投げるタ

イミングを測れるようになれば、それは俺に隙がある瞬間を理解できるといふ事。合気剣の伝授が出来なくても自身への理解が深まると、彼女は力説した。

——そう、投げられて…投げられて。

三日経ち、一週間が経ち、一月が経つ。

まだだ。まだ、大丈夫な筈だ。まだバジユラは生きる筈だ。

朝起こしに行く度、戸に掛ける自分の手が震えている事に気づく。

あと、一ヶ月。俺はバジユラに色々してもらっているが、彼女の心を救うといった手前、何も出来ていない現状を受け入れていいものか。しかしバジユラは『お前といるだけで良い』と言って聞かない。

…何か彼女の中で心変わりがあったのだろうか。確固たる目的を持ち始めた気がする。

「…」

鞘越しに剣を持つ。あの戦い以降心が冴え渡るのを感じる。戦いに環境を使うという感覚が芽生えたと理解した。

だが、剛力の時と違って何度試してもあの力をもう一度引き出す事が出来ない。本当に守りたい者や、勝たなければならぬ戦いに遭遇した時、果たして都合よく覚醒する物なのか——それは有り得ない。だから、焦っている。

「…バジユラ？」

そうして自身の内面へと意識を向けている最中、横に座るバジユラが何処か上の空の様で、空を見ながらぼんやりと脱力している事に気

が付いた。

俺にはそれが、予兆の様に感じた。

「バジュラー！」

「……………わ。呼んだか？」

「どうした」

「……………どうしたんだらうな。ボケていたのか」

大きく声を出したが、ほんの少しの驚きと共に薄い返事が帰ってくる。最近こういう事が少なくない。夜には糸が切れたように眠りに入るし、ますます耳も遠くなってきた。

——時間は迫ってきている。

「……………、あ………はあ………」

「バジュラー!!」

「だ、大事ない……………それよりも、だ」

「…舐めるな。無理をさせて何を得る」

「……………では、少し休むとする、か」

息が切れている。上の空が目立つ様になつてから少しして、今度は継続的な運動が難しくなつてきている。呼吸が上手くいっていない。病気というよりかは、喉が塞がっているのか。見た目の変化は無いが、明らかに弱ってきている。どうすればいい。

「……………バジュラーは？」

「姉さんは……………ただの風邪でした」

「本当か」

「本当に、です。急に熱を出したからビックリしましたがけど、多分3日くらいで治りますかね」

「……………よかった」

「…全く人騒がせな姉ですね。見る度に肩に力入っちゃいますよ」

「そうだな…はは」

「あはは……………」

どうすればいい。

「我ふっかーっ!!早速やるぞコーリス!」

「…今日は止めにしよう。大事を取って、な?」

「……………一度だけならどうだ?」

「…………やるか」

どうすればいい。

「…はは、すまん。まさかちよつと動いたただけでこんなにも辛くなるとは」

「病み上がりだからだ。問題ない。普通だ」

「普通ではないだろうに……そういえば」

「うん?」

「こうしておぶってもらおうと思ひ出す。幼き頃…最後にしてもらったのは父だったか、それとも……母だったか」

どうすればいい。

「コーリス」

「なんだ?」

「命とは、脆いものだな」

どうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば

ばどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば
ばどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば
ばどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば
ばどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば
ばどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば
ばどうすれば

あと何週間だ。あと何日だ。俺がちゃんと強くなってバジユラを
安心させなければならぬのに。でもこいつは人の成長に目ざとい
から俺が余り進歩していない事も知ってるはず。どうすればいいん
だ。

なんで、なんでバジユラがこんな目に合わなければならぬんだ。
おかしい。

…そんな風に意味の無い焦りを持ち続けていたら、遂にヴァジユラ
の心が折れた。

「ゴリス様…わ、わた、たし…もう、こんな姉さ、みたく、な…あ
あ…！」

寝顔だけ安らかなバジユラが、今では恐ろしい物に見える。本当に
寝ているのか、或いは——その可能性が朝にチラ付く度に、俺達の
心が壊死していく。

日に日に目と耳が悪く、体力が落ち、呼吸が下手になっていくバ
ジユラを見た。

「ほんとうに、今寝ていると言えるのですか!？」

「呼吸はしていた………落ち着いてくれ」

ヴァジュラの隈は不眠の証拠だ。時が過ぎ去る事を許せなくて、起床による朝を拒否しているのだろう。

従者達は死に物狂いで食事を用意し、少しでもバジュラが強く在る事を祈っている。

そして彼女達の父は不条理への怒りからか恨み言を吐き続ける。懺悔にも近い声色は彼の優しさ故か、他人に聞こえない声量だったが、それでも俺には聞こえた。

——朝が来る。

「…………ふあ」

「やけに早いな」

「むお…？コーリスかあ…………なんか最近早く起きる様になって…いい事だなあ…………」

「ああ、いい事だ。早朝というのもいいだろ？」

「かもなあ…………」

ぼやける視力では妹の隈を見る事はできない。バジュラだけがこの非日常を安らかに過ごしている。それは多分、とてもいい事なんだろう。

「刀は見た目より重い。我もよく腕を痛めたものだ」

「へえー！姉さんでもそんな時期があったんですねっ！」

「お前の努力には負けるがな…………さてヴァジュラよ」

「はいー！」

「無理、してないか」

「……………」

「身体は大事にするんだぞ？」

「……………はい……………勿論」

ヴァジュラの涙は見えない。その事實は姉と妹のどちらを救った

のだろうか。

「おお：春が来たなー」

「ええ、そうですね」

「コーリスよ。春は好きか」

「嫌いだ」

「そうか？我は春が一番好きだ」

「それはどうしてだ？」

「姉さんは寒さが苦手ですからね」

「まあ、それもあるが。やはり——」

春は、嫌いだ。

「——命の芽吹きと言うだろうか？」

お前を奪う、春が嫌いだ。

44. 愛されて生まれ、愛して死ぬ

「ふんふんふーん♪」

「ご機嫌だな」

「なんだか身体の調子が良くてな…早寝早起きは大事ということか」

バジユラは刀をクルクルと回しながら鼻歌交じりにそう言った。確かに状態はとても良く見える。数日前は運動が出来ず、かといって生活に困る程の弱りでは無かった状態で、致命的な何かを感じることは無かったが、それでも着々と時間は迫っている事を理解させられた。

だが、俺の為に無茶をすることは無くなり、家族と過ごす時間が増えていく。それは絶対に喜ぶべき事であり、俺達にとっても望む事だった。余命宣告通りいけばあと1週間。バジユラの精神面をよく考えながら接していかなければ。

「で、訓練はお預けだったな」

「ああ。だが、お前と戦ったお陰で少し…力についての自覚は持てた。充分だ」

「……………なあ」

「駄目だ」

「むう……………」

言いたい事は分かる。バジユラは俺の力になりたいのだ。それも可視化出来る程の結果を伴って。だが、無茶は返って寿命を縮めかねない。

「それに…今の生活も悪くない筈だ」

「戦うのは好きだ。妹達と平和に過ごすのも好きだ。だが、お前の為

になれないのは嫌だ」

「…どうしてそこまで」

「惚れた弱みだ。お前に我を刻みつけたい」

「言い方」

「”お前の記憶に残す”と捉えろ。単純に我は生まれた理由と意義を持って死にたいのだ」

「本音を言うのだな…」

「さりと重い発言をされてしまったが、それでもバジユラの発言をすべて肯定してやりたいと思う程には俺もこいつの事が好きなのかもしれない。勿論、それは友愛だ。」

だが、友愛が恋に劣るなどと誰が言えるのだろうか。

「お前が生きられるなら何だってするくらいだよ」

「……………本気？」

「……………」

「え、貴様結構我のこと好き？」

「うん」

「……………」

一旦思考を停止させたバジユラがだらしなく頬を緩める。

「でへへへへ……………そうかそうか」

「…」

「でもどーセラブじゃなくてライクの意だろお？それでも嬉しいが……………照れる」

俺も人間だ。好かれる事は嬉しい。バジユラのスキンシップには照れを通り越して爆発したが、その純粋な恋心には尊敬すら抱く。

スルトみたいに年上の美人にデレデレしたり、ルクス団長みたいにキヤーキヤー言われる様な人生とは無縁だったからな。

これが俺を好いてくれた一人の人間の末路だと思つと…心底世界が憎いが。

「うん！気分が良くなった！折角だから言つてしまおう！」
「なんだ？」

バジユラが刀を俺の膝に置いた。自らの得物を相手に渡すという事は…。

「我が死んだら、その刀を貰つて欲しい」

「………ヴァジユラは？」

「姉として妹に託するのが武具では駄目だ。だが、貴様には力が必要だ。だから、我の力を託すという名目で受け取れ」

「…分かった。ありがとう」

「使わなくても良い。貴様は剣士ではあるが刀は専門外だろうしな」

「………凄いな。刃こぼれが全然ない」

「貴様につけられたそれ等が初めてよ」

鞘から刀身を抜けば、騎士剣とは明らかに作りが違うという事が分かった。銀に光る刃は芸術品の様で、バジユラの髪の色と相まって一種の彫像の様な統一感。本当に、刀が似合う人間だと思つた。

「お前は、強いな」

「なんでだ」

「死に向かっているというのに、今進んでいる時間を大切に思つている」

「失う事は確かに怖い。だが、余計に得る物が増える方がもつと恐ろしい。我は、今持っている物を大事に受け入れているだけだ」

「…そうか」

「家族だって、我しか持ち合わせない宝物。今更その尊さに気が付いたよ」

血の繋がった家族、というものは俺には分からない。昔はトラモントの皆が家族で、リユミエールが家の様で、最近まではゾーイとずっと二人でいた。

でも一ヶ月ここで過ごしてみて、バジユラの一家はとても理想的な家庭であると感じた。それは互いが互いを想い合っているというシンプルな物だが、誰もが望む簡単な理想な筈だ。だからこそ、失うのを見ているのが辛い。

「――さて」

バジユラが立ち上がった。

「やるぞ、訓練」

「話を聞――」

異議を唱えようとした瞬間投げられた。本当に体の調子は戻ったらしい。

「――け」まで言わせる」

「おー対策ばっちりだー」

一ヶ月投げられ続けた事によって受け身だけは完璧だ。地に打ち付けられ、痛みを逃すだけの頃から成長した筈。少なくとも敵から離れながら体勢を立て直すだけの動作は出来た。

…本当なら、投げられる瞬間にカウンターを決めるくらいの瞬発力が欲しいが、無理。

ちなみに投げ技は俺でも出来るが、合気は別と考える。敵の重心を崩すのでは無く利用するのは新感覚であり、とてつもない難易度であるからだ。

…そんな事より言わなければ。

「さつき言ったよな。ヴァジュラに怒られたいか」

「怒られたとしても我がしたい事なんだ。分かってくれ」

「…だとしても」

「ちなみに合気は無理だ。それは保証する」

「おい今までの修行なんだったんだ!？」

「まあまあ落ち着け。意味はある」

だってお前…合気を授けるとかそんな事言ってただろ…？

「我やヴァジュラと戦って、明らかにトドメが決まりにくいと思わなかったか？」

「…確かに」

俺が”とどめ”と思って放った攻撃は決まった記憶がないな…大技は当たるんだが…戦いが終わるまでに時間がかかる事が多い。特にヴァジュラには粘られた。戦いの相性ではないのか…？

「貴様も無意識に行っている事。相手の誘導だ」

「ふむ」

「但し、此方が不利な時に限る」

「…なるほど」

不利な時に一定の逃げ方や防御の仕方をする事で相手の大技を誘発して隙を見つける、ということか。確かに、騎士時代の訓練でも相手の選択肢を奪う戦い方はしていたが、自分が不利な時にやった事は無かったな。

「貴様が投げられたとして、後に敵は勝負を決めにかかる。その時にどうする？」

「防ぐ」

「無難だな。他には？」

「ギリギリまで動かず、相手に突貫させる…………お前達がやってた事だ」

「そう、死にかけの敵が最も恐ろしい」

勉強になる。犬神宮の戦い方は本当に実践的だ。十二神将随一の武闘派という事が実感出来るな。

「…時間があれば、他の技術も伝えられるだろうにな」

「いや、貴重な体験をさせて貰った。自分の力の秘密、速度戦…そして今教わった事。大事にする」

バジユラは、未だにやれる事を増やそうとしている。だが、俺にとってはリユミエールでの活動に匹敵する学びを此処で得た。だから、彼女が望む言い方で伝えようと思う。

「バジユラ」

「…なんだ？」

「俺の為に生きてくれてありがとう」

「……………ははっ」

本当はこんな言い方はしたくなかったが。

「最高の師匠だ」

「傲慢ちきな弟子もいたものだな、コーリス」

アイツは何時もオドオドしてて。
フィラは何時もニコニコしてて。
義父母は厳格で。

伯母さんと叔父さんは温かくて。

サレアさんはクールで。

グルシおばちゃんは元気で。

スルトはお調子者で。

ロイスはイライラしてて。

ルブロは努力家で…あの空戦で死んでしまったけど。

エクシンダさんは……なんか卑猥な人だった。

ルクス騎士長は優男で。

サテユロス様は優しくて。

ナタク様は勇猛で。

メドウーサ様は不器用で。

メドウシアナは気さくで。

バアル様は謎が多くて。

ゾーイは天然で。

レイはリアリストで。

ヴァジュラはしっかり者で。

ナガルシヤは優雅で。

バジュラは――

「コーリス」

「なんだ？」

「あとののくらいだと思おう？」

「……………宣告通りなら明後日」

「やっぱりそうなるのかなー」

「だが、今のお前は元気だ。だから医療の観念で予測された寿命など

無関係な物かもしれない」

「逆に言えば、今突然死ぬ可能性もあるということか」

「……やめてくれ」

「悪かった悪かった。しかし嬉しいものだ」

「…なにがだ」

「私の死を、我以上に憎む人間がいる事…そして、その人間と触れ合えることにだ」

「……」

勇敢で。

「…負けたよ、完敗だ」

「純粋な剣の勝負。今のお前にすら勝てなくてどうする」

「ハンデがあると思っっている様だが…身体の調子はお前と出会った時に比べ遜色ない」

「…本当か？」

「ああ、本当に強くなっている。嬉しいぞコーリスっ！」

「うわっ！飛びつくな!？」

快活で。

「コーリス。頼むから寝てくれ」

「…何を言っている」

「今日になってやっと気付いた……毎回我が起きる時に側にいるだろう」

「それはお前と一緒に寝ろと言うからだ。先に俺が起きているだけだろ？」

「嘘をついてくれるな……如何に冷たき身体のお前でも」

「…」

「僅かな温もりが無くなることに我が気付かないと思ったか」

困るほど察しが良くて。

「昼寝だ。それくらいならいいだろう」

「……なあ、バジユラ」

「嫌とは言わせんぞ」

「昼にまで一緒に寝る必要は…正直お前の父にどんな目で見られるか」

「嫌かー？」

「そう言わせてくれないんだろ」

「よく分かっているな」

横暴で。

「なあ、コーリス」

「……なんだ？」

「ありがとうな！」

すぐに欠けてしまう、遠い存在で。

「ヴァジユラ……」

「——どうしました」

「バジユラの意識が……朧気に」

「ツ!!」

一度行ってしまったては、二度と還つてこない。

「家主様、ヴァジユラ。今日で最後かもしれない………悔いの無い様に」

「………そう、か。コーリス君。辛い事をさせてすまない。ずっと一

緒にいてくれたんだろう?」

「はい。ですから貴方達に」

「駄目です。コーリス様。共に見送りましょう」

「家族だけで話す事もある筈です。だから……」

…俺は。

「だ、だから…」

…。

「……その、後に。話したいです」

俺の感情を切り離す事は叶わなかった。バジユラと最後に言葉を交わす事を、どうしても…例え彼女が傷つくとしても望んでしまった。

…嫌だ。

横たわるバジユラは、俺の足音を聞いてこっちを向いた。

「……コーリス、か」

「ああ」

「もう一つ…気付いた事があったのを言い忘れていた」

「…もう一つ?」

「昨日くらいまで…我がかつての活力を取り戻したのは」

「…」

「コーリス、貴様が寝ずに魔力ちからを分けてくれていたからか…」
「バレない様にやっていたんだがな」

「寝なくてもいい体だと、そう言っていたのにな。何故か朝に疲労が見える貴様がいた。……………我も鈍いものだ」

「お互い様だ。俺も、お前の察しが良い事なんて分かったはずなのに……………」

「そう、なのか？」

「するべきじゃないと、お前が俺に何もしてほしくない事くらい分かっていたのに……………無理だ」

「…コーリス？」

「死なないでくれ……………バジユラ」

「…はは、水漏れでもあるまいし、男が泣くものじゃないぞ」

「まだ、温かいのに……………！」

「そういう貴様は冷たいなあ…。なあ、コーリス」

「…なに」

「きさまは、これから長い旅をするのだろう」

「…そうだ」

「長く、永く…生きていけば、挫けることもあるだろう」

「……………ああ」

「いずれ……………精魂尽き果てて死にたくなる事もあるかもしれない」

「でも、きさまは我を救ってくれた」

「…！」

「この呪うしか無かった名を、母を奪った名を……………きさまを想う我として認識する事がやっとできた」

「バジユラ……………」

「名を呼ばれることが嬉しくなったのは、きさまが来てからだ」

「おれはまだ…何もお前に」

「いてくれるだけで、幸せだったよ……………コーリス」

「おれ、は……」

「ひとは、完全ではない。だから、きさまは全てを成し遂げられなくても……」

「…あ」

「確かにひとり、ひとりは救った事をおぼえていればいいのだ。きさまは無名の幽霊ではない……コーリス。バジユラという女を救ったコーリスだ」

「分かった……胸に刻む」

「顔を、ちかくに……目がかすんで見えん」

「……ああ。また、その顔を見れた。泣くな……2つも上だろう……まったく、童顔に似合う泣き顔だ」

「まだ、いくな」

「いずれ会えるさ……そして、ゆめ忘れるな」

「……！」

「きさまを愛し、きさまに救われたから」

「おい、バジユラ……？」

「われは、バジユラとして……在れ、た」

「だいすき、だ……」

「こんな事、本当は滅多にないんだぜ」

「…薄情、という訳でもないんだろ」

「ちげーよ…十二神将は自分の陣地から離れるとあんまし良くねえんだ」

バジユラは逝った。言いたい事を言うだけ言って、眠る様にひと呼吸置いて、そのまま止まった。

実感が無かった。だが、ヴァジユラ達の事を思うと急に手が震えて、冷たくなつたバジユラの手を暫く握っていた。

…後ろで見ていたヴァジユラ達が声を出したのは、そこから5分後の事だった。

「ヴァジユラが今年の担当って事は、一応お前らは自由って事か」

「いや。亥いのししは来年に向けて準備しなけりやだし、アタシに至っては当分先だが…神社から離れるのは駄目だ。それでも…：友達が死んだとなりや葬儀の日だけでも無理矢理腰を上げるのが人情つてもんだろ」

「十二神将が揃い込み…：か。バジユラは大物だな」

「それよりコーはいいのか？バジユの顔見てこなくて」

「…」

「…悪い。いらん質問だった」

「構わない」

ここに来るまでに出会つた十二神将で唯一の友達である午うまのサンチラと共に、俺は近くの岩場で犬神宮を見つめていた。

訪れるであろう知人は十二神将全員と来ており、悲しみの中で確かな驚きがあつた事は否定できない。全員が涙し、ヴァジユラへの励ま

しを忘れなかった事からも、交友関係は深かったのだと分かった。

「バジユはホントに強えんだよ。年長の辰を凌ぐ程でな」

「ああ、俺も負けた。追い詰めた筈だったんだがな」

「あちやあコーでも勝てねえのか……………地味に追い詰めてんじやねえよ」

サンチラは溜息を吐いて空を見上げた。

「お前こそバジユラの顔を見ないのか？十二神将の面々と仲が良かった事は知らなかったが…」

「もう見たさ。相変わらず美人で真っ白だった」

「そうか」

ニコリと切ない笑顔を見せるサンチラを見て、俺も少し気分が明るくなった。

「ヴァジユは強えから大丈夫だ。どっちかといえればアタシはお前が心配だよ」

「俺も一緒だ。お前は影で泣くタイプだからな」

「馬が合うとはよく言ったもんだ。いつそ二人で泣くか？」

「…………いや、いい」

「だな…………今日くらいは、冥福を祈りながら一人で泣きてえ」

そう言っておきながらサンチラは密かに涙を零した。その感情に水を刺さない様に俺はバジユラと過ごした日々^{ごと}に思いを馳せた。

途端に、あいつが恋しくなった。

「此処にいましたか、お二人」

だが来客が一頭。ナガルシャだ。すかさずサンチラが涙を拭った。

「十二神将の皆様が心配しておられましたよ」

「ほら、俺といるからそんな事になる」

「…るせー」

「コーリス殿もです」

「何故」

「……実はバジユラ様は影でコーリス様の事を言いふらしていたので
す。”完璧番”だの、”一心同体”だの」

「笑わせるじゃねえの。なあコー」

「鼻で笑うのやめろ。ナガルシャ、俺は問題ないと伝えてくれ」

「かしこまりました」

その了承と反して、ナガルシャは俺達の間座った。

どうやら3人での慰め合いになりそうだ。

「……私は3人に仕えました」

「ヴァジユラと神将時代のバジユラ……だったよな」

「はい。そして、彼女達の母にも」

「……！」

そうなる……ナガルシャは愛する人間の死を2回も経験したという事になる。その感情は俺に推し量れるものでは無いだろう。

「だからこそ、私は主様と家主様の心を案じ……なるべく遠くから見守るようにはしていたのですが……」

「ナガルシャ……」

「少々、辛く。ここでなら、涙を流してもよいでしょうか」

「……バジユラは、愛されたんだな」

ナガルシャが言葉を発さなくなる。それは俺に対する肯定だった。

続いてサンチラが口を開いた。

「愛され気質のわんぱくだ。最期まで気丈に生きやがって………そして」

「…」

「お前を愛して、死ぬなんてな」

俺は頷いた。

「……バジユラ。ありがとう」

遺品である刀を抱きかかえると、何故か心が寂しく、空になっていくのを感じた。

目の水分は、まだ残っていたようだ。

——4章、完。

——小話：知らないおじちゃん②

今日もわたしは胡座をかくおじちゃんの膝の間に収まって、甘えながら過ごしている。だが、言いたい事ははつきり言うべきだと思ったのだ。

「わたしは悲しい」

「どうした。何かあったのか？」

「船に乗せてくれないおじちゃんの冷たさにだ」

「……なあヴァジラ」

「…ふーんだ」

「騎空士というのは、十二神将の仕事と同じくらい危険なんだ」

「わしは強いぞ」

「分かるよ。ヴァジラは強い。だけど」

「乗せるまで聞かんど！」

「色々な場所に行つて、色々な依頼を受け取つて…色々な事をして人を助ける。行き当たりばつたりな旅はそれなりの覚悟が必要なんだぞ」

分かっている。おじちゃんはわしを心配しているのだ。それは、わしが半人前だからだ。臆する心を見透かしているのだ。

でもわしは覚悟している！人を助けるために十二神将になったのだ！

「それにヴァジラは子供だ。これからすくすく成長していくのに危険な場所に連れて行つたら皆心配するだろ？」

「うぐ…でも」

確かにそうだ。村の皆はわしを案じている。

……だが、おじちゃんはずるいぞ。だって、おじちゃんの仲間の二人……その内の一人は——

「おじちゃんの仲間には金髪の少女がいるじゃないか——!!」
「!!!」

「見た目が被ると駄目なのかー!」

「ヴァ、ヴァジラ…!何処でそれを……!?!」

「何処でも何も!たまに船から降りて来ては興味深そうに神宮を回つ

「ているぞー！」

「あ、アイツ…!!余計な事はするなと…!!」

何やら動揺しているおじちゃんだが、子供を連れているのを隠しているのか…!?

それは許せん!ずるいぞ!

「わしと同じくらいだぞあの子!依怙えこひ鬚いぎか!」

「待ってくれヴァジラ…アイツはその、事情があつて」

「なにー!」

「子供なんだけど…えーと、取り敢えず俺よりよっぽど年上だから」

「馬鹿にするなー!!」

「うわっ!?!」

煙に巻く様な発言に苛ついたわしは、おじちゃんの肩に噛み付いた。

「似てきたな…随分」

…まだまだわしはおじちゃんの事を分からない。

5章 祈望の騎空団

45. The beginning of the journey

「お世話になりました」

「ひっぐ……うえ”っ」

「…そろそろ泣き止まないとコーリス君が困るだろう」

「ぐす…もうちよつといても罰は当たらないと思うんですけど」

「俺にもやるべき事があるんです。取り敢えず、お納め下さい」

「……む。失礼だが、量を拝見しても？」

「どうぞ」

バジユラの葬儀が終わって、俺は犬神宮から出発する用意が出来た。その旨を告げたら急にヴァジユラが泣き出して今に至る。家主様には今までの生活費や食費を渡した。多分足りるはずだ。

「……20万ルピ。これは大金だぞ」

「お礼の気持ちです。本当に助かりました」

「しかし…此方こそ君がいなければ娘は……ずっと後悔していただろう。だから」

家主様は半分を取って俺に返してきた。

「本当は受け取るのも忍びないが…君は納得しないだろう。だから半分貰うよ」

「……分かりました。ありがとうございます」

「君の旅路が成功する事を祈る。さて、やり残した事はないかい？」

俺は『ない』と答えようとしたが、ヴァジュラが非常になにか言いたそうにしているので、少し話す時間を設ける事にした。

「どうした？」

「……改めてお礼を」

「……？」

「最後の方まで姉さんが元気だったのは、コーリス様がお側で力を与えて下さったから、という事ですよね？」

「………なんの事かな」

「…ふふ、嘘が下手ですね」

「…」

「私は姉さんから意思を受け継ぎました。迷いを放る事無く直面し、自身を信じ続ける事。それが神将の本懐だと、そう教わったのです」

「そうか…いい姉のまま逝ったな」

「はい……それで、お願いがあります」

ヴァジュラは頭を下げ、髪飾りを外して俺の手に握らせた。

「姉さんの刀と同じ様に、私の想いも貴方と共に行かせてください。貴方の旅に御加護がありますように」

「分かった。人助けは任せろ」

「未来の事は分かりませんが……煩惱が発生し続ける現在は神将が陣地を離れる事はほぼありません。だから、少しでも多くの不幸を減らせる様に…貴方に頼みます」

ヴァジュラの願いと意志は伝わった。俺も全霊を以て答え、神将の負担を減らす様心掛けよう。それが、俺に出来る犬神宮への恩返し

だ。

「辛くなったら、何時でも来てください。犬神宮は貴方を家族として歓迎します」

「辛くなったら…か。バジユラにも同じ事を言われたよ」

「…本当に、背負い込み過ぎないでくださいね」

…泣きそうだ。最近涙脆くなった気がする。

「騎空団を結成したら遠慮なく言ってくれ。助けになる」

「じゃあその騎空団は犬神宮に顔パス適用ですねっ！」

はは、それはいいな。縁は大切なものだ。

「じゃあ、そろそろ行く。今までありがとう」

「はい！お元気で！」

この後にナガルシャも合流し、犬神宮の面々に見送られながら俺は島を出た。

かけがえの無い時間だった。俺は一生この温かさと傷を忘れないだろう。

○○○○○○○○○○○○○○○○

——リユミエール城下町。

ゾーイは焦っていた。それはもう、表情に出るくらいに。

顔を歪ませ歯を食いしばり、左手で頭を抱えながら小器用にアルバイトをこなす。

「く……」

突然コーリスと共にリュミエールを発った彼女が再び帰ってきた時、人々は疑問と歓迎の感情を同時に見せたが、何故かアルバイトを始めた事で疑問の方が深まった。

早くも金欠なのか、という心配の聲が上がっていたが、ゾーイは街の人々に”騎空団結成までの時間稼ぎ”と一応の理由を説明した。

料理は出来ない為、接客を任される事になったゾーイは大変優秀で体力もあり、それなりの信用を得たのだが、最近は何処か焦燥としているというのが周囲からの評価だ。

店長が悩みを聞こうとしても決して言わない。

……ゾーイの悩みとは、コーリスの内に存在する何者かの事である。

(内なる存在……幽世の記憶を奪った反動で記憶が消えたのだから、コーリスがそれを知る由は無い……。だとすれば生まれた時から”それ”が存在していた事になる。私が彼を観測したのは3歳の時だ。辻褄は合うか……吸収の魔力が霧と混じった結果があのかの力の筈だが
——いや、待て)

そこで彼女は奇しくもコーリスの根源的な悩みと同じ思考に至った。単純に考えればおかしな事であった。

——そも、”吸収の力”など何故持っていたのか。

(空の民は属性や魔法を研究して、そこから特殊な術を作り出す事はある……吸収の魔法を作る事だって可能だ……。だが)

それは、コーリスが自然すぎたという事。

(コーリスは漠然と吸収の力を使っている。属性も無い、魔力の形を変えて現象を作り出す事もしていない……本当に、吸収という力だけが独り歩きして固有の物になっている)

それは星晶獣の権能と似たような物だ。概念的な物であれ何であれ、与えられた”役割”を行使する。彼等にとっては手足を動かす様な物であり、存在価値でもある。ゾーイの危機察知や、世界を俯瞰する能力も同じ仕組みだ。

その生物が能力を持ったのでは無く、能力を持つよう作られた生物が星晶獣なのだから。

(コスモスですら知り得ない存在……だと?)

ゾーイは使徒である。元となる存在から使命を渡された兵士。つまり、空の調停はコスモスの理念によって行われているもの。

空についての情報はコスモスから貰い続けているため、コーリスの正体に心当たりがないのなら——それは幽世に匹敵する謎になる。

「……ゾーイちゃん。最近働きすぎだし、今日は早めに上がるかい？」
「……」

余りにも落ち着かない状態だったのか、店員等にも話しかけられる。一応今日で辞めることは話していた為、最終日としてきっちり働く気でいたが……。

ゾーイは素直に甘える事を覚えた。

「……すまない。そうさせてもらおう」

何方にせよ変わらない。

ゾーイの役目はコーリスを利用して幽世の先兵を殲滅させる事と、彼を空の脅威にさせない事に帰結する。

(……何方にせよ、激務になるな)

生まれて始めて、ゾーイは溜息を零した。

「……そろそろ来るか」

今日はコーリスが犬神宮を離れる日だ。偶にはリユミエールに戻るのも良いことだと思い、ゾーイから此処に来る様促したのだが、肝心の待ち合わせをしていなかった。

まあ何だかんだ会えるだろうという軽い気持ちなのだが、当のコーリスはそんなつもりじゃなかった様だ。

「——何故、ローブを？」

「見つかる何やかんやで皆と話し込んで戻りたくなっちゃうから」
「かわいい悩みだな」

コーリスらしき人物は全身を隠すローブを着込んでいた。コーリス検定3級のゾーイですら一瞬疑問を抱く様相。
怪しい魔術師としか思えない。

「じゃあ、行くかい？」

「そうしよう」

コーリスの意向に従いそそくさと歩く二人。

「……あ!?コーリスさん!!」

……。

「秒でバレたが」

「クソが」

秒でバレた。剣を隠さずに歩いていたので。特に元同僚の騎士になら看破されるのも当然だ。コーリスは細かい所についての知恵が足りないのかもしれない。

「お久しぶりです！」

「…ロイスか。明るくなったな」

「平和は良い、ということですよ」

コーリスの姿を看破したのは懐かしき相棒、ロイスであった。たった2ヶ月会わなかったただだからか、何一つ姿は変わっていない。強いて言えば、彼と同じく剣が新調されていた事か。

彼はローブを脱いでロイスに向き合う。

「コーリス、少し話していくといい。折角再開したんだ」

「そうする」

「ゾーイさんはなんかバイトしてましたね。どうしたんですか？」

「暇つぶしだよ」

「騎士やめて国を出た後にバイトしに戻ってくるとか心臓強いですね」

「褒め言葉として受け取っておこう……?」

「天・然!!」

無言で去っていくゾーイを眺めながら二人は腹を抑えた。

「…取り敢えず、飯食うか」

「そうですね…昼休憩なんでお付き合います」

変わらない関係だった。

リユミエールランチ。コーリスが士官学校生徒の時から親しまれていたレストランであり、ゾーイのバイト先でもある。

「……あ、コーリス君。帰ってきたんだね」

「久しぶりです店長」

「今思えば一生の別れでもないのにド派手な演出だったね」

店長との関係も長いものである。ガヤガヤと混む店内の客は学校の生徒達や騎士達で溢れている。あまりにもコーリスが自然に入ってきたからか、周囲は彼の帰還に気付いていない。

「何食べますー?」

「ハンバーガー。今日は油っこいものが食べたい」

「じゃあ私はオムライスで」

「ドリンクは?」

「それは当然」

「ジンジャーエール」

「よろしい」

「やっぱこれですよね」

にしし、と笑い合う二人は子供に戻った様な気分を味わった。

注文を済ませ、雑談に戻る。

「何してましたか? 神将の所に行っただって聞きましたけど」

「滅茶苦茶強い奴に修行してもらってた。結構適当だったけど」

(…随分と悲しそうな顔をしますね。まあ聞かないでおきますか)

…コーリスは限りなく無に近い表情である。

「私はですね…実は」

「なんだ」

「星晶獣と戦ったんです」

「……凄いな」

「強かったですけど、能力頼りの巨人です。スルトさん主力に十人くらいでちまちま倒しました」

コーリスは素直に感心した。本体が雑魚だったとはいえ、旧式の星晶獣であるシヨゴスですら能力だけで騎士団が半壊する程の損害を出したのだ。そんな理不尽と再び相対する勇氣は称賛されるべきものだろう。

「能力は？」

「恐怖を増幅させる。かなり強い能力ですね。でも穴がありました」
「弱点か」

「はい。巨人ですから、自分を大きく見せる事への恐怖を増幅させる物だったんです。つまり、人間が巨大な生物に挑む恐怖の事ですね」
「……確かに型落ちだな」

「はい。今時巨大な魔物なんてうじゃうじゃいますから、油断せずに集団で相手取ればそこらへんの魔物と変わりませんよ。最近暴走してここまで来た野良星晶獣らしくて、団長が言うには結構いるみたいですよそういうの」

「偏った能力に暴走……」

「星晶獣は独特な能力ばかりですからね」

「で、殺したのか？」

「……いや、コアまで開けたんですけど壊せませんでした」

「壊せない……？」

「硬いとかそういうレベルじゃなくて、傷一つ付かないというか…状

態が保存されているんですよ、多分」

「溶けない氷…みたいな？」

「そんな感じで、物理的干渉も意味ないです」

…コーリスは首を傾げる。ロイスの技でシヨゴスのコアを破壊したのを見た筈だが、彼女の話を聞く感じでは星晶獣はコアさえも不死身なのか。

「これは…シヨゴスが異端なんじゃないか？」

「団長曰くそうらしいです。サテユロス様達なら知っていると思いますよ。壊せて言ったのあの人ですし」

運ばれてきたハンバーガーにかぶりつきながらコーリスはこれらの事を考える。ポート・ブリーズに行つて騎空士として活動するにしても、船も信用も無い。

「元同僚のよしみで教えてあげます」

「なんだ？」

「最近調査しに行つたのですが、ポート・ブリーズ群島は自然が豊かな分魔物が多い為、魔物を討伐する様な依頼が多いですが…逆に言えば腕に自信のある人達がこぞつて依頼を取り合っています」

「……つまり？」

「商人も偏つた商売は困っています。ですから、誰もやりたくない素材集め等をこつこつ熟せば信用も得られるかもしれませんよ」

「確かに…win-winの関係は大事だ」

「だからと言つて見境なく依頼を受けるのも得策ではありません。明らかに仕事を奪う動きでは嫌われますから、適度に酒場やギルドに向かうのもいいでしょう」

「情報助かる。情報料は奢りという形でいいか？」

「その言葉が聞きたかった」

ふふん、とロイスは笑って口を拭いた。食べ終わったコーリスは席を立ち、勘定に向かおうとする。

「行くんですか？」

「ああ。気が向いたらまた来る」

「……あ、言い忘れてましたけど」

ロイスが胸に翳かざしたエンブレムを強調して見せる。

「私、副団長になりました」

「——えっ」

思わずコーリスは席に座り直した。

「いやいや行くんじゃないんですか」

「え、すまん…びつくりした」

「指揮能力の高さが認められたのと、さっき言った星晶獣のトドメは私でしたから」

「スルトは…？」

「今はただの最終兵器ですが、私が団長になる事はないと思うので彼が団長候補でしょうね」

「スピード出世だな」

「今度からは敬語ですよ？元同僚さん」

「うぎ」

怒りを買う前に今度こそコーリスは店を去った。

何だかんだコーリスはリュミエールの人々に話しかけられながらも騎空艇の発着場にたどり着いた。

既にゾーイが荷物をまとめて待っていた。

「早かったな」

「ためになる話を聞いた。ポート・ブリーズでやる事が決まったぞ」

「早速魔物退治の依頼を受けるのか？」

「いや——」

コーリスは自信満々な表情で告げた。

「——素材集めおつかいだ」

「……………えー」

人生何事もコツコツ、である。

46. ポート・ブリーズにて、歓喜

「あれがポート・ブリーズだ」

「これがコスモスも訪れた……確かに良い風が吹いている」

一時的に滞在したりユミエールを離れた二人は、目の前に広がる緑色の島に向けて目を輝かせた。

辺り一帯が草原に包まれており、中心部に位置する街には管制の役割を持つ古城がそびえ立っている。

明らかに商業に特化した外観で、その最もたる特徴は騎空艇の船着場があらゆる場所に配置されている事だろうか。

「さて、行くぞ」

コーリスはベルトを背中に巻き付けて鞆を入れる。いつもと違う剣の納め方にゾーイが疑問を持った。確かに大きめの剣なので背負った方が良いのかもしれないが、今になって変える必要を問おうと思っただのだ。

「これからは背負うのか？」

「ああ。腰にはこれを」

コーリスは巻き付けるように着ている衣をずらして隠れていた腰を見せた。

「それは確か……あの子の刀か？」

「大事な遺品だ。使う事もあるかもしれない」

「…後悔はしてないみたいだな。良かった」

「行ってよかったと思えたよ」

二人は早々に街に向かって歩みを進めた。

「騎空団に登録は必要ないが、認知されなければ困る。名が広まれば依頼が直接飛んでくる事があるからな」

「ではロイスの言った通りコツコツ小さな依頼をこなして信用を得る事が先決か」

「そうだ。出来れば仲間が欲しいが…」

「表向きは騎空団として、裏では幽世を狩る。裏を隠せば仲間と活動する事は可能だが…すり合わせが面倒だ。寿命に縛りが無い星晶獣の様な存在が理想と言えるね」

「…まあ、ありえないだろう」

ファータ・グランデの島々には依頼が貼られている掲示板が存在し、騎空団はその依頼を達成し報酬を得る事で生計を立てている。大きな団になれば専属の依頼や、国からの要請も飛んでくる事がある。場合によっては傭兵の様に、戦争に参加する事もあるのだが、それは団の指針による。

「確認をする。まず、戦争には参加しない。命の危機もそうだが、まず国のゴタゴタに巻き込まれるからな。傭兵と違って味方する国と密接に関わる可能性が捨てきれない」

「了解した」

「次に、一日に達成する依頼は最高で10…いや、8くらいか。兎も角受けすぎると他の団の反感を買う。報酬が少なく人気のない依頼を狙っている」

「場合によっては二手に別れるかい？」

「素材集めならそれもアリだな。それで、最後に。商人の依頼には積

極的に参加しよう。商人からは物資も購入できるし、同じ関係を持つ人間と情報交換をしやすい。酒場にも向かおう」

「酒はあまり好みではないが…分かった」

ゾーイは頷いた。

「じゃあ掲示板に向かおう。島の地図は買っておいた」

「用意が早いな」

「騎士時代に少し色んな島々を回ったのと…コネもある」

「なる程……あ、そういえば」

ゾーイは手をポンと叩きコーリスを呼び止める。

「船は買うのかい？」

コーリスは腕を組んで悩んだ。あつた方が良いが、操縦士を雇うか仲間に引入れなければならぬ。その島の以来だけで活動するならまだしも、彼等の目的上、自分達で色々行き来できた方が効率がいい。金銭面も少し大変だ。小さめの物なら何とかなるかもしれない。

「少し余裕が出来たらガロンゾに行ってみるか。偶に船に詳しい人が訪れているからな」

「どんな人間だ？」

「白い髪の中性的な青年だ。名前は“ノア”。会った時は船ばかり見てたから…多分相談にも乗ってくれる筈だ」

「のあ………待ってくれ、ノアだと？」

「どうした？」

首を傾げるゾーイにコーリスが嫌な予感を覚える。

「見た目の変化はあまり無いか？」

「あんまり会ってないけど…多分そうだ」

「…コスモスの記憶から見るに——」

「まさか」

「——彼は星晶獣だ。それも”艇造り”の」

コーリスはもう笑うしかなかった。

「どこにでもいるな」

「そんな物さ。お、”風切り四つ葉”という物の依頼があるぞ。依頼日から2ヶ月が経過しているようだが…」

「どれどれ…最低15個。数がぼんやりしている上に報酬も変動制か。ふざけた依頼だ。そりゃ誰もやらん」

「でもやるんだろ？」

「ああ」

コーリスとゾーイは地図を確認した後、受付に向かった。

「この依頼を受けたいのですが…」

「はい。では名前をこの用紙にご記入下さい」

「あ、名前…」

団の名前は依頼主が報酬を与える為に必要不可欠なものである。

決め忘れていたが、そこはゾーイが秒でカバーする。

「案ずるなコーリス。私が既に決めている」

「え…もう？」

「ああ。リユミエールの頃から毎晩悩んでな！」

「お前なんでもいつもそんな面白い天然発動するんだ？」

コーリスがゾーイの面白さにそろそろ気づきかけてきたところで、彼女は喜々として名前を書き込む。

そこには「祈望の騎空団」と書かれていた。

「祈望きぼうの騎空団様ですね。手続きは以上です。期限内に必要な素材の納品をお願いしますね」

「分かった」

ゾーイはズカズカと書類を受け取って街の外に向かって歩き出す。慌ててコーリスが追いかけて横に並んだ。

そして指で字を書きながら疑問を口に出す。

「希望きぼうじゃないのか？」

「私達は希望では無い。だが、祈り願う人々に応える様な存在でいたい。そういう意志を込めた大事な名前だ」

「……それを希望というのでは？いや、祈望って言葉だけだよ」

「——細かい事は気にするな」

「……なんか、悪かった」

割とノリで行動するのがゾーイであった。

「アンガド高原の西部に生えてるらしい。ちまちま探そう」

そうして二人は意気揚々と大自然に向かって走り出したのだが――

「コーリス！あった！ここに！！2個目エ!!!」

「ほんとか!?!でかした!!」

――依頼開始から、13時間経過。

未だ2個目である。

「こ、これで…あと13」

「…気張るぞコーリス。夜明けが近い…!」

今回の依頼物の”風切り四つ葉”とは、風切羽を思わせる葉が4枚生えた物であり、分類としては四つ葉のクローバーに大変似ている。コーリス達は知らなかったが、植物としてはレア物の部類であった。更に、緑が満ち満ちる草原においてピンポイントでこれを見つけたのは難しく、深夜どころか早朝近くになった今では、ゾーイが光で地面を照らしながら集め続ける苦行に変わっていた。

「ど、道理で誰も受けない訳だ…いやもうこれ1個確保して繁殖させた方が早いだろう」

「無限の草原の中から数少ない三つ葉の群生を見つけ、更にその中の四つ葉を探す様なものだな」

「だが根性で耐えきるしかない…これは俺達の大事なスタートになるぞ…!」

ゾーイは力強く頷いた。その瞳には覚悟が宿っている。

「これが騎空士…!!」

多分違う。

「おいおい…聞いたか？」

「ああ。あの依頼を受けた奴がいるってな」

「しかもたった二人だ。てことは新米か…？」

「受付もひでえよ…教えてやればよかったのに。風切り四葉はほぼ死滅したって」

「依頼者のじいさんがいたたまれなかったんだろう」

今日のポート・ブリーズはざわめいていた。

そもそもが希少な上、既に絶滅の危機にある風切り四葉を納品するという依頼。それを受けた新入りの二人が存在したのだ。

そして、この依頼の主はポート・ブリーズ生まれの植物学者であり、この島の名産であった風切り四葉を復活させる事が動機だったのだ。

だが、二人が依頼を受けた日から4日が経過している。期日に余裕がある依頼において日を跨ぐ事は珍しくないが、街に帰ってきていない事は異様だ。

「魔物に食われちゃいねえよな…」

「油断しなかつたら滅多にないが…二人だからありえるな」

先達の騎空士達が懸念の声を上げた瞬間——2つの人影が街の注目を浴びた。

「なんだ？祭りでもあるのか」

「悪いがすぐにでも納品するぞ。寝ないと頭が死ぬ」

「私はまだいけるが」

剣を背負った少年は手に大量の植物を持ち——それが風切り四葉である事に周囲が気付いたときには既に受付に向かっていた。同じく横にいる剣盾の少女は欠伸を零しながらも疲れ切っている様には見えず、寧ろ寝起きの様に見えた。

「替えの服を持っていくべきだったな」

「洗っていたから大丈夫だろう」

「ゾーイの体質が羨ましくなる」

コーリスは幽霊として不変の理に囚われているせいか体臭は発生せず、睡眠も不要ではあるが、服は洗わなければ汚れる。しかしゾーイは全ての要素が作られたものである為、何一つ変わる事のない身体を保持できるのだ。

その異様な様相に困惑の声が上がるが、二人は受け付けに植物が大量に入った籠を差し出した。

「数えた所多分30個くらいです」

「さ…!? 依頼では15個以上でしたが…よろしいのですか?」

「なんか終盤になると楽しくなってきたきちゃって…島全体回ってたんですけど、取り過ぎも良くないと思ったのでそのくらいで」

受付嬢が見た少年の瞳は濁っていた。声も言葉も朗らかな物であるのに、その瞳だけは深淵に浸っていた。というか、多分壊れる寸前だった。元気なのは少女だけだった。

「ほ、報酬の方は後日受けとに来ていただければ」

「了解です。お待たせして申し訳ありませんでした」

コーリスはニツコリと笑って宿屋に直行した。しかし彼を止めるのは周りの人間だ。

「ちょっと待ってくれ坊主!」

「……………なんです」

「俺達と一緒に魔物を倒さねえか!」

先程まで困惑していた騎空士達がごぞつてコーリス達に声をかけ始めた。ロイスからの情報を聞いていた彼からしてみれば不可解な状況だが、受けない理由もない。

しかし疲労困憊。ゾーイすら微妙な怠さを感じている程の苦行の後に正当な判断を下せるのか、甚だ疑問である。

「ポート・ブリーズは人手不足なんだ！」

「なんですって？」

今度はコーリスも目が覚めた。

「坊主達は他の島から来たんだろ？ここで金を稼ぐなら悪い話じゃない筈だ」

「事情を聞かせてください」

「分かった……皆集まってくれ！」

騎空士が仲間を10人ほど集めて語り出した。

「見ての通り、今この島にいる騎空士はこれしかない」

「……知人からは、魔物退治の依頼が多く、騎空士同士で取り合う程だと聞きました」

「ああ、この島は資源も豊かで人間が生活するに困る事はない。だが、それは魔物も同じでな……デカくなるまで育っちゃおう」

「大量発生ということですか？」

「そうだ……情けなくて新人に頼みたくはねえんだが、見た所体力もありそうだ。上物も身に着けている。縁ついでに協力してみないか……？」

急な話ではあるが、逆に円滑に島に溶け込むチャンスでもあった。コーリスは素直に頷いた。

「（こちらこそよろしくお願いします………あと明日からでもいいですか？）」

「あ、ああ。ちゃんと寝ろよ。あとあの依頼受けてくれてありがとよ」

「…厄介物でしたね」

「確かに厄介ではあったんだが…」

先達の騎空士は憂いの表情を見せた。

「依頼者が郷土愛溢れる爺さんでな。昔ポート・ブリーズでよく取れたたその四葉を復活させたいと躍起だったんだ。だが、魔物には食われるわ踏まれるわ…群生地は巢になるわで散々だった。お前等どうやって集めたんだ？」

「ただの根性ですが…魔物も数匹倒しましたね。な、ゾーイ」

「大きめの魔物が多かったな」

「腕も問題なしか。ありがとよ…あの四葉もここでしか取れないだけで多く生えていた筈なんだが」

島の人間にしか分からない愛もある。コーリスにとってトラモントのラクリモサが懐かしい様に、目の前で絶えていく様子を依頼者は見過ごす事は出来なかったのだろう。

少し心の疲れが取れたコーリスは、安い宿ではあるが充実した睡眠を取る事が出来た。あと、珍しくゾーイも寝た。

——翌日。

「…想像以上だ、お前達」

「これで全てですか」

コーリスの足元には魔物の巨大な亡骸が数十匹分倒れており、ゾーイに至っては戦った形跡すらない。凶暴な魔物をコーリスが担当し、

ゾーイが暴走した精霊等を消し飛ばし無力化する。そういう戦い方だった。

「これからもポート・ブリーズにいてくれると有り難いが…」

彼等の懇願にコーリスはノータイムで頷いた。

「商人も俺が紹介するよ。人手が欲しくてたまらないんだ」

「ありがとうございます」

「…お前等なら参加しても大丈夫そうだな」

「何にですか？」

それは、この空の一大イベント――

「――暴走した星晶獣を倒す…」 古戦場 っ て や つ だ
「げ」

その提案に嫌そうな声を出したのは、何故かゾーイであった。

47. はじめてのこせんじょう

「説明しましょう。古戦場とは、霸空戦争時に激戦区となつた島の事です。その島にはかつて戦つた多くの星晶獣達が眠っており、目覚めた彼等を倒す事で島を守るといふ行事になります」

ポート・ブリーズで依頼をこなし続け、商人との関わりを得たコーリス達は古戦場というイベントについて詳細を聞いていた。

目の前の理知的な若いハーヴィンは眼鏡の位置を整えながら彼等に情報を伝える。

「騎空士達はそこで貢献に応じた豪華な報酬と名声を得、幅広く空に飛び去っていくのです」

「…いろいろ聞きたい事があるんですが、何でそんな危険な島に人々が住んでいるんですか」

「1つ目の理由は、空の民の勝利の証として島を維持していた事です。そして2つ目の理由は、星晶獣の覚醒が周期的な物であるということです」

「分かるんですか?」

「はい。属性毎に復活する時期が分かれています、対策も容易です。気軽に参加できるイベントではありませんが、腕に自信があるのなら問題無いでしょう。何より苛烈な戦いなので、報酬目当てに足の引つ張り合いも起こりません」

「…なるほど。ありがとうございます」

「いえいえ…それで、ゾーイさんはどうしたんですか。横で固まったままですけど」

「それが…古戦場の話題になるといつもこうで」

ゾーイは知っていた。古戦場は、かつてコスモスが星晶獣と人間と

の力のバランスを整える為に相互に力を与えた事がきつかけの行事だという事に。

かつては武具の素材目当てに狩られる星晶獣の嘆きを聞いたコスモスが力を与え、その獣を狩る人間も強い武具を得る、という均衡が保たれていたのだが：やがて人間達に偏ったのか、一気に星晶獣を倒しすぎて彼等に休眠期が訪れるという事態に陥ってしまった。それが現在の祭りのような体裁の原因である。

「それで主な報酬はどんなものですか？」

「古戦場では希少な鉱石取れる事があるので、活躍した者は多く受け取る権利を得ます。ですが、やはりルピを大量に交換するのが常道です
すね」

「確かに：」

「依頼に左右される騎空士達にとって、安定したルピの供給は望むところ。船を買い換える人もいれば、戦いの縁で仲間を増やす人も多
いです」

実力派の騎空士達が古戦場等の大規模な戦いに身を投じることは多い。相手は強大であり、生物としての格が違うとしても、連携や知恵で戦うのは空の民の特権だ。通用するかは覇空戦争歴史が証明している。

「近くの開催日は今月末にあります。決して油断しなければ生還することは簡単です。体験気分で行ってみては？」

「考えてみます。ゾーイ、行こう」

「ああ、うん……」

二人は仮の住まいである宿にて、人生の作戦会議を行うことにした。

「古戦場、行ってみるか？」

「……………うーん」

「…あ、すまん。ゾーイは一応星晶獣だったか」

「侵略の為に作られた訳じゃないが…立場的にはそうなるのかな」

「理性を失っても同族だしな…悪かった」

「それは気にしなくていい。人間と星晶獣、どちらの側にも私は立っていないからね。世界そのものが対象だよ」

「なら、どうして気まずい顔をしてる？」

「…本能的に嫌なんだ。均衡の崩れたものは」

アホ毛が垂れ下がったゾーイはうんざりとした顔で語る。

「役割を全うする為に戦う星晶獣、そして空を守る為に戦う人間達。お互い拮抗していた戦いが遂に人間に傾き——古戦場の様に効率的なイベントが生み出された、が」

「星晶獣の側が救われないと？」

「救われなくてもいい。ただ、人は次代に意思を受け継がせていくのに対し星の命は不変だ。昔から狩られ続けた星晶獣の無念は、この空にどう作用するんだろう」

「ただ、世界そのものに影響が無ければ関わる必要性が無いのもゾーイの性質だろ」

「……………そうだ。でなければ君の腕は今頃無事で、私は激情のままシヨゴスを消し飛ばしていただろうね」

シヨゴスの危険性により顕現したゾーイだが、シヨゴスが間接的に与えるコーリスへの攻撃には、世界の危機は存在しない。もし腕の欠損が世界の危機に繋がるのなら防いだだろう。しかし、実際は彼が生きていればそれで良かった。

——ナタク達が来た時点で、ゾーイは不可侵を強いられたのだ。それは幼少からコーリスを見てきた彼女からしてみれば、耐え難い光景だった。

「勿論役割に反する事は出来ない身体だ。だが、最近は融通が効く。君と一緒にいるという条件でのみ、自由に行動できるんだ」

「俺がお前の目的に必要な一部だからか？」

「そうだ」

「……割り切れるのか？本当に。感情は豊かだろう」

「…もし私が要らなくなったら、違う使徒が来るんじゃないかな」

「俺は嫌だぞ」

コーリスはその後何も言わず、窓の外を見続けた。ゾーイには勿論それが照れ隠しの行動だという事は分かっており、無意味で温かい愛おしさを感じた。

「私も、君といるのは楽しいよ」

小さな翼竜と戯れながら、彼女はニコリと笑った。

——古戦場当日。

「はいはい！参加する騎空団の方達は名簿をお願いしまーす!!」

賑わい。だがこの場にいるのは歴戦の戦士達だ。

「申し込み終わった。後は戦うまで待つだけだ」

「本当に戦うしか無いイベントなんだね」

戦場の痕跡が残る大地は赤黒く染まっただけで、炭も被っていた。恐らく、前回復活した星晶獣が火属性だったのだろう。

「チラシに書いてある情報だと、今回の敵は風属性。能力は暴風や風の斬撃に天候操作。雷は降らないが雨は降る。数は多め」

「シンプルな能力だ。盾を使えば問題ないだろう」

「だが、気になる事があつてな」

「うん？」

受付に貰ったチラシの下部には、大きな赤字で注意事項が書かれていた。

”眠りに誘う魔物が出現中。姿は不明なので注意すべし” って

「その書き方だと星の生物ではないのか」

「周期で分かるから、何処からか湧いた魔物と判断したんだろう。大方キノコ型だ」

「きのこ……じゆる」

「…………今夜はキノコスープでも飲みに行くか」

「やった!!」

若干のキャラ崩壊もしつつ、二人はリラックスした気分で戦場を待つ事が出来ている。

そして、鐘の音が響いた。

「行くぞー!」

「了解した!」

二人は騎空士の大群に混ざり、戦場へ駆け出していった。

「砂利粒に消し飛ぶがいい!!」

理性を失った生物ほど危険な物は無いと言うが、それでも星の獣には完全性が伴っている。極限まで高められた空への害意は、技の出力の向上に留まり、自我の崩壊までには至っていない。

曇天の空からは常に大量の雨が降り注ぎ、暴風と共に騎空士の視界を阻害する。

「斬撃来るぞ！避けろ!!」

「岩石飛ばします！離れてください！」

「足撃つぞオ!!」

”北風”を司る星晶獣ボレアースは、翼の生えた老人である。左手をかざす事で雨を降らし、右手の方向に風が吹く。元来から粗暴な人格であり、空の世界に害意を持った危険な獣。

此度の復活は6回目であった。

「北風よー」

風の魔法は避けられ、銃による脚部への集中砲火により動きを奪われ、土属性の魔法による投石で攻められる。

この戦い方は、先人達によるボレアースの対抗法の一つだが、騎空士の連携が優れているという事でもある。

「砂利共め……ならば」

しかし単純な能力ほど火力は高い。ボレアースの最も危険な技は、

雨を槍のように圧縮させて降らせる事。その前に削り倒すのが今回の作戦だったが、視界の悪さが攻撃の通りを遅くしていた。

「串刺しになれい!!」

老爺の邪悪な笑みが戦士達の目に映るが――

「――ケーニヒシルト」

古戦場初参戦のコーリスが防ぐ。頭上高くに配置された盾が全ての雨槍を防ぎ、その天蓋が一つの塊に凝縮していく。

そして、彼は右手を下に振るった。

「圧壊!」

それは槌であつた。

「がはあ!」

質量攻撃で叩き落されたボレアースは、痛みに悶えながらも両手で風と雨を操作し、先程まで雨に触れていた者に向けて極低温の風を吹き付けた。

ボレアースの能力は単なる風ではなく、冬を齎す北風なのだから。

(凍らせてくるのか…多才!)

剣士達は一旦引き、後方の魔法使いの元へ居場所を固めた。

「凍結が来ます!火を起こしますので集まって下さい!」

熱源によって温度を確保した戦士達だが、このままではジリジリと

凍らされていくのみ。星晶獣の権能に限界はない。単なる魔力とは別物の構成だからだ。

だが——そこでゾーイの参戦。

「頼むぞ、リイ！」

「クルルルル!!」

ゾーイの側に寄り添う2匹の小さな翼竜。その片割れであるリイが体軀に見合わない広範囲のブレスを吐いた。

冷風による凍結に対し、絶対零度の吐息。

「獣畜生めえ……！」

「失礼な」

「クルツ！」

人間を巻き込まない様敢えて調節されたブレスが北風を相殺し、ここでゾーイがボレアースの腕部を斬り込んだ。

「ぐ……」

「コーリス！決めよう！」

「ああ！」

退避している戦士達は後方に、目の前の敵は苦痛に動きを止め、コーリスとゾーイが揃っている。これ程二人にとって力を出せるチャンスは無い。

二人は剣を交差させ、魔力を一気に纏わせる。大地を震撼させる程の蒼い閃光が周囲の目を晦ました。

そしてその剣の矛先はボレアースの胸部に。

「極光を熾せ！」

「空の民どもめがああああ!!」

ゾーイの光線をコーリスが更に加速させる合技――

「ガンマバースト!!」

一つの核を残し、ボレアースの肉体は粉々に消滅した。

「1日目は終了です！お疲れ様でした」

ハーヴィンの商人が拡声器で終了を告げた。古戦場の一日が終わったのだ。思わずコーリスがその場に座り込む。

「中々疲れる…」

「てつきり星晶獣だけかと思ったのだが…戦場の影響で凶暴化した魔物も沢山いるとはね。どちらかと言うと魔物の方が大変だったな」

「しかしコアが勝手に地に埋まるとは…本当にこの島に根ざしているんだな」

「明日は別の獣が復活するらしい。備えよう」

4日間に渡る古戦場の戦いは、大規模な騎空団でなければ疲労困憊に陥る事間違いない。だからこそ序盤に貢献度を稼ぐをだけ稼いで確実な報酬を得る人間も多い。

コーリス達は早速一番の目玉である星晶獣を倒し、大量発生する魔物達に対する盾やゾーイの翼竜を用いた防衛戦が評価された事により高い貢献度を獲得した。

古戦場に出現する魔物は巨大なものも多く、質量攻撃は場合によつ

て星晶獣よりも危惧すべき事なのだ。

「戦う前に色々な団と作戦会議をしたが：何処も俺達を馬鹿にしなかつたな」

「商人の推薦は信頼が大きい様だね」

古戦場の本質は島に住む人々の防衛であり、報酬に欲が眩まず防衛を重視したコーリス達は同業者からも高い好感度を得た。

ボレアースの能力は対処自体は簡単だが、技の威力そのものは単純な分恐ろしく高いものであり、大量の降雨や暴風はこの島の天候を変えざる影響があつた。

「うえ…血なまぐさい」

「早く身体を洗ってテントを張ってしまおう…：…む？」
「にく…だよな」

芳しい香りの正体は、劳いの肉。

「早く洗おうコーリス！骨つき肉だツ!!」

「あーはいはい」

専用の俗場では水を用いて身体を洗う事が出来るが、風呂場でない為、豊かな環境でのサバイバル生活の様な物である。性別の分別は最低限行われているが、水の質は川よりはマシな程度なのだ。

そうして一応身体を綺麗にした二人は、屋台で焼かれている劳い品の骨つき肉を受け取りに並んだ。

「コーリス、何本食べたい？」

「20本」

「え」

「冗談だ」

「そんなに少なくないのか…?」

「そっちかよ」

「50本は食べたい」

「迷惑だからやめろ。ガチで」

一先ず二人は10本貰ってテントに戻った。

ちなみにゾーイが食すのは8本である。彼女にとっては少なすぎるが、そもそも大量に食す必要のない身体なので涙ながらに耐え忍んだ。

肉に噛みつきながらゾーイは問いかけた。

「星晶獣と正面から戦ってみて、どうだった?」

「…正直に言うと、何とかかなりそうない気がした」

「そうだろう。君が強くなったのもあるが、一体一体は現実離れた強さではない。恐ろしいのはあれ等が徒党を組んで攻める事。強力な獣を量産する事が出来なかったのは、空にとって幸運だった」

「自我の問題か?」

「うん。能力によっては人格と紐づく者もいる。基盤を作る事は出来ても感情と記憶そのものを定形にする事は出来ない。だから序盤は人型が少なかった」

「なるほど。今回のは人型ではあったが単純な能力な上に怒りに支配されていた。サテュロス様の様に色々な力は持っていなかったしな」
「能力の幅を増やすほどその権能に見合う人格が育っていく。感受性に乏しい星の民には難しいものだった」

旧型の星晶獣は単純な能力と魔物の様な姿形が多く、比較的後期に作られた星晶獣は万能型や概念系の能力が多く、人型や戦士の姿である事が多い。

しかしゾーイは戦争時よりも遥か昔に作られたコスモスという存在の一部である為、それ等の法則は当てはまらない。

「未だ空に恨みを持っていてという事は旧型の獣が多い。凶暴さに臆さない様明日からも油断せずに行こう」

「分かった」

「では、いつもより早い寝ようか。きのこスープは残念だけど…」

「ああ——」

ゾーイが寝袋に入って横になろうとしたその時——コーリスが違和感に気づいた。

「——静まったな」

「……みんな考える事は同じ、と言いたいが。給仕達の足音も消え去った」

「魔物の遠吠えは？」

「私も聞こえなかった。ここは安全だ」

「…外に出るぞ」

「了解した。私が先に出よう」

ゾーイが先導しテントから出る。周囲の警戒と共に2頭の翼竜に索敵を命じた。その姿を見たコーリスは彼女の後に続くが、何故か目の前の足は止まってしまった。

「どうした」

「………コーリス」

「…なんだ、これ」

周囲を見渡したコーリスが見た物は静寂。人々が倒れ付し、絢爛を感じさせない祭りの名残。悍しい異物感。

だが命の気配を存分に感じる場ではあった。何故なら倒れている戦士や商人達は眠っているのだから。

「…生きてる」

「気持ち良さそうに寝ている。私なら地べたは嫌だ」

「ッ!？」

「どうした!？」

「…………この男の腰が急に動いてビックリした。しかも仰向けから急に上に」

「腰…………？不思議な寝返りだな」

「痙攣にしか見えん…不気味だ」

気の抜けた会話をしながらも二人は剣を構えて周囲を警戒する。

「これ、チラシに書いてあった睡眠の魔物か…？」

「その割には姿も胞子も見えない。だが、明らかな魔力を感じる」

「星晶獣か？」

「…………いや、違う。だから私にも分からない」

ゾーイですら全く事態を読み込めない異常事態。眠りこけた戦士達は恍惚とした表情で眠り、度々身体を動かす以外に起きる気配が無い。

だが、その状況もまた変わる。

「取り敢えず皆を起こそう…………………………—?」

「ゾーイ…!？」

剣と盾を構えていた筈のゾーイと龍たちが頭から地面に倒れていった。

「まずい…!？」

自分一人になったコーリスは焦燥に駆られてゾーイの手を掴む。

(ゾーイが全く抗えず眠った。世界にとって危険な存在を探知する能力…その発動の兆しすら見せなかつた。つまり相手は格下……いや、イレギュラーはあり得る……！)

最悪の状況にコーリスが歯を食いしばると、何処からか彼の耳に声が聞こえてきた。

「ふふ………」

「何奴ツ！」

り——
舌なめずりと共に聞こえたそれは、蠱惑的で、成熟的、艶麗的であ

「食♥べ♥ご♥ろ♥」

——淫蘊いんとうな声であつた。

48. ヘカテー死す

心地が良い。

「ふあ……」

目を開けたら俺はいつもの切り株の上にあった。小鳥のさえざりと風が頬を撫で、薄っすらと漂う霧。

赤子の様に丸まって寝ていた俺は、近くに鍛錬に使っていた木剣が無いか探したが、そんなものは無い。ある筈がないんだ。身体を鍛える必要はない。今や空は平和で、誰一人寿命以外で死んでいないのだから。

俺は約束通りあいつらを待てばいい。 ■■■と、ファイラと――

「……もう、探したのよ？コーリス」

「ああ、すまん。ヘカテー」

――ヘカテーを。

「眠たいのなら私の家で寝ればいいじゃない」

「ここが好きなんだ」

「変わらないわね、昔から」

「……そうか？」

「ええ。昔からここで寝て、私が起こしに来ていたでしょう？」

「そう、か。お前が言うなら間違い無いな。いつもありがとう」

「どういたしまして……ふふ」

ヘカテー。俺の幼馴染で、度々俺を起こしに来てくれる優しい女性だ。将来を誓い合った仲でもある。

俺達の馴れ初めは特に何もなく…いや、あるにはあるのだが、語るまでもない。俺の隣にはいつも彼女がいてくれた。だから、俺も死ぬまで彼女の隣にしようと思う。

ヘカターがこの島に来たのはいつだったか…覚えていないが、まあ大丈夫だろう。ヘカターだし。

「それよりも！こんな所に留まっていたら困るでしょう？」

「何がだ？」

「今日は式の服をフェリの家で試着する予定でしょう」

「……」

ああ、そうだった。確か来月に結婚式を挙げる予定だった。何故俺は忘れていたんだ。でもヘカターが覚えていてくれるから問題は無い。

「さあ、行きましょう…？」

「ああ…」

俺達はいつの家に向かった。

「ふふふふ……」

○○○○○○○○○○○○○○○○

——古戦場、駐屯地。

「ふふふふふふふふふふ」

先程まで星晶獣や魔物と戦っていた戦士達は既に倒れ付した。倒れ、眠り、快楽を貪り、同時に力を吸われる餌となった。

最後に残ったコーリスとゾーイも既に無力。

「餌がいっぱいあい………じゅる」

下品な舌なめずりも、その姿で行なえば男を射止める魔性の魅了でしかない。

一人、戦士達の顔を見ながら愉悦に浸る魔女がいた。

「ここを狩り場にして正解だったわあ」

ヘカテー。またの名を冥妃、邪妃―そして、夢魔。

星晶獣では無く、魔物ではなく、精霊でもなく、そして人間でもない。その上で永き時を生き、人を快楽の夢に墮とし精力を吸い尽くす魔女であった。

彼女の影響下に置かれた戦士達はそれぞれが理想の夢を見ており：性欲、食欲、禁欲等、全てが叶う世界に浸っていた。先程コーリスが目撃した腰を振る男も、そういうものである。

胸や脚を強調した扇情的な衣装に熱を帯びた瞳、そして金色の髪に、明らかな人外の証明である耳は男の情欲を刺激するだけの危険性を秘めていたのだ。

（最後の二人は中々に墮としがいがありそうだったけれど：少女の方は思ったよりも俗っぽかったし、男の子の方も疲労が溜まっていたからすぐ眠った）

”精神の強さは肉体の強さに直結しない”、というのがヘカテーの持論である。どんなに屈強で武功を立てた戦士でも色には溺れるし、ひ弱で剣も振れない者が誘惑を退ける事もある。色欲が全ての世界ではないというのも彼女は知っている。

——だから、夢を見せた。夢ならば何が起きても受け入れ、享受する。それが人間の性質なのだ。

「さて、順番に精を……そして」

彼女はうつ伏せに寝ているコーリスを見て涎を垂らす。

「メインディッシュは現実いまここでえ……」

強い人間が無様に媚びる様、欲に負けて醜態を晒す様、青い若さを散らす様。そんな色が絡む人間の業を彼女は心底望んでいた。

精気を吸う事は生命活動の一環だが、ヘカテーはそれを敢えて楽しみ謳歌する。

「ふうふう」

その魔の手がコーリスの身体を仰向けに転がし、そのまま跨がろうとして——

「っ！」

「去いね!!!」

ゾーイと2匹の翼竜による3方向からの光線が彼女を襲った。

(起きたッ！なぜ!?眠りを跳ね除ける人間はいたけれど…眠ってしまっただ後に即座に起きる事は出来ない筈…！)

「種明かしをしよう。魔女」

上に飛翔して逃げる事で光線を避けたヘカテーだが、突然の奇襲にかなりの衝撃を受けていた。

そしていつになく剣呑な表情のゾーイ。その顔には血管が浮き出ており、怒りだけでなく他にも理由があると彼女は分析した。

「君の眠りの術は恐ろしい。生命体の欲に訴えるからか、本能的にその夢へ意識が滑り込んでしまう」

「…」

「だから、先にやらせてもらった」

疑問の声を上げる前に龍が声を上げた。

「ルルルル！」

「この龍は…」

「尾にリボンを付けている方がデイ。こつちがリイだ。デイは人を眠りに誘う息を吐ける」

「…まさか」

「君の術中に嵌る前にデイに眠らせてもらった。不甲斐ない。私がいながら、この戦場を君の思うままにしてしまった」

しかし人間の本能に訴える眠気は簡単に無効化できるものでなく、例えデイのブレスが強力なものだとしても、同じ睡眠誘発の効果が見え合ってしまう事は明白だ。

そうなってしまう場合、人間の脳には恐ろしい負荷がかかる。

ビキビキと脈動している血管や瞳孔は、その様な負荷を抑え込んで無理矢理に意識を取り戻したからである。

「さて、世間話はこれにて終了」

ゾーイが剣を構え、翼竜のデイとリイが大きく口を開けた。ヘカテーは先程まで眠っていた少女が、自分より高位の存在である事を今更理解し、後退った。

「…虎の尾を踏んでしまったわね」

「注意書きからして古戦場自体が君の餌場になっていた様だが、悪事には応報が付き纏うものだ」

「ふふ。でも私を中途半端に倒してしまうと、こここの人間達は目覚めの喜びを知れなくなるわよ？」

術を操る人間を殺害する場合、特に封印や呪い等は術者に解除させなければそのまま残る事が多い。ヘカターの言葉通りならば、餓死するまで夢から覚めないままであろう。

しかし彼女のソレは嘘だ。夢を利用して力を得る彼女の性質上、敢えて起こす事で人間の欲を刺激し、夢の再来を望ませる事こそ効率の良い餌の作り方。どんな人間が死のうが構わないが、自分が生きられなくなるのは困る。そういう思考回路だった。

(さて、彼女と戦うのは避けたいし。この人数を逃がすのは勿体無いけれど、逃げなければね)

——残念ながら。

「君は何も言わず許しを乞うべきだった」

「待っ——」

「ガンマレイ」

奥手になった時点でゾーイは彼女の性質を見抜いている。万感の敵意を込めた光線に加えデイとリイによる一極集中のブレス。

しかし直撃したかに思えたヘカターの姿は無かった。

「幻影か。器用だ」

ゾーイの背後に現れたヘカターが杖を振りかざす。すると一瞬にして周囲から炎が現れ、うねりながら襲いかかった。

そしてまたもや姿を晦ます。

「リイ」

「クルッ!!」

炎の対応はリイによる水の吐息。

「デイ」

「ルル…!」

幻影の対処にはデイによる光線。デイのブレスには魔力を断ち切る能力が備わっており、魔法による効果を消去できる。

「そこか」

「く…!」

ヘカテーの居場所を感知したゾーイ。恐ろしい速度で接近し剣を振り下ろすが、炎を纏った杖によって防がれる。

「なる程。戦闘慣れしている」

「あなた…何?」

「語る必要は無い。ただ君の敵だ」

（まずいわね…本当に）

だが同時に気づいた。ゾーイと共にいた男の莫大な魔力。それを吸収れば逃げるだけの力を得る事が出来るかもしれないと。

（男が墮ちるまであと少し…ふふ。それがこの少女の絶望のサインかもしれないいわねえ）

淫妃は心の中で再び微笑んだ。

コーリスの心を犯す事はそう難しくな——

○○○○○○○○○○○○○○○○○○

あいつの家に来てフィラに出迎えて貰った後、俺とヘカテーは鏡がある部屋に来ていた。彼女がドレスを着終わった様なので、今から俺はタキシードの試着に入る。

「見てコーリス。似合ってるかしら？」

「ああ、綺麗だ」

ヘカテーは黒を基調としたドレスで、何でもおばさんフェリの母の持っていた喪服を参考にして作られた物らしい。

「コーリスも着替えましょう？」

「ああ」

髪が整っているか確認しようと鏡を見た。そこには勿論いつも通り笑うヘカテーと、俺の姿が——俺の、姿が。
いや、うん。俺だ。なんてこと無い服を着て、五体満足で生きている俺だ。19歳になったばかりの、俺だ。

あれ……ここ、どこだっけな。

「ヘカテー」

「なに？」

「この島の名前って…何だった？」

「んもう…忘れたの？」

「教えてくれ」

「私達の島は、”トラモント”よ」

———そうか。

「よく分かった」

「ッ!？」

脳が冴え渡る。異物感が消え去り現実の記憶が戻って来た。
敵、名前はヘカテー。能力は強制的に眠らし夢を見せる。

「痛い……やめてコーリス……………!」

「知らん」

「分からないの……? 私よ、ヘカテーよ……?」

「初対面だ」

「……………! あなたまさか」

「来い、ノスタルジア」

ここは理想の世界。俺の思うままの背景で進行するストーリーが
主軸の様だ。但しこいつが登場する以外は。だがそれ以外はこつち
の都合に合わせてくれる。この様に剣士である俺を想起すれば現実
と同じ姿になれる訳か。

「覚悟しろ。夢魔」

「な……何故夢から戻ってこれたの? あのまま気持ち良く生きられた
というのに」

「……この夢はその人間の望みをベースとしているが、一つ違うのは、必
ずお前が出現し何らかの行為をしなければならぬ事だ」

その行為に検討はつかないが、恐らくヘカテーに恋心を抱く事か、
長い時間身近で過ごすといったものだろう。魅了使いの魔物にもよ
くある事だ。

「どんな人間でも夢を見ている途中は薄っすらと『ここは夢だ』と勘づくものだが、それはそれとしてその世界を謳歌する。夢の中では違和感や異物感は無く、受け入れる事が出来るからな」

「……」

「その受け入れるという夢の性質を利用し、お前の魅力を最大限主張する事で、無関係の人間なのに”ヘカテ”という設定が刷り込む事が出来たという事か」

先程まで俺は何一つ疑わずにヘカテを婚約者だと思っていた。今では全く欲も湧かないが、間違い無く俺は鼻の下を伸ばしていた。

……屈辱。しかしこの夢には欠点がある。

「だが、現実で”そういうもの”だと決め付けたものが、違う形で夢に出てくる事を受け入れられる訳がない。あくまで人格は俺ベースだからだ」

「私が口を滑らせた、とでもいうの……?」

「口ではない。設定の話だ」

俺は絶対にあの絶望を忘れない。

「トラモントは俺が13の時に離別した霧の島だ。誰が何と言おうが俺はもうあの島に戻る事は出来ないし、その運命を心から憎んだ」

「…」

「だからこそ——大人の俺がトラモントにいる事はあり得ない」

「それは詭弁よ!」

ヘカテがありえないと叫ぶ。

「夢はその人間の望む世界を作る……!なら貴方がトラモントを望む程そういうものになる!大人になってもこの島で幼馴染達や村人と過

「ごし、怪我も死も無い幸福な人生を送る世界を——」

「俺は諦めたんだ」

「は」

「——今はな」

剣を振りかぶる。

「皆が皆お前みたいに性欲で生きてると思うなよ」

……なんかコイツ泣きそうな顔してた。

○○○○○○○○○○○○○○○○

ヘカターの足掻きも長くは持たない。ゾーイが杖を弾き飛ばし、膝をつく彼女に剣を向ける。

そこでヘカターは涙を見せた。

「ここまでだ」

「…して」

「うん？」

「許して…私、人を殺そうなんて思ってないわ…ただ生きる為に必要だったの」

「そういう生態なのか。確かに人を殺す気は無かった様だな」

ヘカターは心の中で笑う。確かにゾーイは強いが疑う事が苦手だ。数々の人間を魅了し利用してきた彼女の言葉は真に迫る物があり、効果は靦面に見えた。

しかし…。

「私は許そう。だが——」

「…？」

「——コーリスが許すかな！」

瞬間——コーリスは拾ったヘカテーの杖を全力で振り抜く。

「ぼっ——!？」

脇腹を殴り飛ばされたヘカテーは何回か地面を跳ね、防衛の為に建設されていた壁に激突した。

「すまん、遅くなった」

「おかえり」

” 起きた時点でヘカテーを殴り飛ばす ” と決めていたコーリスは、近くに落ちていた彼女の杖を手に取り即座に行動に移った。

動揺による影響か、ヘカテーの夢に囚われていた戦士達の眠りが浅くなったのを二人は確認した。

「コーリス」

「ああ。クリアオール！」

折角なので杖を用いて魔法を使用。これはコーリスの魔力を空間に流して活力を与えるもので、毒や麻痺、睡眠等の状態異常を和らげる効果がある。

コーリスは剣士だが、魔法は得意な方であった。

「うーん…はっ！」

「(ハッ)は…っ？」

次々に起き始める戦士達。何故か数秒後に皆顔を赤らめているが、コーリスは突っ込まなかった。というか突っ込めなかった。自分も

あんな感じになっていたからだ。

だから彼は腹部を抑えて悶絶しているヘカテーの元に向かった。

「あ、貴方…私の、杖…」

「恨むのはお門違いだ。こっちは見たかった景色の中にお前が出てきて腹が立っているんだからな」

「そうじゃな、くて…」

「？」

「杖は殴るものじゃないでしょ…それはメイスでしょう……」

よく見るとヘカテーの杖は先端が燃え盛っているので、彼女の腹部は軽く爛れていた。

途端に申し訳なさを感じるコーリス。

「よくも…この私を…!!」

「…困った」

「皆私との夢を見て幸せだったのに…それを邪魔したのよ貴方は…！」

「…：…そうだな。確かに逃げたい現実もあるかもしれない。その理想から無理矢理に起こすのは辛い事か」

トラモントの情景は確かに正確だった為、彼もその点には思う所があった。だからこそ、ヘカテーの目的を聞かなければならない。

「ではお前の目的は何だ。皆の理想を夢だけでも叶えたい、という訳では無いだろう？」

「…私は」

ヘカテーは語り出した。

「…私は夢魔の邪妃。人に夢を見させて精力を奪う者」

「ここに来た理由は？」

「屈強な戦士達が揃う場所だから：餌場として狙った」

「屈強な戦士という理由が分からない。生氣そのものに筋肉は必要無いだろ」

「……ど、どんなに強い戦士達でも夢には抗えない。夢の中でだらしなく顔を緩めて腰を——」

「……………」

コーリスは理解した。嫌味のつもりで言った『お前みたいに性欲だけで生きてると思うなよ』は間違いでは無かったということに。そして、ヘカテーが自身の愉悦を追求する悪魔だという事にも。腰の意味は分からないが。

「つまり人間が墮落する所を見たいという事だな。同情の余地なし」

「ちよ、ちよつと待つて」

「なら早く消えろ」

「分かったわ！」

情けなく逃げ出そうとするヘカテーに背を向け、起きた人間達を見ると、彼らは武器を構えても一向に此方に向かってこない。それどころか目を逸らし気まずそうに頬を掻いている。

眠気が覚めていないのだろうか。

「…何なんだ」

「あーきつとさつきまで合体していた相手に剣を向けるのは氣分的に嫌なんじゃないかしら…」

「合体…？なんだ、合体つて」

「え…？言つてしまえばセツ——」

「ガンマライト・エクスキューション!!」

「ク——!!??」

言わせてはいけない危険な言葉を感じたコーリスは即座に奥義を解き放った。だが足りない。これ以上ヘカテをこの空間に居させてはならないという謎の使命感が彼を支配した。

「ガンマライト・エクスキューション！ガンマライト・エクスキューション！ガンマライト・エクスキューション！ガンマライト・エクスキューション！！！！」

「ぼあああああ!?待ってほんとに死んじゃ——」

5連。累計6回の光線をまともに受けてもヘカテは健在だった。伊達に永い時間を生きていない。最後の方には自らも炎を展開してコーリスの魔の手から逃れようとしていた。

「大体俺より年下の人間もいるんだぞ！」

「そういう青い若さを犯すのが良——あ…いや！ちが」

「…お前終わってるな。今までの人生、変わった人間と突然出会った事は多いが…お前ほどぶっ飛んでる奴は初めてだ」

初の古戦場にてヘカテと遭遇。この出会いは後に大きな運命を齎すのか…それとも何の意味もない息抜きなのか。

「…金輪際人間の営みを乱さないと誓うなら逃がす」

「え…それはちよつと」

「当たり前だ。戦士達の士気に関わる」

「別の意味で士気の向上に貢献してるの思うのだけれど…」

「黙れ。あとお前の様に星晶獣以外で古戦場を狙う者はいるか？」

「…私には分からないわね」

「取り敢えず分かった。今日はこれでいいか…」

「…本当に良いの？貴方達を襲ったのよ？」

「死人は出なかった。それに…」

コーリスは瞼を大きく開いて言う。

「お前の名前覚えたからな」

「あ、はい…」

ヘカテーの強制謹慎が言い渡された瞬間であった。

ヘカテーは杖を返してもらいおそおそと帰っていった。突然の淫夢に戦士達は暫く無言になっていたが、コーリスもその様な夢を見ていたと気づくと激しく活気が増した。

「坊主は結婚する夢かー。俺はな…」

「俺なんて姉だったぞアイツ」

「娘ー!!」

「メイドさんだった」

薄めの猥談。ゾーイは陰ながらにヘカテーを消すべきか思案中だ。それくらいの影響力があったのだ。

古戦場は、まだ終わらない。

「ゾーイ…」

「なんだ？」

「…帰ろっか」

「…そうしようか」

「古戦場、つらい」

ヘカテーの様な敵には色んな意味で会いたくない。そう願った
コーリスは古戦場を1日目で辞退する事を決めた。

49. グレイスタッフ・ランドスケープ

「出来ましたよお客さん」

「ありがとうございます」

古戦場から逃げたコーリス達は、宿で報酬の中身を確認した。ヘカテーを討伐した事によって特別にルピが上乘せされている為、かなりの高額になっている。

その他は武器の素材に使える属性石や、エネルギーの塊である金剛晶の欠片等様々な素材が入っていた。

そして、その素材達を使つてコーリスはある物を作ってもらつていた。それは…。

「こちらが魔力増進の長杖です」

杖である。魔法使いならば必ず所持している武器であり、魔法の発動を速める事が出来る。他にも属性石を用いた杖であれば、その属性を強化した上で魔法を放つ事が出来るし、範囲の拡大も可能だ。

つまり、剣よりも拡張性が高い武器ということになる。

「ありがとうございます」

「いえいえ…中々作り甲斐がある品でした」

コーリスは他者からの依頼で杖を作ったのではない。酔狂でもない。単純に”使える”と思つたからである。

きつかけは数日前にリタイアした古戦場である。

気まぐれでヘカテーの杖を用いての補助魔法を使った際、通常時よりも遙かに発動が速かつた事に気づいた彼は、防衛戦等で盾や霧を素早く展開できるアドバンテージに目を向け、早速杖を作ろうと決心したのだ。

少々鉈石も使ったが、それは頑丈な杖を望んだからだ。

緊急時に攻撃を防げるくらいのが望ましい。これは杖で剣を防いだヘカテーの話をゾーイから聞いた事が発端だ。

更に言えば、頑丈な杖は鈍器にもなる。コーリスがヘカテーに杖を振るった時、驚く程殴り飛ばしやすかったのを彼は覚えていた。

「名前はどうしますか？」

「お任せします」

「…そうですね。」灰の杖かっしょう”というのはどうでしょう”
「ふっ？」

「コーリスさんの戦い方は防衛が本懐だと聞きます。杖うという言葉には馴染みが無いでしょうが、簡単なイメージで考えて下さい。厄災を退ける守護の役割を担う杖に相応しい名だと考えました」

「…ありがとうございます」

”杖”という言葉に思わず口が緩んでしまう。少し前に滞在していた犬神宮を思い出したのだ。彼女等に比べればこの名前の意義は薄れてしまうだろうが、それでも自身の存在する意味を少しでも認める事が出来た。

杖は全体的に質素で、上部の先端には鉈石や魔石を加工した装置が取り付けられており、機械的なデザインを思わせた。

そして下部の先端は小さいメイスの様な形になっており、これはコーリスの意向によるものだ。

灰色の光沢に目を奪われつつも彼は杖を手を取ってみた。

「……」

「握り心地はどうですか？」

コーリスは思った。”これ、重くないか？”と。

「い、意外に重いですね」

「属性石を用いる場合には軽量で済みますが、硬さを重視したとの事でしたので：鉱石の重さです」

いや、片手で持てない重さではない。愛剣とは違い、剛力を使わなくても振りかざすくらいは造作のない事だ。

それでもコーリスの想定していた戦い方には支障が出る。

それは、物量を相手にする場合に考えていた杖と剣の併用であった。左手に杖、右手に剣を持って守りながら相手を倒す持久戦。聖騎士時代では鎧を着ていた為、剣のみでしか戦えなかったが、旅人の装いである今なら可能だと、そう思っていた。

しかし、長剣以上大剣未満の重さを持つ”ノスタルジア”、バジユラから受け継いだ”雅巡犬牙^{がしゆんけんが}”に加え、そこらの剣くらいの重さである”灰の祓杖”を背負えば素早さと体力を犠牲にしてしまう、

(いや、それよりも：仕舞う場所がない：!!)

腰に刀、背中に剣。手持ちに杖でも構わないが、剣のみで戦いたい場合に態々地面に捨てて回収するのか。コーリスは今更その周りくどさに気がついた。

(いつその事剣に並べて背負うか：いや、邪魔だ。くそ！ヘカテーのせいで長い杖に拘ってしまった俺が馬鹿だった)

それとなくヘカテーに責任転嫁。見かねた店主が声をかける。

「取り敢えず持ち運び用の袋は用意してありますので、それを肩にかけて活用して下さい」

「ありがとうございます…」

彼が思う事は唯一。

(ゾーイにどうやって言い訳しようかな)

——ポート・ブリーズ群島、カカドウ溪谷。

「という事でどうにかしたい」

「私はどうにかしよう」

探索の依頼を受けたコーリスとゾーイは、魔物の巢等の確認を一段落終え、安全な場所で休息を取っていた。

一応剣を抜きやすい様に手前側にズラしながら杖を背負っているが、少し増した重さが動きの邪魔をするので、ゾーイに相談をしている所だ。

そして何とかなるのがゾーイである。

「杖を貸してくれ」

「分かった」

コーリスから杖を受け取ったゾーイ。するとその手から一瞬で杖が消え去った。

「…え」

「使いたい時は言ってくれ。一瞬で呼び出せる」

「どういう事だ？」

指を鳴らして再び杖を出現させる彼女に理解が及ばないコーリス。今まで数々の特殊な能力を見てきた彼にとつても、急なワープ技術に疑問を隠せない。

一応剣や盾、龍を一瞬で出現させられる事は知っているが、それはあくまでゾーイの一部だからという理由があった筈だ。この杖はゾーイ由来のものではない。

「私はコスモスの使徒だからね。本体からの命令や意思を受け取って行動する。だからコスモスのいる場所と繋がっている様なものだ」

「…杖をそこに送ったという事か？」
「そうだ」

ゾーイの元となるコスモスは空の世界では無く星の世界で空を見渡している。その場所に杖を置き、使用したい時に呼び戻す事でワープの様な芸当をしているのだ。

「…コスモスさんは急に杖が送られてきてビックリしたんじゃないか」

「ああ、たった今『急な権能の使用は控えろ』という信号が来た。結構驚いていたぞ」

「いいのか…？」
「緊急時でもないのに能力を使ったから驚いただけで、実際に問題はない」

本来、コスモスはゾーイの様な使徒の人格を極限まで薄めて差し向けるのだが、コーリスの監視という命令を受けた彼女は十分な人格が育ち、固有の名まで持つてしまった。

だから、目的以外の些事はコスモスにとって無関係なものであり、この様な行動には虚を突かれるのだ。

…あまりに勝手な事をするゾーイ自身が強制的に帰還させられるのだが、彼女は気にしていない。

「…それにしても不思議な風だ」

「ああ。精神の安らぎ…そして魂の安らぎ。ここはそういった性質の風が吹いているようだ」

「…豊穡の風は生命の芽吹きを祝福し、ポート・ブリーズの守り神と共に在り」、か」

遺跡の残骸だろうか。溪谷の大地に埋まる瓦礫に文字が彫られていた。

「守り神。ポート・ブリーズは島と契約した星晶獣を神として崇め、文化の側面として融合させたとレイが言っていた」

「但し根強い宗教とは異なる。お伽噺の様な扱いに近い。風に感謝し日々を過ごす彼等の行為は、私達の”いただきます”と同じだ」
「驚いた。詳しいな」

「この島の星晶獣にはコスモスが直接アプローチをかけた。人間と星晶獣、文化と権能…共生。私の共有した知識はそう語っている」

星晶獣が島そのものと契約を結ぶ事は珍しくないが、これほど覇空戦争時の名残を残さず文化に溶け込んだ獣は少ない。

特に、名を知られている事が稀なのだ。過去を語り継ぐ者が戦禍の歴史を紡ぐ限り恐怖は残る。かつて自分達の祖先を粉々にしていた獣が島の守り神として居座っている——そんな見方も出来るからだ。

「コスモス^{私達}が望んだ均衡は、案外歪な物で成り立っているんだ」

ゾーイは遠くの空を見つめて呟いた。

時々、彼女は空の奥を見つめて哀愁に浸る。世界を歪める原因についての情報が常に更新されていく中、コーリスに付き添い続ける役割を持った使徒。

コーリスはそんな彼女を、ずっと迷い子の様に感じていた。

「その歪さが今の空なら、守り通すしかないんだろ」

「…そうだね」

「でも、これだけは教えてくれ。幽世は本当に存在するのか？」

それはずっと抱えてきた疑問。ゾーイがコーリスに接触した原因であり、未だ姿を見ない記憶喪失の根源。

「存在する、が…コスモスですら直接会った事は無い」

「…知識としては？」

「空を侵す赤き地平の尖兵……今は勢力の拡大が遅れている……？」

ゾーイは自分の頭にある知識を一通り口にした途端、首を傾げる。

「コスモスは誰からこの知識を得た？幽世の姿を見た記録は残っていないが…」

「……………は？」

「コーリスは、” 備え”？コスモス…貴女の隣にいた彼はてん——」

「ゾーイ？」

「……………十分な情報が渡されていない」

コスモスは全ての知識を使徒に与えるわけでは無い。それは使徒の世界に対する裁量を偏らせ、天秤を傾ける事への懸念だ。

ゾーイが違和感を覚えたのは過程の欠如。幽世が何たるかの情報はあるが、その元となる証拠や実物の記録が無い。拙い景色を探しても…コスモスの横に誰かが立っていた事だけ。

そして彼女が気付いたことは、コーリスは未来の空に必要な備えである事。

「…幽世は長らく攻めていない。だが未来では必ず現れる…君はその為の備えだと」

「少なくとも今は心配しなくていいと？」

「そういう事になる」

「分かった。ゾーイを信じる…だが、コスモスさんへの信頼は数段落ちた」

コスモスに対して疑問が強まるコーリス。

「ゾーイが言うに、コスモスさんは俺を体のいい戦力として利用している様だが…俺から言わせれば寧ろお前を利用して思える」
「…なに？」

「漠然と思っただけだがな」

二人は暫く言葉を交わさなかった。

○○○○○○○○○○○○○○○○

幽世を退けた幼子、コーリス。

その子を監視するのが私の役割だった。そして彼の力を対幽世として行使出来る可能性が生まれ、セレストの能力により、その思惑は限りなく実現に近いものになったのだ。

そして、ジ・オーダー・グランデの名を冠した私達使徒は、感情を持たされずに生まれる。

だがイレギュラーが発生した。コーリスを通して空の世界を見渡し続けた結果、私に感情と呼べる自我が育った。空の情景を美しいと感じ、彼とその周囲の成長に喜びを覚えた。必要時以外介入出来ない己の融通の効かなさに、怒りすら覚える始末。

そんな私を、コスモスは消さなかった。

その理由を私は問うた事がある。古戦場を終えた後の夜にだ。

コスモスは、静かに語った。

「私がかつて、あの幼子を殺そうとした」
「…！」

「お前に役目を与える前に、私と同程度の力を注ぎ込んだ使徒を向かわせた…世界の敵になる前にな」

「…幽世を警戒していたのですか？」

「幽世の力と混ざったコーリスがどの様な能力を持ったかは分からなかった。だが、殺すしか無かった。調停者として見逃す理由が無かった」

「…」

「だが、その使徒は消失した。よりによって、脅威になる前の筈のコーリスによって」

「え…?」

「霧を体内にすり込まれ、同化させられ…最後には霧散した。その時の言葉は彼の声から発せられた」

声だけの会話だったが、コスモスの顔が苦痛に満ちていると感じられた。

「目を灰色に光らせたコーリスは、『この子の事はほっといてくれるかな』と言った。何処の誰でもない、星にいる私に向かって」

「まさか…」

「記憶喪失後のコーリスを狙ったのだ、もしもアレがコーリスならば、この事を覚えている筈。だが、覚えていない。だとしたら別の存在か、或いは別人格…いや」

次の言葉は、私を激怒させるのに十分だった。

「——今の彼自体が、コーリスという皮を被った幽世なのかもしれない」

「違うツ!!」

そんな筈は無い…そんな筈は…。

「肯定も否定も出来ない。彼は純粋なコーリスなのか、コーリスを真似た幽世なのか…変質したコーリスなのか。…そもそもコーリスの本質が悪なのか」

「あの子はただ笑って、食べて…故郷を愛した人間です！貴方も見てきたでしょう…!?!」

「私は長らく空の世界に居ない。分かっているだろう、使徒よ。コスモスというシステムに感情は不要。だからこそ私が空に過度な愛着を持つてはならない」

「なら私は…私は何なのです」

感情を持った私を破棄しない、その考えが分からない。その超越依然とした機能に矛盾する…貴方自身の感情は何なんだ。

「お前は彼の為に、私に怒りを覚えるほどに感情が育った。本来ならば使徒として不完全だ」

「ならば！」

「私が裁量のまま彼に接触したとして、どの様な結果が生まれるのか検討も付かない。だからこそお前に託したのだ」

「…何をです」

「コーリスを信じ、彼の横に在り続けられる友として。かつての私と同じ様に…感情があるからこそ、開く道があるのかもしれない」

「ですが、それが正しいという事は…」

「コスモスは不完全、空に不要となる」

それは自己の存在否定。コスモスは薄々気づいている。およそ100年後には、自身の存在に限界が来る事に。

「頼んだぞ…ゾーイ。お前は、彼の善性を信じる者であれ」

「…分かりました、コスモス」

本当に、これでいいのだろうか。

コスモスの意志…ゾーイとしての役割だとしても、彼の人生は彼のものであって欲しい。

もつと良いやり方は無かったんだろうか。あの空戦、空から彼を落とさない様気を配れば、そもそも幽霊にならず、人並みの人生を迎えた筈だ。確かに私やコスモスにとって都合が良かったにしても…それは。

幽世を倒すという口実も、恐らくコスモスの嘘だ。幽世を敵だと示す事で、彼が敵になる可能性を封じようとした足掻きでもある。そうでなければ私に明確なビジョンを与えているはず。

だが、寧ろ今は良い。騎空団として、コーリスも充実した様子を見せている。ヘカテーの様な存在は予想外だったが、次は無い。私が確実に消す。

依頼をこなし、たまにリュミエールや犬神宮に行きたがっているが、ポート・ブリーズで平和に過ごしている。

——そんな時、一つの依頼が私達の目に止まった。

「ポート・ブリーズじゃない、遺跡の搜索…？」

その依頼は、私達の運命を大きく変えた。

—— 始話：灰の楔①

「ほら、っつちっつちー！」

時龍オロロジャイア、灰の楔を誘導。

楔、空の個体に同調用意。

個体名——コーリス。

「大丈夫！入っちゃって！」

「楔の効力の延長を確認、此れより待機に入る」

楔^我、同調開始——

——1年後。

「空の民健気すぎだろ！」

「君そんなんだっけえ!？」

僕はアウゲイアス。最近人格を得たばかりだ。

「ま、まあ…演算で分かっただけだけど、1年でそこまで俗に染まるかなあ…?？」

「オロロジャイア程じゃないよ。それよりも此れからどうなる訳?」

「それは言えない。僕を信じて待っていてくれ。コーリス君に被害は出さないからさ」

「…僕いらないんじゃない?一応廃棄の役割として、死なないようにコーリスに入っただけだよ」

「まあまあ、態々死ぬ必要も無いってわけ！」

1年前、楔として崩壊を迎えた僕は、存続の為に空の民の身体に入った。それが、コーリスつて子だ。

なんでも暗殺一族…カルム一族の里生まれで、物騒な風習の中で両親に恵まれたのか、愛に囲まれた暮らしをしている。

しかし、2年後に突如族長が暴走。変な液体をコーリスに飲ませて身体の強化を計ったんだけど、その負荷は結構なもので、コーリスは

熱を出した。

それで両親は怒って、秘密裏に里を出ようとしている。
良い判断だと思う。頑張れ。

「オロロジャイアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「なんでええええええええええ!!?!」

逃げた先の島で幽世に遭遇。コーリスの父は里を抜ける時に囚になって死んだ。母は…不幸にも今ここで殺された訳だ。

僕は間に合わなかった。間に合ったとしても、僕の能力は人を守る物じゃない。

だが驚いたのは、コーリスが僕の能力を使って幽世の細胞を吸った事だ。これにより能力が変質した。吸収というより、何かを奪う霧になった。

そして、オロロジャイア。空の世界についての事象を演算する能力を持つているが、幽世は空じゃない。イレギュラーというやつだ。とはいえ許す事はない。

「言い訳でもいいから言えッ!!」

「ほ、ほんとに偶然で…本来ならここでカルムの追手をコーリス君の母さんが皆殺しにする筈だったんだけど…霧を利用して」

「え…どうするの?本当に…コーリスは大丈夫なの?」

「記憶が飛んだみたいだから…え、どうしよう。幽世と混ざったから演算し直せない。どっちみち間に合わないけど」

「…オロロジャイアアアアアアア!!!」

「ごめんなさい!!!」

この子の未来はどうなるんだと思っていた矢先、またもや敵が来

た。凄い力を感じた。髪色に銀と蒼が混ざった剣士で、突然空から降ってきたのだ。

「何こいつ?」

「あーそれはコスモスの使徒だね」

「何しに来たんだろう?」

「幽世…あ、コーリス君を世界の敵と見做して殺しに来たのかも」
「……」

させる訳ないだろ馬鹿ツ!?

「権能を使う!」

「やつちやえアウゲイアス!!」

くそ…霧になったせいで使いにくい!

でも行ける!霧を口と鼻と耳へ侵入!体内の霧から敵の細胞を吸収……ヨシ!消滅!!

「この子の事はほつといてくれるかな」

「ビュービュー!!」

言つてやった。これでもう寄ることは無いだろう。

——16年後。

「えー…アウゲイアス、報告を」

「………セレストとかいう奴の能力で擬似的な不死身になっちゃつた」

「あーあ、どうしよ」

「幽世細胞滲んでないから多分大丈夫」

「……………残業かあ」

オロロジャイアの心労が…増えた。

「…なんか変な女来たんだけど」

「ぞ、ゾーイだって!?!なんで今ここに!」

「え?知り合い?」

「……………演算では100年後にあの子達の元で顕現する人物だよ」

「……………なんか前に殺しにきた奴に似てない?」

「あれと同族の戦士だよ」

「…殺すか」

「駄目!様子見!」

…ん。前に来たやつに比べたらやけに感情豊かだな。

「……………ほほう。コスモスも考えたね」

「どういう事?」

「コーリス君がイレギュラー過ぎるから、せめて幽世に傾かないくらいに導こうとしているのさ」

「導く?ただ自分達が望む方向へ誘導するだけでしょ?」

「はは、耳が痛いね。僕に刺さる」

「……………オロロジャイアは頑張ってるよ」

「ありがとう」

……………さて、ゾーイとやら。僕はお前を見てるからな。

50. カワイイあの子は遺跡（ハコ）の中に

「……生命体、無し。罨も無い。空洞…突起物が少ないな。何方かという廃墟に近い」

コーリスとゾーイはある依頼を受け、ポート・ブリーズから一時的に離れた。

依頼の内容は遺跡の探索。依頼主はこの遺跡の最寄り街の長である。なんでもここ最近『あの廃墟にはナニカが封印されている』という音も葉もない噂が流行っているらしく、彼等が実際に赴いた所、”奥に何かがあるのは分かるが進めない仕組み”らしく、その廃墟を古代の遺跡と断定。搜索の依頼をこなし続けていたコーリス達に白羽の矢が立った訳だ。

祈望の騎空団はポート・ブリーズで名が立ち、ヘカテーの件で外部にほんの少し名が売れた。商人が多いその島で名声を得れば空に広まるのは速い。だからこそこの依頼を受けられたのだ。

現在コーリスはその遺跡の入り口から内部に霧を送り込み、偵察を行っている。

「劣化での崩落にさえ気をつければ問題なく進めそうだ」

「了解した。行くか」

二人は遺跡の中に入った。

内装は最近になって噂になったとは信じられない程に神秘的で、子供が遊びの探検に赴くには本格的すぎる出来栄えであった。

「動物の気配が無かったのが気がかりだ。地中生物なら喜んで住みこむ筈だが…」

「封印は嘘だとしても、何かがあると思わせる雰囲気だけは強い。何

故彼らは今更になって探索依頼を出したのだろうか」

「国があるのなら情報の検閲もありえるが…ここはどちらかというところ田舎の方だしな」

覇空戦争後、空の世界は星の残滓を残すまいと奔走し、あらゆる空域での連携による大搜索が始まった。星晶獣が封印されているか、眠っているのか…もしくは星の民が残した遺物の可能性があった為、分かりやすい位置の遺跡が知られていない筈がないのだ。

歴史を重ねる過程で忘れ去られる物もあるが、街の近辺を忘れる方が難しいだろう。だからこそ彼等は違和感を抱いていた。

「霧で探った時に思ったんだが、ここは綺麗なんだ。手入れをされているという意味では無く、嚴重に作られた建物の感触があった」

「だが、浅いだろう。街の人々はあまり奥に進めなかったと言った」
「無駄骨で終わるならそれも良い。変なものが眠っていても困る」

蝙蝠も虫も土竜もない。茶色い土に囲まれた外壁も強固なもので、劣化を防ぐ何らかの技術が使われている様だ。

そして二人は足を止めた。

「行き止まりだな」

「大体こういう最奥部には壁画なり像なり見えるものだが…本当に何も無いな。だからこそ怪しい」

「罨は無いとしても、感覚では捉えられない仕掛けがあるのかもしれない。君の霧が属性元素を触れない様に」

「魔物が住みつかない理由にも秘密があるかもな」

すぐに帰ることも出来たのだが、こうまで露骨に無意味な遺跡があるものかと疑問を覚えたので、二人は少し残って探る事にした。

「通常、属性は罨にしか用いられない。火を扱う奴に向けた粉塵爆発、

水には水蒸気爆発。そういった現象を無理矢理引き起こさせるんだ。だから、機械的な仕掛けは星の民の物だと考えていい」

「属性に反応するぜんまい仕掛けの様なものは無いのか？」
「ない。だが属性では無く結界ならば融通が大きく広がる」

結界。それは魔力で作られた一種の空間。コーリスが扱う盾は魔力の凝縮体であり、それを仕切りとして使う事で擬似的な戦場を作り出す事が出来るが、結界は完璧な断絶を表す。

魔力で象られた故に破壊は可能、加えて空間の輪郭を構築し、それを手放して維持する事は難しい。犬神宮でバジユラとの一騎打ちの際、ヴァジユラと巫覡達が作った結界も高度なものであったが、結界に対し常に自身の魔力を流し込んで形を安定化させる必要があった。つまり遺跡に何らかの結界があり、人を遮っているのなら、その作成者は相当な曲者になるだろう。

「そして何より恐ろしいのは、作った人間の死後もその場に在り続ける結界」

「そんなものがあるのか？」

「その場にある物質に魔力を混ぜ合わせ、一つの物体として認められる様になれば自ずと自立する。俺は以前普通の結界を作ろうとした事があったが…無理だった」

四角形を想像するのは簡単だ。円も形だけなら可能かもしれない。しかし、中身に物質が入る事を前提とする結界は、地面の接地面に加えて表面の強度にも気を遣う必要がある。

短時間で作る事は彼には出来なかった。

「まあ…歩いていて問題がないのなら結界じゃな——」

——ポチ。

「…何か押した。左足で」

「仕掛けか」

「分からない。何も起きないが」

コーリスは足に感触があつた場所を凝視したが、何も見つからない。ボタンの様な感触だったし、空気を押ししてる感触でもあつた。同じくゾーイもその付近に手を触れてみる。

「これは魔法が網目の様に重なっている部分だ。恐らく封印術」

「…」

しかし、何も起きない。

「解けないのなら迂闊に触らない方がいいんじゃないか？危険な兵器とか星晶獣が眠っていても困る」

「安心してくれ。星の気配は感じない。もしも兵器が眠っているのなら私が改めて封印する」

無論それは解ければの話だ。触るだけでは封印が解除出来ないのなら、何かしらのきっかけが必要となる。

「一緒に触れてみたらどうだ？」

「複数人数か…やってみよう」

コーリスとゾーイは手を重ねてその部分に触れてみた。先程と同じ感触が伝わり――

「…！」

「紐どけた」

魔力の束が霧散した感触を感じた。

「これは…」

「これは…私達だから解けたのだろう。人数の問題では簡単に解除できてしまうからな」

目の前の壁が溶けるように消える。更に道が出来たのだ。

「霧を送り込む」

「頼んだ」

コーリスは目を瞑り奥の部屋に向けて霧を飛ばしたが、すぐにそれを止めた。

「どうした？」

「ただの狭い部屋…その中心に、子供が倒れている」

「何だと…？」

コーリスが読み取った情報は少ない。何故なら、この道の先には狭い部屋と倒れた子供しかないのだ。先に道も無く、仕掛けもない単純な部屋。

だが、封印されていた部屋の中に子供がいるとなれば話は別だ。間違いない普通の人間ではない。強大な力を持った大罪人や、暴走した魔法使いを封印しているのならまだ理解も出来る。しかし子供。星の民は不死身だが不老ではなく、大抵は大人。だがゾーイが星の気配を感知できない事からその線はそもそもない。

警戒と共にゾーイは剣の先に光を灯した。先の薄暗い部屋が鮮明に見える。

——倒れていたのは金髪の少女だった。髪は長く、服装は一般的な魔法使いの物ではなく、高貴さと、童話に出てくるようなメルヘンチックな様相を混ぜた物。

「起き上がる様子は見えない」

「だが衰弱している様にも見えないね。いや…あの少女自体が罠の可能性もある」

ゾーイの言葉が響いた瞬間、少女の指がピクリと動く。

「…動いた」

「デイ、リイ。落ち着くんだ。まだ敵と断定はできない」

翼竜達は本能からかブレスを叩きこもうとしたが、主の言葉には従うのみ。

だが、彼女の判断は適切では無かった。

「ッ!!」

——少女の真下の地面が脈立った瞬間、コーリスが全走力を以て駆け出す。

うねった地面が龍の形を取り始めた所で、その首に向けて彼は剣を振るった。

「なっ!?!」

だが、剣はその龍の首にめり込んでいる途中で静止し、敵の内部と同化しようとしていた。

コーリスは左手に盾を纏って岩の龍の頭部を殴り壊す事で密着から一先ず逃れることが出来た。

(剣は無事だが義手に負担をかけた…しかも少女が立っている)

そう、目の前の少女が指で地面を撫でた事が発端。更にその当事者

はいつの間にか目の前で佇んでいる。

「ほお？出来ない奴はそのまま、出来る奴は剣を捨てて下がるのが基本だったが…やるじゃねえの」

声は軽薄、瞳は万物を嘲り、容姿は可憐。

——そしてその表情、邪悪。

「悪いが面倒事があって生かして帰せねえ。封印解除の礼だ…楽に逝きたきや大人しく吞まれなア！」

少女が本を掲げる。背後からは赤の龍が顕現し、周囲の地形を泥波の様に塗り替えていった。

「魔導書か…」

コーリスは少女を土属性と仮定し、土や石などの形状を操る能力と考察した。だが問題は背後の龍。少女から発せられる物と同質の魔力を感じたのだ。

彼は剣を構え、明確に少女と相対した。

「と言ってもあつちの奴は少し危険だな…まあどの道」

「ッ、隔離だ!!」

「遅え」

少女が怪しく笑ったと同時にゾーイは背後に回ったが、周囲の土が粘土の様にかき混ぜられ、彼女は遠くにまで追いやられてしまった。

(まずい…流石にゾーイでも生き埋めは厳しいか)

無論ゾーイが強硬的に周囲を消し去る事は可能だが、少女はそれを
感じ取ったのか、只管遠くに飛ばす事に留めている。

だが彼女は寸前に2対の龍と杖をコーリスに差し向けていた。
デイとリイが吠え、コーリスは杖を左手に持って剣と構える。

「くくっ…なる程な。魔術のイロハはある訳だ。だが、勘違いしてる
んじゃないか？」

「…」

「お前が相対するオレ様は——摂理そのものだって事をなア!!」

——ある男は数千年前にある技術を生み出した。錬金術という、物
質を分解して再構築する魔法の一種。その利便性と拡張性、そして未
来性から派閥として一気に広まる事数十年。

男は不滅の肉体を作り、真理を追求していく。しかし、その天性の
横暴さと余りある才能が同士の反感を買い封印。

名を——

「冥土の土産に学べ！オレ様の名はカリオストロ！寝起きなんで少々
荒れさせなあ!!」

開祖カリオストロ、復活。

「デイ！ブレス頼む！」

「ルルル!!」

尾にリボンを付けたデイが睡眠の吐息を吐く。物理的な攻撃力を

含まないその煙は、吸い込んだ時点で意識を微睡ませる恐ろしい性質。防御の方法は無い。

「ああ…？」

カリオストロは自分の意識が途切れかけている事に気が付いた。瞼が閉じていく。しかし吸い込んだ時点で詰みである。

…筈だった。

「ん」

——コツン。

拳で弱く、頭を叩いた。それだけで彼女の意識が完全に覚醒した。

(やはり…人間の構造では無いか)

一応の想定外ではあったが、既にその隙を見てカリオストロに急接近したコーリス。腕を取り、魔力の壁で四肢を固定し無力化を狙う。そこで彼女が取った行動は、コーリスの左手に触れる事だった。

「…おっ？」

何故か驚いた表情を浮かべたカリオストロだが、すぐにそれは悪辣な笑みに変わった。

「これなら足りるな」

「——!!」

その瞬間、コーリスの義手が先程の地面の様に捻じれ、複数本の槍の様に尖って彼自身に襲いかかっていく。

(土以外も操れるのか…!?)

(こいつ…錬金術を知らねえなあ?)

土を操る能力という見当が外れたと同時に、カリオストロもコーリスの無知を理解した。

彼は串刺しになる前に義手との魔力連携を解除、間一髪で無理矢理取り外しその場から離れる。

背後からはリイが援護するが、その攻撃はカリオストロの近くに現れた赤龍が防ぐ。

「グルル…?」

「…問題ない。リイ、ありがとう」

義手はその機能を果たせなくなった為、実質左腕が破壊された事になる。その事実がコーリスの精神を怒りに染めた。誇り高き騎士の国に齎された物であり、紛れもなくかけがえのない道具。

そしてリイの心配は杞憂のものとなる。

「デイ、リイ。少し下がってくれ——」

(…気配が変わったな。それにしても機転が利く奴だ。土で飲むのも串刺しも避けやがった)

カリオストロは魔導書を構える。余裕の表情はあくまで外面的なもので、内心ではほんの少し焦っている。理由はゾーイ。遠くの地面に飛ばした彼女が此方に向かって猛進してきているのだ。

(あの女が帰ってくる前にケリつけるしかねえな。冷静に行くか)
しかし次のコーリスの言葉が、彼女の感情を刺激した。

「——壊す」

「——あ?」

「」で豆知識。

カリオストロに『壊す』は禁句である。何故なら、錬金術とは物質を分析・分解し、異なる物質に精錬する事であり——単なる破壊とは程遠い技術であるからだ。

そして彼女は自身の身体さえも理想の体現として構築した。つまり、彼女を壊すと表明する事は完全なる侮辱。加えて彼女が封印された理由にも破壊の能力が関係している。

「やってみろや…ガークィっ♡」

カリオストロの指に力が入った。背後の龍が唸り、周囲の地面は一層迷宮の様に複雑な変化を起しながらコーリスへと向かっていく。

「ウロボロスに飲まれるか大地に捻じり殺されるか…好きな方で逝きな!!」

(…なる程。ウロボロスという龍はあいつの能力で作った被造物。つまり感情は無い……無いよな?)

ならコーリスのやり方は出来ている。霧を全開にすれば良いのだ。

(感情があるなら無生物でも構わん。だがあの龍は自律で動いている様には見えない。つまりあの女を叩けばッ!!)

(霧だあ? 大体は水と風の複合属性…大穴で大気の温度を操作できる火属性つてとこだな。目晦ましなのにあ随分と小器用なもん作りやがる)

杖によって以前とは比べ物にならない速度で霧の段階が進んでいく。

カリオストロは自然現象の霧を魔法で作り出したと分析したが、コーリスの霧は正常では無い。霧の見た目を取っただけの感覚そのものである。

「っ?」

カリオストロの意識が一瞬途切れた。

しかし常に思考を巡らせている彼女は、逆に自分が呆けた事に対してだけ違和感を覚えた。通常ならば記憶の逸脱に混乱する所を、自身の思考状態にだけ疑問を覚える事で、常人よりも遥かに対応が早く復帰した。

だが、コーリスは既に懐に潜り込んだ。

「どうせ人間じゃないんだ。お前みたいな魔法使いの手合は——」

「てめえ——」

「力で殴るに限るツ!!」

狙うは腹部。左手を失った為に身体のバランスが覚束ないが、それは上腕部から盾を構成する事で違和感を解消。彼の鉄拳がカリオストロの身体に激突した。

「がは……!!!」

「……馬鹿な?」

確かにカリオストロは苦しみの声を上げた。しかしコーリスは剛力を用いて意識を断つべく全力で胴を突いた。本来ならば跳ね飛び、蹲る様に身を丸めて悶絶する筈だ。

そのくらい、拳の直撃は苦しいものだから。

だが彼が自らの拳に感じた感触は、硬い。

「つてええ……!!!」

「まさか……お前自身も鉱石か何かの塊か?」

初めて笑みが消え、カリオストロはコーリスを睨みつける。拳は直撃したものの、身体は依然として地面に立ち続け踏みとどまっている。

(どんな馬鹿力だこのガキ…そこらのなまくらじや折れるくらいには硬く作った筈だぞ。クソ…！…いつてえ…)

「リイ！凍らせてくれ！畳み掛ける!!」

「ば!?!氷は止めろっ!」

コーリスはカリオストロの身体を被造物であると考察したが、性質は人間の肉体に限りなく近い物だと判断し、リイによる氷結を試みた。

しかし洞察力はカリオストロの方が上手。

(読めてきたぞ…ガキは馬鹿力と防御、絶対に触れちゃいけない霧か。霧は吹き飛ばせばいいが…問題は龍だ。リボンの方が弱体の息、もう一体は属性の息か…!)

全てに置いて回避を要求される戦闘は彼女の不得意とする所。ならばと、彼女は敢えて単純に考えた。

(広範囲を一瞬で散らす!)

「ウロボロス!」

カリオストロは動きを止め、その瞬間ウロボロスの速度が上がった。彼女の手には空気中の4元素が集まっていく。

「これは…大技か。この狭さで何を…」

広範囲の魔法を使えば周囲の瓦礫に押し潰されるのは必然。だが、カリオストロは環境を自在に操る。回避も可能。その事を思い出したコーリスは杖に魔力を宿らせた。

「——フォルウン」

フォルウン。杖に一定以上の魔力を継続して纏わせ、放出・収束を最速で行える状態にする技。魔力を放出しながら振るえば物理と魔

法の二段攻撃が可能となる。

彼は蒼銀色に光る杖をウロボロスに向けて振るった。

「!!!」

その打撃はウロボロスの外殻を破壊し怯ませた。

「ちっ…」

カリオストロの溜めはあと数秒で完成する。だがデイとリイ、コーリスが既に周囲を取り囲んだ。戦いは終わる。

「…なんてな」

と、誰もが思っていた。笑ったのはカリオストロだ。

「誰でも分かる必殺技なんてオレ様がやると思うか？ガキ」

「なんだと…？」

「複数の属性元素を込めた奥義つてのはな…」

それは常人の頭では思いつかない運用方法。

「不安定に暴発させた方が危険なんだよ!!」

カリオストロは土の繭を作り自らの身を守る。コーリスは思わず舌打ちをした。

（やられた…魔力を敢えて寸前で断ち切る事でワザと奥義を失敗……！爆発か！）

暴発で死にはしない。だが、天井の崩落は流石に盾でどうこうなるものではない。一手先を行ったのはカリオストロだ。

——そこで光る青の星。

「待たせた!!」

「待ったぞ!」

ゾーイである。彼女は地面に揉まれ続けていたが、カリオストロの爆発する程の魔力を感じ取り、周囲に気を遣いながら駆け抜けてきたのだ。

「はあっ!」

ゾーイが天井に穴を開ける。頭上の崩落の心配は無くなった。

後は――

「衝撃に備えろ!!」

爆発から身を守るだけである。

「はあ…寸前だが間に合った」

爆発の範囲はこの場所を考えれば大きい方であったが、コーリスが予め盾で囲んだ為か、そこまでの影響は無かった。しかし生きているのはカリオストロも同じ事だ。

「何処にいる?」

「君の真下だ」

「なに?」

コーリスは下を見た。見覚えのある悪辣な少女が蹲っていた。

「自爆…？」

「ちげえよ…ガキが…」

カリオストロは胸を抑えて苦悶の表情を見せていた。それが何だか演技にも見えなくて、デイとリイも困惑しながらゾーイの肩に乗った。

（これは…くそ、二重封印だったか。オレ様が力を使えば遅効性でジワジワ削ってきやがる…！）

カリオストロに施されていた封印は二つ。単純な肉体の封印と、力を削ぐ封印。後者は彼女の錬金術に反応して肉体と魔力を削る恐ろしき術。

そこで、何を思ったのかコーリスが彼女の背中に触れる。

「敵かもしれないぞ」

「間違いなく敵だ。だが袋叩きにも出来る」

（クソガキが…何を……ぐっ?!）

コーリスが力を入れると、カリオストロの身体が跳ね、数秒後に彼女は自身の苦しみが消えた事を理解した。

「…ガキ、何をした」

「お前を苦しめてる術に魔力を流し込んで壊した」

「術式の魔力を溢れさせたのか…」

カリオストロは助けられたのだ。しかし、先程殺そうとした相手に温情を掛けられた事は、彼女のプライドを複雑に唸らせた。素直に礼は言えない。

歯を食いしばって青筋を浮かべた彼女はぎこちなく笑みを作った。

「こ、交換条件だ」

「なんだ」

「お前の力について説明してやるから…カリオストロを見逃して？」

カリオストロは猛烈に後悔した。ここまでしてやられた事は人生史上二度目だと、自分のペースが崩された事に怒りを抱いた。

だが、コーリスの反応は想像と異なるものだった。

「俺の力が分かるのか!？」

「うおっ!？」

「教えてくれ!」

「がつつくな! 説明と言っただろうが!」

コーリスはカリオストロの肩を掴んで詰め寄った。彼女が示唆した力の説明は霧のことであり、コーリスでさえ理解できないと言う事に気付いた理由は傲慢なものだった。

——”カリオストロが知らない事は、他の人間も知らない”。

そういう考えだったのだ。

「頼む!」

「分かったよ…クソ、逃げれなくなったじゃねえか」

同時に少しだけ今世に興味を持ったのも事実。数百年に及ぶ封印の影響は彼女にとって大きかった。

(オレ様の知らない力が他にもあるんなら…ちよつとは退屈しないで済むな。この女も星の奴等と似てるし)

警戒心を一方的に解かれたカリオストロは溜息を付いた後、彼等の方を向いて声色を変えた。

「じゃーあ…」

「…?」

「カリオストロをお…養って♡」

——2人目。

そしてゾーイはキレた。

51. トラブルメイカー

「……やっぱりな」

どうも、コーリスだ。昨日カリオストロという女の封印を解いてしまつて襲われた。錬金術という不思議な魔法を使うのだが、何とか撃退できた。彼女曰く、同業者に勘づかれるのが面倒で、自らの情報の漏れが無い様に俺達を殺そうとしたらしい。

それで、今は俺の霧の解明に勤しんでいる。生半可な時間では無理らしいので、騎空団として仲間に入る事を彼女から提案してきた。これについては俺も意外だった。

ゾーイは断固拒否の姿勢を崩さなかったが、寿命の制限が無いため、増やそうとしていた仲間に最適だったからか、俺の説得に頷いてくれた。

そして目の前の当事者は、俺の身体と変わり果てた義手を交互に見て溜息をついている。

「やけに細かく動く義手だったから良く出来ていると思つたが……使えねえな」

「俺が聞いた範疇だと、これは俺の魔力とリンクさせて循環させる事で擬似的な神経として稼働させる仕組みらしいぞ」

「その循環がどれほど無理難題か分かつてるだろ？人間少しでも魔力を使えば疲れるんだよ。例え戦いに無縁な奴でも、腕にソレを回し続けて過ごすなんて苦痛だ」

「一定量を流し切れれば常に回るのだから便利なものだと思つたんだが……」

「お前の魔力量がデタラメだからだ。常人なら半分は持つてかれるぞ」

ゾーイから放出の概念を教わったおかげで、この魔力量は非常に便

利な道具として機能している。ビームとして放つもよし、足から噴出して高速移動するもよし、格闘に使うもよし…とにかく幅が広い。本人からしてみれば空の民は属性に囚われすぎていているらしいのだが、星は違うのだろうか。

「で、幽霊ねえ…」

そして、カリオストロの戦い方には効率的な物を感じた。俺と同じ力を持っていたとしたら、もつと上手く使いこなすだろうと思う程に、洞察力・応用力が優れている。熟練した戦士の様な物だ。

「…カリオストロは封印される前、何をしていたんだ？」

「理想の身体のために色々やったさ。魂の移動、人体を再現しながらの硬度調整…可愛く見える角度の模索もな」

「可愛く…」

「だが、やはり錬金術師としては真理の追求が最優先だ。この世界の元素の成り立ちや生命の起源。誰だって気になるだろ？」

「錬金術師とは、研究者の様な存在なのか？」

「簡単に言うのは癪だがそんな所だな。これでも星の奴等に部下になれって勧誘されていたんだぜ？」

「星の民に…!？」

「ま、侵略活動真っ只中でオレ様に目を付けたのは褒めてやりたいが、”軍門に下れ”なんておこがましいっいたらありやしねえ」

「まさか…追い返したのか」

「まあな」

彼女にとつては自慢する事でもないのか、早々に会話を切らして茶を飲んでいる。

彼女は何だか悠々自適に過ごしているが、昨日の夜から俺は身体を弄られて調べられた。ゾーイが星由来だという事もバレた為、大人しく俺達は目的や来歴を全て話した。本人の反応は存外良かった物で、

トラモントの異変や十二神将については特に興味をそそられていた。
はつきり言って、我が恐ろしく強い人間だ。

「それで、義手の話だが……こんなのはどうだ？」

カリオストロは指を鳴らして霧を出した。

「これは外の空気を水と風の魔力で霧にしたもんだ。だがお前は霧そのものを簡単に出せるんだろ？」

「触覚にもなる」

「なら話は簡単だ。義手に触覚を付けてやるよ」

………？

「おバカさんのコーリスには分からなそうだから、カリオストロが説明してあげるねっ★」

「……………頼む」

あー……ムカつくモードに入った。

カリオストロは偶にぶりっ子みたいなキャラを演じる事がある。
恐らく口が悪い方が本来の性格だが、趣味なのだろうか。1000年
以上生きた女はこうなるのか？

彼女はウインクと共に指をわざとらしく傾けて話し出した。

「えっとお……前の義手さんみたいな仕組みがいいんだよね？」

「そうだ」

「じゃあ、少し脆くなるけど空洞化しちゃうおうよ」

「中身をスカスカに？」

「そう！そこに最低限の装置と導線を敷いて、霧を充満させちやえば
簡単っ★」

「おお……！」

確かに考えもしなかった。俺にとって霧は何よりも鋭い感覚器官。それを義手の内部全体に行き渡らせれば、外部からの振動で擬似的な触覚を獲得出来る。関節の曲がりでも霧が動く事で腕代わりにはなりそうだ。

だが：慣れるのに相当な時間が掛かりそうだし、本来の腕の感覚との解離性で気持ち悪そうだな。

「でも、一つ裏技があつてえ……」

「裏技？」

「うん。聞きたい？」

「聞きたい」

「カリオストロに：お願いして？」

「ツ……………お願い、します」

…なんか、俺って簡単な男なのかな。こうまでプライドが無いと哀しくなってくる。

言い訳だが、ゾーイはコスモスとしての知識を俯瞰的に得ているのに対し、カリオストロは長年に渡り蓄積されてきたもの。図書館の様なものだ。

数百年間封印されていたとしても、かつての空を永く生きてきた知恵者。そんな彼女の生き方を参考にしたいという気持ちが存在する。今や騎空団として活動する以上、空に対して上手く立回る必要があるし、無知では論外だ。

認めたくは無いが…カリオストロは俺達が求めている物を全て持っている。

それを理解しているのか、彼女は笑った気がした。

「腕を創るんだよ」

「…カリオストロの身体と同じ様にか」

「だが超本格的な医療はオレ様の専門外だ。仕組みは分かるが移植な

んてもんは簡単には出来ねえ。オレ様は1から身体を創ってそこに魂を入れたが、お前の場合腕を身体と錬金術で同化させる必要がある」

「……いや、さっきの義手で頼む」

「まあ、それでいい。生体錬成に関してはオレ様も自分の身体しか信頼できねえ」

答えを知っていたかの様に聞き流して、カリオストロは机に向かってしまった。この二人部屋が次々と占領されていく。ゾーイの沸点は近い。

「ま、明日の朝にはマシンな生活をさせてやるよ。義手の亡骸は再利用させてもらうがいいな？」

「ああ。ありがとう」

「感謝しろよ？オレ様がタダで動く事なんて無いんだから。じゃ、次はゾーイだ」

カリオストロの研究はまだまだ続く。

どうやら夜通し机に向かうつもりらしい。探究においては非常に真摯だから心配は無いが、俺達への興味を失ったらどうするんだろう。

取り敢えず明日から3人部屋を取っておくか。宿代が増えるが…今日は寝る。

——翌日。

「…ん」

今日はいつもとは違う感触と匂いで目が覚めた。

横を見ると、俺の頬を突きながらニヤニヤと笑うカリオストロがいた。

「おはようさん。美少女に起こされる気分はどうだ？最高だろ」

「人によってはな…」

「なんだよ、男色か？」

「びつくりするって事だ」

「じゃ、次からは安心して喜びな」

カリオストロは何かを取り出した。

それは完成した義手だった。以前より細く、薄く、軽く作られた物だが、彼女が機能性を無視するとは思えない。

「お前らが古戦場とやらで貰った属性石を使った。オレ様が暴れてた時代と同じ組成だったから驚いたぞ」

「属性石を…？」

属性石。基本四元素、レア物の光と滅多に見ない闇の6種類がある。それ等を使う事で武器に属性の力を付与したり、その属性の力を一気に増幅させられるアイテムだ。

そして、石自体に精霊が宿ったり魔力が過剰に込められると、エレメンタルという魔物になってしまう。

だが、俺には基本属性が無い。使い道は無かったのだが…。

「軽量化の為に元の義手は7割しか使ってないが、属性石を合間にねじ込む事で層として機能させた。以前よりも属性攻撃に対する硬度は上がってる筈だ」

「物理面は…」

「大人しくお前の盾を使うしかないな。さて、付けてみる」
「…」

ベッドから降りて義手を受け取り、肘を入れる。

……完璧な入れ心地だった。

「凄いな」

「霧を入れてからがお楽しみだ」

「うん」

肘の先から霧を出す感覚で……あれ。

——左腕がある。

「あ、これ……腕だ」

「代替的な神経の役割を果たす導線。魔力で伝達を補っているのなら、その線に同じく霧を充満させれば良い」

温度もなく、痛み・痒みもない。だが、確かに存在する五指の輪郭。紛れもない左腕そのもの。あの空戦で失った感覚が、少し歪な形で戻ってきた。

「……ありがとう、カリオストロ」

「これで封印の借りは返した」

カリオストロは無言で右手を差し出してきた。

「改めてよろしく頼むぜ？ 祈望の騎空団さん」

「此方こそ」

この瞬間、彼女は明確に俺達の仲間になったのだと理解した。

早朝の散歩から帰ってきたゾーイを迎え、俺達は早速騎空団として会議を始めた。

「まずオレ様が聞いた話だと…未来に現れるであろう幽世とやらに対抗する為にお前らは旅をしている。幽世に対抗する手段は諦めない事、それが無理ならそもそも知らない事」

「幽世に勘付いた者は見つければ消されてしまう。当然それは分かる。だが、諦める事が何故駄目なのかが分からないんだ。私が持つコスモスの知識は空の世界だけだから…」

「現時点では空に現れていないのも事実。だからそれまでに空の世界を平和にしておく必要があると考えた」

「ふーん…で、お前個人の意思は？」

「幽世が実在するなら止めるしかない。俺自身は迷う人間を助けたいだけだ」

実際、人を助ける事が平和に繋がる…単純な事だ。戦争をしている国ではその様な理論は通らないが、少なくとも魔物に苦しんでいる街を救えば騎空団としての名前も広まる。

名が広まればもっと多くの人間を救うチャンスが訪れる筈だ。

「現時点で私はコーリスの動きに従っている。主な活動は探索と討伐。封印されていた君を見つけたのも依頼によるものだ」

「なら団長はコーリスだ。意思と目的を共有するならゾーイが副団長。これでいいな？」

「…意外だな。君は仕切りたがると思った」

「オレ様は好きに研究出来る環境さえあれば構わねえ。ああ、一応金をどう使うかも教えてくれ」

出費………ほぼ飯代かな。ゾーイの。

「歳出の7割は食事代。残りの2割は宿、1割は服だ」

「……………食ってんの誰だ」

「ゾーイ」

「…コーリス。何故、そんな顔をする。カリオストロも」

「お前さ、娯楽だけの食事にそう金を使うべきじゃないぜ？控えろよ」
「!？」

「その分で回復薬とか作るから。余ったら研究の材料を買ってもいいか？」

「どんな研究だ？」

「肉体の補強、元素還元による解明…あとはウロボロスの修復とかだな。まあ、お前等の利になる結果にはしてやるよ」

「構わない」

「なっ!？」

ゾーイの食事が少なくなるが今までが食い過ぎだな。心を鬼にして食費を削減する。

「オレ様は基本的にお前らと一緒に行動するが、金の管理は任せて欲しい」

「いきなり財布を握らせるのは…」

「だってお前ら飯を抜きにしたら何に使うんだよ。商売つ気もねえし…貯まるだけじゃ野盗に絡まれて面倒だぜ？」
「…」

だからと言ってカリオストロに任せると研究施設とか欲しがりそうだし…信用以前に見ている世界が違い過ぎるのではないかと思う。

「あとはな——」

カリオストロが続けて何かを言おうとした時——

「えっ」

「な」

「はあ?」

…部屋が爆発した。

「げほ…」

へ、部屋が吹っ飛んだ。

火薬の匂いはしないので魔法攻撃だろうか。しかも俺達の部屋だけをピンポイントで狙撃している。恨みを買った記憶はないが…。

いや待て。カリオストロは同業者である錬金術師に封印されていたんだっただな? 力を行使すれば身体を削る封印術も重ねて使われていた。その術は彼女の魔力に反応するわけだ。

…じゃあ、カリオストロの封印が解けた事も当然知られているし、追跡もするだろう。それにしても態々部屋ごと消し飛ばすとは恐れ入る。

「ってそんな場合じゃない!」

カリオストロを回収して早急に街から出なければ、不味い状態になる。不味い状態にする様な相手な気がする。

丁度近くで仰向けに倒れていた彼女を抱えて走る。目指す先は出来る限り森林だ。魔物のいない場所なら既に探索で知っている。

「おい! 何処行きやがる!」

「街の破壊や人質を取られる前に! 敵に認識される前に俺達から先に逃げるんだ!」

「待て！ やつとエリクシールハーフの量産体制が…!!」
「たった一日で経済を壊すつもりか!？」

貴重品として知られる薬を一晩で分析・量産していた事にゾツとするが、兎に角走らなければ。幸いポート・ブリーズの街はそう大きくはない。

「ッ！」

目の前から焦げた匂い、そして機械的な音を感じた瞬間に抜剣。 2
回の衝撃が刃越しに伝わった。

「銃か」

「飛び道具だあ？ 奴等は錬金術以外見下してる質タチだぞ」

「いや、これは多分傭兵…？」

「はあ…何が何でもオレ様を消したいらしいな」

「カリオストロは昔何をしたんだ…？」

「えへ、わかんない」

悪辣なトラブルメイカーめ…！

「自分で走れるな!？」

「運んでくれないのー？ まあ、冗談はこれくらいにして…ウロボロス！ 食っちまいな！」

カリオストロの背中からいつぞやの赤龍が出現する。しかし何だか身体がひび割れている様で、動きが随分と鈍くなった様に感じる。

「やはり本調子には遠いが…雑魚には充分だ！」

「何かあったのか？」

「テメエが壊したんだろうが!？」

そうだった！

「仕方ない……！無茶するぞ！」

「ああ？ぐむ——！」

カリオストロをもう一度抱えて盾を大量展開。側面や斜めに配置し、ピンボールの様な立体的な動きで空中を駆け巡る。

横を見るとゾーイが飛んできていた。

「何だか私達は襲われているみたいだ」

「ゾーイ！街の被害は大丈夫か!？」

「宿を襲った魔法使い達は倒しておいた。剣や銃を装備している者達は私達を追ってきている」

「なら森へ誘導して待ち伏せする」

カリオストロを仲間に取り入れた事は、何らかの派閥を敵に回す事だと、俺は心から思い知った。それも当然だ。彼女は教科書に乗るような偉人なのだから。

「もっと丁寧に運べ！髪が乱れちゃうだろうが!!」

…偉人？

52. 才の品格

カリオストロを抱えて空を走るコーリスとゾーイ。やがて街を抜け、比較的魔物が少ない森へ駆け込んだ。

大木に身を隠しながら一息つく。

「はあ…はあ…」

「無事に辿り着けたね。武器は私が回収している」

「っ…刀！刀は!?!」

「無論」

「よかったあ…」

「やけに大事に…ああ、そういうことか」

カリオストロの言葉には答えず、コーリスは剣と刀を装備し、右手に杖を持った。寝間着なのでいつもより軽装だが、現時点で最重装甲である。

「目当てはカリオストロの様だから、俺とゾーイが牽制にビームを撃つ。裏や側面に回る奴等は霧の中で俺が倒す」

「そんな暗殺者みたいな動き出来るのか？」

「寧ろ——得意分野だ」

コーリスが霧を出す。極めて低位置に充満した薄い霧は、相手の靴に触れ、正確な位置を割り出す。

「狙う組織に心当たりは？」

「どうせオレ様を封印した奴等だ。」ヘルメス錬金術学会。オレ様を作った錬金術の為の組織だよ」

「…部下に封印されたのか!?!」

「…なんだよ。オレ様が駄目上司だって言いたいのか」

バツが悪そうに彼女は口を尖らせた。

「品格……あいつ等が欲しいのはそれだけだよ。さ、ボコボコにしてやろうぜ」

「…」

カリオストロはこの状況を想定していたかのように振る舞っているが、ほんの少しの悲しみを覚えている様に見えた。少なくとも、コーリスにはそう見えたのだ。だが、それは実質の部下に襲われている事に対してではなく、もつと本質的な何かかもしれない。

彼とゾーイは得物を構えた。

「なるべく真面目に撃とう。適当にやったら誘い込みがバレて面倒だ」

「了解した。では早速…」

ゾーイの剣に光が灯り、光線が放出された。それはガンマ・レイの様に巨大な一つの物でなく、細かな光線が拡散上に広がるもの。殺傷力と貫通力は数段落ちるが、横の広がりと独特なうねりが特徴である——彼女の制圧技。

「アサルト・レイ」

感知したコーリスの示す方向に向けて放った数多の光線は、傭兵達の手足を焼き、武器を砕き、それでいて一片の死傷者も出さずに大半を制圧した。

「もう私一人でいいんじゃないかな」

「まずい。ゾーイが慢心を覚えた」

「緊張感持てよオマエラー」

会話をしながら弾幕の展開。真面目に撃つとは何だったのだろうか。結局のところゾーイが器用すぎるせいで、敵陣営の制圧は簡単に終わる。彼女が本気を出せば、彼女自身にデイとリイが加わる3重弾幕が始まる。更に奥の手もあるので、本当に手が付けられない存在に変わるのだ。

カリオストロもある種の理不尽であり、錬金術師による物質操作は一般的な属性魔法の用途と大きく離れる。

確かに、土属性の使い手が地面に魔力を流し操作する光景は錬金術師と似ているが、彼女の場合は金属や木々の形も変えるのに加え、違う物質に錬金してしまうので、恐ろしく汎用性が高い。

そしてコーリスは。

「裏の16人を倒してくる」

いつも通り、霧による初見殺し。濃霧を局所的に設置し、敵にあえて警戒させる。

(剣 剣銃杖 槍 槍ナイフ 杖 杖銃 1)
—— 剣5、槍3、杖2、銃5、ナイフ

武器と位置の把握、そこから導き出せる各々の役割。牽制の小剣に遠距離の銃、火力の杖で相手の動きを封じ、その隙間に剣で追い詰める槍で止め。そういう構成だ。

コーリスは起点となる飛び道具持ちを優先した。

「っ…」

(1)

「…おい、大丈夫——」

(2)

「敵だっ！霧を晴ら——」

(3、4…これで5)

銃持ちの顎を打ち抜き気絶させる。濃霧の中で急接近された傭兵達は、コーリスの姿を薄っすらと視認できても反応出来ず、霧を晴らすという解決策を思いつくにしても遅すぎた。

(杖は火と風か…傭兵らしい)

「ごっ!？」

「が？」

魔力によって霧を晴らさんと杖を構えた者達の眼前に移動し、念入りに力を込めた殴打。

『槍は振り回してもらって同士討ちも望める。次はナイフだ』

一番弱いのが、かと言って無視しても邪魔になるだけの小剣持ちを気絶させ、情報源として捕縛。

既に半数を制圧された傭兵達は、遠距離支援を行う味方が無力化された事に気がついていない。

「――解除」

そんな中、霧が一瞬にして消えた。無論コーリスがやったのだが。

「――あっ」

「ガンマライトオ…」

円陣を組むようにして警戒していた傭兵達。だが、既にコーリスは円陣の中心部に頭上から侵入していた。

「エクスキューション!!」

横風の魔力放出は残りの傭兵達を平等に吹き飛ばし、木々や大地による厚い抱擁を受け気絶した。

「傭兵しかいなかった…あっち側が錬金術師の本隊だな」

早々に仕事を終えたコーリスはカリオストロ達の戦場に戻った。

「終わった。捕虜も捕まえた」

「おかえり」

「早えな。出来る奴は好きだぜ」

「そっちはどうだ？」

「逃げてはいないが、立ち向かってきてもいない。此方も撃ち続けている。だが…」

ゾーイが指を指した方向には、白い旗が大きく揺れていた。

「あの旗はどういう意味を込めて振られているのだろうか？」

「……………!?!」

「大規模な術の用意だろうか。それとも他の部隊がいて、合図を送っているのか？」

「ぞ、ゾーイ…」

コーリスはその旗の意味を知っている。そして、ゾーイがどれ程恐ろしい事をやっているのかも理解し、思わず敵へ同情の念を抱いてしまった。

「カリオストロ！止めなかったのか!?!」

「あーオレ様の時代には無かったからなー」

「白旗は空において戦争という概念が生まれた時に作られたものだぞ！嘘をつくな！」

「チツ、半端に学のあるガキはすぐひけらかしやがる。あーそうだよ。う・そ」

「こんの……！」

「大体さー、カリオスト口思うんだよね」

焦るコーリスに対し、カリオスト口は可憐で最も恐ろしく笑いかけ、自らの拳を固く握った。

「封印解けて、人が清々しい気分きぶんで研究しててね？いきなりお部屋を爆発させたり、研究成果を全損させてくる様な悪い人達にー」

「……お、おい」

「慈悲なんて必要ねえんだよ！オラツ——アルス・マグナ!!!」

アルス・マグナ。それは以前コーリスと対峙した際、わざと暴発させて不安定に解き放った彼女の奥義。ウロボロスのエネルギーと、4属性の元素を錬金術によって一つの形に束ね、黄土色の雷いかずちを生み出す技であり、その衝撃は大気が割れたと錯覚するほどである。

「錬金術が攻撃に使えねえとでも?!いつまでも金属捏ねてばっかじゃ開祖様に追いつけねえぞ!!」

「ぎゃあああああ!!?!」

跋扈する悲鳴。裏回りしてきた傭兵達とは違い、正面に居るのは学会の人間たち。彼女を封印した者達の遠い弟子に当たる筈なのだが、コーリスやゾーイが想定していたよりも格段に弱かった。

だが、まずはカリオスト口を止める必要がある。

「そこまで。死ぬぞ」

「こういう奴はしぶといんだよ。生き汚いったらありやしねえ」

「一人くらい意識があればいいんだが…」

「それなら問題ない。ウロボロスが確保してきた」

ウロボロスが口を開けると一人の錬金術師が吐き出された。リーダー格の男で、コーリスの部屋を吹き飛ばす様命令し、傭兵をけしかけた張本人。

「カリオストロを狙った目的は？」

「え、え？」

「目的は？」

「そんなもの…言う必要が——ギツ!!」

コーリスは男の足を全力で踏みつけた。

「次は砕く」

「あ、貴方のような剣にしか脳がない人間に、錬金術を解かろう筈があああああ——!!?」

「次、膝」

尋問の経験はあまり無いが、遊撃隊時代に教わった技術であった為、順序に問題は無い。元より命を狙う相手には容赦をしないのが彼のやり方だ。同じくゾーイも理不尽な敵対者には慈悲を持たない。

錬金術師の男に味方はいない。

「か、開祖の再封印で、す…」

「何故そこまでして…」

錬金術の開祖が生き続けているのならば、新たな弟子などを作って派閥を広げたり、現代の人間が到達できない古代の技術を盗もうと思わずなのだが、街を襲撃してまで封印を望む理由が分からない。

「開祖は、我々錬金術師の品格を貶める存在なのです…彼がいては錬金術が下劣な物に見えてしまう！」

「——は？」

品格。

（品格…：本当にそれだけなのか？地形を操作し、現代の技術を一瞬で解析して使いこなすカリオストロを…：それだけで封印するのか？こんな簡単な理由で…：…：…）

コーリスは思う。もし自分が悪で、カリオストロを利用しようと画策したとしても、彼女に付け入り技術をしゃぶり尽くす様動くだろうと。

また、出来るとは思えないが、彼女を唆して裏から操り人形にするといった行動も考えられる。

それが、彼の思う敵の思考だった。

だが、目の前の男が言うには、錬金術師が自分達を高尚なものだとした上で、そのプライドを保つ為に開祖を封印するという動機だ。

「カリオストロの技術に既に追いついている、という事か…？」

「そんな筈無いでしょう!？」

男は狂った様に叫び始めた。

「我々は彼の研究の一端すらも理解していない！生体錬成？魂!？そんなものを何故理解しろと!？錬金術はみすぼらしい小石を黄金に変える高貴な術だ！彼のように好き勝手に振りかざしてこの世の理を変えていいはずがないのです!!」

「おい…？」

「そうだ！錬金術は猿に知られることすら憚られる!!開祖！貴方がしているのは錬金術ではなくただ自分の命をこねくり回した奇術にす

ぎない！そうでなければ我々誇り高きヘルメス学会が貴方に追いつけない筈が無い！はは、はははは——！」

コーリスは悟った。彼が以前所属していた遊撃隊と同じく——組織の腐敗が起きているのだ、と。

そして、プライドの高さと同時に、カリオストロの技術を理解出来ないコンプレックスを組織単位で含んでいる。その醜悪な狂気に気圧された。

——だが、背後で憤怒の表情を浮かべている開祖を見て、彼は冷静さを取り戻した。

「街を破壊したのは事実。牢屋行きだ」

「黙れ！猿——」

「これ以上喋るとカリオストロがお前を殺す」

男を気絶させ、一応捕獲した傭兵に聞く事も特に無いので、ポート・ブリーズの掟に従って裁いてもらうよう街へ連行した。

「宿の修繕費は傭兵達から取るそうだ。学会に関わると危険そうだし」

「なら……」

「ああ。ポート・ブリーズを出なければならぬ。カリオストロを狙い続ける可能性がある」

学会の人間と傭兵達を牢屋に入れ終わった彼等は、これからの動向を話し合っていた。

「カリオストロは？」

「苛つきながら外を見ているよ」

ゾーイの視線の先には椅子に座っているカリオストロ。貧乏ゆすりをしながら時々舌打ちをして草原を見つめている。

自警団から帰ってきたコーリスを見ると、此方に歩いてきた。

「悪いが、オレ様と旅をするって事はこういう事だ。……それでも続ける気か？」

「構わない。ゾーイは？」

「構わない」

「少しくらい構ったほうがいいと思うんだがなあ……」

ため息を付いた彼女は少しだけ笑みを浮かべた。

「学会というのは昔からあの様な形なのか？私はとても君が設立した組織には思えない。腕はともかく、意識までも別物だ」

「数百数千年経てばああもなる……と言いたいが、そうだな。昔はマシンだったぜ」

ゾーイの問いかけに彼女は答えた。

「錬金術を開発した当初は周りも信じなくてな、目の前でスプーンを純金に変えてやってもペテン師だと言って信じねえ。まあその分優秀な弟子は多かったよ。見極めが出来ていた」

「ある程度の人間の数が増えると認知が広まり……より一般的な人間がその技術に触れようとす。だから今はこうなったのか」

「そうだ。少し有名になった途端にアホが増えた。錬金術の有り難みを知った奴等は私腹を肥やそうと俺に懇願してきたよ。だがそんな奴等は真理どころか一端にすら近づけねえ。自在に操るオレ様が憎かったんだろう」

「だが、錬金術どころか通常の戦闘でもカリオストロには勝てない」

「オレ様が苦手とするのは破壊と分解だ。だが大火力を放つ人間はそうでもないし、分解するには錬金と同じく物質を分析する能力が必要だ。まあ、最終的には分解の術式で弱らされて封印されたんだがな…」

ありや人生唯一の大失敗だったな」と、自嘲するように呟いた。

「少しでも錬金術を修めた結果、変なプライドを持ち始めてな。いつしか選ばれた人間にしか扱えない物だと騒ぎ始めて…品位を求めた」
「それが今回の動機か。錬金術の独占」

「つまらなくて狭い奴等だよ全く。世界の成り立ちを解明しようなんてちつとも思ってたねえ」

コーリスが相槌を打っている最中に、ゾーイは考え込む様に顎に手を当てていた。

「カリオストロ。少し気になったんだが、先程の男は君の事を”彼”と呼んでいた」

「ああ。そうだな」

「君が生体と魂に錬金術を用い、それを理解出来ないと取り乱していたりもしていたな」

カリオストロはにつこりと口を閉じたままコーリスを見つめる。

それに対し彼の表情は絶対零度。

「長い年月を生きているのにも合点がいった。君はその身体を作って魂を入れたんだね。つまり元々は男か」

「正解」

「発想が狂人のソレだ」

絶句したのはコーリス。感心したのはゾーイ。

「ちなみに何故女の身体に？それも少女の」

「何でって…考えてもみろよ。次の人生、生まれ変わるとしたら恵まれた容姿が欲しいだろ？少しだけでも得して生まれたいだろ？チャホヤされたいって思った事あるよな？」

「…」

「承認欲求だけじゃねえ。こっちだって色々可能性を探ってるんだよ。どんな服を着てどんな喋り方がいいかってな」

「まさか…」

「生きやすさも華やかさも完璧だぜ？カワイイ女の子ってのはなあ…

！サイコーってやつだ」

「狂人を軽く超えた…誰もカリオストロを止められない」

衝撃のカミングアウトを乗り越えたところで、話を戻そうとする。魂だの生体錬成だの聞きたい話は彼等にもあったが、話されたところで理解出来ないと察した。

「他の島に行くのは決定事項だが。俺の中で一つ決めたことがある」「なんだ？」

「宿を取るのには追われる立場として良くない。だから」

カリオストロの目が光る。彼が唯一不満に思っていた現状が解消されるのだ。

「騎空艇を入手する」

「やったぜ！そりゃそうだよなあ！金払い続けるのも不憫だよな！」

大いに喜ぶ開祖。彼が欲していたのは研究の環境だが、宿を転々とするにつれて部屋に道具を移動させなければならぬし、そもそもスペースが限られている。

そこで、騎空艇の個室を研究室として作ってしまえば、移動式のマイホームが完成するのだ。便利度は格段に上がる。

しかし、素朴にして根本的な原因がある。

「操縦者はどうするんだ？」

彼等の旅を思えば、永い時を共にする関係上寿命が存在しない人物を仲間になりたい。この空においてその様な生物は星晶獣だけなので、操縦士を探すのは手間だ。

「ノアさんに聞いてみよう。次に行く島はガロンゾだ」

船造りの星晶獣、ノア。ガロンゾにて気まぐれに姿を現す青年。彼等の次の旅が決まった。

そして、このガロンゾの旅が……コーリスに一つの爆弾を落とすきっかけになった。

53. 副次的脳破壊

ガロンゾにて、3人の男女がもみ合っていた。
背の鞆に手を掛け、血走った瞳を走らせる男。

その男の手を止める銀髪の女。

男の後ろから全力で羽交い締めをする少女。

そして、少し離れた所から見つめる青髪の少女もいる。

「んがああああああ!!!」

「落ち着くんだコーリス! こうやって空は命を育む事で生きてきたんだ!」

「赦^{ゆる}さん………こ、殺す……!!」

「それお前は言っちゃ駄目だろ!? 兄貴分なら妹分の幸せを喜ぶもんだ!」

「兄から姉ポジションに鞍替えしたお前に何が分かる!? 妹の困惑が目に見えるぞ!」

「急に正論言うんじゃねえクソガキ!!」

「えへへ……」

「フィラちゃんも何笑ってんだ!?!」

「だって……コーリスさんが私の事をここまで想ってくれてるんだなって……. そう思うと嬉しくなっちゃって」

「コーリスとフィラの間には素晴らしい信頼関係があるんだな。これは良いものだ」

「何でもいいけどガロンゾ滅ぶくらいには覚悟しとけよお前等!?!」

—— 混乱の理由は数十分前に遡る……。

コーリスとカリオストロはガロンゾ島行きの騎空艇にて駄弁つていた。

「ポート・ブリーズの人達、良い人ばかりだったな」

「学会の馬鹿共がいなきや、あそこに家を建てて拠点にするのも悪くないと思っただぜ。騎空艇の通りも良いしな」

「ちなみに今から行くガロンゾは騎空艇そのものを造ってる島だ。交通面も最大規模だし、約束は遵守されるから過ごしやすい島なんだ」

「そしてコーリスの幼馴染も住んでいる」

「うお…びつくりした」

後ろからゾーイがひよこつと顔を出した。

「私も会うのは初めてだ」

「特別会う予定はないが…ノアさんを探している間に会えるかもな」

「どんな子なんだ？カワイイのか？」

「言ってもいない性別を絞るな…」

「幼馴染といえば異性だろ〜？」

ニヤニヤとフィラの詮索をする美少女開祖（男だが）。その仕草は子供に恋を実感させ（男なのに）、大人には危険な感情を覚えさせる程に愛くるしく（男の癖に）、例え本性を露わにしても拭いきれない美しさに人々は魅了される（だが男だ）。

「元気な子だよ。でもうるさいわけじゃない。気遣いも出来るし、人の為に頑張れる人間だ」

「あーアレだ。同年代の男を勘違いさせるやつ。」アイツ、俺の事好きなんじゃないか？”って10人くらいに思われてるやつ。そういうタイプだろ」

「勘違いする猶予も与えん。邪な男どもは俺が排除する」

「はは、過激な冗談言うじゃ——いや、その顔冗談じゃねえな？うわあ…」

「一人っ子タイプのカリオストロさんには分からないだろうな」

「オレ様は一人っ子じゃねえ。てかお前失礼だろ」

やれやれ、と髪を整えながらカリオストロは語り始めた。

「オレ様にも妹がいた。同じく錬金術の才能を持っていてな、色々世話かけたよ」

「…まあ、兄が急に女になったら驚くしな」

「そういう事じゃねえし何なら身体造り手伝ってもらったわ！ホントお前さあ、ホント…！」

嫌味なのか天然なのか分かりにくいコーリスの性質に苛つく少女。何故か苦労人の気質が見えるが、また一段と賑やかになったのだとゾーイは感じた。

「そういえば財布の件だが…お前に任せることにした」

「ん、いいのか？」

「盗っ人精神の欠片も無さそうだし、俺達よりも合理的だろうから寧ろ任せたい」

「じゃあ任せな。何ならオレ様が直々に稼いで騎空艇買ってやろうか？」

「本当にやれそうだから怖い」

「へへへ…」

長く楽しい付き合いになりそうだと、ゾーイは心の中で笑みを浮かべた後に声をかけた。

着陸の準備だ。

「直に到着するよ」

「現代の工業島…オレ様としちゃあ楽しみだな」

——ガロンゾ、ナウタ地区。

騎空艇の整備を目的とした施設に溢れた島の中で、数少ない緑が残っている場所、それがナウタ地区だ。

「ノアさんは真つ白な髪に薄めのローブが特徴の浮世離れた青年だ。大体は外を見渡せる場所か静かな場所にいるんだが…」

「いないね」

「呼んでみるか。ノアさん！いますかー!?!」

（大声で呼んでも静かな人間なら尚更来ねえだろ…。こういう空気の読めなさがクソガキなんだよ…）

しかしカリオストロの心配は杞憂に終わる。

「——呼んだかい?」

「来るのかよ!?!」

ツッコミ役としての立場が確立しつつある哀しき者。発想の面で飛び抜けてるだけであって、彼は常識を充分に持っている。

「久しぶりだねコーリス。5ヶ月ぶりくらいかな?」

「そのくらいです。ノアさん、聞きたいことがあって来ました」

ノア。物腰柔らかな白髪の美青年。ガロンゾにて騎空艇を見つめている姿が度々目撃されている。

そしてゾーイによって明らかとなったのは、彼が星晶獣だという事。

「騎空艇を購入しようと決めました」

「——そうか。用途は？」

一瞬、この場に重圧が乗せられた感触をゾーイとカリオストロは覚ええた。

「移動、そして家代わりに」

「なら、大きいのにしないかね」

そして、その圧は消えた。

「ゾーイ…あの男に何か地雷でもあるのか？」

「分からない。騎空艇を入手することには関係しないようだ」

二人の心配をそのままにコーリスとノアは会話を続ける。

「ちよつと面倒な奴等に追われてて…長い時間同じ場所にいると迷惑なのでいつその事船を拠点に」

「なる程。その場合専属の操舵士が必要だけど…目星はあるのかい？」

「それが無くて…あの、俺が寿命の制限が無いに等しいって話しましたよね」

「したね」

「旅の目的もちよこつと話したの思うんですけど、寿命が無い人を仲間にしたいです」

「どうして？」

「……」

幽世の話はノアにはしていない。それは、迂闊に情報を広めたくない事と、彼がまだノアを人間だと思っていたからだ。更に言えば、ノア自身も星晶獣だと気づかれていないと感じている。

だから、最低限を^{ほの}仄めかして説明する。

「単刀直入に言います。後ろの仲間…銀髪の方がゾーイというんですけど、星晶獣です。世界の危機に反応するタイプの」

「本当？」

「本当です。もう一人はカリオストロっていう、一応不死身の男です」

「……………もしかして、僕をからかってる？」

「男です」

ノアは表情に出さないが少し引いた。女装趣味だと思ったのだ。

”あークソガキ殺すかなー”という呟きが聞こえた。

「ゾーイが言う、世界の危機に対抗する為に世界を回って少しずつ平和にしていこうっていうのが大雑把な旅の目標で、そうになると寿命を何らかの形で克服した人間が仲間として望ましいんです」

「長い旅になるから、か…」

「そこでお願ひしたいんですが」

コーリスは頭を下げた。

「ノアさん。艇の操舵士になってくれませんか」

「コーリス、僕は…」

”艇造り”の星晶獣、なんですよね」

「――」

ノアは初めて明確に驚いた表情を見せた。怒りも悲しみもなく、ただ疑問だけをコーリスに向けた。

「ゾーイが知識として知っていたようです」

「…そうか。なら、自己紹介だね。僕は星晶獣ノア。艇と艇の製造に
関する知識を全て保有している。確かに契約している相手はいない
し、僕を頼る人間も現代にはいない」

「…ならば」

「でも、君の旅に同行できる程の戦力にはなれない。君の夢は魅力的
で、今の空ではかけがえの無いものだと思う。だからこそ、危険で臆
気な理想でもある。君達は承知の上だろうけど、僕は並べるほど強い
生き物じゃないんだ」

「……」

「良い艇を紹介するよ。操舵士をちゃんと目的を説明すれば自ずと見
つかる筈。だから…」

「…?」

ノアは彼に微笑みかけた。

「見つかるまで最低一年間。僕が君達を導こう」

「ノアさん…その、どうして?」

「君達なら世界に何かしらの影響を残せるかもしれない。漠然と僕が
思っただけなんだけどね」

「じゃあ一年は一緒に…!」

「うん。いいよ」

「やった!カリオストロ!やったぞ!!」

喜ぶコーリスに対し、遠くにいたカリオストロが驚く。

「マジか!あの雰囲気で作られたのか!でかした!!」

わーいわーいと喜ぶ二人に、ノアも自然と笑みが溢れる。彼は知識面で艇に特化しており、魔法の様に艇を生成する事は出来ない。彼が齎したのは、空の民が効率的に艇を製造し移動する為の知識と環境。故に、操縦自体に問題は無い。

「でも、どうしても操舵士が見つからないのなら、君達の誰かが操縦技術を学んで動かした方が早いんじゃないのかな」

「あ：俺工学系は全然駄目で」

「私は手先が器用な方ではない」

「オレ様は実験で忙しい」

「うーん：ゾーイに任せた方が良さそうだね」

「!?」

どうしようもない3人の中で何故かとぼちちりを受けるゾーイ。食費を減らされ、部屋を圧迫され、遂には操縦免許の取得も命令される。

今年の調停者は厄年らしい。

「コーリスは不器用なんだ。彼が12歳の時、幼馴染が持っている引き出しを直そうとしていたんだけど、ネジ締めがどうしても出来なくてね、偶々外にいた僕を呼んだんだ。それが初めての出会いだよ」

「ぶぶ、だっせーの」

「うるさい」

ガロンゾにて、病気が完治していなかったフィラの面倒を見に行っていたコーリス。ほんの些細な出来事がきっかけでノアと出会い、今に至るのだ。

「そうだ、折角だからフィラに会いに行っておいで」

「良いんですか?」

「艇の選別には時間が必要だからね。お金の管理は誰がやってるのかな？」

「オレ様だ。分割払いを許してくれるんなら利子付きでも構わねえ。後から幾らでも増やせるからな」

「なら、明確に契約する事をおすすめるよ。この島は少し特別でね、約束は絶対破れないんだ」

コーリスはノアの心遣いに礼を言い、早速フィラのいる場所へ向かうと歩いた――

――と思ったら、あっちから来た。

「えへへ…やっぱり、そんな気がしたんだ」

コーリスの目の前には青髪の少女。先ほど話題に上がっていた当事者。小動物を思わせるエルーンの耳に、姉とは違う短い髪があどけない印象を見せる。

――フィラ。

「あっちの人達はコーリスさんの仲間？変わった見た目の人達とか…子供もいるよね」

「問題ない。ああ見えて最年長の男だ」

「…少しビックリしたけど、私に嘘つかないもんね」

そう言ってフィラは苦笑した。家族に会えなくなって久しく、コーリスだけを同じ苦しみを知る人間として気にかけていた。騎士として日々邁進している彼の足を引っ張らない様に、出来るだけ体調に気

を配りながら生きていたのだ。

しかし、空戦で左腕を失って帰ってきた時に：彼女の意思は決壊した。もう、戦ってほしくない。

——島の特性を利用して、二度と戦わない約束すら結ぼうとしていたのだ。

「騎空士の仕事は大丈夫？」

「…何か変な組織に狙われてる」

「…無理しちゃ嫌だよ？」

「大丈夫、俺が死ににくい事は知ってるだろ？そういう立ち回りだけは得意だからな」

この二人は気質として明るいものを持っているが、対面すると汐らしい空間を形成する。いつもそうだ。フィラが心配して、コーリスが大丈夫と答える。

彼女は思った。この会話は、彼が死ぬまで同じなんだろうと。

「…：…なんか、オレ様が思ってたよりも静かだな」

「そうだな。憂いが見える」

いつの間にか姿を消し、物陰から二人を見つめるカリオストロとゾーイ。ノアが艇を確認しに行ってる間、暇を潰す物も無いので、彼等を見守る事以外ないのだ。

「しっかし来た事も伝えてねえのに会いに来るとは：幼馴染力が強い子だな」

「幼馴染力？」

「ああ。共に育ってきただけで相手の意向を言葉なしに察し、支え、或いは共生する。どんなにカワイイ見た目を作っても、これだけは人間関係に依存するからな：オレ様も完璧じゃねえ」

「私は君の事を聞いている訳ではないのだが」

「……………要するに、”いいな”って思える関係だよ」

あと、カリオストロの舌打ちが止まらない。

暫く沈黙の時間が流れた後、フィラは何か決心したかの様に言葉を紡いだ。

「あのね、コーリスさん」

「ん？」

それは爆撃に近いナニカ。

「——私、結婚する事になったの」

「——ほへ？」

最初に反応したのはカリオストロ。それはあくまで感心というリアクションであり、フィラの様な静かな人間がきちんと相手を作っている事に驚きもした。

次に、ゾーイ。ただ驚いた。

そして——

「スウ——」

一呼吸置いたコーリスは先程のフィラと同じ様に決心し、背中の柄に手をかけた。

「ストおおおおおッパ!!!!!!」

意外にも一番早く動いたのはカリオストロだった。野太い叫び声を放ちながらコーリスにしがみつく。

「よしよしよし。落ち着けコーリス。お前はクソガキじゃねえ良い子だ。だからその無駄に重い剣を一度置いてな？オレ様との約束だゾ？」

「……………」

(やばいコイツ目がガチだ…対象をブチ殺そうと脳が勝手に命じてやる…!?)

彼はゾーイに援軍を要請した。呆けていたゾーイはアホ毛をピンと立てながらコーリスの手を掴む。

「何をする気だコーリス！」

「これはテストだ」

「てすと…？」

感情を失った平坦な声。それに反し眼は極限まで開き切っている。

「合意の上であれば俺が態々口出しする必要は無い。フィラの幸せを俺は喜ぼう。フィラが選んだ男だ…きちんとした人間である事に疑いの余地は無し」

「言動と行動が一致していないぞ…？」

鋼鉄のように動かない彼の四肢は、カルムの身体能力を極限まで引き出した結果である。

「ただ…その男がフィラを守り通せるかまでは分からない」

「だからってカチコミに行く程の事じゃねえだろ！」

「最低でも…俺を倒せるくらいの人間でなければな」

悲しい事に、コーリスの脳内は冷静であったが、頬を赤らめて下を向いたフィラを目視した瞬間、彼の感情が弾けた。

「んがああああああ!!!」

「落ち着くんだコーリス! こうやって空は命を育む事で生きてきたん

だ！」

「赦さん……こ、殺す……!!」

「それお前は言っちゃ駄目だろ!? 兄貴分なら妹分の幸せを喜ぶもんだ！」

「兄から姉ポジションに鞍替えしたお前に何が分かる!? 妹の困惑が目に見えるぞー！」

「急に正論言うんじゃないやねえクソガキ!!」

「えへへ……」

「フィラちゃんも何笑ってたんだ!?!」

「だって……コーリスさんが私の事をここまで想ってくれてるんだなって……。そう思うと嬉しくなっちゃって」

「コーリスとフィラの間には素晴らしい信頼関係があるんだな。これは良いものだ」

「何でもいいけどガロンゾ滅ぶくらいには覚悟しとけよお前等!?!」

醜い揉み合いも最終に近く、カリオストロが地面をコーリスの足に固定し、ゾーイが鞆のベルトを外した事で事なきを——得なかった。

次に彼は腰の刀に手を添えた。

「おいおいおい両断する気まんまんじゃねえか! てかその刀の初使用それでいいのかお前!?!」

「この刀の持ち主は愛に生きた人間だった……ならば、今の俺の行動に応えてくれる筈……!!」

「やめろコーリス! バジュラちゃんだっけ……その子が泣くぞー!」

「いや……彼女なら喜びそうだな」

既に抜刀したコーリスが刀を掲げる。

「成すべきに応えよ! 雅巡犬牙!!」

すると、その刀は黄金色に光り輝き、彼の魔力と融合して恐ろしいエネルギーを内包した。

「なんでホントに応えてんだよオオオオオオ!!?」

カリオストロ、数千年分の叫びを今日一日に浪費する。

この騒ぎは、本気のゾーイがコーリスを無力化した事で終幕を迎えた。

フィラだけは満足して帰っていった。

——1時間後。

「実を言うと、フィラに相手がいる気はしてた」

「死にてえかクソガキ。後付設定にも限界あんだよ」

「でも、フィラに会いに来ることやノアさんに会うことはあっても、ガロンゾに親しいかと聞かれればそうじゃないから分からなかった」

コーリスは反省していない。過保護と言われれば言い返せないが、フィラの純情に踏み入る人間を少しでも確認しておきたい気持ちは常にあったのだ。

フィラ自身の話によれば、病気を治す際に援助してくれた家の一人息子であり、穏やかで誠実な少年なのだという。ついでに言えば、とても金持ちの家だ。

その事を聞いた瞬間にコーリスは刀を収めた。寧ろ、彼女の病気が治る要因を知らなかった自分を恥じたのだ。

フィラとしては、コーリスに気負わせたくない気持ちもあったのだろう。

「皆、艇が見つかった……何かあったのかい？」

そこで艇を探しに行っていたノアが戻ってきた。

「オレ様は疲れた。それで、どんな艇なんだ？」

「う、うん。凶面を貰ってきたから……これ」

ノアが持ってきた凶面を確認する3人。

「フロンティア号」ね……なんというか、白い鯨みたいだな」

「カー・オンに似ている」

「なんだそれ？」

「空域を泳ぐ神出鬼没の生物だ。星晶獣なのか長寿の生命体なのか定かではないが……幸福の印として知られている」

「へえ。ノア、それがモチーフか？」

「僕個人の解釈だとそうかな。願掛けに近いものだと思うけど……実際に構想を練った人がどう考えたのかは分からない」

「そうか。というかこの艇……大砲も何も付いてないんだな」

「お金がかかるからね。空戦用の艇は大規模な団じゃないと運用が難しい」

フロンティア号という艇は、全体的に丸々としたシルエットで、上部は鯨のような生物を象ったデザインが特徴だ。強度が強く速度も早い。だが、武装していないので戦闘には全く向いていない。移動や冒険に重宝する艇である。

「あまり人気のない艇だけど、僕は君達に合っていると思ったんだ」

「値段は……」

「200万ルピ」

「に、にひゃっ」

「分割払いの契約を結べば問題ないと思うよ」

結局、コーリスは月に10万ものルピ払う事を条件に艇を購入した。

ただ、金欠の懸念は杞憂のものとなる。何故なら、部屋を手に入れて舞い上がったカリオストロが一瞬にして経済を荒らす事になるからだ。

そして、手に入れた艇を見てノアが提案する。

「試運転といこうか。乗りたい人はいるかい？」

「乗ります」

「乗ろう」

「乗る」

「全員だね。安全に行くよ」

念の為全員が操舵室に乗り込んで景色を見つめる。

「ふふ、人を乗せるなんて何百年ぶりだろうね。それこそ空に技術を教え始めた頃以来かな」

「おいおい、運転方法忘れんなよ？」

「そんなミスはしないよ。艇も風を浴びれて嬉しそうだ」

舵を切ったノア。数秒して巨大な艇が唸りを上げて島から離れ始める。その際の音が鯨の鳴き声に似ている、と彼等は珍しくロマンチックな感情を覚えた。

「揺れない…」

「移動に特化した艇だからね」

「ちよつと遅いな。これが限界か？」

「……飛ばしてみるかい？」

ノアはニコリと笑って手に力を入れた。
開祖、後悔。

「の、ノアさっ」

「安心して」

「言ったのはカリオストロだから…」

「安全にスピードを上げるから、さ」

数秒後、コーリスとカリオストロは風圧の恐ろしさを嫌と言うほど感じる事となった。

余談だが、ゾーイはちやっかり楽しんだ。

54. この世界で、広く矮小な空

「ノルマ達成つと…騎空士は売り手市場だな」

至る所に骸。倒れ伏す魔物に座ったオレは眩いた。

「終わったー?」

「終わった」

オレの呼びかけに答えたのはコーリス。歩いてくるあいつの後ろには巨大な魔物が数十匹倒れていた。

オレ達は魔物に苦戦する島を訪れては救助、または依頼の形で討伐を引き受け、着々と名前を広めようとしているんだ。

「ウロボロスの頑丈さがようやく分かった。フォルウンを使ったら、あの硬そうな亀型の魔物が一瞬で砕けた」

剣を用いて巨大生物を相手にする場合、一撃の重さが重要だが、あいつは自身の持つ特殊な杖によって火力が十分に保証されている。殴打用の杖だからな。

だからこそ、ヒビで済んだウロボロスの硬度に改めて驚いたらしい。いい迷惑だぜ。

「当たり前前だ。オレ様による自慢の傑作。銃どころか大砲も何発かは受けきれるんだぜ」

胸を張るが悲しいな。

結局、オレが一人でどうこうするよりも…コーリスが霧で敵の全てを把握し、その情報を元にオレが敵の足場を崩し、ゾーイで追撃するという戦法を思い付いてしまった為、未だ無敗で旅を進めている。

星晶獣すらも無傷で数匹討伐している。これは、ノアを仲間に引き入れて、3ヶ月が経過した頃の事だ。

「ポート・ブリーズでの活動が大きかったな。オレ様達の名前も案外忘れられなくなってる頃合いだろうさ」

「そうだと嬉しいな……あ」

無防備なオレ達に、地中に潜んでいた龍が襲い掛かる。しかし、コーリスの防御力は既に空でも有数なものになっていた。

「よく止めた。あと任せろ」

「了解」

甚大な質量攻撃はコーリスの盾に受け止められ、卓越した身体能力により、龍は後方でピタリと動きが止まった。

後はオレが粉微塵に吹き飛ばすだけ。

「半端に知恵がある魔物はやりやすくいいいな。奇襲する脳はあるのに噛みつきしかしてこねえ」

「暴れる星晶獣もそんな感じだったな」

コーリスの課題であった重さを伴う物理攻撃の防ぎ方は、結局の所身体を使いながら守るか、離れた場所に盾を展開してやり過ごすくらいの対策しか出来なかった。

しかし、以前に比べ身体能力を万全に使いこなす事が可能となつている為か、破壊力を兼ね備えた戦士として成長したらしい。ま、ゴリラだな。

「しつかし最近二人で依頼やる事が増えたよな」

「ゾーイはディとリイで何でも出来るからな。俺達と分かれる方が分担のバランスが良いんだろう」

「ま、オレ様とお前の相性も抜群だしな。全く出来るやつだぜお前は」
「……………」

チラチラと横目でコーリスを見る。調子に乗れよガキンチヨ。懐を緩めちまえ。

「やけに褒めるな…実験部屋を広くして欲しいのか？」

…はあ。

「いやっ？カリオストロはあく…純粋にコーリスの事を褒めてるんだよっ♡いつも頑張つてて偉いね！団長さん☆」

「ありがとう。部屋は広くしません」

「チツ、可愛くねえ奴だ」

美少女が褒めてやってんだから大人しく貢げよ。

「ふいー…」

ひと仕事終えたオレ達は、ノアの出迎えを享受して自室に戻った。ノアは基本的に戦わない。艇で戦闘員の帰りを待っている。

だが、戦えない訳じゃない。貴重な光属性による光弾という攻撃手段がある。ま、戦闘向きでないことは確かだが、自衛としては充分だ。

「研究者なのに毎度人使いが荒い」

防音が行き届いた部屋で愚痴を漏らす。オレは広めの部屋を貰って研究室として使っているが、実験室としては使えない。その為、部屋をねだる為に少しずつこの団での株を高めてるんだが…コーリスが許してくれねえ。いや違うな…ノアが嫌がってるのか。部屋だけを無理矢理大きくしたらバランスが悪くなるからな…めんどくせえ。

「ウロボロス、寝てていぞ」

「■■■■」

ウロボロスの肉体を小さく収納し、オレは椅子に座る。

調べているのは——コーリスの霧についてだ。

「構成物質としては霧と異なる。未知の物質や既存の組み合わせではなく…漠然とモヤが出来上がっている、か。気持ち悪いな」

…ガキの頃に考えた事がある。

”人間は火や水を出せるのに、何故自然にも同じ物が存在しているんだろう” ってな。だが逆だった。生命の前には必ず世界があり、その場所に元素があったただけだ。オレ達はその元素の影響を受けただけの生命体。

じゃあ霧元素があるのかって？ねえよ。

コーリスの魔力自体は属性が無いエネルギーみたいなもんだ。他者の活力にもなるし、直進する純粋な推進力にも使える器用貧乏なや

つだ。ただ、あいつの魔力量がその貧乏さを万能に押し上げているのも事実。その魔力量も霧の吸収能力——今は奪う能力によつて空気から蓄えたモンだ。

ちなみにコーリスの内側にはナニカがいるらしい。恐らくそれがアイツの身体を介して能力を顕現させているはずだが：根本的に能力の起源がわからん。そういうもので説明出来るほどの世界は雑じゃねえからな。

ゾーイはその力がどこから来たのか見当がつかない様だが、となると星の力でもない訳だ。

「分かんねえ」

情報と証拠がねえんじやどうしようもねえ！

無からの推察は当てずっぽうどころか妄想だ。そんな無限の可能性からコーリスの霧を解明する事なんざ無理だね。天才美少女といえど、オレ様の錬金術だって数式を基盤として作り出したものだ。

ただ、これだけは言える。コーリスの力の解明には、霧よりも根源的な吸収能力に焦点を当てる方が正しい。

「：」

頭のリセットがてら外の空気でも吸いながらアイツに会いに行く。興味自体は尽きないのが困りものだな。こればかりはオレの氣質か。

「心当たり？」

「そうだ。何回も聞いて悪いが、その力の元からアプローチを受けたりしてないか？」

「：ない。ただ、霧じゃなくて多分元の力そのものを使った事が一回だけある」

「前に聞いた犬神宮の事か？」

「そうだ。あの時は視界から色が消えたというか：灰色になって、地

上の元素達…特に飽和している物を見極める事が出来た」

「他には？」

「吸収した元素をある程度の塊にしてから放出した。こねる過程で形を操る事もできる。俺が分かったのはこれくらいだ」

「空の元素とも密接に関わっているのか…いや、助かった」

外で訓練しているコーリスに直接聞いてみたが、やはり分からねえ。仕方ないからこいつの動きを少しだけ見てみる。

「…刀？」

「剣とは違うから、練習だ」

「ほお」

刀、ねえ。犬神宮で出会った美少女、バジユラちゃんの形見だとか。本気どころか力を呼び起こしたコーリスに勝ったんだから、さぞかしバケモノだったんだろうな。勿体無い。

「剣舞を思い出すな」

「剣舞？」

「ああ。酒場とか城のパーティで美人のねーちゃんが剣持って踊るんだよ。今はもう無いのか？」

「聞いたことないな…」

…しかし動きが変わるもんだな。剣を使ってる時のコーリスは騎士道って言えばいいのか？そんな感じの動きと、相手の隙を効率的に突く動きが合わさった感じだが、刀は違う。まるで踊り…いや、祈祷か？バジユラちゃんは巫女だったらしいから、その子に少しだけ教わった剣術の影響かもしれない。

オレは剣士でも槍使いでも無いから身体さばきについては分からないが、刀を使う人間は関節の動きが柔かい気がする。攻撃もそうだが、剣は屈服させる為に見えるが、刀は殺す為に見える。

個人的に一番堪えたのはアイツの腹パンだけだな。オレのボディは柔軟性を保ちながら敵の拳を粉碎する硬度はある。あの馬鹿力は

一族の影響らしい。盛りすぎだろ。前世からどれだけの業を抱え込んだのか…。

…そうだ。折角だからこいつにも考察を伝えておくか。

「そうそう。ゾーイは吸収の力を『概念として独立する前例のない力』とか言ってたが、基本に戻ると気づくことがあった」

「基本？」

「ああ。身近な火や水は全て元素として”そういうもの”だろ？そういう概念としての形はお前の吸収と同じだ」

「…確かに」

「受け入れがたいかもしれないが…引き寄せる概念とか、引き剥がす概念だつてあったのかもしれない。元素として扱うなら空、空気、重力、鉦…なんでもありだ。ある意味、そんな解釈がお前の力を引き出すきっかけになるかもしれないぜ」

「そうか…あと、気になったんだが」

「んー？」

「6元素の根源を調べた事はないのか？ほら、大地は何処から生まれただとか、火は何で出来ているのだとか」

「火は酸素が炭素や水素と反応して高温を出しているから発生する。これがガキンチョレベルの説明だが…その熱はどういった仕組みでこの世界に存在しているのか。お前が聞きたいのはこういう事だな？」

「そうだ」

元素の研究は困難なものだ。科学的な観点と概念的な哲学がごっちゃになって頭を混乱させるからな。オレも科学と概念で2つにぶった切らないとキリがない。

『水は何で出来ているんですか？』

——水素と酸素で出来てる。

『水素と酸素とは何ですか？』

——無色無臭のガスみたいなものだ。

『それ等は何処から来ましたか』

——植物とかが頑張ってたんだろ。知らん。

『水素と酸素は水の元素として空の起源に関わってると思いますか？』

——んーまあ、そうじゃね？水は自然にあるもんだし。

『生命は水から生まれたのか、水があつたから生命が存続しているのか、どっちですか？』

——両方じゃね？確認ねえけど。

『…水ってなんですか？』

——くたばれ。

…と、まあ。こんな感じの議論はオレが生まれる前から行われてきた事だ。いつその事魔法がなければ分かりやすいんだがね。科学で火を起こせると思つたら今度は魔法で突然木を焼けるって訳だ。馬鹿馬鹿しいだろ。

「まあ、よく聞けコーリス」

「…」

「受け身のまま生まれたオレ様達人間はな、根拠が無きや何にも事実だと決められねえ訳だ。だから”そうだと思ふ”なんて考え方で根源なんて求められねえ。そういう物だと受け止めて、分かりそうな事をコツコツ解明していくのが常道だ」

「そうなのか」

「子供を作る仕組みは分かつて、じゃあ最初の人間はどうやって生まれたんだよってなるだろ？そうなると星晶獣みたいに、違う生き物が作り出したもんじゃなかつたって憶測しかないんだ」

「…あー」

分かつてくれたか。

無から何かを生み出すと言われる天才はな、ソイツの経験に基づいて生み出された物だ。だからあらゆる物に似なくとも、経験の集合体が取つたという体になる。

音が全くない世界では音楽という概念は絶対に生み出せない。少なくとも——人間には、な。

ただ、自分以外に生命体がない世界ならば、生き物という発想は生まれるかもしれない。何故なら生きている自分という事実があるからだ。

恐らくはその——ただ一つのモノを、オレ達は神と呼んでいるのかもしれない。

「オレ様達がいる空は小さいぜ、コーリス」

目の前の小僧は、オレの言葉に大きく目を開いた。

「カリオストロー！飯！」

「今日の当番誰だー？」

「ゾーイー！」

エリクシールハーフどころかエリクシールを量産してやろうと机に向かっていた所で、いつも通りコーリスの夕飯アラートが廊下から聞こえてきた。

この騎空団は当番制で飯を作る。オレ以外は週に2回作る。金策の貢献によってオレは少しだけ楽をしているのだ。

：しかしゾーイか。アイツの飯量多いんだよなあ。ノアは素朴すぎるし、コーリスくらいが丁度いい。

「はいはい、今行く今行く」

四人での食事は新鮮だ。何せオレはガキの頃はほぼ妹と二人で生きていたし、妹の死後はほぼ一人だ。なんなら飯食ってなかったしな。

居間に行くとき既にコーリスとノアが着席していて、ゾーイが盛り付けをしている最中だった。

バカみてえな量が山状に乗っかっている。

「ゾーイ、オレ様少なめで」

「僕もお願いするよ」

「俺も」

「つまり日持ちしない残り物は私が食べていいという事だな？」

…こいつ自分が沢山食べる為にこの量作つてないよな？コーリス曰くゾーイは純粋な天然そのものだったが、最近は段々と欲や自尊心に対して正直になったらしいからな。

「なんかよー、有名になったら学会の奴ら来なくなったな」

「公然で俺達を襲うと悪事がバレて組織ごと解体されるだろうしな」

「届いた依頼も凄い量だよ。僕が見た限り火急の物はなさそうだけど…一っただけ気になるものがあつてね」

「どんなものですか？」

飯前だつてのに落ち着かねえな。

「えーと…『街の防衛の為、堅牢な盾と称される祈望の騎空団殿の力を貸していただきたく、この度依頼をお送りしました。』って書いてありますね。何が気になったんですか？」

「…差出人の名前さ」

「ん…これは……………ええっ!？」

コーリスがリアクションを取った。なんだなんだ。

「これからご飯だというのに。なんの騒ぎだ」

「なんかノアとコーリスが驚いてる」

「だって…依頼人の名前が——」

…なんだってんだ？

「——アテナって」

だからなんだよ。

——5章、完。

——小話：ヘカテー奮闘記

「はあ…はあ…あの少年…絶対、許さない…わよ」

許せない。私が餌場に背を向けて敗走するなんて。

そう…古戦場で遭遇した二人の戦士——その片割れのせいで腹を殴られ、焼かれる醜態を晒す事になった。

「でも…ふふ。馬鹿な子。ちよつと目を離しただけで私は自由に人の夢に入る事が出来る」

餌場を失ったのは痛いけど、私は依然として舞える。ただ戒めの為に明日から日記をつけておこう。そうすればすでに訪れた島を避ける事が出来る。自ずと彼らとの遭遇率も下がる筈。

——刮目しなさい。これが冥妃による本当の悪夢よ。

【1日目】

遠めの島に訪れたらあの少年がいた。遠目から発見したので気づ

かれること無く逃げる事が出来た。屈辱。その後、その島では何故か地面が崩れていたらしい。遺跡がある場所だとか。

【2日目】

2つ隣の島に滞在しようと思っ——（日記はここで途切れている）

【3日目】

……酷い目にあつた。褐色の少女の方を忘れていた。ちゃんと私を感知して追ってきていた。殺されかけた。二日目にして何故こんな目に合わなければならぬのか。全部あの少年のせいよ。

【4日目】

少年がポート・ブリーズにいる事が分かった。絶対行かない。

【5日目】

何て健やかな日々だろう。誰にも邪魔されることなく若人の心を汚す事ができる喜び。これこそがヘカテーよ。もう誰も私を止める事は出来ない。

∴

∴

【46日目】

そういえば仲間が増えていたらしい。まあ、私には関係のない事だけど？

【47日目】

依頼を沢山受けているらしい。奴隷根性という奴かしら？無様ね。

【48日目】

ねえ、なんで私のいる島にピンポイントで来るの？

【49日目】

書きたくない。あの少女が——あ

【50日目】

セーラーフツツ!! バレなかったわ!!

∴

∴

∴

【71日目】

冷静に考えると他の空域に逃げればいいのではないかと考えた。
瘴流域を抜けるのは面倒だが、私の快樂の為には妥協できない。

∴

∴

【73日目】

遂に空域を跨いだ!!! 逃げれた!! ここから薔薇色人生ね♡

∴

∴

∴

【1082日目】

まって なんてあいつが

【1083日目】

取り乱した。3年程ぶりに感じた少年の魔力。私の目は誤魔化せない。黒い鎧を来ていてもその力は当時のソレと同じだ。
逃げよう…。

【1084日目】

少年の目も誤魔化せなかった。もうむり
明日には追いつかれる

【1085日目】

案外正面から一対一で戦えば勝てるのではないかと思った。
思っただけ。やらないわよ。

【1086日目】

いや、やってみる事にする。何百年も生きているこのヘカテーがた
かが空の子供に負けるはずがない。
こうなればヤケだ。

【1087日目】

バケモノ。あんなのに勝てるわけがない。

：

：

：

【1198日目】

決めた。絶対に姿を見せない。少年が死ぬまで雲隠れしてやる。
騎空団は存続しても個人は存続しないのよ。

：

：

：

：

【36508日目】

なんでまだいるの

6章 守護と破壊のモノマキア

55. αμυρτεικη? πρηνη (防衛街)

「壁に囲まれた街：いや、壁と言うには薄いかな。魔物の侵入を防ぐには充分だが」

「……」

「どうしたコーリス。ソワソワして」

「いやだって：アテナだぞ?」

「その名前に何の意味がある」

” 守護と平和” を司る星晶獣の名前なんだ……

とある島に付いたコーリスとカリオストロは、防衛の依頼を出した街を発見し驚いた。

その街の外郭は壁の様に反りたっており、二人は依頼分に書いてあった通り、その街が防衛の為の形を取っている事を理解した。

「リュミエールの図書館には覇空戦争終結時に書かれた記録が少しだけ残っているが、その中の星晶獣図鑑ではアテナの名前があった」

「強いのか?」

「曰く、”アテナは騎士と戦士の両面を持つ星晶獣であり、その盾による防壁は全ての攻撃を無効化し、相手に降伏を訴える。その勧告を無視し抗った相手は、無情にも炎の槍によって貫かれるだろう。”」

”平和” って敵を殺す事で得られる平穩の事かよ。それに防御と火属性の使い手か。いや：忠告に反発した敵に対して火を使えるようになる感じの概念系能力の線もあるな。それで、お前はそいつの事をどう思ってるんだ?」

「星晶獣である以上、人間を数多く殺した可能性は高い。でも、文献でのアテナは明確に人を助けた記述があったんだ」

「：騎士としての防衛本能、戦士としての殲滅本能。二重人格の線は?」

「……あり得る。最終的には空に寝返った様だが」

コーリスが自身の魔力量を活かして盾を作る戦法を思い付いたのは、アテナについての文献を軽く読んだことがきっかけである。この事は身近な人間であつても知らない事だつた。

「ゾーイを連れてくるべきだつたか？」

「いや、長く街に滞在する可能性が高い以上、素早く空を移動できるゾーイには頑張つてもらうしかない」

ゾーイは届いた大量の依頼を処理する為に奔走している。ノアがいなくても空を自由に行き来できる彼女だからこそその別行動であり、案は本人のものだ。

そして、ノアは戦争時のアテナの活躍だけは知っていた。その為、もしもの事があつた場合にコーリスとカリオストロが逃げ込み、すぐに島から脱出出来るよう艇に留まつている。

「研究は暫く打ち止めだが、大丈夫か？」

「ああ、構わないぜ。もしアテナが本物の星晶獣で、尚かつ話を通じるタイプなら貴重なデータになる。それだけでもここに来た価値があるつてもんだ」

「そうか。ありがとう」

正面に小さな門があり、そこが唯一の出入り口になっている様だが、一切中身が見えずに閉まつていた。定期的に侵攻してくる魔物達の影響か、住民達は外に出ないのかもしれないと推測した。だから自給が可能な土地ごと囲んだ街にしたのだろう。

そして数歩踏み込んだ時——コーリスの嗅覚が親しい匂いを嗅ぎとつた。

「…血の匂い」

「おいおいおい…」

「獣臭さもある…十中八九魔物だろう」

臭いの元は彼等から見て右方向。

「人影も見える。遠くにある花畑から臭うぞ」

「つて事は街を守る為に魔物を倒してる奴だな。一旦会つてみよう」

二人はその花畑に向かつて進み始めた。段々と見えてくる光景に

は、小型かつ大量の魔物の死骸と、その中心で大型の騎槍ランスを持って立ちつくす女性が写っていた。

(…槍！)

槍。そしてドレスと鎧を混ぜ合わせた様な白い装いに、乾鮭色サーモンピンクの髪を持つている女性。

コーリスは彼女がアテナでは無いかと推測し、ほんの少しの警戒を示した。

「…旅の方ですか？この島は魔物が多く危険です。特に子供は魔物を凶暴化させるので早めに街に入る事をおすすめしますが……」

透き通った声と上品な所作は、花が似合う淑女という印象を彼らに与えた。

そして話の内容から此方に敵意が無い事が分かり、二人は姿勢を通常時に戻した。

「俺達はあの街の『アテナ』という人物から防衛の依頼を受けた騎空団です」

「ああ、アテナが言っていた…！貴方達の事だったのでですね。失礼しました。私はエニユオ。街を守る為に魔物と戦っていたのですよ」

エニユオ。アテナでは無かったのだ。

「街へ案内します」

「…その、エニユオさん」

「なんででしょう？忘れ物ですか？」

「いや…死骸を放置すると魔物が寄ってくるのでは……というか返り血が凄いです」

むせ返る程の血の匂いは死骸どころかエニユオからも発せられており、花畑に美女が血塗れで立っているという恐ろしい光景が広がっている。

思わずカリオスト口は鼻を塞いだ。

「あら…まあ。これは失礼を——そして」

エニユオはコーリスの目の前に立ち笑顔——の様な物を見せた。エメラルド色の瞳が彼を萎縮させる。

口を開くと——

「私が本当にあの街を守っているとお思いですか？」

「ふふ、冗談です。驚きましたか？」

「おい、質悪いぞ姉ちゃん。さつきと案内して早く身体を洗いやがれ」
「そうですね。面倒ですし、新調しましょうか」

コーリス達が疑問を呈する前にエニユオは自身の胸に触れると、たちまち身体から血が消え、鎧は再生成された。

「これで大丈夫ですね？」

「どういった魔法…いや、憶えがある感じだ」

「コーリス、今のは星の力による身体の保存と再生成だ。てことはお前……」

「隠す気はなかったのですが鋭いですね。私は星晶獣エニユオ。司る物は——」

意味有りげにエニユオが笑みを深めた瞬間——

「エニユオ！」

凜とした声が響いた。

街の方向から歩いてきたその姿は、紅い鎧にエニユオよりも小柄な槍を持った金髪の女性。肩には梟が乗っている。そして最もな特徴は、大盾。

「アテナですか。どうしてここに？」

「一人で街を出ない様言った筈です。貴女が一人で殲滅してしまったら街の防衛力が育たない」

「良いではないですか。小柄で数だけ多い魔物は素早く、弓で討ち取るのは困難。さして驚異にもなりませんから、面倒事の始末と思えば……」

「いえ、群れを成す魔物にこそ万全たる対応が必要」

二人の女による小さな口論が始まり、コーリス達は呆気に取られる。

「何か始まったぞ。この女がアテナか」

「恐らく。如何にも火を使いそうな色の鎧だしな」

「話を通じるどころかそこらの人間より責任力がありそうだ。安心したぜ」

やがて口論が終息し、アテナが二人の方へ頭を下げて礼を示す。

「遠方から御足労頂き感謝します、騎空士殿。私はアテナ。あの街に防衛の戦術を教えている途中なのですが……」

アテナはエニユオを横目で見ながら語った。

「戦術なら可能にしても、人間が行える最善の防護を教えるには至らず、防衛戦に特化した貴方達に協力を依頼しました。……何分、私達は星晶獣なもので。エニユオに至っては攻撃は最大の防御と言わんばかり」

「あら、人を攻める事しか脳の無い様に言って」

「そうは言っていないません」

「…依頼は完遂します。取り敢えず目の前の死骸を」

魔物の死骸は新たな魔物の発生源となる。同族を殺された怒りを買うか、その死骸を漁りに来た別種が襲ってくるか、単純な血の匂いに反応した種か。

だからこそコーリスは先程から注意するよう呼びかけているのだが。

「いえ、構いません。この島の魔物は珍しく多少の知能を持っています。残酷ですが、彼等はこれを私達からの警告として受け取る事も出

来るのです」

「…なるほど」

「私からもよろしいでしょうか？騎空士殿」

「はい」

「防衛に優れている団という評価しか聞いた事が無いのですが、団の規模はどのくらいなのですか？お二方は使者として来られたのだと思いますか」

「4人です」

「ん？」

「戦闘員は3人。騎空艇の操舵士で1人です」

「堅苦しく無くて楽しそうですね」

エニユオが能天気な表情で、アテナは口を開けたまま呆け、冷や汗をかいた。

本来、防衛戦に長けた騎空団は大規模な物であり、様々な島に拠点を作り自警団と融合する形を取るものだ。しかし、彼等は少人数で毎日島を飛び回っているという異常な立ち回り。

「俺は防衛専門で、かれ…いや、彼女は比較的防衛が得意な戦闘員です。もう一人は全く得意ではないので他の島に行ってもらっています」

「その子も…!?というか子供では」

「で、こいつが団長でオレ様が金庫番な。今なら回復薬も格安で売ってやるよ」

「彼が団長…？」

「はい。コーリス・オーロリア。コーリスと呼んでください」

「オレ様はカリオストロ。普通に呼べ」

苦勞人氣質を見せながら、アテナは2回の握手を行った。

街に訪れたコーリス達は、アテナとエニユオの案内の元、街の中枢である指令塔の様な建物に入った。

「アテナさん。依頼内容は街の防衛と、防衛戦術の指導で合っていますか？」

「はい。この街の防壁は身を隠しながら敵を迎え撃つ為に作ったもの。しかし最近、エニユオが倒していた様な小型の群れが多く、弓矢で相手取るのも困難になっていまして。物資を無駄に浪費したくないのです」

「なるほど。探る様で申し訳ありませんが、規模に劣る俺達が何故防衛に優れていると評価されるのか。どう考えますか？」

アテナはその質問について少し考えた。

逆にエニユオは目を閉じて頷いている。既に結論を得ているようで、彼女の思考回路はコーリスに近いのかもしれない

「：少人数だからこそその隠密行動。攻められる前に敵陣を叩く、という動きでしょうか。カリオストロ殿は魔法が得意な様に見えますし、気配を隠す魔法等を使って：」

「アテナ、違いますよ。たった3人、その内1人は防御が不得手と言うのなら単純な話です」

「：エニユオ？」

「コーリスさんは盾を持っていない事から、恐らく得意とされる防衛魔法を。カリオストロさんは支援でしょうか：その隙にもう一人の方が殲滅といった形。少数の強者による力押しというのが妥当ですよ」

「何故そう言い切れるのです？」

「感じ取ってみてください。特に、コーリスさんの力を」

「：コーリス殿、失礼します、」

アテナはコーリスの目を見た。次に手、足、胸。そして耳。最後にまた目を見て——今度は瞳そのものを覗き込むように観察して、じわりと汗をかいた。

「コーリス殿：その、貴方は」

「魔力量によるゴリ押しの防御。絶対死ななくてオススメです」

「私が言いたいのは：そうではなくて」

アテナの依頼の目的は、人間の力：それも戦士ではなく街の住民が

実現可能なレベルの戦術を学ぶ事である。彼女の盾は星の力であり、魔力も絡む為に技術として伝える事が不可能。だからこそ防衛に長けたコーリス達を選ばれたのだが…。

結局コーリス達も星か空かと区別出来るだけで、才能的な力による防衛という戦術に違いは無かった。

「アテナ。人選ミスですよ」

「エニユオツ!!」

「…防衛魔法は教えるというか、そもそも魔力を固めるだけの物なので、街の人達に教えられる。しかし効率は悪いです。結構魔力を使う上に、盾として形を構築してしまえば使い捨てになっちゃおう」

アテナは人選ミスをしてしまった。人間達が行える手段で街を守る為に防衛特化の騎空団を頼ったのだが、祈望の騎空団はメンバーそれぞれに固有の戦い方がある。防衛が得意なコーリスとカリオストロが偶然いるだけで、広義的な防衛とは物が違う。

ちなみにゾーイは戦い方が基本的に攻めというだけで、盾の硬度はかなりものである。

落ち込むアテナにカリオストロが話しかける。

「この街の壁を見ていたが発展途上だな。理想は侵入や敵の飛び道具を完全に防ぐ事か？」

「はい。今のままでは物量で圧壊してしまいますから、せめて薄くとも城壁の様な構造にしたいのです」

「なる程な。いいぜ、オレ様が少しこねてやる」

「こねる…?」

「カリオストロの錬金術は大地を操っていると錯覚する程に広範囲で正確です。素材さえあれば直ぐに壁を強化できると思います」

そこでカリオストロは人差し指を立てて怪しく笑った。

「そこだ。オレ様が堅い壁を作ってやるから、報酬を少し高めろ」

「…カリオストロ」

「以来の内容は防衛術の指導。だが、今の話はそれに加えて街の防衛力そのものを強化するもんだ。追加で貰うぜ?構わないだろ、平和の女神さん」

「…仕方ありません。街の為です」

エニユオは話に乗ったアテナを見てから数回頷き、机に入っているルピを確認した。その後彼女は溜息を付き、微笑を浮かべて口を開いた。

「カリオストロさん。情けない話ですが、私達は貧乏なんです。お手柔らかに頼みますね」

「なんでだ？人間達に自衛手段を教えて自立させたいんなら、お前等は常に同じ場所に滞在する事は無いって事だ。行く先で色々助けてきたんだらう？何で金が無い」

「私達は特別何も受け取っていませんよ」

二人は純粹に驚いた。空の民に寄り添う星晶獣達は興味の対象として社会に関わるが、この2体の星晶獣は人間達を守る為に行動し、その見返りも求めないのだ。

「ほう。平和を司るってのは眉唾じゃねえわけか」

「…」

「そつちにも色々ありそうだ。仕方ねえ。金はいい。珍しくオレ様がボランティアで活動してやる」

「感謝します。カリオストロ殿」

”結構無償で人を助けるけどなー”という心の眩きをコーリスは抑えた。

単純な人助けと思えば今までの依頼と変わらない。二人はいつも通り周囲の視察を行おうと動いた。

「島の地形は分かりますか？地図等が無いなら此方で把握しますが」
「持っています。私が書いた物ですが」

机に地図を広げたアテナは、指で様々な場所の特徴を説明した。

「近隣の森には多くの種が住んでいます。どの魔物も獰猛で人間に敵意を持っています。特にゴブリンは武器を持つ事があり、数が揃うと対応に困難です」

「他に村や集落はありますか？」

「あるにはあるのですが…遙か遠方です。魔物達の危険が及ばない程に」

「だからこの街に集中して……不運な立地ですね」

地図に没頭する二人をよそに、カリオストロはエニユオの方を見た。

気になったのだ。アテナの善性は垣間見えたが、その仲間であるエニユオの性質をまだ理解していない。アテナを支える立場なのか、ただ付き添っているのか、はたまた気まぐれか。

——別の目的もあるのか。

「エニユオ。聞かせろ」

「はい、なんでしよう」

「空の民は好きか？」

毒がある質問であったが、解答に動揺は無かった。

「空に生きる私達にとって今や空の民こそ人間。彼等の営みは私にとって好ましい物ですよ。特に豊かな感情も」

カリオストロは故意に空の民という聞き方をした。戦争時代では星晶獣にとって星の民こそが人間であり、創造主。敵である空の民に寝返ったとしても、過去の認識を忘れられない獣も存在する可能性がある。

そして今の答えを聞く限り、エニユオは空に長く根付いており、特別穿った感情を持っていないと分かる。それが本音であればの話だが。

次の質問が生まれた。

「じゃあ戦いはどうだ？武の高め合いじゃねえぞ。命の摘み合いだ」

またもやスラリとエニユオは答えた。

「殺し合い自体は好きではありません。武力の試しもそれほど。私にとって、戦いは何時も容易い物でしたから」

「それは、お前が強いという意味か？」

「はい。私は少々強く造られたんです。なので——」

エニユオは横を見る。

「——戦いによって何が生まれるか、それを強く熱望します」

彼女の純粹無垢な瞳は、ある一点に向けられていた。

56. ヴィムル?・シロル (ギユムナシオン)

「ここは訓練を行う場です。簡易的ですが、弓・盾を持ちながらの剣術、槍術の訓練が可能です」

アテナによつて施設を案内されていたコーリス達は、最後に比較的広い場所に訪れた。

訓練所。的を撃つ弓の訓練。盾によつて攻撃から身を守る事を前提とする、演習式の剣術訓練。正確に敵に攻撃を通す為に姿勢や腕捌きを学ぶ槍術訓練。

古臭い様式ながらも、一般人が行うには十分な規模だった。

「二応弓の使い方は子供以外の全員に教えています。槍と剣は戦う精神力と肉体の強さを持った大人、青年にのみ：特に槍の方が生存率が高いので、精鋭という形になるかと」

「確かに壁の中で行える訓練では最良ですね。魔法の訓練は破壊が伴うのでこの場所では不可能ですし、距離や高さの理を受けられる弓が優先ですね」

彼等は少しの間訓練の風景を観察する事にした。

弓は老若男女が弦を引いて狙いを定めていた。その動作は統一されており、発射の際に身体が傷ついたり、手首が反れて仲間の方へ撃ち込むといったミスは無い様だ。

「アテナさんが教えたんですか?」

「いいえ。空の世界では辺境であるほど原始的な弓の使い方をします。これは彼等が外敵から見を守る為に昔から行っていた動作でしょう」

「アテナが壁という案を出し、私が盾という道具の使い方直接教え、槍術は二人で丹念に。その様に街の人々を強くしています」

「盾を持っているのはアテナさんでは?」

「アテナの防御は過剰ですし、大盾から発せられるのは魔力による防壁です。単純な攻撃を防ぐのとは違うので、私が攻撃役を務める事でそれなりの反応を育てるんです」

アテナは重要な作業に取り掛かっていますし、という言葉も聞こえた。

弓は元々。街の防壁はアテナ。盾の使い方はエニユオ。槍は二人。攻撃性に長けているエニユオが防壁の重要さを教えるのは意外だが、それ以外は大体解釈に困らなかった。

続けてエニユオが提案する。コーリス達への興味はあるようだ。

「折角なので私達が育てた槍使いと戦ってみますか？」

「お断りします。街の人達が作った武器が壊れてしまう」

「攻撃にも自信がお有りですか？」

「硬さにです。持ってみますか？」

コーリスはエニユオに長剣ノスタルジアを手渡した。薄黒く光る刀身に少し驚きながら、彼女は柄を持った。

「良い剣ですね」

想定とは違う反応に持ち主が目を見開く。エニユオはそのまま足を大きく開き、地面に向かって剣を振り下ろした。

……片手で。

「切れ味も上々！硬さと少しの重さが切断力を支えていますね。私の好みとは少し離れますが、これも立派な攻撃の形と言えます」

コーリス達は星晶獣と戦ってきたが、大半は魔物の様な姿であったり、何かしらのオブジェクトに見える記号的な形を取っていたものばかりだった。何故なら、前期に造られた星晶獣達は能力も感情もシンプルであり、空に敵対的だからだ。

逆に後期に造られた星晶獣達は能力が複雑で、姿と感情も人間に近く、星を裏切った獣の大半は彼等である。

空に友好的だからこそ、戦う機会が少なかった。

コーリスは改めて実感した——人間との違いを。か細い腕に内包されているとは思えない膂力は、地面に掘られた深い切込みで一目瞭然。

斬撃音で街の人間たちが集まってきた。

「エニユオ様、アテナ様！お帰りになられていたのですか！」

「ええ、魔物達は倒しましたよ。安心して下さい」

アテナとエニユオは街の人間から慕われているようで、二人を囲む者達の表情は救いを与えられた信徒に近い。

「その方達は…」

「街の防衛を更に強固な物にする為、私が依頼し祈望の騎空団殿です」

「祈望の騎空団…?」

名前を聞いた住民達は少しの沈黙の後、大きく騒いだ。

それはもう喝采的に。

「——新聞に乗ってるあの!?!」

「——日別依頼達成数トップの!?!」

「——団長が幼女趣味の!?!」

「——平均年齢15歳の!?!」

「——破壊規模が大きすぎて怒られてるって噂の!?!」

「——古戦場初戦リタイアの!?!」

「——とりあえず凄いつぽい!?!」

新聞には騎空団の名が轟いているらしい。彼らの言葉を聞いて
コーリスは腰に手をかけた。

「随分と有名になってしまったな」

「コーリス、それは腰じゃねえ。刀だ。抑えろ。冷静にキレると分かりにくいからやめろ。なんでそういう時だけ刀使うんだよ」

「ふふ、その様な名声も持っていましたか」

「エニユオさん違います。あとこの街に正しい新聞を仕入れてください」

「残念ながら防衛以外は彼等に任せているので…私は兎も角、アテナは新聞を余り読みませんし」

「情報が散っていて読みにくいのです。事実かどうかも分かりませんので、私は国が出す伝聞に留めています」

「アテナと同意見です。でも、各国の情勢を見るのは中々に面白いですよ?被害状況を見て戦争の動向を考察する事が出来ますし」

「なんで嬉々としてそんな物騒な事話せるんだ………ん、カリオスト口?」

「…………いや、なんでもねえ」

カリオストロが会話の中で何か引つかかったのか、顎に手を当て考え込んでいた。最初はエニユオの方を向いていたのだが、誰もその事には気づかない。

「ところで、先程平均年齢が15という言葉聞いたのですが、実際の所はどうなのでしょう？」

「ちよつと前に20歳になりました」

「んーとお…12歳♡」

「嘘付け」

「あゝあゝ？」

二人が互いの頬を引っ張り合い始めたのを無視してアテナは考える。

若さ的に、噂だけが独り歩きしている騎空団なら危うい。この島の問題に巻き込む前に帰した方が得策なのでは、と。

コーリスの魔力量は先程確認したが、カリオストロに関しては本当に少女だ。後方支援だとしても未知数。錬金術とやらも得体が知れない。

実力を確認しなければならぬと考え、アテナは提案した。

「少しでも二方の力を見せてもらえませんか？防御の技術を確認したいのです」

「…あえ？」

「…力を見せて欲しいのです」

「アテナは考えすぎですよ。過剰に独り歩きする噂など存在しません。一貫して防衛への評価は高いのです。問題ないのでは？」

「しかし…——」

カリオストロが手で言葉を遮った。

「分かるぜ。たった二人、それも子供なら不安になる。街を守る為に妥協は出来ないからな。その意を汲んでやる」

彼は左手の魔導書を開き、地面に右手を当てる。黄土色の稲妻が大地に広く走り、周囲の形が変わっていく。

「おい野次馬共！おもしれえ物が見たいなら盾を投げ込みな！」

住民達へ急な要求をまくし立てるカリオストロ。好奇心に心奪われた民衆達は、何か途轍もない神秘が起こると喉を鳴らし、捻れゆく大地に盾を置き始めた。

「見晒せー！これが錬金術の可能性だ!!」

地面から手を離し上に掲げ、煙が巻き起こる。

盾——金属と融合した大地の影は、ある形に向かって整っていき、柱の様な形状に伸びた。

「…なる程。分解してから形を執るのですね。そうする事で他物質との共存が可能、と」

「エニユオは何が起きているのか分かるのですか?」

「ええ。これは私の性分に近いものですから」

そして煙が晴れ、現れたのは——カリオストロの鉄像だった。

「ね、ねんど?」

民の誰かが呟いた。

「寸分変わらずオレ様の可愛さを表現した。母なる大地と文明の利器のコラボレーション…錬金術の基本だがこれくらいはやれるぜ?」

「…この像はどういった用途で?」

「あ?カワイイだろ」

「盾は…」

「だから、像の要素になったって」

アテナはキレた。

「錬金術が防御に有用である事は理解しました。次はコーリス殿の力

を少し拝見したく」

泣く泣く鉄像を盾と土に分離させて元に戻したカリオストロ。
アテナは次にコーリスに力を見せてもらおうよう頼んだ。

「何をすれば…一面に防壁を貼ればいいですか？」

「はい。空に展開できるのならば最大限の範囲でお願いします」

コーリスは右手に魔力を込めて、空一面に防御魔法を展開した。その範囲は街よりも広く、地面に大きな影を作り出す程だ。

その力を見たアテナは頭を下げた。

「お見事。試す様な真似をした非礼を詫びます」

「そういえば…空から攻めてくる魔物はいないのですか？」

「少数ですが存在します。今は私達が倒していますが、街を守る為には常在する防護が必要です。その為に私は防壁の他にもう一つ壁を作ろうと思っています」

「二重の壁…ですか？」

「はい。地面に対し垂直に立つ壁ではなく、街そのものを覆う半円の結界を」

アテナは自身の持つ白い大盾を見せた。

「今、私はこの盾による防壁を展開できません。自身の守護の力を注ぎ込み、完全防御の結界を作っている途中なのです」

「つまりオレ様達を呼んだのは、その間手薄になる街を守る為でもあつたって訳か」

「はい。この結界…パラディオンは魔物を押し潰す攻防一体の物。その効力を発揮している間に村の壁を補強し、彼等自身で防衛が行える様育てるのです」

アテナが語ったヴィジョンは現実的なものであつた。戦争を行わない国家であれば、警戒するのは魔物だけで良い。一定期間干渉を受けない状況を作り、その間に街そのものの防衛力を上げるのは理に適った選択だ。

星晶獣としての権能を存分に活かした戦術だと言える。

…少し人間の感覚と違うのは、時間だろうか。

「あと何日くらいで出来そうですか？」

「1ヶ月程かかります」

その言葉にコーリスとカリオストロの口が止まった。

空気が揺れる。

「…………アテナさんよ。つまりオレ様に一ヶ月間此処にいろって言い
たいのか？」

「理想を言えばそうなります」

「舐めてるのか？」

苛つきを隠さないカリオストロに、コーリスは陰ながら同調していた。依頼内容で街の防衛力を育てなければならぬ為、数日で済む問題では無いと分かってはいたが、人手が少ない騎空団にとって、その要求は横暴な物である。

先程の話では、パラディオンを展開している間に防壁を構築する目的があつたが、これでは結界が完成する前に防壁の作成に取り掛かった方が利口である。

だからこそ、彼は錬金術師の怒りを止めなかった。

その光景に、エニユオが深く笑みを浮かべる。

「簡単に言っちゃえば、この街の人間は移住した方が早え。だがこいつ等は故郷であるここを捨て去る事が出来ない。お前はそんな奴等の姿を見て手を貸してる訳だ」

「はい」

「パラディオンとやらに依存しない様な未来を考えている事は評価してやる。だがオレ様の時間を大量に浪費してまでする事が防壁作りの雑用か？エニユオが魔物の巣を根絶やしにする方が効率がいい」

「…それは！」

「出来ないか？守護と平和の戦女神。魔物に対しても慈悲は捨てられねえって事か。非効率だな」

「…カリオストロ殿。それは侮辱と受け取っても構いませんか」

「面子を気にするんなら他人を慮れよ。お前がああ星の糞共と違うな

らの話だがな」

「——いいでしょう」

「そこまで」

一触即発の空気が流れたところで2つの声が重なる。

アテナの足元には風穴が空き、カリオストロの足元には亀裂が走っていた。

エニユオとコーリスによる物である。

「アテナ。彼等の言い分は至極真つ当な物。説明不足など貴女らしくないですね。独断の依頼と言い：焦っているのですか？」

「エニユオ……」

アテナは生真面目で高潔な騎士を思わせる性格であり、本来ならば先程の会話での横暴な要求や、カリオストロの言葉に明確な怒りを見せる事は無く、エニユオにとってそれは意外である事に間違いは無かった。

一方、カリオストロはコーリスの顔を見て笑った。

「止めんなよ。もう少しであいつ腹の底、見えたかもしれねえだろ」

「カリオストロから仕掛けるなんて思っただけだが、攻撃されたら本気で反撃する気持ちではあったらどろ？」

「勿論」

「狙いは分かった。やり方が雑だったらまた止める」

カリオストロの苛つきは嘘ではない。しかし、その場で感情のまま戦闘を行うほど子供でも無い。

彼はエニユオの性質を探ろうとしているのだ。それは純粋な探究心と疑問、そして勘でもあった。アテナを介しての反応を求めたのだ。

エニユオについて分かっていることは、アテナに比べ柔らかい思考の持ち主である事と、戦闘に優れた星晶獣である事だ。推測で言えば、概念系ではなく物理系の能力という可能性がある。

無論本人に聞けば済む話かもしれない。腹の探り合いが続くようであれば相手からの反感を買い、望まない結果生まれてしまうかもしれ

れない。

しかし——カリオストロはエニユオに対して得体の知れない取っ掛かりを感じていた。

そしてコーリスは良くも悪くもカリオストロの言葉を重視しているので、彼に従う行動を取っているのだ。

二人は一瞬エニユオを視認し——即座に行動に移した。

「それはともかく——」

「へ？」

コーリスはカリオストロの後頭部を思いつ切り地面に叩きつけ、自身も土下座の体制を取り…叫んだ。

「謝れッ!!!」

「ぶがっ…!!」

強制土下座。子が過ちを犯した時、共に謝罪する親の様にコーリスはアテナに謝罪した。

「申し訳ありませんアテナさん！こいつは捻くれもので…人間に裏表があると決めつけてしまおうんです!!」

「え、ええ…」

「勝手にほぎくなクソガキがあ…!!オレ様はあ…!!」

「うるさい黙って謝れ!!」

カリオストロの顔面が地面にめり込んだ。無論その程度で傷がつく硬さでは無いが、明らかに過剰だ。本人からしたら極刑ものだろう。

これは半分本心で、もう半分はカリオストロの真意を探らせ無い様に彼をただ生意気な人間として認知させる目論見もあった。明らかに過剰だが。

要するに、大したことの無い人間に思わせているのだ。

「あはははは！面白いですねその身体！どんな硬さをしているのですか！」

「え、エニユオ…」

耐えきれないと言った風にエニユオが笑い出す。

ドン引きしているアテナは我を取り戻し、コーリスに声をかける。「わ、私も熱くなりすぎた所があるので…謝罪は結構です。あと、今日はもう遅いので…その、早めにお帰りになられてはどうでしょうか？」

「ありがとうございます!!ほら、帰るぞ!」

「ぶ、ころしてやる…」

流れる様にカリオストロを抱えて街から騎空艇まで駆け出すコーリス。その姿にアテナや街の住人は言葉を絞り出す余裕も無かった。

ただ1人、エニユオだけが微笑んで軽く手を振っていた。

「……ふふ、そんなに私が怖いのですか?」

——フロンティア号、居間。

「追手はいないな。よし、作戦会議だ」

何事も無かったかのように仕切り直したカリオストロは、艇の居間にてゾーイ以外の3人での会議を行う事にした。

「演技にしては過剰だったか…?」

「過剰すぎるわ阿呆。だが今回は良い。オレ様が間違えた。こっちの狙いに気付きかけていたぞ」

「えーと…コーリスは何をしたのかな?」

「カリオストロを生意気な子供に見せたかったので、無理矢理土下座させました」

「尊厳には気を使おうね、コーリス」

やんわりと釘を指したが、ノアの口調は真に迫っていた。コーリスに冷や汗が流れる。

「まあ待てノア。普段なら本気で殺してるところだが、今日は事情が違ってな。アテナだけなら良かったんだが、よく分からない星晶獣がいる」

「名前は？」

「エニユオ。司る物は後から本人に聞くが、恐らく攻撃的な物だ」

「聞いたことがない…」

ノアは戦闘に直接参加していた星晶獣ではない為、同族の行動原理に対しての知識は浅い。ただ、名前すら聞いたことが無いのも珍しい事だった。

「そいつ、戦い自体は好きじゃない筈なのに、新聞で戦争の情勢をワクワクしながら読んでたり、戦う雰囲気になると楽しそうにしてるんだよ。引つかかるぜ」

「穏やかに見えて中々にイイ性格をしている。カリオストロの土下座に対し爆笑していた。血塗れになっても気にしない不気味さもある。興味の対象は分からないが、完全な善という風には見えなかった」

「オレ様が感じた限りでは空への敵対意識は無い。ただ、アテナが街を純粹に守ろうとしていたのに対し、別の目的がありそうな雰囲気もあったな。街の人間に対する情は勿論あるだろうが、アテナに付き添っているイメージだ」

「アテナさんが友人としてエニユオさんを扱っている以上、彼女の人格はある程度保証できているが……」

「…君達はアテナを信用しているんだね。前提として、君達を上辺だけで利用していると思わないのかい？」

「ないない」

二人の声が重なる。二人にとってアテナの心を理解する事は、ゾーイの空腹を見抜く事と同じくらい簡単な事だった。

「あれは純粹だ。人を騙すなんて出来ねーし、俺達を使うのに逐一罪悪感感じてるんだぜ？そこら辺の人間より綺麗な模造品見せられちやあな…」

「模造品という言い方は良くないと思うが…人間の感情を元に作られた後期型の星晶獣という事を加味しても恐ろしく純粹で、高潔な騎士としての人格を持っていた」

「考えられるとしてもエニユオがアテナを騙しているケースだが…そんなのにも見えないしな。そこまで疑ったらキリがないし」

「じゃあ、依頼は正式に受けるのかい？」

今回の懸念は依頼の期間ではなく、相手をどこまで信用できるかという部分にある。

依頼自体に穴が多く、アテナの独断、騎空団人数の不認知、何故か常に魔物に狙われている街という不思議な要素が詰まっている。そして、文書やノアの記憶にも残っていない謎の星晶獣エニユオ。

不可解な事が多く、ましてや戦闘に優れた星晶獣が2体。奥手になるのは当然だった。

ノアの問いかけに二人は少し悩んで――

「…受ける」

「だな。相手が単純に俺達を殺す気なら幾らでもやれただろうよ」

――賭けに勝ったのはエニユオだった。

57. ε&απ? τηση (欺瞞)

「コーリスさん！」

「ちよつと待っていてくれ。クフルに教えてるから」

「えー！昨日私に教えてくれるって約束したじゃん!!」

「クフルはもつと前に約束してたからな」

「ずるいー!!」

コーリスの周りに子供達が集まっている。それぞれが手に力を込めて唸っており、数秒後には肩で息をしてまた繰り返している。

そんな彼等を遠目から2つの影が覗いていた。

「彼はもう人気者ですね」

「お前と一緒にだな。薄い関係だとアイツは好かれるからな」

「ふふ。私みたいに、裏がある人間という事ですか？」

コーリス達を眺めるエニユオは、カリオストロに対して皮肉を強調しながら薄い笑みを浮かべた。

それに溜息を付いて返答する事しか出来ない彼は、渋々と言いつく述べた。

「露骨に疑ってた事は悪かったよ。裏がある人間なら逆に分かりやすいし、バカ真面目なアテナみたいな奴もいる。でもお前、何考えてるか全く分からないんだよ」

「私は常に街の平和とアテナの願いの成就を考えていますよ?」

「それが明らかかな嘘とも言えないから気持ち悪いんだよ」

コーリス達が街を訪れて一週間が経過した。

カリオストロは破損した武器や盾の修復と再利用を行い、コーリスは武器を取れない子供達に防御魔法を教えていた。子供にとつては使えて一回であろうが、覚えておいて損はない技術である為、アテナはその行動を大いに歓迎した。

そして彼等が一週間を過ごした結果、エニユオは悪人ではないという判断を下した。カリオストロがエニユオ本人に『疑っていた』事を

伝えた結果、彼女はそれに怒りを抱く事もなくただ不変の日常を送った。

恐らく、エニユオのその姿勢を見たから彼等は疑う事を止めたのだろう。というより、詮索する事を諦めたのかもしれない。

「にしても：お前が何の星晶獣か知った時は終わったと思ったけどな」

「役割と感情は矛盾しません。私は機械ではありませんから」「だとしてもだ。怖すぎるだろ……だって——」

それは普通の人間であれば忌避する現象。

命を摘み合う戦場という場でのみ成立する悪夢。

「——破壊」と蹂躪を司る星晶獣だぞ」

それは、生命を護るアテナの物とは正反対だった。

「何時もかたじけない。貴方がこの街に来てくれて良かったと心から感じています」

「アテナさんの努力には敵いません」

子供達の魔力が尽き、一通りの訓練を終えたコーリスは、巡回を終えたアテナと共に茶を飲みながら街の防壁を眺めている。

防御術を戦闘に用いる二人は、ある種のシンパシーを感じていたのか、関係の進展が中々に早かったのだ。

或いは真面目な性格が功を奏したのか：アテナの方が常識が伴っている様に思えるが。

「でも、何故そこまで人間を守ってくれるんですか？」

「………覇空戦争時、空に対して友好的な星晶獣が星に反旗を翻した時、

私は空の民の退路を作りました。ですが、星の民が私達の感情という不確定要素を野放しにする筈も無く、星晶獣達の役割を強制させる星晶獣を戦地に送り込んで来たのです」

過去を語るアテナの手は震えていた。

「私もその影響下に置かれ…守るべき人間達を敵とみなし、星を守る為に彼等を焼き尽くしました」

「…すいません」

「いえ、抗えない訳では無かったのかもしれませんが。実際、エニユオはその星晶獣に抗った内の一人でした。星を裏切り空に与するとは言え、戦わずに守るといふ行為に逃げた私の意志の弱さを…恥じるのみです」

「…今は、罪滅ぼしですか?」

「それもあります。ですが、私は彼等の力になりたいのです。覇空戦争でどれだけ街を滅ぼされ、戦友を失おうと最後まで抗い、自身の世界を守り抜いた人間達が…私には輝いて見えました。星や魔物に比べれば弱い命であるというのに」

「だから守るのですか」

「守護の星晶獣としての性分と言われれば反論出来ません。能力と性格が結びつく事の方が多いですから。私自身、これは純粋な感情であると信じたいものです」

「アテナさんは…立派だと思います」

「コーリス殿には及びません。私はまだ、迷っている最中なのでしよう。貴方の様には…なれていません」

コーリスがアテナに尊敬の念を抱く様に、彼女もまた、彼に対して一種の憧れの様なものを覚えているのかもしれない。

彼女にとって、人々を守る為に空を飛び回っている祈望の騎空団は理想の形でもあるからだ。

だが、コーリスはそう思っていない。

「いいえ、俺はいつもどっち付かずです」

「コーリス殿……？」

少し考えてからコーリスは語り出した。

「俺は故郷が魔物に襲われた時、聖騎士が助けに来てくれたのをきっかけに騎士になりました」

「存じています。貴方の佇まいは荘厳なものですから」

「ありがとうございます。でも、俺はその場所で自分の理想を追えたとは思いません。あやふやなイメージで言われるままに遊撃隊として人を疑い、これこそが国を良くしているという根拠の無い正当化が続き……遂には1人の罪人を殺しました」

「……思い出しました。リユミエールですね。貴方が活躍した空戦、その首謀者はその場にいた騎士によって裁きを受けたと聞きました」
「そんな風に報じられていましたか。みんな優しいんですね」

アテナはコーリスが急に幼くなったと感じた。

言葉遣いも表情も、先程まで子供達を見守っていた団長としての物とは大きく異なり、狼を思わせる顔は次に子犬を幻視させた。

「何時も引っ張って貰ってばかりです。多分、俺が一番強かったのは騎士になる為修行していた子供の時。騎士になってからは組織の足を掴むばかりで自分の正義も見つけられませんでした。今もきつと……いえ」

コーリスは口を閉じた。最後の言葉は無意識に出たもので、言うべきでなかったと後悔したのだ。

「カリオストロ殿が団の方針を……？」

「カリオストロは研究したいだけです」

「あ、はい。そうですね」

両者の咳払いが場を濁した。

「目標はもう一人の戦闘員から与えられた物です。途方も無く長い道のりの果て……その結果も遠くの未来の話。正直、俺が頑張れるか不安なんです」

「…」

「だから覇空戦争が終わってからの400年間、人を助け続けたアテナさんは凄い人だと思います」

アテナはその言葉をゆっくりと咀嚼し、目を閉じて心に刻み込んだ。

「コーリス殿。例え貴方の歩む先が不朽の茨であっても、決して挫けぬ様。もしも突破出来ない不条理が貴方を襲うのならば——」

騎士としてのアテナが弛む事無く言葉を紡いだ。

「——その茨、私の炎が焼き尽くしましょう」

その言葉は、アテナを守護者たらしめると思わせるには充分過ぎた。

彼女はこの瞬間、コーリスの味方をする心を決めたのだった。

「…ありがとうございます」

コーリスは長く頭を下げてその場を後にした。

その純粋な気遣いが、また彼の心を重くするのだ。

「…」

休憩を終え、コーリスは街の外れを歩いていると聞き慣れた音が聞こえた。

「…弓？」

訓練所でよく聞こえる風を切る音が、普段人間が訪れない場所で響いている。だが、肝心の弓矢が何かに当たる音が聞こえない。

空耳なのだろうかと素通りしようとしたが、逆にその違和感がコーリスの心を惹いた。

「……あ。コーリス先生」

「アルミス…？」

そこには、空色の髪を持った少女がいた。

アルミス。コーリスの防御魔法訓練にも参加しており、彼を先生と呼ぶ。感情を表情に出さない寡黙な性格である。

「弓は大人以外使えない筈だが…練習してるのか？」

「…うん」

「子供の武装はアテナさんが禁じてた筈だが」

「魔法使えないから……やらなきやだめなの」

「……そうか」

アルミスは唯一防御魔法が成立しない子供だった。

理由は単純。魔力量が足りないからだ。生まれ持った魔力が常人よりも少なく、自身の小さな身体を守る盾を構成する事が出来ないのだ。

その為、防御魔法が使えないのでは無く、防御として成立しないという結果に陥ってしまう。

無論コーリスは彼女の失敗に気付いているので、急所をピンポイントで守る技術を仕込んでいるものの、少女の劣等感を消す事が出来なかったのだ。

当然の帰結として頭を抱えた。

「でも、弓もだめ。奥に飛ばない」

「貸してくれ」

「うん」

コーリスは弓を確認した。街で作られてる一般的な物で、彼女は女性用の小型弓をこっそり持ってきたらしい。

「破損は無し…という事は」

「…私がへた？」

「違う。単純に力が足りてないんだ」

子供の腕力では弓は満足に飛ばない。ただそれだけの話だった。加えて的まで35m程の距離がある。

「……どうしようもないのかな」

「一回見せてくれ」

「……はい」

アルミスは木に掛けられた的に向かって弓矢を放った。

その矢は木に当たる前に弱い軌跡を描いて地面に落ちていったが、方角は的の中心から全く逸れていなかった。

コントロールは常人以上に精密であったのだ。

「出来ない…」

「いや、上手だ。もう少し身体が大きくなれば、このまま真っ直ぐ飛んで的の赤点に刺さるぞ」

「当たらなきや意味ない」

「ごもつともだな」

「先生ならできる？」

「弓はな……どうかな」

次はコーリスが弦を引絞った。そのまま手を離して矢が飛んでいき……。

「あ」

的から外れて木の幹に浅く刺さった。

「……アルミスより初心者だな」

力加減も方角も何もかも間違った狙撃だった。

当然である。コーリスが弓を握ったのはこれが初めてであり、扱う人間を見た事も無い。強いて言えばバジュラとの戦いのトドメだろうか。

「…先生」

「今、自分より下手だっと思ってただろ」

「うん」

「正直でよろしい。アルミスが上手なのが分かったな」

下手な技術が功を奏したのか、彼女の表情は緩やかなものに変わっていた。

現在この街は魔物に襲われる期間に怯えており、アテナの焦りを街の人間は感じ取っている。その為か団結力はあれど、冷静に日々を過ごす者は少数だ。その影響が子供にまで及んでいると考えれば、この依頼の達成はこの島で重要な結果を齎す。

コーリスはその事をアルミスの行動で実感した。

もう少し彼女の練習を見ていようと思ったその時…。

「あら？珍しい所にいますね」

「あ……」

エニユオが背後から近づいていた。

「…なる程。アルミスは隠れて弓の練習をしていたのですね」

「ごめんなさい…」

「禁じているのはアテナですから私は気にしませんよ。くれぐれも怪我の無いように行ってくださいいね？」

「はい…」

エニユオは聖母の如き表情でアルミスを許した。何故この付近を歩いていたのかコーリスは未だに疑問だが、恐らく巡回だろうと考え、口を閉じた。

（いつもそうだが…この人不意をつくタイミングで顔出してくるよな）

反射的に暗器の針を抜こうとしてしまった己に言い訳をして、コーリスはエニユオに彼女の腕前を自慢した。

「エニユオさん。アルミスの弓は上手ですよ。俺なんかよりもずっと丁寧に射掛けます」

「まあ。見せてもらっても？」

「は、はい」

コーリスの狙いは、ここでアルミスに少しでもミスをさせて、エニユオに指導をしてもらい自信を育てさせるといふ節介である。

緊張からか過剰な力が加わり、あらぬ方向へ矢が飛んでいくかと思いきや…。

「…え、うま」

「で、できた…！」

過剰に加わったと思われた力は、非力な彼女にとっては適切な狙撃になり、的の中心から一寸も乱れる事なく綺麗に刺さっていた。

エニユオもほんの少しだけ驚いた。

「私も射ってみましょう」

興が乗ったのか、先程のコーリスと同じく弓を借りて的を狙うエニユオ。

その結果は、的には入っているものの中心から大きく右にはみ出たものであった。

「私は弓の経験がありますが…アルミスの才には及ばないようですね。お見事」

「や、やった…！」

コーリスは初めてアルミスの喜ぶ表情を見た。

「ですが、これ以上やってはアテナに見つかってしまいます。今日の所は帰って休みましょう？」

「はい！ありがとうございますエニユオさま、コーリス先生」

エニユオに言われた通り帰宅するアルミス。

残った二人は的の置かれた木を見て顔を見合わせる。

「コーリスさん、あの子に付き合ってくれて感謝します」

「偶然でした。まさか一人でやっているとは…」

「アテナに似て焦りっ気の多い子ですから…」

エニユオは気づいた上でアルミスの練習を黙認していたのか。要らぬ責任感を負わせまいと落ち着かせる為に敢えて先程のタイミン
グで姿を表したのか。

コーリスは偶然では無くそうだろうと確信していた。

「ところで、わざと外すというのも難しいものですね」

「え？」

「的の事です。アルミスの自信を付ける為に敢えて失敗した真似をしたのでしょう？私もそれに倣いました」

「俺が…わざ、と？」

「はい」

コーリスは泣きたくなかった。『道化だな、俺』と。

「あ、あれ、本気でやったんですけど」

「……………」

…後に先にも、エニユオに心からの謝罪を引き出させたのはこの瞬間だけであろう。

「…力を使い過ぎては本末転倒ですよ、アテナ」

「エニユオ」

夜が空を覆い、人々が家に戻った後の事。

指令塔でアテナが白き球体——パラデイオンの核に自身の力を込めている最中であつた。

『パラデイオンに力を込めている最中は防壁を展開できない』……まるでそれが完成すればいつも通りに力を発揮出来る様になると言いたげですね」

「…………エニユオには隠せませんね」

アテナは目を閉じてエニユオの言葉を待った。

「それは守護の能力そのものの大半をつぎ込んでいます。つまりそれを使っている限り、アテナは自身の本気を出す事は叶わない。これで合っていますね？」

「はい」

「では、何らかの要因で貴女が再起不能になったとしましょう。パラディオンは解除されます。逆に言えば、万全の貴女が戦っていれば防げたかもしれません。こう言った状況は考えなかったのですか？」

「コーリス殿やカリオストロ殿が私を裏切ると？」

「相変わらず早合点ですね。話を最後まで聞けないのですか？」

「相変わらず言葉が過ぎますね、エニユオ……！」

無意識の煽りがアテナの神経を逆撫でする。

絞り出すかのような声色で彼女は数日間の焦燥の原因を口にした。

「守らねばならないのです………空を、守らねば」

「……それはどうして？」

その疑問は守るといふ行為に対してでは無く、『今になって何故』という問いかけである。

「星晶獣による被害……魔物による被害。リュミエールの空戦は知っていますか」

「結果と当時の被害状況だけは」

「……コーリス殿は、リュミエールの騎士だったそうです」

返事を待たずにアテナは語った。

「空戦集結時に聞き届いたコーリスという名。コーリス殿がこの街に来訪した時には驚きましたが、彼の話を聞いて本人だと分かりました」

コーリスとの会話で、アテナは思い出したかのようにリュミエールの名前を出したが、その実…彼女は空戦の記憶を誰よりも自身に刻み込んでいた。

その理由は――

「あれは…星晶獣による戦争。言い換えれば我々が齎した災厄です」

「…だから同じく星晶獣である私達が守ろうと？」

「霸空戦争の爪痕。その償いは私達がするべきでしょう」

アテナのその覚悟と責任は守護者という本能により深く空へ向けられた。

愚直にも自身の及ばぬ範疇にまで手を伸ばし保護しようとして進み続けるアテナを見て、エニユオは心から深く笑みを浮かべて詠嘆した。

（ああ…アテナ……………貴女は本当に――）

深く、嘘偽りなく、唯一思ったこと。

（――馬鹿ですね）

58. λ?θ0⊠ (過ち)

祈望の騎空団2名は、防衛街に來訪して一週間と2日が経過した現在、フロンティア号から拠点を経の中核に移す事にした。

理由は、この依頼が長期の物になると分かり、街の内部での安全性が確保されたからである。そして、ゾーイが単独で空を飛ぶのにも限度があり、ノアにしか動かせない艇を用いる方が効率的であると判断した事も要因である。よって、現在祈望の騎空団は半分に分かれている。

「…んお」

アテナとカリオストロの話し合いの元、少し頑丈になった壁の上には人々が偵察をする為に立つことが可能な足場が形成された。

柱の様に各方向に配置された見張り塔で双眼鏡を覗いていたカリオストロが反応を見せる。

「アテナー」

「どうしました?」

真下に佇むアテナに対しカリオストロは簡潔に述べた。

「敵襲ー」

女神の表情が青くなった。

「何の為の弓訓練だよ」

「備えているのならまだしも…急襲されればやむを得ない」
「つつてもな…まあ雑魚とはいえ速ければ弓は当たらねえし。しようがないか」

予兆なく迅速に攻めてきた魔物の群れに対し、アテナの下した判断は出陣。しかし街の人間は一切参加せず、アテナとエニユオ、そしてコーリスとカリオストロの4人のみである。

理由は魔物自体は足が速いだけで弱い事。数が多い為、迂回される前に短期間で倒す必要があり、町の人間達が準備している暇が無い事。この2つが大きい。

鎧等を使わないコーリス達は武器を持つだけで臨戦態勢に入れる為、直ぐに街の外に出て前方を伺うことが出来ている。2柱の女神も準備が完了する頃だろう。

「白い狼なんて余り見ないが、群れで襲ってきてるって事は明確な巢があるはずだ。エニユオに攻めさせれば力の一端でも見れるかもしれないぞ」

「どうせなら今見たい」

「まっ、いつも通りやろうぜ」

攻めてきた魔物達は白い狼の群れである。数は20匹程であり、巨大で俊敏な様相。

カリオストロが魔導書を開き、構えた。同時にコーリスが前方の群れへ駆け出し、上に飛ぶ。

錬金術によって白狼達の足場が隆起し、群れの8割を上空に跳ね飛ばした。その先には先程飛んだコーリスの剣。

「ふっ！」

微小の魔力を剣に込めて横に炸裂させ、目の前の魔物を全滅させる。これは破壊規模が大きいと批判を受けたコーリス達が考えた戦い方で、カリオストロ曰く『環境に優しい殲滅法』である。

そして、残った2割の魔物はコーリスではなくカリオストロに向かつていく。

「良い判断だ。オレ様以外ならビビったかもなあ」
「ググッ!？」

突如動きを止める白狼。当然である。自身の身体が棘状の大地によつて串刺しにされているのだ。

「畜生に言っても解らないだろうが、錬金術だ。仕込んで遠隔で発動も出来るんだぜ。来世は空から攻めるんだな」

ダメ押しと言わんばかりに貫通した棘を鞭の様に伸ばし、群れ全体を締め付け圧殺する。彼曰く、『効率的だが倫理的に優しくない殲滅法』である。

「匂いがする。2波が来るな」

コーリスの予感通り、同じ魔物の群れが同方角から接近してくる。数は先程の2倍程度であり、攻め方も特段変わらない様に見えた。

「烏合だな。いつそオレ様が全部潰すか」
「いや——」

彼等が空を見上げる。

次の瞬間——木々を根幹から揺らす程の恐ろしい衝撃が大地に伝わった。

「遅れて申し訳ありません。逆方向を見張っていたものですから」
「エニユオさん」

衝撃は上空から降下してきたエニユオによるものだ。地面に突き刺した大型の騎槍が波動を生み、目の前の群れを消し飛ばし——蹂躪した。

（なんつー馬鹿力。やっぱ単純な攻撃特化が能力か。今までの星晶獣に比べて攻撃性能が群を抜いてやがる）

空の民を退けてきたカリオストロからしても、エニユオの攻撃力は目を見張るものだった。

コーリスにとってはバジュラの斬撃という爆速理不尽即死攻撃を相手取っていた為か、多少は見慣れている様子。

「地形を乱さないように。エニユオ」

「分かっていますよ。数が多かったのでそうしたまでです」

アテナも合流し、この街における最高戦力が揃った形になる。

彼女の肩に乗っている使い魔のグラウクスが声を張り上げる。偵察の結果を報告しているようだ。

「…なる程。分かりました」

「何かありましたか？」

「この先の群れは100匹にも及ぶ数です。散開されて街に攻め込まれる前に此方から叩く必要があります」

「……この狼は目撃されていなかった筈ですよ？何処から湧いて……」

「細かい事は良いではありませんかコーリスさん。私達が元を根絶してしまえば問題はありません」

「の、のうきん」

「何か言いました？」

「いえなにも」

やはり、静謐な淑女が巨大な槍を持って大地を揺らすという行為は

ギャップもあるのか、コーリスは恐怖していたようだ。無意識だが、エニユオの顔を直視出来ていない。

アテナの咳払いが場を戻す。

「魔物とはいえ種の根絶は避けて下さい。知能があるのなら攻めてきた群れを還付なきまでに討伐する。それで数週間は恐怖心を植え付けることが出来るはずですよ」

「街の危機だぜ？少し優しすぎるんじゃないやねえか？」

「問題ありません。皆さんがいますから」

「……ほんと、お前は清いよな。どっかの学会にも見習わせたいもんだぜ」

カリオストロが鋭い石を作り出す。

「二手に分ける。百と正面衝突は無茶だからな」

3人が頷き、群れの足音が聞こえる程に接近している事を感じ取る。

カリオストロの声が響いた。

「コーリスー！」

「せいッ!!」

生み出した石をコーリスが全力で蹴り飛ばす事による投石攻撃。その石は先頭かつ中心部の頭に突き刺さり地面と接触した。そしてカリオストロの指鳴らしに反応して大地と融合し、縦に大きな壁を作り出した。

中心から割られる様に分断された白狼達は、そのまま二手に分かれ街を目指す。

その先に立つのは――

「多勢に無勢…守ってくださいね？コーリスさん」
「多分必要ないと思いますが…はい、心がけます」

コーリスとエニユオ。そしてもう一方。

「なんか攻守のバランス悪くねえか？」

「私もそう思います。ですがエニユオがコーリス殿の方に行つてしまつたので…」

カリオストロとアテナ。

3通りある2人の組み合わせの中で、最も偏つた組み合わせを引いてしまつたと言えるだろう。現在防壁が使えないアテナだが、本来は守護の星晶獣である為、程よく攻めることが出来るコーリスかエニユオとのペアが理想だつた。

しかし、この懸念は街に侵入されることであつて、この魔物達を相手取る事自体は造作もないのだ。

この小さな街の外で苛烈な戦いが始まつた。

「行きますよ…！」

エニユオが両手で槍をかち上げるかの様に振り上げる。斬撃を思わせる衝撃波が敵陣を縦に両断し、後方に位置していたコーリスさえも強い風圧を感じた。

「ハアッ！」

そしてコーリスは槍の一撃後にすかさず自身の技で以つて、炙れた

敵を薙ぎ払った。時間差はあるが、十字状の攻撃によって相手の回避は難しくなる。

しかし先程の分断攻撃と同じ光景故か、相手は斜め前方に低く飛び、懐に潜り込む様な動きを見せた。

先頭の狼がそう動けば、後方の狼がその動きを模倣するかの様に動くのだ。統率された軍隊を思わせる動きに、コーリスは何故か不快感を覚えた。

(範囲攻撃にも限界があるな……なら！)

コーリスは静かに掌だけを天に向けた。

彼の喉元に数十匹の白狼が飛びつかんと脚に力を入れたその時――手元に杖が出現した。

エニユオが驚きを隠せず目を見開く。

(よし、通じた！コスモスさんありがとう)

杖は携帯に困った為、ゾーイがコスモスの座標に送り込んで任意で取り出すという手段を取っていたが、常に彼女がコーリスの側にいるとは限らない為、その手段を簡略化する事にした。

それは、コスモス自身がコーリスの合図に応じて杖を送り出すという物。はつきり言ってしまうえばパシリである。調停者として彼から目を離す事が出来ないコスモスの立場を利用したもの。

余談だがこの方法を考案したゾーイは数日の後に拳骨を食らった。

「――ケーニヒ：ゲフェングニス」

出力と精密性を増強する杖によって構成された防壁の大群は、白狼達を外から押し込み一つの檻としての形を取った。圧殺には及ばないが、身動きが取れない程度の圧力を継続させる捕縛技だ。

「今です。打ち込んでください」

「——良いのですね、これは」

エニユオが大きく足を踏み込み、槍を短く持つ。

穂先には暴風の如きエネルギーが渦状に脈動を続け、先端に収束した瞬間に彼女は肩を振るった。

「はあっ！」

一突き。それだけでコーリスの魔法ごと敵の群れは消滅し、背後には風穴が空いた森と倒れ付す木々。生命の軌跡も残さずに粉碎する破壊力——周囲を荒れ果てた自然へと変貌させる一撃がその威力を物語っている。

「ひ……」

コーリスは杖を両手で抱えながらその光景を見る事しか出来なかった。

明らかに人外魔境。自身の盾が何枚割られるか想像しただけで鳥肌が立つと、引きつった頬で目を逸らした。範囲は兎も角、貫通力に關してはゾーイ超えもあるのでは無いかと疑う程には理不尽な物だった。

そして彼に近づくとエニユオ。

「え」

「この杖…防御魔法を更に高める用途ですか。面白いですね」

コーリスの手を巻き込んでガツシリとエニユオの右手が杖を掴んだ。

「え、え…なんです急に」

「突然現れたので驚きました。何処からこの杖を持ってきたのです？」

「秘密です…」

「あれ、来た時はあんなに私を疑っていたのに……」

彼の耳元で囁く。

「貴方も隠し事をしてしまうのですね……？」

「怖いです」

案外、エニユオはコーリスをからかう事を気に入っているようだ。

「あ、森だからお前火使えねえのか」

「はい」

「パラディオン作ってる途中だから防壁も使えないのか」

「はい」

「帰れ!!!」

「理不尽な!?!」

案外カリオストロは焦っていた。アテナは能力が使えず、現在は身体能力が高いだけの人間と変わらない。加えてカリオストロの戦闘スタイルは地形の操作による足止め。火力はあるものの自然そのものによる防御では強度に限界がある。

殲滅戦にも防衛戦にも対応出来るが、秀でているのはその両方ではなく、敵への攪乱なのだ。

「ちっ…仕方ねえ。コーリスに頼むか」

大地の棘、槍と盾でチクチク応戦している二人は火力不足を痛感した。何故ならカリオストロの奥義は溜めがあり、ウロボロスと自身の錬金術を併用していても隙間を通してしまう可能性があるからだ。だから、彼はコーリス側の地面に合図を送った。祈望の騎空団は錬金術によって様々な形の物体を作り、それを信号として使う。

待つ必要も無く、壁越しに数本の光線が正確に魔物達を貫いた。カリオストロは気持ちのいい笑顔を見せる。

「やっぱオレ様コーリスがいい。一家に一人」

「壁抜き……音で感知したのですか」

「さあな」

そういえば霧のことを言っていなかったと思いつつ、頭上に飛んだ残りの一匹を見上げるカリオストロ。対空には周囲を利用した錬金術の使用が困難な為、贅沢だが小規模のアルス・マグナの使用を考えた。

しかし、次の瞬間にはその魔物の身体は手足の先端を残して消し飛んでいた。

「……………は」

「あれは…」

「何か見えたのか？」

「エニユオの槍…ですね」

何も見えず、魔物が突然弾けたかのように見えた。

実際は巨大な風穴が空いた故であり、恐ろしい速度で槍が空へ飛んでいったのをアテナは辛うじて視認した。

続いて四人を隔てていた壁が崩れ、支援した二人が歩いてくる。

「どうやって魔物達の位置を把握したのですか？ 気になります」

「企業秘密です」

「秘密ばかりですね。そんなに隠されると心が傷付いてしまいます」

「じゃあ能力教えて下さい」

「秘密です」

「…」

「実際見ての通りですよ。それに、秘密を持つ女性は魅力的だと聴きますし…」

「それはミステリアスな雰囲気的女性が人気なだけであつて…普通の人に誠実な方が性格的に好かれてますよ。男も一緒です」

「ふふつ。では貴方はモテていないのですね」

「ッ……………」

「そこまで落ち込むとは思いませんでした」

掲げられたエニユオの右手に槍が戻る。

先程の一撃は、空中の魔物を槍の投擲で以つて撃破したという事である。

それを察したカリオストロは死んだ目で息を吐いた。

「オレ様の周りにはゴリラしかいねえのか」

「彼女は攻撃特化ですから」

「いやお前も3体くらい一気に薙払つてたの見たからな？まさか物理でゴリ押すと思わなかったわ。普通小出しでいいから火を使うだろ」

魔物の気配が感じられなくなった事を確認し、4人は駄弁りながら街へ戻った。

——その夜。

「アテナさん。話が」

「コーリス殿にカリオストロ殿。どうしました？」

「今日の魔物の出処についてだ。改めてオレ様達が森の深部に至るまで捜索したんだが……どうにも、昼の狼どころか他の魔物の巢の痕跡が無くてな」

「魔物自体はいたのですか？」

「街へ行きそうな奴はいなかったが、まあそこら辺で見る様なのはいた」

「……その割には大群の白狼でしたね」

「何か不可解な事象です。警戒しておきましょう」

「そうですね……捜索、感謝します」

昼から夕方にかけて二人が行った捜索では、魔物こそ発見すれど……大規模な群れが生活した痕跡は無く、遠くから攻め入った際に見られる荒れも少なかった。

百を超える巨大な狼が、それ程までに穏便に生きているのだろうか。

続けてカリオストロが話す。

「それと、エニユオの能力ってなんだ？」

「彼女の能力ですか。名と戦闘の通り、尽くを破壊する圧倒的な火力と身体能力ですよ」

「……そうか。分かった。サンキュ」

指令塔を後にしたカリオストロは唸った。

「……どうした？」

「いや……何、エニユオは破壊と蹂躪の星晶獣だったな」

「うん」

「……星の奴等が、星晶獣の能力に対してそんな表現をするかね」

「どういう事だ？」

「あいつ等は合理的で感情を理解しなかった。エニユオが攻撃性に特

化した星晶獣なら、”力”とか”戦闘”を司る星晶獣にする筈だ」
「…?」

「少なくとも、戦闘風景を見て”蹂躪”って言葉を態々当てはめる程の表現力はねえ。破壊は兎も角…蹂躪ってのは星にしては単純に悪辣過ぎる」

星の民を知らないコーリスにとっては理解に困る話ではあった。

だから、彼はただ…これ以上誰かを疑うのは疲れると自覚しただけに留めた。

59. Κηδεμολικ? ☒ (守護神)

防衛街はコーリスにとって特別好ましい街では無い。リュミエールよりも狭く、食糧の調達にも多少の手間を要する。そして、故郷であるトラモントのクレプスコロ村よりも自然が少なく、視覚的な静謐にも劣る。

それでも彼がこの街に入れ込んでいるのは、人々の生き様故か――

(…そろそろ一ヶ月)

子供達の休息を見守りながら壁を眺める。

薄かった壁はカリオストロの手によって堅固な物となり、偵察用の塔を4方向に配置する事で備えとし、更には弓や銃を高所から放つ事も出来、砦を思わせる機能となった。

アテナのパラディオンが完成すれば、一方的に魔物の群れを押し潰す防壁が展開し、街の脅威を尽く退ける事ができるだろう。

そして、その期間が長く続けば魔物はこの街を諦め、壁すらも不要となるかもしれない。それがアテナの望む道だ。

だが、数日前に襲ってきた白狼の群れ以降、魔物達は全く姿を見せず、かと言って人々が訓練を行った日は無いのだが――兎も角、当事者の4人だけでなく、子供ですらもその事実の不穏な何かを感じていた。

「……………気づいてますよー」

彼の背後からいつも通り怪しい笑みを浮かべたエニユオが近づいてくる。

「おや、私は服についたゴミを取ろうとしただけですよ?」

「そうやって前に冷えた手で首筋触ってきたの忘れてませんからね」
「今日は肩甲骨をなぞろうかと」

白狼との戦い以降、エニユオはコーリスに対しアプローチをかける事が多くなった。

理由は不明だが、人をからかうのが好きなようで、アテナの次に反応が良いとは本人の談である。

被害者であるコーリスは本気でびっくりしているので、影から忍び寄るのは勘弁してもらいたいと思っっているが…。

「アテナさんの方へ行ってください」

「パラディオンに心血を注いでいるのです。今彼女の逆鱗に触れてしまえば本気で嫌われてしまいますから…」

「やっと分かりました。エニユオさんはイタズラが好きなんじゃないやなくて、相手の嫌な事を絶妙に突いて反応を楽しみたいだけなんですね」

「ふふ……軽蔑しますか？」

「普通にします」

「今日の夜は眠れませんよ?」

「なんで俺が脅されてるんですか!？」

エニユオは笑いながら「そういうところですよ」と呟いた後、コーリスの横に腰を下ろした。

数秒の沈黙が流れた後、コーリスが口を開く。

「子供達は優秀です」

「日頃の指導の賜物ですね」

「生きる為の必死さは、魔物に襲撃されていれば勝手に付くような物ではないと思います。皆、アテナさんやエニユオさんを慕っているから……そして、そのアテナさんがここまで頑張っているからこそ、努力を欠かさないのでしょうか」

「私はそう生き急ぐ事も無いと思えますが」

「…………どうしてですか？」

コーリスは一瞬耳を疑った。アテナ達が救助し、壁を作るという判断を下さなければ壊滅していた筈の街だ。彼女に何時までも縋るといふ判断をしなかつた人々が、自分達の生存の為に日々を費やすのは自然な事。

ましてや街を助けたエニユオがその事を理解していない筈が無いと、彼は無意識に口を尖らせた。

「こう言つては何ですが…街の人々は運が悪かつたのでしょうか」

「…それは、そうですね」

「同時に、私達二人に助けられたのは不幸中の幸い。では、普通の人間は次に何をするでしょうか？ふふ…私は少し意地の悪い質問をしています」

「…………その2人に頼ります。出来るならば、街に長く居てもらおう為に…………」

エニユオの質問に解答する際、コーリスは驚く程自然に答えが頭に浮かび上がった。

恐らく、彼女は彼の思考回路や経験を元にこの質問を作り出したのだろう。多くの人間を救い、多くの人間の死を見てきた聖騎士、騎空団としての彼に向けた問い。

悩む振りをして…やがて答えを出す。

「…機嫌を取るでしょう」

「どのように、ですか？」

エニユオは逃さない。

「金、衣食住……最悪の場合、人を使います。今の時代には珍しいでしょうが」

大金を払う。充実した衣食住を与える。女を貸す。男を貸す。美男美女を番つがいとして与える。

そして…相手が理解の及ばない存在だと知った人々は、時に自らの同胞を生贄として扱う。滅多に無い事例だが、現在の世界でも有り得る行動だ。

空の民は生きる為なら何でもやれる。それには、良い事も悪い事も、そして必要な事も含まれている。

「…子供の前でする話ではありませんね」

「誰も起きていませんよ?」

「時と場所、という事です。もう意地悪はやめてくださいね」

その言葉に返答は無かった。

昼寝している子供達を起こそうと彼が腰を上げた瞬間——エニユオは無意識に聞いていた。

「何故、彼等は私達二人に依存しないのでしょうか」
「…」

「私達が他の場所へ行つてしまえば元の生活に戻ってしまう。その様な懸念はある筈ですが」

「それは…貴女達を敬愛し、崇拝しているからでしょう」

「崇拝?」

「アテナさんはもつと多くの人を救う…そう信じているから人々は自立しようとしているんだと思います。足を引っ張りたくないんです」

エニユオは少し考える素振りを見せた。

「では、パラディオンが壊れてアテナが再起不能になった時…彼等は武器を手にとると?」

「はい。必ず」

「そうですか」

彼女はただ下を向いた。

「……そうですか」

——表情を見せず、先程と同じ言葉を反芻した。

「ツ!!!??」

それと同時にコーリスが戦慄する。

何か。何か巨大な物が街の外に降り立ったと感じたのだ。

「…これは!」

「行きます」

「いえ、その必要は無いと思いますよ」

「何か知っているのですか?」

「はい。これはアテナの——」

「コーリス殿!!!」

名を呼んだ声はアテナの物だ。

脇芽も振らず、必死な様相で二人の元へ走っている。

「アテナ、子供達が起きてしまいますよ」

「そ、そうですね…はあ、はあ…」

「どうしました?」

一直線に駆け出して来たのか、汗を拭った後に彼女はコーリスの両手を掴んで顔を上げた。

「完成しましたっ!」

「まさか…あれが」

「パラディオンです!!」

後にコーリスは語る。

この時のアテナの表情が、大量の課題を終えた学生のような幼さと晴れ晴れしさを持っていた、と。

そして、エニユオの表情は追加の課題を用意する悪徳教師そのものであった、とも。

興奮する二人を他所に、エニユオは無言で手を振ってその場から離れていった。

辺り一面に存在するのは壁。

巨城を思わせる分厚い土色の壁。レンガの様な自然感に対し、高貴な神聖さを漂わせている。

人工物の様であり、天然物にも感じられる程の美しい圧が街を囲んでいた。

「これは…物理的な壁なんですか？」

「私の守護の力、その具現です。強固な城壁に見えますが、星の力と私の魔力で出来ているので、コーリス殿の魔法に近い物でしょう」

「…ほんとだ。よく見れば透けてるような」

「あらゆる魔法の威力を軽減し、大半は完全に弾く事が出来ます。防壁から発せられる波動が敵を押し弾き、その間に弓や銃を用いて打ち崩す戦法を取れば…もうこの街に危機は訪れません」

守護と平和の星晶獣アテナ。

その穏やかな性質と善性から、空の民からは頼もしい味方である戦士として、星の民からは戦闘に向かない裏切者として扱われていた。

だが、その実。彼女は覇空戦争時に作られた星晶獣の中では最高位の性能を持っているのだ。

この防壁は彼女の持つ守護の力を広く展開したもの。パラディオンへの攻撃は現状コーリスの火力を以てしても傷を付けるには程遠い。

そして、本来この力は盾に宿っている物。凝縮されていた防御力を防壁状に展開しているに過ぎない。彼女が万全の状態で盾を活用すれば——恐らく、本当の意味での戦女神になるだろう。

だが、その事を理解している人間はいない。アテナでさえも、守護という力の使い方に迷っているのだから。

「……と、いう事は」

「……」

「俺達の依頼は達成という事ですね」

「………はッ!？」

アテナは雷を浴びたかのように衝撃を受けた。

はつきり言ってしまったえば、コーリスとカリオストロが居た日々を当たり前のように感じてしまっていたのだ。

「…念の為。パラディオンの点検をしましょうか。2日ほど」

「取り敢えず目的達成したので報酬を」

「そんなに帰りたいのですか!？」

「カリオストロも限界なんです。騎空団としても一人に負担を強い状況なので…」

無論、ゾーイが疲れる事は滅多にないのだが…通常時の活動を一人に任せ続けるというのも情け無い話である。

「……………むう」

「子供達には防御魔法を習得させましたし、何なら最後の方は街の人

全員に教えましたね。ちゃんと使える筈です」

「その事には感謝していますが…」

「カリオストロも人造の防壁を強固にしました」

「その事にも感謝しています……感謝してもしきれない程に………しかし」

どうしても帰ってほしくない理由が彼女にはあるらしい。

その事に検討も付かないコーリスの頭には一つのこと過ぎて過ぎていた。

「ああ……っただけ心残りがあります」

一人だけ、どうしても防御魔法を使えない子供がいた。

「アルミスは大丈夫でしょうか」

「魔力量が少なく、身を守る盾を作れないという問題の事ですね」

「弓は上手だったんですが…」

「………子供は弓を使えない筈です。コーリス殿……もしや」

「………っ」

コーリスは口を塞いだ。アテナの睨みは止まらない。

「ごめんなさい」

「子供には子供の生き方があります。少なくとも災難に引きずられて戦いに身を落とすなど……」

「それは違います」

アテナはコーリスを見た。

真っ直ぐに此方を見ていた。

「強迫観念ではありません。村の人間は皆、自分達で生きる為に出来

る事をやろうとしているんです。貴女に全てを背負わせないという意味も込めて」

「…」

「貴女は…その、自分が想われている事をあまり誇らないんですね」
「…どんな事をして、体のいい償いに思えてしまうものですか」
「……………では」

コーリスは意を決した。

「俺達と一緒に来ませんか？アテナさん」

「私が騎空団に…？」

「はい。永い旅になりますが、目的は世界の為。迷う人々を救う事が俺の生きる指針です」

アテナは考えた。考える事はそう多くないが、それでも考えようと思いを回した。

人を守りたい。自分が殺めた人間たちに報いる事が出来るよう自分を殺しながら救おうと、奔走した。確かに、祈望の騎空団に入ればそれが叶うかもしれない。

だが、彼女は他人に自身の望みを背負わせられる程強くなかった。信頼関係という物を真に理解する機会が無かった故か、自分一人で何もかも背負ってしまう。

それがアテナという星晶獣の本質だ。

「お断りします…私には、貴方達に困難を背負わせる覚悟がありませんから」

「…そうですか」

コーリスは渋々呟いた。

「残念です。とても」

彼は、アテナの生き方に少し同情した。

「あ、先生」

「……………なに、やってるんだ」

アルミスが何時も訪れる弓の練習場。

別れの事を話しに来たコーリスの目に映ったのは、異常な光景だった。

——矢に、矢が刺さっている。

「私の力じゃ矢がちよつとしか刺さらない」

「…そうだな」

「だから、浅く刺さった矢を射って押し込めば突き刺さるんじゃないかって」

「それで、出来たど？」

「1射目さえ外さなければ…今のところ順調」

「はははっ」

コーリスは初めて天才という物を実感した。

リュミエール騎士団のスルトは体質が化け物だけで才能とは異なるし、錬金術には疎い為にカリオストロの技術を正しく評価できないからだ。

だが、これは分かる。弓矢を更に狙撃出来る人間は絶対にいない。出来ても偶々だろう。

「だが、動いてる的にそれが出来るか？」

「そう。そう言うと思った」

「……………」

「枝に矢を当てて的をグラグラにしてからこうやって……っ」

1 射目、揺れている的の真ん中に命中。

「次はこうっ！」

2 射目、先程とは異なる角度から弓矢を狙撃し、すでに刺さっていた矢を更に貫通させる。

「どうでしょう」

「天才。アテナさんに自慢していいぞ」

「やった」

淡々と喜ぶ様子から、アルミスはかなりの回数を成功させているのだろうと察せられる。

コーリスは考えるのを辞めた。

「なあ、アルミス」

「なに？」

「俺達、いなくなるから」

「じゃあ、お別れのパーティーやらなくちゃね」

悲しんだ様子を見せたが、それでも彼女の矢は一瞬もブレなかった。

「いっちゃうの……」

「やだよお……」

寝ていた子供達を起こし、この島から離れる旨を話したコーリス

は、予想外の泣き落としに出会っていた。

アルミスの淡白な反応とは真逆の、悲壮感溢れるものだったのだ。

「……えっと、落ち着けニコロ、ルルス」

「カリオストロのお姉ちゃんも行っちゃうの…？」

「ぶっ」

”お姉ちゃん”という言葉で反射的に笑いそうになったコーリスだが、子供達の表情を見て襟を締め直した。

しかしかける言葉が見つからない。会話の出力に難航していると…。

「ガキ共に囲まれて情けねえの」

後頭部を突いたのはカリオストロ。

「何だって好かれてる。変に関係深めると帰る時に厄介だつて言つたじゃねえか」

「そういうお前は…お姉ちゃんと呼ばれているだろ」

「呼ばせたんだよ。純粋なガキ共には眩しいくらいの美少女具合だからな」

「笑止」

「ああ、ちなみにお前はクソガキだ」

蹴りが直接足に当たるが、コーリスはビクともしない。

「悪いなお前等。オレ様達にも生活がある。まあ暇な時は顔くらい見せに来てやるから安心しな」

「そういうえば…カリオストロ、取り繕ってないな」

「ん？ああ、どうやら街に来た当初からこいつ等にアテナとの会話を盗み聞きされてたらしくてな…」

ひとときわ幼い子供の頭を撫でながら気怠げに返事をする開祖。

カリオストロはこの街を嫌っている訳でもなく、今すぐ取り掛からなければならぬ研究も無い。

だが、飽きているのだ。長い年月を生きると、何も発見が無く、長閑な場所に滞在する事は苦痛となる。当初はアテナとエニユオを元に星晶獣についての情報を集めようとしたが、ゾーイから得られる情報と同じ物しか得られなかった。

だから、騎空団としての活動も考えて帰る事にしたのだ。

「明日には発ちたい。コーリス、お前も支度しとけ」

「ええ!? パーティはー!」

「あと3日ー!!」

「うるせえ! スカート引張んな!!」

恐れを知らない少女達に弄ばれるカリオストロを見るのは、彼にとって新鮮な気分である。

「それが…アテナさんがどうしても帰ってほしくない理由があるそう
で」

「じゃあ言えってんだ。変な所で億劫だな」

「…聞いてくる」

「おう」

子供達との別れは本当にこれでいいのかと、何故かコーリスは考えてしまった。

別段今世の別れでもない筈であり、依頼で生まれた信頼関係である為に再開も容易なのに、だ。

「……実は街を離れる必要があります」

入っても……いいでしょうか？」

コーリスは驚いた。驚いて、優しく笑った。

「はい……その時はエニユオさんも、是非」

——その夜、コーリス達は街の子供達が開いた“お別れ会”に参加し、防御魔法の教え子達とのかけがえのない時間を作った。

カリオストロも案外面倒見が良く、手芸の様な感覚で錬金術によるオブジェを色々作ったり、アテナを模した小さな像を作って住民に見せるなど、珍しく羽目を外して暴れていた。

アテナとエニユオも、その日は防衛に注力せず、住民全体を巻き込んだ宴に参加して静かに空を眺めていた。

東の間の平和を……誰もが享受したのだ。

……そして、次の日。

「さて、行くぞ」

「長い依頼だったが無事達成だ」

「オレ様がいて幸運だったな、アテナよ」

「ええ、本当に助かりました」

「ガキ共も門の外までは来ねえよな……？」

「流石に危険ですからご安心を」

「エニユオさんはこれから出張ですか？同じタイミングですね」

「はい。すぐに戻ってくる予定ですが……一先ずお別れですね」

「やりすぎんなよ？」

「さあ、どうでしょう」

「エニユオ……」

「アテナ、戻りましたよ」

「…エニユオ？早いですね。もう街から帰ってきたのですか。まだ数日も経っていませんよ」

「ええ、手早く終わりました」

「外敵は少なかったのですか？」

「いいえ、数は多かったですよ。何分、魔物も人も街も全て壊して来たのですから」

「――」

「あまりに弱すぎて、蹂躪しがいがありませんでした」

「何を言って――」

「では、こっちも始めましょうか」

「……………これはあの時の白狼の群れ…!!」

「少し、あの時は出来過ぎた展開でしたね。お粗末な防衛劇を見せて申し訳ありません」

「まさか……………エニユオ……………!!」

「大丈夫ですよ、アテナ」

「コーリスさんは、きっと来てくれます」

60. どうして？

「なあ…」

「ん？」

「2日くらい経ったけどよ、やっぱあの街気になるよな」

「……………そうだなあ」

アテナの依頼を達成して2日の夜。

コーリスとカリオストロはノアが操縦するフロンティア号の居間にて寛いでいた。

ゾーイはかなり遠方の島にまで名を売っている様で、帰ってくるのは明日の予定だ。

「唐突に現れた魔物も気になるし…パラディオンがあれば大丈夫だろうけど」

「危機が去ったとは言いにくいだろうな。まあそんな事もあるうかとオレ様が一つ手を加えてやったんだよ」

「なんだ？」

カリオストロは指先サイズの光る球体を懐から取り出し、机に置いた。

「錬金術とは少し離れるが、土を媒介にした反応装置とでも呼ぼうかね」

「反応…？」

「あの街にはオレ様が堅くした壁があるだろ？内側のラインに沿って地面に何個か術を埋め込んだ」

「まさか情報の盗聴——」

「そんな都合のいいもんじゃねえ」

彼は一つだけ光ってない球体を指差した。

「埋め込んだ術に強い衝撃が当たると、その術に対応した玉の光が消えるだけだ」

「なる程。消え方で危機の有無が良く分かるな」

一つ一つじわじわと消えたら侵攻、全部が一気に消えたら爆撃、大雑把だが少しの考察は可能。

しかし、問題なのは必要な衝撃の度合いだ。

「どれくらいの衝撃で壊れる?」

「この前の白い狼が指標だな。走って大地がほんの少し揺れる程度：まあ、人が暴れても意味が無いくらいの衝撃だ。それと、小さな揺れでも継続すれば反応する様細工してある。弱い奴らが群れで来てもいいようにだ」

「空からは?」

「無理だな。それはパラディオンと弓に頑張ってもらうしかねえ」

カリオストロは一つだけ光が消えた玉を指で転がす。

「これは実験用に使った物だからな。今の所あの街は無事だと言える」

「なる程」

錬金術じゃなくとも、土属性が絡めば絶大な規模の魔法を発動出来る開祖に驚きながら、コーリスは玉を見続けていた。

なんとなく。本当になんとなく。

「なー。なんか夜飯作ってくれよ」

「いいが…また夜通し研究するつもりか?」

「まあな。ウロボロスに少し施しを——」

——消える。

「……………マジか」

「いきなりか…」

懸念していた状況が発生した。玉の光が2つ潰えたのだ。

街の一部に魔物が侵入してしまったと推察できるが…次の瞬間――

「は――？」

「――」

全ての光が、微小の時間差と共に消えた。

「――緊急事態だ。カリオストロ、行くぞ」

「分かってる。ノアに伝えておく」

どうやら――街の平穏には程遠い事態が発生しているらしい。

コーリスは剣と杖、そして刀を。カリオストロは魔導書とウロボロスを。

ゾーイが不在のまま、二人は殲滅用の装備で街へ向かうのだった。

事情を察知したノアが艇を早急に出し、操縦に乗り出して数十分。艇から島が見える程には接近していた。

「ノアさん、この後は島の外縁で待って下さい。必ず帰ります」

「…僕も戦おうか？」

「いいえ。ノアさんにはもしもの時に街の人を乗せて逃げてもらいます。恐らくは…」

「うん…無事を祈っているよ」

最終的に艇を降ろすには時間がかかる。だから、付近に近づいた瞬間にコーリスは飛ぶ事を決意した。

船の甲板に立った彼はカリオストロを腕に抱えて大地を見下ろす。

「行くぞ。口は閉じてろ」

カリオストロは無言で頷き、コーリスは足に力を入れた。

「——ッ!!」

全速力で前方へ駆け抜け、一息で飛ぶ。

足から魔力を噴出。風の抵抗を感じながらも槍の様な鋭さを以て前方へ降下していく。

「こ——これキッツ……………!!」

「舌噛むぞ!!」

やはり、即興の技術とは拙い物であるのが定石らしい。彼はゾーイが行う高速飛行を参考に行ったのだが、出力のバランスを誤ると体が崩れ、加減を誤ると空気圧に潰される。

空中に魔物がいない事は幸運だが、カリオストロにとっては島に着く前に死ぬ心地だった。

そして、焦った甲斐もあり、既に馴染みのある防壁が視認できる程近づいた。

だが——足りないものが一つ。

(……パラディオンが消えている、だと)

恐ろしい硬度の壁を量産出来るコーリスだからこそ感じ取れた、絶対的な防壁。それを魔物が破壊できるとは思えない。ましてや数が関係せず、絶大な破壊力を持った一撃が必要なら尚更無理な話だ。

自然に生まれた生命体には不可能と断言できる程に。

(つまり…壁の素となる球体——パラディオン本体を壊された可能性が高い。それか、アテナさんが再起不能になっているケース)

パラディオンを展開している球体は嚴重に保管されており、その場所は”神殿”と呼ばれている。

アテナやエニユオの許可が無ければ絶対に立ち入る事ができない聖域。侵入されて壊されるという状況を彼女達が許す訳が無いと、コーリスは考えた。

(エニユオさんが出張している隙と言っても、パラディオンと街の防壁を抜けて、更にアテナさんを相手取れる訳がない。やはり内側から……)

一瞬。ほんの一瞬だ。

(……)

奇遇にも二人の頭には、エニユオの顔が浮かんだ。

島が、街が近づく。

言葉は無かった。二人は見たのだ。家屋が破壊され、森が薙ぎ倒され、血が滴り落ちている戦場を。

街の隅々まで蹂躪している大量の白狼を——。

着地と同時にコーリスは盾を展開。カリオストロはウロボロスを周囲に巡らせ感知の役割を担わせている。

空中から直接街に降下した彼等の周囲には、既に白狼達を取り囲む様に位置を取っている。

「こいつ等……やはり突然現れるな。星晶獣か？」

「にしては一体一体が弱過ぎる。かと言って魔物にしては特異すぎる。召喚物や能力による付属品と思っただ方が良さそうだ」

「つまり、だ。こいつ等を生み出した奴がいる」

「……それだけなのか」

不可解な点が大量にある。

まず、防壁を壊された形跡が無いこと。次に、家や施設、監視塔に至るまで殆どの建物が壊されているのに対し、人間の姿が見つからない事。声すら聞こえない。

だが、後者の疑問は直ぐに解消された。純粹に生きている人間がないのかもしれないからだ。

「血の匂いも薄い……只の破壊活動か」

「何方にしろ殺す。それだけだろ？」

「ああ」

二人が戦意を滾らせる。それに呼応して白狼達が一斉に襲いかかるが――

「お待ちなさい、キュドイモス」

その声によって一瞬に動作を中止し、その場に待機した。

「……………どう、して」

先程の声は、いつも聞いた声だ。

コーリスにとっても、カリオストロにとっても、何処か安心出来ない声であったが、ここでの日常を過ごす内に慣れていった……透き通る声。

戦よりも、武器よりも——花が似合う。そんなイメージを抱かせる程の清純さ。決して、今の様に荒廃した花畑に立つ人物では無かった。

「エニユオ、さん……………」

「はいっ！」

エニユオが、血塗れの花畑で踊っていた。

「思ったよりも早くに来て頂いて嬉しいですよ。コーリスさん」

「……最初から、こうするつもりだったのですか？」

「おや、現実逃避をしないのですね。あちらの街では私の逆鱗に触れたと勘違いした村長が生贄を——」

「話を逸らすなツツ!!」

コーリスの目にやっと映った人影。それは、エニユオの足元に転がる小さな物体。

腹に風穴を開けられた子どもの身体。

防御魔法を教えた子供の内の一人だった。

「ええ、そうですよ。最初からアテナの作ったこの街を壊す予定でした。大きく育ちましたからね、それなりに時間はかかりましたが」

「子供まで…ニコロを殺してまで……………!!!」

「子供達だけではありませんよ？皆、逃さず殺して差し上げたのです」
「何故そんなにも楽しそうに…っ!」

「人を快樂殺人者の様に言わないで下さい。私の目的の為には街の人々に死んでもらわなければなりません。ああ…いえ、そうですね…目的達成というには語弊がありますが、より良い効果を見込めると思ったので、という感じですよ」

会話は成り立っているが理解は及んでいない。

少なくともコーリスが感じたのは、エニユオが確固たる意志を持ってこの凶行に及んだという事と、そもそも人の命に何の価値も見出していないという事だった。

「真面目に答えるとすれば…性質のせいでしょうか」

コーリスが剣と杖を構えた時、エニユオはひとりで語り始めた。
カリオストロはそんな彼女を強く睨む。

「破壊と蹂躪の星晶獣。私は何かを壊し、蹂躪し、踏みにじる事こそ本懐でした。かつてはそんな自分は正しく無いと思って、色々良い事をしてきましたが…つまらないのです」

辛い過去を吐露する様に、彼女は両手で胸を抑えて語り続ける。

「だって、幸せな人間や魔物が態々生きる事を辞める訳が無いでしょう？だから私は星晶獣の性に従って、全てを蹂躪する事を認めたのです。食欲や生存本能と一緒にですよ。私は他者を齧る事で生きているのです」

「…途中で踏み留まれた筈ですよ」

「躊躇うも何も、壊す為に育てていたので」

「……………そうですか」

人の言葉を話す害虫。彼は、そんな表現を使う日が来るとは夢にも思わなかった。

「とはいえ、壊すだけの為に何年も我慢する程無欲ではないですよ」

言っている意味が分からない。

「アテナです」

「は？」

「アテナの為に街を育て、壊したのです」

周囲の狼——キュドイモス達は動く気配は無い。

自我はあるが、動作はエニユオの支配下にあるらしい。直接操る物ではなく、服従しているという事だ。

もはやエニユオの語りは誰の耳にも届いていない。否、耳には届いていても、理解されない。理解を求めていない。

今まで自分は我慢してきたのだという自慢に近い。

「私に破壊と蹂躪の性がある様に、アテナにも味方を守護するという性が備わっていました」

「…」

「まあ、見ての通り生真面目なので…人間の為にならないだとか、過干渉は良く無いとか、色々言っていました。最終的には罪滅ぼしのもりだったのでしょうか。今無駄になりましたが」

「楽しいですか……………」

「はい。楽しいですよ？だって、アテナの望みは何百年もの積み重ねです。そのパラディオンによって成就された街の救いを…………私が見事破壊して差し上げたのですから!!」

「オイ——」

ここでようやく、カリオストロが口を開けた。

「テメエ死んだぞ、サイコ女」

「――！」

元よりコーリスとカリオストロはエニユオの話など聞いていない。この惨状を引き起こした張本人という情報が確定した瞬間、既に用意していた。

(出力最大――霧!!)

フオク

コーリスの杖から瞬きする間に霧が充満する。その速度は、風と勘違いする程に洗練されていた。

第三段階の霧。それは敵の記憶を飛ばすという代物。霧の弱点であった、相手の強固な意思で弾かれるという部分は初見殺しの後に仕留める事で補うしか無かった。

そして、その対策の為に鍛えた霧の放出速度。霧そのものに自身の魔力を乗せた速度特化の魔技。

その効果は、相手が反応出来なければ必ず通る。意思を固める余裕を齎さないからだ。

「――？」

エニユオとキュドイモス達の思考が止まる。その一瞬は彼女の足元に隙を作った。

「ウロボロス!!」

「なっ――！」

地中から彼女の足元に出現したウロボロスが、エニユオの胴体に齧

りつく。腕ごと拘束された彼女は、傷は負わないまでも槍を振れない。

周囲の狼も即座にコーリスに襲いかかるが――

「座標特定――」

「四元集中――」

――両者の奥義が既に発動していた。

「ガンマ・レイ!!」

「アルス・マグナ!!」

霧によつて、ピンポイントに標的を特定し、杖を用いてその足元から魔力で焼き焦がすガンマ・レイ。

そして、4元素のエネルギーを炸裂させるアルス・マグナ。

普通の星晶獣ならば既に再起不能になっている規模だ。現に狼達は跡形もなく消滅している。

だが――

「――少し、評価を改めましょう」

「…チツ。ウロボロス！離れろ!!」

「私を簡単に壊せるとお思いですか？自らの弱点は把握していますよ」

エニユオは防御についての特殊な能力は持ち合わせていない。

ただ圧倒的な破壊力と――そして。

「私にも壁くらいは作れます」

召喚したキュドイモスによる数の暴力――蹂躪。

(やはりオレの読みは間違つてなかった。星の奴等が適当な二つ名を付ける筈がねえ。そこそこの強さと大量に召喚できる特性から、蹂躪か)

エニユオは破壊と蹂躪の星晶獣。

破壊とはエニユオの槍、蹂躪とは召喚されたキュドイモス。彼女はアテナと同様、2つの能力を持ち合わせていた。

先程の攻撃を防いだのは、召喚された群れによる肉壁である。

「……あらっ？」

エニユオは背後を見る。しかし誰も立っていない。
彼女の疑問は一つだけだ。

「コーリスさんは何処へ？」

「さーな」

どの段階の霧にも付随する感知能力、それによりコーリスが感じ取った物は——数名の生存者。

エニユオが放った皆殺しにしたという言葉は、彼女の目の届く範囲で直接やった事だろう。現に、街の全てを覆い尽くすキュドイモスが逃げた人間達を殺している。

無論死体も感知したが、今のコーリスはその事実を封殺して噛み殺し、救出に向かっている。

エニユオやキュドイモスが気付かない場所——家屋の下敷きや、瓦礫の裏へ。

「やっ、と」

カリオストロが前方を見据える。

その表情は複雑で：口角は上がっているが、瞳孔は開き切ってお

り、目は笑っていないという表現を使う事すら憚られる程の気迫。最早威嚇に近い。

「こうなった原因はオレにある訳だ。お前と初めて会った時の疑いを捨てて、アテナと一緒に信じちまったんだからな」

「恥じる事はありませんよ？長年付き添っていたアテナも気付きましたから」

彼は下を向き、乾いた笑いを浮かべた。

「……」街の事を想っている”、”アテナの目的の成就を願っている” …お前はそんな事言ってたよな。まさか壊す為に育ててたなんて ……はは、確かに嘘は言ってたねえもんなあ…」

「随分喋りますね。私としてはコーリスさんを曇らせる方が楽しいのですが…。アテナよりは現実を見ていますが、若々しい夢が砕ける瞬間というのは趣がありますし」

「…」

「カリオストロさんは…冷酷という訳ではありませんが、何かに屈する事は無いでしょう？そうなってしまえば私と貴方の間に起こるのは只の戦いです」

エニユオは暗に、カリオストロなど相手にならないが、蹂躪に値する悲痛な表情が見れない事への退屈を吐露している。

だが、コーリスも含め、カリオストロの本気を誰も知らない。

「勝った気でいんなよ——糞虫風情が」

「…」

カリオストロの魔力がうねる。

土を主体とし、周囲の元素との共鳴を果たした彼の力は相当な物であり、その空間は揺れ響く。

彼の怒りに呼応する様に、ウロボロスが叫ぶ。

「ウロボロス、そいつは食わなくていい——潰せ」

「…………ふふ！」

「潰された蟻みたいに、砂利みたいに殺して…………この世にいた痕跡を絶対に残すな」

「まあ、そこまで怒ってくれるなんて」

エニユオはキュドイモスを再び呼び出し、共にカリオストロへ駆け出す。

それに対し、彼は足で大地を叩き上げた。

エニユオは眼前に迫る地盤を槍で切り裂き、目の前のウロボロスと相対する。

「——悪いが、形振り構わず消させてもらおう。死ね」

「可愛いお顔が台無しですよ？」

開闢の錬金術師、カリオストロ。

都市の破壊者、エニユオ。

——両者、激突。

61. 道化の守護者

——防衛街、住宅集合地にて。

(早く…早く!!)

コーリスは霧で発見した生存者の元へ全力で走っていた。キュドイモスに見つかる前に…傷で死に至る前に…カリオストロが耐える間に少しでも早く、救助しなければならなかった。

「どけええ！」

周囲に蔓延る狼を切り裂き、目の前で崩れている家の玄関をほじくり返す。

「あ…」

「ルルス！」

コーリスは気が付かなかった。現時点で生存している人間の中には子供が多い事に。

——エニユオが故意に子供を生かしている事に。

「かえってきてくれたんだ…コーリスせんせ」

「ちよつと痛いぞ…踏ん張れっ」

家の下敷きになっている少女を助けようと、彼は瓦礫を全力で持ち上げた。

「…あ、ああああ！」

少女の両腿から先が潰れていたのをコーリスは見た。

「ち、ちよつといたいよ…せんせい」

痛みすらも感じぬ程に麻痺している意識。出血量からして、大人ですら助かる見込みのない致命傷。

段々と光を失っていく瞳を見て、彼は必死に掌を握った。

「大丈夫だから…大丈夫…」

「せんせい…エニユオさま、を…まもって」

「……………え」

「おおか、みに…おそ……………わ…、れ——」

死んだ。

彼が初めて直面した幼子の喪失。

少女は、最期まで自身を殺めた神を…崇拜しながら事切れた。

「」

コーリスは自身の心が一つに染まるのを実感した。

「エニユオオオオオオオオ
!!!!!!」

それは、殺意。

結局、彼が感知した14人の内、死亡したのは8人、無事に救出出

来たのは5人である。

残りの1人は何故か感知した位置から移動していたのだ。

「外に魔物はいません。俺が狼の注意を引きまますので、この林を抜けた先の艇に乗り込んで下さい。ノアという青年がいます」

「はい…分かりました。…その、アテナ様とエニユオ様は」

唯一の大人である青年に子供達を託し、街の外の安全を確認した上でノアが待つフロンティア号に向かうよう促した。

「アテナさんの位置は掴めていません。申し訳ありません。エニユオは……………」

「い、いえ…私は子供達を守りますので…どうか、街をお願いします」

コーリスの様子から、全てを察した青年は林に向かって音を立てない様に動き始めた。

「先生…死なないで」

「頑張つてコーリス先生！」

「エニユオ様とアテナ様を守つて…！」

「……………ああ」

子供達はエニユオを信じ続けている。

街の人間が殆ど殺されたという事実を受け止めた上で、泣き叫ぶ事すらせずにコーリスに希望を託し、他者を気遣っている。

コーリスは、そんな彼等を裏切ったエニユオを絶対に許す事が出来なかった。

(…アルミス。どこだ)

発見した死体は全て原型が残っており、街に住む人物の中で、唯一

アルミスとアテナが見つかっていなかった。

コーリスの霧による感知は動きと呼吸を察知する。アテナは星晶獣故に人体とは異なる性質を持つ為、正確に察知できなかつたのだと彼は考えた。

そして、確かに存在した気配であるが、姿を消した1人。それがアルミスであると仮定すれば、自力で逃走しているのかという結論に至った。

しかし、先程からエニユオとカリオストロの激戦区以外に霧を送っているが、それらしい動きは感知できず、やつと神殿にてアテナの気配が読み取れた程度である。

ならば、考えられる事は1つ。

——アルミスは二人の戦場の中にいる。

コーリスは確実に助ける為、アテナの意識がある事に賭けて神殿へ向かった。

(仇は取る。必ず…エニユオを殺す)

——防衛街、広場。

「そ、らあっ!!」

「……………ふっ!」

カリオストロの生み出した槍状の土砲がエニユオを串刺しにせんと襲いかかる。エニユオは槍を振ってそれ等を砕き、追撃にかかるウロボロスを避けて一歩下がった。

しかし、ウロボロスの口が地面に接触した瞬間、彼女の足が地に沈

む。

(なる程…竜も錬金術の行使が可能なのですね。この子達にも見習わせたいくらいの機敏さと戦術性。これは正しく2対1……)

「出来ますね、貴方」

「■■■■■■!!!」

ウロボロスはカリオストロが生み出したホームンクルス人造生命体。

その特性は”完全性”と”循環”。完全性は不朽の肉体を表し、循環は錬金術による再生を意味する。つまり、何にも毒されない頑強な肉体と、仮に破壊されても補強できる利便性があるという事だ。

加えて、ウロボロスはただの竜ではない。時には錬金術の媒体となつて主の術を強め、更に自身も錬金術を行使する事ができる。

——つまり、カリオストロが増えた様なものである。

(…これは先程の)

ウロボロスの口からアルス・マグナが放たれる。

だが真に警戒すべきはカリオストロの動き。エニユオにとって、突然消えたコーリスの事も気がかりであったが、既に数の理は覆されている。

よつて、彼女が手を抜く必要は無い。

「ポリスクラスト——」

「つやべー」

背後から術を用意していたカリオストロが咄嗟に判断する。

これはまずい、と。街にいた時から恐れていた、エニユオの大火力が自身を襲おうとしている。

長い戦闘経験が漠然と危機を察知した。

「——ハアッ！」

360度、全方位に槍の刺突が襲いかかる。その一突き一突きが岩盤に風穴を開ける威力であり、当然人体に当たれば即死である。

カリオストロとウロボロスは事前に大きく回避したが、逆に距離を取ればキュドイモスを召喚する隙を与えてしまう。

彼は冷や汗を隠せなかった。

(範囲はそこまでだが、後ろを取る癖があるコーリスなら当たったかも知れない……)

しかし驚いたのはエニユオも同じだった。

(攻撃力を常々見せていたとはいえ、私と戦うのは初見の筈ですが……ここまで接近してくる魔法使いは初めてですね。)

周囲の地形が徐々に塗り替えられていく。

土属性に秀でた星晶獣であっても、大地そのものを捏ねる芸当は不可能である。純粹な属性魔法とは異なるアプローチを生み出したカリオストロの戦い方は、星の生造物であるエニユオにとっても珍しく感じたのだ。

彼は周囲に回転する刃を配置し、多数のキュドイモスに対する抑止力として備えた。

そこで当然、エニユオは考える。

(近付いて欲しくないのなら……纏めて吹き飛ばす)

大地の形を変えて操作しているだけならば、強度面に変わりは無い。彼女が槍を振るえば尽くを砕き、その隙に狼を指し向ければ問題は無いのだ。

彼女は槍を振りかぶろうと構える。

「――バーカ」

——それは誘いだつた。

「!?」

「ペネトラレー」

カリオストロの右手の指先から発射されたのは高密度の水圧線。
キュドイモスへの対応に見えた土の備えは、エニユオの大振りを誘
発させる為の演技に過ぎない。

(水………!?!?)

「元素の研究には自信があつてな。この分野に至つてはお前等の創造
主よりもイケてると思うぜ?」

高速で飛来したレーザー状の水に対し、エニユオが取れた行動は槍
の側面による受け流し。

しかし、技をワンテンポ置いて放つ程彼は優しくくない。

「カデーレー!」

左手を翳した瞬間、周囲の地形が一気に瓦解し、巨大な岩石となつ
てエニユオの頭上に降下する。

その岩石はキュドイモスの壁でも勢いを殺し切れず、彼女は遂には
水への防御を捨て、潰されぬ様に両手で耐えた。

引き換えに水はエニユオの左肩を貫き、彼女の力は少し弱まってし
まう。

その間にも、カリオストロは水を出していた右手を前方に構え、指
揮を執る様に手首を回した。

「言つたら、形振り構わず殺すつてな。お前が悪いんだぜ」

「他属性は想定外ですが……」

「それは大いに結構つてやつだ。サルターレ」

「……」

サルターレ。火の元素を以て錬金術を行使した物体に熱を与える技。

エニユオが岩石から感じた熱は、反射的に身を翻してしまう程度の強さを秘めていた。

彼女は降下した岩石を槍で破壊しておくべきだったと後悔した。

身動きが取れない敵に対し、カリオストロは静かに右手を上げる。既に熱を与えた土は、術を解除しても冷める事はない。致命の一撃を存分に用意できる隙を生じさせたのだ。

(後悔の隙も与えねえ——確実に断ち殺す!!)

彼は刹那の怒りと共に右手を手刀の形で振り下ろした。

「——アブシンデーレ!!」

「」

風の元素を極限まで圧縮した不可視の斬撃。その威力は、大国の城壁すらも真つ二つにするものだ。

エニユオに向けられたその技は、彼女を押し潰そうとしていた岩石ごと切り裂き、巨大な土煙を発生させた。

(…コーリスに会わず殺せたか。ラツキーだったな)

カリオストロは心から安堵した。

攻撃性からして、相性の悪いコーリスと対面させる前に倒し切れた事を。

そして何より、エニユオという存在をコーリスに殺させたくなかった。

それはコーリスの心の負担を考えての事だ。仮にも一月を過ぎし

た間柄を怒りのままに殺す。それは躊躇いも無く可能だと分かっているが、そのドス黒い憎しみは、コーリスに悪影響を与えるかもしれない。

(…嫌な目に遭うなんてのは、ガキを卒業してからでいいんだよ)

幼年の頃から苦勞したカリオストロだからこそ、若いコーリスには大きな絶望を知ってほしくなかったのだ。

目的は達成したと、彼はコーリスを追おうと背を向ける。

……しかし。

「……マジか」

カリオストロは背後から足音を聞いた。

「土属性をここまで極めた人間は見た事がありませんね。いえ、錬金術という土の派生を創り出したというべきでしょうか。純粹に興味が湧いたのは久し振りです」

——エニユオ、健在。

戦局が再び変わる。

——数分前、崩壊した司令塔の跡地にて。

「っ……アテナさんっ!!」

コーリスは遂にアテナを見つけ出した。

瓦礫に潰された形では無く、上に横たわる様に倒れていた彼女の姿は、彼が想定していたよりも軽い傷であった。

「アテナさん！聞こえますか！」

しかし、何度揺さぶっても反応一つ見せない。死体に近い感覚を覚える程に、彼女の身体は震えさえ起こさなかった。

「なぜ……………いや、これは……………!!」

その時、コーリスはアテナの横に落ちていた白いガラス片の様な物を発見した。

余りにも小さい破片であったが、彼はソレを見て理解した。

(……………パラディオン)

パラディオンの本体である白い球。

ここより遠方の神殿にて嚴重に保管されていた、この街の最終安全装置。それが壊されているどころか、消し飛ばされている異常事態。

「……………」

そして、彼はアテナの傷の浅さから、彼女の沈黙はパラディオンの破壊が原因だと推測した。

パラディオンはアテナの権能を注ぎ込んだ防壁。思い切った言い方してみれば、これは彼女そのものだと言う事が出来る。

魔力の様に数日経てば回復する物とは違い、これは星晶獣を星晶獣足らしめる能力を分かち、一つの武器として使うもの。

つまりこれを破壊される事は、彼女の身体の消滅と同義である。

パラディオンにはアテナの防御力が殆ど使われている為、今の彼女

には何かを守護する力が足りていない。

権能の破壊による弱体化と魂への大打撃……その隙にエニユオは彼女を無力化したのだ。

「…あ」

そして——アテナが殺されておらず、態々遠い位置に放置されている事。霧で感知した当時の生存者は全員が身動きが取れない状態にあり、死ぬ直前であった事。

2つの事実から分かる事がある。

「——」

それは、2対1を回避する為の時間稼ぎなどでは無い。

コーリスの目の前で子供達を死なせ、彼の心を壊した後、意識を戻したアテナに全てを見せる事。それがエニユオの狙いだ、コーリスは気づいた。

エニユオは他者の身も心も蹂躪する事が本能。

彼女はコーリスがどれほどの凄惨な表情を見せながら帰ってくるかを、今か今かと待ち望んでいるのだろう。

「——殺す……」

エニユオの狙い通り、彼の中で何か切れた。

(やはり…コイツ、まだ何かあるな?)

水で貫き、土で潰し、火で爛し、風で割った。

それでも尚、エニユオは水や火の傷を薄く塞ぎ、何事も無かったかの様にキュドイモスを召喚し、槍を向けている。

風の攻撃を掻き消された手応えは無かったが、かと言って直撃したとも言えない現状に対し、カリオストロは冷静に思考を巡らした。

(……もしも、だ。あの馬鹿みたいな攻撃力は只の身体能力で、”蹂躞”の召喚能力に加えて……”破壊”に当たる能力を持っているなら……)

カリオストロの焦りは現在の事ではない。これからの事だ。

彼の錬金術の弱点は、大火力と概念による破壊・分解。

そして、エニユオが持ち得るのは純粋な破壊力と未知の能力。もし、彼の風がその能力によって相殺又は掻き消されたと考えると……。

(その破壊の力が概念攻撃だとすると……絶対に防げねえ)

あらゆるものを破壊する力と、あらゆるものを破壊できる程の力では、意味が大きく異なる。

前者は防御力を無意味にする概念攻撃、後者は防ぐ事が出来ない程強力な攻撃力。

カリオストロは後者であることを強く祈った。何故なら彼本人が防げなくとも、防げる可能性を持つ仲間がいるから。

だが、前者であった場合はどうしようもない。キュドイモス達に手を焼けば纏めて消し飛ばされる。

何故エニユオがその力を最初から使わなかったのかも説明が付く。単に甦りたいからだ。

(……クソ女。マジでハイスペックだな)

彼の中で一段とまた、星の民の好感度が下がった。

しかし、彼は笑う。望む方向に戦いは進まなかったが、たつた今、心配は杞憂に終わったのだ。

「オイ、お前：戦いで焦った事はあるか？」

「驚いた事はありませんが、焦った事は無いですね。貴女との戦いも驚きの連鎖でしたよ。ああ：霸空戦争時には少々不愉快な出来事もありました」

「なる程な。で、もう勝った気か？」

「貴女の顔を見れば分かります。少し戦いを長引かせると直ぐに絶望してしまう」

「…」

「ですが、貴女を蹂躪しても得られる喜びは微小の物。残念ですが、手早く死んでもらいますね」

「ああ：そうだな——」

「…?」

——なんとなく、エニユオが背後を見た。

「ッ——」

エニユオの頬に剣が掠る。

極限まで隠された気配と万感の殺意。辛うじて回避した彼女の顔面にもう一つの攻撃が迫る。

「コ——」

「エニユオオオオオオオ!!!」

それは、全開の魔力を込めた左拳による純粹な殴打。

「!!!」

彼女の身体が衝撃に耐えきれず、周囲の瓦礫を巻き込んで吹き飛ばぶ。

「フウ………フウ」

開闢と破壊者、その戦いに参戦したのは――

「お前を壊しに来た……エニユオ……!!」

――灰の聖盾、コーリス。

「……てな訳で、第2ラウンドだ」

「……はあ」

笑顔と共に投げかけられたカリオストロの言葉に、エニユオは苦笑いで返した。

決して無視できない苦痛。故に顔を抑えながら立ち上がった。

「ここまで来た速度に驚きました……ここまで痛いと思ったのも初めてです……ですが」

「……」

「その表情を見れば、私のした事は無駄では無かったと心から思えます」

エニユオの槍に力が加わっていく。

それは風の様にも、魔力の様にも見えた。

「では――本気で行きましようか」

現時点を以て、余興は終わり――。

6.2. 開祖も人の子

「シヨゴスは失敗だった」

「アレでは空の動物の性能に依存してしまうし、時間がかかる」

「そして何より、本体が使えない」

「破壊力と、それを補う為の力を備えた獣が必要だ」

「感情に左右される能力は不要だ。懐柔して大群を成すよりも、軍勢をそのまま作る能力が効率的だ」

「空を相手取るとなれば、姿形は奴等に似せた方が都合がいい」

「……完成だ、” 星晶獣エニユオ”」

「——お前は奴らを欺き、巨城を破壊し、渦中で蹂躪するのだ」

どんな人物か、それは最後まで分からなかった。

ただ、何故かエニユオは創造主の言葉を忘れる事が出来なかった。

「能力の詳細は」

「狼の召喚に際限は無い。とはいえ召喚する速度自体は早くない。注意するべきは空中や地面から召喚出来るのかだ」

「他には？」

「全方位に対応した槍技。そして、恐らく持ち合わせている破壊の能力。あの身体能力よりもう一段上があるだろうな。避けれるなら盾は使わない方がいいぜ」

「了解した」

エニユオが体勢を立て直している内にコーリスとカリオストロが情報の共有を果たす。

「…俺から悪いニュースだ」

「なんだ」

「アルミスがエニユオの足元…その瓦礫の下に隠れている」

「……は？」

「…兎も角、助ける隙にエニユオに狙われたら死ぬ。場所を変えた方が良さそうだ」

「…まじかよ」

アルミスの死亡は確認されていない。少なくともコーリスが感じ取った時は移動可能な状態であった。

彼はカリオストロの戦闘を阻害しない様にこの場以外で霧を展開していたが、一切感知できなかった。それ故、付近にいる事はほぼ確定していた。

そして、現在薄い霧を出しようやく判明した位置。それはエニユオの付近にある家屋の下。

恐らく、外へ逃げるのは悪手だと理解したアルミスは、敢えて崩れた家屋の下に隠れて息を潜める事にしたのだろう。

その事実を受けてカリオストロは顔を青くした。地盤を崩して岩石を作ったり、風で付近に大きく傷を付けたりもした。

もし巻き込んでいたのなら…。

そう考えていた所でエニユオが仕掛ける。

「ツ―来るぞ!!」

槍を天に向けたエニユオ。

二人は彼女の行動により何が引き起こされるかを予測する。

自強化か、召喚か、ただの構えか——それとも、未だに見せていな

い大技か。

「——おいでなさい。キュドイモス」

エニユオの選択は召喚だった。

——但し、一つ手を加えて。

「カリオストロ!!」

「っ…問題ねえ!」

高速で襲い掛かってきた爪にカリオストロの腕が削られる。

彼の身体の硬度を考えれば薄皮一枚程度の負傷だが、一般人で考えれば”抉る”程度のダメージになってしまう。

(…カリオストロさんは仕留めておきたかった。やはりこの子達は使えません。後でお仕置きですね)

キュドイモス・グラツニア。

この技の効果は、キュドイモスが攻撃の動作を行っている状態で召喚するというもの。敵に向かって飛び付く状態、爪で引き裂く体勢、それ等を全て完了させた狼を無数に呼び出す。

エニユオがキュドイモスを召喚する際に、更に力を加える事で成し得る技であり、予備動作で判断する事が出来ない恐ろしき力。

(この狼達は直ぐにでも倒せるが…大きさと速度、攻撃力はかなりの物だ。食らった事は無かったが、カリオストロに傷を付けるとは…)

寸前で避けたコーリスは狼への評価を改めた。

食らってはいけない。そして、手間取ればエニユオ本体が此方を好きな様に殺せる。

その不条理に彼はある姿を重ねた。

多くの凶悪な魔物を従え、空から戦禍を齎した許されざる星晶獣。

「…シヨゴス」

「……………あら、久し振りに聞きました。あの肉塊はまだ生きているのですか?」

「リユミエール聖騎士団が殺した」

「でしょうね。アレは弱いですから」

エニユオは心からの侮蔑を見せた。

「シヨゴスが失敗したから私が作られたのです。能力の類似点は多いでしょう?」

「…用途は違ったようだがな」

「シヨゴスを介して感情を理解したところで、私達の創造主の技術は変わりませんでした。ですので本当に無駄な肉塊という事になりません。視界に入れるのにも辟易していたので駆除していただいております」

「妙だな」

「何がです?」

「戦争事情に詳しいと言っていたが…リユミエールの空戦の事は知らなかったのか」

「ああ…」

エニユオは彼の言葉の返答を考えた。

「被害状況で国の強弱を確認していただけですから、別段顔も知らない人間が幾ら死のうと興味はありません」

「そうか。そろそろお前との会話にも無駄が見えてきたな」

コーリスは剣と杖を構える。

カリオストロの傷は大したものでは無く、かと言って最初のように会

話の間に術を仕込む事もせず、時に時を待ち続けていた。

そして、エニユオが注視するのはコーリスの杖。杖によつて高速展開される盾と光線、それ等がどの様に放たれるかを注視しているのだ。

(彼等が強者であるのなら、私の攻撃は回避する判断を下している筈。そしてその上でキュドイモス達をどう捌くか…それも吟味しなければならぬ)

エニユオは二人の思考を手取るように読めた。悪辣な笑みが抑えられず、手で隠そうとすらしなかった。

(…では貴方達が取する方法は、一人が私との接近戦を選び、その隙間にもう一人がキュドイモス達の殲滅を。これしかありません。あの竜も考えると…殲滅の役割はカリオストロさんでしょうか)

ならば自身の相手はコーリスだと考えられる。その事実に行き着いた瞬間、エニユオの頬は紅潮した。

(——いいでしょう。来てくださいコーリスさん。いえ私から行きましょうか!?!いい加減我慢の限界です!アテナも控えているのに……!!)

今すぐ踊り出したい。今すぐ殺したい。歪ませたい。消し飛ばしてやりたい。

本質に起因する欲求が彼女の脳髓を支配した。

「…ケーニヒ——」

(……………あ)

そしてエニユオは理解した。

この戦いは虚の突き合い。相手の想定外を追求し続け、それに耐えなければならぬ。コーリスとカリオストロはエニユオの未知の力

に備えなければならぬし、エニユオ自身も二人による大量の手段を冷静に分析しなければならない。

だが、彼女はコーリスが防御の為だけに盾を使う訳ではないという事を忘れていた。

告げられた技名から記憶が呼び起こされる——！

「——ゲフェングニス」

（あの時の檻——！）

コーリスが使用した技は、以前キュドイモスの大群を閉じ込めた檻。そして今はエニユオだけを封じる小さな結界として使用した。

——どの道壊されるのなら、エニユオに槍を振らせない狭さまで凝縮すればいい。

（振れない……突き壊すしかありませんね）

しかしその隙は恐らくない。カリオストロとコーリスが今にも技を浴びせてくるだろう。

キュドイモスを先に一掃するのならは一瞬の間も生まれるだろうが、先にエニユオを殺す判断の方が単純で楽である。

「カリオストロ！」

「任せな！出力二重——！！」

カリオストロは技を放つ際の特別な技術を3種類持っている。

- 1、右手と左手で別々の属性を扱う事。
- 2、ウロボロスを紹介した出力の上昇。その逆に、カリオストロ自身もウロボロスの技に手を加えることも出来る——謂わば相互補完的な関係。

そして3、ウロボロスと共に全く同じ技を放つ——実質の2倍攻撃。

「——アクア・マグナ!!!」

その水撃は弾丸の様に速く、砲撃のように弾き、正確に標的のみを撃ち抜いた。

コーリスの檻ごとエニユオを——否、周囲のキュドイモスすらも纏めて薙払われる。

カリオストロはこの3種の技術を用い、人生における数々の戦局を難なく乗り越えてきた。

純粋な火力と正確な狙い。アルミスに被害が及ばぬ様に水属性を用いたが、少なくとも手傷は負わせている筈。

「がはっ……………」

地面に叩きつけられたエニユオは自戒する。

如何に力があつたとて、キュドイモスを従えたとして、火力と戦略に優れた強者が2人：ウロボロスも含めれば3対1という戦力差。力押しで倒すにも、彼等は少々多才過ぎる。

「な」

そして、被弾と同時にキュドイモスを差し向けるのは想定できていた事だ。彼女は少しでも体勢を立て直せる隙を作る必要がある。

予想外だったのは、現存するキュドイモス全てをコーリスへ差し向けた事。

「コーリスー!」

急遽自身の周囲を守る盾を展開したが、それを覆い尽くす様に噛み付き群がるキュドイモス。20匹以上の大狼が彼の血肉を貪らんと押し潰す。

既にコーリスの姿は見えず、キュドイモスによる球体が形成されて

いた。

「畜生共が…!!」

「——効きましたよ」

「……………クソ！」

コーリスを助けようと術を展開したが、背後には既に槍を振りかぶったエニユオが立っていた。

肩や腰、胸元に散弾銃の弾痕の様な傷を負っているが、彼女は星の民が作った不変の星晶獣。力を再生に回せば塞がる。

「がっ……………!?!」

腕を交差させ、その先にウロボロスの尻尾を置いて防御したが、彼女の攻撃力を完全に消し去る事は出来ず、カリオストロは大きく吹き飛んだ。

直ぐに体勢を立て直し、彼は地面を駆け巡るウロボロスの背に乗ってエニユオの追撃から逃れる。

「土を纏ったウロボロスでも捌き切れねえか。クソ…街中じゃ無ければやりようもあるんだがな…!」

ウロボロスによる高速移動に並行して走るエニユオを前に、彼は完全に後手に回っていた。

「そらあ!!」

「はっ！」

カリオストロは土の球体を3つ生み出した。

その玉にエニユオの槍が触れた瞬間、鋭い棘が飛び出し、彼女に襲いかかる。

「小細工」

「見てから躲すかよ」

しかし、彼女の進撃は止められない。全身に付き刺さろうとしていた凶器を、体を捻じり横に飛ぶ事で回避、直ぐに加速してウロボロスの胴体を破壊しようと走り抜ける。

「化物が…だが、少なくとも街から…アルミスからは離れられてる。外に出たらデカいのぶちかますからな、壊れんじゃねえぞ」

「■■■！」

「よし、良い子だ」

ウロボロスが更に加速する。

倒壊した家屋を巡る両者は、既に常人には捉えられない戦闘を繰り広げていた。

設置型の術により地面からの攻撃を繰り出すカリオストロと、槍の先で大地を削りながら移動するエニユオ。既に災害と呼べる規模にまで達している。

「ハアッ！」

「…っ！」

そして遂にエニユオが追い付く。

脳天へ目掛けた槍撃は辛うじて回避したカリオストロ。冷や汗を流しながら彼は両手に土を纏わせた。

「う、おおおおお!!」

狙うは両手首。ウロボロスから飛び込み、エニユオの腕を掴んだ。彼の掴んだ先から土が同化していき、関節が銅像の様に硬化してい

く。このまま侵食が進めば全身が固まり、1つのオブジェに変貌するだろう。

「ふふ」

だがエニユオは嗤う。彼女は足でカリオストロを空中に蹴り飛ばし、密着状態から逃れる。

そして肩を大きく動かす事で：純粹な力のみでカリオストロの土を割り、拘束術を解除した。

「く、そ!!!」

「あは」

飛ばされながらもカリオストロはエニユオに対し水圧線を放ち、貫通では無く切断を試みて薙払った。

「あははははははははは!!!」

射線上の全てが両断されているのにも関わらず、エニユオはそれ之間一髪で躲しながらカリオストロに迫る。

「終わりですッ!」

「シグナートス!!」

カリオストロは両手を握り横に打ち付けた。

エニユオの動きが空中で止まる。先程彼女の身体に纏わり付いていた土の欠片が液体の様に溶け、更に粘土のように一定の硬さを持ちながら締め付ける。

シグナートス。水と土を合わせた術だ。

「投げろ!」

推進力を失ったエニユオは落ちるのみ。

カリオストロの足を啜えたウロボロスが敵の腹部に向かって主を投げ込む。

落ちる怨敵を更に粉々にする為に…人間の尊厳を軽んじた、愚かな星の獣を撃滅する為に。

「オラア！」

エニユオに繰り出された右拳。

「無駄ですよ…？」

「ここからが面白いんだよ…！」

如何に堅牢な肉体を持つカリオストロであろうと、少女の身体である以上重さは無く、ウロボロスによる投擲の速度が合わさったとしてもエニユオに大きなダメージを追わせる拳撃は放てない。

故に、これは術なのだ。

彼は左手を右肘に添えた。

——開闢の少女が吠える。

「爆ぜろ——ルプトウーラアア!!!」

「まさか——」

瞬間——壊れ果てた防衛街の空が割れる。

ルプトウーラは、彼の拳に宿った火と風の属性を過剰に合わせる事で、互いに屠り合うエネルギーを解き放つ技。

それは傍目から見れば爆発と呼べる代物であり、甚大な破裂音が空中を支配する。

つまり、彼自身が耐えられる事を前提とした自爆技。

(まずいですね)

エニユオは久しく味わなかった苦痛を噛み締めた。

苦痛だけでは無い。自由無き身体、弾き飛ばされる意識…どれも戦う上で経験する事は少なかった。

何故なら、キユドイモスがいなくても彼女は敵を殺せたからだ。雑魚なら狼に食わせておけばよかった。多少面倒なら数で押切り自分が貫けばよかった。

しかし、キユドイモスのリソースはコーリスに割かれ、自身はカリオストロの手段に踊らされている。

彼女に戦士としてのプライドは無いが、それでも自身が不利に陥る現状に苛つきを感じ始めていた。

祈望の騎空団の戦闘要因3名にはそれぞれ秀でた分野がある。

ゾーイは速度と火力。コーリスは偵察と防衛。そしてカリオストロは――攪乱と手段。

完全無欠に思われるエニユオが嫌うもの。それは自身の物量と破壊力に対応できる手段の数なのだ。

ひどく強力でシンプルな能力な故に、彼女は正面から敵を打ち破る事しか出来ない。そんな戦い方は、錬金術の開祖たるカリオストロの奇術には悪相性だったのだ。

(キユドイモスを此方へ戻すか…いや、それならコーリスさんも相手取らなければならない)

地面に激突したエニユオは違和感に気付く。

(……まさか)

たった一人に差し向けていたキュドイモスの大群が、消え失せている事に。

「ハア……………ハア……………」

「耐え切りましたか…」

攻撃力だけならば他の星晶獣にも劣らないキュドイモスを耐え切り、更には殲滅までもしている。

その代償か彼の身体は少々血塗れであり、急所や目は避けているが、少なくとも裂傷が見受けられる。

「終わらせる」

「最適解は力だったな。安牌は失敗だった」

カリオストロも合流し、ウロボロスも入れての3対1が再び始まる。

最早カリオストロとウロボロスに苦戦を強いられていたエニユオが勝てる見込みは薄い。

「ッ…キュドイモ——ぐ!？」

「甘え!」

キュドイモスを召喚しようとした瞬間、コーリスの斬撃とカリオストロの土拳、ウロボロスの尾が襲いかかる。

致命傷となり得る斬撃は槍によって防いだものの、残る2つの攻撃は防ぎ切れず、背中に大きなダメージを受ける。

(逃げなければ——な……………)

挟み撃ちの形だけは避けなければならない。そう確信した彼女は

飛び退こうとした。だが、既に脚は地面に固定されている。

「死ね——！」

「終わりだ」

コーリスは剣に魔力を込めた。カリオストロは浮遊する土の小剣を数個作り、エニユオの首筋に飛ばした。

それぞれが必殺の動作を取る中、渦中の本人は何故か——

「ああ、この為でもありません」

——笑った。嗤った。嘲笑った。微笑った。

「ねえ——アルミス？」

エニユオは槍をある地点へ差し向けた。

崩れ去った家屋。離れていたとはいえ、先程コーリスが感知した範囲内——アルミスが隠れている場所だ。

「!!!」

この時、コーリスは改めて理解した。

アルミスでさえも、キュドイモスによって誘導され、故意に生かされてあの位置に留まったのだと。

「アルミス!!!」

コーリスは駆け出した。キュドイモスでもエニユオ本体でもない。

只、槍から何かが放たれると直感した。

「……これです。この……」

恍惚に頬を歪めたエニユオが心の限り叫ぶ。

「この瞬間がたまらないのです!!」

破壊の力。その力が槍の先から光線の形で現れる。

コーリスは間に合わない。アルミスが逃げても間に合わない。

では——カリオストロは？

「……ははっ」

合理性の人間。自身の肉体すら捨てられる開祖。才のある人間を好み、無能を嫌う超越者。

そんな彼が、子供一人の為に命を賭けるだろうか？

「……………あ」

「あら、これはこれで好都合ですね」

——結果、偶然にも射線上に近かったカリオストロが飛び込み……………彼の左が消し飛んだ。

「カリオストロ!!!」

戦いは、これから始まる。

63. エニユオの薄暮

分かっていたはずだ。

『おいガキ。オレ様を仲間にしたといっても顎で使えるところだよ。無償の人助けなんてやらねえからな』

『そうか』

『…本当に分かってんのか?』

『そういう言い方をする人間には沢山会ってきたんだが…皆、最終的には人を助けてしまう』

『くだらねえ。そこら辺のツンツンキャラと一緒にすんじゃねえよ』

カリオストロは優しい奴だつて、分かってたはずだ。

「あははははははははは！」

廃墟の空に悪魔の愉悦が響き渡る。

「そんなものですか!?!」

「舐めるなアアアアアアア!!」

一点に突撃するエニユオに対し、剣でその槍を弾き飛ばそうと振りかぶるコーリス。彼はアルミスを庇ったカリオストロをこれ以上壊させない為に、戦場に空中を選んだ。

現時点で、彼は盾を足場にして展開しているという事。

しかし、設置型の技や後出しの初見殺しで対応出来ていたカリオス
ト口と違い、コーリスは正面からエニユオと相対しなければなら
ない。

最終手段として記憶を奪う霧、オブリビオン濃霧があるが、星晶獣に使った場
合、その一部であろうとも数百年に渡る濃密な記憶を取り込みかね
ない。そうなった場合に待つ運命は廃人化。

やはり物量対物量の戦いになってしまうのか。

「キユドイモス！」

「っ…ハア！」

エニユオはコーリスの剣に触れる間際、キユドイモスを召喚して刃
を嚙ませた。

一瞬動きが止まるコーリスに対し、彼女は背後に回り込んで右腕と
背中の服を掴む。

「いつきまーす、よッ!!」

彼女はコーリスを地面に向かって投げた。

「…ハッ」

勢いがつく前に盾によるクッションを作ったが、衝撃を殺しきれず
吐血。

全身に伝わる衝撃が彼の意識を弱らせ、その間にもキユドイモス達
が包囲を開始する。

(召喚さえできれば無尽蔵…馬鹿げてる)

魔力を込めて薙払えば蹴散らせる存在ではある。しかし、隙を作る
度にエニユオに攻められるのであれば絶対に勝てない。ジリ貧どこ

ろか一回で消し飛ばされてもおかしくは無い話だ。

(…時間を稼いでカリオストロだけでも、いや、エニユオをここで殺せなければ全てが終わる!)

「ごめんなさい、アテナさん」

「心配せずともアテナは悲しんでくれますよ」

コーリスは覚悟を決めた。

死んでもエニユオを倒す。彼の持てる全ての魔力と技術を使う。

その為には…街を更に壊してしまうだろう。

(…今まで感じたことの無い魔力の高まり…本気ですね?それが貴方の選択ですか)

エニユオも同じく槍に力を込めて構える。数十のキュドイモスと共に駆け出す準備は出来ている。

「破壊と蹂躪の星晶獣——エニユオ」

「殺戮者に名乗る筋合は無い——征くぞ」

「連れない人…その顔を歪ませてあげましょう」

矛と盾。破壊者と守護者。

——これが『守護と破壊のモノマキア』と^決呼ばれる^戦戦いの始まりであつた。

「ぐ、はあ、はあ……あー！」

「カリオストロさん！」

地上にて、カリオストロは這っていた。

エニユオの槍から放たれた光線、その直撃により彼の左腕は根本から抉れる様に消失していた。他にも左側の腰、脇腹、ほんの少しの頬が消し飛ばされており、身体の強度を度外視した被害を受けたのだ。

「私の、せいで」

「んな事……いつて、る場合か……!!」

カリオストロは自分でも分からなかった。たかが弓が上手いだけの子供を無意識に助ける自身の人間性が。

故に、その解らない事を考えている暇を捨て、コーリスが相対するエニユオの事を第一にした。

(破壊の力……オレの身体の硬さでも消し飛んだなら概念系……いや、ダメージの段階に差があつたな)

カリオストロの身体は急所である程固く、対魔力も優れる様作られている。頭部や胸部、首は剣で貫けない硬さである。

先程食らった光線は、腕の付け根は一瞬で削ったものの、胴体付近は少しの時間を要した。

そこから導き出される答えは――

(理不尽の一步手前……エニユオの”破壊”は触れている物を最終的に破壊する攻撃！対象の硬度によって時間差はあるが、技を浴びている限り森羅万象尽くが壊される……！)

概念攻撃ではある。だが、あらゆる物を一瞬で壊すものでは無く、硬度に左右されるものである。

例えば、恐ろしく硬い鉱石は壊せるが時間はかかるし、逆に人体程度であれば紙屑と同じく一瞬だ。

(コーリスに必要なのは盾の量じゃねえ…硬さと厚さだ！それさえあればあの光線から逃げる時間を稼げる…あいつの魔力量なら受けられる可能性もあるが…)

コーリスなら対策は出来る。しかし、問題は彼が能力の仕組みに気が付くかどうかだ。

多数の盾で威力を分散などと考えた瞬間に全てが終わる。纏めて貫通し、風穴オブジェの出来上がりだ。

カリオストロは死に体に鞭打って力を行使した。

「ウロ、ボロス…操作権をお前自身に返す」

「■■■■……!!」

「その、ガキを…ノアの元へ連れて行った後…コーリスの元へ行け…!」

「■■■■■■!!」

「分かってる…死にはしねえよ…だが、コーリスが…コーリスが、だ」

「待つて…!カリオストロさんは!」

「どの道お前には何も出来ねえよ…。黙って祈ってな、アルミス」

ウロボロスは主の命令を遂行する。尾でアルミスを縛り早急にノアの元へ移動する。

死にはしないと断言したが、カリオストロは根拠の無い断言が一番嫌いだ。

らしくない事をしてしまったと溜息をつく。

「……は、は。こんな事……しなけりやもつと楽に勝てたのに……」

（馬鹿だ。ガキを助けて戦いを窮地に追いやる事も、ガキを見捨ててそのまま勝つのも。くそ、クソ）

カリオストロは今の自分が出せる力を振り絞って術を行使する。

「わりいなアテナ……街の奴ら……。死体のねえとこ使うからよ……」

指先から土元素へ。土元素から大地へ。大地から空へ。

「お詔えの戦場だ……暴れろ、コーリス」

その瞬間、防衛街の大地が膨れ上がる。

「……お前は強い子だからな。頑張れよ」

そうして、カリオストロの意識は消えた。

「……」

「これは……」

大地が、街が地上から削り取られている。

空中で戦っているコーリスとエニユオの元へ浮上する広大な地は、まるでそこで戦えと言っているかの様に、彼等の足元で止まった。

「足場…？」

「カリオストロ……」

コーリスは意図を察した。暴れる、と。

「……………了解」

「……………」

コーリスは大地に魔力を流した。

足元からのガンマレイ。戦いの初めに使った意識外からの攻撃。

当然エニユオは避けようと後ろに飛ぶが…。

「……………」

足元——否、そんなものではない。

大地そのものが魔力を吹いている。活火山の様に、彼等が踏みしめる大地全体が攻撃範囲。

「くっ……………」

エネルギーの奔流に身を焼かれながら、更にキユドイモスを焼いた光も彼女の元へ合流し、光線の標的は一点に集中する。

「が、あ……………」

「ハア!!!」

槍を振って攻撃を消そうとしていたエニユオに迫るのは剣と杖。手数の差はコーリスに軍配が上がる。

当然防ぐのは剣。ならば杖をどうするか。

「シイ——!!」

「させません……!」

灰の杖は高重量の杖。鈍器としても使用できる様作られたコーリス専用のメイスとも言える。

その打撃は敵の頭蓋を砕かんと襲いかかったが、エニユオは杖の持ち手を左手で受け止め先端を止め、足でコーリスの腹部を蹴る。

しかし——。

(——鉄?)

彼はピクリとも動かない。エニユオの身体能力は彼と同程度の筈だったのに、だ。

「砕けろ!」

「!」

虚を突かれたエニユオの腹部に剣と杖の柄頭が突き刺さる。

「ガフツ………!!」

衝撃に耐えきれずエニユオの身体が高速で吹き飛ぶ。

それに並行して追撃を試みるコーリスは彼女を更に蹴り飛ばす。

「ア……!!」

大木に激突して動きを止めるエニユオ。

彼女の左右に巨大な盾が出現する。

(まさか……!!!)

彼の人生、魔力を使い切った事は無かったが、この戦いはその勢いで無ければ生き残れないと判断した。

(盾を作るにしても、薄氷を何百枚作ったところで壊される。いっその事最高硬度を量産する勢いでなければ防げない。なら避けるべきか)

2つの選択肢の中、彼は決めた――

(いや、撃たれる前に殺す)

――どちらでも無い選択を。

(……未恐ろしい)

激戦の最中、エニユオが密かに感じたのは意外にも感心だった。

(あの甚大な魔力量を満遍なく使えば、肉体強化は勿論魔力の壁によって此方の攻撃は通らない。加えて盾の強度は素の私では少々手こずる……キユドイモス達なら或いは……)

そして彼女も頭を横に振って考えを捨てた。

(……もう蹂躞とは言えませんか。仕方ありません。避けられる前に私の能力で貫くとしましょう)

奇遇にも、両者の戦法は同じものだった。

――殺られる前に殺す。何処までも似た戦闘思考。この二人はこの戦いが起きる前からそうだった。性格は合わないのに、戦いが関われば通じ合う。

それは互いが殺し合うとしても変わらなかった。

「…」

「」

沈黙。何方が先に攻めるのか。

速度に秀でていているのはコーリス。破壊の能力を解放した今、攻撃の一挙手一投足に利があるのはエニユオ。

「――ア!!」

「ッ……………!!」

先に動いたのはエニユオ。槍で頭を貫く必要は無い。破壊の力を纏った槍は、触れるだけで対象の肉体を削り取る。故に狙ったのは胴体。

(霧を出しましたね…!・目くらまし以外にも用途があるのは分かっています!)

コーリスは薄い霧を展開し、エニユオの動きを事前に感知する事で回避に力を回した。

彼は知っている。リュミエールには彼女よりも突きの速度に優れた騎士がいた事を。その騎士との競り合いに比べれば巨大な槍など恐るるに足らず。

「キュドイモスツ!!」

「ぐあっ…!?!」

避けられるのならば、エニユオは単純に考えた。

少しでも気を逸らせば良い。何時もやっていることだ。

召喚されたキュドイモスはコーリスの手首に食らいつき、腕輪状に展開された盾によって未然に防がれるもその牙は離れない。

視界と動きが制限され、破壊光線を通す間合いが空く。

「ツさせるかー！」

コーリスは腕に食らいついたキュドイモス諸共エニユオに突撃し、破壊の能力を受ける肉壁として振り回す。

「甘いー！」

しかし彼女は光線を出さず、力を纏った槍をそのまま薙ぎ払った。上体を反らして避けるコーリスに次の手が差し迫る。

「行きますよ…!!」

ポリスクラスト。剣で言う斬撃の様に突きの衝撃を飛ばす技。

破壊の力が乗った今、その突きは一突一突が人体に風穴を開ける魔技である。

(死っ——)

死の予兆。今までの戦いから生み出された警報が彼の全身に冷たい圧をかける。

コーリスは後退せず、あえて上空に飛んだ。本来ならば隙だらけの無防備を晒す愚かな策となるが、上空に盾を作れる彼ならば、立体的な動きによって問題なく敵から逃げる事が可能。

「おいでなさいー！」

「雑兵を呼んだところで——！」

エニユオは反撃の隙を与えない。攻撃を完了させたキュドイモスを上空に召喚し、コーリスの全身に群がる。

カリオストロとの戦いで彼を分断した様に、この攻撃は足止めにも有効だ。

しかし今のコーリスは違う。魔力を総動員させ、自身を覆う檻を作り、キュドイモスが激突して怯んだ所を光線によって処理する。

そして次の瞬間にはエニユオが背後にいる筈だと、そう思っていた。

「……？」

しかし、エニユオは動かない。

目を閉じ、槍を天に傾け、何かを祈っている。

(……………まさか)

——それは、奥義。

(阻止しなければ!!)

大技を感じ取ったコーリスだが、キュドイモスの召喚は止まらない。奥義の溜めと共にキュドイモスの召喚を並行して行い、相手の攻撃を阻害しているのだ。

そして——遂に。

「……………は」

「——これで、終わりに致しましょう」

目を開けたエニユオの付近にキュドイモスが並ぶ。

彼等は吠えている。敵の終わりを告げている。主の攻撃を待ち望んでいる。

彼等は、月夜の号令をかけている――

「貴方の全てを蹂躪させてください」

――乱戦キユドイモスの始まりを。

「ルースレス・タイラント
!!!!!!」

光が全てを抉る。

カリオストロを倒した光線とは比較にならない速度と範囲を持った極光が、コーリスの全てを塵にせんと奔る。

「あ――」

盾、展開できたが無意味。

迎撃、不可能。

回避――

（避ける避ける避けるよけ――）

走馬灯すら流れない確定の死。

コーリスが取れる行動、それは空中で惨めに手を動かす事だけ。

（防げ、防げ…なにか）

刹那の時…彼の目に映ったのは。

（……ノスタルジア）

右手に握られた、愛剣だった。

「すまん！」

コーリスは剣に魔力を集中させ、その腹を思い切り踏み込んだ。

（ダマスカスを練り込んだノスタルジアなら或いは…耐えてくれ…
!!）

「う、おおおお!!」

薄皮程度の盾に剣を当てる形で足場とし、自らは他の方角へ飛び込む。

全身を飲み込む光を相手にするには心許ない防御面だが、最初に盾を展開できた事だけは幸運だった。

「があっ!!!」

盾が豆腐の様に霧散し、剣が削られる歪な音が鳴り響いた。

だが――

「…!?!」

コーリス、健在。

ノスタルジアを犠牲にした、奇跡の生還である。

「押し殺す…!!」

コーリスが杖を天に向ける。

奥義後の隙は万人の共通点であり、ましてやエニユオの技は未だ撃たれている最中。

未だ形を保ってはいるものの、剣の強度を犠牲にしたコーリスが放てる攻撃技は光線か霧、そして刀である。

そしてコーリスが選択した技は――

「出力最大……！」

――盾であつた。

「ケーニヒ……エルガー――！！！！」

ケーニヒエルガー。

リユミエールが誇る防御魔法ケーニヒシルト。コーリスはその防壁を様々な形で応用してきた。時には柱型、時には檻の様に。

それ等を守る為に形を変化させ使用してきた。

ならば、この技はどうなるか――。

「やってくれますね……！！」

この技の狙いは――圧殺。

杖によって、魔力が許す限り高速で防壁を作り続け、球状に重ねる事で巨大な球体を形成。

その絶大な大きさは、小島程度であれば容易く飲み込む。

「行け！！」

そしてその巨塊に魔力を乗せ、推進力として扱う事で指向性をもた

せる。

コーリスが持てる技の中で最大の質量攻撃。

「……!!」

エニユオが再び槍を構える。

カリオストロの術によって持ち上げられた島に影が被さる。防壁の巨塊が隕石の様に空中から降り注ぐのだ。

街中であること、人間が住む事、それ等の状況故に通常時では魔力を全開放出来ないコーリスが、初めて破壊規模を無視して全力を出している。

エニユオはようやく死に瀕したカリオストロの狙いを理解した。

「ルースレス……タイラントオオ!!」

エニユオ、二度目の奥義。

このままではこの大地諸共彼の技で押し潰されてしまう。しかし巨塊を落とす為に彼が離れられないという事は、逆にこの技さえ受けてしまえば問題ないという事。

破壊の槍か、守護の殺意か。残った方が勝利に繋がる。

(大きさに惑わされてはならない……彼の防壁を打ち崩せば勝機は此方に……!!)

(ここで耐えれば確実に次の手を打てる……!!)

光と質量が激突した。

「うおおおおおおお!!!」

「ハアアアアア!!!」

単純な押し合い。これまで錬金術、召喚、不意打ちによって構成されていた戦闘が、火力と防御力によって決されようとしている。

しかし、エニユオのルースレス・タイラントは全てを破壊する光線。彼女の最強の技であるソレを抑え切れた者は400年間存在しなかった。それどころか、この技を撃つ前に敵は朽ちていった。

何処か味気ない戦いの味に、彼女は失望していた。

(…案外、悪くないものですね)

だからこそ全てを出し切れるこの戦闘は、彼女にとってほんの少しでも娯楽の感情を見出すのに充分だった。

(ですが…これに勝てればもっと楽しい事があるんです…!!)

しかし、蹂躪の快樂には程遠い。

やはり戦いは下らない。彼女は最終的に今の愉悦を消し去り、これから起こすであろう災厄に思いを馳せた。

故に、コーリスは最早不要。邪魔な敵。

(これ以上長引かせるのなら…死んで下さい)

エニユオは冷静、冷徹に、それでいて情熱的にコーリスを消し去ろうと出力を上げた。

「くっ…!」

「この技に数秒耐えた事は褒めて差し上げます。けれど、それだけ」

エニユオとの戦いで重要なのは、火力で勝ることではない。彼女の破壊の力は技そのものを崩壊させる。故に、押し合いで必要なのは受け皿の硬度と厚さ。

コーリスの巨塊の推進力を向上させたとしても、それそのものが壊されては意味が無い。

ならば、盾を足すしか無い。

「ぐあ、あああああ!!!」

魔力は未だ尽きない。だが、大量の魔力を一瞬で行使する事で起こる身体への負担は計り知れない。

巨塊に盾を追加し、硬度が増した所でコーリスの意識が消えてしまえば意味が無い。それは敗北を意味する。

だが、それでも彼はやらなければならなかった。

その献身に——悪魔が微笑む。

「手応えが……!?!」

激突していた筈の光線が弱くなっている。

その違和感に気が付いたその瞬間——

「何故いつまでも私が火力勝負に付き合わなければならないのです?」

背後から、破壊者の嗤う声が。

「があ——!?!」

身を捻ったコーリスの脇腹に、破壊の光線が突き刺さる。

「貴方もカリオストロさんと同じです。私が真面目に相手をすると思ってしまった。本当に、ふふ…下らない」

エニユオは初めからこれを狙っていた。

自身の技でコーリスの巨塊を削り、盾を追加させる事で疲弊させる。

自身が回り込める——その隙を。

(どう、やって…?)

コーリスはその疑問に対する答えをすぐに目撃した。

(狼に……自身を投げさせていた、だと……)

コーリスが自身の技によって視界が狭まるその一瞬、エニユオは召喚したキュドイモスに自身を囓ませ、彼の背後まで投げたのだ。

皮肉にも、カリオストロを投げたウロボロスの動きによって着想を得た掠め手だった。

「ばか、な……」

コーリスの巨塊が落ちる。大地が震撼する。

しかし、その技は最後の最後まで無意味であった。

割れた大地の破片が防衛街の中心部に落ち、術によって持ち上げられていた足場が元の場所へ戻っていく。

「原型を留めていただいで大変助かります。お陰で蹂躪する機会が作れますね……はあ……楽しみです」

質量攻撃によって凹んだ足場にコーリスは落ちた。

脇腹が抉れたとて、内臓に届く程では無い。その点では彼の回避能力は健在だったと言えよう。

しかし、止血をした所ですぐに動ける傷ではない。エニユオはそれを良く分かっているのだ。

だから、彼の元へ歩みだす。

「刺し殺しましょうか、消し飛ばしまようか、噛み殺しましょうか……
それとも」

「はあ……あ………な」

「起きたアテナの目の前に、首を置きましょうか……？」

絶対的な破壊者の前では、全ての生物は頭を垂れるばかりなのか。
少なくともコーリスは、これ以上抵抗できる気力を失った。その姿
を見てエニユオが身悶えするかのように震える。

まさに、恍惚。

「貴方の事は好きでしたよ。では、さようなら」

悪魔が、槍を振り下ろす。

64. コーリスの黎明

「あああああ!!」

「……」

コーリスは足掻いた。

振り下ろされたエニユオの槍を避け、杖を振るって——足を払われ、砂利粒の様に転んだ。

(このままじゃ、カリオストロが…ノアさんが、アテナさんも……皆、みんな死ぬ……!!)

「がああああああ!!」

「…その惨めさ、悪くないですよ」

恥も尊厳も捨てた姿は誰もが見苦しいと思うものだ。しかし、エニユオはその姿こそ見たかった。

希望も戦意も全て削いでこそ蹂躪。この茶番劇は彼女が満足するまで終わらないだろう。

飛び付いてきたコーリスを蹴り飛ばし、再びゆっくりと距離を詰める。

光線を放てば終わり、槍で穿てば終わり、キュドイモスでも終わり…それだけの事であったが、暇潰しにはもってこいの状況だ。

——アテナが起きてから目の前でコーリスを殺す。
エニユオはそう心に決めた。

「はあ…はあ………」

「ん?」

気が付けば、コーリスが足を掴んでいた。
だからどうという事も無いのだが、万力を込めて掴んでいた。

「時間稼ぎのつもりでしょうが…私に勝てなければ意味がありませんよ。」

「だま、れ……………」

「本当にカリオストロさんと似ていますね。人間の考え方です」
「く、うう……………!!」

反応を伺おうと言葉を投げかけてみても取り合わない。エニユオにとつてそれは寂しいものだった。

その代わりと言うべきか、彼は剣も杖も使わずに噛み付いた。駄獣の様に、鎧越しの足に食らいついていた。

「ふ、ふふ……………あははっ」

エニユオは笑いをこらえ切れなかった。

「お行儀が悪いですよ？お仕置きです…！」
「がっ!？」

意趣返しだろうか。エニユオの拳がコーリスの頬に突き刺さる。

「もつと鳴かないと付き合いませんよ？」

腹、腿を順に踏み、胸ぐらを掴んでゴミの様に放り投げる。

まだ、終わらない。彼が諦めない限り、何度でも苦痛を与えに近づく。

「…ア…は、あ」

「虫の息、とまでは行きませんね。生き物というのは案外死にません。

壊す事は簡単ですが、緩慢に死なせるのは難しいんですよ」

「……く、たばれ」

「……………」

そして突然、エニユオは仰向けに倒れるコーリスを抱き起こして……頬ずりをした。

「やはり貴方は良いですね。子供達が壊れない玩具を欲しが理由が今分かりました……」

「――」

「……殺します。貴方の目の前で、アルミスも、生存者達も……全員。カリオストロさんは……まあ、頭を踏み潰せば流石に死ぬでしょうか」

「やめろ……」

「いいえやめません。もう、我慢できません」

「エニユオ……!!」

されるがままのコーリスからは見えなかったが、エニユオが浮かべている表情は恐ろしく歪んでいた。

目の前の人間の不幸しか望まず、災厄を愉悦と感じる異常者が抱えた純粹な喜び。

これはエニユオの永い生において、最も幸福な時間だ。

しかし、コーリスは。

(……これで、いいのか)

死の間際に何故か。

(なあ――)

犬神宮の。

(――バジユラ)

かけがえの無い、そんな相手の事を思い出していた。

あれは確か、バジユラが……いや、ヴァジユラの案だったか。
今となってはお笑い草だな。

『なあ、コーリスよ』

『なんだ?』

『…いや、その…聞くべきか本当に迷ったんだが』

『ん…?』

『口からビームって本当に出せるのか?』

『……………血迷ったか』

『いやさ、ヴァジユラが言ってただろ。剣や腕を光線の噴出口にして
いるのなら、口から出せるんじゃないかって41話を参照』

『…お前の妹が心配だ。いや割と本気で』

『出来るのか出来ないのかどっちだ…』

『まあ…前に言った通り出来ると思う』

『おおく気持ち悪ッ』

『……………絶対にやらないけどな』

『口が焦げるしな…ん、待てよ?ならば我は口から斬撃を』

『やめろ』

『え、いやでも綺麗に出せば口を切らずに』

『お願い、やめて。そんなお前見たくない』

『え、あ…うん。分かった。やらない』

『…お、焼けた』

『香ばしい香りだな。何を焼いていたのだ？』

『甘い甘い焼き芋だ。ほら』

『あ、ありがと……うまうま』

お前が死ぬ前の……いつだったかはもう覚えてない。

今思えば馬鹿みたいな話だった。

その後は……。

『良い匂いですね……サツマイモですか？』

そう、ヴァジュラも来たんだ。

『お一つ頂いても良いですか？』

『ああ。はい、これ焼き立てだぞ』

『ありがとうございます！』

『……妹よ』

『どうしました？姉さん』

『これはコーリスが我に焼いてくれた物だぞ……空気を讀まんか』

『ええ………』

『姉さん……』

『……今の無しで頼む。流石に大人気無かった』

『反省できるなら最初から言うなよ……はい、もう一つやるから』

『染みるなあ………ぐすん』

しかし、何だってこんな事を思い出すのだろう。

芋と口からビームの話しかしてないだろ。

『……それで、コーリス様』

『ん、どうした』

『お口から光線は出せるのですか』

『姉妹め』

『言っておきますが、私は冗談で言ったつもりはありませんよ』
『尚更怖いわ』

『それで、どうなのですか?』

『…わかったよ。出来る。出来るから、もう』

なんだこの会話。

…そういえば、カリオストロが仲間になってから団の雰囲気は緩んだ気がするな。

人が多いというのは、そういう事なのかもしれない。

『…そういえば、姉さんが戦い方を教えたとか』

『えーと、どの話だ?』

『多分“やられた側の立ち回り”の事じゃないか?』

『あー、それか。確かに教えたぞ。誰でも出来るからな』

『私も姉さんに教わった時には驚いたものです。意識してみれば簡単でしたから』

——そうか。

『自身が大きな傷を負ったとなれば敵は確実に、そして単純に勝負を決めに来るからな。そうなれば冷静に敵の止めを見極めて隙間に打ち込めばよい』

『…実際の局面になってみないと分からないな』

『なに、別段特別な場面ではあるまい。自分がやられて、敵が迫ってくる。これさえあれば存分に足掻ける』

『私は逃げる時に使っています。継戦能力は勝つ為に必要ですからっ！』

——今になってこの会話を思い出したのは。

『演技をする必要は無い。ただ、惨めに激しく足掻くんだ。生きる為』

に、勝つ為に』

『…』

『卑怯だと思うか？構うな。手負いの獣を確実に殺せない相手が悪い』

——この為か。この為だったのか。

『私の技は、全て生きる為のものだからな』

—————

「ぐう……あ」

「大丈夫ですよ。まだ殺しません。ただ、その生意気な態度は矯正しなくてはなりませんね？」

エニユオがコーリスの胸を圧迫する。

万事休す。抗う術は無い。彼は玩具。悪魔の愉悦を満たす為の道具に過ぎない。

——先程まではそうだった。

(…まだまだ。溜めろ)

手も足も動かさず。剣は地面に落ち、杖は辛うじて手に収まっている程度。

しかし、彼は謀っていた。

(一か八かだが、やるか死ぬかならば俺の言葉などくれてやる……!!!)

エニユオの顔面を光の奔流が覆い尽くす。

無論、それはコーリスの口から発せられたものだ。

普段手や杖から発せられる光線。そのありったけを彼は口を砲台に見立て放出したのだ。

(く、ち……………!?)

エニユオは突然の苦痛よりも驚愕の感情が勝ったが、直ぐにコーリスの身体から離れようとする。

しかし――

「ガッ!」

後手に回った時点でエニユオの強みは消える。

コーリスの左手が彼女の首を掴んで動きを止めた。

「――スウ」

「…が…ぐ……………」

そして第2波を放とうと口を大きく開くコーリス。

死を前にした人間に身体の一部の犠牲など比べられる物ではない。

何を犠牲にしようとして生き足掻き、敵を殲滅する本能こそ、人間に残った数少ない獣性。

「がは……………!!」

ギチギチと締まる首、拘束された身体。であれば、逃げる事よりもコーリスを先に殺さなければならぬ。

エニユオは槍を短く持ち、彼の胸を狙う。

「——あ」

だが、同時に彼女の腹部に突き付けられた杖。口で光線を出し、左手で首を締めているのなら、右手が空いている。

——ゼロ距離での光線が2つに増えた。

「はアアアアアア!!!」

「——!!!」

口を焼こうが喉を焼こうが関係ない。千載一遇のチャンスを我が身可愛さで逃す程、彼は甘く育てられていなかった。

(まずい……離れなくては……!彼から距離を……が)

エニユオは再び顔面を至近距離で焼かれ、抵抗が出来ない様に腹部にも杖から直接光線が撃ち込まれている。

コーリスの光線は見た目程火力に優れる物では無いが、彼の魔力量が敵をジワジワと焼き続ける事を許していた。

「ウ……はあ!!」

そしてエニユオは遂にコーリスへ槍を振り下ろし、彼が回避する事で逃げる事に成功する。

キユドイモスを肉壁兼目くらましとして召喚し、ただ後ろへ引き下がる為だけに全力を注いだ。

「ハア………はあ……ああ」

消し飛ばされるキユドイモス達を横目に、彼女は遂に膝をついた。

生まれて初めて経験した苦痛。星晶獣としての尋常ならざる肉体強度がその痛みを長引かせていたのだ。顔面と腹部を焼かれ続けた

事によるダメージは、彼女を肉体的にも精神的にも追い込んでいた。

「……………」

それと同時に、コーリスの杖が遂に限界を迎える。

盾や光線の高速展開の多用とケーニヒエルガー、そして先程の追い込みによって魔力を注ぎ込む部位が破損し、その機能を終える。

殴打武器としても使っていた杖の先端が砕け散り、彼の右手に残されたのは棒切れ。

そして、地面に落ちた愛剣はエニユオの奥義によって表面が大きく削られており、もはや斬撃に期待は出来ない。

彼に残されたのは鈍器になったノスタルジアと杖杖か——或いは。

「——神剣、抜刀」

「……………それは」

——神剣、雅巡犬牙。

バジユラから引き継いだその刀は、持ち主の感情によって発揮する威力が異なる。

持ち主の感情が強い程、放てる斬撃の範囲は広くなり、その感情を抑える理性が強靱である程切れ味が強くなる。謂わば、熱情と冷静を併せ持つ事で最効力を発揮する刀。

(…あの刀。何かあるとは思っていましたが、危うい。まともに食らえば死にますね)

コーリスの青い魔力とは異なり、黄金の魔力を纏った刀。それを見たエニユオは死の警報を鳴らした。

不死性を備えた星晶獣が死を錯覚する程に絶対的な圧。禍々しさとは異なる、ある種の神聖さが空気を支配した。

杖を破壊された事によって盾の高速展開が不可能となったコーリスは、逆に守りを捨てる覚悟をした事によって刀の最適条件を満たし、万全の状態で抜刀。

黄金の魔力に青色の魔力が混ざり、碧色となって刀を覆う。

死の直前によく得た、エニユオを葬る火力。

——そして、彼自身の身体も莫大な魔力によって覆われた。

「——フォルウン・ホロス」

フォルウン・ホロス。

武器や体の一部を高密度の魔力で覆い強化する技——フォルウンを全身に適用した技。

この技を使用した今、彼の身体は鎧同然であり、身体能力は須らく向上している。

欠点があるとすれば——この技は彼の魔力を使い切るまで永遠に強化し続ける事。

身体を覆う魔力が剥がれた時、自動でその部位へ魔力を回し補完する。立て直しが速いというメリットはあるものの、戦いが長引けば長引く程に魔力が枯渇するデメリットの方が大きい。

だが、そのデメリットを加味しなければエニユオを倒せないと、彼はそう思ったのだ。

右手に刀、左手に壊れた杖を構えて彼は言い放つ。

「——来い」

その言葉を聞いたエニユオは静かに槍を構えた。
今のコーリスの前ではキュドイモスの爪の効果も薄い。そう確信して破壊の力を流し、初手に全神経を注ぐ。

（愚かだったのは私ですか。今日で同じミスを3回程繰り返した記憶がありますね…）

一度目はカリオストロを侮り水圧線で肩を撃ち抜かれ、二度目は一人になったコーリスに押され、三度目で彼を嬲り始めて今に至る。

流石に四度目は無いだろう。全身全霊を以てコーリスを殺さなければ自分が死ぬのだから……そう言い聞かせて彼女は慢心を捨てた。

（生きるか死ぬかの真剣勝負……そんな事するのは初めてです。彼との別れも寂しいですが——殺す）

麗しい顔も薄く爛れ、胴には光線と打撃の傷が残り、今や戦場を蹂躪していた女神は泥被り。

カリオストロが与えた肩の傷からは血が流れ、彼の自爆技の影響が全身が軽く痛む。

星晶獣の再生能力は薄い切り傷を誤魔化す程度ならば問題無いが、深く残る打撃や部位の欠損には効果が薄い。

今までのダメージは確実にエニユオを追い詰めている。死には遠くとも、戦闘不能に近づく境地。

「——行きますよ」

虹色に光る槍を構えたままエニユオが近づく。

先で待つはコーリス。先手を決めた者が戦いの過程を作り出す。

「フウ……………」

「……………さて」

2人の視線が交差する。

コーリスは決して武器を交わしてはならない。エニユオの槍を受ける事は、武器と身体の破壊を意味する。

逆に、エニユオは躲かれてはならない。巨大な槍を考え無しに振り回してしまえば、待っているのは自身を両断するカウンター。確実に頭蓋を割らなければ不利。

両者は、互いの獲物が射程圏内に入った所でピタリと動きを止めた。

「――」

「……………」

まだ。まだだ。まだ動かない。

間合いに入り、どの様に動くか。その駆け引きを相手が動き出す瞬間まで行っているのだ。

――先に動くのなら当てなければ。

――後に動くのなら避けなければ。

最後の戦いが始まる。

初手の均衡を破ったのは――

「ゼイツツツ!!」

「!」

――エニユオだった。

初手の突きは胴。破壊の力によって急所を集中的に狙う必要が無く、読まれやすくも回避先を予測できる選択を彼女は取った。

それに対し、コーリスは強化された反応速度で上体を反らし、棒となった杖をエニユオの胸に突き刺そうと振りかぶる。

「シツ!!」
「…ふっ!」

エニユオは迫る杖を避け、持ち手を掴んでコーリスの頭上に飛び上がった。

降下する破壊の槍が彼の脳天に迫る。

「ッ!!!」

刹那。槍が到達する前に振られる神剣。
碧色の斬撃が超高速でエニユオの首筋に到達する。

(受ければ死ぬる…!!)

エニユオは槍で斬撃を防ぐ。

しかし、破壊の力によって相殺される筈の斬撃は四方八方へ霧散し、周囲の木々を両断した。

互いが再び距離を取り、呼吸を整える。

(…惜しい。命への危機感は尋常では無いな。つまり…)

(防御と攻撃だけでは無い…反射神経までもが大幅に強化されていますね……ですが、長引ける物ではないでしょうか?…つまり…)

互いの弱点の探り合い。その一挙手一投足に自身が死ぬ要因が含まれている。

だが、二人にとってそれは些事であった。

(この斬撃でお前を殺せるという事だ)

(この槍は未だ貴方を壊せるという事)

殺意と覚悟が恐怖を麻痺させる。

「…」

「ハアッ!!!」

至近距離での攻防。だが、互いの武器は触れ合っていないという歪な物。

コーリスが背後へ潜り続け、エニユオが槍の他に体術を用いて自身の隙を無くす。

だが——加速しているのはコーリスの方だ。

「ぐ……………」

「そっ…」

「させません…!!」

負傷したエニユオの肩を杖で狙い、怯んだ所に斬撃。牽制としての斬撃は槍によって対処されている為、コーリスの生存期間は大幅に伸びていた。

圧倒的な攻撃力が手数を潰すという戦法だ。

(ならば…!)

エニユオは地面を砕いた。

対面に位置するコーリスの姿勢が崩れる。その隙を逃す彼女では無かった。

仰向けになった彼の頭部に槍を突き刺す。顔を反らした所で避けられる面積では無い。

「ふっ…」

だが、寸前で足を払ったコーリスによつて、エニユオ自身ものしかる体制のまま崩れてしまい、槍があらぬ方向の地面へ刺さる。

「っ……………!!」

「フウ……………く……………!!!」

両者の力比べが始まる。

エニユオが倒れると同時に刀を首筋に当てるも、彼女は刀を握った手を掴む事で刃を止め、振る事で発生する斬撃を封印した。

地面に刺さる槍を抜かねばコーリスへの反撃は不可能。そして、先程と同じくコーリスの杖が空いている。手数不利が彼女に試練を与えた。

（——簡単な事です）

故に、エニユオはそのまま槍を横に動かし、無理矢理地面を抉りながらコーリスの首を狙う。

「う、おおおおおおあ!!!」

コーリスは両足でエニユオの腰を挟み、力任せに持ち上げて身体を大きく曲げる。

（…なに!?!）

（身体能力は此方が有利……………!!）

仰向けの体制のまま体を折り曲げ、エニユオを地面に突き刺す様に振り下ろした。

「ぐあっ…」

後頭部に尋常でない衝撃を受けると共に、周囲の地面が大きく揺れる。

エニユオの頭部に大量の出血が発生した。

「——シイッ」

先程の組み合わせとは逆の立場。コーリスが上で、エニユオが下。

怯んで立ち直りが遅れたエニユオに刀と杖の二重攻撃が襲いかかる。槍で刀を防いだとしても、杖によって首が折られる。

(決める……！)

頭部への衝撃で思考が遅滞するエニユオは、即興の対策よりも、先程コーリスが取った行動に似た物を選択した。

「なっ!?」

「ふふ……また一緒ですね?」

エニユオは両足をコーリスの腰に絡ませ、動きを封じると同時に無理矢理自身へと押し倒させた。

武器の勢いが殺され、加えてエニユオの身体と密着する形になり、身動きが封じられる。

更に彼女は短く持った槍を彼のこめかみへ突き動かす。

(……!!)

そこで、同時に地面が青く光った。

極大のガンマ・レイがエニユオを焼き尽くさんと、コーリス自身をも巻き込んで天に登る。杖が破壊されて光線が素早く出せないのなら、大地に流す方が効率的だった。

「貴方正気で——ぐっ!？」

「逃さん……!!」

動揺と光線によって怯んだエニユオの両手首を掴み、コーリスは更に焼き続ける。

(考える事は一緒だ……お前が刀を振らせたくないのと同じく……俺もお前に槍を振らせない……!!)

コーリスは破壊の力が槍から発せられる事に気付いていた。アテナの盾と同じく、武器に備わった権能。槍が放出の基準となるのだ。故に、槍を封じれば警戒するのはキュドイモスのみ。

(からだ動かさない……これが、こういう風に……私は死ぬのですか?)

エニユオは自身の限界が既に来ていると理解した。

大地から吹き出した光線によって消滅するのも時間の問題。

——破壊され尽くした防衛街が、怒^{いか}っているかの様だった。

「いえ……まだ……死にませんッ!!」

「まだ動くか……!」

コーリスは魔力の鎧のおかげで自身の光線による被害を極限まで防いでいるが、エニユオは丸腰。

彼女が取れる行動を事前に潰す事で詰みの状況を作り出した筈なのだが……。

「キュドイモス・グラツニアアア!!!」

(……アレが来る……!!)

動作に入ったキュドイモスを召喚する技。コーリスの防御力を破れるのか、はたまた別の意図があるのか。少なくとも彼は今更避ける気は無い。

それより気がかりなのは、エニユオが逃げ以外の選択を取った事だ。自身が炙られる事を許容してまでキュドイモスを召喚する必要があつたのか。

コーリスの思考は彼女の槍に向けられた。

(…破壊の力が消えている?)

エニユオの右手に握られた槍には何も力が宿っていない。光線に苦しみ藻掻きながらも、エニユオは自身の身体で抵抗を行っていない。

キュドイモスに力を注ぐ為の集中の結果だろうか。

——否。

「命令です…私と彼を押し潰しなさい!!」

「…!!」

「ウオオオオオオオオン!!!」

主人の命令に返答するかの様に吠え、キュドイモス達はコーリスの背中に飛び付く。

その数は——100匹を超える。

「これを狙って力を——!?!」

「温存させてもらいました…今更逃しませんよ」

「グ…!!」

重量、衝撃、裂傷。

塵も積もれば山となる。光線を物量で潜り抜け、彼の魔力の鎧をガリガリと削り、背中へのしかかる重みは相当の物になっていた。それでも光線がキュドイモスを消滅させていく。

「死なば諸共か……」

「いいえ、少しだけ貴方が苦しめば私が楽になりますので。さあ、私を焼き続けるかキュドイモスを倒すか選んでください」

コーリスは迷わずエニユオへの対処を凶った。

「では、追加です」

「な……」

身動きが取れず、槍も振れない。そんなエニユオが唯一行使できる蹂躪の力。

キュドイモスの召喚に全力を注いだ彼女は、更に100匹の彼等を空から降り注ぐ様に生み出した。

「一緒に潰れましょう……?」

エニユオは戦士型の星晶獣。素の身体能力と400年の経験は優れたものであり、戦闘の最中に敵の能力を的確に分析し、自身を犠牲にしながらも最善の手を吟味し続ける。

それは星の民による一種の機械の様な機能。そういう風に作られたのだ。

「悪手だ」

コーリスは刀の柄を引っ張り上げた。

バジュラの刀は双刃刀。本来の刃に加えて柄の側に向かっても刃が存在する。持ち手として偽装されている鞘を抜き取る事でその短

刀が頭になる。

「!?」

そしてその短刀は抜き取る事が出来る。

元の持ち主は一振りですごい斬撃を放つというアドバンテージを理由として分離させずに用いていたが、本来ならば二刀流や飛び道具として扱う事が可能。

「あゝっ!??!」

身体を捻る事しか出来ないエニユオの肩部に凶刃が突き刺さる。

(緩んだ！)

明確な外傷によってエニユオの足が緩んだ瞬間にコーリスは飛んだ。

「しゃアツ!!!」

横風の斬撃によって約200匹のキュドイモスを両断し、流れるままに本体に向けても斬撃を飛ばす。

「…」

しかし手応えが無い。渦巻くキュドイモスの群れを利用して姿を眩ませたのだろうか。

「ウウオオオオオオン!!!!」

「また目晦まし…!」

目の前に突如現れるキュドイモスによつて視界が塞がる。コーリスはこの時点で上空や背後を警戒し、回避とカウンターの準備を進めていた。

それを加味しても上に行くのはエニユオである。

「悪手ですね……！」

（しまったー！）

エニユオは目晦ましのキュドイモスごと貫く槍撃を繰り出し、コーリスの腹部表面を抉った。

目の前の狼の体内から突如として槍が襲ってきたのだ。想定出来るものではあるが、召喚を扱う戦士としては合理的すぎる立ち回りに、彼は虚を突かれた。

「がはっ……!!!」

破壊の力を再び宿した槍は、コーリスの魔力の鎧を即座に消し去るには不十分であったが、薄皮でも確実に人体を壊してゆく。

「ぐう……!!!」

怯んだコーリスに槍撃による全方位攻撃が襲いかかる。

雨の様な連撃。キュドイモスと破壊を切り替える事で一方の火力の底上げを図っているのだ。当然一度でもまともに受ければ致命傷。だが——彼は引かず。

（何故…貴方は）

「エニユオオオオオオオオオオオオ!!!」

（貴方は……折れない？）

後退するどころか攻撃の合間を縫ってエニユオの懐に潜り込む
コーリス。死から逃げ続ける彼女と、死にながら殺そうとする彼とで
は動きに差異が出る。

コーリスは刀に魔力を注ぎ込んだ。

「ガンマライト・エクスキュージョン!!!」

(痛手も深手も許容した…彼の心を壊し、恐怖させ、それでも尚足りな
いから…私はここまでやったというのに)

怒り、殺意、魔力。全てが籠もった大振りの斬撃。反応出来ぬ程の
攻撃では無い。破壊の槍で相殺してしまえば少なくともエニユオが
手傷を負う事は無い。

(私と彼の…何が違うと言うのです…!!)

エニユオは自身の能力が優れた物だと理解している。もし自分が
負ける事があるのなら、油断や相性の悪さ、若しくは創造主達の特権
による機能停止、そのくらいだろうと思っていた。

だが、現に互いの全てをぶつけ合って尚、追い詰められているのは
彼女だ。自分とコーリスの間に何の差があるのか。惨めに抗った所
で勝てるのなら、自身が容易く蹂躪出来るはずがない。

初めての危機に遭遇したエニユオの心は脆かった。

だが折れはしない。この無敵の槍があれば――

「あ」

破壊の槍の先端が、砕かれた。

コーリスと師バジユラの技が、破壊の力を上回ったのだ。

「まだ……まだです!!」

「シィッ!!」

槍自体は消えてはいない。突きが出来なくなったただけだ。光線を正確に出す事の懸念点もあるが、破壊の力自体は健在。

エニユオは冷静に杖の横風ぎを躲して……。

「——あれっ」

「…」

「なん、でっ……!?」

躲せず、左目が切り裂かれる。

先端が破壊され、最早棒切れとなった彼の杖は、魔力によって擬似的に攻撃範囲を伸ばされていた。

刃では無く、盾でもない。魔力によって無理矢理形成された……うねる光線の様な——そう、それは鞭だった。

何でもありの不意打ちと言えど、戦いが始まったばかりのエニユオならばキュドイモスを用いた攪乱によって回避できていた筈の攻撃。

確実に彼女は弱っていた。

「止めだ——!!」

「させ………ないッッ!!」

確実に止めを刺しに来る。そう読んだエニユオは、闇雲に槍を振るった。

それは破壊の力を纏った槍ではない。光線として放出しながらも、先端の破損によって拡散する歪な力。その光線は彼女自身にも攻撃が及ぶ程に不安定だった。

(来た……!!)

そしてコーリスはバジユラから既に学んだ。

エニユオは学習能力が高い。自身が彼女に行った様に、死に瀕した瞬間に思いもよらぬ反撃を受ける可能性がある。

だから——ダメ押しだ。

「……………どうして」

エニユオの槍が空を切る。

コーリスの身体に向かった槍が、肉に激突する筈の槍が、空振った——否。

（当たらない……………いや、すり抜——）

コーリスが持つ絶対にして最強の初見殺し。

バジユラにも使用したこの技は、幽霊である身体を最大限利用し、敵の攻撃を空振らせる。そして、その現象に虚を突かれた敵には容易く霧が効力を発揮できる。

ましてや疲弊した彼女の精神では、思考を阻害する霧どころか、記憶を消す3段階の霧にまで到達できる可能性がある。

「——神技」

1秒立ち尽くしたエニユオの目の前で、彼の刀が脈動する。

全てはこの一撃の為に…この刀でしか発動できない渾身の居合。

命、友^{アテナ}…そして人々の覚悟を踏み躪った篡奪者、愚かな破壊の女神に神剣の天罰が下ろうとしている。

「——ッ待っ」

死の恐怖すらも彼女の罪には生温い。

「ガムシヤラナ
牙霧沙羅嚶」

碧色の斬撃がエニユオの眼前に迫る。

彼女は躲しきれず――

「ああ――ああああ!!!」

惨めにも、左腕を前に翳す事しか出来なかった。

65. 犠牲に祈りを、貴女に報いを

『エニユオの動作、問題なし。随時戦闘に投入する』

——違う。

『私はアテナ。共に星の世界を守りましょう』

——ちが………違う。

『…エニユオ。空の民は、本当に我々を滅ぼそうとしているのでしょうか』

『アテナ…私はそう思いません。何であれ、私達は主達にとっての道具に過ぎないのでしょう』

——ちがう。

『どうか…どうか子供だけは許してください!!』

『……』

『エニユオ…私がやりましょうか?』

『必要ありません』

『…?』

『戦う必要は今無くなりました。私は空に付きます』

『何を言っているのです!? 私達の存在意義は——』

『アテナ』

『ッ!』

『空の民……いえ、人間達は生存競争として私達に抗っています。謂わば、篡奪者は此方。不変の私達が何かを奪う必要など無いのです』

『それでも……!』

『それに…命を摘むのは、好きではありません』

——違う、こんなのは私じゃない。

『…この感覚は。何処か…物足りない?』

——私は破壊と蹂躪の…。

『いやああああああ!!!』

『っ!私の手に掴まってくだ——』

『あっ…』

——命とは尊いもの…。

『…ああ。私は…どうして?目の前で子供が落ちたというのに
………』

——抗いようの無い性。^{さが}

『…どうしてこんなに…胸が、すくのでしょうか』

——いや、抗わなかったのは正解だった。こんなにも清々しい。命は尊いから壊すのだ。

『女神様あ!?!どうして!?!』

『希望の後には絶望が待っているものですよ』

『たすけえ……たすけ——!!』

『静かに。アテナに見つかってしまいます』

『誰かアアア!!!いけにえを!!女神様がお怒りだあああああ!?!?』

『……ぶ。あはははははは!!』

——そうだ。

『この街を守りましょう。エニユオ』

——私は全てを壊す為に生まれてきたんだ。

『どうして』

——飽きるほど聞いたその言葉を星の数ほど砕いて。

『エニユオさんは相手の嫌がる顔が好きなんですわ…』

『ええ。そうですよ？』

——玩具も見つかって。

『エニユオオオオオオオオオ!!』

『来てくださいコーリスさん!』

——あれ？

——なんで、私がこわされ

(……………は?)

コーリスの放った一撃は確実にエニユオの胴を両断するものであった。

——しかし、結果は。

(腕だけ……だと)

破れかぶれの防御——対応に遅れ、反射的に指し出した左腕が消し飛び、他は無傷。

コーリスの脳が疑問で埋め尽くされる。そして、エニユオ自身も無意識の行動だった。故に、その答えは彼らの目に映る。

「……………!!!」

エニユオは、槍にしか破壊の力を流せない。

それは槍から力が溢れるという理由では無い。破壊の力に耐えられるのが槍だけなのだ。

彼女が光線としての放出を使う理由は、遠距離攻撃というアドバンテージもあるが、実際は槍に纏わせる戦い方を避ける為である。

何故なら、破壊の力を長期的に纏わせ、それが自身の身体に触れてしまった場合、例外なく崩れていくからだ。

盾を防御術の中心としているアテナの様に、エニユオもまた、槍が無ければ破壊の力を満足に振るえない。

しかし、彼女はコーリスの斬撃を無意識に防御した。

——破壊の力を纏った左腕を犠牲に。

(しかし先程は槍を折る事が出来た筈……この技で何故相殺される……!?)

死の間際の生存本能。

それは空の民に限らず、生命体ならばどんな生物も持ち得るもの。彼女はコーリスが子供たちに教えていた様に、攻撃を食らう箇所にピンポイントで力を集中させ、飛来する斬撃の威力を殺すに至った。

その代償として左腕は切断され、自身の力によって灰になったが、

死の危険が無い星晶獣が永らく感じなかつた恐怖により、エニユオは一時の命を得たのだ。

「はっあ…は……」

左腕の痛みですら気付かずに、エニユオは自身が生存した事をようやく理解し、隙を見せるコーリスへの反撃を――

「死に、なさい――!!!」

「な、あ――」

勝利の女神はエニユオに微笑んだ。

度重なる恐怖と苦痛、その試練の先に得たのは偶然という名の勝利。笑わずにはいられない。

これが運命なのだとしたら、何と滑稽なものだろう。

彼女は破壊の槍を振り被り――

「――あ?」

――肩に、風穴が空いた。

「はっ?」

「なにが――あ……」

その場所は、短刀が刺さっていた箇所。

刺さった短刀を更に穿つ何かが飛来し、彼女の身体を貫いたのだ。そしてその光景は――

「アルミス…!!」

それはアルミスの事では無い。

自身がキユドイモスを扱う身である故、ウロボロスをカリオストロの召喚物と勘違いしてしまった事だ。

主が再起不能になれば即座に行動不能になる。実際にコーリスとの戦いに乱入しなかった為、そう思っただけでも無理は無い。

だが、ウロボロスは人造生命体。

主が命じるのならば従い、主が倒れたのなら自身で思考し——敵を殲滅するのみ。

「はアアアっ!!!」

エニユオは大地を砕く。ウロボロス諸共破壊する心持ちではあったが、時間をかければコーリスの技を受けてしまう。その懸念が彼女の槍を鈍らせた。

「」

しかし、振り向いてもコーリスはいない。

(右——いや、上!)

上空に感じる魔力の高まり。

コーリスは盾で足場を作り、跳躍する事でエニユオの遙か頭上から降下していた。

(当たる訳がない…勢いを付けた所で一直線では)

エニユオはこれを好機としてウロボロスを破壊し、完全なる迎撃姿勢を作り出そうとした。

魔力を借りたアルミスの狙撃は一回限りの物であり、それは拘束された段階で2射目が飛来しなかった事から容易に想像できた。

だが、理不尽はたった一回で終わるものではない。

「——よお」

エニユオの背後、その地中から現れたのは——

「——ッ?」

コーリスよりも、ウロボロスの雄叫びよりも…何よりも聞きたくなかった声。掠め手の連鎖によって最終的にこの戦況を招いた張本人。思考が回るよりも先に、死が身を染め上げた。

「——さっきさぶり」

——開祖、カリオストロ。

(何故?!あの傷では動けな——あ)

エニユオは気付いたのだ。

時・間・を・掛・け・過・ぎ・た。

彼女は知らなかった。コーリスの継戦能力も、ウロボロスの自律行動も、アルミスの怒りも——そして。

「ガキ一人に任せてお休みなんてなあ——オレがする訳ねえだろうが
!!!!」

——カリオストロの執念も。

砕けた左腕と胴を土を用いて穴埋め。辛うじて人体のバランスを

保つ事で戦場に復帰したのだ。

そしてウロボロスと共に地中を進み、エニユオの不意を見事突いてみせた。

コーリスが待っていたのはウロボロスだけでは無かったのだ。

「!!」

カリオストロに魔力が宿る。水圧線でも、自爆技でも、拘束でもない。彼の原点にして頂点の奥義。

四元素を束ねた最大出力の黄雷を拳に集中させ、その矛先は——ウロボロスに気を取られてがら空きになった腹部。

キユドイモスの肉壁、破壊による相殺。これ等の手段によって妨害され続けてきた技が遂に——

「アルス・マグナアアア!!」

——獲物を得た。

「うらアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ぐ、なううああああ!!!?」

突き刺さる黄金の雷。

火、水、土、風、四元素のエネルギーがエニユオの腹部を激打し、表層を貫通し…全身を駆け巡った。

間違いなく、この戦闘において最も痛手を負わせる一撃と化した。

(まだだ…！まだ足りねえ！まだ…もっと込めろ…！…！コーリスみたいに!!!)

同時にカリオストロは、この期を逃せばエニユオを逃がす事になると理解していた。コーリスの魔力は尽きる直前であり、カリオストロも深手の影響で走る事が出来無い。ウロボロスで追うよりも、キュドイモスに乗って逃げる方が速い可能性を考えれば、彼女の生存率は高まる。

故に今滅ぼす。確実に、容赦なく、全てを賭けて。

文字通り、カリオストロは全ての魔力を右手に込めた。

「ぐううう……あ……がはあ!!!」

エニユオが大きく吐血する。

しかし、星晶獣はコア諸共休眠してしまえば長い時間を経て再生が可能。真の意味での撃破とは、身体を破壊してコアを抉り取る事だ。

(ここで!!!殺す!!!)

2000年をも越える生——その全ての過去を凌駕する熱情を以て、彼の魔力が弾けた。

「ウ、だらアアアアアアアアアア!!!」

迸る雷鳴。無防御でのクリティカルヒット。

最大出力のアルス・マグナを食らったエニユオは意識が絶える寸前を彷徨い、自身の身体が砕けていく様を自覚した。

そしてカリオストロは彼女を上^に吹き飛ばした。

そう、コーリスが座する上空に。

「これで最後だコーリス！全部ブチ込め!!」

「了、解!!」

現時点でコーリスに残された魔力は少ない。斬撃や光線を溜めて出す事は出来るが、一回だけではエニユオの破壊を上回る程の力はないだろう。

よって、必殺の一撃が必要となる。

しかしコーリスにその様な技は存在し得ない筈——否。

一つだけ存在する。彼が自然に行っていた行為の延長線上…それでいてまともな精神ならば思い付きもしない技。

その技の発案者はカリオストロだった。

『…なあ』

『ん?』

防衛街の依頼を受ける一週間前、フロンティア号の甲板にてカリオストロはコーリスと星を眺めていた。

二人とも星見の趣味は無いが、この日に限ってはやる事がなさ過ぎて黄昏るといふ、哀れに思えてくる状態だった。

『オレ様の封印って結構質が良かったんだよ。何百年も継続して閉じ込める…それが解けたら錬金術を行使できなくなる呪いに近い封印』

『…そうだっけ』

『お前さ、どうやって解いたか覚えてるか?』

『術に魔力を流して…壊した』

『そう、それ』

カリオストロは両手を枕にして寝そべりながら呟いた。

『人に使ったらどうなるんだか』

コーリスは答えを持たなかった。考えた事すら無かった。

『身体という器に魔力を注ぎ込んで、許容量を超えたらどうなるか。实例も過去にはあっただろうぜ』

『上限は普通身体の成長と一緒に増えるから…多分放出しないと溢れて身体強化魔法と同じ効果に繋がるんじゃないか』

『それを超えたら?』

『……………まさか破裂するんでも?』

『考えてもみろ』

カリオストロは何時もの様に教えを授けた。

コーリスは彼の考えを聞くのが好きだった。何処か未知の世界を進んでいる様な気がして、腑に落ちる説明は興味深いものばかりで、先生の様にも思えてくる程だ。

『術は一定量の魔力を含ませて成立させる。お前がオレ様の封印を解いた仕組みは、その一定量に魔力を足して溢れさせて、術を大破させるものだ』

『だが、人体は魔力無しでも成立する。魔力が有害で無ければどんなに注いでも無事ではあると思うぞ』

『どんなものでも許容量があるんだよ。血が多すぎると血栓ってのが出来ちまったり、水を飲み過ぎると身体がぶっ壊れる』

『…』

『魔力なんて結局はエネルギーの概念みたいなもんだからな。案外身体が勝手に放出するんじゃないか?』

『……………そう、かな』

『お、気付きそうか?』

コーリスは彼のニンマリとした顔を見て答えを待った。

『本人の魔力は本人の身体にしか定着しない』

『…という事は』

『相手の身体に魔力を流し続けると…：相手の体内を破壊する様にお前の力が放出される。同じくお前が火属性の魔力を流されれば大変な事になる』

『魔力流し…：恐るべし』

『残念ながら、触れただけで魔力を流し込めるのはお前くらいだ。既に用意されている技に魔力を乗せて補助する事と、他人の人体に魔力を流して強化する事は違うぜ』

『それこそ、俺の力が属性無しだから使いやすいのでは？ほら、推進力そのものみたいな感じとゾーイが言っていた』

『お前とゾーイは似てるよ。でもな、ゾーイの力は星由来の光線だ。何でも消し飛ばすから笑えん』

でも、と前置きした上で入念に聞かせた。

『この技に関してはソレと変わらん。相手は死ぬ』

『…』

『オレ様はよ、お前にこの技を使わせる相手に会いたくねえんだ』

『でも、やらなきやいけない時が来るかも』

『じゃあ、殺さなきやいけない相手だといいな』

カリオストロは、コーリスに汚れて欲しくなかったのだ。

…もう既に汚れている事に気付かずに。そう呟いた。

——嗚呼、見る。薄暮を抜け、明日を見る。

——夜を越え、明日が来る。

——黎明を迎え、光を越え、明日を知る。

(しな、ない)

どのくらい戦っていたのだろうか。戦い始めたのは夜、それ程長い戦いでは無かった筈だが、打ち上げられた身体は朝日を向いていた。

(まだ、いきが、あ、る…)

エニユオは薄れゆく意識の中で、前方から恐ろしい速度で飛来する蒼銀を見た。

既に自身の槍に破壊は宿らない。槍部はカリオストロの奥義にて破壊され、皮肉にもコーリスの杖と同じ末路を辿った。ただの棒きれだ。

(……………)

彼女は自問していた。

結局自分は何なのだろうか、と。破壊衝動に身を任せる前の彼女は、確かに人を助ける事に喜びを感じ、傷一つ負わせるのに忌避感を抱いていた。

その心は偽りでは無いし、破壊衝動も同じく本心だ。

では、自分は二人いるのか。その二面性の何方に身を委ねるべきだったのか。

周囲を蹂躪していた時には感じなかった、都合の良い内省が行われていた。

無論後悔はしていない。ただ漠然と、アテナと共に歩み、コーリス達と出会い、共に旅をする未来ならばどれほど楽しめたのか——とい

う下らない妄想を試してみたのだ。

どうせ壊す方が楽しいのだろう、という前置きが存在していたが。

(あなたも…私をこわしに)

星晶獣は能力の副産物として感情が生まれている。

能力を行使するにあたって都合の良い人格が形成されていく。故に、備わっていた人格ではなく、能力を使用するその過程において、空の民から学習する様に拾い集めた知識や傾向が唯一の感情と言えるのかもしれない。

だからこそエニユオは自身が異端であることを理解していたのだ。

それは自分だけが破壊の喜びを知れるという愉悦も与えたが、同時に寂しさもあった。

(でも…ふしぎと、空はきれいに思えてきますね)

全てを壊したいと願うエニユオは、何故か空の景色はそのままで良いと、何時も思っていた。

そんな拙い情緒が、自身の死を如実に知覚した。

「ネビユラ・デイスperlガアアアアアアア!!!」

コーリスの蒼く光る右腕が、カリオストロの与えた傷に突き刺さる。

「が、あああああああ!!!??」

ネビユラ・デイスperlガ。

相手の身体に直接魔力を流し込む技。膨大な魔力を扱う為、武器を用いた場合にはそれ等が破損してしまう。

故に、攻撃は全魔力を込めた拳によって行われる。
この技によって絶大な魔力を流された相手は――

「こ、れは………!?!」

――内側から蒼くひび割れ、霧散する様に消えていく。
拳がめり込んだ部分から、全身に向かって蒼い光の亀裂が奔る。

エニユオは痛みによって取り戻した明朗な意識を右腕の棒切れに
集中させ、振り抜いた。

「あああああああ!!!」

「ツツツツく……!」

頭を金属の棒で殴れば人は死ぬのだ。

加えて、全ての力を動員したコーリスに魔力の鎧は無い。無防備な
こめかみに彼女の最後の打撃が直撃する。

その上で――

「く――ガアアアアアアアアアア!!!」

「い、やつ………!!」

――コーリス、怯まず。

同時にエニユオの全身に渡る亀裂が大きく光り、大量の魔力が迸る
のを感じた。

(いや、だ………し、ぬ………!!!)

その破壊に苦痛は無かった。

寧ろ、全身に渡る魔力は活力として漲り、清々しい気分さえ感じさ
せた。

エニユオには、それが恐ろしかった。

「やめ、て……………!!!」

自身のした事は分かっている。

悪い事だとも分かっている。

だが彼女は、自分が壊れる事がここまで恐ろしい物だとは思っていなかった。

結局、我が身可愛さで生きるだけの悪辣な人間と変わらない。その事実が何よりも自己を削る。

（おねがいだからこのまま何もなく殺すのはいやだ……………いや、いや……………私は星晶獣のエニユ、オ……………）

彼女は有象無象の大罪人として処理されるのだ。

「……………あ」

そうして彼女は自身の大事な場所が、”パキン”と音を鳴らして壊れたのを感じ取った。

ガラス細工の脆い玉のように呆気なく…彼女の全身を構成する部位が魔力の濁流に耐え切れず、壊れた。

「……………終わりです、エニユオ」

コーリスは仲間だった頃、そして怨敵としての今、半々となった語り口調で別れをそつと呟いた。

——大地に一筋の光が衝突する。

「はあ、あ……………」

地に叩きつけられても尚、エニユオは原型を留めている。しかし消えゆくのは時間の問題だろう。

空を見上げて呆ける彼女の横に、コーリスは座った。

「あ、ああー……………アテ、ナ？」

星晶獣にも走馬灯はあるのだろうか。

しかしコアを破壊できないコーリスが彼女に死を与えることは出来ない。

では精神崩壊の現れか？

否、どれでもない。

彼女は只恐怖と寂しさから逃れようと、記憶に追い縋っているだけなのだ。

自身の死を見つめた朝日に手を伸ばして。

「コーリ、スき、ん……………」

「……………」

「あ、あれ……………おかし、いですね。なんでわたしが…壊れて？」

「…これで終わりなんです。貴女は壊してしまった」

「あ、ああ……………」

彼女はコーリスに手を伸ばした。

彼は応じない。伸ばされた手を払いのける事もしない。

そして彼女の指が頬に触れようとして——先端から綻ぶ様に消えていった。

破壊の象徴であった槍も既に粒子と化した。

それを見て彼女は、遂に全てを認めた。

「……………かなしんで」

その言葉を最後に、エニユオの身体は光の泡となって空気中に溶け

ていった。

残されたのは、淡く緑に光る球体。それがコアだ。

「……」

破壊の限りを尽くしたエニユオの言葉は、人々を守れなかったコーリスに対しての『悲しめ』という意味だったのか。それとも…。

「…貴女の死を、哀しむ筈が無いでしょう」

…自身の死を哀しんで欲しいという、独りよがりの欲望だったのか。

66. 砕けた心に貴方は

「……………惨い」

コーリスは荒野を見た。

戦いの最中では気付かなかったが、エニユオとの戦闘によって島の4割が消し飛んでいた。恐らく、終盤で互いの技を防ぎ、拡散した余波が巻き起こした惨状だろう。

彼はエニユオのコアを持ってカリオストロの元へ駆け付けた。その横には合流したアルミスもいた。

「……………アルミス」

「せ、んせ…………え」

今まで明確な感情を出さなかった少女は、震えた瞳でコーリスを見た。瞳だけではない、手も膝も全てが覚束ない。戦いの決定打となった弓も地面に落としている。

街を守っていたエニユオは、彼女達にとって女神そのものだった。

「私のした事、まちがってないんだよね？」

「ああ」

「みんなを殺したの、エニユオさまなんだよね？」

「そうだ」

「つ……………う、ああ」

アルミスは嗚咽を上げて泣いた。

誰も咎めはしないだろうに、溢れ出る声を抑える様に…両親の無念を、犠牲となった全ての人間達を回願して涙を流した。

「アルミス」

「せんせえ…わた、し」

「助けてくれてありがとう」

「せんせえ…！せんせい…！！」

「アルミスがいなかったら、俺達は死んでた」

コーリスは震えるアルミスの身体をそっと抱きしめた。

周囲が粉微塵に吹き飛ばされる地獄を耐え抜き、戦いを勝利に導いた小さな勇者の心を曇らせない様に。それだけが、今の彼に許された正しい行いだった。

アルミスが戦地に戻るといふ行動を行った理由は、ひとえに憎悪からであった。目の前で肉親や友を殺され、カリオストロという恩人を削られた彼女は、憤怒に脳髓を焦がされながら死ぬ気でウロボロスに懇願した。

ウロボロスにとっては少女の命など不要だったが、主を壊した相手に一泡吹かせる提案を喜んで受け入れた。

そうしてカリオストロの意識を回復させ、後に至ったのだ。

だが、同時にエニユオとの日々は間違いなく彼女にとっての平穏であり、憎悪と悲しみの激流が感情を爆発させたのだ。

「…カリオストロ」

「悪いが、少し休ませろ…」

地に横たわるカリオストロは死の境目を乗り越え、生命活動を維持する事に成功している。しかし、最後の奥義によって魔力が空になったが故に、脱力感は相当なもので、結果的に動けない状態に陥っている。

「ごめん…」

「は、何に謝ってんだよ」

「分からない…でも、こんなになってまで」

「ばーか」

カリオストロはコーリスの頭をポンと叩いて微笑みかけた。

「アルミスだけじゃねえ。お前が頑張ったからオレも生きてる。お前は世界有数の天才美少女を救ったんだぜ？誇れよ」

「…ありがとう…ありがとう…!!」

「泣くな。子供の前だぞ」

感極まったコーリスはアルミスと共に涙を流し、痛ましい姿で横たわるカリオストロを抱き起こした。

「うう、ごめん…!!」

「だから謝ん——っておい！男は野郎に抱きつかれても嬉しくねえんだぞ！離れる!!」

「——え？」

「あ。えーとアルミス。カリオストロは世界でいっちなカワイイ女の子だぞ♡」

「今『男は』って…」

彼等は3人＋1匹で抱き合いながら、一時の安寧を過ごした。生存者はアルミスとアテナを入れて7人。アテナの意識が戻るかは分からないが、少なくともこれ以上災禍に襲われる事も無くなった。

「…神殿の方でアテナさんが倒れてた」

「アテナが…すまん。オレ様はウロボロスに運んでもらってノアと合流する。何かあったら今度こそ死ぬからな」

「了解。アルミスは？」

「…行く。行かせて、ください」

「分かった」

「…気を付けろよ。お前の危機でゾーイがもうすぐ戻ってくる筈」

だ。それまで粘っても良いと思うが……仕方ねえ」

カリオストロにとって不安要素があるとすれば。

目を覚ましたアテナが廃れた街を目撃し、精神的苦痛によって錯乱状態に陥る事だ。暴走した星晶獣を相手取る余力はもう無い。カリオストロは兎も角、魔力タンクであるコーリスですら全てを使い果たしたのだから。

逆にコーリスは苦慮していた。

過去の罪を引きずるアテナが、この結果に耐えられるのか。自死の道すら歩むのでは無いかと、そんな恐ろしい結末が今更頭を過ぎった。

「……足が」

だが、コーリスも限界だった。肉体が悲鳴を上げている。瞼を2秒閉じてしまえば今すぐにも脳が睡眠を命令する事だろう。

足だけではない。気が付けば、義手の感覚が消えていたのだ。時間差でゆっくりと魔力が潰えたのか、疲労で気が付かなかっただけか。

「…アルミス。て——」

「ん」

「ありがとう」

『手で支えてくれないか』——そう言う前にアルミスは彼の右手を握ってバランスを取り始めた。

これからの不安に耐え忍ぶ様に、力強く握り締め、神殿までゆっくり、ゆっくりと確実に歩みを進めた。

まるで、見てはいけない物をこれから覗きに行くかのような不安感が彼等の心を薄く掠めた。

そして——辿り着いた先には。

「アルミス」

「嫌だ」

「見ない方がいい。耳も塞げ」

「嫌」

「…」

倒れ付すアテナなどいなかった。

ただ、そこに見えたのは…。

「」

呆けた表情で街だった場所に立ち尽くすアテナだった。

「あ、アテナさま…」

「——ある、みす？」

亡者の様に悍しく緩慢な動きで振り返ったアテナは、未だ夢の中にいる様だった。

パラディオンによって人々は安寧の地を作り、外敵に怯える事の無い営みを過ごし始めている——そんな夢を。

——だが、此処は地獄だ。地獄にされたのだ。

「………どういう、いや、まって…」

——まず、意識を失う前の記憶が蘇り、自身に起きた事を悟る。

エニユオがアテナを裏切り、パラディオンの本体を破壊する事で彼女の魂と防壁を破壊。

「」

——次に、コーリス達の姿を見て何が起きたかを悟る。

満身創痍の彼の姿で外敵との激しい戦闘が存在していた事を理解し、同時に自分が起きるには遅すぎたのだと、冷酷な事実が突き付けられた。

いや、そもそもコーリス達とは別れたはずだ。一度空に旅立っては防衛街に戻るまでにはそれなりの時間が必要な訳で——

「——あ、ああ」

——そして、街を再び視界に収め、どのような結果に至ったのかを悟った。

「いや、いやあ……ああ」

見渡す限りの”廃”。

崩れた家屋からはむせ返る程の埃が舞っていて、あらゆる場所から軽度の死臭が感じられる。

アテナは自身の足元から漂うそれ等を知覚した瞬間、脱兎の如く飛び退いた。震える足は直立を許さず、結果的に尻餅をつく形となり、逃げる様に足を暴れさせた。

パラディオンを配置する神殿には門番が2名存在した。勇敢で実力もある若者だ。アテナからの信頼もあり、彼女達を心から尊敬していた。

それ故にエニユオに欺かれ、神殿内部への侵攻を許してしまったのだ。

彼等は後悔の暇もなく、防衛街の崩壊を表す物体の一部となってしまうた。

「……」

「また、繰り返した……また……？」

覚束ない全てを必死に動かしながら、アテナはようやく身体を前方に向けた。

「わたしが…守れなかったせい、で……………?」

ガシャン、と音が鳴った。槍が落ちた音だ。

盾など元より持っていない。守る物を失った守護者には必要の無いものだ。

彼女は頭を掻きむしる様に抱え、喉が裂けんばかりに喚いた。

「ああああアアアアツ……………!!!」

亡霊の様な嘆きだった。

叫びと形容するには余りにも理性的で、しかし感情の決壊は確実に精神への負担となっていると分かる——そういう嘆きだった。

「ッ……………!!」

地面を叩く。土が弾む音がした。

「あ、ああツ……………!!」

頭を筆る。ガリ、と音が小さく鳴る。

「あああああああ!!!」

再び叫ぶ。反応は無い。

当然の帰結だった。

そもそもエニユオとの戦いは街を壊した彼女を野放しにしない為のもの。全ては事後であったが故に、勝ったとしても何も得られず、

何も取り戻せない。

アルミスはその本質を理解出来た気がした。

そして絶え間ない自傷行為を続けるアテナは、遂に槍を持って自身の首筋に――

「やめましょう」

いつからだろうか、アルミスの手を離れたコーリスがアテナの横で膝を付いていた。

その手は女神の槍を抑えている。

「こー、りす…どの」

「それをやっても貴女は死ねません…苦しむだけです」

「苦しまなければならぬのですッ!!!」

アテナは継る様にコーリスの肩に手を置いて感情を吐き出した。

その瞳は涙に濡れていた。彼が今まで会ったどんな人間よりも純粹な悲しみを見せていた。

「立去ればよかった…：…パライオンなんか無くても…この街はきつと円満に日々を過ごせていた筈…：…！それを私が”過去の償い”という理由だけで依存してッ！エニユオに背後を許してしまった…：…私のせいなんです!!!」

「貴女は街を魔物達から守り、未来永劫地獄に残り続ける為の道標も示しました。貴女は人々を守り抜こうと本気で思って…」

「その結果が…：…：…肝心な時に倒れ、友と思っていた同族に裏切られた役立たずの欠陥品です…：…」

「皆が貴女を心から尊敬し、そして自立しようと戦っていました。貴女の行動は決して無駄なものでは無かった…：…：…忘れたのですか」

コーリスは、自分でも驚く程に低く唸れた声を出した。それは光線

によつて喉が潰れたからか……或いは、この惨状のやるせなさを抑える為はその声が出たのか。

そして、彼の言葉を聞いたアテナは震えながら彼の右手を掴んで自身の首にあてがった。

「殺してください」

「……………やめてください」

「エニユオが皆を殺した罪人ならば……私は過去に空の民を大勢殺し、現在に至つてもこの災禍引き起こした大罪人です」

「こんなの、間違っています」

「私は何もかも間違えていたんです。街を守ってくれたコーリス殿を傷つけ、役立たずとの会話に尽力させる。救いようがありません……………」

アテナの表情は歪んでいた。

涙を流しながら、笑っていた。自身の存在を呪う様に、全てが無駄だったのだと、愚かな道化^{ピエロ}に成り果てた自分を嘲笑っているのだ。

最早、自分の存在が許せないのだろう。

コーリスは過去の戦いでこの様な人間を多く見てきたが、正しい問答を見い出せずにいた。

寄り添うべきなのか、猛るべきなのか。

「アルミスだけではありません！まだ生きている人達があります！貴女が倒れてしまえば誰が彼等を……………」

「……………っ」

「……………生き残った大半は子供達です。他の街で生きるという手は勿論ありますが……残酷です。貴女が少しでも側にいてくれればきつと……ほんの少しでも安心できる筈なんです」

「壊したのは、私なのです」

「彼等は親が死んでも貴女の無事を祈っていたッ！」

「……………え」

「絶望の中…壊れそうな心を踏み留めて、貴女という守護神が生きて
いる事を——」

その時、コーリスに異変が訪れた。

「——ゲほっ……かふ……っ？」

口から少量の血が突然吐き出された。だが、彼が真に違和感を覚えてのは——

(なん、だ…これ、疲れか？身体に力が入らなくて……きもち、わるい
……)

——過剰な脱力感。力が抜ける感覚が彼に不快感を与えていた。
付いていた膝が崩れ、四つん這いの体制になって意識を留めようと
するも、直ぐに限界が訪れるだろうと悟った。

それは、魔力を使い果たした事による疲労だった。

本来ならば大抵の人間が体験しているであろう魔力の酷使による
疲労を、彼は人生で一度も体験したことが無かったのだ。

魔力は生命活動のエネルギーとは異なる為、魔力が空になる事自体
が原因というより、”魔力を使い果たした”という情報を脳が受け
取った結果、身体に休息命令を出すというのが原理である。

加えてコーリスの甚大な魔力量を一気に失ったとあれば、身体機能
の全てが大きく反応し、回復の為のシャットダウンに全力を注ぐだろ
う。

そして、吐血はエニユオによる腹部の傷が響いた結果であり、死に
直結はしないが、意識の低下には繋がった。

「先生!!」

アルミスが直ぐ側に駆け付け肩を起こす。

アテナは目の前の現象を咀嚼出来ず、ただ混乱に目を震えさすのみ。

ワナワナと震えながら呆ける彼女にコーリスは何とか微笑みを作って語りかけた。

「ごめん、なさい…少し疲れてしまった様です…エニユオは強かったので……」

「…あ」

「たぶん、死には…しません。ので、お願いがあります」

「コーリス、殿」

コーリスは島の外へ指を指した。

「俺たちの艇があります。そこ…連れて行ってくれませんか」

「先生！大丈夫!?!先生!!」

「みんな避難させた、ので…どうか……」

コーリスはアテナの迷心を溶かす——正解の言葉を偶然言い放った。

「助けて下さい……」

その言葉を堺に彼は意識を失った。

呼吸も脈もそのままだ。気絶と考えていいだろう。

「アテナさま………せんせいは」

「…生きています」

アテナは立ち上がった。

その目は未だ絶望に苛まれてはいるが——少なくとも前を向いていた。

「アルミス」

「は、はい！」

「ありがとうございます。生きていてくれて……こんな私の元へ来てくれて」

彼女は背丈を合わせ、アルミスの手を包み込んで優しく微笑みかけた。

そしてその幼子を背後に立たせ、倒れたコーリスを背負うと再び立ち上がり、薄く光る朝ぼらけの蒼に向かって進み始めた。

「死なせはしません。コーリス殿」

彼女の心に迷いは無かった。

守護と平和の性——原点の感情がその身体を動かしていた。全ては災禍に包まれる人々を守る為に。

「……救ってくれて、ありがとうございます」

その言葉はそつと、耳元で呟かれた。

——フロンティア号、一室にて。

「——う」

コーリスは頭の重さに苦しみながら瞼を開いた。

「寝ていた……いや」

寝惚けた頭から記憶が蘇る。

彼にとつて正体不明の疲労、意識を失う寸前に助けを求めた事、それ等が思い起こされる。

そして自身に巻かれた包帯を見た。

「……アテナさん」

自分の願いは聞き届けられたのだと、ほんの少しの喜びが浮かび上がってきた。

それと同時に聞こえる音があった。

廊下を激しく走る音だろうか。フロンティア号の一室だと気付いたコーリスは、ゾーイが帰ってきたのか、或いは避難していた子供達だろうかと思いを巡らせる。

ドアに目を向け、音の発生源は――

「コーリス殿ッ!!」

「おおっ!?!」

――大音量にて彼の名を叫ぶアテナであった。

「ぐああ……」

「ああ……申し訳ありません……つい……その」

寝起きの耳に響く大声は、例え彼女の凜とした発声であっても苦しいものであった。

コーリスが意識を戻した瞬間に全速力で部屋に突撃してきたのだろう。迫真の表情で息を切らしている。

「……子供達は?」

「眠っています。今日…いえ、昨日の出来事のせいで錯乱してしまいましたが、体力の限界が来ました」

「ということは夜ですか。アテナさんも…」
「私は不要です」

断固として休息を譲らないアテナ。

星晶獣に睡眠は不要だが、疲労感は依然として付き纏うものである。エニユオの攻撃も相まって、十分な回復をしていないのではないかとコーリスは疑った。

「私にはまだやるべき事があります」

「弔い、ですか」

「いえ…コーリス殿が寝ている間、破壊された街で死体を掘り起こしました」

「……………まさか、一人で」

「腐敗してしまつては彼等の魂も救われない。生き残つた子供達と共に埋葬する事も考えましたが……」

「…そんな余裕は無かつたのですね」

「はい…。私の炎で彼等を見送りました」

コーリスが気絶した後からは一日も立っておらず、その日の夜の内に目が覚めたようだ。

その間にアテナは街を歩き、慟哭の跡が残る家屋を一つ一つ掘り起こし、死体を回収したのだと言う。

コーリスは薄々信じられなかった。

労力の問題では無い。感情の問題だ。絶望に身を焦がした彼女がその様な作業に耐えられる筈が無いと…。

そんな疑問を跳ね除けて彼女は続ける。

開いた手の平に見せたのは球体だった。

「貴方が倒れた時、地面に転がつた…エニユオのコアです」

「…不変の理がある筈です。壊せません」
「いえ、例外はあります」

コーリスは思い出した。

リユミエールのロイスがシヨゴスのコアを貫いた瞬間を。結局サテュロス達から理由を聞き出せなかったが、アテナは当事者である故に仕組みを理解しているのは当然だった。

「私達は星の世界で生まれた不変の獣。星の民もまた不変故に死ぬ事はありません。ですが、星晶獣は一部空の民に寝返っています。その際、”帰化”したのです」

「帰化？」

「空の民と共に生きる決意を決めた時、私達の身体に変化が訪れます。姿形は変わらず、能力にも問題は無い。ですが、コアが破壊可能となるのです」

「空の世界に合った形に変化したということですか…？」

「若しくは、星に見捨てられたというべきでしょうか。コアからの回復も可能ですし、寿命も存在しませんが…確実に死は存在します」

「…道理で敵対的な星晶獣は何度も復活する訳ですね。空に取り残されただけの彼等は依然として星側だと」

そこで一つの疑問が生まれる。

「つまりエニユオは…空と共に生きるつもりだったというのですか？」

「……………はい」

「馬鹿な」

「…性に身を任せたという事は、壊さずには生きていられないという事。空の世界で何かを壊して生きるという想いがそうさせたのでしょうか」

生き方は千差万別。空の世界で生きるという決意自体が必要なものであつて、倫理的な常識は不要である。

コーリスはそれが共生と呼べるのか分からなかったが、そのシステムのおかげでエニユオを確実に倒す事が出来たのだと実感した。

無論コアを壊せなくとも無効化は可能だろうが、相打ちとなつてしまえば相手は再生して此方は無手。災禍は留まる事を知らなかっただろう。

言葉を失うコーリスにアテナが提案する。

「エニユオは救助に来てくれた貴方達に深手を負わせました。私が倒れている間、彼女を倒したのもコーリス殿とカリオスト口殿。このコアは任せます」

「……いえ、これは貴女が決めるべきです」

「え……？」

最初から決めていた事だ。

コア以外の肉体全てを壊すという方法を決めた瞬間から。

「アテナさんが守った街、人間、営み。エニユオは全てを壊しました。ならば、貴女が終わらせるべきで——いえ、どの様に扱うのか、それを決めて下さい」

「……貴方は」

アテナは諦めた様に下を向いた。

見透かされていたのだと。

「封印します…絶対に解くことが出来無い様」

「…破壊はしないと？」

「はい」

「分かりました。アテナさんを信じます」

アテナには出来なかったのだ。

エニユオを憎めない訳では無い。寧ろ有り余っている。

だが、性に抗った者と身を委ねた者として、時を違えれば立場は逆だったかもしれない。そう思うと完全に殺すという判断が出来なかった。

彼女の封印術はどんな空の術よりも効果はある。常にコアを持ち歩くのならば再生も許さずに監視出来るだろう。少なくとも完全な無力化は可能となる。

その状態のエニユオに意識が存在するのかは分からないが、もし存在するのなら生き地獄になる。それも償いの一つだろうか。

つまり、アテナが死なない限り問題は無い。

安全策と言えない事は二人とも分かっていた。

「もしエニユオの封印が解かれてしまえば…直ぐには再生しないでしようが、また甚大な被害が起きます。貴女の自己犠牲が最もソレを引き起こす可能性がある。言っておきますが、勧めはしません。将来的にも、貴女の心に深い責任がのしかかるでしょう」

「…」

「…本当に、俺達と一緒に来ませんか」

それは最初の勧誘とは違い、アテナを慮ったが故の提案だった。

自身が何らかの形で倒れ、封印が緩めばエニユオは復活する可能性がある。自身が倒れる事を許さず、全てを守らなければならない生き方を強いる事になる。容易な事では無かった。

だからコーリスは一人に責任を負わせない様に、団員として苦しみを分かち合う選択を与えたのだ。

その意図を感じ取ったアテナはコーリスの手を握って、今度こそ歪みの無い純粋な笑顔を見せた。

涙は一筋、無機質なエニユオのコアに落ちる。

「また貴方に助けられたら…私はもう、進む事を諦めてしまおうでしょ

う」

「……」

”また”という言葉にコーリスは内心首を傾げた。

気絶する彼の『助けて』という言葉は確実に彼女の生きる意志を、火を灯していたのだ。

「貴方に縋り続けてしまう……それは、間違っている事とは断定できません。ですが、一度貴方に前を向かせてもらった以上、もう戻る事は私が許せないのです」

「……そうですか。残念です」

「……すみません」

最初の勧誘が断られた時と同じ様にコーリスはそう返して――

「……でも、アテナさんが少しでも希望を見出せたのなら、嬉しいです」

「……!」

「俺は、文献で見た貴女を見てこの戦い方を決めました。守りながら敵を倒し、平和を導く……そんな騎士を」

アテナはその言葉に心臓が強く脈立つのを自覚した。

喜びだろうか、それとも緊張だろうか。少なくとも、目の前の言葉が驚愕に値したのは事実である。

「自己を顧みず、ただ人々を守る為に戦い、傷つき、苦心する。例え挫ける事があっても立ち上がる守護者。俺は貴女という優しい人を……心から尊敬します」

体の良い慰めの様だ。

コーリスはアテナに自分の何かを重ねたのかもしれない。理由無く不効率なまでに他者の救済を求め、絶望と共に周囲に救われる。そ

んな愚かな守護者としての自分を。

言葉を聞いたアテナは包み込んだコーリスの手を強く握って、消え入るような声で感情を深く吐露した。

「私も……………私も……………!!」

彼女の言葉もまた、コーリスを救う。

「貴方に会えて……………良かったっ……………!!」

「……………」

アルミスを除く4人の幼子達は眠りから覚め、女神の心労を案じ、コーリスとアテナの対話をこっそりドアの隙間から覗いていた。

「……………せんせ、アテナさま……………」

「きこえちやう……………」

「だいじょうぶかな……………」

アテナのすすり声を聞いた彼等は慌てふためくが、コーリスが彼らに気付く。

覗き見る視線とコーリスの視線が交差する。

「あ」

「見つかつちやた……………」

きつと叱られてしまうだろうと怯えた彼等が見たのは――

「……………」

——微笑みながら人差し指を口に当て、”しーっ”とジエスチャーをするコーリスの姿であった。

「……………わぁ」

「おとなだ」

「なんかちがうとおもう」

そのジエスチャーと表情から、アテナに心配は無いと悟った彼等は、これ以上は怒られてしまうと、ノアに用意された寝室に向かった。

——きつと。きつとだ。

防衛街の戦いが残した遺恨は決して取り戻せる物ではない。

生き残った子供達は肉親と友人を奪われ、唯一の青年は幼子を導く役割を強制させられた。

守護の女神は破壊の女神の復活を常に防ぎ、未来永劫その責務から逃れる事は叶わない。

何もかも失った決闘は、絶望を色濃く残していった。
それでも防衛街は希望を失わなかった。

コーリスが救ったのはアテナの心だけだ。生存者達は自らの絶望に打ち勝ち、明日への一步を踏みしめんと覚悟を決めている。

彼等は安心した様に、全てを忘れてしまわない様に皆で手を握って眠った。

——その眠りに、悪夢はもう訪れないだろう。

——6章、完。

——小話：ごめんなさい

その時が来たからには、そうなっていると思っていた。
百年も経てば、そうなる可能性も高くなるからだ。

「…何故です」

「コーリス、殿」

「何故ですか。何故、そうなったのですか」

「……………」

「説明を、お願いします」

だが、それは思い描いた物とは違った。

片方が復活するのなら、片方は死んでいる筈なのに。

「何故、貴方がいる」

「”あなた”？ふふ…随分と優しくなりましたね？」

「貴様…!!」

「貴方が信じた結果がコレで、全ては間違っていた。そういう事ではないのですか？」

「…」

「貴女も。呆けていないで再会を喜びましょう？」

「コーリス殿…：申し訳、ありません」

俺が信じた人は、苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。
何故だ。何故よりによつて、この騎空団に奴がいる。

「■■■■……!!」

「そんな事、決まっているではありませんか」

奴は何にも変わってはいなかった。

何時も同じ様に微笑んで、優雅に、平然と踏みにじる。

「愛しいコーリスさんに会いに来たんですよ」

キャラクター紹介：①

【メインキャラクター】

『コーリス』

『カルム』という暗殺の一族の生まれ。

カルム一族は一定の年齢に達すると『入神湯』という仙薬を飲む儀式を行う。その湯は人間の眠る感覚を過剰に引き出し、桁外れの膂力と五感を獲得出来るが、精神に大きな負担を与える事になる。

それを乗り越えた時、成人として認められるのが風習であったが、コーリスは資質を見込んだ長老によつて3歳にして湯を飲まされ意識を失う。

彼の両親はその事実を知り、一族への反旗を翻す事を決意。父は里を抜ける時間稼ぎの交戦にて死亡し、母は逃亡先の島にて正体不明の死を迎える。

思えばこれが全ての始まりだったのかもしれない。

余談だが、彼の作るサンドイッチはおいしい。

年齢：11歳↓享年19歳

身長：173cm（6章終了時点）

種族：エルーン

趣味：帽子集め、貯金

好き：食事、睡眠（特に昼寝）、ある姉妹、ある神将

苦手：不定形

属性：無し

権能：『霧』、『廃棄の理』

武器：剣、杖、拳、刀

奥義：ガンマライト・エクスキューション

ラビッドストリーム（口からも放つ）

ネビユラ・デイスペルガ

限定奥義：牙霧沙羅嚶^{ガムシャラナ}

塵芥のガーベージ

技：エンシエント・イアス↓ケーニヒシルト

ケーニヒマウアー

ケーニヒゲフェングニス

ケーニヒエルガー

^{ヘイズ}霞（1段階の霧）

^{ミスト}靄（2段階の霧）

^{フォグ}霧（3段階の霧）

^{オブリビオン}濃霧（4段階の霧）

デイスペルガ

フォルウン

フォルウン・ホロス

主人公のコーリスです。

ある時は感知、ある時は意識阻害、ある時は記憶の篡奪等、奇妙な『霧』の能力を持った主人公ですが、彼はゾーイと会うまではこの能力は属性によるものだと思っていました。

実際はかなりの偶然が重なった副産物の様な物で、従来は4章と5章で仄めかした『アウゲイアス』という存在が彼の中にいる事で発生した能力でした。

その能力は『廃棄』であり、物質を吸収して1つの形に纏めてから放出するといったものでしたが、母親が逃げた先で『幽世』に遭遇してしまった事から事態は一変。

母親を殺されたショックで幽世を吸収してしまい、能力は吸収から奪う物へと変化。トラモントの霧を吸収した事でそれ等が混ざり合い、『奪う霧』という歪な権能が発生してしまいます。

中に潜むアウゲイアスが何らかの形で表層に出現した場合、廃棄の能力が戻りますが、基本は霧のスタイルです。

彼の卓越した魔力量は霧が大気のエレメントを奪って糧としている事が要因なので、霧を使い続ける限りグングン増えていきます。

生い立ちとして、幽世を吸収したショックで記憶が飛んでしまった彼は捨て子としてフェリの父親に拾われ、トラモント島の下部にある

村で当時の村長の養子として生きる事になりました。

そして、その暮らしの中で突如魔物が暴れ出し、リュミエール聖騎士団が駆けつけた事で彼の夢が決まりました。

それは『騎士になる事』です。しかし、ゾーイと出会い、様々な出来事を体験して、本質が『道に迷う人を助ける事』だと気付いた彼は、後に騎士を辞めて騎空士として空を駆け回る事を決意しました。

村長が死亡した後は彼の親戚の元で暮らし、日々騎士になる為の愚直な鍛錬を行っていました。その中でフェリヤその妹であるフィラとの長閑な日々を過ごし、遂にリュミエールへ旅立ちます。

それからの事は本編の通りです。

個人的には結構中身が分かりにくい主人公ではあると思っています。

グラブルの主人公であるグランやジータの純性は持ち合わせていませんし、特別精神が強い訳でもありません。

作中では中々心が折れないと評されていますが、それは一種の諦めが形を変えたような物で、現実を受け入れるのが非常に早いという特徴がありました。

しかし、ゾーイと出会った事で非現実が大量に発生。案外不条理塗れなのだ色々試しながら生きる様になります。ここから彼の『何でもやるスタイル』が生まれました。あんまり威力は無いけどビームを使ったり、盾や杖を鈍器にしたり、終いにはゲロビまで吐きます。

『戦闘において明確な弱点はない』というイメージで戦わせてます。

霧は4段階に分かれています。段階が上がる毎に濃くなり、効果は強くなりますが、4段階目だけはコーリスに強いデメリットが発生します。

1段階目は霧が触れている部分の感知。

2段階目は霧に触れた相手の意識を阻害し、ボーツとさせます。

3段階目は霧に触れて以降の相手の記憶を消します。相手はさっきまで自分が何をしようとしてたかを忘れます。

4段階目は触れている時間に左右されますが、記憶を奪います。現在の記憶から奪い、最後は過去の記憶が消えますが、多くの記憶を奪う程コーリスの負担が大きくなります。その為、永く生きる星晶獣に

使って事故ったら廃人化ですね。

性格はクールに見えるだけの天然で、頑固です。

自分を雑に扱ってきた奴は雑に扱うし、敵は問答無用で無力化しに行きます。逆に尊敬する人には驚く程に柔らかくなります。

あと硬派ぶってるけどちゃんと男子なので恋もします。相手は勿論あの子一筋です。

そして、そんな彼が唯一嫌う人物がコスモスです。

内面を細かく書くのが苦手なのですが、清濁合わせて魅力的に思える様な主人公として描ける様努力していきます。

『フェリ』

コーリスの幼馴染。

村を離れたコーリスと妹を案じ、少女は只静かに待ち続けた。周囲が流行り病に侵され、骸に変わり続けても待った。

死の間際の想いは『逢いたい』という物であった。

しかし、因果は少女を逃さず――。

幼少期からの癖で、追い詰められた時には何時も震えて彼の名前を呼んでいた。

その震えは未だ止まらない。

本名：■■■■■

種族：エルーン

趣味：…思い出せない

好きだった：家族

好き：妹、ペット、■■■■■

苦手：孤独

属性：???

武器：鞭

原作やVSに登場するフェリです。

今作では彼女の父親がコーリスを拾った事で縁が生まれ、共に仲良

く育ったという設定です。

頑固なコーリスをビシバシばいていましたが、村へ行くと寧ろオドオドして彼の背中に隠れていました。

共に遊ぶ約束を睡眠ですっぽかしてしまったコーリスをガチビンタで成敗した事があります。

そんな彼女もトラモントに訪れる悲劇の犠牲となってしまう、自らが嫌う孤独の中で人を待ち続けます。

彼女にとってコーリスは、寂しさを埋めてくれる存在だったのかもしれません。

タグに入っている通り重要なキャラクターではありますが、なんと原作軸まで100年もあります。

出るのは当然先ですね。苦しいです。

ちなみに原作で明かされないであろう本名は一応考えてはいますが、オリジナルですのでご留意下さい。

『フィラ』

■■■■の妹。

病を治す為、コーリス共に旅立った少女は絶望を知る。

故郷に起きた悲劇を知る事すら出来ずに彼女は日々を過ごす。その目には一筋の希望が宿っていた。

優しさの全てはコーリスの安寧の為に。

種族：エルーン

趣味：散歩

好き：家族、コーリス、夫

苦手：離別

少しだけ原作で出てくるフェリの妹です。

自分の印象としてはフェリよりも明るく、悪戯っ気が一切無い優しすぎる子という感じですよ。

フィラがいたお陰でコーリスもトラモントの件で病む事は無く

なっていますが、彼女から見たコーリスも全く一緒です。

原作での姉妹の話は短いながらも凄くしんみりとして泣ける話だ
と思っています。

主軸となる事はあんまり無いかもしれませんが、これからもちよ
ちよく出てきます。

『ゾーイ』

調停者の欠片。

一人の人間を観測する役割を持った欠片は、システムからの脱却を
果たし、自我を獲得した。

——かつてのコスモスの様に。

種族：星晶獣

趣味：何かを学ぶ事

好き：人間、世界、パイ、サンドイッチ、しゅわしゅわのジュース

苦手：混沌、古戦場

属性：星、光

権能：『調停』

武器：剣、大剣、槍、盾

奥義：ガンマ・レイ

限定奥義：ガンマ・バースト

技：ガンマ・レイ

アサルト・レイ

コーリスと接触する為に原作より一足早く登場したゾーイです。

今作ではコーリスを監視していた為に自我が充分に育ち、俗っぽく
なっていますが、大元の性格は変わらず。

彼にビームを教えた元凶であり、これが多くの危機を救っていま
す。戦闘の師として、コーリスは彼女に頭が上がりません。

『近づく事が出来ない強さ』をイメージしています。

ドラゴンのデイとリイはデバフ要因ですね。この2体だけでもこちらの軍に勝ってます。

『幽世をコーリスと共に殲滅しろ』というコスモスの命令でコーリスと共に旅をしています。彼女自身は『幽世』が何なのか分かっていません。不確かな情報の中でコーリスとどんな道を歩むか模索しています。

そんな彼女もコーリスの言う『迷い人』なのでしょう。

でも、祈望の騎空団として活動するのはとても楽しいようで、毎日どんな依頼が来るかわくわくしながらご飯を食べています。

しかしカリオストロが入団してから事態は一変。

食費が削られて楽しみが減った事が彼女の一番の悩み。

『カリオストロ』

開闢の錬金術師その人。

二千年の時を超えて復活した少女は、さして驚く事も無く現代を分析し終えた。そんな退屈は毒となるだろう。

しかし、理解出来ないモノが身近に存在しているとすれば、既に退屈では無くなっているのだろう。

探究心もまた毒であるが、酒の様なものでもある。

種族：ヒューマン

趣味：自分を見てうっとりすること、錬金術の研究、『霧』の解明

好き：自分、鏡、便利な奴

苦手：馬鹿、天然、クソガキ

属性：土

特殊技能：『錬金術』

武器：魔導書、ウロボロス

奥義：アルス・マグナ

アクア・マグナ

技：サルターレ

ペネトラール

カデーレ
アブシンデーレ
シグナートス
ルプトウーラ

おっさんじゃないけどカリおっさんです。

カリオストロの封印は、原作ではルリアが触れた事で解除されましたが、今作では原初星晶獣の力を持つゾーイと、コーリスの中にいるアウゲイアスが反応する事によって解除するに至りました。詳しい設定は分かりませんが、空の民でも星の民でも星晶獣でもない何らかの力が必要だったんだと思います。

強さや手段の豊富さは原作やV Sでも強調されていましたが、実際にどんな戦い方をするか分からないので、今作では自分の想像の元で盛りまくってます。エニユオ戦が顕著ですね。

アルス・マグナはコーリスのビームよりも断然強いですが、持久力は劣るので無限ビームには押されますね。

『万能と思いきや意外と攻撃系』というイメージで動かしています。彼が入団した事で『祈望の騎空団』は引き締まりました。金銭は効率よく使用し、彼がこつそり素材や薬のコピー等を商人に融通する事で依頼のコネを作っています。

ハッキリ言ってズルですが、その分不人気の依頼もこなしているのです。ここまで同業者に反感は買われてないですね。

コーリスに関してはどうですかね…； 楽な死に方くらいは用意させてやりたい”程度の感情は持っています。

『ノア』

艇造りの星晶獣。

本来の役割を放棄している優しき獣は、自身を慕う子供にほんの少しの出来心で助力を申し出た。

共に旅をする一年間は決してすぐに過ぎ去る物ではない筈だが、彼は最近『時間が過ぎるのが早く感じる』とぼやくらしい。

種族：星晶獣

趣味：景色を眺める事、騎空艇を整備すること

好き：人々の活気、猫

苦手：嵐、鼠、戦禍

頼れるお兄さん梓のノアです。

今作の時間軸では結構戦争とか星晶獣の被害が多いので、騎空艇の使用法に辟易していた時期ですね。そのせいで戦闘用の騎空艇は絶対に作ってくれません。

逆に旅をする専用の物は歓迎です。昔から懐いていたコーリスからのお願いだったからというのもありますが、旅に同伴して操縦までしてくれました。

ただ、最低一年という形式ですので一応他の操舵士を見つける必要があります。まあ最高一年じゃないんでその間にノアをデレさせればいいんですが。

『アウゲイアス』

廃棄の理でもあり、『灰』の名を冠する竜。

幼き容貌はかつてのコーリスであり、今のコーリスは竜が存在した故に構成されている。

その力は未だ隠れ家に潜んでいるが、彼は既に必要の無い物だと思っているようで、今は一人の人間の一生を見る事が目的らしい。

年齢：11歳前後（ヒト型時）

身長：145cm

種族：不明

趣味：感情を受信すること

好き：掃除

苦手：害虫、幽世

オリキャラのアウゲイアス君です。

ポジションは原作の六竜達の言う『楔』です。登場回でも言いましたが、詳しくは六竜イベントを読めば楔の何たるかが分かります。説明するとバカ長くなるので今作ではざっくりしています。ごめんなさい。

彼は遠い過去に幽世に負け、死にかけの時に時竜オロロジャイアの手によってコーリスの身体に避難させられます。

コーリスが選ばれた理由は勿論ありますが、状況が違えば他の人間が請け負っていた可能性も多々あります。

彼の持つ廃棄の能力は空の異物を吸い込んで放出するという物で、それは幽世という異物も例外では無かったんですが、結果は敗北。

竜形態はとてつもなく攻撃的なエグい見た目ですが、ヒト型時は打って変わってひ弱な子供に。

それはトラモントの時にいたコーリスと瓜二つで、頭に螺旋状のクソでかい角が2本生えています。

性格は基本的に臆病で、一部の人間に対しては強気というか強情になります。これはあの子の影響ですね。

今の所精神世界でしか登場していませんが、腰には純白の刀を2本差しています。

このキャラもこれから出していく予定ですが、沢山出るのは当分先ですね。

キャラクター紹介：②

【序章～3章キャラクター】

『スルト』

リユミエール聖騎士団の若きエース。

その身を包む情熱は希望を照らす聖火となる。

年齢：19歳

身長：91cm

種族：ハーヴェイン

趣味：なんかかつこいい本を読むこと

好き：松明

苦手：高身長

属性：火

特異体質：『感情の炎』

武器：剣

奥義：ヴァルカン・インフェルノ

ラグナロク・ヴァーミリオン

技：炎纏ヴァーミリオン

フランベルジュ・メルト

騎士時代の仲間、スルトです。

感情の強弱によって火力が変わるという特異体質を持って生まれ
たせいで、『星晶獣のスルト』と同じ名前を付けられてしまします。

強さは今の所は無法も良いところですが、感情の強さというのがミ
ソですね。人間は大人になると…。

見た目は赤色の線が入った黒髪のハーヴェインで、種族の中ではかな
りのイケメンです。

『ロイス』

リユミエール聖騎士団の若き副団長。

水の魔法と秀麗な容姿から繰り出される剣撃には恐ろしい激情が込められている。

彼女を決して怒らせないように！

年齢：19歳

身長：161cm

種族：エルーン

趣味：誰かと買い物に行くこと

好き：鎧、決闘

苦手：我慢

属性：水

特異体質：『リミッター解除』

武器：剣

奥義：トライデント・オブ・アニマ

技：ブルームーン

ヒール

騎士時代の仲間、ロイスです。

コーリスの良きライバルとして共に切磋琢磨し、副団長に登り詰めた才女です。

ヒーローの女性形として正しい意味での『ヒロイン』をイメージしていました。

そんな彼女はブチギレると身体のリミッターが外れて馬鹿力になるという体質があります。その状態で繰り出される突きとウォータージェットは滅茶苦茶怖いです。

終いには回復魔法も使えるのでしぶといです。

見た目は長い金髪を持つ女騎士で、ユイシスをイメージしてあげれば分かりやすいと思います。

『ルブロ』

勇敢なる若き騎士、此処に眠る。

年齢：享年19歳
身長：176cm
種族：ヒューマン
趣味：戦術を考えること
好き：即断即決
苦手：魔法
属性：無し
武器：剣

騎士時代の仲間で、士官学校での決闘や入団試験でチヨイチヨイ出たてたキャラです。

魔法が苦手で、肉体を魔力で強化する戦い方を好んでいましたが、常に前線で戦わなければならない立場が招いてしまったのか、リュミール空戦で亡くなっています。

戦いの最中では彼の死は誰にも気付かれる事が無く、勝利後の確認にて初めて認知され、生き残った人間に戦争の虚しさを遺していきました。

コーリスは彼の死に未だ現実感を覚えていません。

『エクシンダ』

彼の本性を知っていた人間はいない。

誰もがそれを知ったのは彼が死んだ後のことだった。

年齢：不明
身長：182cm
種族：ヒューマン
趣味：雑貨、買い物、岩盤浴
好き：不明
苦手：不明
属性：不明
武器：剣

リユミエール騎士団の元副団長です。

本名はエクシンダ・オクトで、若い団員をからかう軽薄な姿をよく見せていました。酷いときは猥談です。

そんな彼も空戦で艇を壊される形で落下：騎士団によって死亡したという判断が下されました。

エネルギー状の巨大な剣を生成して操作するという派手な戦い方をしており、コーリスはその技術を未だに理解出来ていません。

ゾーイに聞いても分からなかった様です。

『ルクス』

リユミエール聖騎士団団長。

騎士道の何たるかは問わない様に。

年齢：26歳

身長：178cm

種族：ヒューマン

趣味：武器の手入れ

好き：剣

苦手：交渉

属性：光

武器：剣

奥義：ノーブル・エクスキューション

技：レイディアン・レイ

当時のリユミエール団長ですね。

特別深く掘り下げてはいませんが、ランスロットの様に力と精神が共に完成されたキャラとして作りました。

剣オタクが騎士団に入ったら騎士道精神が勝手に身に付いて団長になってた、という程度の認識で構いません。

天才肌タイプの人です。コーリスの事は結構可愛がってましたが、関わる事はそう多くは無かったです。

『グルシ』

若人を見送る寮のおばあちゃん。

彼女のご飯は量が多いらしい。ハーヴェインなら自己申告で減らしてもらおうように。

年齢：68歳

身長：156cm

種族：ヒューマン

趣味：訓練を眺める事

好き：リユミエール

苦手：騎士の殉死

コーリスが住んでた寮のおばあちゃんです。

幾多の若者を見送っていたおかげか、人の本質を見抜くのがとても上手ですが、かと言って変に口出しはしません。彼女はただ美味しいご飯を沢山用意して大きくなってもらうだけです。

ゾーイの人外要素にも勘付いていた様で、同時に人に溶け込もうとしている事も察しました。

コーリスとゾーイはリユミエールに赴いたとき、先ず最初に彼女の元を訪れます。

『遊撃隊隊長』

誰も名を知らない。

リユミエールに反旗を翻した愚かな罪人。最後はコーリスの手で葬られたが、その背後にはシヨゴスがいた。

年齢：37歳

身長：183cm
種族：ヒューマン
趣味：無し
好き：無し
苦手：若者
属性：風
武器：短剣

空戦の元凶である遊撃隊の隊長です。

彼自身は先代から続く遊撃隊の腐敗を防ぐ為、国を少しだけ脅かして結束を強固にするという狙いがありました。シヨゴスの起動を危惧したコーリスによって殺されました。

しかしシヨゴスは自我を持っており、人が契約によって操る様なシステムでは無かった為、既に空戦は始動。リユミエールに甚大な被害を与えた原因となってしまいました。

間違いなく悪人でしたが、クスと呼ばれる人間では無く、大抵の遊撃隊の人間は彼を責めることなく自主退団し、暗い未来を歩みました。

『シヨゴス』

『求心』を司る星晶獣。

”ヒト”を憎んだ肉塊は獣達の怒りを代弁して空へ挑む。

その姿は彼が憎む人間の愚かさに瓜二つ。

年齢：不明
身長：120〜230cm（触手の伸縮で変化）
種族：星晶獣
趣味：生物の営みを見ること
好き：自然、本能
苦手：欲望、欺き
属性：なし

権能：『求心』

オリジナル星晶獣のシヨゴスです。

彼は星の民が空の民が持つ感情を理解しようとした為に生み出した獣で、見た目は赤い肉塊の中心部に一つの目玉が埋め込まれているもので、大変グロテスクです。

能力は全生命体との対話で、言語が無くとも意思の疎通が取れるというものです。

星の民は効率的に戦闘を進める為に相手の理解を求めましたが、シヨゴス自身は空を好んでしまい寝返ります。

ですが、戦争集結後には空の民が魔物や獣達の住処を追っていた為、空でも星でも無く、”獣”の側に付きます。全ての種を理解できるが故に、人間の横暴さに目がくらんだのでしょうか。

獣の軍勢を率いる事が出来、大変危険な能力なので、それを危惧した『星トモ』に封印されていましたが、リユミエールの遊撃隊長が偶然封印を解き、星トモ達に知られる前に軍勢を構築、空戦を仕掛けます。

空に帰化しており、コアは破壊可能な為、飛竜の背にしがみついた姿をくらましていましたが、ロイスの技の前にその生涯を終えます。

彼は最後まで空を憎み続けていました。

『サテユロス』

心を掴み、心を伝え、心を得る。

豊穡の少女は一つ、世界の運命を変えた。

種族：星晶獣

趣味：星トモの皆と遊ぶこと、手紙

好き：星トモの皆、他のお友達皆、良い子

苦手：ぎくしゃくした気まずい空気、シヨゴス

サテユロスです。

今作ではコーリスとロイスの大恩人ですね。星トモの人達がいなければ当時のリュミエール騎士団は壊滅で、他の国が頑張つてシヨゴスを倒していました。

彼女はコーリスに理解を示しているというより、期待している感じですか。彼の活躍を待ちきれないとわくわくしていますが、周囲からは甘やかしている様に見えています。

『ナタク』

空を駆ける武神は戦ではなく空の営みに興味を持った。

破壊では無く創生を求めるのは人間に限った話では無いのだろう。

種族：星晶獣

趣味：文化に触れること

好き：戦闘、文通

苦手：特になし

星トモ最強のナタクさんです。

空を高速で移動しながら高火力を放つっていう結構な理不尽能力を持っているので、覇空戦争はヤバかったんだと思います。

この人もコーリスの大恩人です。

ちなみにコーリスと一回だけ文通をしましたが、その時に返答が待ち遠しいと感じた事から、ちよつとずつ空の文化に興味を持ち始めました。

『バアル』

栄世に雷鳴を轟かせる星晶獣は、彼の前では一切姿を見せずにいた。

罪悪感だろうか。

種族：星晶獣

趣味：音楽

好き：心地良い共鳴
苦手：不快な不協和音

あんまり登場していませんが、リュミエールを助けたバアルですね。

シヨゴスの一因もあつて、コーリス達の前に姿を表したくなかつたのでしょう。

若しくは友であつたシヨゴスの為に一人で鎮魂歌を奏でていたのかもしれない。

『メドウーサ』

誇り高き蛇眼の少女は悠々と日々を送っていた。

——しかし、ある国を救つてからは何か考え込む様になつたらしい。

種族：星晶獣

趣味：メドウシアナに自作の歌を聴かせること

好き：メドウシアナ

苦手：馴れ馴れしい人間（本当は、知らない人達の間で一人になること）、コーリス

メドウーサです。

コーリスの歪みを正確に認知した存在とも言えますが、その事は皆に（特にサテユロス）には言わないようにしています。

優しい性格とは言えませんが、少なくともセレストに呪われたコーリスへの同情はあつたのか、一回だけの文通に手を加えました。

それで恥ずかしくなりすぐに消そうとしましたが、無駄でした。ちなみにメドウシアナとコーリスは仲良しです。

『レイ』

無垢を導く久遠の少女。
愚かな破滅の道を征く少年を救う事は叶わなかった。
母がいれば、そんなに苦しむ事は無かったのに…。

種族：ハーヴェイン

趣味：架空の物語を楽しむこと

好き：赤ん坊の相手

苦手：反抗期の子に嫌われること

属性：闇

特殊体質：不明

武器：瞳

技：阿頼耶識

原作キャラのレイです。

コーリスの任務中で出会い、彼に知識を与えましたが、話が合わずケンカ別れをしました。

『謝って”ママーツ!”って言いながら戻ってくれば助けてあげるのになーツ!!』と思いつながら今もコーリスにキレ続けています。

一面と向かって再会する事は当分無いですね。気まず過ぎます。

【4章キャラクター】

『バジユラ』

因果に呪われた少女は母の犠牲を持ってしても短命であった。

一人の幽霊を愛してしまった彼女は、受け入れていた人生の終わりを恐れ、感情の赴くままに駆け抜けた。

その終わりは安らかであったが、周囲の人間にとっては呪いであり、地獄であり、後悔であった。

彼女は愛して死んだのだ。

年齢：享年17歳

身長：154cm

種族：エルーン

趣味：鍛錬、膝枕をしてもらうこと

好き：コーリス、家族、祭り、春

苦手：妹の泣き顔、恋

属性：不明

特殊技能：『武神の魔法』

武器：刀、弓

奥義：りようさいけんぼ 猫碎犬戊

：けんけんひきゆう 犬剣秘躬

技：大口真神

オリジナルキャラクターのバジユラです。

初代神将の力が本人の力に加えて重ねられる様にのしかかっていた為、寿命が削られてしまったという設定です。

強さは無法も無法で、アウゲイアスの力が現れたコーリスですら斬撃の切れ味でゴリ押し突破しています。

初代神将の魔法によって魔力自体が武器の形を取り、叫びすらも斬撃となって周囲に飛び散ります。

そんな彼女は短命でありながら人生に悔いはなく、緩慢な死を迎えるつもりでしたが、長命でありながら人生に意味を見出せないコーリスに惹かれ、彼を愛しました。

彼女との生活はコーリスにとっても幸せな時間でしたが、別れ際の傷は相当なもので、彼は少しだけ世界が嫌いになりました。

彼女が渡した刀はエニユオ戦でコーリスの命を救い、唯一残った武器となりました。

余談ですが、原作キャラのヴァジラと似ています。

『ヴァジユラ』

犬神宮のトップであり、十二神将の一人。

理路整然、淑やかに見えるその瞳の中には新鮮な暴れっ気が潜んでいるが、周囲からはバレバレである。

強さは本物でも、姉へのコンプレックスは尽きない様だ。

年齢：15歳

身長：158cm

種族：エルーン

趣味：ナガルシヤとの戦術研究

好き：姉、合法での勝負

苦手：死別、敗北

属性：不明

特殊戦術：ナガルシヤ

武器：刀

奥義：金牙神然

オリキャラで十二神将のヴァジュラです。

姉とは違い大人しめの性格かと思いきや、結構な暴れん坊で、感情のはけ口を探している節があります。

とはいえストレスが溜まっているだけで、本質は結局お淑やかではある為、人間関係のほつれは全くありません。

強さは十二神将の中でも上位に位置しており、回避能力と判断力、持久力に長けている為、コーリスとは塩試合を繰り返しますが、共に育った

犬のナガルシヤは共に戦うパートナーではありませんが、共に育った訳ではなく、寧ろ老犬です。

ナガルシヤの担当した神将は彼女達の母、バジュラ、ヴァジュラと3代に渡っています。

ちなみに彼女がコーリスに託した髪飾りは、バジュラから受け取った刀の鞘に付けられています。

【5章キャラクター】

『ヘカテー』

古戦場を餌場とする魔性の冥妃——であった筈の彼女はコーリスとゾーイから逃げ続けている。

彼女の明日は何処に？

種族：不明

趣味：誘惑、黒犬の世話

好き：体液、合体

苦手：冬、杖でお腹を殴られること

ヘカテーです。

星晶獣でも魔物でもない長命種っていう結構な謎を持っている存在ですが、危険性もかなり高いと思ってます。

原作を見る限り犠牲者も多そうなので、コーリス達はそこに目をつけてビビらせまくっています。

コーリスは眠りから覚めれば何とかかなりますし、ゾーイは力技で起きましたが、眠り自体を防ぐ術はありません。カリオストロなら多分対応できるといった感じで、理不尽キャラとして書いたつもりです。

結構残念なお姉さんですが、ちゃんと強いと思ってます。

【6章キャラクター】

『アテナ』

守護と平和を司る星晶獣。

覇空戦争の後、戦術を授けながら旅をしている最中に祈望と出会う。

彼女は最終的に救われたのだろうか。

本人は逃げているだけだと自嘲した。

種族：星晶獣

趣味：戦術の研究

好き：平和

苦手：闘争、依存

属性：火

権能：『守護』

武器：槍

技：パラディオン

原作キャラのアテナです。

『人を助けながら旅をする』、『自身の力に疑念を持ちながら進んでいる』という点で、個人的にはコーリスと似た部分があると思って登場させました。

二人の性格の相性はズツ友レベルで、二人がペアを組んで戦うと誰も突破出来ないくらいの防御力を見せます。

ですが、最終的に彼女はコーリスに頼る事を辞めました。理由は彼の優しさに依存する自身を恥じた為です。

人を救っていた理由はアテナの優しさ故ですが、覇空戦争時の償いという理由もあります。彼女は自身の罪を感じ、全ての責任を負うことに決めました。

エニユオはきつと、必要以上に悩み苦しむその愚かな姿が好きだったのでしよう。

『エニユオ』

破壊と蹂躪を司る星晶獣。

自らの性を理解したあの日——彼女は空と共に生き、空を蹂躪すると決意した。

全ては悦楽の為だが、彼女は自身が壊される事を想定していたのだ

ろうか。

破壊だけが喜びならば、何故彼女は空を美しいと感じたのだろうか。
全ては都合の良い破壊者の戯言だ。

種族：星晶獣

趣味：他者の絶望を見ること

好き：他者を蹂躪し破壊すること、アテナ、コーリス

苦手：退屈、平和、無視

属性：不明

権能：『破壊』、『蹂躪』

武器：槍

奥義：ルースレス・タイラント

技：ボリスクラスト

キユドイモス・グラツニア

危険人物エニユオです。

原作のフェイトを見た時も思ったんですが、ただのサイコじやない感じがして好きです。ですが、やった事は情状酌量の余地無しの大虐殺なので、なあなあにしたくないタイプのキャラです。

多分強さは最強クラスの星晶獣で、大量召喚&大火力という対国家仕様の能力を持っています。

性を受け入れて後悔すらしていない無敵の精神には困りますね。

彼女から見たコーリスは、『アテナよりは現実を見ているけど愚直だから玩具にして死ぬまで遊ぼう』といった感じで、滅茶苦茶気に入っています。

しかし戦いの終盤になってからはコーリスも機械的にエニユオを殺そうとしているので、彼女からしてみれば嫌だったと思います。

多分この人アテナがいなくなったら滅茶苦茶悲しむタイプだと思います。

『アルミス』

何も持ち得なかった少女は遂に武器を手にした。

武器と引き換えに全てを失った。

武器を持たせまいとするアテナの選択が正しかったのだろうか。

年齢：10歳

身長：141cm

種族：ヒューマン

趣味：弓術の創意工夫

好き：褒められること

苦手：失うこと

属性：風

武器：弓

オリキャラのアルミスです。

個人的に全然掘り下げていないと思っているので、読者の皆様からしたらぽつと出の弓キャラと感ぜられるでしょう。

設定としては弓の天才かつ魔力が常人よりも少ないというもので、エニユオ戦では肩をぶち抜くという戦果を上げました。

エニユオがアルミスの訓練を見逃していなければ、そんな事は起きなかったでしょう。

次の話で色々書こうと思いましたが…キャラとしては未だに薄いですが紹介に載せました。

見た目は空色の髪色をした無表情の少女です。

間章 そらごとアンドロメダ EX1. 災禍の後

「起きるのが早いんだねっ☆頑張り屋さんなのは凄いことだけど……
もう少し休んだら？・団長さん♡」

「…うん」

「カリオストロもお…魔力がカラカラで動けなかったの〜！」

俺が倒れて、アテナさんと話して…次の朝。

部屋から出るとカリオストロが笑顔で出迎えてくれた。何故か美少女モードに入っているが、身体は治って——いやなんで治ってる!?

「う、腕とか大丈夫なのか」

「うん大丈夫！カリオストロは天才だから！」

テンション上がってるのかヤケになってるのか分からんが、カリオストロは五体満足の状態だ。

魔力が無いから暫くは錬金術で身体を作る事は出来ない筈。何をしたんだ。

…いや、そういうえば健在な奴がいたんだった。

「ウロボロスか？」

「上出来！ウロボロスはカリオストロの魔力で動いてる訳じゃないから、身体のパーツさえ準備していればくっつけてくれるの！」

「じゃあもう大丈夫なんだな？」

「いや無理だな。強度に問題がある。動かし続ければ崩れるだろう。近い内に全身を作って魂を移す必要がある」

「急に戻るな」

「良いじゃねえか久し振りの美少女モードだ。これやると相手が話聞いてくれる様になんだよ。なんでだろうな」

それは多分呆気にとられて……まあ、いいか。このモードの時に話す事は結構ためになるし。

ノアさんにどんな事を言おうと考えていたらカリオストロが徐ろに俺の頭を撫でた。

「ま、元気になつて良かったな。アテナがお前を抱えて来た時はどうなるかと思つたが……アイツ、予想以上にデレてたぞ」

「……行つた時、アテナさんは自害しようとしていた」

「……マジか。いや……でも、そうだよなあ……」

「子供達は？」

「ノアとアテナしか面倒が見れなかった。生活費くらいは足りなくなつたらオレ様が出てやる」

「ありがとう……。精神状態は？」

「間違つても元気とは言えないが安定してる。死が身近な街で過ごしていたからか……現実が受け止められていないのか。経過観察が必要だとは思うがね」

アルミスと違って他の子供達はエニユオによつて街が壊滅した事を理解していない筈だ。

一人の青年だけが察していた様だが、それを告げる事はしないだろう。

アテナさんがボロボロの姿だった事も相まって、死んだ人間達の仕事に意識が向かなかつた可能性もある。

……大切な人間が殺されるという経験は決して乗り越えられるものではない。慣れてしまえるのならば、それはもう人間の感情を捨てるのと同義だ。

奪われるという事象に救いなんてない。その経験を糧に得る物も無い。

俺達に出来る事は彼等が踏み出す為の道を用意する事だけなんだ。

「…コーリス？」

声が聞こえた。ノアさんの声だ。
震えている。

「おはようございます」

「もう、大丈夫なのかい…？」

「はい」

ノアさんの顔は少しやつれた様に見える。子供達の相手をしていた心労…というより、朝になって力が抜けたからだろうか。

もしエニユオが艇を狙っていれば全てが消えていた。

俺達の生死に関わらず彼は艇を動かしただろうが、待つ時間は相応に辛かった筈だ。

「本当に生きていて…よかったよ」

「ノアさん…」

「夜が明けるまで戦い続けて…死んでしまったのかと何度も思った…」

切なげに笑うノアさんはこの戦いの結末を体現しているかの様だ。
全ては虚しいだけ。

街の人間が全て生存していたとしても、エニユオが刻んだ恐怖は消えないと確信できる程の蹂躪。

人生とは何だったのだろうか——そういう刹那の絶望に思考が引っ張られる。

「…でも——」

ノアさんが何かを言おうとした瞬間——

「ッ!!」

「……チツ」

「これは…!？」

——甲板の方から熱を感じた。

炎を使えるのは…アテナさんだけだ。

即座にノアさんがオールのような形状の杖を出現させ構える。

「——僕が行く」

「いや、ウロボロスを向かわせる。お前じゃ勝て——待てコーリスツツ!!!」

暴走なんて無いはずだ。

夜に見たアテナさんは絶望を知りながら…それでも進み続ける覚悟を見せていた。

大方魔物の襲撃に力行使しただけの筈——!

俺は予備の剣を倉庫から取り出し甲板へ向かう。

「待て!!!」

カリオストロの声を背中に感じながら。

「……やばいー!」

甲板に出たら凄まじい熱気。熱い。

エニユオが本気を出した時と同じ様な圧を感じる。ある種の神聖さ——星の力だろうか。

「裏か…!」

逆の方向から強い熱波を感じる。

空へ向けられている事から何らかの外敵と相対している様だ。
……よかった。

「アテナさ——」

「誰だ君は…彼等に何をした」

「…艇から立ち去りなさい」

「誰だ、と聞いている」

……ゾーイが帰ってきた。

それと同時にアテナさんと向かい合っている。互いが艇を襲う敵だと勘違いしていて、ゾーイの方はかつてない怒りを見せて圧を飛ばしている。

呼吸が止まりそうだ。

エニユオの口ぶりからして、本気のアテナさんはエニユオと同程度…なのにゾーイが威圧するだけで萎縮させてしまっている。

「……去いね」

遂にゾーイの剣に光が宿り始めた…！

「ゾーイ!!」

「——コーリス！」

「コーリス殿ッ！ここは——」

「ゾーイ、彼女は敵じゃない！」

「その傷…何かあったんだな!？」

俺の顔を見るやいなや直ぐに力を解いて降りてきた。
表情が二転する。喜びから不安へ。

「君に何が……」

「長くなる。取り敢えず彼女は——」

「今思い出した…星晶獣のアテナだろう。だが私が言いたいのは」
「分かってる！取り敢えず中に入ろう！」
「久し振りの再会だというのに煙に巻くのかッ！」
「なんか面倒くさくなってる!？」
『「おかえり」も無いのか!』
「おかえり！」
「ただいま!!」

ゾーイの背中を押して無理矢理中に入れる。
…ゾーイがいるだけで安心感が凄い。本当に。

「……………あ、私は」

アテナさんごめん！

「クソガキクソガキクソガキクソガキ!!!」
「ごめんなさい…」
「錬金術開祖を過去一ブチギレさせた名誉と共に誇り高き死を与えてやろうか!？」

俺は今、頭を鷲掴みにされてガンガン揺さぶられている。
後頭部はウロボロスに噛み付かれているし、何ならノアさんに杖で尻をひっぱたかれた。地味にこれが一番辛い。

「…お前の腹の皮はエニユオの槍で軽く裂かれてる。派手に動くところがあるか分かんねえぞ」
「い、一応薄皮で避けたから」

「人体の神秘について教えてやろうか？内臓の重さで皮が――」
「聞くだけで痛い……」

早朝、居間の椅子で地獄の四者面談だ。

目の前にカリオストロ、その横にゾーイ。俺の横にはノアさんが座っている。

あと一応真後ろにアテナさんが立ってる。座れと言っても聞かない。

重い空気の中ゾーイが口を開く。

「若者が1人、子供の気配が5人……何があったんだ」

……アテナさんがいる中で、どう話すべきか。

悩んでいるとカリオストロが代わりに答えてくれた。

「事情を無視して話す。依頼の後、そこのアテナと一緒にいた星晶獣のエニユオが街を壊し……駆け付けたオレ様とコーリス、もう一人の子供で対処した」

「エニユオ……コスモスの記憶には残っているが、別段覇空戦争時にその様な動きは……」

「単純に本性を隠していた。街を守る立場の奴が急に襲い始めたんだ。簡単に崩せる」

「私は……本当に間が悪かったのか」

確かに、ゾーイがいれば生存者はもう少し増えていたのかもしれない。

だが、その様な未来は訪れなかった。どうしようもない。

沈痛な表情で眉間を抑えるゾーイは、アテナに顔を向けた。

「……君とエニユオはどういう関係だったんだ」

「友として……覇空戦争終結から400年程共に生きていました」

「……気づかなかったのか？」

ゾーイは極限まで言葉を考えたのだろう。

その結果、率直な疑問に帰結し…アテナさんにとって最も後悔を憶えさせたエニユオとの関係性について迫る。

「……はい」

アテナさんは震える口を噛み締めながら返答した。

ゾーイの口から反射的に吐息が漏れる。

「…何故だ」

「ゾーイ、やめろ」

その問答を諫めたのはカリオストロだ。

「お前は…オレ様が『錬金術の更なる進化の為にこの騎空団を利用していない』と言い切れるか？」

「だが君は」

「嘘付いてるかもしれないぞ」

「…」

「例えば、この騎空団が何事も無く100年続いた——そして、オレ様が裏切った。お前は直ぐに対処出来るのか？100年信じ合っていたのに？」

「………アテナ。すまなかった」

「…不意を許したのは事実。私が健在であればコーリス殿とカリオストロ殿が傷を負う事も、犠牲を許す事も無かったかもしれない…」

…これでは昨日と何も変わらないじゃないか。

アテナさんが後悔するだけの昨日と。

俺達はこれからどうするべきか考えなければならぬ。

団長として、先に言の葉を紡がなければ。

「…子供達はこの団にいる限り真の意味で戦禍から離れる事は叶わない」

「コーリス、それはつまり…皆を他の島に移住させるという事だね？」

「無論今すぐという訳ではありません」

精神状態を考慮すれば、今すぐ住処を変えろという選択は憚られ

る。今は全てを受け止める時間が必要だ。

子供達を見てくれたノアさんなら分かる筈だ。

「暫くは安全な島に艇を止め、二人が依頼を受け、もう二人が艇を守る形で行きます。アテナさんには子供達を直接守ってもらいたい」

「いえ、私が依頼に行きます！・コーリス殿の手を煩わせてしまえば……！」

「子供達には貴女が必要なんです」

「っ……分かり、ました」

方針を決め、全員が頷くのを見て俺は腰を上げた。

その間、ノアさんが俺を見ていた。

「子供達にはコーリスも必要だと思うよ」

「……え？」

「僕は彼等の感情を見た。確かにアテナに向けられた感情は敬愛だったけど……コーリスは『先生』だったんだよね？」

「は、はい」

「子供達はアテナを神のように崇め、見上げていた。それと同時に彼等は君の背中を見ていたんだよ」

「……」

「少し、子供達と休んでおいで」

それは責任を追求する文言では無かった。

ノアさんは、ただゆっくりと過ごす時間を俺にくれたらしい。

それでいいのだろうか。ゾーイとカリオストロの顔を見る。

「というか、ゾーイも長い間一人で動いてたんだ。いつその事騎空団の活動を暫く休まねえか？」

「私は動けるが」

「任せる側つてのもモヤモヤすんだ。大人しく全員で平穩に過ごそうや」

「珍しいな。君は許す限り時間を最大限に使う人間だろう」

「こう見えて左腕と腹が消し飛ばされたんだ。ちよつとくらい回復の時間をくれ」

「……よく生きていたな、二人とも」

カリオストロは気を遣ってくれた。

ゾーイも異論がある訳では無いようだし、貯蓄は結構ある。少し踏み切って休みを取ろうか。

「……ところで」

「どうしました?」

ずっと聞きたかった事なのだろうか、アテナさんがソワソワしながら俺の方を見てきた。

「ゾーイ殿は…どういった存在なのですか?」

「私か?」

「はい。圧倒的な力を感じましたが…星の力ですね。しかし、貴女ほどの星晶獣が覇空戦争で音沙汰が無いというのも奇妙な話」

「ふむ、私は君達の世代では無いからね」

「世代…?」

「私は覇空戦争時に生み出された獣ではないよ」

「……言っている意味が分かりません」

アテナさんからしてみれば確かにそうだ。

星晶獣はそもそも覇空戦争の為に作られた兵器。戦争終結時に星の民は空から撤退している。隠れて作られている訳でも無いだろうし、意味がわからない話ではある。

実際、俺もそうだったし。

でも、ゾーイは特別だ。

「私は1900年前に作られたんだ」

「は?」

「原初獣は知っているかな。遙か昔に作られた星晶獣なんだが、大半は世界を保つ為のシステムとして作られているんだ。私はその内の一体の分霊の様なものだ。本体ではないよ」

「げんしよ…じゆう」

「役割が果たせない可能性があるから詳しくは伏せさせてもらうが、存在はしている。会う事は無いが」

アテナさんはフリーズした。

千年単位のスケールは計り知れない。人間なんて百年生きれば凄
いというレベルなのに。

………待てよ？カリオストロって何年だっけ？

「……カリオストロ」

「なんだよ」

「何年くらい生きてるんだ？」

「んーと、生まれたのは……あ、ゾーイの本体と一緒にくらいだな。封印
されてた年月も含めれば2000年くらいだろ」

「なんだお前」

全員が引いた。

「あ、せんせ」

「アルミスか」

一応甲板に損傷が無いか見に来るとアルミスが手すりによしか
かって空を見下ろしていた。

「落ちるなよ」

「そんなへましないよ」

アルミスはあの戦いを経て、抜け殻のようになっていたらしい。

今日はかなり早めに寝て…何故か遅めに起きて、無言でパンを齧
り、他の子ども達のように身を寄せ合う事もせず、ただ風を浴びてい
るだけ。

ノアさんが言うには、あの出来事を思い起こさない様になっているの
ではないか、という事らしい。

——カリオストロは、遅く起きた理由は疲労だけでは無く、眠れな
かったのではないか、とも言ったが。

俺は何となく船に寄りかかって座ったら、アルミスも徐ろに横に
座って寄りかかってきた。

「眠いのか？」

「疲れたかな」

「……」

「思い出したら怖い夢を見ると思ったから、何も考えないで目を瞑っていたのに、眠れなかった」

虚ろに見える瞳は極限まで感情を煮詰めた結果の疲労。

思うがままに泣き叫び、暴れられるのならばどんなに楽か。そうならば時間が解決してくれる事もある。

しかし、アルミスのように己を律しようとする者はいつか気をやっしてしまう。

きつと、あの弓を引いた感触が残っているのだろう。

彼女はゆっくりと口を開いた。

「赤ちゃんの時、私は山に捨てられた」

「……え？」

「家にいたのは、私を育ててくれたおじさんとおばさん」

死んじやったけど、と呟いてから続きが始まる。

「山には魔物が沢山いて、私は多分……食べられて死んじやう筈だった」

アルミスは右手で頭に触れた。

記憶を探る様に。

「赤ちゃんだったけど、その時だけ記憶があるの」

「珍しいと聞くが……」

「信じないから、誰にも言っていないよ」

「……」

そう言いながらも、過去を語るアルミスは先程と打って変わって口角が上がっていた。

……笑い慣れていない人間の顔だった。

「見えたのは鳥と、羽が生えた羊と……狼みたいな犬。雲みたいに大きくて、目の前の魔物達を倒してくれた」

「魔物が魔物を倒したのか……？」

「ううん、実際に雲だったのかな。動物はすぐに消えて、最後の魔物には金色の矢が飛んできた」

狩人が彼女を助けたのだろうか。

しかし…雲状の獣が気になる。人間の魔法には幻を見せるものがあるが、実際に魔物を退けたのなら奇妙なものだ。

「次に見えたのは女の人」

「どんな人だった？」

「オレンジ色の髪で…エニユオ様みたいにヘアバンドをつけてた」

アテナさん…では無いのか。

アルミスが生まれたばかりの時は二人は街にいない筈だ。通りかかった旅人だろうか。

「その人の事、他に覚えてるか？」

「その時は言葉も分からなかったし、間違ってるかも」

「それでもいい。聞かせてくれ」

「うん」

アルミスは言葉を思い出す様にゆつくりと紡いだ。

『この月夜はあなたを見捨てたのですね』

『山の冷気はあなたの生きる力を奪いました』

『私の力と名の一部を与えましょう』

『あなたは私の下僕しもべを怖がらなかった』

『いい子ですね、アルミス』

…そういう事か。

合点がいったというか、納得した。

「…何か分かったの？」

「いや、アルミスはいい子だなと」

「からかっている？」

「いや」

「嘘ついたらやだよ」

優れた弓術、アルミスという名前。それ等がその人物によって授かった物だとすれば――

「貰った物を、無駄にしなかったからな」

「？」

――星晶獣アルテミス。

金色の弓を持った、“狩猟の女神”と称される星晶獣だ。

弓は一撃必中、凶鑑にはあらゆる生物を射殺するという記載がある。アルミスは冷たい山の空気で衰弱し、筋力も魔力も弱った状態で放置されていた。

そこでアルテミスが力を与え、名を付けて街に返したのだろう。最低限の身体と、狩りの技術を——生きる為に。

「アテナ様と一緒に私を助けてくれた女神様」

「そうか…」

アルミスは自身の膝に顔を埋めて呟いた。

「……………エニユオさまも、そうだった」

「…そうだな」

アルミスと一番関わりがあったのはエニユオだ。

彼女が自信を持つきっかけとなった弓術。アテナさんが見つけていれば咎めただろうが、エニユオは黙認した。

わざと射撃を失敗する事で彼女を元気づけた事もあった。

…あれは気まぐれだったのか。それともエニユオの素の性格がそうさせたのか。今となつては聞くことも無意味だろう。

彼女は間違い無くアルミスを人質にカリオストロを攻撃したのだ。情を刺激したかっただけかもしれない。

「アルミス」

「なに？」

「落ち着いたら、他の島に住む事になるかもしれない。それでもいいか？」

「……………それ以外、どうするの？」

返ってきた言葉は予想以上に尖っていた。

「…あ、ごめんなさいっ…そんなつもりじゃ」

「いや、言ってる事は正しい」

「……………他の子に聞いたの？」

「まだ」

「アマルさんにもっ？」

「まだだ」

アマルさんは生存者で最年長にして唯一の成人。

彼はアテナさんとも顔を合わせていない。どう接すればいいのかわからないのだ。

大人だからこそ混じった感情を持つもの。エニユオを連れてきたアテナさんを憎む心が無い訳ではない。

恐らく最も時間が必要な人間だろう。

「…なんで、私に？」

…なんでだろう。確定事項な筈なのに。自分の決定が正しいのか確かめたかったのだろうか。

アルミスに聞いて？なんか情けない。

それを察したのか、アルミスはくすりと笑う。

「ふふ、へたれだね」

「アテナさんにチクるぞ」

「ひゃー」

わざとらしく声を上げるアルミスに少し安堵しながら、俺は立ち上がった。

同じく彼女も立ち上がる。

「私達は、大丈夫だよ」

「…本当か？」

「でも、一つだけ…嫌だ」

「嫌…？」

アルミスは俺の目を見た。

「アテナ様、私達の目を見てくれないよ」

「……………」

「なんで、助けてくれたのに、来てくれなきや皆死んでたのに…：謝るんだろう」

「それは…」

「私達は分からなくて…アテナ様にしがみついて泣いちゃった」

それはきつと、理解されない罪悪感なのだろう。

「アテナ様が私達のせいで悲しんじゃうなら一緒にいない方がいいよ……………」

否定はできなかった。

寧ろアテナさんが子供達から離れる可能性が高いからだ。子供達を自立するまで育てれば、きつと彼女は独りで何処かに行くだろう。

俺は言葉を返せなかった。

なんでだ、エニユオ。

何故アテナさんと共に旅をしていた。

何故破壊衝動がありながら街の人を救った。

何故我慢できた。

何故人を愛せた。

なんで……悲しんで死んだ。

「…ひどい話だ」

「リユミエールの空戦と変わらないじゃないか。

柵しがらみが生きる人々を囲み、死ぬまで呪い続ける。

そして、呪われたアテナさんが死ぬ事は無い。

これは彼女にとっての——長閑のどかな地獄なのだ。

EX2. アテナの一步

「……………ばじゅ…?」

薄暗い青が見える早朝。

俺は腹部に感じる重みで目を開けた。

「…あ。アルミスか」

寝ぼけた頭が蘇る。

目が慣れ、ぼやけた視界が開けてくると映ったのはアルミス。俺の腹を枕にして眠っている。

何を勘違いしていたんだか、ここ最近はこの子と一緒に寝ていたというのに。

「すごい寝相」

身体が完全に横になっている。そこまで広いベッドでは無いので、俺を端っこに寄せて枕にしたのだろう。

アルミスが俺の部屋にいる理由は、単純に一人でいるのが不安だからだ。

一夜にして全てを失った彼女は、エニユオを穿った冷たい感触と共に悪夢に苛まれた。心の安静を保つ為に人肌を求めた結果が、『先生』として過ごしていた俺と寝ることだった。

俺は幽霊だから身体が冷たいのだが、いいのだろうか？

いや、アテナさんのの方が良いだろうと最初に説得したのだが、彼女に向ける感情は崇拜の様なもので、畏れ多いのだとか。

ちなみにそれを聞いた本人はホツとした顔をしていた。

「時間かな」

俺はそつとベッドから降りて、洗面所へ向かった。

「…あの人また寝てないのか」

この言葉も最近呟いてばかりな気がする。

「おはようございます」

「……む、おはようございます。コーリス殿」

「また移住先のガイドですか…赴かないと分かったものではないですよ」

「分かってはいるのですが……やはり目星は」

「自分の島を悪く書く人間はいません……ここまで来たら好みですよ」

エニユオとの戦いから数日後の事だ。

防衛街ともう一つの街の弔いが終わり、子供達を匿いながらこれらの事を考え始めた時だった。

アテナさんが居間の椅子に一日中座ってガイドブックを読み漁っていたのだ。

中身は移住する島について。観光ガイドよりは真面目に情報が載っている物だ。

子供達の預け先を選んでいるのだが、中々結論が出ないらしい。徹夜で自己判断と戦っている。

星晶獣とはいえ疲労はある筈だ。

その証拠に姿勢が段々悪くなっているし、言葉に対する反応も鈍い。

「…」

「な、何ですか…此方を見つめないで下さい」

「気分転換に島でも回りましょうか」

「へ?」

「ガイドで選んでも心に痾が残りますからね。実際に見て見たらどうですか?」

「しかし…私が住むわけでは無いのです。子供達に判断させた方が良いいのでは…?」

「尚更読む必要無いじゃないですか」

「ぐ…っ」

「責任を感じるのとは分かりますけど、”取り敢えず”で動くとは疲れてしまいます。子供達のために休むと考えてみてください」

「…分かりました。同行感謝します」

ただ休めと言ってもアテナさんは絶対に聞かない。

防衛街にいた時も『私は星晶獣、休息は不要です』という言葉を機械的に繰り返された経験があった。

だから理由を付けて休ませる。島を見るといいう動機があれば身体も動いているし問題ない筈だ。

理想を言えばアルミス達を連れていきたいが、何が起きるか分からない。帰ってきたゾーイが引率するにしても怖い。

巡る先を考えていると、アテナさんが立て掛けていた槍を掴んで此方を見ていた。

「ゴリス殿の準備が出来るまで待ちます。好きな時間に声を掛けて下さい」

まさかそのまま待つ気か？

この人未だに自分を機械か何かだと思ってるんだだろうか？

「あの、そんなに気を遣わなくても」

「私は艇に住まわせてもらっている身です」

何だかこつちが申し訳なくなってくるな。

あと…。

「その格好で行くつもりですか」

「…？」

「真紅の鎧と兜…槍と盾。バレてしまいます」

「むっ」

只でさえ依頼文に『アテナ』と書く人だ。大国で姿を晒せば正体がバレて大騒ぎになる。一応覇空戦争で暴れたという記録は残っているからな。

あと、完全武装の人間が島に訪れると良くない反応を貰う。騎空士のように武装した旅人という格好ならばいいのだが、鎧は目立つ。

「ですが私はこれ以外に持っていません…」

ゾーイも言っていたが、星晶獣は全ての要素が作られたものらし

い。身体も鎧も力を込めれば再構成出来る事から、それ等を洗う必要も無い。

アテナさんはずっと騎士の様な格好で過ごして来たのだ。

「うーん…あ、ゾーイに借りましょう」

「え、それは流石に申し訳が…」

出会いの影響か、アテナさんはゾーイに対して一歩引いた態度を取っている。

気にする事は無い。生きている時間自体は彼女の方が格段に長い
のだから。

「ゾーイー」

ゾーイの部屋の前で名を呼ぶ。

艇は既に近くの島に停まり続けている。用がなければここにいる
筈だ。

「なんだい?」

うん、いつも通り返事が早い。爆速のドア開け。

「アテナさんと出かけるんだけど、服を貸してくれないか?」

「用があるなら私が行くが…」

「いや、島を見て回るだけだ。服あるか?」

「とっておきを用意しよう」

部屋の奥からタンスを漁る音が聞こえる。

何だかんだ色々旅をしてるからか、ゾーイは俗に染まる度にラフな
格好をしていた気がする。

最終的には……

「これがいいだろう」

「あー」

出た、ドラゴンシャツ。

ただのラフな白シャツかと思いきや背中に青色で二頭の竜が渋く
描かれたデザイン。

何処で買ったのか未だに謎ではあるが、カリオストロの『だっさ』発
言のせいで暫く見る機会が無かった。

「他のは?」

「何が不満か」

「：お前も薄々気づいてるはずだ。自分でそれを着ないって事は――」

「言葉には気をつけるべきだ。君のおかげで私は感情豊かに怒る事が出来る」

「あの、何か揉めている様ですが：私は構いません」

「…?」

「寧ろ双竜が神聖さを表現していて良いと思います」

「!?」

アテナさんも天然タイプか：!?

いや：真面目すぎるだけか？遠慮してこんなシャツを…。

「いいセンスだ。君はこれから大成するだろうな」

「もう400年生きていますか：」

ま、ゾーイが嬉しそうならいいか。

特別ツツコむ事でもないし。カリオストロがどうかしてくれようだろう。

「ふーむ：服に着られてない。コーリスが止めなかったと聞いた時は正気を疑ったが、案外似合ってるもんだな」

「やはり私のセンスは間違っていないようだな」

「そうだな。間違ってるのはお前がこの服を着ようとした事かもな」

「ははは――は？」

「おっと口チャック」

カリオストロも呼んでファッション査定。

意外にもアテナさんはドラゴンシャツを着こなしていた。ゾーイより身長が高いからか、スラリとしたシルエットに見える。

「脚が長い。細めのズボンだからか役所の出来る女って感じだな」

「一般的ではあるのでしょうか…?」

「視線は集まるかもな。ただドラゴンが無ければもつと決まってたと

思うと口惜しい」

「ドラゴンの何が駄目なのか」

準備は済んだようだし、早速行くか。

一応刀と：うーん、予備の剣はいらぬか。ノスタルジアは錆びた鉄骨の様にボロボロになってしまったし、杖は完全に棒。

魔力を通せばまだ棒の方が有用としても、武器を持ち過ぎたら不審だ。ここは刀で通す。

逆にアテナさんは手から武器の出し入れが可能だから、そういう心配は全く無い。

「コーリス殿、今日はよろしくお願い致します」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。じゃあまた、二人とも」

「気をつけるんだぞ」

「カリオストロね、化粧水買ってきてほしいな」

「化粧水了解。あとさ、カリオストロ」

「なあーに？」

「なんか魔力が空でも霧は出せたぞ」

「え——」

よし、行こう。

「ちよちよちよ待て待て待てコーリス待てオイ待てや！」

「え、なに」

「分かってて行こうとしてるだろお前いいから座れや待たないと解剖バラし殺すぞ!!!」

「賑やかでいいな。これこそ祈望の騎空団」

「言ってる場合ですか！逃げますよ！」

アテナさんに抱えられて俺は外へ連れ出された。

帰ったら研究されそうだな…。

「ここは経済がかなり潤ってる島です。リゾート地ではありますがその分トラブルも少なくない可能性がありますね」

「今思えばあまり来た事はありませんでしたね」

「物価もちよつと高いです。旅行には良いですが…」
「住むには少し難しいです」

という訳でアテナさんと共に平和な島を巡る旅だ。

最初はアウギユステ。海によつて豊かな経済を敷いている巨大な島。

自警団も大規模で、住みやすきは上位ではあるが…何分海は危険が多いと聞く。

もしもを考えて島を選ぶ場合には下位に位置する優先度だ。駄目元ではあつたが、これは却下と。

「リヴァイアサンが契約した島ですか。ポセイドンはいるのですか？」

「聞いた事無いですね…知識としては知っていますが」
「知り合いだろうか。」

——次。

「フレイメル島バルツ公国。金属等の加工が盛んで、暑苦しく見えませんが中心部は普通の国です」

「ふむ…」

「先進国ではありませんが人を選ぶ島でもありますね。山ばかりで魔物も多めです。兵力も他の島と比べて高めです」

「…子供達には合いませんね」

フレイメル島はスルトの故郷だ。

見かけによらずそこまで暑く無いが、如何せん過ごしやすいかと言われれば首を傾げる。

島は赤いし、工場ばかりで生活感が微妙だからだろうか。

——次。

「ポート・ブリーズ群島はおすすめですよ。自然も色濃く残っていますし、商業も盛んです。個人的なコネもありますよ」

「私達がいた島にも似ていますね。候補にしましょうか」

「エインガナ島は中枢です。レストランや酒屋も多く、騎空士達が集

まっているので平和さで言えばかなりの物かと」

「コーリス殿も以前ここに？」

「結構いましたよ。ここで受けた依頼のおかげでカリオストロと会えましたし…島は別ですけど」

「子供達が大人になった時のことも考えると…ここが妥当ですか」

ポート・ブリーズは欠点がない島だ。

群島のおかげで役割の分担が出来ており、何でも揃っている。

騎空士の拠点が多い事も平和である所以の一つだ。

だが、他の島も見ておこう。

——次。

「ルーマシーも群島ですが、ほぼ森です」

「住民の姿が見えませんが…」

「木の上の住居でゆっくりと過ごしているんです。この島は自然と共に生き、朽ちる事を旨として日々を迎えています」

「……」

「俺は好きですよ。長閑で」

「…私です」

だが、子供達が馴染むには難儀する島だ。

原始的な生活は集団であれば楽ではあるが、同時に集団だからこそ辛い事もある。

民族等のしがらみがある内は避けておくべきだろう。

——次。

「ガロンゾですか。私も来たことはありません」

「どうです？…ここ」

「事前に目星は付けていました。破棄することが出来ない契約によって信頼関係を結び、発展させた島。ポート・ブリーズと並んで安全な場所になるでしょう」

「…二択ですね」

「子供達の意見も聞く必要があります」

ガロンゾは依然として安定している。

「ここまで大きな島を見てきたが、小さな島々——俗に言う田舎はどうだろうか。」

「安全かは分かりませんが…小さな農業島等はどうぞでしょうか?」

「自警団や騎士達がいらないのなら魔物による被害が考えられます」

「魔物は何らかの理由があつて凶暴に変化するもの。島が平和なら突然竜が出現する、なんて事はないですよ」

「…しかし、コーリス殿は沢山の島を見せてくれました。これ以上望むというのは……」

「俺が勝手にやつてるんです。行きませんか?」

「……お願いします」

よし、次は地味なところを巡ろう。

便は少ないが、手頃な騎空艇に乗り込む事が出来た。

風を浴びながら座る場所を探していると、何やら黒い影の様なものが甲板の端つこで蠢いている。

あれはスライム——いや、人か?

近づいてみると黒い影はローブであることが分かった。

なら、人間か……何か既視感が。

声も聞こえてきた。

「田舎まで来てデートっていい気分だよね大体私達はオマエら健全民なんて忘れたいからこんなどこまで逃げてんのに追いかけてくるとか寧ろ私の事好きじゃん…結局意識しちゃうのは健全民なんだから私達不健全民を馬鹿に出来るほど高尚な精神を持っているとは言い難いしここまでくると相思相愛になっちゃうじゃんやめてよジメジメした所が好きなんだから他人のスペースに入り込まないでよこれだから健全民はいつもいつもりつちよを……」

こ、この人は……!

「りつちよさん……!」

「へ?りつちよに何か—ギャあびやあああ———」

!!!!????

アテナさんを認識した瞬間消え入るような奇声で叫んで数歩下がった。

間違いない。以前ガロンゾ行きのカヌーで出会ったりつちよさんだ。

「お久しぶりです」

「ふ、不健全な少年…なんでここにいるのさ」

「用事です」

「や、やめてよりつちよが変な人みたいになってるじゃん」

「何もしてません」

様子がおかしい。

今度は俺の顔から全力で目を背けてる。何もしてないし、何かをされた記憶もないのだが…。

アテナさんの『うわ』という眩きを掻き消す様にりつちよさんは声を荒げた。

俺の腹をポカポカ殴りながら。

「やっぱ裏切ったな!!」

「…?」

「パツキンの美女侍らせてりつちよに復讐か!？」

「えと…」

「悪いけどなあっ！不健全民が健全民の真似事した程度で癖は変わらないんだぞ！少年は一生不健全の咎を背負って生きていくんだからなあ！咎という名の汚れた十字架を!!明日にはキラキラした日々が億劫になってるよ!!!」

初対面の時に裏切りがどうか言っていた気がする。

りつちよさんは被害妄想をしようタイプなのだろうか。士官学校時代にも暗い性格の奴がいたが、そいつには普通に友達がいた。

彼女流に言えばファッション不健全民。俺がそういう人間だと勘違いされているのだろう。

…というか不健全って普通に失礼だな。

「コーリス殿…その、ご友人ですか？」

「知り合いですね」

「そうですか…安心しました」

「何に安心してんだコラ!？」

アテナさんにも矛先が向きそうだ。

少し騒がしくなった所で向こうから男達がやってきた。

「ねえねえ盛り上がりつつあるねえ」

「俺達とも話さない?特にその金髪のねえさん」

「——ツせえー!りつちよが今講釈垂れてんだろうがよおツ!!!」

「ビィィいい!?!?」

りつちよさんに加えてナンパ男とかこの艇やばいな。

しかも魔力だけで男共をビビらせた。テンポいいな。

…なんかアテナさんもフリーズしてる。

「え、い、いま…ほし?」

「アテナさん?」

「星の力を…感じました」

「ははは」

なーんか突っ込まない方がお互い良い気がする。

「りつちよ…りつち——貴女星晶獣リツチですか!？」

「うえ!?!なんで知ってんの怖!」

突っ込まないですよ。

「リツチ…呪いの星晶獣。属性を用いた魔法とは異なる多様な攻撃手段によって、覇空戦争では一時期優位に立ったと星の者は語っていました」

「呪い……」

「ですが、半年も経たずにリツチは行方不明。その戦地は空の民が勝ち取り、呪いへの対抗手段も研究した事で以降の戦いは治療行為が円滑に進んだそうです」

「弱体魔法の源流みたいな物ですか?りつちよさん」

「へ?まあ…マーク付けて遠隔呪殺とか腐らせて粉々にしたりとか五感停止とか色々出来るけど」

エニユオに引けを取らない理不尽能力というか…殺しまくってないかこの人。

危険人物ならば——

「いやいや、腐敗とかは兵器にしか使ってないし、感覚も一時的に阻害するやつだから。遠隔呪殺もマーキングだけに留めてるから。りつちよ恨まれるのやだし」

……本当に星晶獣なんだな。

なんとというか：長年生きているとは思えない若々しい言動だ。時代の最先端を常に歩いている人か？

「てか少年さつき『アテナ』って言ってたよね」

「ああ：はい。星晶獣のアテナさんです」

「……同族にも関わらずハリのある肌と綺麗な髪。どこで差が付いたんだろね」

「恐らくは私の創造主の趣向かと」

「マジレスすんなや」

「どうやらアテナさんとりつちよ——りつちさんは相性が悪いらしい。」

剣呑な雰囲気少し流れ、艇が大きく動いた。

「りつちさんはこの辺境に用があるんですか？」

「野暮用ってやつよ。探しものは案外どうでもいい場所に転がってたりするからね。少年は？」

「安全に住める島を探してるんです」

「安全？なんでさ。りつちよ分かるよ：少年強いんでしょ？『実は強い』みたいな雰囲気相手ビビらすの好きなんですよ：キヒヒ……りつちよも好きいい」

「——形容し難いですね。悍しい」

「健全民の嫌なところ出たね」

こんな所で星晶獣バトルが始まって困る。

無理矢理会話を続けさせてもらおう。

「親を無くした子供達を数人匿っているんですが」

「あれま、そゆことね。りつちよは結構行ったり来たりしてるからそこそこの島は教えられるよ」

「ちなみにこれから行く島は……」

「人が少ない代わりに魔物も少ないけど、人が少なかったら駄目だよ

ね。やめとき〜」

「…もう艇動いちやいましたね。アテナさんごめんなさい」

「構いません。実際に見てみましょう」

優しい笑みで俺のミスを許してくれた。

その光景をリツチさんが睨む。

「そのこのパツキンは少年の間仲間になったの？」

「さつき話した子供達を守っていたのがアテナさんです。実質の保護者ですから一緒に島を回っていて」

「それとパツキンではありません。私にはアテナという名がありません」

「ふーん。健全民のフリを突き通すってわけね」

「コーリス殿は私を救ってくれた方です。彼の勇敢で健全な精神を侮辱する事は許しません」

「…え、な、なんでりっちよ怒られてるの」

…恐らく、”健全”という概念についての致命的な食い違いが起きているのだろう。

アテナさんの認識は常識的だが。

その後、俺とリツチさんは本当にもいい駄弁りをしながらそれぞれ目的地へ旅立った。

…筈だったが。

「それで…人より先に魔物に会っちゃったから退治だけして帰ってきたんだね」

「ゾーイ殿の服を汚したくなかったので…」

「島巡りは楽しかったかい？」

「はい。空の世界には私の知らない事が沢山あるようです。コーリス殿に紹介してもらったアウギユステの料理は大変美味でした」

結局魔物に遭遇し、倒した後で騎空艇に戻ってきた。

ノアさんとアテナさんが茶を飲んでいるのを横目に俺は子供達の相手をしている。

「ここいきたくない！」

「雪国は寒いぞ？温かい場所にしよう」

「じゃあここ！」

「ここは火山の下。滅茶苦茶暑い」

「ここは〜？」

「それは鉱山島」

子供達は思った以上に移住に意欲的だった。

アテナさんが机に残した島ガイドを端から端まで図鑑感覚で読破したらしく、気の向くままに自分達の未来を想像している。

肝心の移住計画だが、ガロンゾは人口が溢れかけられている為ポト・ブリーズにした。

これなら俺達も依頼がてら様子を見に行く事が出来るし、古戦場で得たコネクションもある。悪くはない場所に落ち着いた。

だから今は手続きの為にポト・ブリーズに来ている。

ゾーイが役所に掛け合った所、公営住宅の空きは少ないが、養子として子を迎えたいと考える老人は多いとのことだ。

カリオストロは『いつそ家でも建てるか』と提案したが、その場合は年長のアマルさんを除いてアテナさんが親代わりにならないといけない。

アマルさんが生活費を稼ぎ、アルミスが子供の面倒を見るにしても限界がある。

アテナさんはエニユオのコアを持っている以上子供達の側に居続ける事は無いだろう。きつと一人で旅を続ける。

それらを踏まえると、昔の俺みたいに養子として育ててもらおう方が無難だ。

幸いにも子供達は我儘ではない。

先程の島論争もじゃれ合いの様なものだ。説明すれば分かってくる。

「日程が決まったぞ。一週間後だ」

「早すぎないか？」

「星晶獣だろうが魔物だろうが、その被害を受けて街や村が壊滅する事は珍しくないらしい。特に平和な島は受け入れ先としての需要が高い。対応が一瞬だったぞ」

ゾーイに着いていったカリオストロが戻ってきた。

「どうやら移住する段階の手続きは終わったらしい。後はお世話になる家族への挨拶と…住民登録と、明確な未来へのビジョンだな。神妙な表情でアマルさんが口を開いた。」

「何から何までありがとうございます…」

「いえ。これくらいはやらせて下さい。子どもたちにとって辛くなるのはこれからです」

アマルさんは成人している。

一人だけ公営住宅に住んで生活してもらおう予定だ。

「…アテナ様はやっぱり、一人で行くんですね」

「もし同じ事が起きた場合…アテナさんは今度こそ自死を選ぶでしょう。だからせめて、犠牲が生まれぬ様に一人で生きていくと言っていました…分かってあげて下さい」

「……はい」

一時の休息で朗らかな表情を見せる彼女の無事を祈り、俺は早めに自室に戻った。

「お別れは一週間後？」

「そうだ。アテナさんと一緒にいいだろうが…これからは新しい家族の元で生きていくんだ」

「生きていけるだけ運がいいんだよね、多分」

「…義父母というのも複雑だが、いいものだぞ」

「え？」

「偶に甘えるとな、凄く嬉しそうな顔をするんだ」

「なんでそう言えるの？」

「俺も養子として生きてきたからな」

「知らなかった」

「霧の島に捨てら——いや、一人ぼっちでな。運良く拾ってくれたんだ」

「ふふ、一緒だね」

「喜んじや駄目だぞ」

「でも：先生のお腹で寝れるのもあとちよつとなんだ」

「人肌が恋しいならこれから沢山抱きつけばいい……。受け入れ先のお爺さんとお婆さんは子供に恵まれなかったらしくてな」

「そんなに早く打ち解けられるかな」

「それはアルミスの頑張り次第だ。おい、腹を擦るなくすぐりたい……」

「ふふふ……うりうりっ」

「部屋に戻すぞ」

「やだ」

「やれやれ……」

「：アテナ様は大丈夫そう？」

「分からない。これからの彼女は一人だ」

「一緒に行かないの？」

「断られてしまったてな……最後まで自分の責任を抱え込むつもりだ」

「そうなの……」

「俺はあの人心配で仕方がない……。環境も、人も、星も……全てが彼女を認めてくれなかった。利他を尽くした末路が不幸であるのなら、無理を押し通してでも共に旅をしたいのに……」

「……」

「なんで、断ったんだろう。助け合う方が……いいのに」

「……大丈夫か？」

「ゾーイ殿：はい、問題ありません」

「ここはコーリスの部屋だ。何か用があるのか？」

「いえ：廊下を通りかかって……それで……」

「会話でも聞いてしまったか」

「……はい」

「：君は私以上にこの団に相応しいと思う」

「それは違います」

「違わない。私は自身の役割の為に団という形を利用し、カリオスト口は自身の研究と拠り所を求め、ノアはコーリスを支えてみたいと思っただが故に所属している」

「しかし、君とコーリスだけは純粹に人々を守り、導く事を目的に行動している。君は責任を負わせたくないから彼の誘いを断つたんだろう？？」

「身勝手な判断かもしれませんが……しかし私は」

「身勝手とは真逆だろう。だが、人に頼り、責任を共有する事はそんなに悪い事なのか？」

「……？」

「星と違って空の民は互いに依存しながら成長し、外部からの刺激を糧とし：発展し、超えてきた。そこに武力の差異はなく、他人同士だからこそ在れたのだろう」

「相助の概念は誇るべきことだと理解しています。ただ、責任を押し付ける事とは違う」

「君は……その、自罰的だな」

「今回の件は私の甘さが招いた事です」

「君が一人で負担を強いた所で失った物は帰ってこない。この団に仮にエニユオが復活しても私なら無傷で滅ぼせる」

「……その時にゾーイ殿がいなかったら」

「…意固地だな。だが、覚えておくべきだ。君が一人で生きていく決断をしたならば、君から影響を受けた人間達を突き放すという事になる。特に…子らは」

「…」

「君より若い私が言うのもおかしな話だろうが…責任に強弱は無い。万人にのしかかる原罪の様な物なんだ。いつか君が誰かを心から頼れる事を祈っている」

「君は、もう星ではなく空に生きる者なのだから」

一週間が経った。

ポート・ブリーズの家々に挨拶をし、最後にアルミスを迎えてくれる家の前で俺とアテナさんは頭を下げた。

「ばいばい…アテナ様、先生」

「達者で、アルミス。無事を祈っています」

アテナさんがアルミスの頭を軽く撫で、俺は手を振って別れを告げる。

彼女は最後に俺の頬を軽く『ぷにっ』と触って以降ずっと手を振っていた。

その行動の意味が良くわからなくて、二人で吹き出してしまった。

「では…私もこの辺で」

アテナさんも行ってしまおう様だ。

何かを俺の手に握らせてきた。

これは…ペンダントか？

ルビーの様な宝石が中心に嵌ったものだ。

「これは？」

「私の力を込めた物です。貴方が危機に陥った時、自動的に私の結界が発動します。パラディオン程ではありませんが、大抵の攻撃を一回は防げるでしょう」

「…ありがとうございます」

俺の為に作ってくれたとは。

そして…本当に奇遇だが――

「実は…俺も作りました」

「な」

「カリオストロに術の練り込み方を教わって作ったんです」

「貴方という人は…！…少しは私に恩を返させて下さい！」

「なんかごめんなさい」

俺のはブレスレットだ。

最初は金色の物だったが、力を込めたら灰色になってしまった。一応メタリックだから汚くは無いはずだ。

「このブレスレットに魔力を込めると凄く濃い霧が出ます。その性質は相手に触れた瞬間から記憶を飛ばすというものです」

「記憶を…」

「本当はアテナさんみたいに窮地に反応するものにしたかったんですが…難しく、外部の刺激で霧が溢れ出すものになってしまいました…」

気が付けばアテナさんはもう左腕に嵌めていた。

撫でて感触を味わっているのだろうか？忙しくソレを見つめている。

「相手の虚を突けばその霧の効果は覲面です。数秒間は貴女が優位に立てるでしょう。生かすも殺すも…戦いを避ける事も可能です」

アテナさんは戦いを好まない。

だから、戦闘そのものから離脱出来るように霧の特性を与えた。

魔力を補給するものでも良かったが、こちらの方が明確に戦局を変えられる。

「申し訳ありませんが霧が尽きればただの腕輪です。ここぞという時

に役立てて下さい」

「本当に…ありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます」

俺達は別れの印に握手をした。

エニユオとの戦いの後で握った震えた手ではなく、強い意志の籠もった堅い手だった。

「コーリス殿」

「はい」

「防衛街で私が言った事を覚えていますか？」

彼女は微笑んで語りだした。

その目はちゃんと俺を見ている。

『私が人を頼る強さを得たなら、その時は団に入ってもいいでしょうか』…私はそう言いました」

「…はい」

「またいつか、遠い未来でもいつか…会いましょう。その時はきっと…私がお願いする番です」

その言葉と共に、アテナさんは俺の返事を待たずに行ってしまった。

「…寂しい」

俺は団の仲間だと無意識に思ってしまったのだろうか。

アルミス達やアテナさんが全員いなくなってしまったのが何処か悲しくて、喪失感を覚えた。

「行ったのか」

「…ゾーイ」

今来たのか、それとも見守っていたのか。

ゾーイが俺の隣に立っていた。

「彼女はこれからも人を救い続ける。会える日はそう遠くないさ」

「…俺の気持ちを読まれた」

「当たり前だ。君の事だからな」

「やっぱり、ゾーイがいると安心するな」

「そうかい？それは良かった」

でも…皆が側にいる限り、俺もずっと頑張っていけそうだ。

俺達はきつとこれからも永く旅を続けるのだろう。

誰一人欠ける事なく、悔いの残らない旅路を。

EX3. 付喪犬神

「コーリス。わんわんわんわん」

「どうしたゾーイ」

「生き物の声というのはそれぞれ違いがあるものだ。例えば犬……『わん』と鳴けばそれだけで彼等だと分かるだろうか？」

「そうだな」

「では動物の声を模倣出来る私達のアイデンティティは何処へ向かっていくのだろうか。犬として鳴き続ければ私達は犬になれるのか」

「つまり？」

「声の分野においても人間は凄い進化をしたんだなと」

「へー」

「お前等の会話が低レベルすぎて死にたくなるんだが、オレ様がおかしいのか？」

「ふむ、会話だけで死を望むというのは確かにおかしい」

「ノア、叩き落とせ」

「喧嘩はやめなよ」

どうも、コーリスだ。

現在犬神宮を目標に進行中。操舵室にて駄弁っている。

「犬神宮って…前に聞いたバジユラちゃんと会った所だろ。墓参りか？」

「勿論するが、ヴァジユラに会うつもりだ」

「妹か」

「以前から思っていたんだが、犬神宮にある刀はどれも一級品でな。特に姉妹が持っていた得物はリュミエールの聖剣級だ」

バジユラの刀は飛ぶ斬撃を主体として使う物だが、それを差し引いても素晴らしい強度を持つ。

ダマスカス骸晶を使ったノスタルジアよりは劣るが、聖王から賜ったルクス騎士長の剣に匹敵する。

つまり国宝級の武具を生み出せる人間がいるということ。

一級品であった俺の剣と杖は既に使い物にならないので、駄目元で聞いてみようと思っただのだ。

武器屋と鍛冶屋探し。それが今回の目的だ。

「もし当てがあればノスタルジアに残ったダマスカスの要素を利用して使ってもらおう」

「それは空戦後の報酬として貰った剣ではないのか？」

「…順当に使えば半世紀は持つらしいが、一度壊れたらダマスカスを見つけない限り代わりを作れない。せめて再利用を…」

「リュミエールに戻りづらくなってしまったね。かわいそうに」

「そういう妹ちゃんについてはあまり聞いた事が無かったな。どんなだ？」

「そうだな…」

ゾーイに慰められながら俺はヴァジュラについて思い起こす。

「静かで品があつたな」

「ロイスと似たような雰囲気か？」

ゾーイがロイスを比較に挙げてくるが、そんな事はない。

似てる様で在り方は全く違う。

「いや、あれは品がある振りをしてるだけの蛮族」

「本人が聞いたらどうなるか」

「俺の方が強い」

それで…えーと、ヴァジュラの事だ。

「あまり怒る事も無かったが、我慢はしないタイプだと思う」
「俗に言うマジメちゃんか」

「そう。特筆すべき点は……極限まで負けず嫌いってところだな」
「負けず嫌い？」

「勝つ為なら死んだ振りから足首を掴んで自爆してくるタイプだ。勿論不意打ちもするぞ」

「…………それは卑劣って言うんじやねえか？」

「騎士道は誇りと民の為に戦うが、ヴァジュラは尊厳の為に戦っている。負けたら舐められる——舐められるくらいなら殺す、という思考回路だな」

「ロイスちゃんは知らねえけどよ、こっちの方がよっぽど蛮族じやねえか」

カリオストロは早くも犬神宮にマイナスイメージを持った。

とはいえ分別が出来る人間だ。

俺も魔力が全快では無いからな。勝負を挑まれたりはしないだろう。

「ノアさんはお参りします？」

「魅力的だけど……やめておこうかな。十二神将の役割は空の外敵の監視だ。星晶獣の僕が変な見方をされたら困るからね」

「なら護衛が必要だ。私はノアの側にしよう」

「ゾーイとノアさんが待機。カリオストロは？」

「美少女はね？時に敵を作っちゃうの！だから——」

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい」

「お土産は饅頭がいいな」

「了解」

「——殺す」

いざい、犬神宮！

犬神宮までの道のりは短い。

年明けの行列が無ければ尚更だ。

この島は神社以外特筆すべき点はない。十二神将が取り仕切る神社の為に用意された島だからだ。

といっても、変わった食べ物や菓子が多く食べられる為、案外楽しい。

売れ残った犬グッズも押し売りされてるし、雪が溶けた景色も趣があつていいものだ。

「…誰かいらないのか？」

小さな階段を登って犬神宮本殿。

いつもなら巫女達が掃除をしていたり、巫覡達が修行をしているのだが、いつぞやの時と同じく姿が見えない。

そして——気配が背後に。

「——随分と気配が小さくなりましたね。コーリス様」

「少し前に魔力を使い果たしてしまつてな」

振り向くとヴァジュラが笑みを浮かべていた。

俺が犬神宮にいた時よりも格段に素早くなっている。

「黒剣はどうしたのですか？その安物では不相応です」

「魔力伝々も戦いだが、そこで壊れてしまつた」

ノスタルジアの代わりに普通の剣を持ち歩いているが、彼女にとつては不相応らしい。

「という事は姉さんの刀を使いましたね？」

「見るか？」

「失礼します」

頷くとヴァジユラは俺の腰から刀を抜き、銀色に煌めく刀身を観察した。

「刃こぼれなし、鞘も削れていません。短刃も健在。お見事」

「飛び道具として使ったからな」

「…ですが」

「うん？」

「私の髪飾りがありませんね」

「——あ」

犬神宮を去る時に受け取ったヴァジユラの髪飾り。

刀の鞘に付けられていたが、戦いの余波で外れてしまっただけから部屋に保管している。

紛失はしていないが、ヴァジユラはじつとりとした視線を向けてくる。

「左様ですか左様ですか。武器に飾りは邪魔ですかあ」

「その…戦いで吹き飛んじやって、回収したんだけど紐が」

「括り付ける暇も無いと…『祈望の騎空団』は随分と多忙なご様子」

「あまりいじめないでくれ」

「…失礼、度が過ぎましたね。姉さんの所へ行きましょうか」

俺達は本殿の裏にある霊園へ向かった。

そこにはかつての十二神将や親族達が眠る墓が並んでいる。

バジユラは母親と同じ場所に埋葬された。

俺達の文化とは異なり、犬神宮の人間は親族単位で墓を作るらしい。

その墓が並んでいるという事は、十二神将は一つの家系では無いのだろう。実力次第で他が選ばれる事もある様だ。

そして、目の前の巨大な墓には毒抜きされた一輪の水仙が供えられていた。

それを見てヴァジュラは破顔する。

「この島には花屋が無いので買いに行かなければならないんです。姉さんは色が良ければ雑草でも褒めますが、母さん達に申し訳が立ちませんから」

水の残量を確認し、俺達は軽く周辺を掃除した。

掃除が終わればバジュラ達の墓に水をかけ、線香と呼ばれる物に火を付けた。

そして数秒間手を合わせる。

その後は手で火を消し、古い供え物を回収して終わりだ。

「同じ幽霊として姉さんも会いに来ればいいのに」

「はは。いいジョークだな」

駄弁りながら本殿前の広場に戻れば、ヴァジュラは俺の方を向いて刀に手を添えた。

すぐこれだ。滞在してた時なんて毎朝食後に挑んで来たくらいだ。予想はしてた。

「久しぶりに一戦。どうですか?」

「ヴァジュラとやるのは疲れる」

「軽い慣らし運動の様なものです。攻撃に魔力を用いるのは禁止で」
「それならいいか」

俺の言葉を聞いたヴァジュラは怪しげな笑みと共に――

「――縮地」

「ッ!」

——俺の背後に回った。

縮地とは、一瞬にして甚大な魔力を足に纏わせることで高速移動を可能にする犬神宮独自の技だ。

弾ける様な音と共に瞬間移動を錯覚させる程の速さで敵の懐や背後に回り込む。

なる程。攻撃魔法でもなんでもない移動手段だ。

さっきの条件には抵触しないだろう。

だが…。

「品が無い。姉にそう言われたらろう——！」

「勝負に品格不要！これはリベンジです！」

「ッ——分からず屋！」

慣らし運動とは何だったのだろうか。

彼女は受け手に回った俺に向けて刀を振りかぶる。

「断骨!!」
だんこつ

「はあ!？」

断骨。刀と腕に魔力を纏わせ、振りかぶりの速度と力を増強させて

一刀両断する技。

縮地と同じく犬神宮に伝わる技だ。

だが、問題なのはこれをまともに喰らえば普通に死ぬという事だ。

正気を失ったバジュラですら使って来なかった対魔物用の超攻撃技。

そもそも攻撃に魔力を使わないと言ってたのに…。

俺は剣を折られては困るので、身体を全力で横にずらして回避する。

「高速で背後を取って一撃必殺…流石に怒られてもいい戦い方だぞ。ましてや自分で決めた条件を破ってまで…」

「気づいているでしょう?」

「…確かに。断骨の際、本来刀と腕に流す魔力が腕のみに留まっていた。手加減という事か?なわけ無いだろう。十分死ぬる」

「手加減ではありませんが、刀に流さず腕に流したのならそれは身体強化。攻撃そのものに魔力を使ったとは言い難い」

「は?」

「つまり、私は普通の素振りをやったに過ぎません」

「鬼畜が………」

ルール違反をしていないと言い張る気か。

ロイスはルールを守る代わりに日常的に血気盛んな性格だが、ヴァジュラは戦闘になると卑劣上等の勝利マシーンに変わるからな…。

カリオストロの言葉は間違っではいなかったか。

ならば……!

「生き汚いぞ」

「む……!」

「こんな安物の剣を持った俺に勝っても実力の証明にならないだろう。ましてや壊れたノスタルジアを重しのように持っているのだから……これでは一般人を襲っているのと一緒にだぞ」

「……」

「バジュラも言っていただろう。人間性で負けるな、と」

「——」

説得。尊厳を重視するならそのまま刺激してしまえばいい。

この様な戦いで勝っては寧ろ品格を落とすだけだと知らしめればいいのだ。

俺の言葉が響いたのか、ヴァジュラは下を向いた。

俺は状況を仕切り直す為、一旦横を向いて会話を切り出した。

「こんな戦いをしに来たんじゃない。俺には用事が——?」

あれ、さっきの位置にヴァジュラがいない。

「おま——」

「好機！」

頭上から声が聞こえたと思ひ顔を上げると、日光に反射した刃が俺の目を晦くらました。

「兜割り——！」

兜割り。シンプルに頭を割る技だ。

仕組みとしては断骨と相違ないだろう。

はは、コイツ……目を逸らした隙に空中へ飛び、刀を振り下ろしていたのか。

「ふ、ぎげんなあっ!!」

真横へダイブ。

着地後の隙も防御もかなぐり捨てた命がけの回避。

「逃げますかコーリス様！」

「くそ……が！」

「尊厳の話ではありません！ただ勝ち逃げした貴方が案外早くに訪れたものですから、修行の成果として打ち負かしたく！」

「嬉しそうな顔を……」

俺に勝てる様な修行の結果が速度と火力で潰す事か。

確かに盾の1枚くらいは簡単に斬れるだろう。

しかし頭は使っていない。

ヴァジュラは俺が受け手に回る事しか考えていないのだろう。

「縮地！断骨！」

「くっ!?!」

「縮地！」

「舐めるな！」

背後に回られる事は分かっている。

ならば姿が消えたと同時に剣を振ればいい。

「どうだ——！」

「甘い！兜割り!!」

「またか……！」

くそ、今度は上に逃げて兜割り派生！

コイツ味を占めているな…。

困るのもう終わらせる。

「縮地——か、断こ」

「もういい」

「ガッ——!?!」

あまり魔力は使いたくなかったが仕方ない。

空に盾の壁を作る事でジャンプを封じた。お陰でヴァジュラは一瞬動揺してから断骨へ切り替える。

なら俺の蹴りのほうが早い。

渾身の回し蹴りが腹部に当たり、ヴァジュラは森の木々に吹っ飛び激突した。

「やて…」

どの様に反撃してくるか警戒しつつ、かつてバジュラを無力化した森へ入る。

予想では木に隠れながら不意打ちだ。

「…？」

しかし、いくらゆっくり歩いても攻撃が来ない。

我慢比べなら困った。用事は短く済ませたいのだが。

「……ヴァジュラ？」

「……う」

予想外。目の前には項垂れるヴァジュラ。

よくその顔を観察してみると…。

「う、うう……！」

「ええ…」

な、泣いてる…。

「お、愚かすぎて……家に帰りたいです……う！」

「尊厳が…壊れた」

確かに修行と不意打ちまでして、一回の反撃で吹き飛ばされてはプライドも無くなるか。

だが、初めて会った時の方が強かった気がする。

あの時は俺の剣を軽々といなし、更にはソレを踏んで懐に潜り込む技術さえ見えた。

先程ではそのキレが見えなかった。端的に言えばバジュラの様な戦い方になっていた。

高火力高速度の斬撃を浴びせ続けるあいつの戦い方だ。

変な影響を受けているな？

「持久戦にすればよかったのに。断骨の魔力消費は激しいだろう」

「だってえ…理不尽を押し付けてみたかったんですう…！」

「何故そこまで意地汚く…」

「か、髪飾りも付けてくれませんし……少し困らせてみたくなって……！」

「子供か」

…いや、そもそも15歳の子供だった。

ロイスも言っていたが、俺の戦い方は本気でムカつくらしい。盾はどんな攻撃も防ぎ、重い剣を凌げば霧で意識を乱される。

ヴァジュラもあの時、そんな苛つきを溜めながら俺を見送ったのだろうか。

彼女が泣き止むまで俺は頭を抱えていた。

「鍛冶師、ですか？」

本殿に戻った俺は縁側に並んで座り、ここに来た目的についてヴァジュラに説明していた。

「ああ。ダマスカスって知ってるか？」

「はい。神話の鉱石と呼ばれるヒヒイロカネには劣りますが、武器に組み込めば恐ろしい強度を得ると」

「俺のノスタルジアはダマスカスの小片を使った剣だったんだが、先の戦いで壊されてしまった」

「その剣を壊す……どれだけの攻撃力を」

「破壊の星晶獣だ。話を戻すぞ。この剣を再利用して新たな武器に出来る鍛冶屋は無いか？」

「…確かに私と姉さんの刀は一級品です。ですが十二神将の武具は私達の持つ神力も織り込むもの。祈りに使用する祭器としての側面もあります」

それはつまり、一般的な武器とは異なる特別な作成方法を用いているという事か。

腕の良さは勿論あるだろうが、俺が頼み込んでも無駄な立場なのかもしれない。

「十二神将の武器を作る特殊な鍛冶師ですので、空の中心部に住んでおり、直ぐに会える位置ではありません。私達は作成の初期段階で立ち会い、そこで神力を注ぎます。完成品はそれぞれの神宮に送られますので手間はありませんが…兎も角、貴方個人の依頼という形は難しいですね」

「そうか…」

「姉さんの刀を黒剣のダマスカスにて補強するのなら可能でしょうが、コーリス様には剣の方が合っています。なので黒剣を作った人間を頼る方が良いのでは？」

「…騎士として聖王から賜った剣でもある。ボロボロになった状態をリユミエールに晒すのは…その、なんとというか」

「コーリス様は奥手ですね」

ヴァジュラに溜息を吐かれた。

情けないのは事実……………。

「巫覡達の武器は基本的に本人が選んだ物ですからね…十二神将とて先代から受け継ぐか、先程の鍛冶師から受け取るかの2択です。申し訳ありませんが…」

「いや、いいんだ。自分で探るか腹を括ってリユミエールに行くよ」

「素直に行くべきだと思います」

「俺へタレだから…」

「堂々たる気迫は必要なものです。舐められては要らぬ戦いを誘いますよ」

「気を付ける」

「コーリス様は押しに弱いんですから」

「そうだそうだ！全く…」

「そうか？」

「ええ」

「きつちりしなきゃ、だぞ」

「分かってるがそこまで言わなくて、も……………」

「……………」

。

「……………え?」

今、何か会話に違和感が。

しれっとヴァジュラの口調が緩ん……………いや。

…いやいや、イヤイヤイヤイヤ!?

「え?」

「あ、あれ…」

「なんか、変?」

「流れがおかし…いや、会話内容に支障は」

「ヴァジュラ、小声で何か言ったか?」

「私じゃないです」

「小さな声に聞こえたよな」

「はい…ですが他の人間は中で訓練を」

「……………」

どういう事だ。

会話が成り立っているが、明らかにおかしい。空耳にしてもはつきり混じってたぞ。

というか…静かすぎる。

この島には俺たち二人しかいないのでは無いかと疑わせる程に。

「変だ、やっぱり変だ」

「やめてくださいよ…怖くなってきました」

「だって物音とかも聞こえないし……………寂れてる街でも足音くらいするぞ」

「確かに…修行の声も聞こえなくなりましたね…」

俺とヴァジュラは耳を澄ませて現状の異質さに気が付いた。まず、人の気配が無い。そして、音も聞こえない。

神社内の人間が修行中だとしても、木剣や足の音は響いて然るべき。

先程の変な会話を鑑みても不気味だ。

「嫌な静けさだ…」

「そうですね…」

「——そう？ 私はこの方が良い」

!!!

「誰だ！」

今度は聞き逃さない。

森の方から湿った様な声が聞こえた。

…だが、先程とは違う声だ。

まさか、ヘカテーの様の人に人を脅かす存在が住み着いていたのか？

とても人間の技とは思えない気配の消し方。

「姿を見せねば斬りますよ。ここが犬神宮と知っての嘲りならば、相應の代価を支払ってもらいます」

「見せてるわよ。後ろ」

「っ…！」

森では無い…？

言葉の通り、声が聞こえた背後を振り返ると——そこには鎧が歩いていった。

顔を覆い隠す兜と紫の鎧に白色のマント。

右手に持っているのは鎧と同じ色の槍だ。

だが、最も目立つ点は体軀。
それは――。

「ハーヴェイン……」

戦闘に劣る種族。

スルトの様に特殊な能力が無ければ、物理戦闘において圧倒的に不利な小人。

そんな彼等が杖以外の武器を取る事は非常に珍しく、目の前の人間は更に鎧を着て槍を持っている。

極めつけは性別か。

先程の声は兜でくぐもっていたが、憂いを帯びた女性の声を感じた。

そんな例外の騎士は、俺達へ槍の矛先を向ける。

「十二神将と争うつもりは無い。私はコーリス・オーロリアに用があるだけ」

「人畜無害を装った所で意味はありませんよ。ここら一带に人の気配が無い理由……それは貴女ですね」

「殺しはしない。眠ってもらっただけ」

「犬神宮の人間だけでなく島全体にまで及んでいる影響を見過ごせはしません。その言葉を信じるとでも？」

「……………ほんとなのよ？」

心外、と言った風に騎士は項垂れた。

「さつき会話に割り込んで驚かせてきたのもお前か」

「…それは知らないけど？」

「え…………」

じゃあさつきのは何なんだ……？

いや、話を戻そう。

「…何故俺の名前を知っている」

「言っても信じてくれないなら、言わない」

…俺のプライバシーはどうなってる。

いや、祈望の騎空団の名前が売れてきたのか…？

それなら嬉しいが…そんな雰囲気には見えない。

というか微妙に会話がズレてる。

「だから、付いてきてくれる？」

「断る。知らない人間には着いて行かないだろう？」

「そう…？未知を進むのが騎空士なのでしよう？」

「それが未知ではなく驚異だとしたら？」

俺とヴァジュラは武器を抜いた。

この騎士の口調から、恐らく実力行使に出るつもりだ。

安物の剣で無力化出来るのならいいが…ヴァジュラがいるなら最悪の結末にはならない筈だ。

「驚異、ね…：なら尚更経験しておいた方がいい」

騎士が槍を構えた。

「任務は滞るけど、一応腕試しもしておけと言われたの。良い機会だからやっておく」

命令を受ける立場か…。

何処かの国家か？騎士としての体勢があるのなら名乗りの段階で分かるだろう。

「祈望の騎空団団長、コーリス」

「十二神将、ヴァジュラ：参ります」

「名乗り：？：そうね、私もやる」

何処の人間だ：？

見た事の無い鎧だが：。

「七曜が一、紫の騎士クラレ。行く」

「な……」

「七曜、ですか」

七曜の騎士……！

全空で最強の力を持つとされる7人の騎士。

それぞれが空域を統べているらしいが、ファータ・グランデは黒騎士の筈だ。

そして、黒騎士は現在空席。

支配の担い手がいないからこそこの空域は様々な国家が存在し、自由によって生きている。

つまり彼女が本当に紫の騎士ならば、これは侵略行為の可能性もある。

「不味いな」

立場面でも戦闘力面でも強敵。

俺は絶好調には遠く、ヴァジュラには相棒のナガルシャがない。

その焦りを読んでか、騎士は魔力を解放した。

周囲に紫色の粒が出現する。

「少しだけ苦しむけど、後を引かない様にする」

俺達の武器を握る手が、軽く震えた。

— 間章 1、完。

7章 七曜のアウライ・グランデ

67. 紫天の槍

犬神宮本殿前。

活気溢れる神社は静謐に導かれ、音を発するは3人の戦士。

コーリスはノスタルジアを地に起き、刀の前に予備の剣を先に抜く。

同じくヴァジュラも武器を手に取り敵を見つめる。

敵はクラールと名乗ったが、それよりも重要なのは七曜の騎士という肩書。

七曜の騎士は全ての空域を含めた人間達の頂点に位置する存在と言われており、7つの空域を統べる形で君臨している。

騎士達に名を下す存在は”真王”なる者とされているが、騎士が不在なファータ・グランデにはそれ等の情報は流れず、人々の記憶には遠くなるばかりであった。

しかし、空の要素たる国家や十二神将は彼等を認知している。

ヴァジュラが抵抗の姿勢を見せた理由は島の人間達への狼藉を誅する為だが、もう一つ狙いがあった。

それは、十二神将に牙を向いたという状況を作る事で相手に撤退してもらおう事だ。

十二神将は星の民といった外敵を観測する為に存在しており、如何に空の最高権力である七曜の騎士と言えど、重要な役割を持つ彼女達を一方的に排除する事は出来ない。

コーリスが狙いであると分かったならば、七曜の立場を揺さぶり一旦引かせる。

それが叶えば不調のコーリスを逃し、犬神宮を守り通す事も出来るからだ。

「別に彼を殺そうなんて考えてないのに、何故あなたも抵抗するの？」

「言った筈です。島の人間に手を出した時点で外敵と見做すと。それに、強硬手段を取る為に態々音を立てずに皆を眠らせたのでしょうか？」

「話し合いは静かな方が良いと思った」

「話し合いは話を通じる人間とするものですよ、小人さん」

「あなた達は野蠻に見えないけれど」

「…あなたが、という意味ですよ」

「そう…心外ね」

ヴァジュラは心の中で舌打ちをした。

皮肉が通じず、心を揺さぶれない。何処か天然味を含んだ語り口調からは、行動に対する極限までの迷いの無さが感じられた。

即断即決を是とする頑固者の片鱗さえ見える。

紫の騎士の周囲には小さな球状の液体が多数浮遊しており、その色が鎧の色と同じ紫に変化した事から、コーリスとヴァジュラは無意識に近づけずにいる。

——紫は生物にとって捕食者から身を守る為の警告色なのだ。

「あれ…毒ですよね、色的に」

「闇属性かもしれんぞ」

「有り得ますね」

二人が攻めあぐねていると、紫の騎士は暇そうに液体を指で撫で始めた。

そして、突然顔を向けて語り出す。

「安心して」

「…？」

「ちゃんと毒よ」

「やっぱり！」

「ついでに言うなら、酸性よ」

ネタばらしの反応を待つ事なく、彼女は指を差し向けた。

「回避しろー！酸なら話は変わる!!」

「はいー」

球状に凝縮された酸が弾丸の様に襲いかかる。

どんな猛毒でも触れるだけで死に至る物は少なく、大抵は傷口や喉を通った時に作用するものである。

だが、酸は人体の細胞を容易く分解する。それが高速で飛来するとなれば、如何に弱い酸でも危険に値する。

魔物が生み出した酸を武器で受け止め、飛び散ったそれ等が目に触れる事故も存在するからだ。

落ちた酸は極めて薄っすらと地面を溶かし、跡を残した。人体を貫通する程の強さでは無いが、間違い無く苦痛に喘ぐだけの力はある。

有毒な物質は、根源的な恐怖を与えるもの。

それと同時に騎士は飛び立つ。

「――レイン」

瞬間、高速の槍撃が雨の様に降り注ぐ。

(速い…エニユオよりも…!!)

騎士時代にロイスという突きの達人がいた影響か、槍や細剣への対応に秀でているコーリスであっても、空から降り注ぐとなれば回避に支障が生じる。

それでもと軽い霧を出して酸の攻撃範囲を探る。

しかし…。

「やせなご」

(霧の特性がバレている…!?)

霧によって視界が塞がれたからでは無く、彼が霧を出した瞬間に騎士は槍で切払った。

霧の対応は文字通り霧を吹き飛ばすだけなので難しくも無いが、技の性質を知られているとしたら大きな問題となる。

明確な格上相手に少ない魔力量かつ、霧を封じられながら戦う。コーリスにとって苦戦を強いられる闘いである事は確定した。

「大口真神…ハアツ!!」

そこでヴァジュラが槍と酸を回避しつつ斬撃を放つ。

姉程では無いにしろ、十二神将随一の攻撃力は鎧に対しても有効。

「……」

「防ぎましたね…!」

加えて、高速の斬撃は物体に触れた瞬間に炸裂し、対象は小規模の粗刻みによって痛手を負う。

防御自体によって突きが止み、酸の残弾も尽きた事で紫の騎士に隙が生じる。

「虚仮威しね」

そこで彼女は後退しつつ炸裂する斬撃を見てから全て弾き落とし、前後から迫る二人に対して大きく手を翻した。

「!？」

先に気付いたのはコーリス。

地面から何かが噴き出すと察知し、真横に飛ぶ。

立っていた地面を抉り飛ばす様に発生したのは――

「水、だと……!」

槍の形をした水だった。

ヴァジュラもコーリスの動きを追う形で回避しつつ、紫の騎士を睨む。

(彼女は水属性……いや、学んだ魔法ですか?)

魔法は生まれつき備えた属性に依存する訳ではない。後天的に学べば習得できる物なのだ。

しかし、人体に刻み込まれた属性の魔法は魔力さえあれば容易に使用できるが、他の魔法は複雑な術式等を用意し、少なくとも時間を要する事によってようやく発動する。

加えて術式のみによって発動する魔法は威力規模共に拙い。

故に人々は武器や杖に術式を仕込み、簡易的な魔法発動装置として扱うのだ。

カリオストロが魔導書を持つ理由も、彼の錬金術の発動を更に加速させる為である。

一方、才能というべきか……世には複数の属性を持つ人間や、比重の差異はあれど、2つ目の属性に高い適性を持つ者も生まれてくる。

ヴァジュラは、毒魔法が紫の騎士が持つ何らかの属性から派生した技であり、水属性は武器に仕込まれた物ではないかと考察した。

「小細工はそちらも」

「別に、水を撒ければいいもの」

湧き上がった水は周辺を満たすが、高所である犬神宮でそれが溢れる事は無い。規模も水害には程遠い物であり、距離的に民家への被害は薄いと考えられる。

ただ、この水の真髄は。

「今」

紫の騎士は水がコーリス達の足首の高さへ到達した瞬間、槍を振り払い、彼等に水を浴びせた。

口には入らないが、胴体から下が大きく濡れた。

「こ、嫌がらせですか!!」

「ヴァジュラ………」

「なんです……?」

「まずいかも、しれない」

たかが流水を浴びた程度で何を怖がっているのか。

ヴァジュラは疑念と共にコーリスを見るが、数秒後に彼女の顔は同じく青ざめた。

先程の毒は液体の球が紫色に変化してから放たれた物。

もし、毒をそのまま放出する魔法では無く、水を毒液に変化させる魔法だとしたら――

「やば――」

「ヴェノムハザード」

掲げられた槍が光ると同時に、周囲の水――コーリス達が浴びた細かな粒に至るまで、全てが毒と化した。

地面は未だ濡れている。下へ流れた水は効果の範囲外だが、この戦場の足場は毒が支配している。

「ああッ!!!?」

酸に溶かされる己を想像したのか、ヴァジュラは上擦った悲鳴を上

げた。

だが、齎された結果は異なる。

「あ、れ…痛くない」

「殺しはしないって言ったじゃない」

「でも…これ」

「酸は危険だから違う毒にした」

紫の騎士は淡々と話す。

彼女の目的はコーリスに尽きる。出来る事なら十二神将に害は与えたく無いし、戦いの発生すら嫌う。

発言を読み取れば酸の沼にする事も可能という事だが、兎も角、ヴァジユラは彼女に殺意が無い事を漸く認めた。

かといって、コーリスをみすみすと明け渡す事は無いが。

「でも、傷が出来れば毒は入る」

「…！」

紫の騎士が突進の構えを取った。

「——かすり傷でも命取り…初めてでしょ？」

二人は相手が鎧の奥で笑ったのを理解した。

「フツ——！！」

槍の矛先はコーリス。

ハーヴェインの体軀に似合わない勇猛な突撃が彼を襲う。

(身体自体は思ったより遅い)

コーリスは横では無く後方に身を引き、その突きを避けた。

(ならば槍を狙うッ！)

回避と同時に穂先が腹部に到達しない位置を取りつつ、右肘と右膝で槍の持ち手を挟み込む。

そして動きが止まった隙に左腕で槍を更に掴み、万力を込めて背後に振りかぶる。

「ッらあッ!!」

槍を持った騎士ごと背面にぶん回し、地面に叩きつける。

飛び散る毒を防壁で防ぎつつ、剣で槍の持ち手を斬りつける。

無論、槍の持ち手が木製でない限り簡単に折れる事は無いのだが、その衝撃が武器に負担を与える。

槍の安定性を崩しに行ったが、コーリスは直ぐに諦めた。

(この槍は壊せない……ノスタルジア以上の物を感じる)

七曜の騎士の武器は特別であると彼は察する。

だが、動きを止める事は出来た。

「お見事！次は私が！」

ヴァジュラが縮地を用いて背後に回り込み、鎧の隙間を狙って刀を振るう。

紫の騎士はその刀を右足で蹴り付け軌道を逸し、続いてコーリスの腹部へ貫手を放った。

その手は酸を纏っている。

「くっ…」

「正直に離れてくれるのね。しつこいけど、殺す気は無いつて言ってるのよ」

「敵の言葉を簡単に信じられるか!」

「誠実さが馬鹿を見る…悲しいわ」

片手間で対処されたヴァジュラは、苛つきながらも二人の会話で生じる隙を伺っていた。

そして結論、隙は無し。

(この人は恐らく…平常のまま戦っている。手加減しているのでは無く、戦いこそが平常だと言わんばかりに)

常在戦場の人間とは少し異なる。

想定よりお喋り好きで、想定より恐ろしい戦いをする。

彼女が殺す気ならば、一言も言葉を交わす事なく死んでいるだろうと、そう思わせる恐ろしさが無機質な鎧に現れていた。

次の一手も、相手の動きから決めるだろう。

二人は行動への恐怖を植え付けられているのだ。

「でも、ここまで冷静に対処されるとは思わなかった」

「…」

「だから脱ぐわ」

「え?」

「脱ぐわ」

紫の騎士は兜を脱いだ。

「ふう…」

「……」

「攻めて…いいんですかね」

「無駄な気がする…」

紫の騎士の素顔はやはり女性のものだった。
紫と白が混じった髪を細く結んでおり、表情は気怠げなもの。
そこから彼女は更に鎧をのそのそと脱ぎ始めた。

「まだ脱ぐのか…」

「自由ですね…」

「頭だけじゃ空気の通りしか変わらないじゃない」

そこで二人はようやく、彼女が「重さ」について話していたのだと理解した。

粗雑に扱われる鎧に同情の念を抱きつつも、身軽になったであろう紫の騎士に警戒を強める。

「やっぱりこの方が動きやすくていい」

その姿は槍を持った一般人のようで、コーリスと同じく旅人を連想させる軽装だった。

油断を誘うつもりか、はたまた重量重視か。

「じゃあ、行くわよ」

紫の騎士は先程と同じく突撃の体制を取った。

(来る…！)

狙いはまたもやコーリス。

カウンターは2度も通じないだろうと想定し、防壁による完全な防御体制を整える為に剣を持たない左手に魔力を込める。

——それは過ちだった。

「速——ッ!?!」

彼の防壁が展開される前に騎士は既に懐に潜り込んでいた。

長物の理を活かさず、槍を至近距離で振るう戦い方に虚を突かれ、対応が一步遅れる。

「セッ!」

紫の騎士はコーリスの義手に槍を引つ掛けながら正面を通過し、遠心力を活かしてヴァジュラに向けて投げ飛ばす。

「う、おお!?!」

「すみません!?!」容赦を!」

受け止められる余裕も無かったヴァジュラは、飛来するコーリスに對して右側に回避する。

人体で塞がった視界が開けた頃には既に——

「な——」

「あなたからよ」

回避の先には既に敵が佇んでいた。

槍の矛先がヴァジュラの肩に迫る。

(避けられ、ない……!)

苦痛を覚悟し、傷を最小限に抑える為に上体を逸したヴァジュラ。だが、紫の騎士は対象を貫く為の刺突では無く、傷を付けるための刺突を繰り返していた。

それは緩慢で尚鋭く、優れた戦士こそ時間差に混乱するまどろみの槍撃。

「オミノストキシン」

ヴァジュラは、ほんの少し——蚊が刺す程度の傷を肩に受けた。苦痛は無い。チクリとした奇妙な感覚が肩を伝っただけで、何一つ攻撃を食らった実感が湧かなかった。

これは好機か。

ヴァジュラはすかさず刀を振るおうとして——

「——ア??」

——その場に倒れた。

「ヴァジュラ!!」

コーリスが目撃したのは、突然糸が切れた様に倒れ付すヴァジュラの姿。

毒を食らったのは明白。

しかし、その起点が脆弱な刺突である事に驚愕した。

そして同時に。

「あが………!?!」

自身の背中も槍に刺され、毒に侵された事を悟った。

(既に後ろに回られていた、か………)

二人は突然行動不能となり、立っているのは紫の騎士のみとなった。彼女は放られていた鎧を回収しながら語り始めた。

彼女は放られていた鎧を回収しながら語り始める。

「オミノストキシンは私が作れる色んな毒が一つになったもの。動けないのは麻痺毒のせいね」

「何故…私の回避先が」

「運よ。上か右か左か後ろか…4分の1ね。頭を使っても見返りが少ない状況では運に任せる様にしてるの」

「く、この……！」

「動かない方がいい。痺れもそうだけど、そもそも力が入らないでしょう？」

コーリスは魔力を魔法に流し込む技——デイスペルガーを用いて毒魔法を弾き飛ばそうと考えたが、魔法の起点となった部位の毒を無効化した所で、全身に回った毒は対象外である為に無意味となった。背中だけでは何も出来ない。

何より、先程から力が抜けていく感覚があった。

「筋肉への信号を断絶する毒。強すぎると呼吸も出来なくなるけど大丈夫。弱くしたから」

「ぐう……ぬぬぬ……あ!!」

「あと、何回も言う。動かない方がいい。力が入らない身体で無理に暴れれば全身が傷つく。出血毒も入っているから血が出るわよ」

ヴァジュラは騎士を激しく睨んで歯を食いしばった。

屈辱。明確な毒の手加減によって生かされている現状を認めたくは無かったのだ。

「地面に付着した毒が傷口入っても同じ事。コーリス・オーロリアは分かっているようね」

「……は——」

「………？」

無言となったコーリスに騎士が疑問を持つ。

こんな程度で諦めると思わなかったのか、はたまた歴戦の勘か。紫の騎士は彼を観察しようとして振り向いた。

そして――

「がアアアッ!!!」

コーリスの口から光線が放たれる。

「ッ――！」

光線は紫の騎士に激突した後に爆発し、土煙が周囲を満たした。

口腔から光線が放たれるその凄絶な光景に驚いたヴァジュラだったが、発案者は自身であった事を思い出し、笑みに変わる。

「やはり出来たんですね！」

「動けない事には変わり無い…なんとかこの場を脱しなければ」

「生身の不意を突いた筈です。少しは猶予が――」

猶予、なし。

土煙が開け、先程の立ち位置から紫の騎士は一步も動いていなかった。

無傷で光線を弾いたのだ。

「その攻撃は知ってるわ。知ってても驚くけど」

「出鱈目な…」

「ありがとう。そう言われるとここまで強くなった甲斐がある。それと…」

紫の騎士は再びヴァジュラの方を見た。

「犬神宮に危害を加える形になって本当にごめんなさい。タイミング

が重なっただけで、あなた達の営みを邪魔する気は無かったの。全面的に謝罪するわ」

彼女は頭を下げた謝罪した。

だが、目的にそぐわない被害に対して謝罪したのであって、必要ならば攻撃するであろう。

その認識のズレをヴァジュラは噛み締めた。

「毒は少ししておにぎりでも食べていれば収まる筈よ」

「……コーリス様をどうするつもりです」

「話がしたいらしいから連れて行く。危害は加えない」

「巫山戯るなア！私が許さ——な、あ……」

「話は終わり」

再び身体を動かさそうとしたヴァジュラが眠りにつく。

任意で発動する睡眠の毒すら仕込んでいたのだ。

意識を失ったヴァジュラを犬神宮の入り口まで運んだ紫の騎士は、予想通りコーリスの元へ近づいてくる。

「……」

「睨まないで。私だって悪いと思ってる」

「勝手に襲っておいてか？」

「どうせ聞いてくれそうにないから、仕方なかった」

「事前に知らせたら話に応じるくらいの常識はある。祈望の騎空団は勝手に動くわけじゃない」

「…フアータ・グランデがここまで平和と思っていなかったから武力行使前提で来てしまったわ。私のミスね」

「事実を認めれば何でも済むと思ってるのか……？」

身動きも取れない。霧と光線のタネは割れている。

仲間が助けに来てくれる以外に打開策は無く、コーリスは時間を稼

ぐしかなかった。

だが、大声を出そうものなら黙らされる。

せめて先程の光線で戦闘の気配を察知させ、ゾーイ辺りに加勢してもらおうのが理想とだと考えた。

すると紫の騎士は突然小さな機械を耳に当てて声を出し始めた。

「……こちらクラール。うん、紫の騎士。ごめんなさい……次から役職名で言うわね。目標は何とかかなりそうだから待機してた艇を全部こつちに」

「……?」

「あと鎧脱ぎ捨てたから回収する人が欲しい。身分証明に着るけど重いよ……アレ」

(独り言じゃない……これは通信機というやつか?)

先進国ですら数個しか保有していない希少品であると、リュミエール時代に聞いたことがあったコーリス。

空の最大権力である七曜の騎士が持たぬ道理はない。

だが、それよりも重要なのは内容だ。

紫の騎士単独では無く、騎空艇を待機させていたのだろうか。

「犬神宮で大丈夫。皆眠らせたから。それよりも調停者の方が厄介。下手に刺激すると撃ち落とされるから、取引が上手そうな人なるべく喋らせて。鍊金術の開祖は問題無い。今なら無力」

(調停者………ゾーイの事か?)

「私?コーリス・オーロリアを人質として扱えば………駄目ね。単騎じゃ勝てないから他の七曜を二人くらい寄越してもらわないと。うん、損害が大きくなると困るわね」

コーリスの情報が割れているのなら、同じく団員が割れていてもおかしくは無い。

(騎空艇を犬神宮に……まさか俺達の艇に差し向ける気か…!!)

「させるかッ!!」

「……!」

コーリスは再び光線を放つ。

だが、標的は紫の騎士では無く通信機の方だ。

騎空団への攻撃命令と思われる言葉を防ぎ、命令を中止させられればゾーイ達への被害は食い止められる。

「……また」

「はあ…はあ…」

だが、依然として警戒を解いていない彼女は持ち前のスピードで躲し、コーリスに対して睡眠の毒を発動した。

「あ…」

「今は寝てて。アウライ・グランデのベッドは気持ちいいわよ」

薄れゆく意識の中で、コーリスは自身が持ち上げられる感覚を味わい、同時に耳元で囁かれた。

「きつと上手く行くわ。誰も死なない」

「く、そ………」

通り魔に会ったような理不尽な心情を、コーリスは吐かざるを得なかった。

せめて仲間が無事に切り抜けられる事を祈るだけだ。

——ここから、彼の旅で最も必要な出会いがやってくる。
彼がこれから永く生き続けるには、ここで負けておく必要があつた
のだ。

幽世、ノア、ゾーイ、カリオストロ。

全ての出会いは彼の道筋に繋がっている。

次に出会うのは——七曜だった。

68. 調停の閃撃

——フロンティア号、居間。

「遅いな」

カリオストロはそう不満げに呟いた。

ソファアに寝っ転がって退屈そうに振る舞う彼の背後にはゾーイとノアが立っており、言葉は発さずとも思う事は一緒だった。

コーリスの帰りが遅い、と。

「行く先々で変な奴に絡まれるからなあ。迎えに行くか？」

「ふむ…」

その言葉にゾーイが考えを巡らせた。

常に危険を想定するわけではないが、何者かに襲撃され、ノアに被害が及べば艇の移動が困難になり、緊急時に逃げる事が出来なくなるからだ。

対処出来るのはゾーイだけだ。カリオストロは新しい身体に魂を入れたばかりであり、激しい戦闘をこなすにはまだ慣れていない。

「……うん？」

そんな中、ノアはある物を見つけた。

「…カリオストロ、来てくれるかい？」

「なんだ？」

「窓から見えるアレ…」

酷く驚いた様相を見せたノアを珍しいと思いつつ、カリオストロはその窓から外を見る。

「……………なんだ、あれ」

それは、自然現象としては余りにも理外であり、魔法にしては余りにも美し過ぎた。

言葉を失う2人にゾーイが声をかける。

「どうしたんだ？」

「渦が…出来てやがる」

窓の外で見えた物。

それは空中に発生した渦であった。

「…長年生きてきた中で、アウギユステを除けば水が浮く光景すら見た事が無いのだけど、ああいう現象は起きるのかい？」

「いや、浮力を利用して横に滑り落ちる。ありや魔法か？」

「星晶獣の気配は感じないが…」

奇妙な現象を目の当たりにした3人は次に音を感じ取った。

——ガタン。

「…艇に乗ってきやがったな」

カリオストロの言葉によってこの場に緊張が奔る。

渦との因果関係があるかは定かでは無いが、許可も取らずに艇に足を踏み入れ、気配を察知させない者がいるとしたら、それはもう外敵だ。

魔物ならば荒々しい着地音を鳴らす、これは初回の大きな音と、それに続く小さな音から推測して人間であると断定。

ノアは対象の位置を特定した。

「甲板にいるようだ。少しだけ魔力を感じる」

「ノアは操舵室で離島の準備を。カリオストロはウロボロスにノアを守らせてくれ。必要なら君の錬金術で通路の構造を変えろといひ。私は甲板に行く」

「分かった。コーリスの様子見は？」

「デイに向かわせる。二人とも、戦闘準備を」

副団長としてゾーイは素早く命令を出した。

彼女の存在が祈望の騎空団の絶対性を担っている事は事実であり、ワイバーンのデイとリイを含めずとも最強の戦力として扱える。

故に、彼女の敗北は騎空団の崩壊を表すと言つても過言では無いだろう。

「……ふむ。1人か」

ゾーイは甲板に向かう中で敵の数が1人である事を感じた。

属性の息を扱うリイを呼び出し、敵の位置を探る目を増やす。

そして甲板に辿り着いたゾーイは背後に気配を感じ、即座に後ろを向いて剣を抜いた。

「さて、何の用だ」

「おや、貴女ですか。早いですね」

「…奇天烈な」

敵は青い鎧を着ていた。

鎧なぞ珍しくも無いが、問題はその面妖な様相。

兜に馬の顔が乗っていた。いや、馬の顔そのものが兜の一部なのか

——兎も角、チエスのナイトの様なデザインの兜がゾーイの目を驚かせた。

(声からして男…武器は剣。恐れるものではないか)

「祈望の騎空団の皆様は少しお願いしたい事がありまして、少々足を運んだのですが…調停者1人に当たるとは、私の運も尽きましたね」

調停者、という言葉にゾーイの警報が鳴る。

空の危機に際して役割を得る調停者としての在り方を知る存在など、この騎空団以外にあり得ない。

礼儀正しくも何処か壊れた飄々さが相まって、彼女は会話を続ける気にはなれなかった。

「敵意があるのなら私が相手をしよう」

「ええ、ですが目的は既に達成しております…私は人使いの荒い同僚にこき使われてる時間稼ぎ要因なんですよ。困りますよね」

「つまり犬神宮で何かが起きていますと」
「ハッハッハ」

ゾーイの推察に男はわざとらしい笑いで答えた。

何を言ってももう遅いという事は分かったと、彼女は剣に力を込め、リイにブレスの用意をさせる。

「――押し通る」

「一応自己紹介を。聞いた事はあると思いますが」

馬兜の騎士は剣を抜いて後退しながら語る。

「七曜が一、碧の騎士のバミューダと申します。よろしくお願いま

――」

七曜の騎士の1人。

しかし、その功名たるを知らしめる事なく…。

「先手——必勝!!!」

祈望の騎空団の最大火力が火を吹いた。

「ガンマ・レイ!!!」

「起きたわね」

（毒の効果は本人が一番分かっているか…寝たふりで不意打ちしても通じんな）

コーリスは眠らされてから数分も経たない内に目が覚めた。

悟られぬ様音を立てずに周囲を観察しようとする目と目を動かした所、毒を打ち込んだ紫の騎士が起きた事に気づき、今に至る。

ここは小型の騎空艇の中である。

精々乗員4人が限界であろう狭さの中に、操縦者と紫の騎士、コーリスが詰め込まれていた。

「長距離に特化した自慢の艇よ」

程なくして『操縦するのいつも私じゃないですかー』という声が操舵室から聞こえてきた。

「何のつもりだったんだ」

「あなたにアプローチをかける為に騎空団にアプローチをかけ、結果的に全員をどうにか抑え込む事にしたの」

「…貴女が取引を苦手とする事はよく分かった」

コーリスにとって、突然襲いかかってきた相手とはいえ、七曜の騎士である彼女に過剰な敵意を向ける事は難しかった。

リユミエールで学んだ歴史や、レイの経験によれば、七曜の騎士は空の抑止力となり、過去400年間世界を守っていたのだという。

犬神宮へ明確な傷害を与えなかった事や、ヴァジュラへの謝罪の言葉も、彼女の人柄を思えば偽りの無い事実だったので無いかと思える程に——普通の感情が見えた。

「私に鎧を脱がせたのはあなたで57人目くらいよ。十二神将の子も入れれば58人……いえ、あなたとあの子で1カウントかしら？」

「数える必要があるのか……？」

「数えてあげると喜ぶのよ、皆」

紫の騎士——クラレは、既に鎧を着る気が無い様だ。

鎧の脚部や胸部の上に取り敢えずで兜を粗雑に重ね、槍は彼女の背後には立掛けられている。

ハーヴィンの鎧騎士で尚かつ槍使いという異色の立場だが、彼女を甘く見る事はもう出来ないだろう。

だから逃げる事は——。

「……………あつ」

クラレは唐突に立ち上がって槍を持った。

その眼に映るのは。

「クルツ♪」

「デイか!!」

援軍に小竜のデイが飛来する。

小型艇の外から高速で向かってくる影に、クラレの部下である操

縦者が怯えた。

「クラールレさん！竜が飛んで来ます！」

「舐めない様に。あれは調停者の一部」

久しぶりに暴れ場所を得て、デイは獰猛な笑みと乗り気な声を出しながら内部に侵入した。

「帰って」

クラールレが槍の乱撃を繰り返す。

この狭さでは満足に槍を振れないが、短く持ち、並外れた技術で効果的な攻撃を繰り返す事を可能にしている。

だがデイには当たらない。

ゾーイの一部であるデイとリイは、身体こそ小柄であるものの、戦闘力は星晶獣すらも凌駕する事がある。

デイは全身を大きく震わせた。

「ゲウ、呼吸を止めて！」

「は、はい！」

睡眠ブレス。

ゾーイの持つ掠め手の中で最も理不尽な技と言える。

人間であるならば吸い込んだ時点で確実に昏倒し、その場に充満する性質上、息を止めながら逃げ出すという選択肢しか無い。

コーリスはそこで好機を得た。

「せいッ！」

「……！」

クラールレに向かって槍の様な物質を両手から投擲。

彼の武器は回収されていたが、これは魔力から作られたものである。

（防御魔法で作った棒に魔力を纏わせて貫通力を…彼の力なら刺さるし、防御魔法だから硬い…！）

クラールは左手で口を抑えながら右手で迎撃を試みた。

——しかし駆け引きはコーリスの勝ち。

「なッ…」

「殺す気は無い！」

意趣返し。

殺意の投擲と思われたが、尖った棒の先端が二股に裂けた。

開いた先端はクラールの右手首を巻き込み、壁に突き刺さる事で一時的に身動きを封じた。

無論締め付けている訳ではないので、彼女が槍を離して手を抜けば問題は無いが、その間にコーリスは逃げれる。

加えて此処は小型の騎空艇。

デイに抵抗する過程で破壊されてしまえばその後には操縦者を巻き込んだ爆発だ。

「逃さない…！」

既に武器を回収して全力疾走を開始したコーリスに追いつく為、クラールは周囲に満ちる吐息を晴らし、艇を抜けて全速力で駆け出した。

コーリスは決して背後を見る事無く、最短で森を抜けて騎空艇に戻ろうとしていた。

その動きを咎める様に、横に飛んでいるデイが吠えた。

「クルルルルル!!!」

「悪いが今の俺達じゃ嫌がらせしか出来ん! ゴーイの横で存分に戦おう!」

「…クル?」

「デイには感謝してる! だが…彼女は生物にとって天敵だ!」

ハーヴィンの身体能力は低い。

筋力は育ちにくく、速度を上げてても矮小な体軀が足を引っ張る。

それでもクラールの速度はコーリスに匹敵する。

犬神宮の縮地と同じく、魔力操作によって瞬間的な速度を上げているのだ。

コーリスは防衛魔法の形状変化の達人であるが、身体強化は魔力量の力技に頼る事が多い。

その為、攻撃しながら高速で移動できるゴーイや、瞬間移動を可能とするヴァジュラには劣る。

だから、飛ぶ。

「艇が見え——」

森を抜け、足から魔力を噴出する事で空に飛び立ったコーリス。彼が自身の艇で目撃したのは——。

「無事じゃないか!」

「おやおや、クラールが失敗しましたか。想定外ですね!」

ゾーイと、彼女に相対する鎧騎士——碧の騎士、バミューダである。

(もう一人だと…!? 紫を連れてきたのは失敗だったか!)

コーリスを視認したゾーイは安堵と共に、彼を受け止めようと意識を向けた。

背後には槍を地面に突き刺し、そのしなりを利用して飛んだクラレがいる。

そこで、先程まで交戦していたバミューダが先手を打った。

「——アビサルボルテックス」

バミューダの剣先から大規模な渦が生まれる。

その光景を見て、ゾーイは艇の周りに発生していた渦が彼の仕業だと言う事に気づいた。

「少し呑み込まれてもらいます。クラレに來てもらった方が早いですからね」

剣先の渦がコーリスに向かって飛來する。

(なる程、攻撃技では無く拘束技か。空中で渦巻く水：呑まれば脱出は難しい。設置すれば艇の動きも止められるという訳だな)

コーリスは敢えて自身での対応を諦めた。

彼が行うのは空中で防壁を出し、それを踏んで方向を変える事だけだ。

「リイ！」

「ルルルル！」

コーリスの呼びかけに答えたのはリイ。

ゾーイの側にいたリイは即座に彼の元へ先回りし、氷の息を渦に向かって吐き出した。

コーリスは予め回避していた事で余波を防ぎ、渦だけが凍結するという結果に終わった。

だが、空中に留まる性質は依然として健在。それを媒介に新たな渦

を作り出されれば厄介な置き土産となるだろう。

「いい判断だ！」

そしてその氷をゾーイの光線が完全に砕く。

その動作の隙にバミューダはゾーイの背後に回り込み、空中からはクラレーレが何故かコーリスを無視して彼女の頭上目掛けて降下していた。

「少々手荒に行きますが……」

「あなたは……邪魔……！」

「……!!」

コーリスは空間に魔力が急激に満ちていくのを感じた。

七曜の武器が大きく発光し、今にも内に秘めた力が解き放たれようとしている。

そしてその標的はゾーイだ。

「ゾーイ!!」

「心配するなコーリス！造作も無い……!!」

ゾーイは不敵な笑みを浮かべながら迎撃の姿勢を取った。

全空最強の騎士が2人——その奥義を受け止めようとしているのだ。

バミューダの剣が激流の如く荒立ち、クラレーレの槍が毒々しく滴る。

「深淵剣——」

「紫瘢槍——」

七曜の奥義。

コーリスは発動の直前に思い知った。

自身の持つ、どんな大技であつても…これ程までに瞬間的な火力は持ち合わせないと。

カリオストロのアルス・マグナよりも濃密で、それでいて数秒後に恐ろしい衝撃を生むであろう御業。

砲撃を彷彿とさせる程の水圧を含んだ斬撃と、恐らく対象の全てを侵し尽くす猛毒の破裂槍。

「波濤!!」
はとう

「星触!!」
せいしよく

それと同時に思った。

「——舐めるな。調停の翼を」

ゾーイの方が強い、と。

「そして、私達を」

瞬間、騎士達に雷が降り注ぐ。

その雷は艇に衝撃を与える事なく、正確に対象に流れ込む。

「……っ」

「ぐ、う……!」

だが、奥義は既に放たれた。

ゾーイに当たるのは時間の問題か——否。

彼女は行動を防ぐ為に雷を放ったのでは無い。

ただ、自身が振るう技を——確実に当てる為に放ったのだ。

剣を盾に差し込み、その全体が光の剣の様に輪郭を取り始める。

そしてそれを、薙ぎ払う。

「ガンマ・スラッシュ!!!」

それはガンマ・レイの光線を剣に纏わせて薙ぎ払う技。その絶大なエネルギーは七曜である2人の奥義を塗り潰し、ねじ伏せた。

(七曜の奥義が……潰された?)

クラールは自身を襲う光線の嵐の中、驚愕に満ちていた。相殺、圧倒的な火力。

即興の奥義故に魔力の込め具合が順当では無かったかもしれない。しかしそれでも、調停者に1つの傷を与えるくらいの抵抗は出来るだろうと……そう、思っていた。

「余裕は与えん!」

間髪入れずにゾーイは盾を地面に打ち付ける。

「レイストライク!」

盾を介して地面に光が迸り、相手の身体へ噴き出す。

逃げる事の出来ない地獄の攻撃に苦しむ騎士達を前に、ゾーイは悠々と歩みを進める。

「その鎧なら耐えるのに造作も無いだろう。だが、槍使いの君はどうだろうか。投降を勧める」

七曜の鎧はゾーイの光線に耐える耐久性を持つが、クラールはその鎧を脱ぎ去っている。

速度を得る為と言えばそれまでだが、彼女を相手取るには余りにも

無策であった。

「っ……………ハアツ！」

「来るか」

未だ身動きを封じられながら、クラールレは指先から紫毒を放つ。

ゾーイは冷静に盾で防いだが――

「む」

「ゾーイ、それは酸だ！彼女はあらゆる毒を生成でき――っ!？」

「ネタバラしは辞めて下さい。私達が負けます」

傍観者となっていたコーリスヘバミューダが剣を振るう。

ゾーイの3連撃を受けて平然と動ける事に驚きながらも、彼は刀を抜いて応戦した。

一方、ゾーイの盾は…。

「危険だな」

「…どの口で」

酸によってドロドロに溶けていたが、彼女が力を供給した事で瞬く間に再構築された。

星晶獣の武器は身体から生み出される物が大半であり、破壊されても作り直せる利点がある。

「デイ、リイ。氷と睡眠を同時に」

2対のワイバーンが同時に息を吐く。

クラールレは酸の壁を作ったが、それは物理攻撃の不可侵を意味するだけであって、ブレスを防ぐ事は叶わない。

「私は重役ですね」

「また君か——!!」

クラレーレが苦戦する度にゾーイへ技を振るうバミューダ。

コーリスから一目散に逃げたと思えば次は彼女へ。彼の優先順位はゾーイの無力化が最上位なのだろう。

「片腹痛い!!」

そこでゾーイは全身から波動を放った。

星の力をただ放出するという、最早ヤケになったのかと疑われる行動だ。

だが、彼女の強さは理不尽。

バミューダどころか遠方に位置するクラレーレすらも壁際に吹き飛ばした。

「余りに脆い!」

「ぐ、う…!?!」

ゾーイは続けて盾を構えながらクラレーレに突撃。

ハーヴェインの弱点はシールドバツシュであるとコーリスから教わった彼女は、盾に力を注ぎ続け、溶かされても直ぐに対応出来るように備えた。

一方バミューダの元へはコーリスが向かう。

「本当に元気ですね、コーリス」

「馴れ馴れしいツ!!」

何度でも立ち上がる青鎧に対して悍ましきを感じながら、コーリスは防壁で巨大な槌を作り出す。

「おやおや、死にますよ私？」

「殺す気なだけで死にはせん！」

「その判断力は何より」

軽口を叩きつつも彼は後退を始めていたが…。

「……ふむ」

甲板が変形して彼の足に絡み付く。

カリオストロが遠隔で仕込んだ罠である。

「鎧越しの衝撃は誤魔化せまい——圧撃ツ!!!」

碧の騎士は渾身の振りかぶりを正面から受け、何も発さずに壁に突き刺さった。

「ゾーイ！」

「私は終わった！彼女の至近距離にデイとリイが待機している」

コーリスの元へゾーイが戻る。

彼女が指差す先ではクラレーが項垂れて座り込んでいた。

よく見ればデイとリイを睨みながら唸っている。

「七曜の2人に勝つとは…さすがゾーイ」

「人の願いから生まれた故に、調停者に不可能は無い。当然の結果だ」

ふふん、と胸を張るゾーイ。

褒められて機嫌を良くしたのか、その口は平常より周り、言葉は軽くなる。

「…だが、あのハーヴィンを一撃で倒し切れないとは」

「どういう事だ？」

「私の光線を受けて平然と戦い続けたんだ。あの剣士の鎧は特別だと思っていたが、彼女は何も着ていない」

ゾーイの火力はまともに受ければ消し炭になる。

コーリスは焦がす程度、カリオストロが爆散と考えれば、人間が防御するには余りに遠い格差がある。

それにも関わらず、クラールは槍を振るった。

ゾーイはそれが腑に落ちなかったのだ。無論、手加減はしたが、生存という状態を保たせる程度で、気合で耐えられるものではない。

「私が思うに、武器の方だ」

「何かされたのか？」

「彼等が同時に奥義を放った時：私は力を吸われた感覚があった。彼等の武器には星の力を吸収する性質があるのかもしれない」

「七曜の座は霸空戦争時に服従の証として空に贈られたとレイから聞いている：星の技術で作られた武器ならばあり得ない話ではないな」
「私でない星晶獣ならば吸収した力を利用され、大打撃を受けていただろう。だから彼等は強硬手段とも言える急襲に必死になっていたんだ」

ゾーイは空のあらゆる驚異に対抗出来るように力を与えられた使徒。

力を奪われたのなら更に注ぎ込み、自身の力ごと薙ぎ払うだけなのだ。彼女に対して正面から挑む事こそ間違いだったのかもしれない。

——その上でコーリスとゾーイは敗北を理解した。

「…囲まれた。艇の周りに渦が仕込まれていた時点で詰んでいたのかもしれない」

「この渦の破壊は出来なかったのか？」

「剣士に時間を稼がれてしまった。すまない」

「…いや。しぶとそうだったから、そうなるか」

フロンティア号を取り囲む数多の騎空艇。

国家権力の総動員とも呼べる物量に、彼等は抵抗を諦めた。

まず、20を超える艇——その大砲が全て此方を向いている。

砲撃から逃げるのはゾーイの力を以てすれば容易だが、その場合犬神宮を人質に取られる事は明白だった。

そして、全ての騎空艇を破壊する事も難しい。

頼りのゾーイがここを去ってしまうと、七曜の2人がいつ復帰するか分からないからだ。

(デイに七曜を眠らせてもら——いや、怪しい動きで直ぐに砲弾が撃ち込まれるな)

バミューダの渦でフロンティア号の動きを封じ、ゾーイの足止めをする事で渦自体の破壊を防ぐ。

恐らくはクラレがコーリスを捕獲した時点で任務は完了の筈だったのだろうが、デイの働きでそれは回避された。

そして甲板での戦闘でクラレの呼んだ騎空艇の包囲が完了。

練られずとも急襲作戦とは対応が難しいものである。

例えゾーイが最強であったとしても、犠牲無しに敵を蹂躪する事は叶わない。

「すまない、コーリス」

「…これだけ約束してくれ」

投降を呼び掛ける文言が拡声器によって木霊する。

だが2人は手を上げながら全く別の事を話していた。

「連れてかれた先で、俺やカリオストロ、ノアさんが殺されそうになっ

たら」

「うん」

「滅茶苦茶暴れてくれ。軍だろうがなんだろうが録でもない奴等に違いないから」

「了解した」

「あ、でも一般市民に手を出さない様に」

「私を何だと思ってるんだ…」

その呆れとは裏腹に…

「まあ…でも——」

ゾーイは怪しげな笑みを浮かべていた。

「——彼等は私が怖いようだね」

それは悪巧みであった。

69. オラつきゾーイと七曜集結

《『祈望の騎空団』についての報告》

—— 碧の騎士 バミューダ・ベルリツク

イスタバイオン王国真王陛下へ申し上げます。

『コーリス・オーロリア』、ひいては『祈望の騎空団』について、当該作戦に關した報告を記する。

『祈望の騎空団』の団員は団長のコーリス・オーロリア（以下『コーリス』とする）、副団長のゾーイ、操舵士のノア、団員のカリオストロの4名である。

騎空団の活動方針は団長の意向によるものであり、数少ない団員を派遣する事も多い。

戦闘の指揮は主にコーリスが執っているが、操舵室から離れる事が不可能なノアを除けば、カリオストロも含めた戦闘員全員が独自に行動を取る事が出来る。

また、戦闘員はファータ・グランデ空域における普遍的な騎空団の団長が持ち合わせる判断力を十分に有しており、団長のコーリスを無力化したとしても動きが鈍化する事は無いだろう。

当該作戦における戦闘では『祈望の騎空団』の騎空艇であるフロンティア号にて、私と紫の騎士が交戦し、団員の拘束に成功した。

交戦時にはコーリスとゾーイの連携により、私と紫の騎士が一時的に戦闘不能となった為、強硬的な対処に当たる場合には相当の兵力が必要になるだろう。

特に、ゾーイが持つ調停者としての力は七曜の騎士の総力に匹敵する可能性がある。

また、フロンティア号に大砲等の兵器は一切備わっていないが、カリオストロの錬金術により自由に形を変えられる為、戦闘に際しては

注意する必要がある。

犬神宮での戦闘と、それに伴う被害への補填については紫の騎士の報告書を参照する様申し上げます。

また、イスタバイオン軍が調停者であるゾーイに対して戦闘を避ける判断をしている事が認知されている、又は察知されているので、武力による刺激は今後一切行うべきでないと言言する。

再三に渡り申し上げます。

祈望の騎空団はファータ・グランデ空域の平常を保つ上で重要な要素である事は間違い無い。

その上でイスタバイオン王国の領空とする事で更なる恒常的な管理を進める計画は中止するべきだと確信した。

かの者たちが自由に行動出来ているのは空域の特性があつてこそであり、黒騎士候補のコーリス、調停者のゾーイ、錬金術開祖のカリオストロを敵に回すリスクを負つてまで侵略を広げては、アウライ・グランデ大空域の調和を乱す惨事に発展する可能性が高い。

よつて、コーリスを黒騎士へ任命する案に強く賛成の意を示す。

「暴れないでね。これから渡航が荒れる」

「…」

騎空艇に囲まれたフロンティア号の甲板にて、コーリスは紫の騎士であるクラレに手錠をかけられていた。

周囲には銃を構えた異国の兵士達が立っており、此方の動向に対して常に目を光らせている。

(…何方かというゾーイに対しての警戒か)

横ではゾーイも同様に拘束されていた。

デイとリイは碧の騎士、バミューダによって攻撃力の無い渦による無力化を受けていた。

最も、コーリスとゾーイは無抵抗のまま甘んじて拘束を受け入れたのだが。

「いやーん！変なところ触らないでようおじさんっ！」

「静かにして下さい」

「えっち♡」

「こんの……！」

そしてカリオストロも同じくこの場に連れ出され、軍の騎空艇がフロンティア号を運搬する用意が出来た所でノアもコーリスの横に並べられる。

4人は大罪人の様に膝をついて座らされ、クラレーとバミューダが目の前に立った。

最初に口を開いたのはバミューダだ。

「突然の強襲、誠に申し訳ありません。質問は答えますよ」

「3つある」

「幾らでも」

穏やかな声を発するバミューダに対して、コーリスは咎める様な声で問いかけた。

「1つ。俺達に対して害意ではない別の用があるの分かった。その上で何故武力行使を？」

「私達の要求は余りにも身勝手なものでして、それ故多忙な騎空団に”今すぐ”の依頼は不可能だと判断したからです。それに、あなた達はやむ得ない状況になって初めて投降しましたが、他の空域では七曜の騎士が来た時点で投降しますよ」

「…そつちの権威が空域を凌ぐかのように言う」
「事実ですから」

あつけからんとした姿勢を崩さないバミューダに苛つきながらも
コーリスは2つ目の質問を放った。

「2つ。この軍隊はこれから何処へ？」

「この軍はアウライ・グランデ大空域にあるイスタバイオン王国のも
のです。その王国を統べる真王はナル・グランデ空域、エクセ・グラ
ンデ空域を統括下に、他の4空域も騎士を介して実質の支配下に置い
ています」

「ファータ・グランデは支配されていないと」

「そうです。とはいえ、これから支配する気もありませんよ。主な説
明の為にアウライ・グランデに来てもらいます」

他の空域についてはファータ・グランデの国々も知るところではな
い。

主な7つの空域の内、5つがアウライ・グランデに支配されている
事は衝撃的だったが、コーリスは思考を切り替えて最後の質問に移っ
た。

無論、抵抗すればどうなるかという分かりきった事は聞かないだろ
う。

「3つ。お前等の目的は俺か、騎空団か」

「騎空団としての形を保った君が必要なんですよ。これは陛下が
ファータ・グランデを保つ上で祈望の騎空団という要素が重要である
と判断した為です」

真王とやらの裁量がどこまで信じられるのか。

全空に羽ばたく七曜の騎士が一人の王の元で横暴を働いてる事に
コーリスは少し失望した。

しかし、この場合は相手の言葉のまま動くのが最善か。少なくともカリオストロは此方の意向に沿って動いた事から、悪くない判断だったと彼は認識した。

だが、ゾーイは口を挟んだ。

「君達の行動は世界を乱すものではない。私の権能が感知していない事からそれは認めよう」

「有り難いです」

「だが、私個人として君達の蛮行は気に食わない。もし仲間には深い傷を負わせていたのなら……」

「脅しが苦手な様ですね。すんなり諦めた瞬間を見ましたよ？」

そう、これは脅しだ。

バミューダが笑う様に、先程の状況を鑑みれば随分と粗末な脅し文句だろう。

「…私は口が下手なんだ」

ゾーイは大きく目を見開きながら呟く。

「だから、身体が先に動く」

「……………」

バミューダの笑い声が消えた。

「最近ふと思う。私は随分と我儘になってしまったと。コーリスと過ごして美味しいものを沢山食べて舌が肥えてしまったのだろうか」

ゾーイだけが喋る。

「我儘だから、苛ついたら暴れてしまうかもしれないなあ」

(脅しの文言がなんかかわいい…)

コーリスは漠然とそう思ったが、敵からすればこの脅しは空恐ろしい物に違いない。

七曜の騎士、それも2人を無傷で退け、現時点でもあくまで島を人質に取って拘束しているだけで、実質の無力化には程遠い。

人質の効力よりも先にゾーイが爆発しては全滅だ。

不慣れな脅迫は、想定以上に敵を恐怖させていた。

「…バミューダ、黙って」

「クラレーより口が上手いですね」

クラレーが軽くバミューダを蹴り、コーリスとゾーイの近くに移動する。

下から見上げる彼女の姿を見て、何故かカリオストロが吹き出す。

コーリスは思わず突っ込んだ。

「何故笑う…失礼だろ」

「コーリスはこんな小さな女の子に負けたんだね☆」

「俺の事を笑っていたのか…」

無言を貫いていた筈のクラレーが眉をひそめてカリオストロと向き合う。

この場の全員が、目と目を交差する稲妻を幻視した。

「あ？何だよチビちゃん」

「錬金術の開祖と聞いていたけれど…まともな会話を構築する事は出来ないのね」

「あんま上手くねえな」

「……………うるさい」

「お前みたいなガキが兵を率いて七曜を名乗るってのは…アレか。人

手不足で強いだけの奴が偉くなっちゃう本末転倒パターンの現れか？」

「ガキじゃないわ。31歳よ」

剣呑な空気が流れる。

兵達はクラールレが怒る事に気を張り詰めているのでは無く、初めて聞いた年齢に戦慄しているのだ。

ポジティブに言えば、31歳と思えない程には見た目が若いという事だ。

ハーヴィンは小人というだけで、老いの早さは他の種族と変わらない。い。

「ちなみにオレ様を殺すと錬金術の恩恵に預かれないと思った方がいい」

「錬金術師はあなた以外にも沢山いるじゃない」

「大半は野良の魔法使いにも劣るノータリン共だ。オレ様は戦闘、建築、不老不死、治療…それ等を錬金術の応用で行える。その技術が一生手に入らねえってこと」

「自惚れね」

「どうせ大国。錬金術を学ぶくらいの施設はもうある筈だ。で、活かせたか？」

「…」

「ヘルメスと手を組んだ所でオレ様の作った構築式はオレ様の頭ん中にしかないんだよ。なんにも役に立たなかつただろ？」

ゾーイに乗じて煽るカリオストロ。

クラールレは歯を噛み締めて会話を諦め、コーリスの前に再び移動した。

ニヤニヤと悪辣な笑みを浮かべる開祖を横目に彼女は、溜息を吐いて告げる。

「これからあなた達をアウライ・グランデ大空域へ連れていく。真王に会って、話を聞いて…用が済んだら帰れると思う」

返答はしなかった。

コーリス達は先程よりも幾分かマシな気分で留置場に運ばれたのだった。

留置場。

特に不都合も不自由も無い客室の様な場所で、コーリス達は駄弁っていた。

窓を見るコーリスと、椅子に座るゾーイとカリオストロ。

そして、何処か哀愁が漂うノアが立っている。

「瘴流域って…渡れるんだな」

「七曜パワーってやつ？」

「何方かというと瘴気が捌けてないか？」

「ノア、教えてくれ」

空域を隔てる瘴気——瘴流域。

人体に有毒な瘴気、それによって魔物は活性化し、更に大群を成す。また、嵐の様な気候が騎空艇の移動を妨げる事から、そもそも通れないという認識が正しい。

しかし、窓から覗けば瘴気が艇を避ける様に動いていた。その露骨な動きにカリオストロはノアの知識を求めたのだ。

「…瘴流域は星の民が敷いたものなんだ」

「空域として分ける事で統治を円滑に…か。移動制限で敵戦力の分散

にもなるしな」

「でも、いくつかの星晶獣が持つ『空図の欠片』を集めれば星の力で瘴気を晴らす事が出来る」

「…空図？」

「星の民が遺した情報の塊みたいなものだよ」

「つまりアウライ・グランデの奴はそれを持ってるってことか」

「…いや、これは違う。何か裏技を使ったんだと思う」

ノアの言葉によると、空図の欠片を用いた時の反応とは異なるらしい。

瘴気そのものが消える訳ではなく、動いているからだ。

七曜の武器と同じく、何か特別な力を行使しているのか。

考えても予想の範疇を超えないと分かり、各々は会話を続けた。

「それにしてもいい演技だったぞゾーイ」

「そうか？」

「シンプルにビビらせんのが一番いい。なあコーリス？」

「脅しは言葉を強くするよりも、力を見せた後に念を押す方が効果的だ。確かに上手だった」

「…そうか！ならば今後も——」

「いや、無理はしなくていい。俺達が命の危機に瀕するなら暴れてもraithたいが、今の所敵戦力の全貌が見えない。怯えようからしてゾーイを上回る兵力を持つとは思えないが…念には念を」

「ふむ…暴力的な気分も悪くなかったのだが」

さり気なく危険な発言をするゾーイに触れず、コーリスは無表情を貫くノアに声をかける。

「フロンティア号が心配ですか」

「うん…それもある」

「…軍の騎空艇はあんなものです」

「だとしても、良い気はしないよ」

カリオストロが会話を聞いて眉をひそめる。

ノアと出会った時、騎空艇の様式を決める際に彼の表情が変わる瞬間があつた事を思い出したのだ。

だが、あえて会話には参加せず耳を傾けた。

「騎空艇は空の人間にとって未来そのものだった。島を見つければ人に出会い、絆が繋がれば物流が生まれ、技術が進歩する。今の人達は兵器としか思っていないんだらうけどね」

「…しかし、守る為でも必須です。リユミエールも護国の為に兵器として扱いました」

「そうだね…。でも、僕は艇作りの星晶獣だから…戦いに価値を見出されてる艇達を悲しく思ってしまうよ」

ノアは騎空艇を移動の道具だと認識している。

騎空艇の技術を仕込む為に作られた星晶獣であるが故に、元来の用途が頭に刻まこまれているのだ。

だが、技術の発展によつて騎空艇の在り方は多岐に渡り、国に必要とされている用途は戦闘。

人々の祈望を担う存在が血みどろの戦争兵器に変わった事を、ノアは許せなかった。

それと同時にカリオストロは小さく息をついた。

戦闘兵器として改造される事は自然であり、合理的とも言える。その事を分かっているながら感情を吐露するノアに驚いたのだ。

思ったよりも人間らしい、と。

「コーリスは悪い事、してないよね」

「…え？はい…恐らくは」

「きつと、イスタバイオンという国も悪事の為にコーリスを襲ったわけじゃないと思うんだ」

「過程が悪事なら、結果で目を瞑ることは出来ません」

「そう。どんな理由であつても、例えば味方を守るために騎空艇の砲撃で敵を殺めたとしても、僕はそれを正義とは認めたくない」

「…ノアさん」

「僕はきつと、戦いそのものが嫌いなのかもしれぬ」

「…」

「ごめんね」

ノアは精神的に疲弊していた。

身に覚えのない理由による敵襲や戦闘が相次ぎ、自身は帰る場所を守らなければならぬ責任感。

何より、コーリスが何らかの思惑によつて振り回される光景を見たくなかつたのだ。

その意に、ゾーイが無意識に唇を噛んだ。

「入るわ」

瞬間、扉が開いた。

「ノックしろ」

「あなたに用は無い。開祖」

クラレが突然プレートを持って入ってきた。

ティーカップが4個乗っている。

不意打ちの入室に思わずコーリスが問いかけた。

「…何のつもりで」

「機嫌を取りに来たわ。バミューダが失礼したから」

「本当に聞けば答えるんだな。普通言わないだろうに…」

「正直者は救われるから」

犬神宮にした仕打ちを棚に上げた彼女に苦笑いしながら、コーリスは誰かがカップに手を付けるのを待った。

クラレーが首を傾げる。

「紅茶は嫌い？」

「いや…その、少し警戒を」

「美味しいわよ。淹れたの私じゃないから」

「んん…？」

「私が淹れるとコーヒーみたいな味になるの」

ゴクゴクと片手で紅茶を飲むクラレー。

1つのカップが安全だからといって、他の安全が保障されるわけではないが、此処で飲まないのも申し訳ない気がする。

そう考えたコーリスとゾーイはカップを手に取った。

遅れてノアも手に取る。

ちなみに紅茶の配給から除外されていたカリオストロは青筋を浮かべていた。

「…美味しい」

「ふむ…紅茶を初めて飲むが、匂いに反して甘くないのだな」

「手前にある角砂糖とミルクを入れれば甘くなるよ」

「おお、ありがとうノア」

一級の茶葉なのか、淹れた者の腕がいいのか。

3人は警戒心など忘れたかの様に茶の味を楽しんだ。

「…苦い」

一人だけ多めのミルクとを用意されていたクラレーは、躊躇うことなくそれを全投入し、ガブ飲みと形容できるほどの速度で飲み干した。

その動きに品は無かった。

「…真王とは、何なんだ？」

コーリスは聞いた。

真王に仕える七曜の騎士本人が目の前にいるのだ。もし自分達に對して害意が無いのなら、大雑把な人物像くらいは教えてくれる筈だと思つた。

「そうね…何処を見ているか分からない人、かしら」

クラレーはひと呼吸置いて話し始めた。

「先の事を考えてる人は、物事が及ぼす影響を長い目で見るでしょ？」

「為政者の考え方だな」

「でも、彼は過去に何が起きていて、現在にどう繋がるかを常に反芻している」

「…歴史の前例から結果を予測する事は自然ではないのか？」

「現時点で全く関わりの無い国、それか個人を常に監視する事だつてある」

「それこそ未来を見越しての事に思えるが…」

歴史を学び、戦争等の前例から未来への導線を敷く事は珍しい話ではない。

遙か未来の事を考えるのは大国として当たり前のことでは無いのか。

コーリスは特段疑問に思わなかった。

「彼は『点』を付けているの」

「点？」

「ある時代、ある国、ある人間。歴史上に存在する出来事の一部を切り

取り、注視する。それこそ、ファータ・グランデに存在する何の変哲のない田舎島に、星晶獣も英雄もない島にだって…」

「…目星か」

「だから私が七曜の座を受けて、初めて謁見した時に聞いてみたの。何の為に世界を見てるのかって」

クラレーはしみじみと語った。

『『全ては百年後の為に』って言われたわ。意外だったのは、それが口癖の様に扱われてる事。彼は遙か先にある何処かの『点』で起きる戦いに備えているの』

「そんな未来予知者みたいな」

「歴史書のように世界を見るの。未来も含んだ全ての」

この場にいる全員が思った。狂人であると。

妄想じゃない方がおかしい。もし真王に未来を含む全てを見通す能力が備わっているのなら、たった一人の人間に大役を任す世界も狂っている。

ゾーイでさえも、均衡という一条件に限って現在を見通す事が出来るのであって、過去から未来に渡る空の軌跡を辿るなど、神の御技としか言いようがない。

「貴女は…信じたのか？」

「全く」

「…なら何故」

『『今』を犠牲にしている訳じゃないなら、それでいいから』

それっきり、コーリス達は無言のまま長い時間を過ごす事となった。何故か、クラレーが目的地に着くまで退室しなかったからだ。

——イスタバイオン王国、謁見の間。

「いきなり？」

「陛下が命じたんです。当然でしょう？」

「いつの間にか手錠も外されている。私達も側に居て良いという事だな？」

「構いません。ただ話を聞いてくれればそれで」

騎空艇が到着し、コーリス達はアウライ・グランデの情景に浸る間も無くイスタバイオンの宮殿に連れられ、廊下を抜けた先は謁見の間。

目の前に映る玉座には誰も座っていない。

そして、この場にはクラーレとバミューダ以外に兵はいない。

門番すらも外で構えているだけだ。

恐らく、これから真王が姿を表すのだろう。

鎧を身に纏ったクラーレがそれを証明している。

「ノアさん、跪かなくてもいいですからね」

「するつもりは無いよ」

「無論、私もだ」

「カリオストロもおく」

「貴方達は本当に怖いもの知らずですね」

少し引きながら小声で咎めるバミューダ。

ここに居るのは敵意丸出しのコーリス、脅迫調停者のゾーイ、大国舐め腐り開祖のカリオストロ、不機嫌なノアだ。

ノア以外まともに話を聞かないだろう。

祈望の騎空団に怖いものはないのだ。

「——よくぞ来てくれた、祈望の騎空団」

そして、束の間。

カツン、という音と共に一人の男性が現れた。

種族はエルーン。年の頃は40から50と言った所か。

容姿は何処にでもいる国王のようで、童話から抽出したかの様な立ち姿。

貴顕紳士な振る舞いに、これでもかと飾り付ける王冠。

その顔を見てコーリスはクラレの話进行を思い出した。

(疲れた顔——そして…)

彼は目の奥を覗き込む様に視線を向けてくるのだ。

その人間の奥を見通すように。

「ファータ・グランデでの活躍は耳にしている。当然、直接見てもいるがな。紫に聞いた筈だ」

「はい」

どんな手段であれ、エニユオとの戦いは視認されていた事が分かっている。

コーリスは肅然と答えた。

「あの戦いを見て確信したのだ。影響力に地力が追い付きつつある、と」

「話が見えないな真王。君は私達に何を求める」

「では、本題に入ろう」

無礼と咎められる筈のゾーイを見過ごし、真王は腕を小さく上げ

た。

横から数人の騎士が姿を現す。

この場にいる騎士は——七曜だけだ。

真王は名を呼んだ。

「紫の騎士、クラーレ」

紫の鎧、携えるのは槍。

「白騎士、ブロンシュ」

白の鎧、携えるのは大剣。

「緋色の騎士、タルヴァアザ」

緋の鎧、携えるのは剣。

「黄金の騎士、リノア」

金の鎧、携えるのは細剣。

「碧の騎士、バミユータ」

碧の鎧、携えるのは長剣。

「緑の騎士、エヘカトル」

緑の鎧、携えるのは刀。

∴総数6名。

「信頼のおける配下。武に捧げた忠実な騎士達。だが…」

「七曜とは名ばかりで、一人足らん」

真王は騎士の一人一人に目を向け、再びコーリスを見た。

「祈望の騎空団団長、コーリス・オーロリアよ」

「……はい」

「この六人の騎士を糧とし、ファータ・グランデを統治する七曜——黒騎士となれ」

「——！」

コーリスは声を出せなかった。

七曜の騎士が各空域の代表として選出されている事は分かっている。

しかし、ファータ・グランデで名を広めたと言って、最強になった訳ではない。

それこそ、ただの騎空団の筈だ。

抗議と疑問の声を上げようと口を開いた瞬間——

「それが人にモノを頼む態度かアツ!!」

「そうだそうだ!」

「私は断固反対する!抗議する!その態度にだ!!」

「年の功ならオレ様がトップだぞ!」

——ゾーイとカリオストロが爆発した。

ゾーイは未だ脅しの演技が残っている可能性が捨てきれないが、カリオストロは完全な愉快犯。

コーリスの全身が震え、ノアは彼を連れて逃げる準備をし始める。

七曜の騎士達は明らかに固まっている。

毅然とした態度では無く、純粹に驚いている。

そして、黄金の騎士だけが怒りに震えるように鎧を鳴らしていた。

「こやつ等め、ハハハ」

真王は軽く笑った。笑っただけだ。

「……………フツ」

コーリスは土下座の準備を完了させた。

《任務についての報告》

——紫の騎士 クラール・ピソラ

真王へ。

コーリス・オーロリアの捕縛につき、犬神宮での交戦が発生した為、十二神将ヴァジュラへの弁解と補填を提案する。

犬神宮へ齎した被害は毒による睡眠であり、対象は全島民。

捕縛目標は話し合いに応じる気がなく、私はそれを察したのでやむを得ず戦闘に発展。

これは本当である。嘘ではない。

彼なら鍛えれば七曜を名乗れると思う。

70. 百年奴隷契約

「陛下ッ！無礼者の処罰は私に…！」
「来いよ」

黄金の騎士が細剣を抜く。

ゾーイとカリオストロが働いた無礼に憤っていた唯一の騎士が、今にも突撃しようと姿勢を低く保つ。

受けて立つと挑発したのはカリオストロ。

そのせいで、コーリスが繰り出した土下座は真王以外誰も見ていなかった。

「止めよ」

「しかしッ」

「こ奴等が無礼者なら、日頃の紫はどうなるのだ」

「無論七曜の地位を剥奪…若しくはアウライ・グランデ大空域からの永久追放が妥当でしょう。私が日々進言しております様に」

「冗談が通じぬな。しかし見よ」

猛る黄金の騎士に対し、真王はコーリスへ視線を向ける様顎で指した。

「騎空団の主が恥を捨てて侘びている。これは団員の暴走だ」

「…責任は団長にあるべきでしょう」

「——解らぬ奴だ。少し黙るがよい」

真王の目が変わる。

吠えが止まらぬ駄犬を見下ろす様に睨みを聞かせ、声を荒立てずにこの場に静寂を齎した。

「コーリス・オーロリアよ。すまなかつたな。確かに高圧的で横柄な要求ではあつた。頭を上げよ」

「そうだ、コーリスが謝る必要は全く無い」

「凶に乗るな小娘がアツ!!」

ゾーイの発言によって再び激怒する黄金。

先程とは違い既に飛びかかつており、真王が言葉で止める余地は無くなつた。

その瞬間——調停者の敵意が膨れ上がった。

余裕の表情を崩さなかつた真王の額に汗がにじむ。しかし。

「邪魔よ」

「が、ハッ……!」

「あつち行つてて」

間に割り込んだクラールレが細剣を弾き、黄金の騎士の脇腹に向かって槍の石突を叩き付けた。

そして苦痛に悶える彼女の鎧に槍を引つ掛け、入り口に向かって投げ飛ばす。

勿論閉まっていた門に激突し、完全に沈黙した。

一連の流れを見た真王は頭を軽く抑え、数秒後に溜息を吐いた。

クラールレが元の立ち位置に戻る。

「うるさいのは黙つたから、多分続けていいんじゃないかしら」

「…平和な時代で無ければ貴様等の地位は剥奪していたぞ」

「鎧は構わないけど、槍を取られるのは困る」

「ならば従順に……いや、いい。無駄な話だ」

ドン引きする祈望の騎空団達を前に、真王は心底うんざりした表情

で告げる。

無理矢理話を戻すつもりなのだ、彼等は空気を読んで耳を傾けた。

「七曜の騎士が行うのは統治と言うより治安維持だ。お前達の空域では多くの騎空団が同じ役割を果たしているが、他空域ではこ奴等が軍を率いて行う」

「俺に軍を率いると…？」

「不要。必要なのは立場だけだ。七曜の座を背負った上で祈望の騎空団の名を更に広め、ファータ・グランデの平和を維持し続ける事。それが私が貴様に求める物だ」

言ってしまうえば、今まで通り人助けをしていれば良いのだ。

露骨なまでに祈望の騎空団の活動方針と被っているが、これは単なる偶然か、ファータ・グランデの治安に感謝するべきなのか。

だが、治安維持が目的ならば、現在の形を逸脱する意味は無い筈だ。騎空団数が減少している訳でもないし、軍は不要だと考えられている。

何故、黒騎士が必要なのか。

「ファータ・グランデにおける七曜の知名度は低いだろう。それは長らく黒騎士の座が空席であった事、黒騎士を抱える国家が人材では無くゴーレムの製造技術に頼った事が影響している」

「その話に則れば…俺が黒騎士になったとして、その国家の戦力として数えられてしまうのでは？」

「七曜の座を抱えている時点で私の管理下だ。問題は無い」

「では、そもそも何故黒騎士が必要なのですか」

「抑止力だ。戦争、暴動、反乱…それ等は鎮圧するよりそもそも起きない方が良い。何事においても黒騎士が場を収めに来るといふ枷が手を鈍らせるのだ」

理に適ってはいいる。コーリス達にとってのメリットもあるだろう。介入出来る物事の幅も大きくなるし、空域の為にイスタバイオンの支援を受ける事も可能になる。

何より、今までの活動に制限が生じる事が無いのだ。

だからこそ、コーリスは問う。

「何故、俺を黒騎士に？」

真王は一息置いて、考え込む様に顎を撫でた。

「無論、ファータ・グランデにおける影響力、純粋な戦闘力も兼ねている。調停者と開祖という戦力を鑑みれば、将来性も充分過ぎるほどに存在する故にな」

だが、と。真王は刻んだ。

「真に黒騎士に据えた理由は、未来への投資のような物だ」

(未来…紫の騎士が言っていた百年後か…！)

「別段今のファータ・グランデを守る必要は無い。しかし、遠い未来では戦火に包まれ、その災厄が世界にまで及ぶ可能性は捨てきれない。ならば、その火種が生まれぬ様に常に目を光らせておく必要があるだろうか？」

自身が未来を見ていると断言しているかのような振る舞い。

クラーレが言った様に、真王は常に遠い世界について語る。虚言と思われようが構わない。彼はそうなる様に誘導出来ればそれで良いのだ。

「私は全てを知っている。お前の霧も、溢れんばかりの魔力も、朽ちぬ身体も……その内に秘める灰の力もな」

「!!」

「私の要求は拒否権が無いのではない」

真王は暗く微笑んだ。

「拒否する必要が無いのだ」

——イスタバイオン王国ユートピア第1宮殿。

謁見の後、コーリス達は客室に通され、真王の要求に応えるか否かを判断する時間を与えられた。

4人はソファアーに座って話し合う形を取っているが、実際に喋っているのはコーリスとカリオストロだけだ。

ゾーイは安全を確保さえ出来るのなら彼の意向に従うし、ノアはファータ・グランデへの帰りを促してしまうと、自ら口を閉じた。

「拒否する必要が無いって事は、拒否する事によるデメリットも特に無いって事だ」

「うーん…」

「よく考えな。オレ様は七曜や真王から何か研究に使えそうな情報が取れれば良い」

「その好奇心は大丈夫なのか…?」

「良いだろ。なあ?黄金のかませ犬さんよ」

扉の前には黄金の騎士と白騎士が並んで見張り番として立っていた。

カリオストロは先程の醜態を思い出させる様に黄金の騎士を侮辱するが、帰ってきた声は思いの外静まっていた。

「過剰な詮索は死を招く。そう言っておこう：開祖殿」

「思ったより落ち着いてんな」

「貴方の生み出した錬金術、その一端はイスタバイオン王国の建築物や鍛冶に応用されている。無論貴方の術の規模とは比較にならない程微弱な物だが、この国を豊かにした技術の開祖とならば、敬意を払わない理由は無いだらう」

「お前：もしかしてこの国の生まれか？」

「黄金の騎士は代々イスタバイオン家から任命されている。私の名前はリノア・イスタバイオンだ」

「…王族だったのか」

黄金の騎士、リノア。

分かっているのは女性、イスタバイオン王家の人間から推察するに種族はエルーンという情報のみ。

怒りのままに行動し、クラーレに撃退された姿は鳴りを潜め、傍目から見れば高潔な騎士として映る。

「七曜つてのは強さで決まるものだろ？一族鼻肩もするのか」

「先代から直接受け継ぐ剣技、術、戦略：それ等が七曜の座を得るのに有利である事は認めよう。だが、強さで選ばれる事は事実だ。もし外部の人間が私より強ければ、真王によってその者に座を明け渡す事になるだろう」

「紫の騎士は明らかに強さで選ばれていた気がしたな」

「その感覚は正しいぞコーリス・オーロリア。でなければあの様な愚物が七曜を拝命できるわけが無い」

リノアの言葉は真に迫るものがあった。

日々クラーレによって何かしらのトラブルに巻き込まれているのだらうと、コーリスは同情せざるを得なかった。

単に苛ついているだけかもしれない。

「だが、私の家の場合は外部の人間を一族として取り込む」

「取り込む…？」

「婚姻を結ぶ」

「……………な」

「王家の人間であれば珍しくもない事だ」

それよりも、とりノアは話題を変えた。

「お前達の行動を決める話だ。私の話をしても仕方のない事ではないのか？」

「…黄金の騎士殿の言う通りだな。決めよう」

「いや、そもそも黒騎士というか七曜の立場について分からない事が多い。お前にも結構質問するが答えてくれるか？」

「いいだろう」

リノアは即答した。

無論答えられない情報もあるだろうが、無難な質問には満遍なく答えてくれるだろうとカリオストロは推測する。

何故なら…。

(こいつ血みどろの努力をした秀才タイプだ…)

過去の経験から、リノアの人物像が用意に想像できたからだ。

カリオストロは千年余り前まで記憶を遡り、弟子達の顔を思い浮かべていた。

(滅茶苦茶真面目で…期待とか使命に応える為に努力してちゃんと結果を出せる奴。こういうのは大抵自分以外の為に力を尽くすから、身勝手な奴が嫌いなんだよな…)

彼の中で、リノアは信用に値する人間としての評価が下された。先程錬金術を褒められた事もあって、少し上機嫌なのかもしれない。

カリオストロの様子に安心しながら、コーリスは話し始めた。

「俺の考えだと、七曜は文字通り真王の手足だ。空域を統治する為、予めその空域出身の代表者を騎士として手元に置き、円滑に指示を出す。黄金の騎士殿、間違っているだろうか」

「いや、正しい。イスタバイオン家の様に、他の空域にもそれぞれの座を輩出する家柄が存在するからな。大抵は王家であるから統治は容易い」

「黒騎士の事はレイから少しだけ聞いている。王都メフォラシユから選出されている事があつたと。真王の言う通り、ゴレムの技術で栄えてからは人間の力に頼る事が少なくなり、黒騎士の座に相応しい人間が消えた。長い間空席であつた事は真王にとってどう映る？」

「真王は空の世界の王。見識が薄まったファータ・グランデに於いてもこの事実が覆る事は無い。陛下の手足である黒騎士による統治を外れるという事は、独断で空域の維持が行われているという事。つまり、メフォラシユがイスタバイオンに反感を抱いていると映る」

「その空席が見逃されていた理由は…」

「それには答えられない」

「…」

「…だが、そもそも七曜の役割は空域の平和を維持する事。騎空団の活動がファータ・グランデの治安を守っているなら、陛下が仰った様に我々が介入する必要は無くなる。『今』はお前達だけで空域を守れているという証明なのだから、悪い事だけでは無いだろう」

「…答えて頂き、感謝する」

「構わない。必要な知識を与えるのは当然の事だ」

（滅茶苦茶答えてくれた…しかも紫の騎士と違って正確…）

祈望の騎空団でリノアの株が急上昇。

クラーレの株は売り時なのだろうか。

兎も角、前提としての知識が加わった事でこれからの話し合いは先程より進んだものになるだろう。

「まあオレ様が聞きたいのはなコーリス。黒騎士としてファータ・グランデで活動できるのかって話だ」

「正直に言う。敬われる様な人間としてやっていけるか分からない」

「だろ…？しかもお前、見た目変わんねえから舐められると………うん、やめつか」

「――1つ思ったんだが」

情けない理由によって早くも黒騎士を諦めようとした瞬間、ゾーイが口を開いた。

「ファータ・グランデにおける七曜の認識はどの程度なのだろうか？」

「七曜の騎士＝最強。そんな感じだ」

「なら話は早い。黒騎士を名乗った後、更に多くの依頼を達成すれば七曜としてのコーリスが認められる筈だ。最強の名に恥じない強さを見せてやろう！」

「…何だか雑な気もするが、シンプルな方が前向きでいいな」

「そもそも真王がそんな感じの事を言ってた気はするが…ゾーイの意見も一理ある、か」

意見を纏めた3人は、最後の1人の方を見た。

唯一、ファータ・グランデに戻るべきという明確な意見を持っていたノアだ。

彼は少し考え込み、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「僕は真王の言う百年後が引っかかるんだ」

「未来を見ている事ですか…？」

「真偽はさて置いて、現状コーリスが黒騎士としての活動をファータ・

グランデで行う事にデメリットが無いのは分かったけど…百年後ではどのような作用をしているか分からないよね？」

真王は言った。

此度の采配は『未来への投資』であると。

言葉を読み取れば、現在に何ら影響が無くても、未来では何らかの問題を引き起こす可能性の方が高い。

コーリスが黒騎士になる事で発生する問題、黒騎士という立場そのものが招く災禍…そもそも百年間黒騎士という役割を押し付け、体のいい兵にする事も出来るのだ。

真王が全てを見通せる場合、これ等が全て容易に叶う事を、ノアは忘れていなかった。

その上でコーリスは言った。

「ノアさん。俺は利用されていても、空の平和に繋がるのなら何も気にしません」

「真王の正義は誰にも問えない。損得だけでは済まないのかもしれないよ？」

「その正義を証明する方法は身近にあります」

「……………あ。確かにそうだね」

「ゾーイです」

「私か？」

視線を向けられたゾーイは身に覚えのない期待に少し慌てるが、少し考えてから自身もその理屈に気が付いた。

「世界の均衡を乱す出来事が発生する時、ゾーイは調停者の能力によって感知することが出来ます」

「でも…それは世界が安全であれば君が何をされても良いという事になっちゃいます」

「覚悟の上です。元より祈望の騎空団は顔も知らぬ人々の希望になる

為に結成されたんですから」

「……そうか」

ノアは顔を歪ませたが、それでも優しい笑みを浮かべ、コーリスの案を認めた。

そこでリノアが声をかける。

「意見は纏まりつつある様だな。コーリス・オーロリア、破壊の星晶獣との戦いの時点でお前の覚悟は充分承知している。その上で見事と
言わせてもらおう」

「…ありがとう」

「ただ、艇作りの星晶獣が言う様に、お前達は陛下を知らない。知らないからこそ信じられない言葉もある。その懸念は当然のものだ」

そこでリノアは真王の意思を伝えた。

「お前達への火急の要求は拜命の話聞く事だけだ。今すぐ黒騎士になる事が必要な訳ではない。まだ時間がある」

だが、アウライ・グランデ大空域に招いた理由はそれだけでは無かった。

真王はコーリスが即座に黒騎士になるとは思っていない。

世界の真実を伝えたとして、信頼関係が無ければ真言も虚言に変わる。

「そこで陛下は提案した。黒騎士になる決意が固まらないのなら、
理
解してもらおう他ないと」

「まさか一緒に過ごすだなんて言わないよな？」

「そのまさかだ」

カリオストロの冗談が当たってしまった。

「これから先、コーリス・オーロリアは私達6人と共に任務を遂行し、七曜の騎士という立場への理解を深めてもらう。今すぐに七曜を名乗るには力不足という意見もあるからな…力を付ける機会にもなるだろう」

「…七曜と、任務」

「そうだ。貴重な機会ではあるぞ？」

コーリスは何だか、真王の謁見と同じ様に、言葉による誘導を受けている気がした。

新たな提案は返答を返すにも難しく、団員達は口を閉じて悩み通す。

「…お前達は客人だ。今日は宮殿の個室で過ごすといい。私と白騎士はもう席を外す。先程の件、よく考えることだ」

そう言つて黄金の騎士と白騎士は扉を開け、この場を後にする。残されたのは祈望の騎空団だけだ。

「…コーリス」

「どうした」

ゾーイが見計らつたかの様に口を開いた。

「リノアの横にいた白騎士…彼の目線は、ずっと君の方へ向いていたぞ」

「普通に怖い」

「気味が悪いね」

「っーか人形みたいなやつだったな」

結局、いつもの雑談に戻った。

「ねえ、コーリス」

「はい」

その夜、宮殿内にて与えられた部屋にて、コーリスとノアは二人で話していた。

それは日々の他愛ない内容であったり、イスタバイオンの街並みについての事であったが、就寝時間間近に彼は決心したように話し始めた。

「フロンティア号で君達を初めて運んだ時、僕は最低でも一年導くと
言ったよね」

「覚えています」

「結局僕は何も考えずに君達の望むまま、艇を動かした。けれど、時を経ていく度に危険が伴う事態に遭遇した」

最初は素材集めや魔物退治だった。

しかし、名が広まるにつれ強大な魔物や星晶獣を多く相手にする様になり：結果的にエニユオに遭遇した。

ノアは未だにあの夜が忘れられないと言う。

「僕は君が厄災に巻き込まれる子供に見えていた。でも：君はずっと覚悟してきたんだろう？」

「はい。トラモントでフィラ達と過ごした時から：リユミエールにいた時も、俺の目的は変わりません」

「：そうか。冒険気分でいたのは僕だけなのかもしれないね」

「そんな事は——」

「コーリス」

ノアは再び名を呼んだ。
言い聞かせるように。

「ゾーイ、カリオストロ：皆と過ごす内に、僕はこの旅が難なく続けばいいと思い始めたんだ」

「ノアさん……」

「都合の良い言い方をするけどね」

彼は振り返って言った。

「導くんじやなくて、君達と共に旅がしたい」

ノアは、祈望の騎空団によって心を解かされていた。

過去、艇作りを教えるだけに生まれた星晶獣は霸空戦争後に早々役割を終え、緩慢とした長閑な日々を過ごし：武器として形を変える騎空艇達を虚ろな目で送りながら、鬱憤とした傍観者と成り果てていたのだ。

そんな彼が、迷いながらも利他の道を進むコーリスの横に立つと決心した。

それを後押ししたのは、更に苦難の道を歩ませんとしたアウライ・グランデの存在。

彼は告げる。

「僕を仲間にしてくれないかな」

「……はいっ！」

——3人目。

コーリスの未来と共に、仲間はまた増えていく。
この時、真王は疲れた表情に似合わない爽やかな笑みを浮かべた事は、誰にも知られていない。

71. 緑の騎士 エヘカトル

彼は『愛』に溢れた騎士だ。

緑の騎士、エヘカトル。

出身は7つの空域の中でも異色の文化を持つアマト・グランデ空域である。

アマト・グランデの人間は『ギョクロ』や『緑茶』と呼ばれる茶を嗜み、持つ武器は剣ではなく刀が主流。家屋や街の構造に至るまで、殆どが独自の形式を取っている空域だ。

その為か、かの地には緑の騎士を輩出する家柄は存在しなかった。エヘカトルはそんな空域で、軍の剣術指南役を代々輩出してきた道場の三男として生まれた。

彼の家は地方の道場とは異なり、国営による大規模な物だった為、イスタバイオン軍との直接的な関わりを持っていったのだ。

戦士達に剣術を教える為には、基本から実践に至るまでの剣の道を自身の足で歩む必要がある。

彼は齡4にして刀を握った。

別に、道場を継ぐ事が人生の指標という訳でも無かった。

彼には大きな目標は無く、かと言って義務感のままに刀を握ったと言われれば違う。

風のように何処にでも吹き、触れるもの全てを少しずつ楽しむ——それがエヘカトルの性質だった。

だが、致命的とは言わぬまでも、彼の剣の道は開始地点で茨に包まれていた。

実力主義であるが故に生まれた順番を呪う必要が無いことだけは幸運であったものの、魔力の維持が群を抜いて不得手であったのだ。

魔力の維持とは、魔力の行使をし続けることである。保有量が許す限り人は魔法を使い続ける事が可能だが、極稀にそれが出来無い者が生まれる。

魔力に余裕があるのに、魔法を行使し続けると途切れるのだ。息切

れやバテると言い換えてもいいが、疲労感は見えない為、少し形容が異なるだろう。

そう、これは欠陥なのだ。

刀を極めた所で魔法を伴う剣士に勝つ事は難しい。

この世界において、最高の剣士とは魔力や魔法での補助で以て剣の効力を高むる者。

最高級の武器、最強の腕を以てしても、魔力が無ければ刃の幅よりも先を斬ることは叶わない。

魔物や星晶獣との戦いでも、剣士は武器に魔力を流して戦うものなのだ。

無論常に流すわけでも無く、魔法に至っては一時的な局面で使うものだが、途切れは鍛錬にも支障を生んだ。

魔力が途切れてしまい、自身の限界も知れず、技術を練り上げる事が出来無いのだ。

魔力を武器に流す感覚、極集中による一心入魂——それ等を掴む頃には魔力が途切れてしまう。

エヘカトルはただの刀を振るうしかなかった。

『まずは剣を極めよう』。

そう決心した彼は魔力の鍛錬がない分、剣術そのものの上達が早かった。

6歳になる頃には木刀で兄達を倒し、10歳で親と打ち合える程度の反応を見せ、12歳で本物の刀を握り、14歳で魔物を討伐し——15歳で兄達に敗北した。

長男には魔力流しの刀で自身の得物を叩き折られ、次男には属性を纏った一撃で吹き飛ばされたのだ。

エヘカトルはこの日を境に現実を見た。

だが、幸運にも剣の才は常人を超えていた彼は、生来の純粋さも相まって、腐る事なく悩み自ら直面した。

魔力を上手く使えなければ戦地で犬死にするだけ。武器を折られた時点で敗北も確定する。

彼はずっと考えた。

一瞬だけ魔力を使えばいいのか。

途切れを克服する何かを掴めばいいのか。

刀を極めるしかないのか。

刀を振りながら考えた。

程なくして彼は、草原で自身の属性である風を浴びながら、少しずつ魔法の練習を始めた。

威力を高める為に一瞬にして魔力を高め放出する。長く使用しなければいいのだから、刀の合間に放つ魔法を習得しようと心得た。

より攻撃的に、より速く、より正確に——そして刀を振りながら使える様に。

エヘカトルにとって自身の魔力は刀と一緒にだった。

効率的に、的確に使わなければ自身の死に変化する。

故に学びを得ようと、その日は自身の稽古を一切行わず、兄達の修行をひたすら観察する。

長男は魔力で強化した刀を振るう。飛ぶ斬撃として攻撃範囲の延長も可能であった。

次男は属性による広範囲の攻撃が主流。自身の魔法を渦の様に刀に纏わせ、放つのだ。

そして彼は気付いた。

非効率的だと。

長男は魔力の維持に気を取られ、敵と斬り結ぶ際の思考に鈍化が見られる。

次男は魔法の威力に頼りきりで、刀そのものを活かした戦い方が出ていない。

魔力維持の欠陥は、周り巡って彼に活路を与えた。

『一瞬、ただ一瞬だけ』

『使い時を誤れば死ぬ』

『刀に付与するのは魔力』

『魔力に付与するのは集中』

『風の魔法』

『斬撃に風を乗せる』

『否、風そのものに刀を、斬撃を乗せる』

『刀と魔法をそれぞれ分けて同時に放つ』

『否、混ぜ合わせて放つ』

『そもそも別のものなのか』

『刀で巻き起こした風は斬撃となり、刀だ』

ナニカを発見した彼は、錯綜した精神と思考のまま無我夢中で草原へ駆け出し――。

『刀も風も、一緒だ』

その直感のまま刀を振るった。

そして彼の刀は風と化し。

――彼の生み出す風は全て刀となった。

1年後、彼は無傷かつ数秒で道場の人間全てを打ち倒し。

5年後、アマト・グランデ内最強の剣士となり。

――2年後、緑の騎士を拝命した。

「おはようございます！僕はエヘカトルと申します。よろしくお願ひ
しますー！」

「は、は、は」

真王謁見の翌日、コーリスの部屋に訪れたのは緑の騎士だった。

兜には2本の角が生えており、鎧は刀を扱う武者の様な様式で、黄金を覗いた他の鎧に比べて細身に見える。

エヘカトルと名乗った緑の騎士は、武骨な見た目と相反して若い声を持つている。

頭を下げながら元気な挨拶をする騎士にコーリスは度肝を抜かれた。

彼は続いて兜を脱ぐ。

脱いだ先の顔は声の通り幼く、少なくともコーリスよりは歳を重ねているだろうが、童顔だ。

種族はヒューマンで、薄緑色の髪を持つ。

第一印象は人懐っこい青年だった。

「黄金殿と陛下から詳細は聞いています。七曜への理解を深める為に僕達と共に行動するのだと」

「恐らくは…」

コーリスは強制なのかと少しげんなりした。

「早速ですが準備をします！」

エヘカトルはコーリスの手を掴み、脇目も振らずに駆け出した。

「何処へ!？」

「トウゲンキオです！」

「トウゲ…?！」

「トウゲンキオです！」

「あ、説明はしてくれないのか…」

「後の方が良いかと！」

天真爛漫。

堅苦しい騎士としての印象が皆無なエヘカトルを見て、コーリスは毒気を抜かれた。

何だかりユミエールに戻った様だ、と虚ろに考えていた。

朝食前の空腹も相まって、彼は一言断った。

「あの」

「どうしました？」

エヘカトルはコーリスの声にピタリと動きを止めて答えた。

「外出なら…武器をゾーイに借りたいのだが」

「あ、コーリス殿の剣は破損して…失念していました。先に調停者殿の部屋に向かいましょう」

二人は走るのを止め、ゾーイの部屋に向かって並んで歩みを進めた。

「緑の騎士殿は——」

「エヘカトルで構いません」

「エヘカトル殿は…どのくらい七曜の騎士として活動してきたのだろうか」

「丁度1年程ですね…」

「…！」

「七曜の中では歳も力も若輩者でして…不慣れなままなんですよ。情けない限りです」

「…やっぱり空域の統治は難しいのか？」

「いえ、真王の統治下にある事はどの空域も承知していますから、七曜が命令を受けた上で関わるのは特別難しい話ではありません。ファータ・グランデぐらいですね…七曜の名の元に置く事が難しいのは」

「うぐ」

つまり黒騎士は地獄を見るという事だ。

コーリスの呻きにエヘカトルは慌てて弁解をする。

「で、でもあの空域は平和と聞きますし…頑張れば何事もなく終わると思いますっ！」

「貧乏くじなのは」

「申し訳ありません陛下…エヘカトルはコーリス殿のやる気を削いでしまいましたあ…」

「……」

戦意が削がれる。

コーリスはただそれを思った。

(いたな。リュミエールに人と関わるのが異常に上手い人間が。自然体のままで敵に心を開かせるレベルの…)

警戒心を持たれない人間は少ない。

戦いに関わる程、人は人の思考の裏を懸念するものだ。腹の底に秘めた感情を邪推しなければ安心出来ない。

だからコーリスとゾーイは何事においても有利な場面では釘を刺すし、カリオストロとノアは自身の感情をひた隠す。

「調停者殿、失礼します！」

「なんだ君は」

「緑の騎士、エヘカトルです！」

「ふむ、なんの用だ」

「コーリス殿と外出するので剣を拝借したく」

あまり睡眠を取らないゾーイはどんな時間でも呼ばれば応じる。その癖で見知らぬ声にも反応してしまったのだろう。

コーリスの姿を確認した彼女は、右手から長剣を生成して手渡した。

見た目は彼女が用いる片手剣と同様、青色の水晶を思わせるもの

だった。

「一日は保つ。一応ノスタルジアに寄せたが…」

「助かる。軽さでビックリした」

「アレが重すぎただけさ。あと、気を付けて行動する様に。何かあつたらコスモス経由で伝えてくれ」

コスモス経由とは、コーリスを監視しているコスモスがゾーイに指令を出す事である。

彼の身に何かがあれば即座に伝わり、ゾーイが飛び立つだろう。またもやパシリである。

だが、彼は心配不要と首を振った。

「大丈夫、これがある」

コーリスは懐に仕舞っていた紅く光るペンダントを薄く見せた。

アテナから受け取ったものである。

このペンダントは物理的な危険が迫った場合、防壁を発して身を守る機能が備わっている。

クラーレによる毒攻撃は外傷を追わせるものではなく、齎された結果も無傷であった事から発動しなかったが、命に関わる攻撃と察知されれば未然に防ぐだろう。

だが、結局は明確な意思を持って念じなければ発動しないので、持ち主の技量が問われる装備だ。

そして、コーリスとゾーイはそのペンダントに首を傾げるエヘカトルを見逃さなかった。

(アテナさんのペンダントを知らないという事は…エニユオとの戦いだけしか見られていなかったのか——いや、濃霧や吸収の力も知っていたからバジユラの時も……)

自身に対して真王と七曜が持ち得る情報は、能力と戦い方であると
コーリスは考察した。

ノアが知られているという事は、日常風景も断片的に知られている
という事実を示すが、それも定期的な監視と変わらないだろう。

でなければアテナのペンダントという重大な要素を見逃す筈が無
い。

それもエヘカトルが馬鹿ではない事を前提とした話だが。

兎も角、彼はエヘカトルの注意を逸らそうと会話を試みた。

「何をしに行くのかは教えてくれ」

「僕の技術の一端をお見せしようかとー！」

「七曜の技術を教えてくれるのか？」

「望むならば！」

「……」

コーリスはゾーイの顔をチラリと見た。

彼女は少しだけ頷き、問題ないという判断を下した。

「是非、よろしく頼む」

「はい！」

揚々とした歩調でエヘカトルはコーリスを連れて騎空艇に乗り込
んだ。

「……」

「はい。トウゲンキオ島です！」

トウゲンキオ島。

イスタバイオン王国を構成する7つの島の内、『資源』を担う農業島である。

巨大な樹を中心として自然溢れる大地が形成されており、ファータ・グランデのルーマシー群島に比べて人の手が行き届いている。

見渡す限りに畑があり、大地には草原が広がっている。

到達するまでに目撃した島々は近代的であった為、コーリスは軽く驚いた。

「ここで何を…?」

「島の端を貸切状態にしました。他の島では気持ち良く武器を振るえる場所が無いので…ここを選んだ理由は広さですね」

この島自体に目的は無い。

イスタバイオンの島々は役割に応じて合理的な管理が成されている為、役割に不要な施設は一切存在しない。

軍の訓練も本拠地である新島ユートピアで行われている。

しかし、七曜の騎士が存分に得物を振るえる場所は戦場に限定される。

だから自然を残したが故の広さを持つトウゲンキオに訪れたのだ。

コーリスとエヘカトルは島の端部分にある草原地帯まで歩き、目の前の岩石に目を向けた。

「気持ちのいい風ですね」

「そうだな」

——きん。

「ん?」

緑溢れる自然に対する不相応な風切り音、或いは金属音——兎も角、聞いた事がある様な無い様な音が鳴り。

目の前の岩石が細切れに崩れていった。

「あ…やっちゃった」

エヘカトルは溜息を付いた。

言葉通りに捉えれば、彼が岩石を斬ったのだろう。

問題はそこでは無い。

「…今、抜いたのか？」

「いえ…」

エヘカトルは一切刀を抜いていない事。

そして、魔力も感じなかった事。

(ノーモーションにしても俺の口ビームとは違う。魔力の溜めすら無かった)

やらかしたと言わんばかりに苦笑するエヘカトルを尻目に、コーリスは顎に手を当てて謎の解明を凶った。

彼は興味を追求するタイプであるが故に、戦いの最中でなければこういった謎を考察するのが好きだった。

カリオストロの影響もあるかもしれない。最も、彼ならば1分の思考で核心に辿り着くだろうが。

(特殊な武器なら振らなくても斬撃が発生する可能性…いや、エヘカトル殿が無意識に発動させていたなら魔法と考えるのが妥当か。魔剣等は明確な意識を持たなければ使えないと聞く)

コーリスはバジュラの斬撃を参考に答えを探し始めた。

(無挙動…不可視、複数…同時では無く連撃。後は空気か風か。いや、

バジユラの剣気やスルトみたいな能力もあり得る…だが、あの性質は…)

あの瞬間に感じたのは特殊な物では無かった。

「風に斬撃が乗った…或いは、溶け込んだ」

「多分それで…いいかと」

「え？」

「いや、その…僕自身もよく分からないというか」

無意識——それはつまり、気が付けば人を斬る可能性も。

コーリスは即座に身を引いた。

「ぎ、斬りませんよ!」

「刀使いは皆そう言いながら殺しに来る」

「貴殿の周囲が異常なだけです!」

逃げ回るコーリスに対して、エヘカトルは重い鎧を引きずりながら追いかけて回した。

——数十分後。

「ほ、ホントに堪忍を…ぜえ…は…」

「冗談のつもりでは無かったが…済まない」

疲れ果てたエヘカトルが大の字で倒れて茶番は終了した。

途中から島の子供達が変人を見る目で野次馬と化していたが、秒で飽きたのかすぐに去っていった。

息を整えたエヘカトルは観念したかの様にポツポツと語り始めた。

「気を張ると周囲の風が切断の性質を持つんです」

「ええ…」

「癖みたいなもの…刀も振ると——」

エヘカトルは違う岩に向かって刀を横に振った。

そして、振りかぶりで生じた風圧が段階的に強くなっていき、岩が先程の様に細切れに崩れた。

「ただの斬撃を放とうとしたら、風になってしまっんです」

「刀を振れば風になって増幅し…その風は触れたものを切り裂く性質を持つと」

「今のは連鎖的ではありませんが、どうやら僕が立っているだけで風が斬撃に変化してしまう様です…」

風属性の使い手は、『風そのものを生み出す』、『自然の風を操る』の2パターンの戦法を戦闘に組み込む。

魔法使いならば暴風を作り、剣士ならば得物や斬撃に纏わせて殺傷力を向上させる。

無論、優れた使い手ならば自身の風を自然現象の風に合わせる事で巨大化させ、それを操る芸当も可能だろう。

だが、エヘカトルのソレは違う。

魔法である事は確かだが、発動の兆しを感じさせない。

吹いている風が突然斬撃を帯びて襲いかかり、振った刀は風に変化する。そしてその風はまたもや斬撃を得る。

属性現象そのものを生み出す方が魔力の使用量が高い為、自然の風を操るという行為の延長線上とも推測出来るが、エニユオ戦でのカリオストロの様に風を細く束ねて斬撃状に撃つのではなく、風の性質自体が変わっているのだ。

それでも、コーリスは理解しきれないと感じた。

周囲の風が斬撃に変わり、武器の斬撃が風に変わり——またもや斬撃に変わるのは極端かつ無駄が多い。それでは刀を振るうよりも周囲の風を変えるのに集中した方が早いからだ。最終的に何方も同じ

攻撃に行き着くならば、工程が少ない方を優先した方が効率が良い。

——風であり、刀でもある。

暴風のように満遍なく吹き荒び、通り過ぎた後には対象が切り刻まれている。

刀の様に鋭く、それが風の様に薄く広がり続ける。

言語化には難しいが、両方の側面が伴ってこそその現象と言える。

故にコーリスは『溶け込んだ』と表現したのだ。

想像に困難な現象がそこに起きていた。

「おにぎりでも食べますか…？朝食はまだですよね」

「あ、ああ…」

「風を浴びながら食べるのは気持ちいいですよ！」

『洒落にならねーよ』と言いかけた口を閉じ、コーリスはエヘカトルが持ち込んだ握り飯を受け取った。

彼はエヘカトルが言葉による交流を望んでいる事を察した。

七曜の騎士を理解するという、半ば強制の任務。彼は誤解していたが、言葉通りなのかもしれない。

それは役職の理解では無く、彼等の人となりの理解。

「手作りですー！」

「感謝する」

少なくともコーリスに不快感は無かった。

二人は握り飯を頬張りながら互いの身の丈について語り合っていた。

「魔力の途切れ…」

「はい。ある程度魔力を使い続けると突然そうなってしまふんです。魔力量はそこそこあるのですが」

「前例は無いのだろうか？」

「解決には様々な手段があるとありますが、そもそも原因が異なるのです」

「確かに…そういう人間は沢山いた」

「戦いの恐怖から反射的に魔法を解除してしまう人は、その恐怖を克服すれば問題ありません。戦争等で心的なダメージを負ってしまった人間は苦勞するでしょうが、理論的には解決できます」

心的外傷後ストレス障害

「PTSDか。逆に死に抗う術である魔法を手放せず、途切れでは無く暴発してしまうケースが多い」

「はい。ですが僕のように先天的な欠陥となれば…」

「…難しいか」

原因が明確ならば魔力の途切れも解消方法を探る事が出来るが、エヘカトルのケースは『そういうもの』という非常に悪質な事例である。

コーリスで例えるならば盾の構成が突然不可能となる様な物で、考えるだけでも恐ろしい。防御魔法が無ければ何回死んでいたのか分からないからだ。

戦士としての欠陥である。

だが、目の前の青年は明るい表情だった。

「でも、僕はこれのおかげで強くなれました」

「…？」

「刀は然るべき時に振らねば死にます。防御の道具では無く、殺しに特化した武器であるので——敵を殺し、生存する為に全力を注がねばならないのです。少なくとも戦争では」

エヘカトルの目は——人殺しの目が変わっていた。

「魔法に秀でた緋色殿は言っていました。『魔法は武器と違って柔軟だ。使われるまで結果を予想出来ねえから簡単に戦況をひっくり返す』と」

その理論に異論は無かった。

剣や槍はその見た目以上の攻撃は出せない。突然刃がしなる訳でもなく、槍が伸びる訳でもない。

しかし、魔法は杖や手から発生するものであり、使用された後に初めの規模や威力が分かる。

才能によって効果に差があり、短い溜めで広範囲の魔法を行使できる者もいれば、時間をかけてようやく手傷を負わせられる弱者も存在する。

コーリスも魔法に救われてきた人間だ。

「盾があつたから空戦でしぶとく生き残り、十二神将の斬撃をやり過ぎ、エニユオ相手に時間を稼げた。

しかしエヘカトルは首を横に振った。

「僕にとっては違います。途切れてしまうので、相手を打ち負かす攻撃力を求めて…必要最低限の力で行使しなければなりません。もし途切れた隙を狙われれば確実に死にます」

そして、その事実が彼の力の根源となったのだ。

「僕にとって刀も魔法も同じです。そう思い続けていたら…」

「刀でも風でもある現象が生まれた、と…」

「は…」

彼は誇らしげに笑った。

それを見たコーリスはエヘカトルが『緑の騎士』に変わっていた事を理解した。

「分析してくれた緋色殿曰く、一瞬だけ風に魔力を同調させて以降はこの様になるとの事です。無意識ですが、一応魔法なのでしよう」
「なる程。斬撃の性質を持つエヘカトル殿の風が、自然の風を掌握する事で形を成しているのか」
「知って尚、実感が湧きません」

思い込みの力なのか、イメージを無意識に魔法へと昇華させる程の才能なのか。

少なくともまともな精神を持つ人間ならば絶対に到達できない魔法である事は明白だ。

「風成空刀——僕が持った一つの魔法なんです」
かざしげうつがたな

エヘカトルは握り飯を食べ切って立ち上がった。

「食後の運動——しませんか?」

「:やっぱり、こうなるのか」

愚痴りながらも蒼き剣を握ったコーリスの顔は、少しだけ晴れていた。

「ハアッ!」

「ふっ!」

「しいああ!!!」

草原に似つかわしくない檄が鳴り響く。

流石大道場の主と言うべきか、コーリスはエヘカトルの気迫に気圧されていた。

だが、この前のヴァジュラとは違い、魔力使用を一切禁ずる純粹な

剣術勝負。

(流石七曜！一撃一撃が果てしなく重い……！)

(やはり剣術だけでも強い。しなやかさと重さが両立するところまで難攻不落になるとは。既に空でも有数の戦士！)

間合いを凶りながら確実な一撃を叩き込むエヘカトルに対し、受けと攻撃を連鎖的に繰り返すコーリス。

二人は互いに剣技を称賛していた。

ただ、互角とは言い難い。

時間が経過するにつれてエヘカトルはコーリスの攻撃を予測していき、打ち込む攻撃は必ず先手となっている。

それに対しコーリスは明確な攻め方を編み出せていない。

彼は自身が如何に掠め手に依存していたかを理解し、歯噛みした。

エヘカトルの剣術はヴァジュラのように動き回るものではなく、相手との適切な距離を保ちながら刹那に一撃を叩き込むもの。

彼の出身である道場から培った戦い方であり、同時に彼の持つ魔法と相性が良い。

「せい——アアあ!!」

そして振り下ろした渾身の一撃を受けたコーリスは、指の力が緩み、剣を落としかけてしまう。

エヘカトルは勿論逃さない。

「……参りました」

「ふう——」

コーリスが負けを認め、この打ち合いは終了した。

エヘカトルは一息ついてまたもや大の字で倒れ込んだ。

「エヘカトル殿？」

「いやあ…疲れました！でも楽しかったです！」

「そうか…？」

「はい！」

『変わった人だ』と思いながら息を整えたコーリスは、エヘカトルの横に倒れ込んだ。

「正直、七曜がどうか、イスタバイオンに従うべきだとか…そういうのは分からない」

「…そうですね」

「でも、貴方の事は分かった」

「…！」

「貴方は自身の強さを構成する『風』、『刀』…そして、『魔力の途切れ』。それ等に報いる為に生きているのか」

「…そうです。道場を継いだことも、イスタバイオンの人達に剣術を教えるのも、七曜として真王に仕え、アマト・グランデを平和にするのも…立派でやりがいのある、光栄な事です」

エヘカトルは微笑みながら語る。

その手は空に向かって伸ばされ、何かを回顧している様に見えた。

「僕はただ、今の僕を作ってくれたこの力に『ありがとう』と言いたいです。『この欠陥があつたから故郷を平和に出来て、この欠陥があつたから無辜の民を守れたんだ』って」

「その欠陥が無ければ苦しまなかったかもしれないの？」

「否定は出来ません。でも、僕は今幸せです」

「幸せ…？」

「人を助けるのも、刀を振るうのも、七曜の仲間達と話すのも、全てが少しずつ楽しいんです。僕には目標も夢も無かったので、様々な物事に関わるのが好きでした」

そしてその幸せは、魔力の途切れから齎されたものと言う。

コーリスはエヘカトルの努力や発想が導いた結果だと感じているが、どうも価値観が違うらしい。

「コーリス殿。七曜の騎士の精神というのは、一朝一夕では成りません。かくいう僕も、勅令のままに刀を振るうのみ。自主的に行っているのは鍛錬だけです」

「だから僕が出来る事は、貴殿の可能性をほんの少しでも広げる事――」

エヘカトルは右手の人差し指を縦に振った。

「な」

「必要なのは自分の強さを疑わない事と、可能性を信じる事」

彼の指で起こされた微弱な風圧は増大し、直線上の大地を深く抉った。

この現実離れた光景に対し、エヘカトルはイメージの問題だと語る。

人は物事に深い知識を持つ程、可能と不可能を知り得る様になる。可能ならばその選択に従えば良いし、不可能ならば別の手段に思考を委ねなければならない。

だが、彼はその常識に真っ向から反対する。

人は自身の才能ですら気付けないのに、何故不可能だと信じ込むのか、彼からしてみれば甚だ疑問だったのだ。

出来ないと諦めるのなら、せめて一回だけでも出来た気で玉砕してみればいいだろう、と。そういう理論だった。

「現に貴殿の光線は、常識に反旗を翻したものです」

「口、か」

「噴出口としてイメージしやすい故に出来たのでしょうか？指の開閉から想像しやすい掌も同様。イメージしやすいだけで、何処からでも出せる筈です」

「指先も、足も、目も……じゃあ、毛先は」

「流石に毛先は無理ですね…イメージの問題を超えています。あと目も危険そうなのでやめましょう」

「…」

——この日を境に、コーリスはエヘカトルと共にイメージの修練を始めた。

——1週間後

「コーリス？」

「…」

「コーリス」

「…」

「コーリスー」

「——」

「ガンマ・レ——」

「ちよつと待って待て!?!なんで!?!なんでガンマ・レイ!?!」

「ようやく返事をしたね」

エヘカトルとの邂逅以降、コーリスはもぬけの殻の様になっていた。

無論無気力に見えるというだけで、実際は技のイメージに脳を割いていたからだ。

そしてその様子を見たゾーイが心配して、気を取り戻すに至る。

「どうしたんだ一体。最近何かあったのか？」

「…エヘカトル殿からイメージを広げるべきと言われて、少し考え込んでいた」

「ふむ。イメージか」

「今思えば、俺の防御魔法もそうなのかもしれない。魔力をこねくり回して様々な形を取っているが、イメージで作れば一瞬だろう」

ゾーイは面白い話だと感じた。

被造物であるが故に、自分の能力に一切疑問を持たなかった為、自身の行動は技巧を凝らした物ではないと認識したからだ。

彼女は自分の行動において出来ないと思った事はない。

「ゾーイは何故剣先から光線を？」

「便利だからかな。剣を握ったまま出せる」

「そうだよな…」

「カリオストロに聞いてみたらどうだ？」

「そうしてみる」

ゾーイの提案通り、コーリスはカリオストロに聞いてみることにした。

「イメージ？」

「ああ。カリオストロは杖とか手というより、指で錬金術を使っているよな」

「そうだな」

「何でだ？」

「何でって…ああ、そういう事か。いいぜ、教えてやる」

宮殿内の大図書館にて本を読み漁るカリオストロは、手元のそれを閉じてコーリスに向き合った。

「糸繰り人形マリオネットってあるだろ？」

「糸を繋いだ人形を手で動かす奴か」

「昔一回だけ見たんだが、あれって結構大雑把でな、動かせるのは肘と膝、根本くらいで大して細かく動かないんだ」

「そうなのか」

「だが、優れた点が一つある。それは同時に部位を動かせる事だ」

「指で動かしているからか」

「そうだ。同時に行う事でそれ自体が一つの動作になる。手や足を上げるだけの人形は歩く事が可能になり、楽器があればダンスだって踊れる」

「カリオストロはその操るといふ指の使い方から着想を得たのか？」

「複数の動作を同時に行う方にだな。まあ錬金術は最低限必要な知識がなきゃ使えねえ。どんな魔法も正確な技術と知識があつてこそだ。想像だけで魔法を形にしちまう奴は、よほど精錬されているかイカれてるかだな」

カリオストロは錬金術を扱う際、大気に満ちる元素を様々な形に変える技術の高さと、それを瞬間的に行う為の想像力を両立させている。

エヘカトルの様に、イメージと魔法が直結した様な使い方は出来ないだろう。

それはエヘカトルがとことん異質だという事を表していた。

「参考になった。ありがとう」

コーリスは再びトウゲンキオの草原に赴いた。

(光線の軌道を指に沿わせて…)

貸切状態の草原地帯で、コーリスは光線を放った。

一度出した光線に指向性を持たせられないかという実験だ。

(…駄目か。曲げるなら指から出して、更にそれを継続させて薙ぎ払う形になる)

しかし一度出した光線は手元を離れる。

魔力操作の速度自体はまだまだ未熟なコーリスにとって、杖も無しに効果的な魔法を使う事は難しいのだ。

出が遅い。

(防御魔法で行くか…)

次は防御魔法。

コーリスは防御魔法の応用でハンマーや檻を作り出す。

——その時だった。

「コーリス殿」

「ツ!!」

コーリスは反射的に振り返り、左手を前に構えた。

その左手を起点に巨大な盾が形成され、その刹那に風が通り過ぎ、盾越しに衝撃が奔った。

「エヘカトル殿…!」

「防げましたね! 即座の展開お見事です!」

「殺す気か!?!」

「ひっ!?!」

目の前には私服のエヘカトルが立っていた。
何故怒られているのか理解せずに、彼は言葉を続けた。

「所でその槌…今の攻撃を防いだ盾より格段に生成が遅いですね」

「防御魔法の盾を変形させているからな。盾はそのままが良いし」

「何故です?」

「うん?」

「攻撃に使う槌なんですよね…? いちいち変形させる必要は無いのでは?」

「――」

コーリスは悩みの渦中にあるピースが嵌ったのを自覚した。

「感謝する。エヘカトル殿」

「は、はい」

生成が遅れていたのは、『防御魔法の形を変えて武器として用いる』という遠回しな過程と思考を持っていた事。

武器として使うのなら、最初から武器として作ればいい。

初歩的で単純な思考だが、工夫していたからこそ見えない視点であった。

彼は更に一步踏み出す。

(形を1から作るのなら、わざわざ俺が持つ必要は無い。腕の振りに合わせて――)

コーリスはただ手を振り下ろした。

「――放つ!!!」

その瞬間、目の前にハンマーの先端部分だけが顕現し、大地に向かって振り下ろされた。

盾は一度も形成されていない。

「お、おおおおお…」

エヘカトルは呆然とした表情で詠嘆した。

「槍は指で……5本っ！」

次は槍。

指の数に合わせて5本形成され、肩の振りに合わせて全てが投擲された。

「おおおおお!!」

エヘカトルが思わず声を上げる。

「集中さえあれば…手の振りも必要ない！」

遂には目線だけでハンマーを顕現させる。

技術は等に完成されている為、速度だけが問題だったコーリスの防御魔法、ここに欠点を解消する。

「な、成ったあああああ!!」

何故か、一番喜んでいるのはエヘカトルだった。

「僕もやります!!」

「え、ちよ」

この後、島の外部が削れたの言うまでもない。

最初の騎士エヘカトルは、見事コーリスを成長させた。
これで未来の歯車がまた一つ——噛み合うのだった。